

土 井 遺 跡
谷 の 前 遺 跡
慶 運 寺 跡

主要地方道佐伯長船線（美作岡山
道路）道路改築に伴う発掘調査 4

2 0 0 5

岡 山 県 教 育 委 員 会



1 「盾持ち人」出土状態（南西から）



2 1・2号窯と埴輪集積地（南西から）



- 1 人物埴輪（上）
- 2 動物埴輪（左）



人物埴輪「盾持ち人」



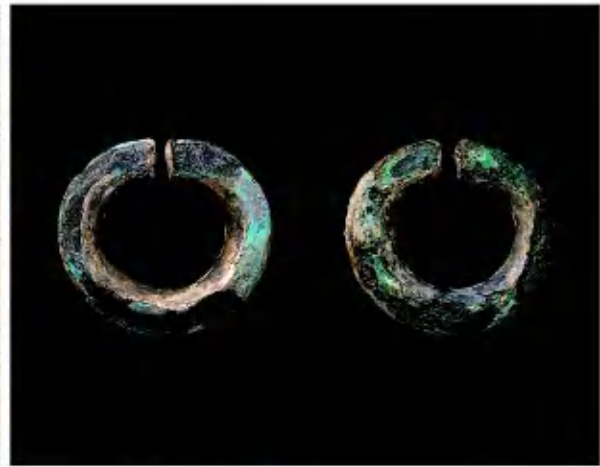
埴輪



1 石見型盾形埴輪



2 陶棺



3 土墳墓 2（西から）と出土遺物



3号窯（北から）と出土遺物

谷の前遺跡

1 慶運寺北調査区
墳丘墓・段状遺構
(上空やや南から)



2 慶運寺南調査区
竪穴住居群
(上空やや東から)

3 谷奥調査区
竪穴住居群
(上空やや東から)





1 慶運寺跡と周辺環境（右が北）



2 全景（上が北）



3 近景（北東から）

序

本報告書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴って平成11年度から平成15年度にかけて発掘調査を行った、赤磐郡熊山町内の土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡他の発掘調査の記録です。

美作岡山道路は、岡山県東部の発展に資するとともに、中国縦貫自動車道、山陽自動車道等と県内循環型高速道路網を形成するために、県東部を南北に結ぶ地域高規格道路として計画されたものです。岡山県教育委員会では、埋蔵文化財保護の観点から本道路建設に先立つ事前の分布調査や確認調査を行い、県の担当部局と協議を重ねてきました。

その結果、やむを得ず工事掘削等によって現状保存が困難な遺跡については、平成9年度から発掘調査を実施し、記録保存の措置を取ってきました。そして、そのうちの赤磐郡佐伯町及び熊山町内ですでに発掘調査を終了している遺跡については、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174・178としてそれぞれ平成14・15年度に刊行しています。本書は、平成16年度に主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）に関する発掘調査報告書として刊行する瀬戸町分に続き、4冊目の刊行になります。

本報告にかかる土井遺跡では、6世紀後半代の岡山県下初の埴輪焼成の窯2基を検出し、うち1基からは陶棺も焼成していることが判明しています。埴輪製作に関わった工人が陶棺の製作にも深く関わっていたことが実証されるなど、貴重な成果を得ることができました。さらに古代の瓦陶兼業窯も検出され、古墳時代後期からこの地域が焼き物を生産する適地であったことがうかがえます。また、この土井遺跡周辺地域の地名は可真（カマ）といい、その由来を考えるうえでも興味深い発見となっています。

このほか、土井遺跡では弥生時代中期の、谷の前遺跡では同後期の集落跡を検出しています。また、慶運寺跡では中近世寺院とそれに付随する墓地群を発見しています。

これらの調査成果を掲載した本書が、学術研究に寄与できるだけでなく、地域の歴史解明や文化財保護の一助として活用される事ができれば、幸いに存じます。

発掘調査の実施と報告書の作成にあたりましては、埋蔵文化財保護対策委員会の委員の方々から有益な御指導と御教示を賜りました。また、岡山県東備地方振興局、熊山町、同教育委員会等の関係者各位、並びに地元の方々から多大な御理解と御協力を賜りました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 正 岡 睦 夫

例 言

- 1 本書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県東備地方振興局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡の調査報告書である。
- 2 土井遺跡は、赤磐郡熊山町可真上52ほかに、谷の前遺跡は、同可真上1011ほかに、慶運寺跡は、同可真上995-1に所在する。（平成17年3月より赤磐市）
- 3 確認調査は、平成11～13年度に3遺跡のほか境ヶ鼻・首ククリ・小嶋の各遺跡について随時実施し、その結果を得て、全面調査は慶運寺跡を平成12年度、谷の前遺跡（慶運寺跡と重複する弥生遺跡を含む）を平成13・14年度、土井遺跡を平成14・15年度に実施した。
- 4 発掘調査および報告書の作成にあたっては、「美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委員を委嘱した。保護対策委員各位からは、終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

土居 徹（津山市田邑公民館館長）	野崎貴博（岡山大学文学部助手）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）	松木武彦（岡山大学文学部助教授）
- 5 本報告書の作成は平成15年度に実施し、浅倉秀昭（通年）・柳瀬昭彦（9～3月）・山磨康平・重根弘和（10～3月）が担当した。
- 6 本文の執筆は、調査あるいは報告書作成を担当した浅倉・山磨・光永真一・亀山行雄・重根・下澤公明・澤山孝之・物部茂樹・柳瀬が分担し、文責は、各項目あるいは遺構ごとの文末に示した。

また、本書の編集は、土井遺跡を重根、谷の前遺跡・慶運寺跡を浅倉がおもに担い、相互の調整と全体編集は山磨が行った。
- 7 本報告書に関わる遺構・遺物の一部は、次に記す諸氏と機関に測定・鑑定・同定・分析等を依頼し、有益な成果を得るとともにその一部は報文としていただいた。記して厚くお礼申し上げる。

熱残留磁気測定	時枝克安・伊達昌洋（島根大学理学部）
人骨鑑定	人塚愛二（岡山大学大学院医歯学総合研究科）
石器石材鑑定	妹尾 護（倉敷芸術科学大学国際教養学部）
土器の胎土分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
鉄器鑑定	村上恭通（愛媛大学法文学部）
陶磁器鑑定	家田淳一（佐賀県立博物館）
樹種同定・鑑定	パリノ・サーヴェイ株式会社
鉄器分析	大澤正己（九州テクノリサーチ・TACセンター）
- 8 本書掲載の遺構図の浄書、遺物の実測や実測図の浄書等は、報告書作成担当職員とその指導のもと補助員で行い、遺物の写真撮影については江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 9 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。なお、近世・近代墓出土物等は、埋蔵文化財として取り扱っていないため、資料化の後関係者に返却している。

凡 例

1 本報告書に用いた高度は海拔高である。また経緯度は日本測地系に準拠し、各遺構図中の方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。

2 収載の遺構・遺物図の縮尺についてはそれぞれ明記しているが、おもなものについては以下のよう統一している。

遺構 竪穴住居 1／80（土井遺跡）・1／100（谷の前遺跡）

段状遺構 1／100（土井遺跡）・1／60（谷の前遺跡）

土壇 1／30（土井遺跡）・1／50（谷の前遺跡・慶運寺跡）

窯 1／60 土壇墓・箱式石棺 1／30 建物 1／100

遺物 土器 1／4 埴輪 1／6 石器・金属器・土製品 1／2

玉類・銭貨 1／1

3 遺構配置図中の遺構名称は、次のとおり省略している。

竪穴住居：住 段状遺構：段 箱式石棺：石棺 土壇墓：墓 土壇：土

4 挿図・表・写真図版のそれぞれの番号は、全体をとおしての連番とし、遺構・遺物の番号はそれぞれの遺跡ごとに連番とした。

5 土器以外の遺物は、材質を示すため遺物番号の前に次のアルファベットの略号を付した。

石器：S 金属器：M 土製品：C ガラス：G

6 掲載土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

7 遺構図中の炭・焼土等の範囲は、次のトーンで区別する。

：火処、焼土範囲 ：炭散布範囲

8 遺構図中の断面図は、地山表現等に A、B 2 種類のトーンを主に次のように使用している。

：A ：B

土井遺跡：A＝岩盤、丘陵自然堆積層、B＝検出遺構より古い包含層等、石

谷の前遺跡・慶運寺跡：B＝石（右下がり）

9 土層・土器等の色調は、基本的に『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるが、各調査者の記述に従った。

10 掲載地図のうち、第 2・4 図は国土地理院発行の 1/25,000「万富」を、第 134・142 図は同 1/50,000「和気」を複製・加筆縮小したものである。

11 本書で使用した時期区分は、執筆者間でとくに統一していないが、基本的には一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章	地理的・歴史的環境	1
第2章	調査の経緯と経過	5
第1節	発掘調査の契機と推移	5
第2節	発掘調査および報告書作成の体制	7
第3節	発掘調査および報告書作成の経過	9
1	調査経過の概要	9
2	報告書作成経過の概要	10
第4節	確認調査の概要	11
1	境ヶ鼻遺跡・土井遺跡	11
2	慶運寺跡・谷の前遺跡・慶運寺遺跡	14
3	小峠遺跡・首ククリ遺跡	16
第3章	土井遺跡	17
第1節	発掘調査の概要	17
第2節	弥生時代の遺構・遺物	21
1	段状遺構	21
2	掘立柱建物	39
3	竪穴住居	39
4	土壌	44
第3節	古墳時代の遺構・遺物	47
1	窯	47
2	箱式石棺・土壌墓	74
3	土壌	80
4	竪穴住居	82
第4節	古代以後の遺構・遺物	83
1	窯	83
2	土壌	100
3	堀切・平坦面・火葬墓	103
第5節	近世以後の墓	107
第6節	考察	123
1	調査成果の概要	123
2	埴輪について	126
3	磐梨古窯跡群の分布	138
	遺物・遺構一覧（観察）表	140
第4章	谷の前遺跡	149
第1節	発掘調査の概要	149
1	遺跡範囲と調査方法	149

2	調査成果の概要	149
第2節	弥生時代の遺構・遺物	150
1	墳丘墓	150
2	段状遺構	156
3	竪穴住居	163
4	土壇	193
5	土器溜まり	204
第3節	遺構に伴わない遺物	211
第4節	小 結	220
1	遺構について	220
2	遺物について	220
第5章	慶運寺跡	221
第1節	発掘調査の概要	221
1	調査の方法	221
2	調査成果の概要	222
第2節	中世の遺構・遺物	222
1	建物	222
2	柵	226
3	柱穴	227
4	井戸	228
5	溝	229
6	土壇	231
7	中世墓	231
第3節	遺構に伴わない遺物	237
第4節	小 結	242
1	遺構について	242
2	遺物について	242
	遺構・遺物一覧（観察）表	243
附載1	谷の前遺跡出土有袋鉄斧の金属学的調査	251
附載2	土井遺跡出土土器の胎土分析	259
附載3	土井遺跡の1, 2, 3号窯の地磁気年代	269
附載4	土井遺跡における自然科学分析	275
	写真図版	
	報告書抄録	
	奥付	

図目次

第1図	遺跡位置 (1/200,000)	1
第2図	周辺遺跡分布 (1/25,000)	3
第3図	予定路線と対象遺跡 (1/80,000)	6
第4図	調査対象遺跡位置 (1/25,000)	6
第5図	土井遺跡等確認調査トレンチ位置(1/2,000)	11
第6図	境ヶ鼻遺跡T 4・6・8・9断面 (1/100)	11
第7図	境ヶ鼻遺跡T 1断面 (1/100)・出土遺物 (1/4)	12
第8図	土井遺跡T 3・4・8断面 (1/100)	13
第9図	谷の前遺跡調査区・トレンチ位置(1/1,500)	14
第10図	谷の前遺跡T 1・2断面 (1/200)	15
第11図	慶運寺遺跡T 1・12断面 (1/200)	15
第12図	小札・首ククリ遺跡トレンチ位置(1/1,500)	15
第13図	小札遺跡1・2区 (1/200)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	16
第14図	土井遺跡遺構配置 北半 (1/500)	18
第15図	土井遺跡遺構配置 南半 (1/500)	19
第16図	調査区分 (1/800)	20
第17図	段状遺構群1 北半 (1/100)	21
第18図	段状遺構群1 南半 (1/100)	22

第19図	段状遺構群 1 変遷 (1/600) ・埋上下層・ 床面出土遺物 (1/4) ……………	23
第20図	段状遺構群 1 埋土上層出土遺物(1/4・1/2) ……………	24
第21図	段状遺構群 2 床面出土遺物 (1/4・1/2) ……	24
第22図	段状遺構群 2 (1/100) ・埋土出土遺物(1/4) ……………	25
第23図	段状遺構群 3 北半 (1/100) ……………	26
第24図	段状遺構群 3 床面出土遺物 (1/4) ……	26
第25図	段状遺構群 3 南半 (1/100) ……………	27
第26図	段状遺構群 3 変遷 (1/600) ・埋土出土遺 物 (1/4・1/2) ……………	28
第27図	段状遺構群 3 土壌 1～4 (1/30) ・出土 遺物 (1/4・1/3) ……………	29
第28図	段状遺構群 4 (1/100) ……………	30
第29図	段状遺構群 4 土層断面 (1/100) ……	31
第30図	段状遺構群 4 埋土出土遺物(1/4・1/2) ・ 土壌 1 (1/30) ……………	32
第31図	段状遺構群 4 上層 2・3 (1/30) ……	33
第32図	段状遺構群 5 (1/100) ・出土遺物 (1/2) ……………	33
第33図	段状遺構群 6 (1/100) ・北半床面出土遺物 (1/4) ……………	34
第34図	段状遺構群 6 南端壁体溝(1/30) ・南半床面 出土遺物 (1/4・1/2) ……………	35
第35図	段状遺構群 6 埋土出土遺物(1/4・1/2) ……	36
第36図	段状遺構群 7 出土遺物(1/4・1/2) ……	36
第37図	段状遺構群 7 床面出土遺物(1/4・1/3) ……	37
第38図	段状遺構群 7 埋土出土遺物(1/4・1/2) ……	38
第39図	段状遺構群 8 (1/100) ・出土遺物(1/4・1/2) ……………	38
第40図	掘立柱建物 1 (1/80) ……………	39
第41図	竪穴住居 1 (1/80) ・出土遺物(1/4・1/2) ……	39
第42図	竪穴住居 2 床面出土遺物(1/4) ……	40
第43図	竪穴住居 2 (1/80) ・変遷(1/500) ……	41
第44図	竪穴住居 2 出土遺物(1/4・1/2) ……	42
第45図	竪穴住居 2 出土遺物(1/4・1/2・1/1) ……	43
第46図	土壌 1 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……	44
第47図	土壌 2 (1/30) ……………	44
第48図	土壌 3～5 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……	45
第49図	土壌 6 (1/80・1/30) ・出土遺物(1/4) ……	46
第50図	1・2号窯と関連遺構 (1/100) ……	47
第51図	円筒埴輪分類凡例 (拓影原寸) ……	48
第52図	1号窯 焼土検出状態・土層断面(1/60) ・上層出土遺物 (1/6) ……………	49
第53図	1号窯 第3床面遺物出土状態(1/60) ・出土遺物 (1/6) ……………	50
第54図	1号窯 第3床面・側面(1/60) ……	51
第55図	1号窯 第1・2床面(1/60) ・焚口付近横断 面(1/30) ・出土遺物(1/4・1/6) ……	52
第56図	2号窯 焼土検出状態・土層断面(1/60) ……	53
第57図	2号窯 第2床面遺物出土状態(1/60) ・出土遺物 (1/10) ……………	54
第58図	2号窯 第2床面出土遺物①(1/6) ……	55
第59図	2号窯 第2床面出土遺物②(1/6) ……	56
第60図	2号窯 第2床面出土遺物③(1/6) ……	57
第61図	2号窯 第2床面出土遺物④ (1/6・1/4) ……………	58
第62図	2号窯 第2床面・側面・P1～3断面	

	(1/60) ・P2 出土遺物 (1/6) ……………	59
第63図	2号窯 第1床面・整地層下遺物出土状態 (1/60) ・整地層下出土遺物① (1/4) ……	60
第64図	2号窯 整地層下出土遺物② (1/6) ……	61
第65図	埴輪集積地・断面 (1/30) ……………	62
第66図	埴輪集積地(1/30) ・出土遺物① (1/4) ……	63
第67図	埴輪集積地区分 (1/60) ・区別円筒埴輪出 上傾向 ……………	64
第68図	埴輪集積地出土遺物②(1/6) ……	65
第69図	埴輪集積地出土遺物③(1/6) ……	66
第70図	埴輪集積地出土遺物④(1/6) ……	67
第71図	埴輪集積地出土遺物⑤(1/6) ……	68
第72図	埴輪集積地出土遺物⑥(1/6) ……	69
第73図	埴輪集積地出土遺物⑦(1/6) ……	70
第74図	埴輪集積地出土遺物⑧(1/6) ……	71
第75図	灰原出土遺物①(1/6) ……………	72
第76図	灰原出土遺物②(1/6) ……………	73
第77図	灰原出土遺物③(1/4・1/2) ……	74
第78図	箱式石棺 1 周辺地形(1/100) ・出土遺物 (1/4) ……………	74
第79図	箱式石棺 1 (1/30) ……………	75
第80図	箱式石棺 2 周辺地形(1/100) ・出土遺物 (1/4) ……………	76
第81図	箱式石棺 2 (1/30) ……………	77
第82図	土壌墓 1 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……	77
第83図	土壌墓 2 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3・ 1/2) ……………	78
第84図	土壌墓 3 (1/30) ・出土遺物① (1/10) ……	79
第85図	土壌墓 3 出土遺物② (1/6) ……	80
第86図	土壌 7 (1/30) ・出土遺物(1/6) ……	80
第87図	土壌 8 (1/30) ・出土遺物(1/4) ……	81
第88図	竪穴住居 3 (1/80) ・出土遺物(1/4) ……	82
第89図	3号窯 周辺地形 (1/100) ……………	83
第90図	3号窯 横断面 (1/60) ……………	84
第91図	3号窯 第2床面遺物出土状態・縦断面 (1/60) ……………	85
第92図	3号窯 第2床面・側面 (1/60) ……	86
第93図	3号窯 地点別瓦出土傾向 ……	87
第94図	3号窯 第1床面遺物出土状態 (1/60) ……	87
第95図	3号窯 第2床面・灰原出土遺物① (1/6) ……………	88
第96図	3号窯 第2床面・灰原出土遺物② (1/6) ……………	89
第97図	3号窯 第2床面・灰原出土遺物③ (1/6) ……………	90
第98図	3号窯 第2床面・灰原出土遺物④ (1/6) ……………	91
第99図	3号窯 第2床面・灰原出土遺物⑤ (1/6) ……………	92
第100図	3号窯 第2床面・灰原出土遺物⑥ (1/6) ……………	93
第101図	3号窯 第2床面・灰原出土遺物⑦ (1/6) ……………	94
第102図	3号窯 第2床面・灰原出土遺物⑧ (1/6・1/4・1/3) ……………	95
第103図	3号窯 第1床面出土遺物① (1/6) ……	96
第104図	3号窯 第1床面出土遺物② (1/4) ……	97
第105図	3号窯 第1床面出土遺物③ (1/4) ……	98
第106図	3号窯 第1床面出土遺物④ (1/4) ……	99

第107図	土壙 9・10 (1/30) ……	100
第108図	土壙11～17 (1/30)・出土遺物(1/4) ……	101
第109図	土壙18～21 (1/30)・出土遺物(1/4) ……	102
第110図	堀切 (1/100) ……	103
第111図	平坦面 1 (1/100)・柱穴 (1/30)・出土遺物 (1/6) ……	104
第112図	平坦面 1 出土遺物 (1/4) ……	105
第113図	平坦面 2 (1/100) ……	105
第114図	火葬墓(1/20)・出土遺物(1/4) ……	106
第115図	遺構に伴わない遺物(1/2・1/4) ……	106
第116図	墓配置図 (1/300) ……	107
第117図	墓 1・2 (1/30) ……	108
第118図	墓 3・4 (1/30) ……	109
第119図	墓 5・6 (1/30) ……	110
第120図	墓 7・8 (1/30) ……	111
第121図	墓 9～11 (1/30) ……	112
第122図	墓12～14 (1/30) ……	113
第123図	墓15・16 (1/30) ……	114
第124図	墓17～22 (1/20・1/30) ……	115
第125図	墓23・24・27 (1/30) ……	116
第126図	墓25・26・28～32 (1/30) ……	117
第127図	墓33～38 (1/30) ……	118
第128図	墓39～41 (1/30) ……	119
第129図	墓42～44 (1/30) ……	120
第130図	墓45～47 (1/30・1/10) ……	121
第131図	上井遺跡時期別遺構変遷 (1/1, 600) ……	123
第132図	2号窯出土陶棺・石見型盾形埴輪復元図 (1/30) ……	124
第133図	土井遺跡と古代山陽道 ……	125
第134図	埴輪・陶棺出土地点 (1/100, 000) ……	127
第135図	前内池下採集資料 (1/6) ……	128
第136図	小丸山古墳出土埴輪 (1/6) ……	129
第137図	赤坂町西窪田周辺採集資料 (1/6・1/4) ……	130
第138図	岡山県 埴輪出土地① ……	132
第139図	岡山県 埴輪出土地② ……	133
第140図	熊山町内出土陶棺 (1/6) ……	134
第141図	外面波状文を施す陶棺出土地 ……	135
第142図	磐梨古窯跡群分布 (1/75,000) ……	138
第143図	表採資料 (1/4) ……	139
第144図	谷の前遺跡遺構配置 (1/700) ……	149
第145図	墳丘墓 (1/100) ……	150
第146図	墳丘墓列石 (1/60) ……	151
第147図	墳丘墓出土遺物 (1/4) ……	152
第148図	墳丘墓埋葬遺構 (1/100) ……	153
第149図	土壙墓 1～5 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……	154
第150図	土器棺 (1/20)・出土遺物 (1/6) ……	155
第151図	慶運寺北調査区遺構配置 (1/300)・断面 (1/100) ……	156
第152図	段状遺構 1 (1/100)・出土遺物(1/4) ……	157
第153図	段状遺構 2 (1/100)・出土遺物(1/4) ……	158
第154図	段状遺構 3～7 (1/60) ……	159
第155図	段状遺構 3 出土遺物 (1/4) ……	159
第156図	段状遺構 5 出土遺物 (1/4) ……	160
第157図	段状遺構 6 出土遺物 (1/4) ……	160
第158図	段状遺構 8 出土遺物 (1/4) ……	160
第159図	段状遺構 8～10 (1/60) ……	161
第160図	段状遺構 9 出土遺物 (1/4) ……	161

第161図	段状遺構10出土遺物 (1/4) ……	162
第162図	段状遺構11 (1/60) ……	162
第163図	段状遺構12 (1/60)・出土遺物(1/4) ……	162
第164図	段状遺構13 (1/60) ……	163
第165図	竪穴住居 1 (1/100) ……	163
第166図	慶運寺南調査区遺構配置 (1/300) ……	163
第167図	竪穴住居2～5 (1/100)・出土遺物① (1/1・1/3) ……	164
第168図	竪穴住居 2～5 出土遺物② (1/4) ……	165
第169図	竪穴住居 2～5 出土遺物③ (1/4) ……	166
第170図	竪穴住居 2～5 出土遺物④ (1/4) ……	167
第171図	竪穴住居 2～5 出土遺物⑤ (1/4) ……	168
第172図	竪穴住居6～10 (1/100)・出土遺物 (1/2) ……	169
第173図	竪穴住居11～13 (1/100) ……	170
第174図	竪穴住居14～24 (1/100) ……	171
第175図	竪穴住居14～23出土遺物(1/3・1/4) ……	172
第176図	竪穴住居25～35 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……	175
第177図	竪穴住居32・33・出土遺物 (1/4) ……	176
第178図	竪穴住居34～39 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……	177
第179図	竪穴住居37～39出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……	178
第180図	竪穴住居40～44 (1/100) ……	178
第181図	竪穴住居42・43出土遺物 (1/4) ……	179
第182図	竪穴住居45～54 (1/100)・同45出土遺物 (1/4) ……	180
第183図	竪穴住居46～54出土遺物 (1/4) ……	181
第184図	竪穴住居55 (1/100) ……	182
第185図	竪穴住居56～58 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	182
第186図	竪穴住居59～61 (1/100) ……	183
第187図	竪穴住居62～66 (1/100) ……	184
第188図	谷奥調査区遺構配置 (1/300) ……	185
第189図	竪穴住居67(1/100)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……	186
第190図	竪穴住居68～71 (1/100)・同71出土遺物 (1/2・1/4) ……	187
第191図	竪穴住居72～80 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……	188
第192図	竪穴住居81～85 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……	190
第193図	竪穴住居86 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	192
第194図	土壙 1～6 (1/50) ……	194
第195図	土壙 7 (1/50)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	195
第196図	土壙8・9 (1/50) ……	196
第197図	土壙10・11(1/50)・同10出土遺物(1/4) ……	197
第198図	土壙12 (1/50)・出土遺物 (1/4) ……	198
第199図	土壙13～16 (1/50) ……	198
第200図	土壙14～16出土遺物 (1/4) ……	199
第201図	土壙17・18(1/50)・出土遺物(1/4) ……	200
第202図	土壙19～22 (1/50) ……	200
第203図	土壙23～25(1/50)・出土遺物(1/4) ……	201
第204図	土壙26 (1/50) ……	202
第205図	土壙27～29 (1/50)・出土遺物 (1/2・1/3) ……	202
第206図	土壙30～33 (1/50)・出土遺物 (1/4) ……	203

第207図	土器溜まりA出土遺物 (1/4) ……	204
第208図	土器溜まりB出土遺物① (1/4) ……	205
第209図	土器溜まりB出土遺物② (1/4) ……	206
第210図	土器溜まりB出土遺物③ (1/4) ……	207
第211図	土器溜まりB出土遺物④ (1/4) ……	208
第212図	土器溜まりB出土遺物⑤ (1/4) ……	209
第213図	土器溜まりB出土遺物⑥ (1/4) ……	210
第214図	慶運寺北調査区包含層出土遺物 (1/4) ……………	211
第215図	慶運寺南調査区西部包含層出土遺物① (1/4) ……	212
第216図	慶運寺南調査区西部包含層出土遺物② (1/4) ……	213
第217図	慶運寺東調査区包含層出土遺物 (1/4) ……………	214
第218図	慶運寺南調査区南部包含層出土遺物① (1/4) ……	215
第219図	慶運寺南調査区南部包含層出土遺物② (1/4) ……	216
第220図	弥生時代の遺物① (1/2) (土製品) ……	217
第221図	弥生時代の遺物② (1/2・1/3) (石器) ……………	218
第222図	弥生時代の遺物③ (1/3) (鉄器) ……	219
第223図	縄文時代の遺物 (1/1・1/3・1/4) ……	219

第224図	慶運寺跡遺構配置 (1/300) ……	221
第225図	1区遺構配置 (1/200) ……	222
第226図	建物1 (1/100) ……	223
第227図	建物2・3 (1/100)・同3出土遺物 (1/2) ……	224
第228図	建物4～6 (1/100) ……	225
第229図	建物7～9 (1/100) ……	226
第230図	柵1・2 (1/200) ……	227
第231図	柱穴出土遺物 (1/3・1/4) ……	227
第232図	石組井戸・石組溝 (1/60) ……	228
第233図	石組井戸・石組溝・溝1出土遺物 (1/3・1/4) ……	229
第234図	土壌1～8 (1/50)・出土遺物 (1/3) ……	230
第235図	中世墓 (1/80) ……	232
第236図	中世墓出土五輪塔ほか組み合わせ (1/10) ……………	233
第237図	中世墓出土遺物① (1/4) ……	234
第238図	中世墓出土遺物② (1/4) ……	235
第239図	中世墓出土遺物③ (1/4) ……	236
第240図	中世墓出土遺物④ (1/3・1/4) ……	237
第241図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……	238
第242図	遺構に伴わない遺物② (1/4・1/8) ……	239
第243図	遺構に伴わない遺物③ (1/2・1/3) ……	240
第244図	遺構に伴わない瓦 (1/4) ……	241

表目次

第1表	美作岡山道路(本報告書関係)調査一覧 ……………	9
第2表	土井遺跡埴輪集積地 区別埴輪出土量 ……	64
第3表	3号窯 出土地点別遺物出土量 ……	87
第4表	銭貨出土枚数別墓数 ……	122
第5表	段状遺構群一覧表 ……	140
第6表	竪穴住居一覧表 ……	140
第7表	建物一覧表 ……	140
第8表	墓一覧表 ……	140
第9表	窯一覧表 ……	140
第10表	土壌一覧表 ……	140
第11表	土器観察表 ……	141
第12表	埴輪・陶棺観察表 ……	144
第13表	瓦観察表 ……	147

第14表	石器観察表 ……	148
第15表	鉄器観察表 ……	148
第16表	銅鐸形土製品出土地名表 ……	217
第17表	谷の前遺跡段状遺構一覧表 ……	243
第18表	谷の前遺跡竪穴住居一覧表 ……	243
第19表	谷の前遺跡・慶運寺跡土壌一覧表 ……	245
第20表	慶運寺跡建物一覧表 ……	245
第21表	谷の前遺跡土器観察表 ……	246
第22表	慶運寺跡土器観察表 ……	247
第23表	谷の前遺跡・慶運寺跡出土金属製品 ……	248
第24表	谷の前遺跡・慶運寺跡出土土製品 ……	249
第25表	谷の前遺跡出土ガラス ……	249
第26表	谷の前遺跡・慶運寺跡出土石製品 ……	250
第27表	慶運寺跡出土瓦 ……	250

写真目次

写真1	盾持ち人 ……	17
写真2	3号窯(北から) ……	17

写真3	土井遺跡出土遺物と周辺採集資料 ……	131
-----	--------------------	-----

図版目次

巻頭図版1	1 「盾持ち人」出土状態(南西から)
	2 1・2号窯と埴輪集積地(南西から)
巻頭図版2	1 人物埴輪(上)
	2 動物埴輪(左)
巻頭図版3	人物埴輪「盾持ち人」
巻頭図版4	埴輪

巻頭図版5	1 石見型盾形埴輪
	2 陶棺
	3 土壌墓2(西から)と出土遺物
巻頭図版6	3号窯(北から)と出土遺物
巻頭図版7	1 慶運寺北調査区(上空やや南から)
	2 慶運寺南調査区(上空やや東から)

	3	谷奥調査区（上空やや東から）
巻頭図版	8	
	1	慶運寺跡と周辺環境（右が北）
	2	全景（上が北）
	3	近景（北東から）
図版 1	1	土井遺跡全景（北西から）
	2	石蓮寺から見た土井遺跡（北から）
図版 2	1	段状遺構群 4（南西から）
	2	段状遺構群 3（北から）
	3	段状遺構群 1（北から）
図版 3	1	竪穴住居 2（南西から）
	2	掘立柱建物 1（南西から）
	3	竪穴住居 3（北東から）
	4	箱式石棺 1・2（北東から）
図版 4	1	土壙墓 3（北東から）
	2	土壙墓 1（北東から）
	3	土壙墓 2 遺物出土状態（西から）
図版 5	1	1・2 号窯検出（南西から）
	2	2 号窯焼土検出（西から）
	3	1 号窯焼土検出（西から）
図版 6	1	1 号窯埋土縦断面（南西から）
	2	1 号窯最終床面遺物検出状態（南西から）
図版 7	1	2 号窯埋土縦断面（南西から）
	2	2 号窯最終床面遺物検出状態（南西から）
図版 8	1	1・2 号窯と埴輪集積地（南西から）
	2	2 号窯最終床面遺物検出状態（西から）
	3	1 号窯最終床面遺物検出状態（西から）
図版 9	1	2 号窯完掘（南西から）
	2	2 号窯 P 2（西から・南から）
図版 10	1	「盾持ち人」出土状態（南西から）
	2	埴輪集積地（南から）
図版 11	1	3 号窯最終床面遺物検出状態（北から）
	2	3 号窯造成土断面（北から）
	3	3 号窯第 1 床面遺物検出状態（北から）
	4	3 号窯全景（北から）
図版 12	1	墓 1～17（南から）
	2	墓 45～47（南から）
	3	墓 45（西から）
	4	墓 46（西から）
図版 13		弥生土器・石器・鉄器
図版 14		石器
図版 15		須恵器・土師器・備前焼
図版 16		埴輪①
図版 17		埴輪②
図版 18		埴輪③
図版 19		埴輪④
図版 20		埴輪⑤
図版 21		埴輪⑥
図版 22		埴輪⑦
図版 23		埴輪⑧
図版 24		埴輪⑨
図版 25		埴輪⑩・陶棺①
図版 26		埴輪⑪

図版 27		埴輪⑫
図版 28		埴輪⑬
図版 29		埴輪⑭
図版 30		埴輪⑮・陶棺②
図版 31		陶棺③
図版 32		瓦①
図版 33		瓦②
図版 34		瓦③
図版 35		瓦④
図版 36		瓦⑤
図版 37		瓦⑥
図版 38		須恵器・土師器
図版 39		墓出土遺物①
図版 40		墓出土遺物②
図版 41		墓出土遺物③
図版 42		墓出土遺物④
図版 43		墓出土遺物⑤
図版 44		墓出土遺物⑥
図版 45	1	埴丘墓（東から）
	2	周溝土層断面（北東から）
	3	埴丘墓完掘（東から）
図版 46	1	土壙墓 1（東から）
	2	土壙墓 2～5（東から）
	3	土器棺（北東から）
図版 47	1	段状遺構 1・2（上が北）
	2	同上（東から）
	3	段状遺構 8（西から）
	4	段状遺構 12（南から）
図版 48	1	竪穴住居 2～5 ほか（北西から）
	2	竪穴住居 32 ほか（南西から）
	3	竪穴住居群（北から）
図版 49	1	竪穴住居 67（南から）
	2	竪穴住居 68 ほか（南東から）
	3	竪穴住居 82 ほか（東南から）
図版 50	1	竪穴住居 86（東から）
	2	竪穴住居 78 ほか（北西から）
	3	土器溜まり B 断面（北から）
図版 51	1	土壙 10 土器出土状況（南から）
	2	土壙 18 土器出土状況（北から）
	3	土壙 14～16 土器出土状況（南から）
	4	土壙 24（北から）
図版 52		遺構出土弥生土器①
図版 53		遺構出土弥生土器②
図版 54		包含層出土弥生土器①
図版 55		包含層出土弥生土器②・ガラス小玉・銅鐸形土製品・勾玉形土製品・分銅形土製品・銅鏃・鉄器
図版 56		石器
図版 57	1	中世墓検出状況（西から）
	2	中世墓北部検出状況（南から）
	3	骨壺埋納状況（南から）
	4	火葬骨納骨状況（南から）
	5	備前焼骨壺埋納状況（南から）
	6	同上配石を取り去った後（東から）
図版 58		遺構出土中世土器・中世墓内備前焼骨壺
図版 59		土師質土器・瓦質土器・近世陶磁器・瓦
図版 60		土錘・石鍋・石硯・鉄環・鉄釘・二又金具・小札・錠前・古銭

第1章 地理的・歴史的環境

掲載遺跡は、赤磐郡熊山町北西部の大字可真上と大字可真上・可真下の字境付近に位置している。熊山町は、岡山県の南東部に位置し、面積44.94km²、人口7,000人ほどの農業生産が主体の町である。町制は、昭和28年の地方自治法施行により赤磐郡可真村、小野田村、豊田村と和気郡熊山村（大字弓削を除く）の4村が合併し誕生し、翌年大字弥上の一部の山之池地区が万富町（現瀬戸町）に編入され、その後、大規模団地の造成により山陽町との一部町境変更をへて現在に至っている。

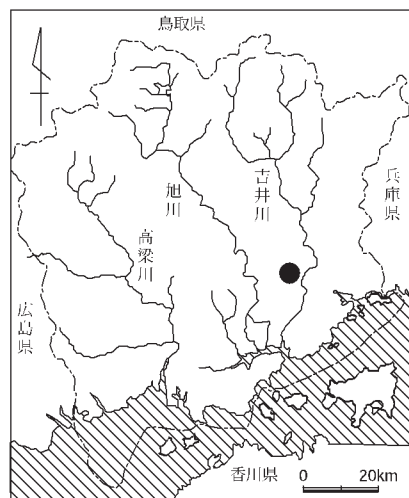
町域の中央付近には、岡山県下三大河川の一つである吉井川が北東から南西に貫流し、北東部および北部ではこの支流である可真川と小野田川が南流し大字徳富付近で吉井川に合流している。これら主要河川の流域は、町域のほぼ全域に及んでいる。特に吉井川流域付近では、肥沃な沖積地を形成し広義の岡山平野の東端部に位置付けられている。今回の調査遺跡は、吉井川の二次支流である可真川の上流域に位置する。可真川は、瀬戸町との町境に位置する妙見山の麓に源を発して、ほぼ東流し大字沢原の磐梨中学校東で小野田川に合流する全長4km程の小支流である。流域には、最大幅250mほどの広さの低位部を形成している。

可真川の北には標高271.4mの石蓮寺山の山塊が広がり、南側には標高351.2mの大盛山と可真川の源流域にあたる標高240.7mの妙見山が連なり、西側には、山陽町との町境にあたる日古木の丘陵地が広がっている。ただこの日古木の低丘陵は、昭和47年に大規模な住宅団地である岡山ネオポリスの開発が山陽町との町境に開始され、地形が大きく改変されている。

熊山町内の遺跡は、昭和41年刊行の『岡山県遺跡地図』によると8か所、昭和46年度から5か年で行われた県内全域の分布調査の結果では85か所が周知されている。その後、遺跡数は平成6年刊行の町史の編纂事業で増加し、平成10年度から行われた詳細分布調査による『改訂岡山県遺跡地図』では317か所の遺跡数が周知されている。これによると町内主要河川の流域を中心に、町全域にくまなく遺跡の存在が明らかになってきている。

町域内最初の明瞭な生活痕跡は、縄文時代後期から晩期の時期である。当該調査遺跡よりやや南東部に位置する吉井川兩岸の丘陵から緩斜面にかけて遺物が採集されている。右岸側の松木、円光寺周辺では、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器片や石器が採集され、左岸側の千駄周辺では、石鏃、スクレイパー等の石器が採集されている。おそらくこの時期以降に吉井川沖積地へ定住化が進み水稻耕作が行われたものと考えられる。

弥生時代中期以降になると遺物の散布地も急増し、山裾や丘陵斜面各所で確認されている。同じ吉井川左岸の勢力遺跡では、発掘調査により丘陵斜面から弥生時代中期後半から後期初頭の竪穴住居、建物等を検出し、この付近での集落の実態が初めて明らかになった。小野田川、可真川流域では、美



第1図 遺跡位置 (1/200,000)

作岡山道路の事前調査が行なわれた岡遺跡で竪穴住居を、前内池遺跡では、中期後半から後期の竪穴住居や段状遺構を検出している。土井遺跡でも丘陵頂部から斜面部に主に中期後半の竪穴住居や段状遺構を検出している。弥生時代後期になると集落遺跡は、丘陵部から低地へと広がりを見せ、谷の前遺跡では、住居跡等が検出され、多数の出土遺物とともに銅鐸形土製品が出土している。

一方、墳墓遺跡でも多くの検出例が増加している。佐古遺跡では、後期前半の竪穴住居、貯蔵穴等を検出した尾根上の鞍部に同一集落の墓域と考えられる22基の土壙墓、土器棺墓を検出している。前内池遺跡シダカ鼻調査区では後期前葉から末の115基の土壙墓、59基にのぼる土器棺が石列を伴い検出されている。谷の前遺跡でも石列を伴う土壙墓群が検出されている。集団墓の形成時期、性格、集落と集団墓の実態が徐々に明確になってきている。丸崎4号墳は、一辺12m強の弥生時代後期の墳丘墓で、墳頂部より2基の土壙墓が、墳端から特殊器台と特殊壺が出土している。特殊器台や壺は、葬送儀礼に伴い使用されたもので、弥生時代後期の吉備の範囲を最もよく現す遺物として注目される。

古墳時代の遺跡は、『改訂岡山県遺跡分布図』によると町内に150基あまりの古墳が掲載され、うち明瞭に古墳時代後半期の横穴式石室を伴うものが60基程で全体の4割を数える。前方後円墳は、全長59mを測る町内最大規模の武宮古墳が、吉井川を眼下に望む左岸丘陵頂部に位置している。葺石を施し前方部より竪穴式石室が検出され前半期の築造とみられる。吉井川の平野部のみならず、小野田川、可真川の流域をも支配領域とした首長墓とみられる。可真川流域の前内池古墳群では11基の古墳の発掘調査が行われて、5世紀代から7世紀中頃までの様々な構造を持つ古墳が検出されている。竪穴式石室構造の7号方墳からは仿製鏡が出土している。5世紀末から6世紀初頭の1・4号墳からは、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪、石見型盾形埴輪等の各種埴輪が出土している。同流域の丸崎古墳群からも人物埴輪が出土している。この他、吉井川流域の矢部古墳群の調査では、竪穴式石室と木棺を検出し古式の須恵器が出土している。

可真川の上流域は、古墳時代後半期に小型の前方後円墳4基が集中して築かれた特異な地域である。土井遺跡の北西、北の前の低丘陵上に横穴式石室を伴わない8基の古墳群が築かれており、このうちの稗田2号墳（北の前1号墳）は全長24.5mを測る前方後円墳で埴輪が出土している。可真川の最深部、新池の塚本古墳は、墳丘の南半分が大きく削平されて、石材が散乱している。装飾付須恵器の出土が伝えられている。塚本古墳の谷を挟んで東側の山裾に全長約33mの小丸山古墳（可真丸山古墳）が位置する。明治期に道路改修により墳丘が縦断され、横穴式石室より陶棺とともに人物埴輪が出土している。発掘調査が行われた弥上古墳は、尾坂峠付近の尾根先端部、標高110m付近に位置する。全長約30mの前方後円墳で後円部に西に開口する片袖の横穴式石室を内蔵する。石室内より亀甲形陶棺、木棺等が確認され、豊富な出土遺物とともに鉄滓、埴輪も出土している。この他、同地区の畑古墳は円墳であるが、玄室幅2.0mを測る町内最大規模の横穴式石室で3基の土師質陶棺が出土している。櫛描波状文を施す古式の陶棺や弥上古墳と共通性の強い器種も出土している。陶棺出土の古墳は、この他にも八つ塚古墳群中や土井遺跡周辺古墳からも出土が知られている。この他円光寺遺跡では、形象埴輪とともにほぼ完形の人物埴輪が出土している。

土井遺跡は、古式の陶棺や埴輪が数多く出土する可真川流域のほぼ中央に所在する。発掘調査により陶棺と埴輪を焼成した窯跡が2基検出され、このうち1基では、陶棺と埴輪を同時焼成しており、埴輪と陶棺の接点が初めて明らかになった。6世紀後半代の陶棺や埴輪の供給先の解明や製作過程に貴重な成果をあげている。



第2図 周辺遺跡分布 (1/25,000)

また、この地域では、6世紀以降窯業生産とともに鉄生産に関わる遺跡や遺物が相次いで検出されている。弥上古墳や小丸山古墳からは鉄滓が出土しており、土井遺跡では古墳時代後半期の製鉄関連の鉄滓を伴う焼土塊、竪穴住居を検出している。鉄滓の散布地も、沢原山吹、勢力段、近年一部調査が行われた千駄猿喰池等が知られている。可真川流域でも鉄滓や炉壁片の散布が複数確認されている。この地域には、いずれも燃料を伴う窯業生産とともに鉄生産をも行っていた技術集団の存在が大きく、6世紀代は一大画期であったと云える。弥上地区に後半期に首長墓が集中した背景には、これらの生産基盤を掌握した首長層の存在が大きかったものと想定される。

熊山町の属する赤磐郡は、明治33年に赤坂郡と磐梨郡が合併し成立した郡名である。それ以前には吉井川を境として、可真上、可真下、弥上付近一帯は磐梨郡にほぼ古代より属している。倭名抄によると磐梨郡の郷名の一つに珂磨が記載され、現在の可真下、可真上一帯がその遺称地であると考えられている。ただこの付近の郡名は8・9世紀代の文献によると複雑に郡名、郡境が変更された地域としても周知され、分割や変更については、この付近を本拠とした和気氏の動向に大きく関わっていると云われている。

この地は古代山陽道が可真川の南側にほぼ平行し、合流する小野田川沿いを南下したものと想定されている。延喜式によると、備前国に4か所の駅が設置されたことが記載され、そのうち珂磨郷に設置された駅家を松木付近に充てる説が有力である。実際、松木付近には松木寺跡、松木遺跡と周知された遺跡地が記載されており、古代の瓦を多く出土する場所もあり、候補地を補強するものとなっている。また条里制の施行地名が可真川の流域の低位部には存在しているが、現状では近年の圃場整備により大きく地形が改変されている。磐梨古窯は、古代においても生産活動が盛んで、土井遺跡検出の瓦陶兼業の窯がそのことを裏付けている。

中世以降の遺跡では、寛文年間に廃された日蓮宗不受不施派の寺院の一つである慶運寺跡の調査を行っている。備前焼を使用した骨壺や五輪塔、宝篋印塔の検出により中世にまで遡ることが判明している。前内池遺跡の調査では、石蓮寺の集落に通じる古道を検出している。石蓮寺は、奈良時代に報恩大師が建立した備前48か寺の一つといわれている寺院で、江戸時代の寛文年間に廃寺となった寺院で、石蓮寺19坊が所在した山上伽藍寺院である。金堂跡の礎石や遺物の散布も認められ、石造十三重層塔が現存している。その他、城跡では、可真上の土井遺跡の西尾根に可真上城跡、可真下の磐梨中学校背後の丘陵頂部に可真下城跡が築かれている。土井遺跡周辺には木戸の上、土井の下、大土井等の城、構に関した名が残り、調査では尾根を切断する堀切に通路を設けた遺構を検出している。可真上城跡に関連する遺構の可能性もあり、周辺部への関連施設の広がりが見込まれる。（山磨）

文献、参照資料

荒木誠一『改修赤磐郡史』赤磐郡教育会 1940

永山卯三郎『岡山県農地史』1952

『岡山県市町村合併誌』総編 岡山県 1960

石田寛監修『岡山県の地理』1978

吉田 晶「吉備の国・郡・郷制」『岡山県史 古代Ⅱ』岡山県 1989

『熊山町史』通史編上巻 熊山町史編纂委員会 1994

間壁霞子「可真・珂磨・かま＝窯」『新世紀の考古学』一大塚初重先生喜寿記念論文集一 2003

『改訂 岡山県遺跡地図』〈第9分冊 東備地区〉岡山県教育委員会 2003

第2章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の契機と推移

岡山県は、県政の最重要課題の一つである県内循環高速道路網の形成を積極的に取り組むなかで、既存の中国縦貫自動車道・山陽自動車道・岡山横断自動車道岡山米子線に、主要地方道佐伯長船線道路改築及び美作岡山道路建設を加え、赤磐郡瀬戸町（山陽自動車道）から勝田郡勝央町（中国縦貫自動車道）区間の整備計画を策定した。

岡山県教育庁文化課（平成15年度から同文化財課）は、路線計画段階の平成4年に熊山～吉井間の関係町の詳細分布調査等を実施し、路線決定に備えた。そして、両間の路線決定ののち、用地買収等の条件整備がある程度整った平成8年度から、熊山～吉井間の埋蔵文化財の取り扱いについて、岡山県東備地方振興局との本格的な協議が始まった。具体的には、平成8年度末に県教育委員会が県東備振興局から文化財保護法73条の3の通知を受け、道路用地内の周知の遺跡については発掘調査を実施し、さらに調査の結果、重要な遺構などが発見された場合は別途協議することなどを条件に、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが平成9年度から開始し、平成15年度現在調査継続中である。次に、年度ごとの調査及び確認調査の経緯を記す。

- ・平成9年度：路線予定地内のおもに熊山町前内池墳墓群の調査を実施し、他に同町の大字可真下・稗田・岡・佐古と吉井町の大字光木・二軒屋内の散布地については、確認のための一次調査を実施。
- ・平成10年度：熊山町分の前内池遺跡と佐古遺跡の一部、それに吉井町分の来光寺跡と立道遺跡について全面調査を実施。
- ・平成11年度：熊山町佐古遺跡の残部と吉井町来光寺跡・立道遺跡の残部、それに吉井町平岩古墳、工事中に発見された和気郡佐伯町八ヶ奥遺跡・同八ヶ奥製鉄遺跡の全面調査、さらに熊山町可真上等（境ヶ鼻遺跡・土井遺跡・慶運寺跡・谷の前遺跡・岡遺跡）と佐伯町小坂地内に所在する遺跡（小坂古墳群・才地古墳・同遺跡）の第一次確認調査を実施。
- ・平成12年度：熊山町の慶運寺跡・岡遺跡、佐伯町の小坂1・2号墳・才地遺跡と同古墳の全面調査、および熊山町谷の前遺跡の第二次確認調査を実施。
- ・平成13年度：佐伯町才地遺跡の残部、熊山町谷の前遺跡・慶運寺遺跡（谷の前遺跡の丘陵部にあたり、調査時には同遺跡の慶運寺北調査区にあたる）の全面調査、および熊山町小札遺跡の確認調査を実施。
- ・平成14年度：熊山町慶運寺遺跡の残部、小札遺跡・土井遺跡の全面調査、および同町首（のど）ククリ遺跡と道路関連の墓地造成に伴う瀬戸町塩納成遺跡の確認調査を実施。
- ・平成15年度：熊山町土井遺跡の残部と瀬戸町塩納成遺跡の全面調査を実施。

なお、太字遺跡は本報告書の所収主要遺跡であり、また調査対象遺跡の位置等については第3・4図、本書所収遺跡の調査概要等については第3節と第1表を参照願いたい。（柳瀬）



第3図 予定路線と対象遺跡 (1/80,000)



第4図 調査対象遺跡位置 (1/25,000)

第2節 発掘調査および報告書作成の体制

本報告書に所収の土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡の3主要遺跡は、おもに平成11年度に確認調査、平成12～15年度に全面調査、平成16年度に遺物整理・報告書作成を実施した。

次に調査・報告書作成の体制を記す。

発掘調査の体制	教育次長	宮野正司
平成11年度	文化課	
岡山県教育委員会	課長	松井英治
教育長	課長代理	佐々部和生
岡山県教育庁	課長代理	
教育次長	(埋蔵文化財係長)	松本和男
文化課	文化財保護主査	福本 明
課長	主 任	奥山修司
課長代理	岡山県古代吉備文化財センター	
参 事	所 長	正岡睦夫
課長代理	次 長	能登原巧
(埋蔵文化財係長)	〈総務課〉	
文化財保護主任	課 長	小倉 昇
主 任	課長補佐(総務係長)	安西正則
岡山県古代吉備文化財センター	主 査	山本恭輔
所 長	〈調査第三課〉	
次 長	課 長	柳瀬昭彦
〈総務課〉	課長補佐(第一係長)	浅倉秀昭(調査担当)
課 長	課長補佐(第二係長)	下澤公明
課長補佐(総務係長)	主 事	下垣 豪(調査担当)
主 査		
〈調査第三課〉		
課 長	平成13年度	
課長補佐(第二係長)	岡山県教育委員会	
文化財保護主任	教育長	宮野正司
文化財保護主事	岡山県教育庁	
	教育次長	國定忠克
	文化課	
	課 長	松井英治
	課長代理	
	(埋蔵文化財係長)	松本和男
	課長代理	藤井守雄
平成12年度		
岡山県教育委員会		
教育長		
岡山県教育庁		

第2章 調査の経緯と経過

主 任 奥山修司

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 正岡睦夫

次 長 能登原巧

〈総務課〉

課 長 安西正則

係 長 田中秀樹

主 任 小坂文男

〈調査第三課〉

課 長 柳瀬昭彦

課長補佐（第一係長） 下澤公明（調査担当）

主 事 馬路晃祥（調査担当）

課長補佐（第二係長） 山磨康平

文化財保護主幹 浅倉秀昭（調査担当）

主 事 若林 学（調査担当）

平成14年度

岡山県教育委員会

教 育 長 宮野正司

岡山県教育庁

教育次長 三浦一男

文化課

課 長 西山 猛

課長代理

（埋蔵文化財係長） 松本和男

課長代理 宮田正彦

文化財保護主任 尾上元規

主 事 浜原浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 正岡睦夫

次 長 藤川洋二

〈総務課〉

課 長 安西正則

課長補佐（総務係長） 田中秀樹

主 任 小坂文男

〈調査第三課〉

課 長 柳瀬昭彦

課長補佐（第三係長） 岡田 博

文化財保護主幹 光永真一（調査担当）

文化財保護主査 亀山行雄（調査担当）

文化財保護主事 物部茂樹（調査担当）

文化財保護主事 重根弘和（調査担当）

主 事 福井 優（調査担当）

発掘調査・報告書作成の体制

平成15年度

岡山県教育委員会

教 育 長 宮野正司

岡山県教育庁

教育次長 三浦一男

文化財課

課 長 西山 猛

課長代理 田村啓介

課長補佐

（埋蔵文化財係長） 平井泰男

文化財保護主任 尾上元規

主 事 浜原浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 正岡睦夫

次 長 藤川洋二

文化財保護参事 松本和男

〈総務課〉

課 長 中田哲雄

課長補佐（総務係長） 笈本弘忠

主 任 小坂文男

〈調査第三課〉

課 長 柳瀬昭彦

（報告書担当）

課長補佐（第一係長） 山磨康平

（調査・報告書担当）

文化財保護主事 重根弘和

（調査・報告書担当）

課長補佐（第三係長） 井上 弘

文化財保護主幹 浅倉秀昭

（報告書担当）

第3節 発掘調査および報告書作成の経過

1 調査経過の概要

本報告書所収の土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡の調査に至る経緯については、第1節で簡単にふれた。この項では、上記3遺跡が主要遺跡として調査されるに至った経過、およびそれぞれの調査を通しての経過を、第1表を参照しながら概説する。第1表は、調査年度・遺跡名（遺跡番号は第4図の遺跡番号と同）・担当者・期間・面積・遺物量などを一覧にしている。

第1表 美作岡山道路（本報告書関係）調査一覧

年度	番号	遺 跡 名	調 査 担 当 者	調 査 期 間	面積 (㎡)	遺物箱数	
H11	1	鏡ヶ鼻遺跡 (確認)	澤山孝之・室山博文	12.6～12.15	70	1	
	2	土井遺跡 (確認)		2.7～3.3	240	3	
	3	慶運寺跡 (確認)		3.3～3.31	30	1	
	4	谷の前遺跡 (確認)			110	2	
H12	3	慶運寺跡	浅倉秀昭・下垣 豪	10.1～1.31	1,000	92	
	4	谷の前遺跡 (確認)			200	1	
H13	4	谷の前遺跡	浅倉秀昭・若林 学	10.1～1.31	1,300	120	
		慶運寺遺跡 (谷の前慶運寺跡北調査区)	下澤公明・馬路晃祥 若林 学	1.1～3.31	1,570	11	
	6	小札遺跡 (確認)	浅倉秀昭	2.1～3.31	165	1	
H14	5	首ククリ遺跡 (確認)	光永真一・亀山行雄 重根弘和	5.20	20	0	
	4	慶運寺遺跡 (谷の前慶運寺跡北調査区)		4.1～5.14	340	5	
	6	小札遺跡		5.15～6.24	165	1	
	2	土井遺跡		4.1～12.31	3,345	95	
				物部茂樹・福井 優			10.1～11.30
H15	2	土井遺跡	山磨康平・重根弘和	4.1～9.30	2,560	62	
計					確認 全面	(835) 10,280	395

平成11年度は、熊山町可真上を中心とする周知の4遺跡について、調査範囲・遺構内容などの把握を目的として第1次の確認調査を実施した。その成果の概要は第4節に譲るが、結果的に鏡ヶ鼻遺跡は橋脚建設工事着工時に立会調査、土井・慶運寺・谷の前の3遺跡は全面調査が必要となった。

平成12年度は、調査員2名で4か月の予定で慶運寺跡の全面調査に入り、約1,000㎡について調査を終了した。ただ、調査の過程で調査区のほぼ南半は、寺院（室町時代後半頃から近世初め頃まで存続）の造成時に削平を免れた弥生時代後期を中心とする集落跡（谷の前遺跡の一部）と重複していることが判明し、弥生時代の調査は別途次年度対応となった。また、平成12年度の段階で作付け等の要因で確認調査のできなかった谷の前遺跡の2地点について、第2次の確認調査を実施した。

平成13年度は、調査員2名、4か月の予定で谷の前遺跡の全面調査（約1,300㎡）を実施し、そのほか平成12年度の慶運寺跡調査の過程で弥生遺跡の存在が判明していた北側の丘陵部分（調査当時慶運寺遺跡、報告書作成時に谷の前遺跡慶運寺北調査区と変更）を、調査員3名の3か月の予定で全面調査に入った。そして、調査範囲約1,900㎡のうち300㎡強が次年度調査に継続となった。また、前年度までに条件整備ができていなかった熊山町弥上地区の小札遺跡の確認調査を調査員1名の2か月間

で実施し、次年度に拡張調査が必要との結果を得た。

平成14年度は、調査員3名の9か月の調査期間で慶運寺北調査区の残部、弥上地区の小札遺跡の拡張調査と首ククリ遺跡の確認調査、および土井遺跡の全面調査を重複して実施した。なお、調査途中の10・11月の2か月間は、土井遺跡に調査員2名の応援を仰いだ。当遺跡については、遺跡全体の調査範囲（約5,900㎡）からいえば約6割弱が当年度内に終了したことになり、4割強の約2,500㎡ほどが次年度に継続調査となった。また、首ククリ遺跡は遺構・遺物は発見されず、遺跡範囲外との結論を得た。

平成15年度は、土井遺跡についてのみ調査員2名の6か月の期間を調査し、予定どおりに終了している。（柳瀬）

2 報告書作成経過の概要

主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う調査報告書は、平成13年度から平成16年度まで、それぞれ年度ごとに整理・報告書作成作業を行い、このうち2分冊はすでに刊行されている。本報告書は、平成16年度に刊行する瀬戸町分の塩納成遺跡に続き、4分冊目にあたる。報告書の作成は、担当者4名（浅倉秀昭・柳瀬昭彦・山磨康平・重根弘和）で平成16年度に行った。浅倉は4月から通年で、谷の前遺跡・慶運寺跡を、そして柳瀬は9月から、山磨・重根は10月から土井遺跡を分担した。整理対象面積は10,280㎡、出土土器は整理箱で395箱あり、これに土製品・石製品・金属製品・玉類・瓦・陶棺・埴輪など200点が加わる。

出土遺物の水洗・注記作業については、そのほとんどを調査年度のうちに、もしくは調査遺跡の調査期間内に各調査現場事務所で終了していた。

整理・復元作業は、4月から8月まで慶運寺跡・谷の前遺跡、9月から土井遺跡の順に行い、それらと並行して遺物台帳の整理や実測の必要な遺物の選別・選定作業を進めた。

遺物の実測は、まず遺構に伴う土器のうち復元・選別したものから順次行った。実測にはそのほとんどを整理補助員・実測作業員の協力を得た。全実測図について、担当者は修正・補足を加え、そのトレースおよび割付を行っている。また、鑑定や分析の必要な遺物の抽出および依頼等については、センター担当職員および重根が担った。特に土井遺跡で検出した埴輪および陶棺の焼成の窯については県内初であり、各分野に測定・鑑定・同定・分析を依頼した。

遺物写真は、実測の終了したものから順次3～4回に分けて、6月頃から翌年2月までの間に、写真技術員の助力を得て撮影した。報告書には全体の頁数との絡みで、精選して掲載している。

遺構については、遺物整理と並行して、図面整理・検討を進めた。ただ、報告書担当者が直接調査を行っていない遺構については、担当者間の調整・意思統一などに多少手間取った面もある。なお、慶雲寺跡・谷の前遺跡の遺構・遺物のトレース・割付は、パソコン・ソフト（イラストレーター8）を使用している。原稿の執筆は、原則として調査担当者が分担して行い、文責は、各項目あるいは遺構ごとと文末に示している。

参考までに、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査報告書1には熊山町前内池遺跡・同墳墓群・佐古遺跡が、同2には佐伯町才地遺跡・同才地古墳群・小坂古墳群・八ヶ奥遺跡・同製鉄遺跡、熊山町岡遺跡、同3には瀬戸町塩納遺跡が掲載されている。（浅倉）

第4節 確認調査の概要

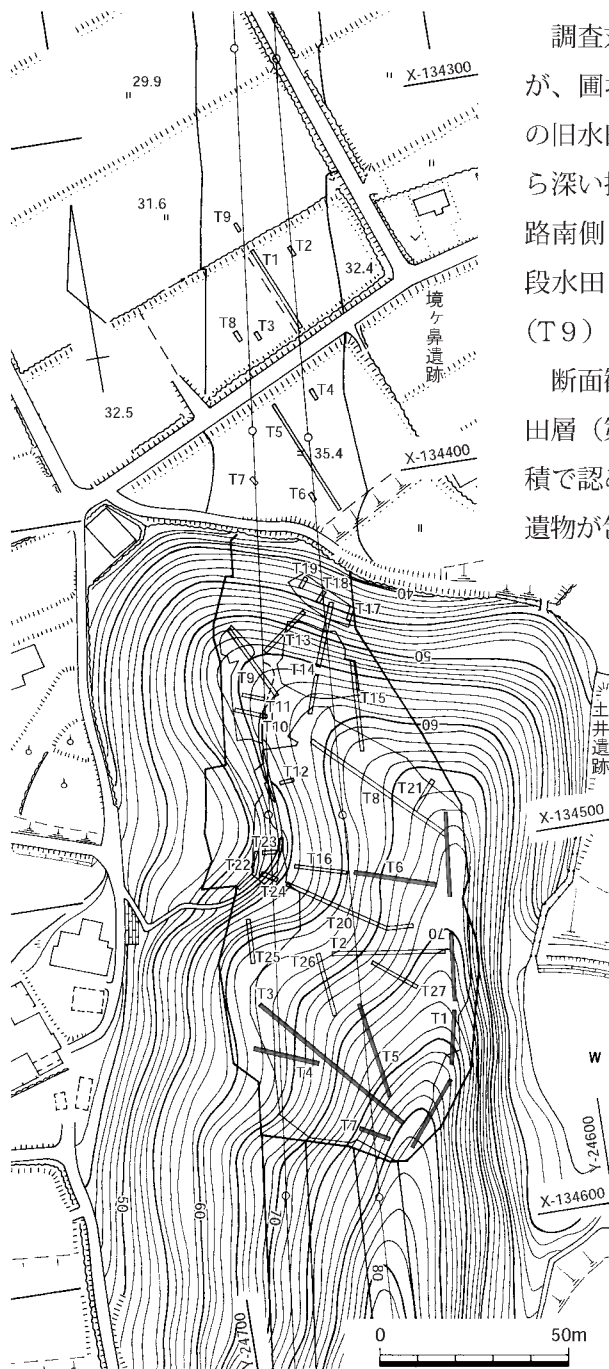
1 境ヶ鼻遺跡・土井遺跡

(1) 境ヶ鼻遺跡

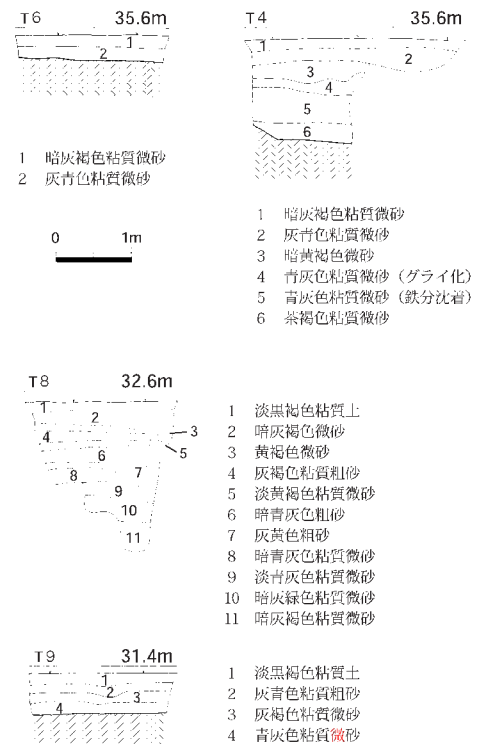
境ヶ鼻遺跡は北東－南西方向に延びる幅約5mの道路と、これを南北に挟む水田に存在する。平成10年度の分布調査では遺構・遺物は確認できなかったが、前述の道路が古代山陽道を踏襲したものであると想定されていることから、確認調査を実施した。

調査対象地は、かつて上・下段とも棚田状を呈していたが、圃場整備のために大きく改変されている。また、T1の旧水田層にあたる第9・10層が示すように、開田段階から深い掘削が及んでいたことが窺える。トレンチはこの道路南側にある上段水田に4本（T4～7）、北側にある下段水田に4本（T1～3・8）、さらに下段の水田に1本（T9）の合計9本（70m）を設定した。

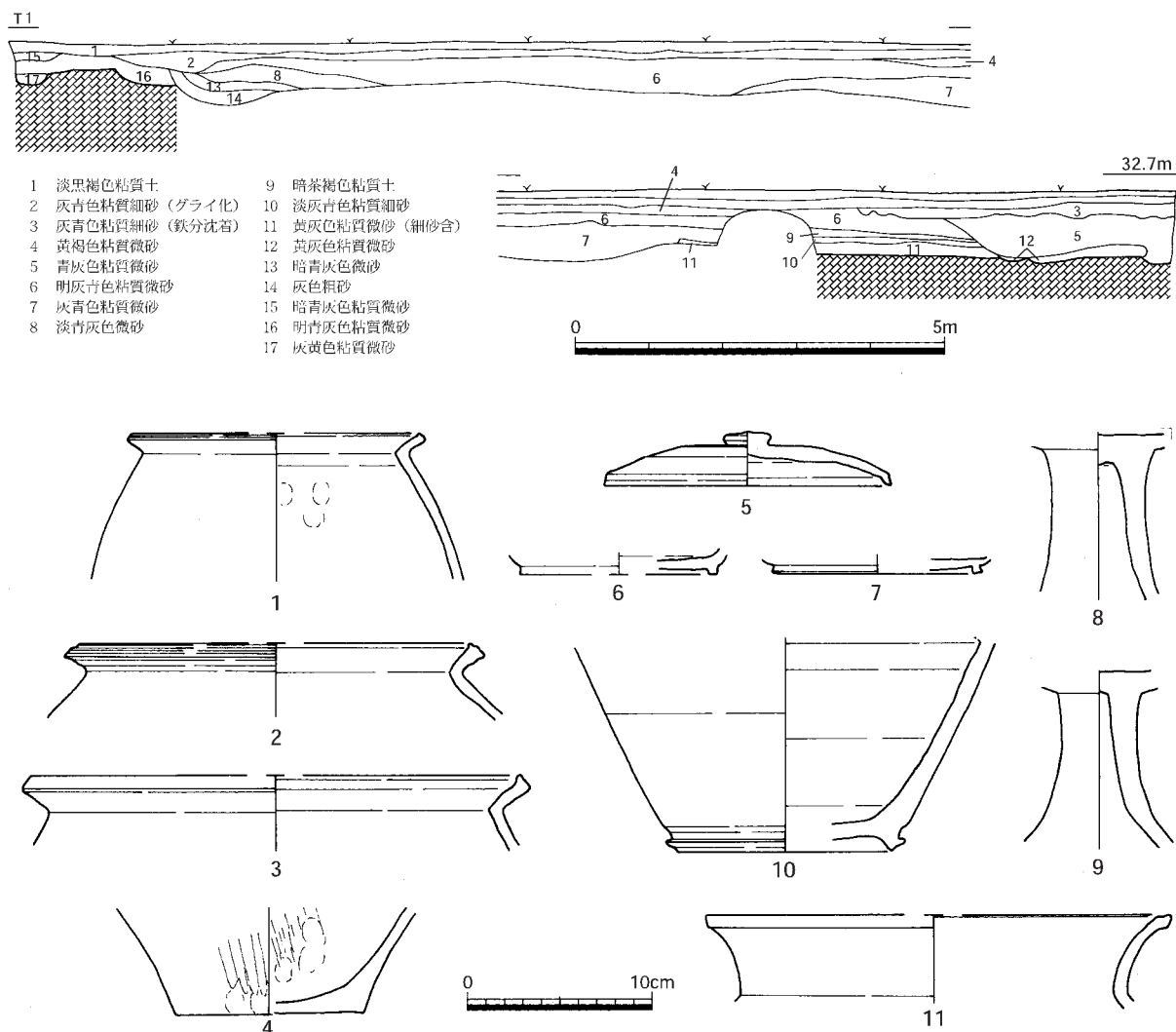
断面観察からは山側のT7を除いて、他のトレンチの水田層（第1・2層）下位では、造成土が最大約40cm近い堆積で認められた。この層には弥生時代中期から中世までの遺物が含まれており、特にT1の第3～7層からは、図化



第5図 土井遺跡等確認調査トレンチ位置 (1/2,000)



第6図 境ヶ鼻遺跡T4・6・8・9断面 (1/100)



第7図 境ヶ鼻遺跡T1断面（1/100）・出土遺物（1/4）

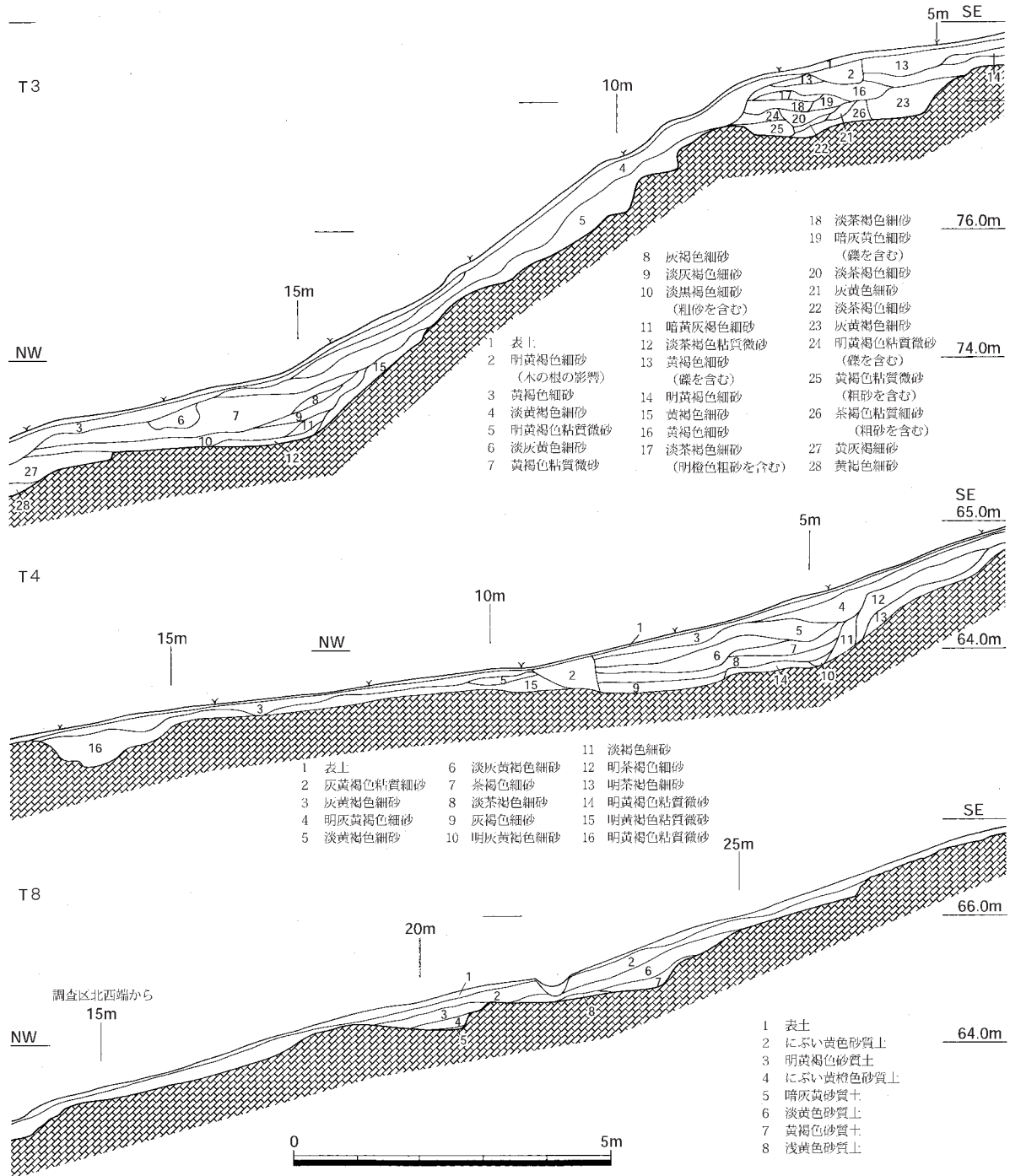
したような弥生時代中期後半の土器や打製石包丁、奈良時代の須恵器などが多量に出土した。

造成土の下位では、下段水田部のT1の第13・14層、T3の第5・6層、T8の第8～11層などが弥生時代包含層として確認した。これらはシルト質の不安定な土層であることから、周辺は低湿地あるいは河川の氾濫源であったと思われる。上段水田部では、T4の第6層で弥生土器が出土したが、T5北端では対応できる土層が確認できなかったため、この層は同期の安定した単純層ではないと解釈した。T9およびその北側については、現在の水田層と地山の削平状況から遺構が残存する可能性はないと判断した。

以上の結果から、想定した古代山陽道を示す遺構は確認できなかったが、この造成土は他地域からの持ち込みではなく、当地付近の掘削土を使用したとされる。このことから、調査地周辺に弥生時代中期と奈良時代を主体とする集落などが存在した可能性が高いことが明らかになった。（澤山）

（2）土井遺跡

土井遺跡は北方向に細長く延びた丘陵上に位置し、調査前は墓地、保安林・植林および果樹園などに利用されていた。平成10年度の分布調査では、丘陵西斜面で土師器、須恵器を採集している。トレンチは、移転前のために墓地が存在した丘陵北西部を除き、尾根部に1本（T1）、西斜面に6本



第8図 土井遺跡T3・4・8断面 (1/100)

(T2～7) の合計7本 (240㎡) を設定して調査を行った。尾根部の T1 では表土下約10～20cm程度で土壌、溝、柱穴、平坦面などを検出した。西斜面ではT6を除いて竪穴住居、段状遺構、被熱痕跡、土壌、柱穴などをそれぞれ確認した。遺物は各トレンチから弥生土器、土師器、須恵器、鉄器などが認められ、T3・4の下方からは鉄滓が出土した。

以上の結果から、この丘陵部には弥生時代中期後半を主体とする集落が存在したと考えられ、また遺構は確認できなかったが、製鉄場が存在した可能性がある。なお、路線予定地周辺で埴輪片を採集しており、古墳の存在を推測したが、現状の地形では判然としなかった。(澤山)

土井遺跡の北半については、平成14年度の全面調査に先立って、T8～27の補足調査を行った。南東から北西へ下る尾根の頂部に入れたT8の斜面中位で竪穴住居が検出され、T20・25・26でも同様の状況が認められたので、西側の斜面については佐伯町才地遺跡で見られたような集落立地が想定された。北側の斜面についても、T14・17～19で遺構を検出し、T17～19では須恵器を伴う焼土遺構が確認された。T10・11では土壇墓が検出され、その年代を確定するために調査対象とした。

一方、墓地移転後の西斜面下位では、埴輪片が集中して堆積する状況が露呈しており、その出自を求めて上方にT12を設定したが、古墳を想定させる状況は認められなかった。逆に、谷底に近いT22・23からも埴輪が出土し、これらの状況の理解に苦しんでいたところ、表土除去のために進入させた重機によって埴輪窯2基が発見された。これにより墓地跡地についても全面調査の対象となり、土井遺跡全体の調査対象面積は、当初の1,700㎡から5,000㎡を超えることとなった。

墓地跡地周辺では、移転補償を受けた墓の他に100基を超える土壇墓が検出されたが、T10・11周辺で先行して調査した平面方形の掘り方を持つ土壇墓がいずれも近世墓と判断されたため、これらについては調査対象から除くこととした。ただし、埴輪窯を壊して造られた墓と埴輪窯に隣接して備前焼の甕を棺とする墓については、調査している。また、これらの近世から現代までの墓から出土した人骨および副葬品については、埋蔵文化財としての取扱をせず、引き取りを希望する旧地権者には引き渡し、引き取り希望がないものは一括して無縁墓地に再埋納することとした。(光永)

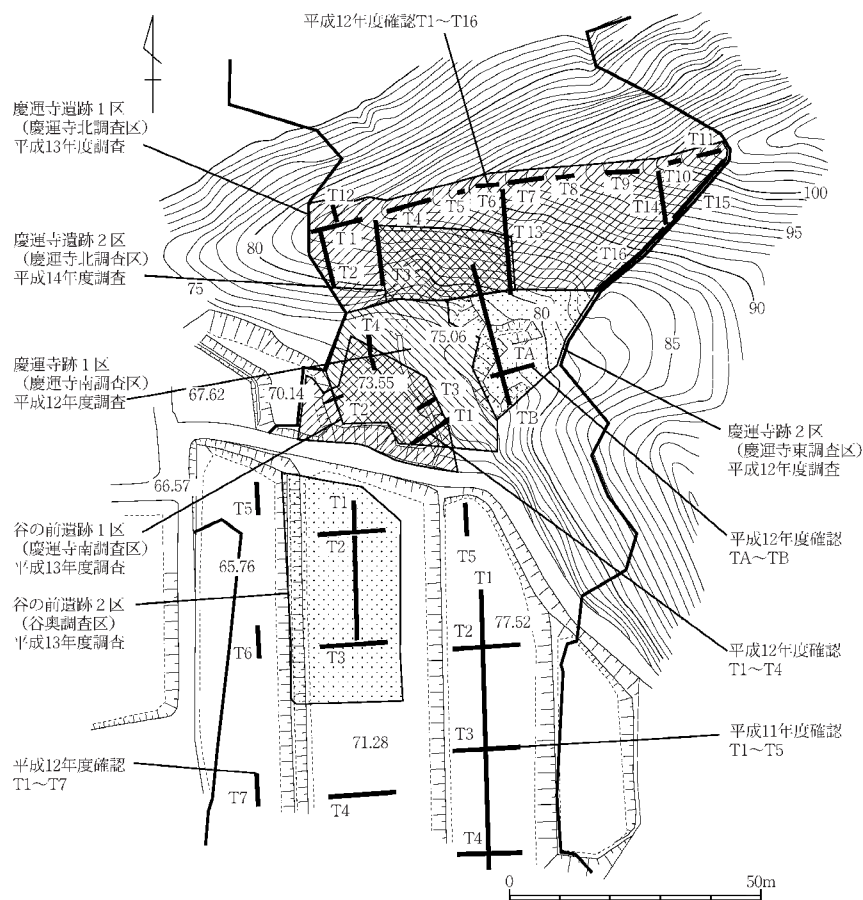
2 慶運寺跡・谷の前遺跡・慶運寺遺跡

(1) 慶運寺跡

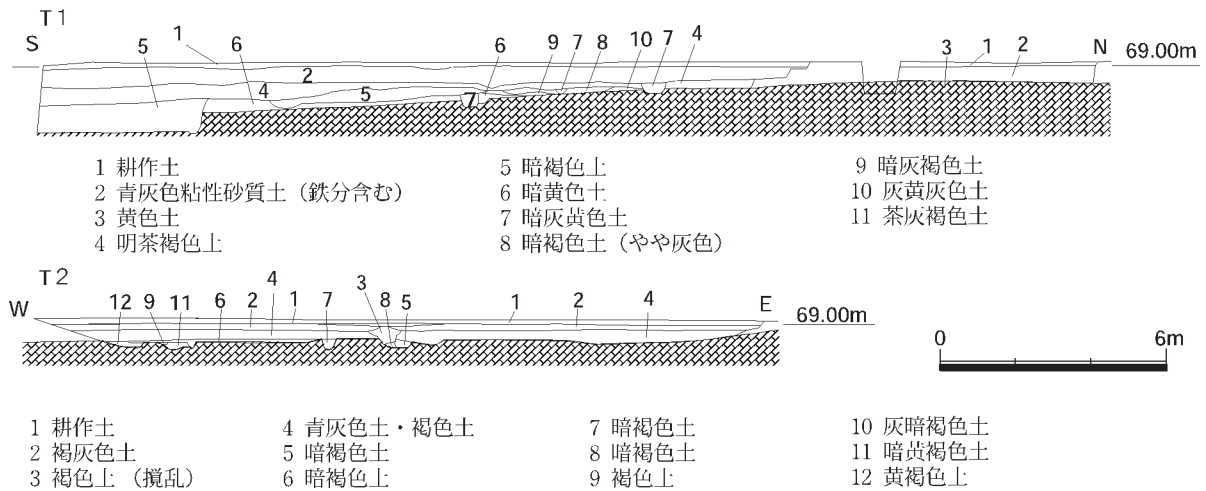
対象遺跡は、寛文年間に岡山藩の寺院整理により廃された、日蓮宗不授布施派「慶運寺」の推定地にあたり、現状で五輪塔の寄せ墓がみられた。

確認調査は平成11年度末に、丘陵南側の平坦面に30㎡ほどをトレンチで実施した。調査は、立木伐開前の条件の悪い段階であったが、整地面などと中近世の瓦・備前焼・陶磁器、弥生土器も確認され、調査の必要性が明らかになった。(澤山)

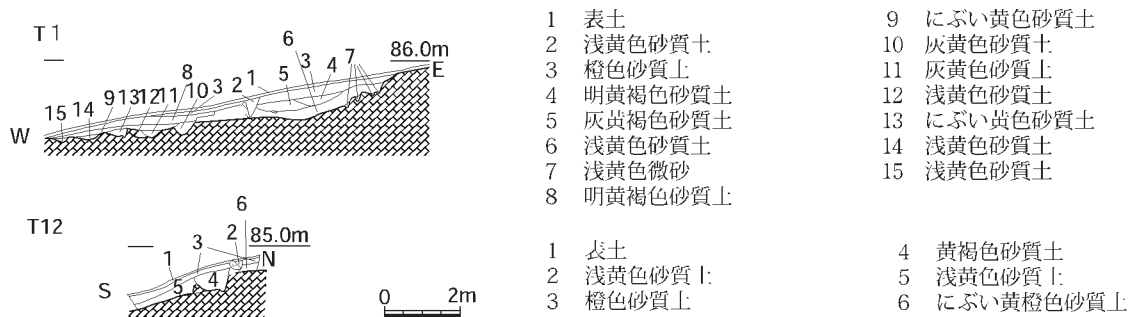
平成12年度には、さらに6本のトレンチを入れ、調査範囲の確認を行った。



第9図 谷の前遺跡調査区・トレンチ位置 (1/1,500)



第10図 谷の前遺跡 T1・2断面 (1/200)



第11図 慶運寺遺跡 T1・12断面 (1/200)

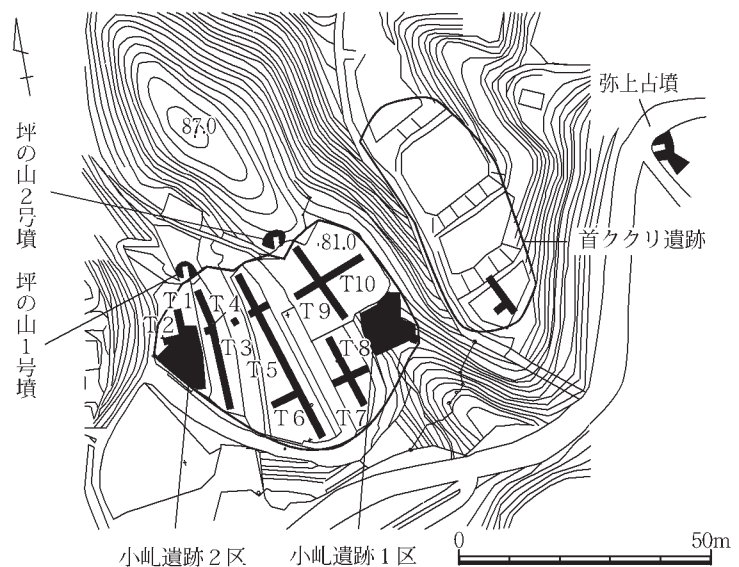
その結果、調査必要面積は1,000㎡となり、中世の寺院関連遺構が多数予想された。（浅倉）

(2) 谷の前遺跡

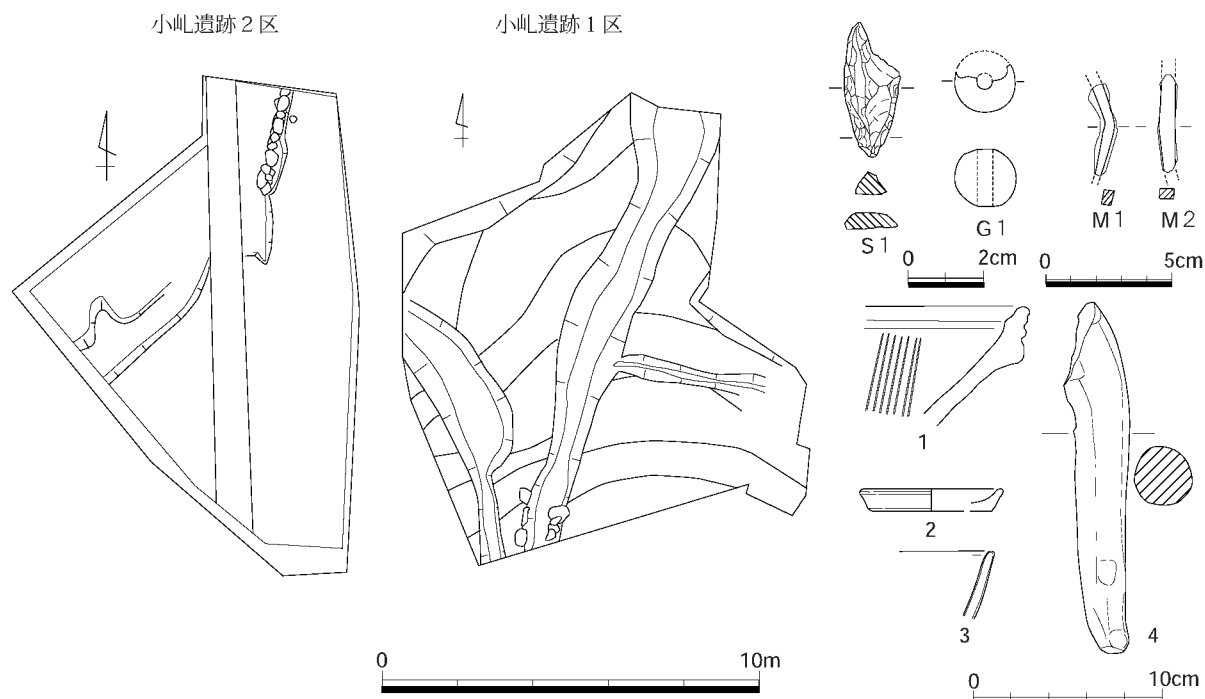
谷の前遺跡の確認調査は、平成11年度末に圃場整備済の最上部の水田に5本のトレンチを設定し、発掘を行った。その結果は、弥生時代後期の土器多量と中世の遺物が少量出土したが、遺構が発見されていないので、この時点では、全面発掘の可能性はほとんどなかった。しかし、平成12年12月にその下の水田に4本のトレンチを掘削したところ、遺構が検出されたため、慶運寺跡下層遺構を含めた範囲で、1,300㎡の調査が必要となった。（浅倉）

(3) 慶運寺遺跡

同年には、慶運寺北の急斜面と尾根筋に16本のトレンチを掘削したところ、弥生時代の遺構・遺物が検出できたため、急遽1,910㎡の範囲を慶運寺遺跡として全面調査する必要が生じた。（浅倉）



第12図 小峠・首ククリ遺跡トレンチ位置(1/1,500)



第13図 小峠遺跡1・2区 (1/200)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

3 小峠・首ククリ遺跡

(1) 小峠遺跡

小峠遺跡は、慶運寺跡の2km南に所在する。用地境には、2基の横穴式石室を主体部とする坪の山1号墳と2号墳が、さらに、50m北には、横穴式石室で前方後円墳の弥上古墳が存在する。

確認調査は、平成13年度末に10本のトレンチを掘削した。近年圃場整備が行われ、6～7段の城壁を思わせる石垣を築いた棚田を4段に改良しているため、地表面から70～80cmは、重機によって攪乱されており、T1の南部に中世の柱穴1本と同時期の水田層を検出できた他には少量の中世遺物を発見したのみである。T5の攪乱土最下層から1の備前焼播鉢が出土している。T10では、S1の石器とM1の鉄釘が出土した。

平成14年は、この結果を受けて、2か所の調査区を設定し、発掘調査を実施した。1区は、T10を拡張したもので、結果的に中世以降の3本の溝と石列を検出している。2区は、柱穴と2・4の中世土器の出土したT1を拡張したもので、中世以降の水田面2面と農道および石列を検出した。遺物としては、G1のガラス玉・M2の鉄釘・3の青磁碗が2区水田層から出土している。(浅倉)

(2) 首ククリ遺跡

首ククリ遺跡と呼称されたのは、第12図に示した小峠遺跡の東の谷水田である。終日日光の当たらない陰地である。希少植物のイヌセンブリが自生している場所で、前遺跡同様近年圃場整備され、遺跡は破壊されているところである。確認調査前の分布調査の際、土師質土器片を採集し、小字名を取って遺跡としたが、実は同名の「ノトククリ」は、数100m東方の谷間に存在し、地名の取り違いであることが判明した。

確認調査は、平成12年度末に予定していたが、少し延期して、次年度4月に実施している。トレンチは、重機を使用した。案の定、圃場整備の攪乱が深くまで達しており、遺構・遺物ともに皆無であった。(浅倉)

第3章 土井遺跡

第1節 発掘調査の概要

土井遺跡は赤磐郡熊山町可真上の丘陵上に位置する。調査地最高所は標高80mで、周辺低位部との比高差は約40mを測る。

弥生時代から近現代までの遺構を検出した。弥生時代の遺構は段状遺構群、竪穴住居等が確認でき、居住区であったと想定する。古墳時代は箱式石棺や土壙墓のほかに、窯を2基確認した。この窯は埴輪と陶棺を焼成したものである。また、その関連遺構である埴輪集積地では、多量の円筒埴輪とともに「盾持ち人」と呼ばれる人物埴輪が見つかった。竪穴住居も1軒存在するが、古墳時代後期は主に生産活動を行う場所であったようだ。古代には瓦と須恵器を焼成する窯を築き、中近世以後には墓地として利用している。

今回の調査では窯跡を3基検出した。また、調査区のさらに北側に位置する西向き斜面にも窯跡が存在したと地元の方から教示を得た。この周辺地域の字名は「可真（カマ）」といい、その由来を考える上でも興味深い発見となった（間壁2003）。（重根）

参考文献

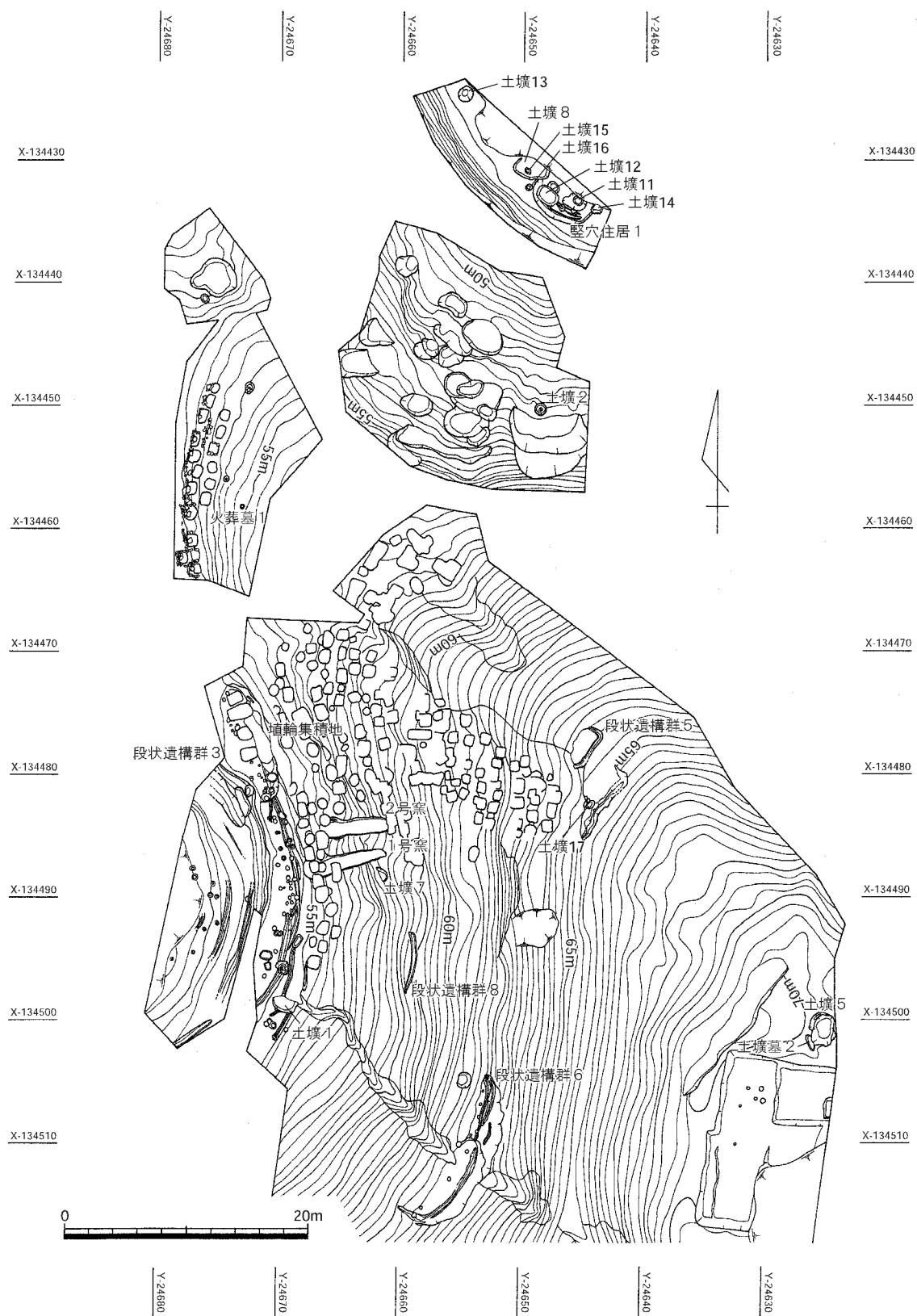
間壁菫子 2003「可真・珂磨・かま＝窯」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集



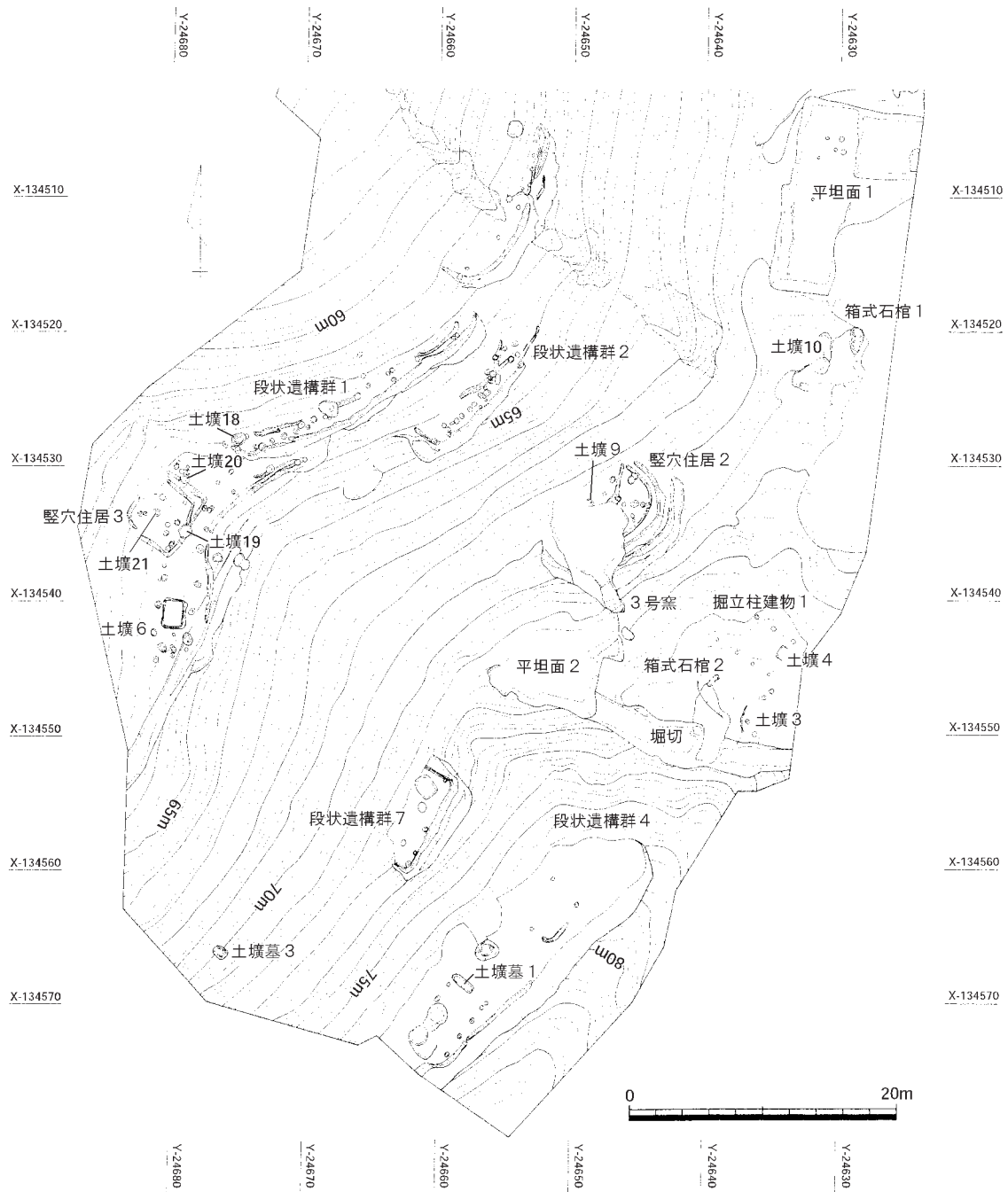
写真1 盾持ち人



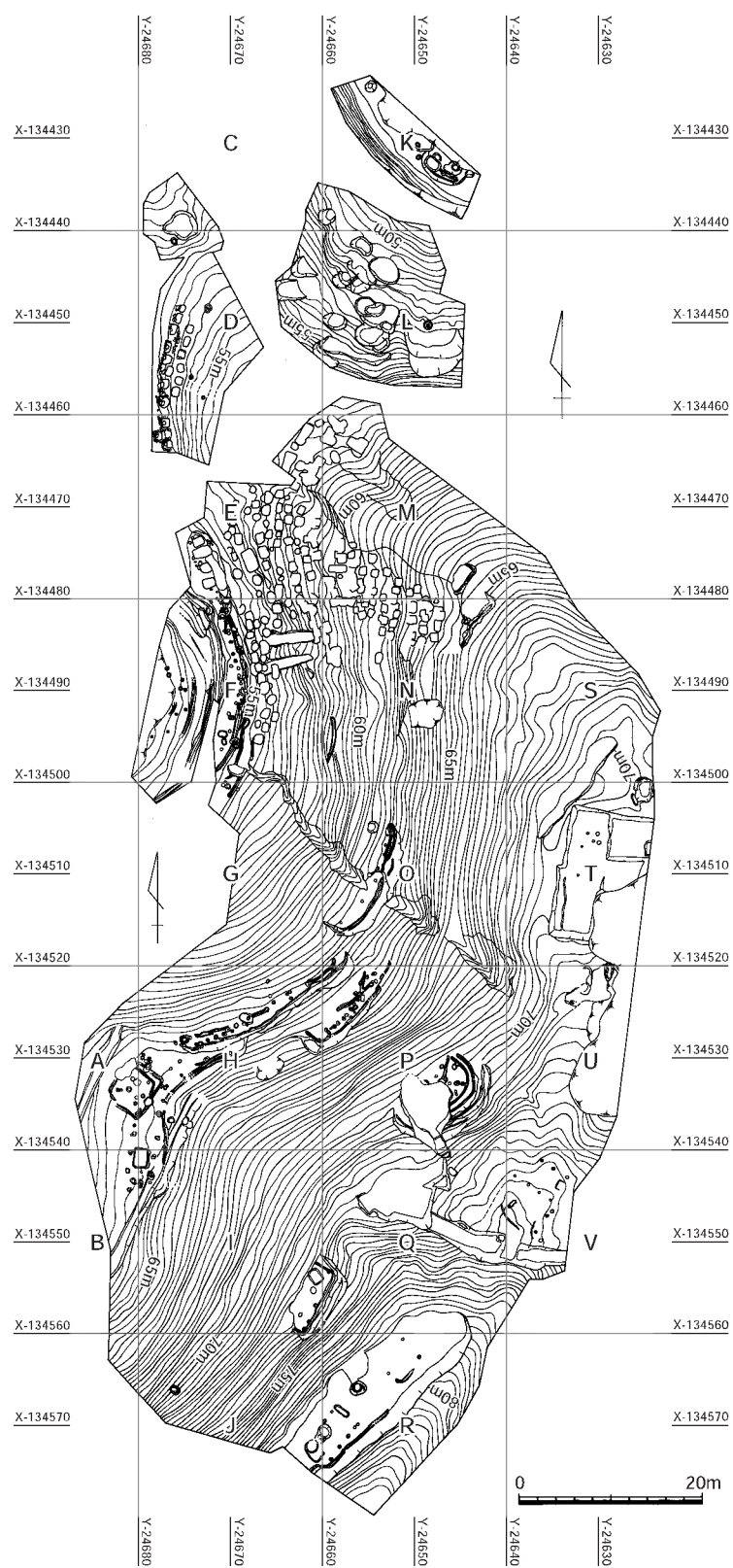
写真2 3号窯（北から）



第14図 土井遺跡遺構配置 北半 (1/500)



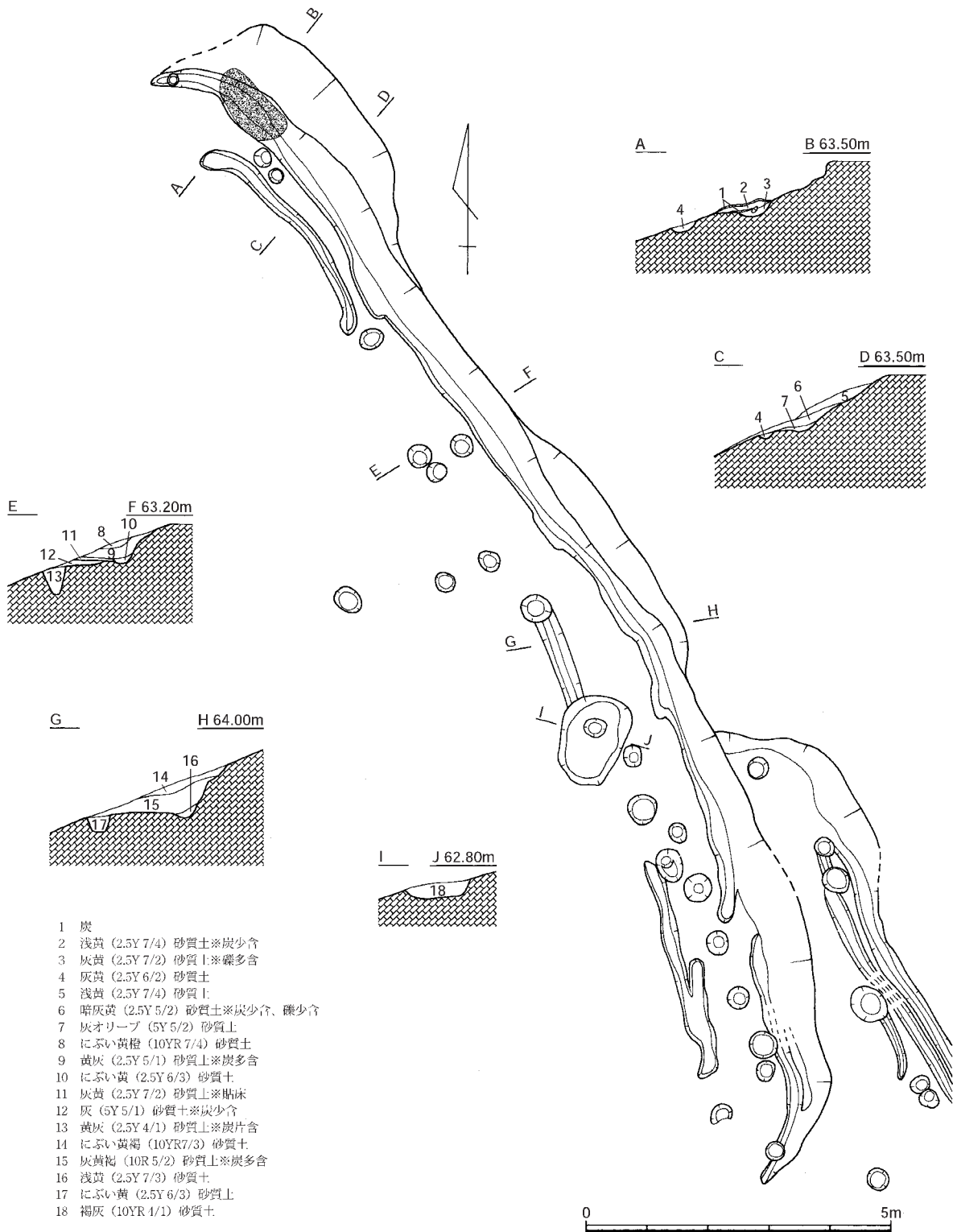
第15図 土井遺跡遺構配置 南半 (1/500)



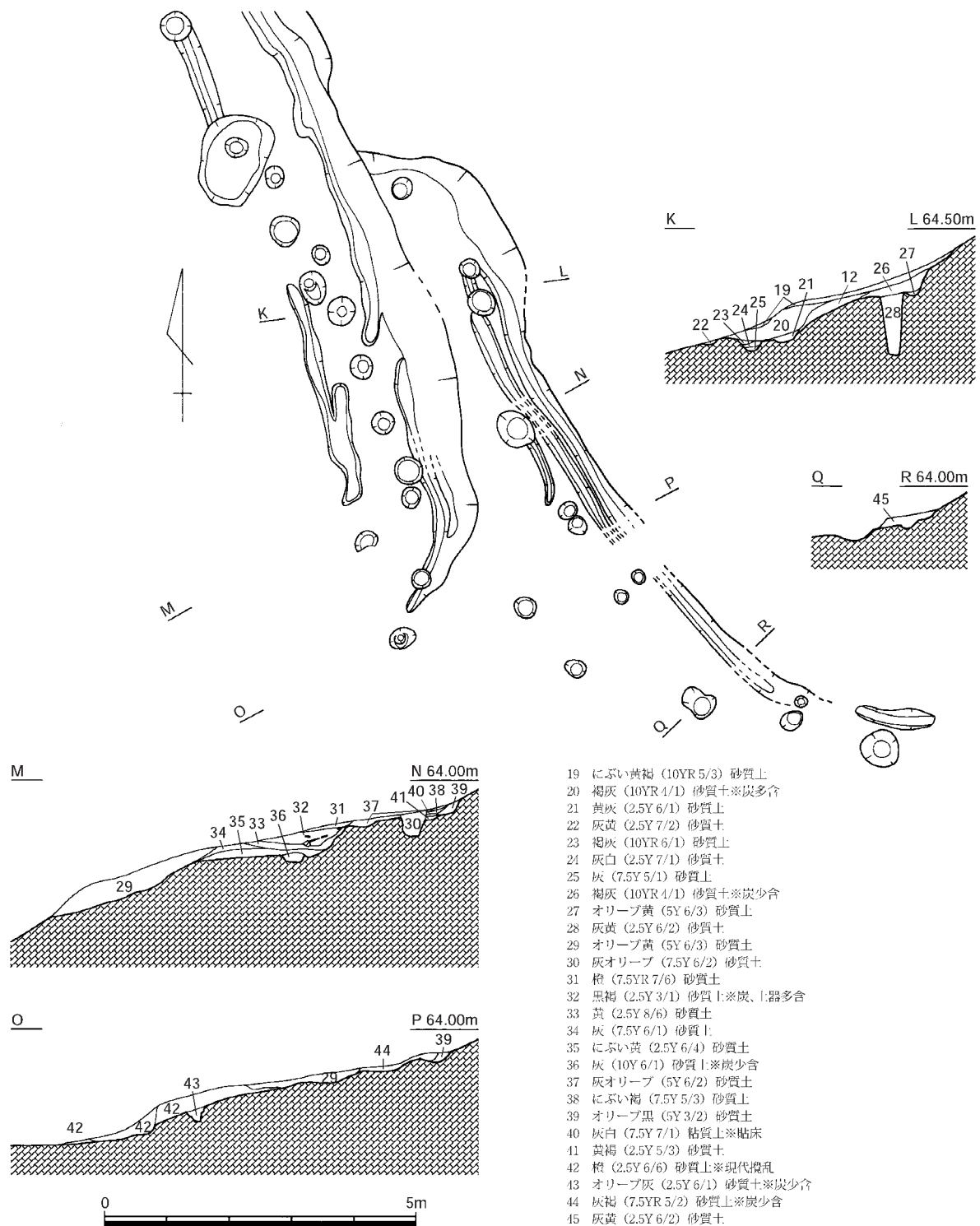
第16図 調査区分 (1/800)

第2節 弥生時代の遺構・遺物

1 段状遺構



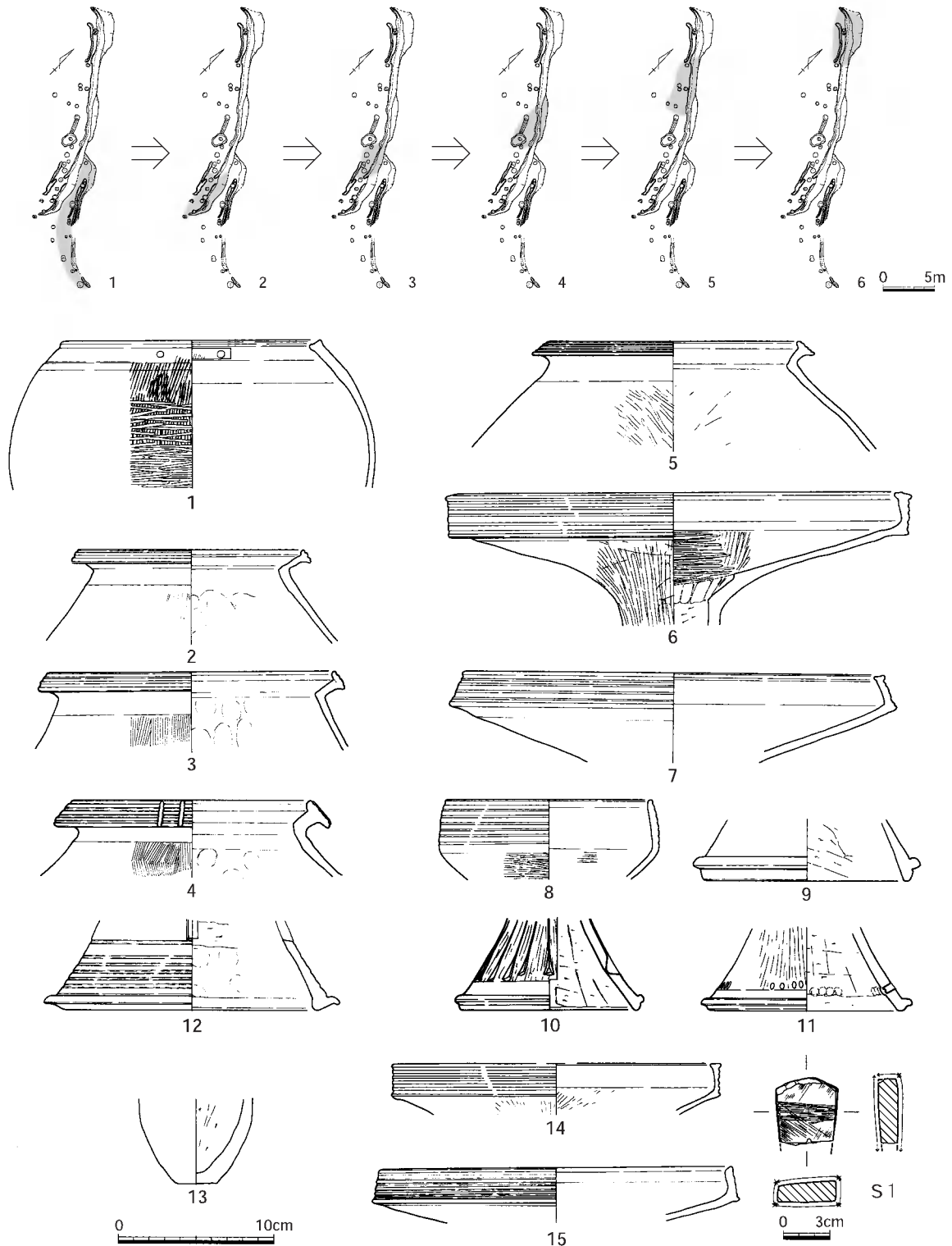
第17図 段状遺構群1 北半 (1/100)



第18図 段状遺構群1 南半 (1/100)

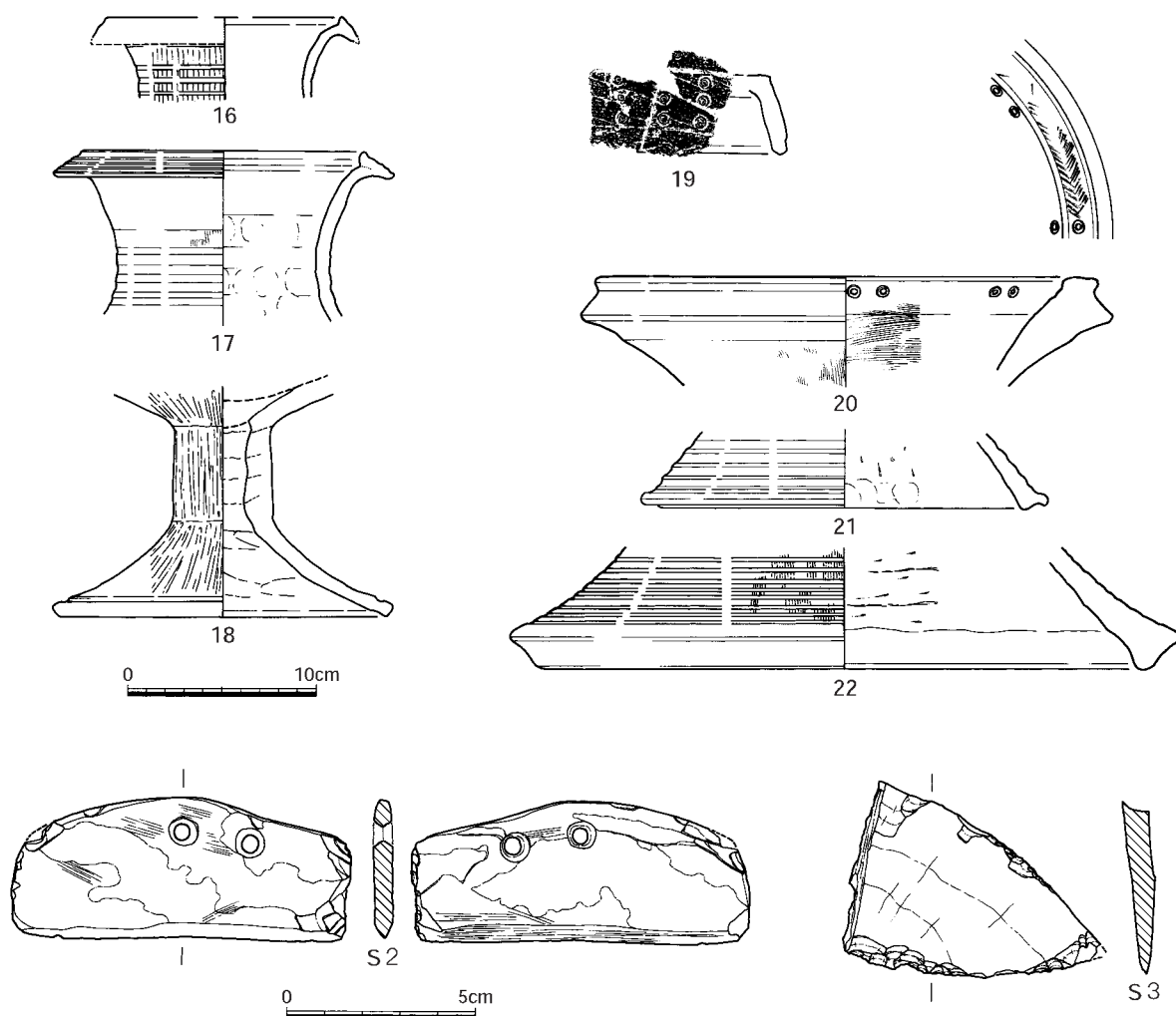
段状遺構群1 (第15・17～20図、図版2)

H・I・O区に位置する。長さは27.20mを測る。壁体溝や土層断面から14回以上の建て替え、あるいは拡張が行われたと想定する。その変遷はおおまかには6段階にわけることができ、北に向かい連続して建て替えの進む様子が確認できる。また、床面では柱穴を多く検出したが、いずれもどの段階にあたるものかは特定できない。床面北端には炭が1.5mの範囲で広がる。樹種はクリであった。

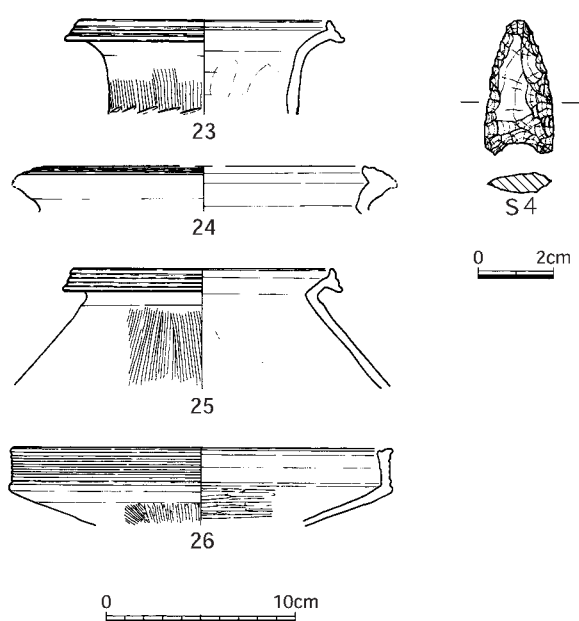


第19図 段状遺構群1 変遷 (1/600)・埋土下層・床面出土遺物 (1/4)

床面で確認した遺物は僅かであり、図化できたのは14・15のみである。いずれも壁体溝から出土した。このほか1～13、S1は埋土下層、16～22、S2・3は埋土上層を掘下時に確認した遺物である。19はスタンプ文、20は羽状文と刺突による竹管文を施す。土器の多くは中期後半の範疇におさまると考えるが、10・11は他より新しく、後期前半に属する。サヌカイト剥片を43.42g確認した。



第20図 段状遺構群1 埋土上層出土遺物 (1/4・1/2)



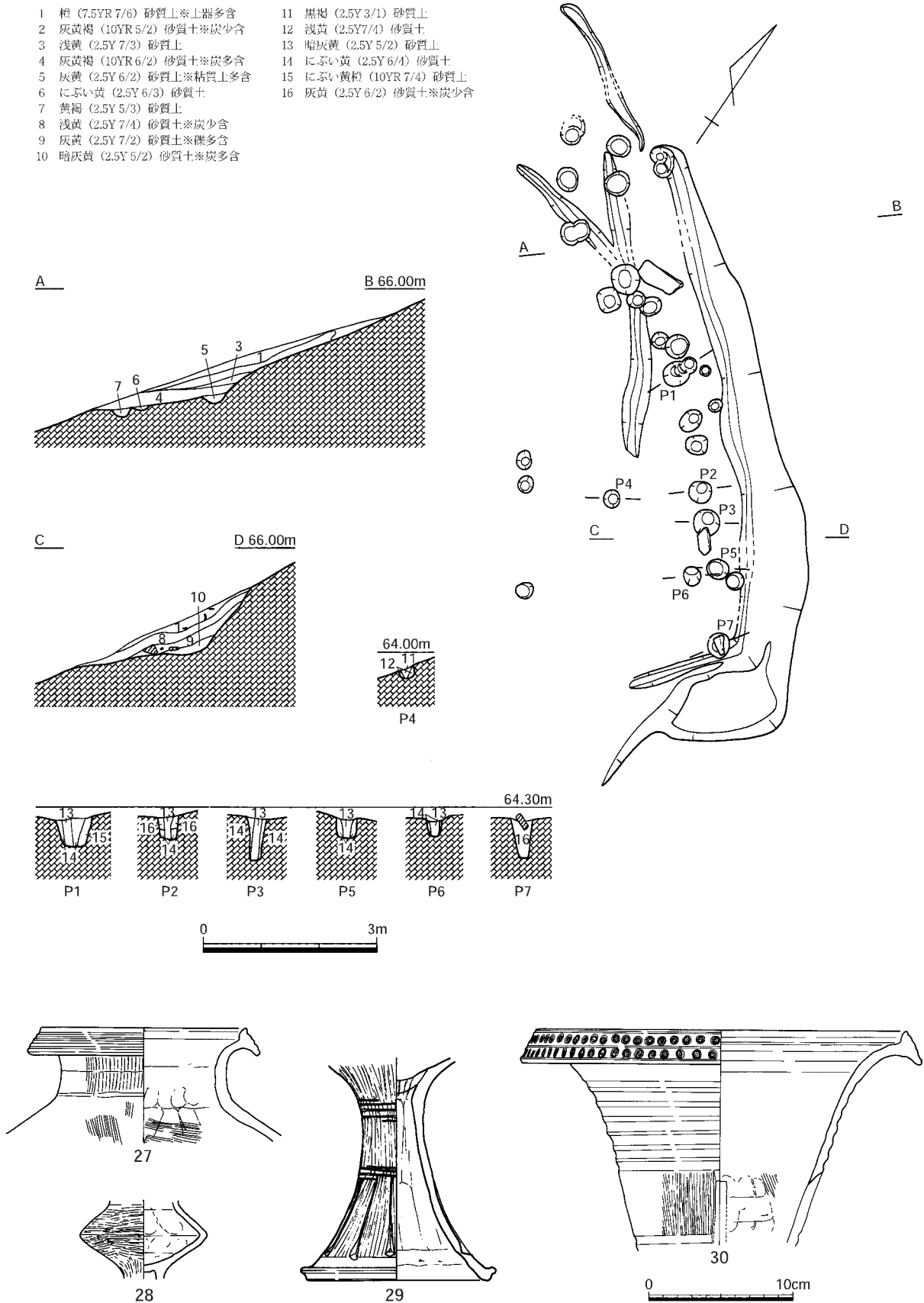
第21図 段状遺構群2 床面出土遺物 (1/4・1/2)

段状遺構群2 (第15・21～22図)

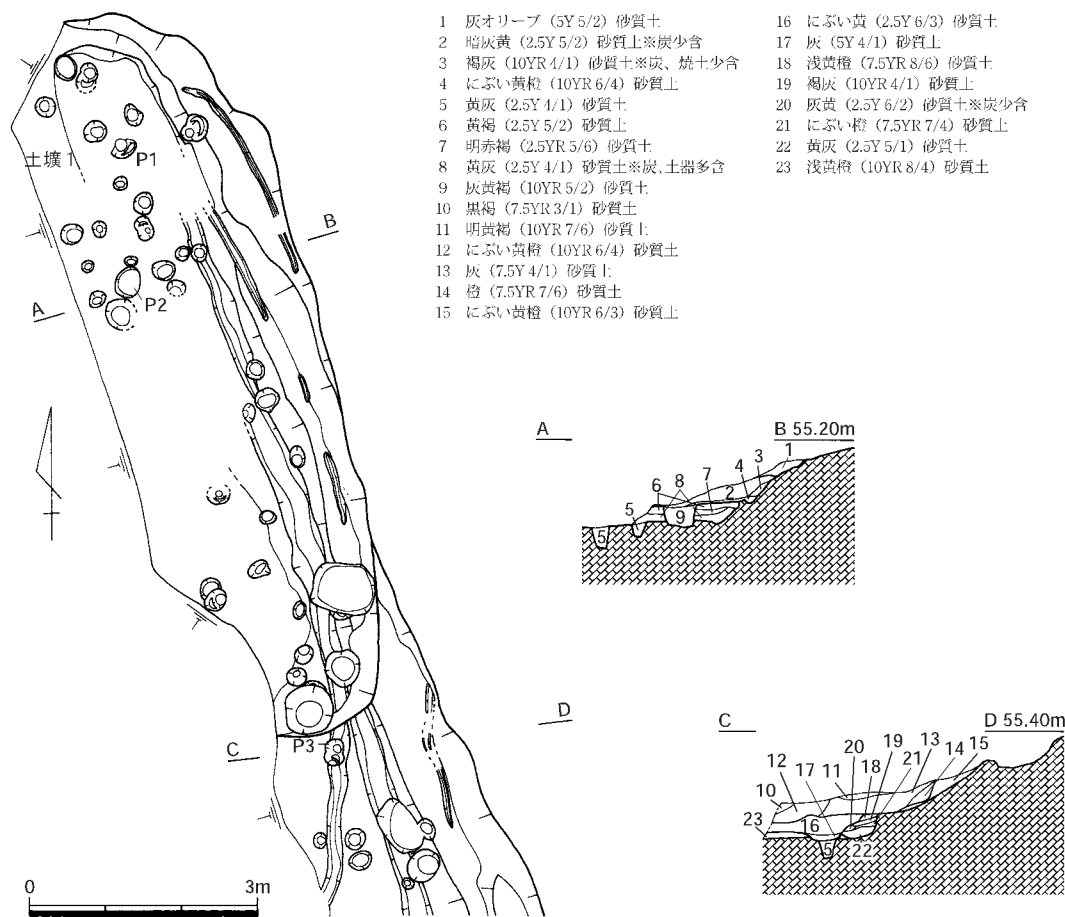
H・P区に位置する。段状遺構群1の北端直上方で検出した。長さは13.49mを測る。壁体溝や土層断面から4回以上の建て替えが行われたと想定する。

床面では台石を3点確認し、このうち1点は柱穴に落ち込んだ状態で見つかった。このほかの床面出土遺物には23～26、S4がある。土器は中期後半古相に属する。27～30は埋土中出土遺物である。床面出土遺物より新しい傾向にある。なかでも29は脚部のスカシが貫通せず、ヘラ状工具で螺旋状に沈線文を描くなどの新しい傾向がうかがえ、後期前半に属するものとする。

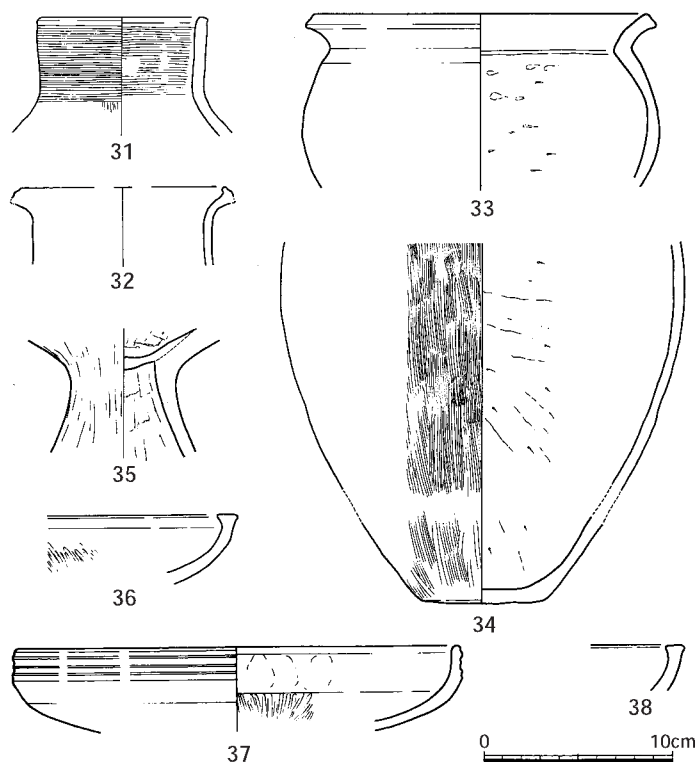
サヌカイト剥片を26.19g確認した。



第22図 段状遺構群 2 (1/100)・埋土出土遺物 (1/4)



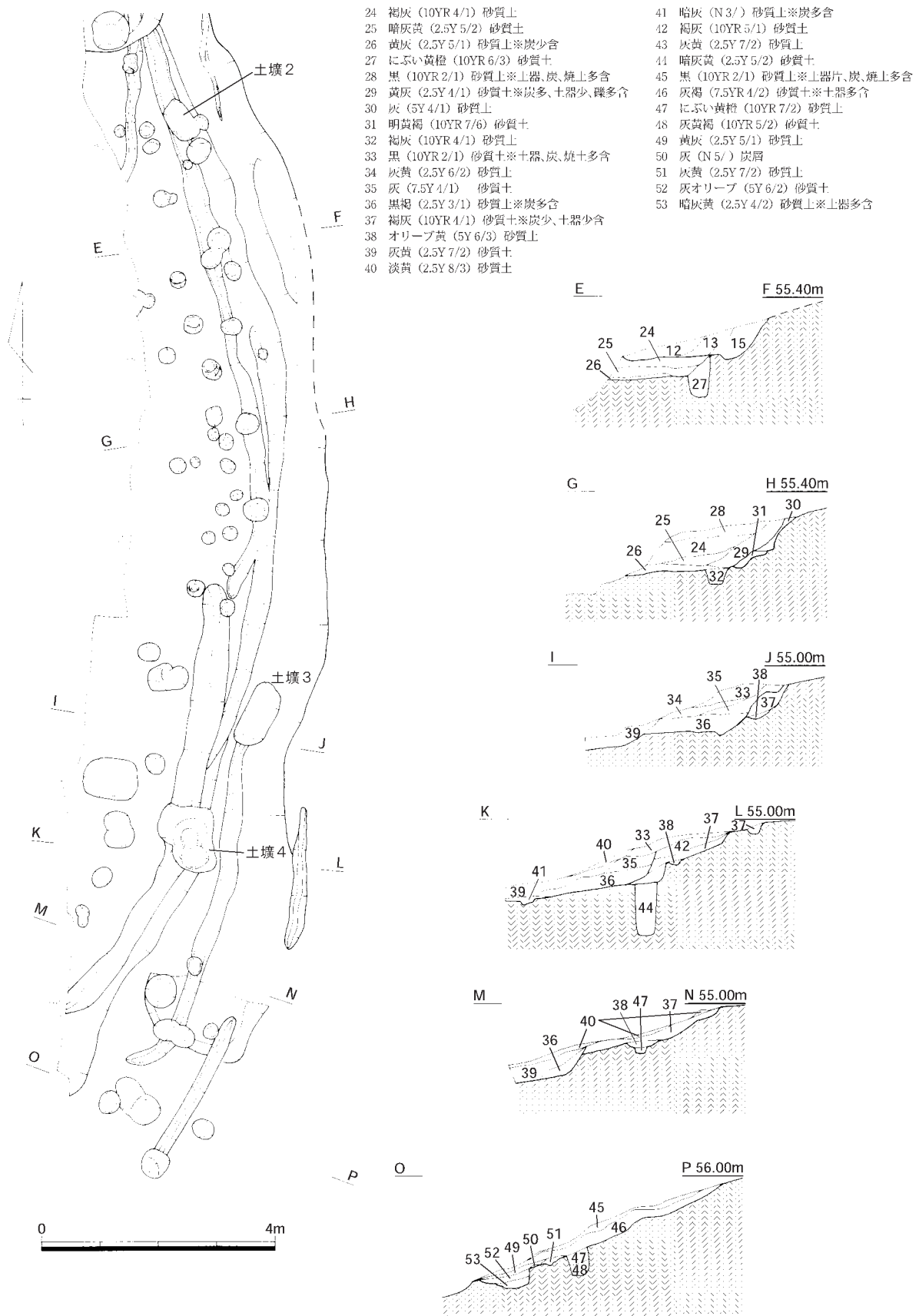
第23図 段状遺構群3 北半 (1/100)



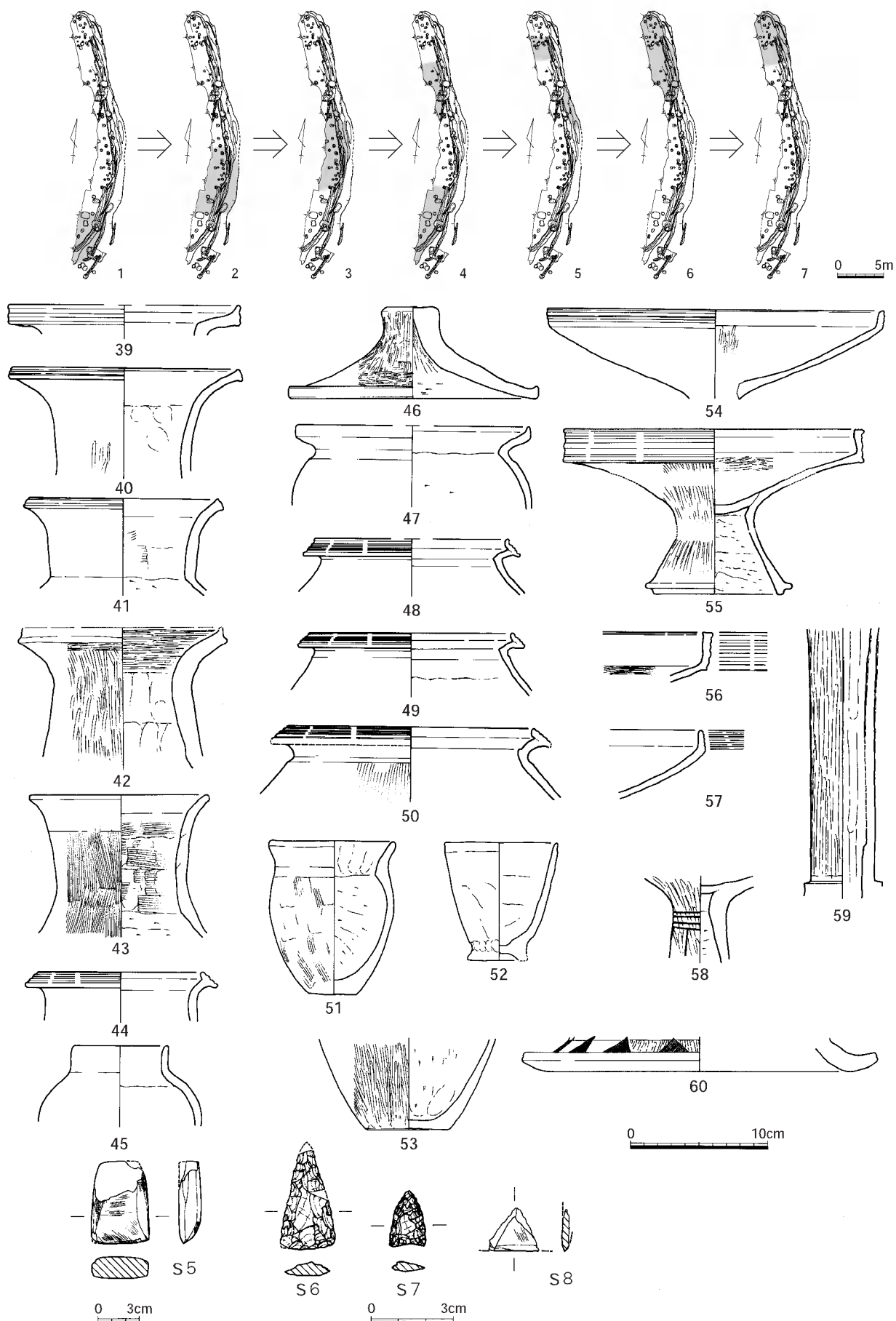
第24図 段状遺構群3 床面出土遺物 (1/4)

段状遺構群3 (第14・23～27図、図版2)

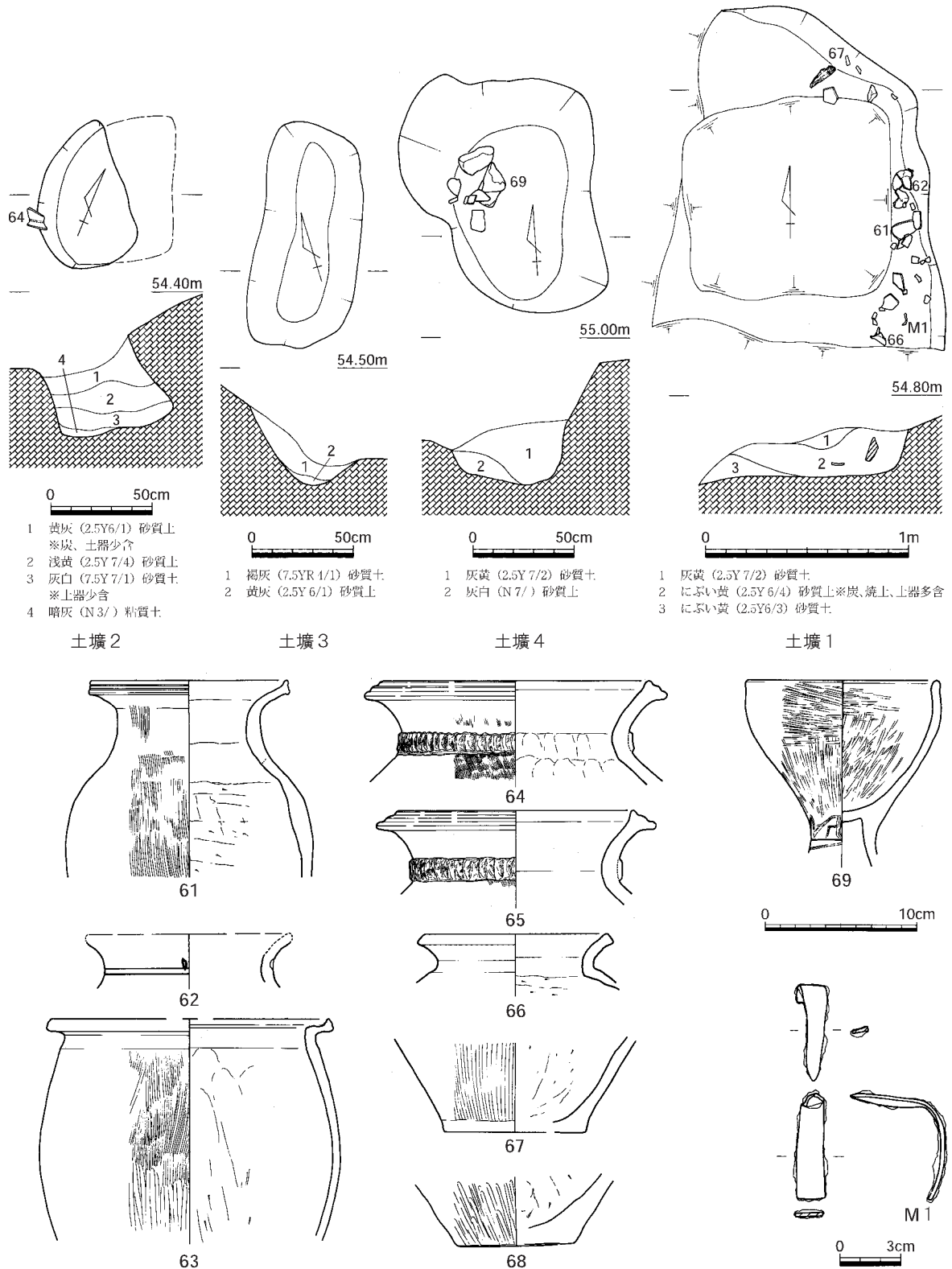
E・F・G区に位置する。1・2号窯の直下方で検出した。土壌1や埴輪集積地はこの遺構が埋没した後のくぼみを利用したものである。長さは29.50mを測る。壁体溝や土層断面から11回以上の建て替え、あるいは拡張が行われたと想定する。その変遷はおおまかには7段階にわけることができ、北に向かい連続して建て替えが進む様子が確認できる。床面では土壌を4基検出した。土壌1は北端で検出した。出土した炭化材の樹種はコナラ属であった。土壌2は斜面部と床面の境に付され、壁体溝を切り、斜面部下方に向かって掘り込む。断面は袋状を呈する。土壌3・4は南端付近で検出した。



第25図 段状遺構群3 南半 (1/100)



第26図 段状遺構群3 変遷 (1/600)・埋土出土遺物 (1/4・1/2)

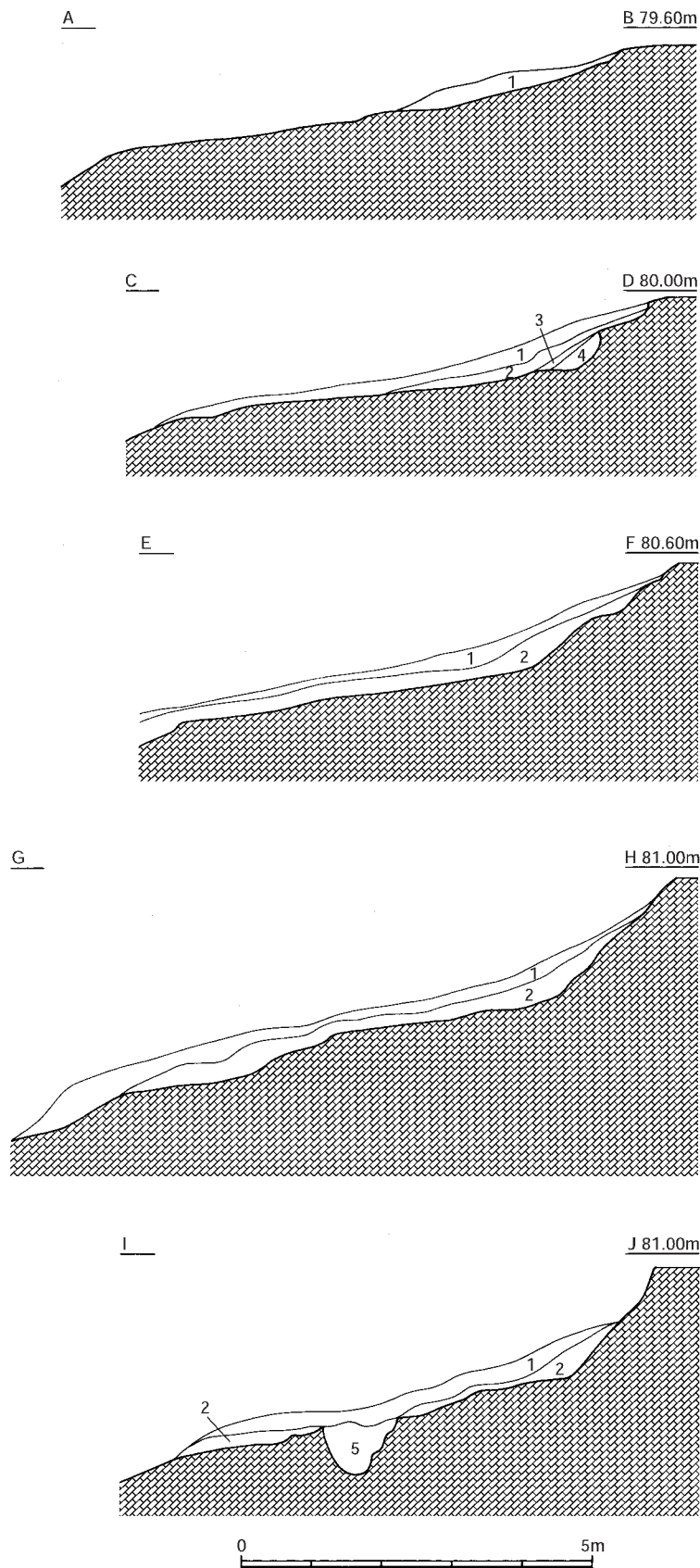


第27図 段状遺構群3 土壌1～4 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

31～38は床面および柱穴出土遺物である。中期後半古層から後期前半に属する。39～60、S5～8は埋土中出土遺物である。中期後半のものもあるが、多くは後期前半から中頃に属する。61・62・66～68、M1は土壌1出土遺物で、後期前半から中頃に属する。64・65は土壌2、63・69は土壌4出土遺物で、前者は後期前半、後者は中期後半に属する。サヌカイト剥片を114.81g確認した。



第28図 段状遺構群4 (1/100)



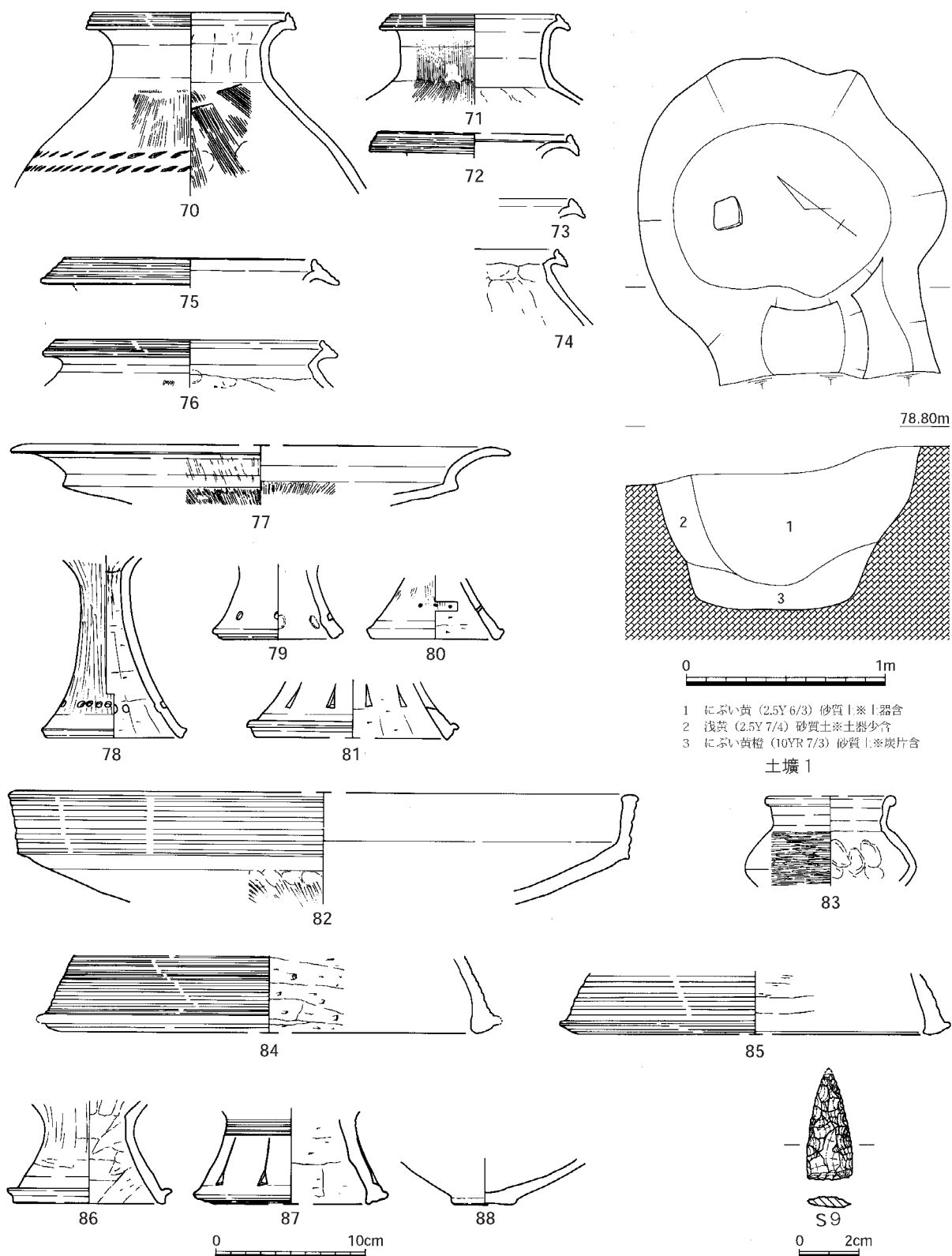
第29図 段状遺構群4 土層断面 (1/100)

段状遺構群4 (第15・28～31図、図版2)

J・Q・R区に位置する。南端は調査対象地外までのびる。尾根上頂部付近に位置するため、見渡しは良好である。長さは検出範囲で23.70m、床面はもっとも残りが良いところで幅7.2mを測る。壁体溝から4回以上の建て替え、あるいは拡張が行われたと想定する。床面では土壌を3基確認した。土壌1は検出面南端付近に位置する。長軸154cm、短軸120cm、深さ82cmを測る。土層観察より2回以上掘り直したものとする。土壌2は検出面中央付近に位置する。長軸175cm、短軸142cm、深さ90cmを測る。掘り直しは一度以上行われたと考える。土壌3は南端に位置し、土壌1と隣接する。長軸229cm、短軸140cm、深さ112cmを測る。いずれも平面不整楕円形を呈する。

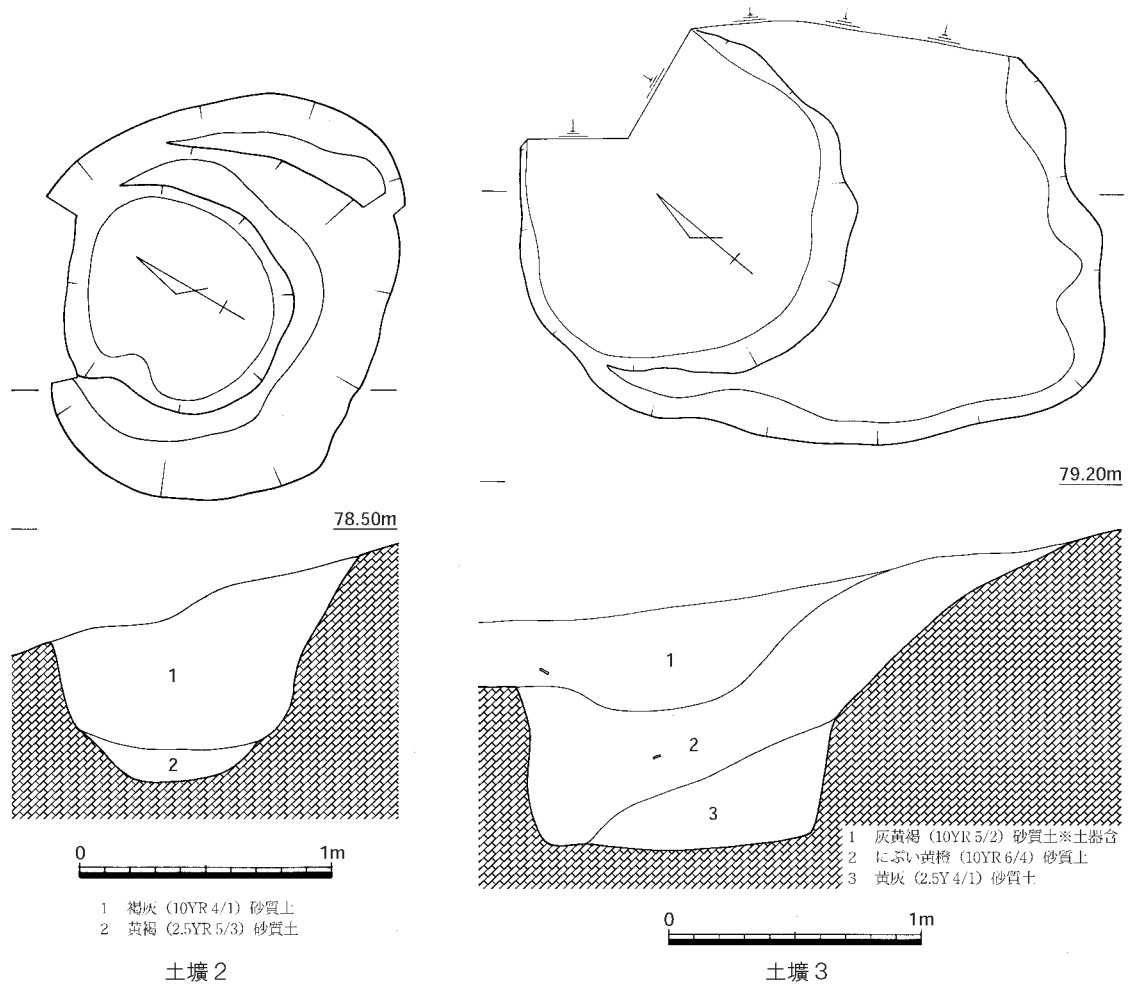
この遺構の床面で土壌墓1を検出し、また北端には堀切が存在する。埋土中からは鉄滓が1.22kg (内磁性残0.02kg) 出土した。古墳時代、中世において平坦面として利用されていたようであり、後世には削平を受けた可能性が高い。

- 1 にぶい黄 (2.5Y 6/3) 砂質土※土器含
- 2 暗灰黄 (2.5Y 5/2) 砂質土
- 3 灰黄 (2.5Y 6/2) 砂質土
- 4 灰オリーブ (5Y 5/2) 砂質土
- 5 土壌3

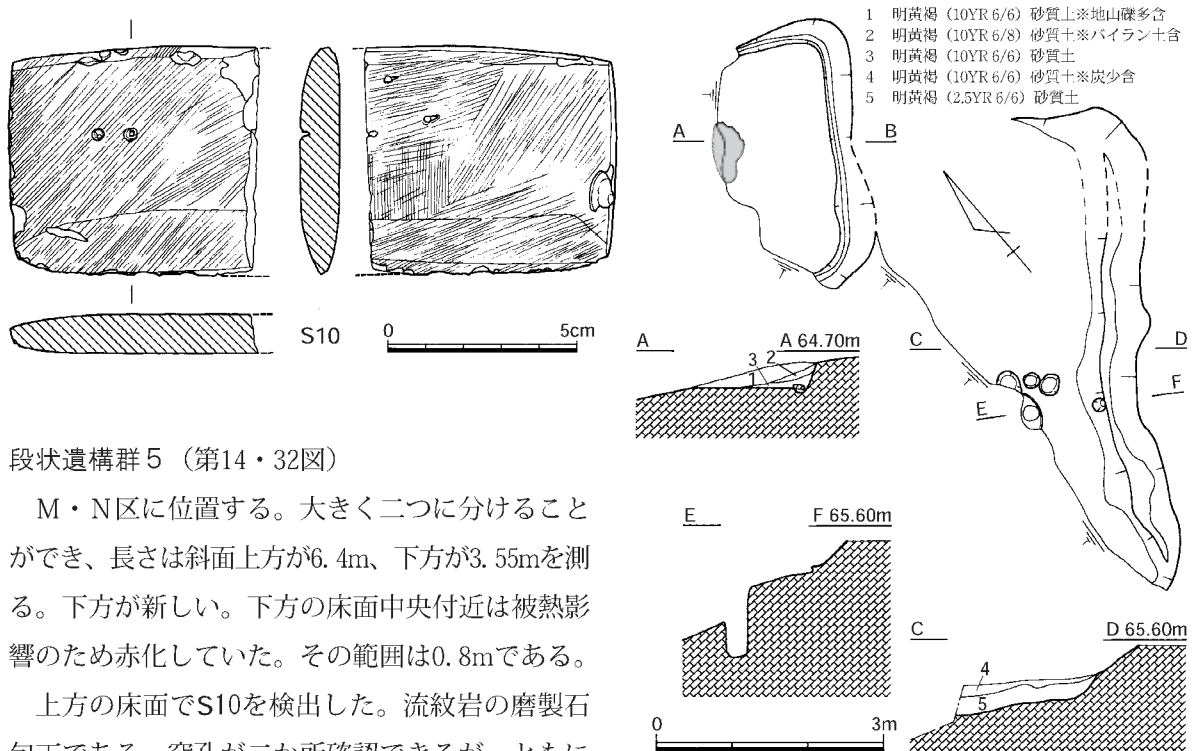


第30図 段状遺構群4 埋土出土遺物 (1/4・1/2)・土層1 (1/30)

71・73は土層1の第3層出土遺物である。中期後半古層に属する。70・72・74～88、S9はいずれも埋土掘削中に出土した遺物である。土器は中期後半から後期前半に属する。78は高杯の脚部である。裾部付近に4つで一単位の刺突を施すが、貫通するものと、未貫通のものが共存する。このほか、サヌカイト剥片を9.55g確認した。



第31図 段状遺構群4 土壌2・3 (1/30)

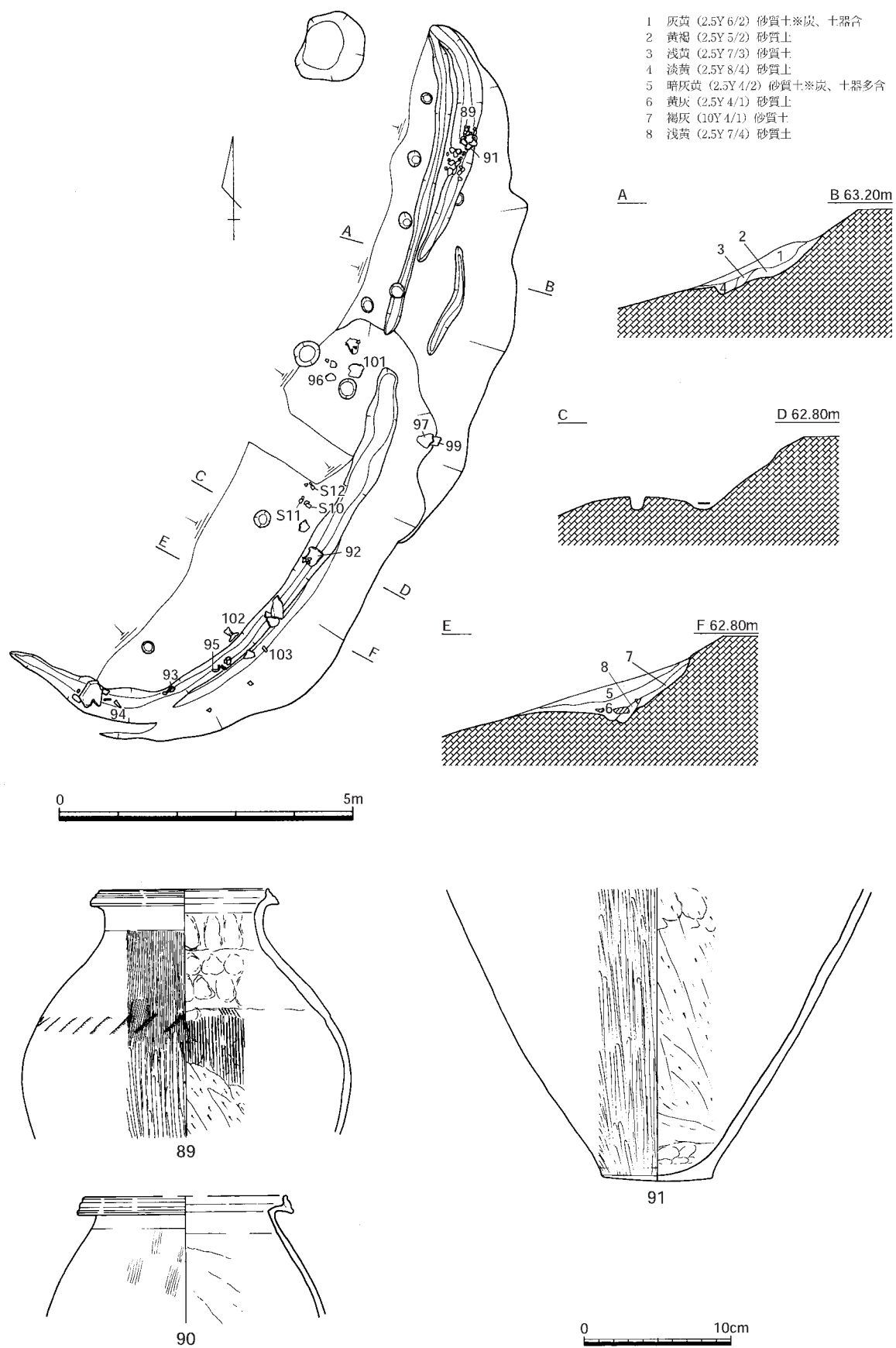


段状遺構群5 (第14・32図)

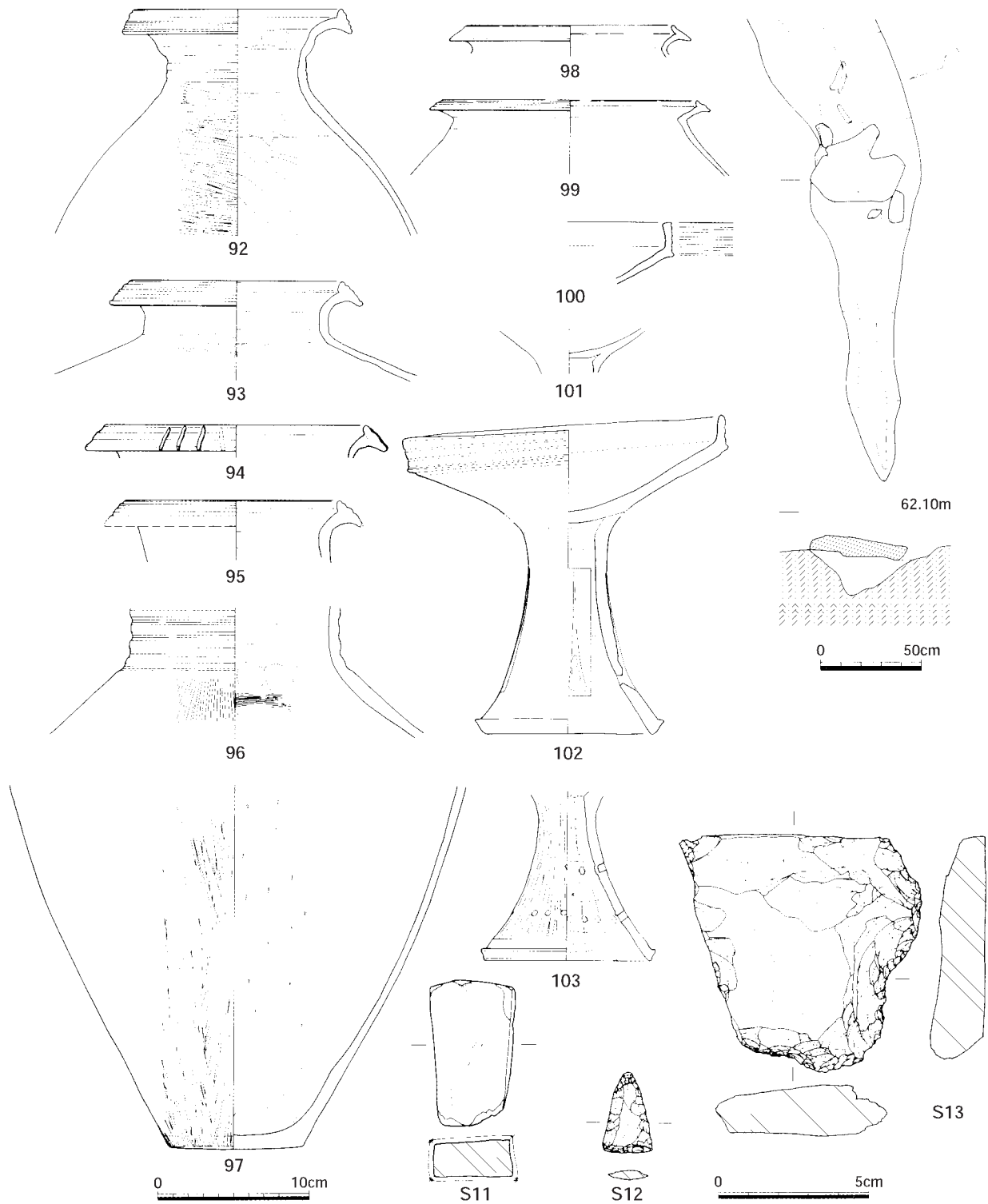
M・N区に位置する。大きく二つに分けることができ、長さは斜面上方が6.4m、下方が3.55mを測る。下方が新しい。下方の床面中央付近は被熱影響のため赤化していた。その範囲は0.8mである。

上方の床面でS10を検出した。流紋岩の磨製石包丁である。穿孔が二か所確認できるが、ともに未貫通である。他に図化できるものはない。

第32図 段状遺構群5 (1/100)・出土遺物 (1/2)



第33図 段状遺構群6 (1/100)・北半床面出土遺物 (1/4)

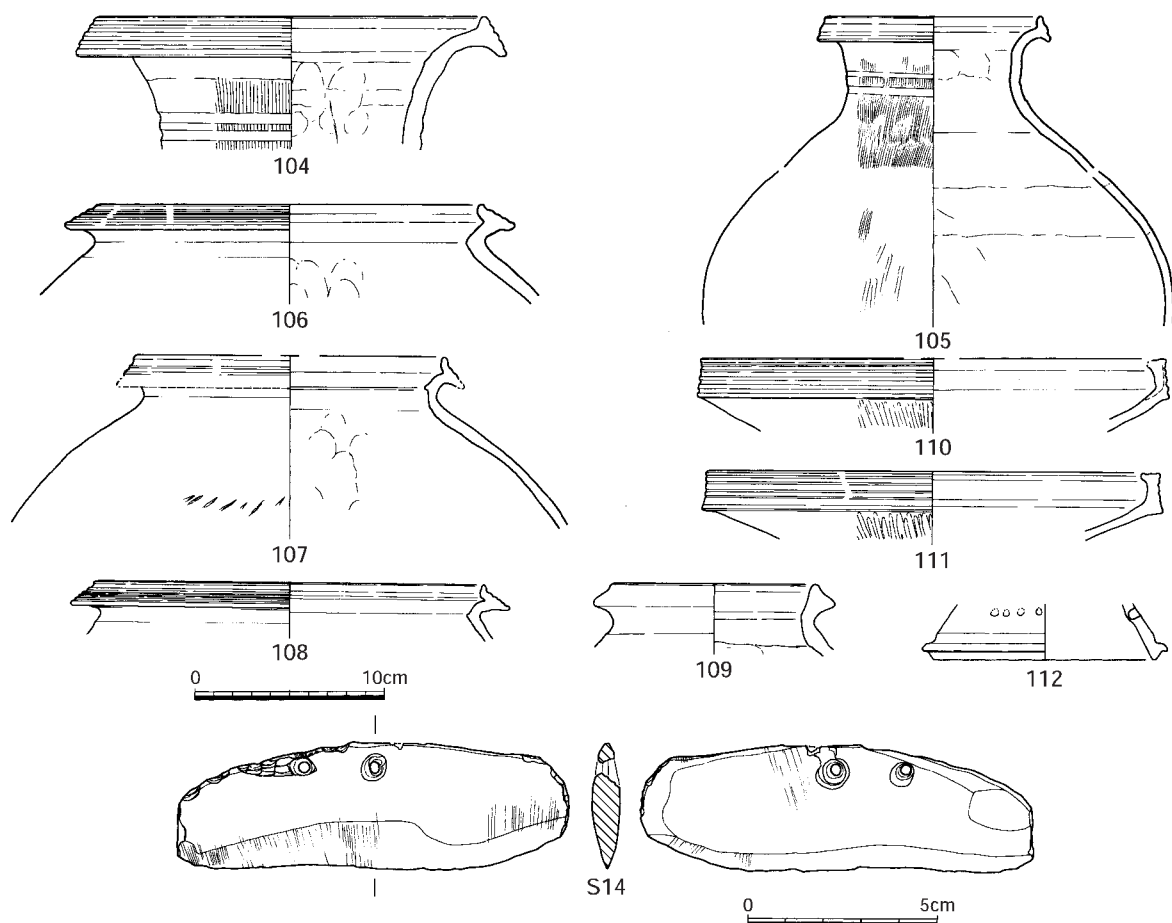


第34図 段状遺構群6 南端壁体溝 (1/30)・南半床面出土遺物 (1/4・1/2)

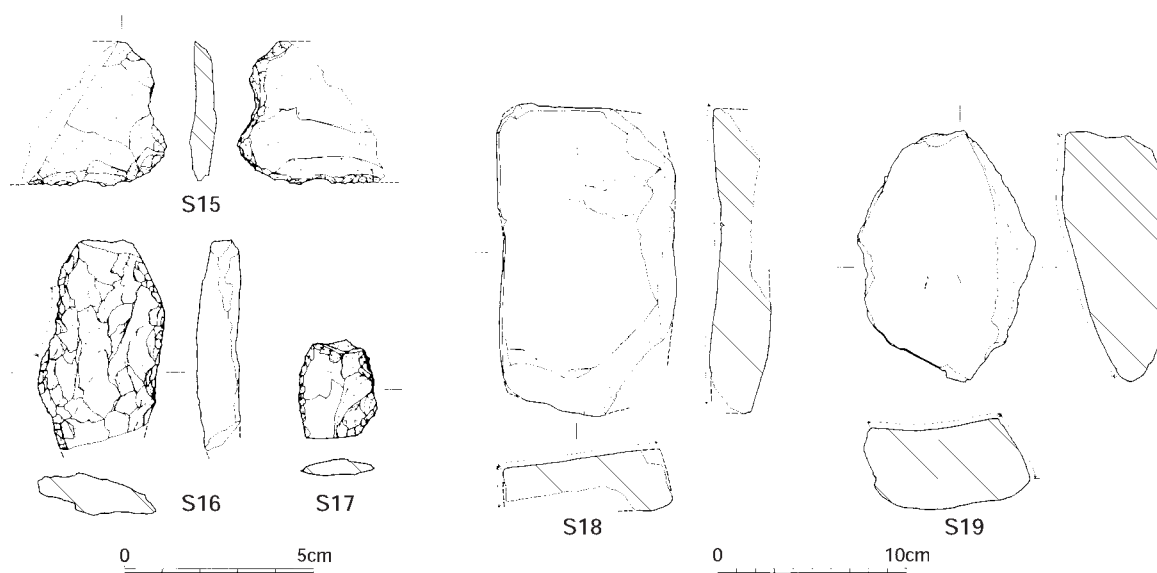
段状遺構群6 (第14・33～35図)

O区に位置する。長さは13.42mを測る。大きくは北と南で二つに分けることができ、北側が古い。北側で2回以上建て替えを行った後に、南側へ約5mずらしている。南側でも1回以上建て替えを行う。南側の南端壁体溝上で平らな石を検出した。これは出入り口の踏み石として使用したものとする。

89～91は北半、92～102、S11～13は南半の床面で検出した遺物である。土器はいずれも中期後半

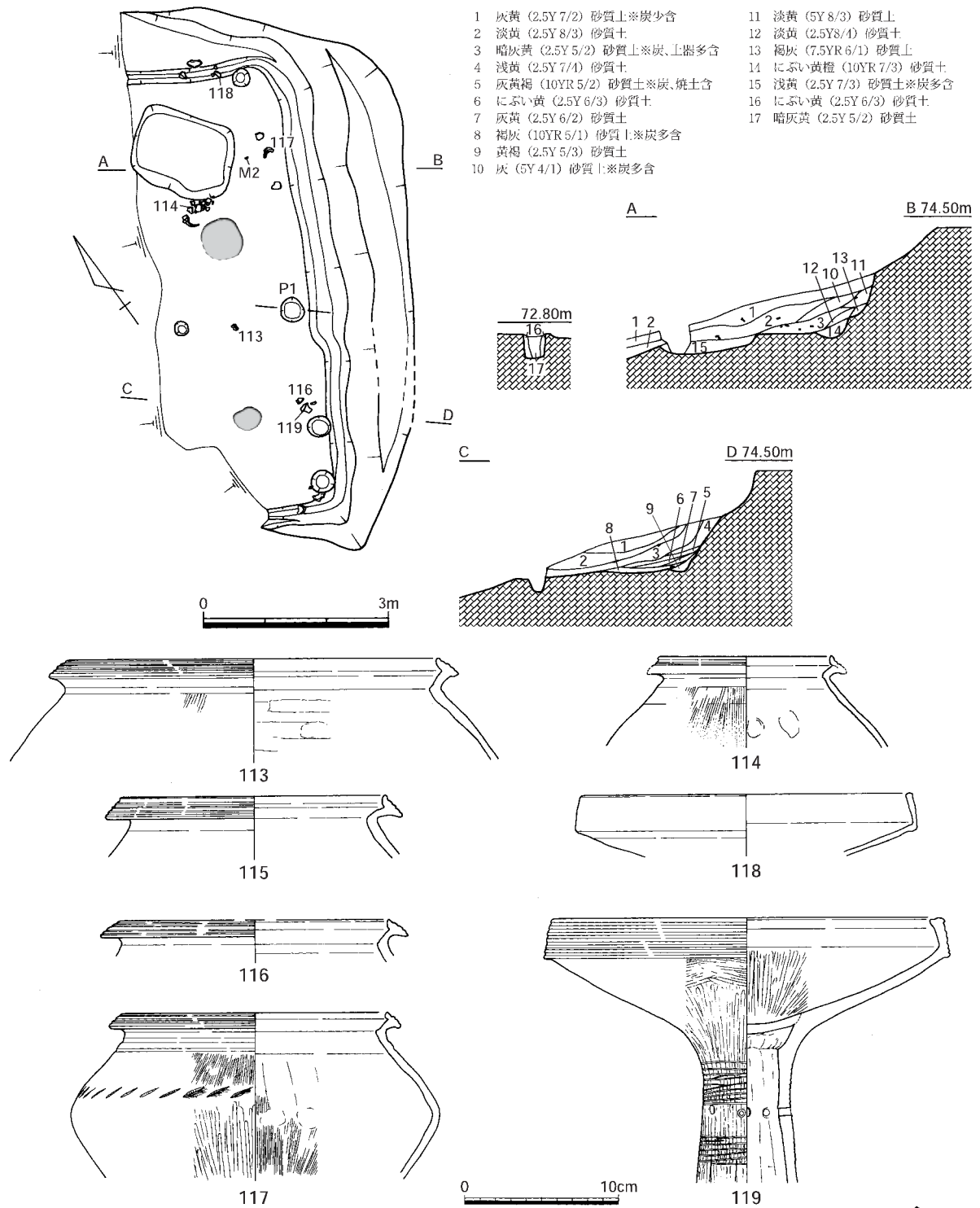


第35図 段状遺構群6 埋土出土遺物 (1/4・1/2)



第36図 段状遺構群7 出土遺物 (1/4・1/2)

の範疇であるが、甕は南半で出土したもののほうが新しい傾向にある。104～112、S14は埋土中出土遺物である。掲載した土器はすべて南半埋土中から出土したものである。中期後半に属するが、109は後期中頃に属する。サヌカイト剥片を2.75g確認した。



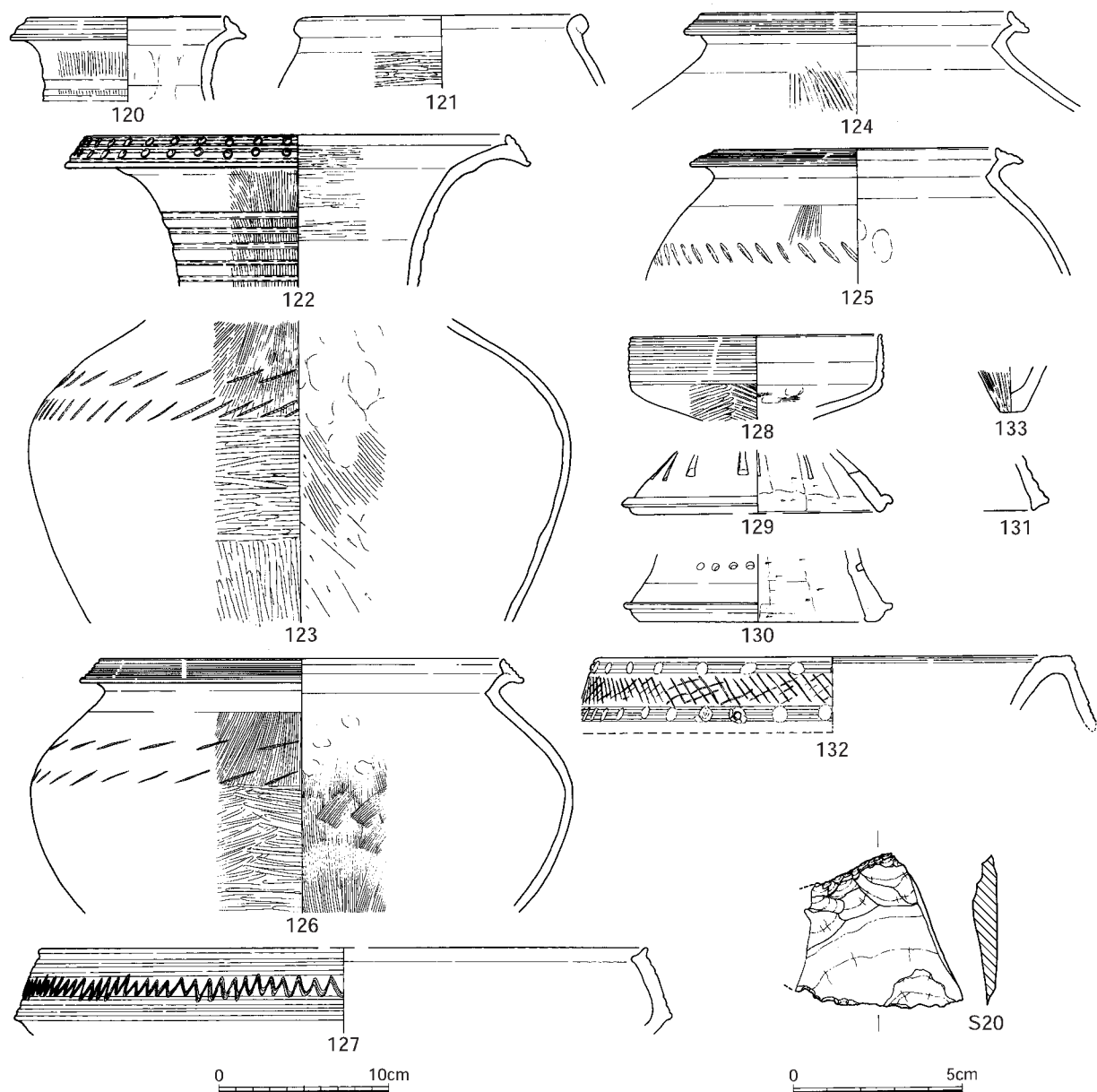
第37図 段状遺構群7 床面出土遺物 (1/4・1/3)

段状遺構群7 (第15・36～38図)

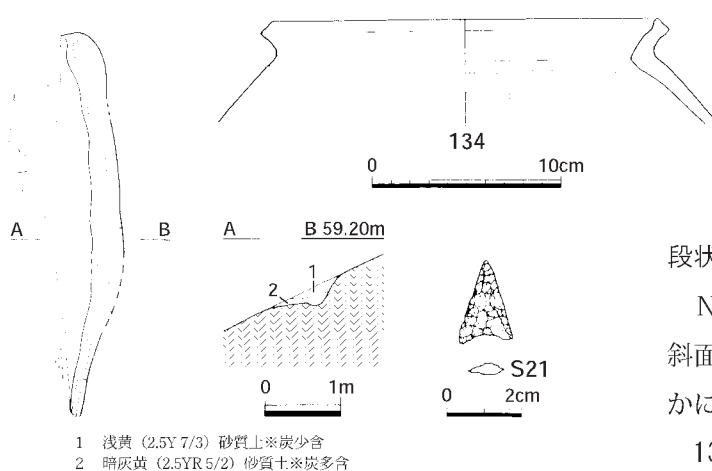
I・Q区に位置する。長さは8.84mを測る。壁体溝や土層断面から1回以上の建て替えが行われたと想定する。床面では被熱のため赤化した場所を2か所検出した。埋土下層には炭を多く含む。

113～119、M2は床面で検出した遺物である。M2は鉄鍬破損品と考える。土器は中期後半に属する。120～132、S20は埋土中出土遺物である。土器は床面と同様で中期後半に属するが、新しい傾向がう





第38図 段状遺構群7 埋土出土遺物 (1/4・1/2)



第39図 段状遺構群8(1/100)・出土遺物(1/4・1/2)

かがえるものが多い。130台付鉢脚部は4つ1単位の刺突を施すが、いずれも未貫通であり、他より新しい可能性がある。サヌカイト剥片21.16g、鉄滓0.01kg(有磁性)出土した。

段状遺構群8(第14・39図)

N区に位置する。長さは5.06mを測る。急斜面に位置するため床面の多くは流失し、僅かに壁体溝が残るのみである。

134、S21は埋土掘削中に出土した。土器は中期後半のなかでも古層に属する。(重根)

2 掘立柱建物

掘立柱建物 1 (第15・40図、図版3)

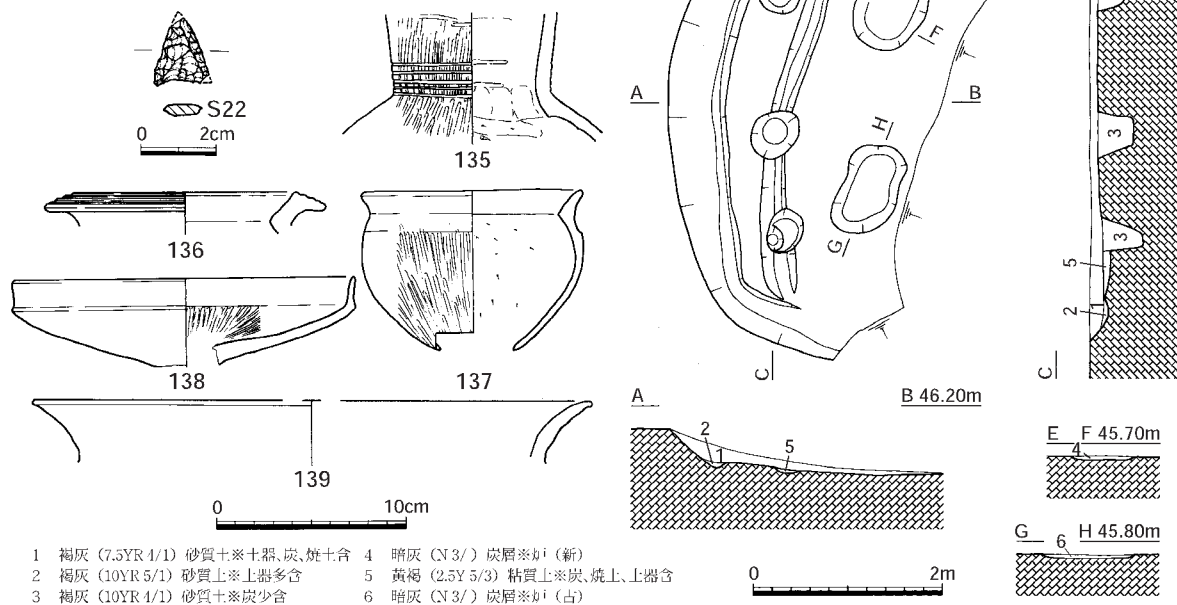
V区に位置する。桁行3間、梁間1間の長方形を呈する建物である。面積は14.32㎡を測る。尾根頂部に位置するため見渡しは良好である。北端の柱穴を検出できなかったが、これは、後世に削平を受けたものとする。埋土中から弥生土器細片が出土したが、図化できるものはない。そのため時期の特定はできないが、段状遺構群と同時期のものとする。(重根)

3 竪穴住居

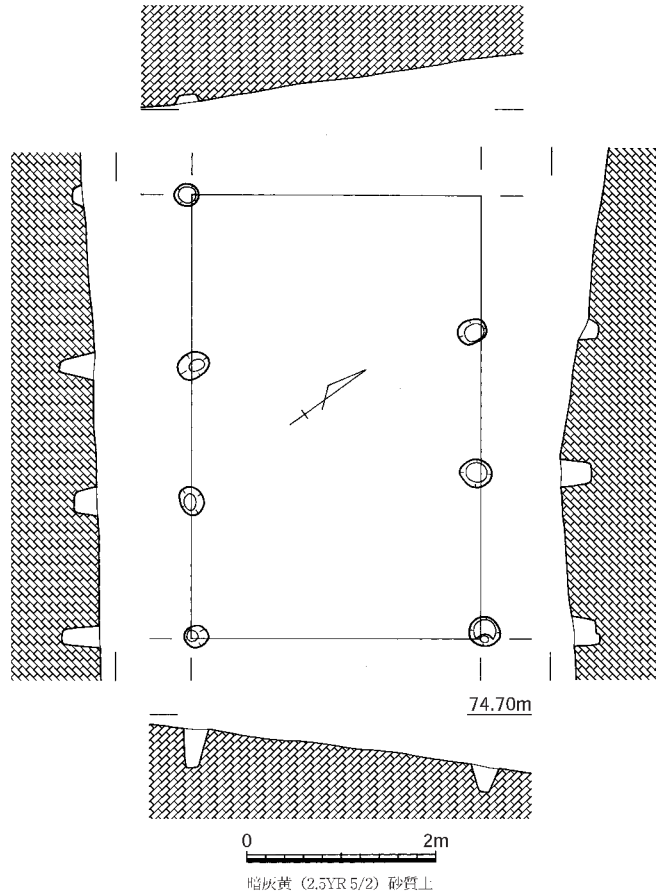
竪穴住居 1 (第14・41図)

K区に位置する。尾根先端で検出した。床面は半分以上流失するが、平面形は隅丸方形を呈すると想定でき、一辺は5.1mを測る。拡張が一度行われており、炉を2か所検出した。検出時の状態から6層が古段階にとまなう炉と考える。炉出土炭の樹種はコナラ属である。

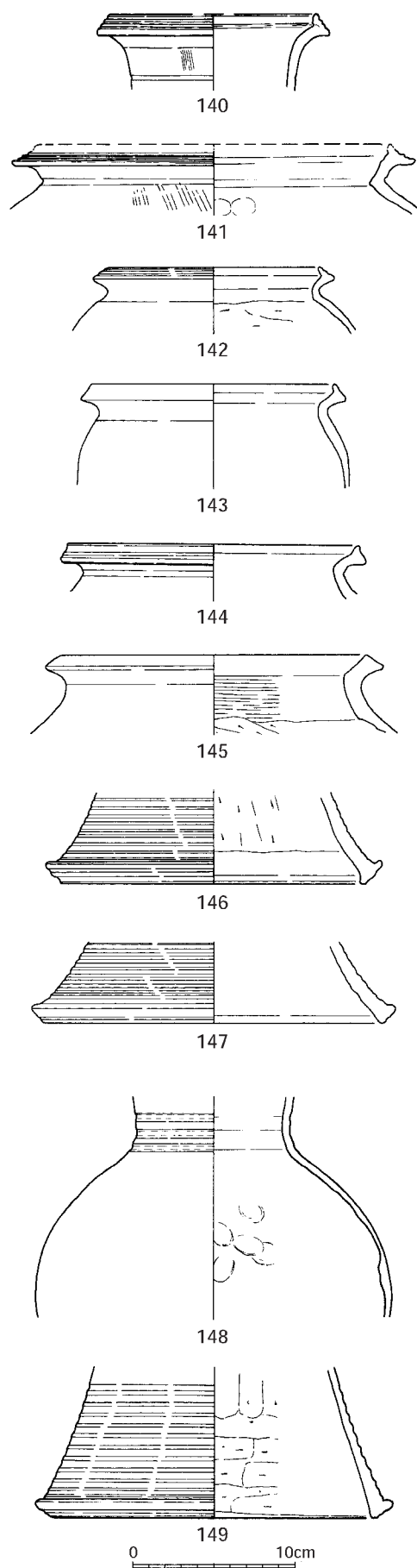
135・138は埋土中、137はP1、136は新段階炉、139は古段階炉で検出した。136に古い傾向が残るが、他は後期中頃に属する。



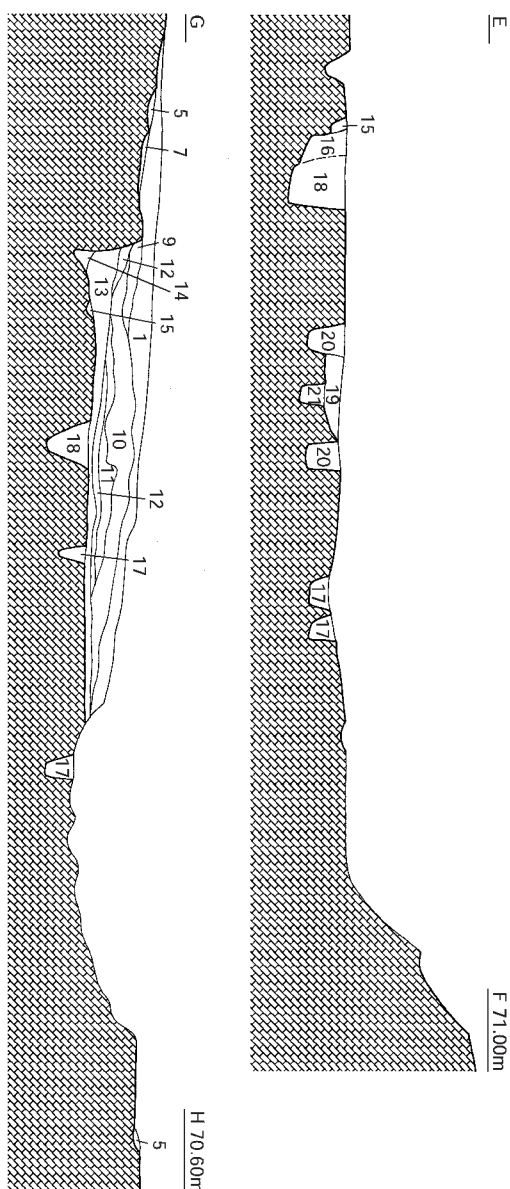
第41図 竪穴住居 1 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2)



第40図 掘立柱建物 1 (1/80)



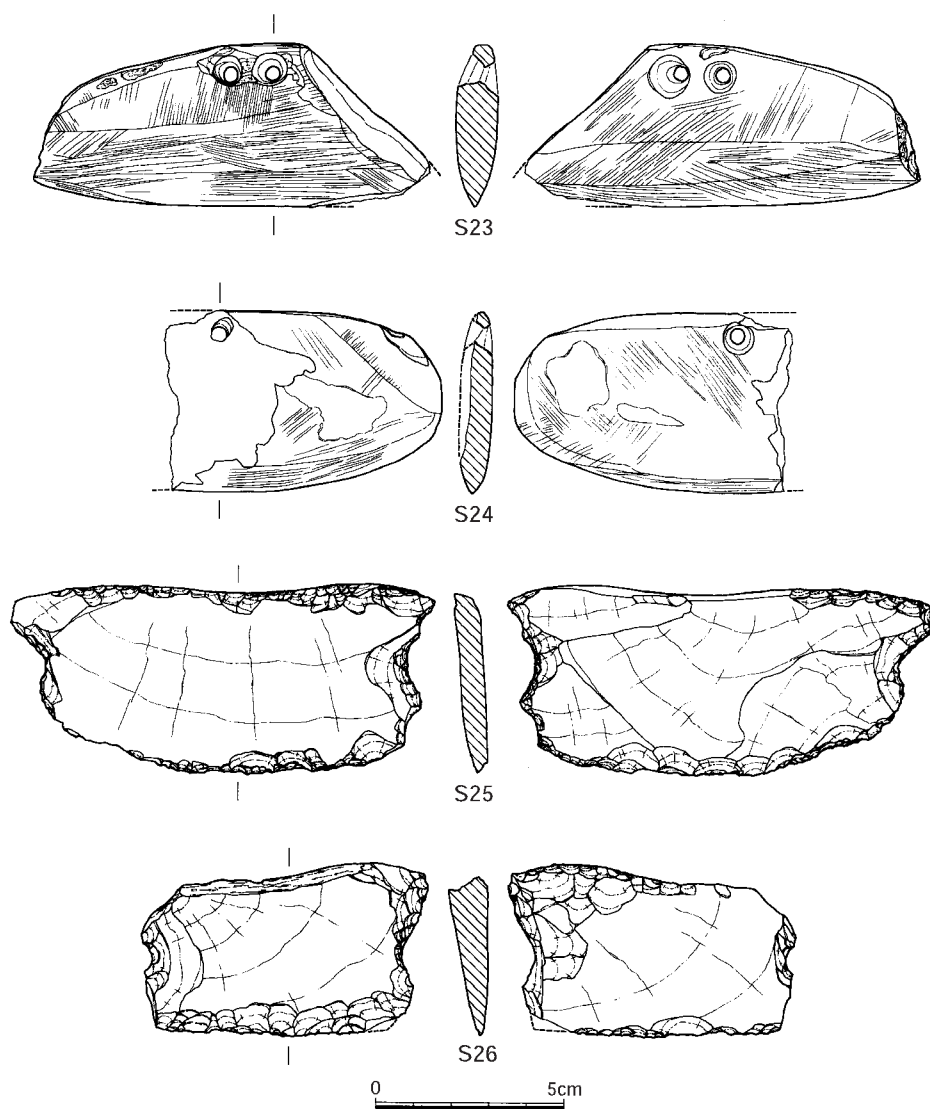
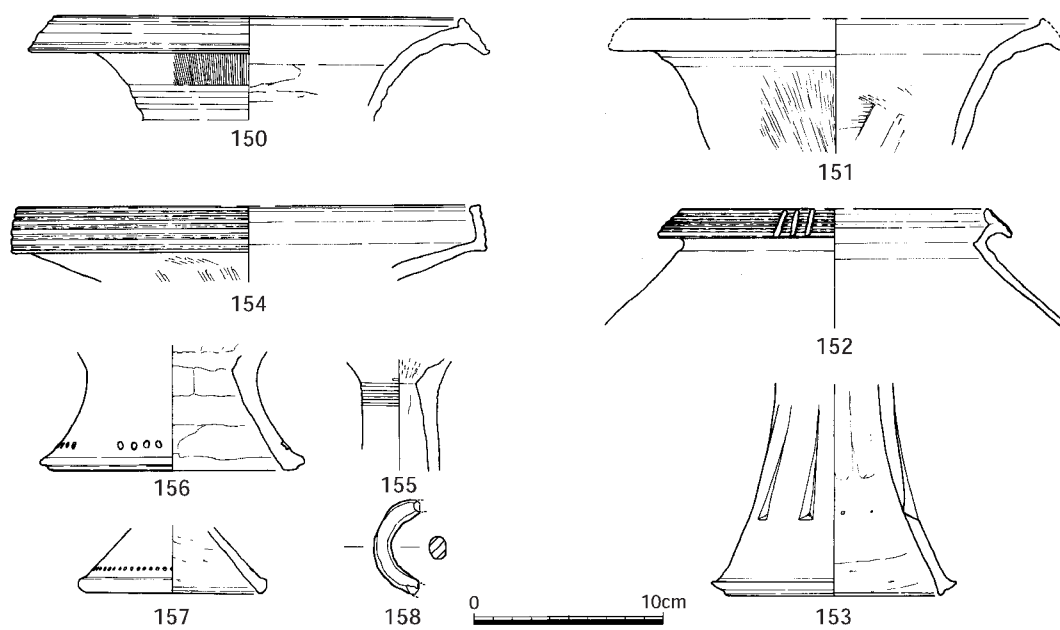
第42図 竪穴住居2 床面出土遺物 (1/4)



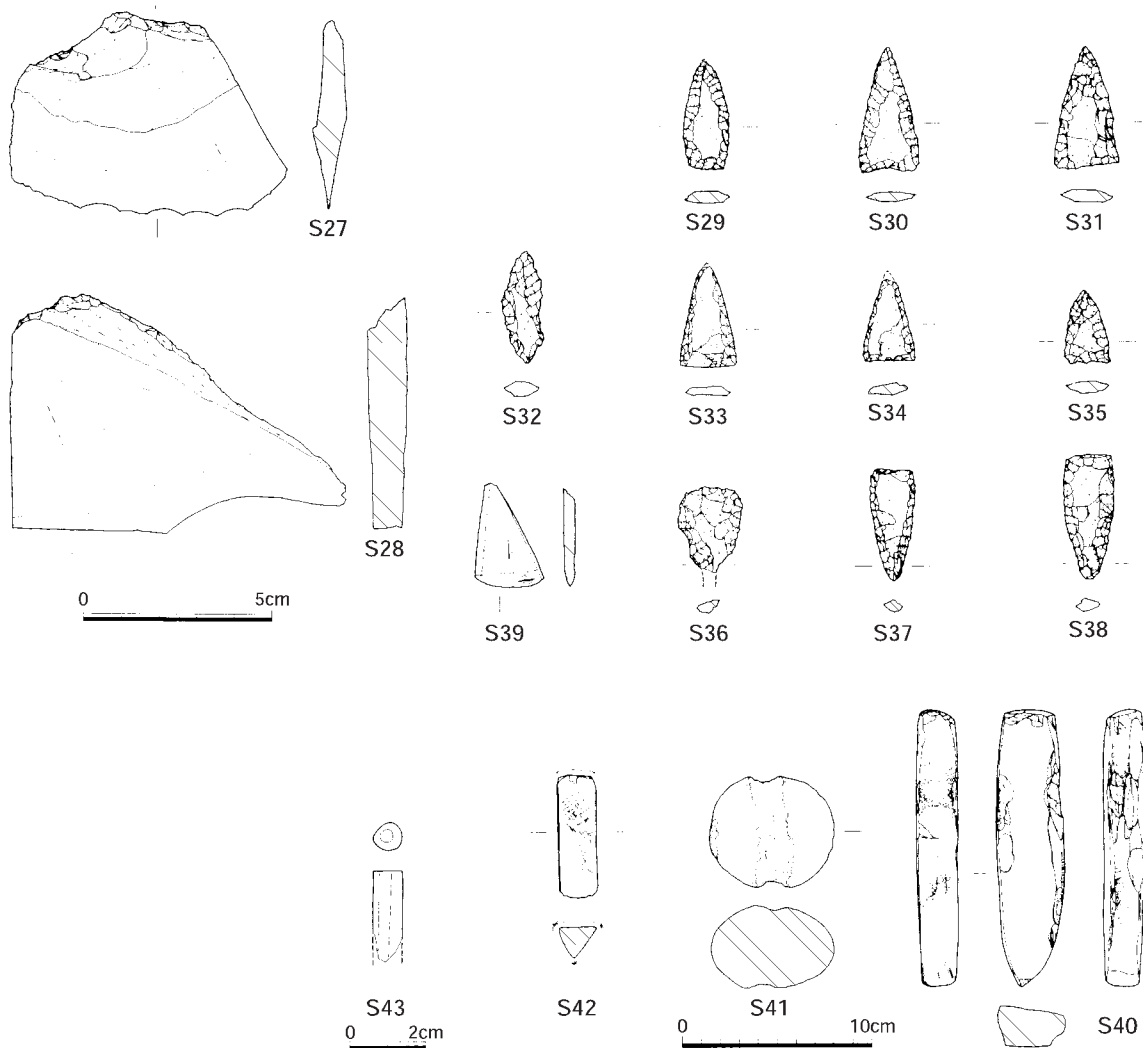
竪穴住居2 (第15・42～45図、図版3)

P区に位置する。丘陵谷部の傾斜が緩やかな地点で検出した。3号窯築窯時に大きく削平を受ける。壁体溝と土層断面から4回以上の建て替えが行われたと想定でき、変遷はつぎのように考える。最初は長さ11.6m程の段状遺構であり、建て替えを一度行う。のちにその平坦面を利用して竪穴住居として建て直し、さらに二度拡張にともなう建て替えを行う。竪穴住居の平面形は円形を呈し、直径7.4mを測る。柱穴は床面中央の土壇両横に2本と壁体溝沿いに6本配置していたと考える。中央不整楕円形の土壇直北30cmのところが被熱のため赤化していた。





第44図 竪穴住居2 出土遺物 (1/4・1/2)

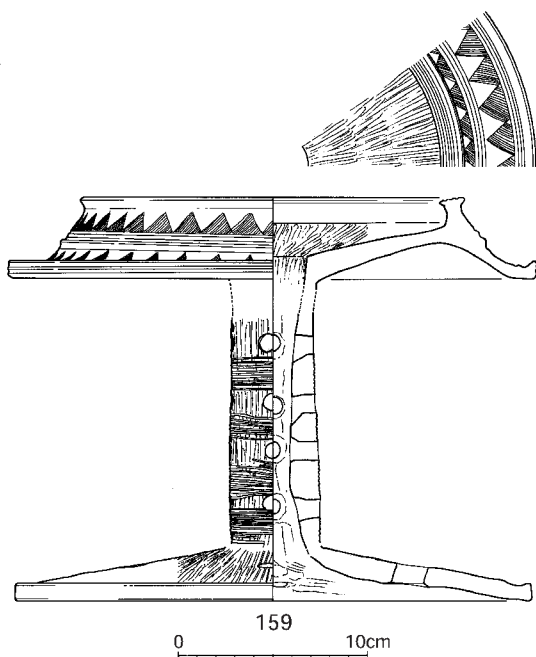


第45図 竪穴住居2 出土遺物 (1/4・1/2・1/1)

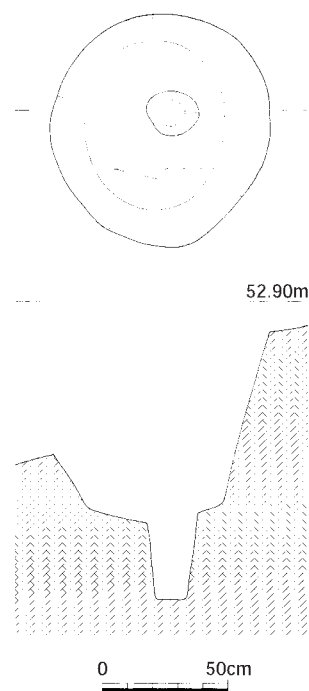
148・149、S25・26は変遷第1段階の段状遺構床面で検出した。土器は中期後半に属する。140は変遷4の壁体溝、141～147、S24・28・29・34・35・37～43は最終段階の床面あるいは壁体溝や柱穴で確認した。最終床面で検出した土器の中には中期後半から後期前半に属するものもあるが、後期中頃のものが多い。そのため、この遺構の最終使用段階は後期中頃になると考える。150～158、S23・27・30～33・36は埋土中出土遺物である。土器は中期後半から後期前半のものがある。158は弧を描く棒状の土製品である。両端が欠損するため、全体の形態は不明である。

この竪穴住居は他の同時代の遺構と比較して石器の出土量が多く、種類も豊富である。石材にはサヌカイトを利用したものが多いが、磨製石包丁 (S23・24) と砥石 (S42) には流紋岩を、柱状片刃石斧 (S40) と石錘 (S41) には玢岩^{ひんがん}を使用していた。S23は破損部に摩滅が観察できる。一部が欠損した後も継続して利用したようだ。S37・38は先端部に使用痕が確認できる。S40も先端部が使用のため摩滅していた。S39は磨製石包丁の破損品を加工斧に転用したものとする。S42は全面を砥面として利用する。S43は緑色凝灰岩製の管玉であるが、風化が著しい。このほかにサヌカイト剥片を53.12g確認した。剥片は最終段階の床面に広く散布していたが、特に被熱面の周辺に多かった。(重根)

4 土壇



第46図 土壇1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第47図 土壇2 (1/30)

土壇1 (第14・46図)

F区に位置する。段状遺構群3が埋没した後の斜面部を利用したものである。北側が大きく削平を受けており、平面形は不明である。残存部分の最大長は210cmを測る。

拳大から人頭大の石とともに装飾器台(159)が破損した状態で出土した。筒部には円形スカシとヘラガキ沈線文を交互に施す。後期中頃に属する。

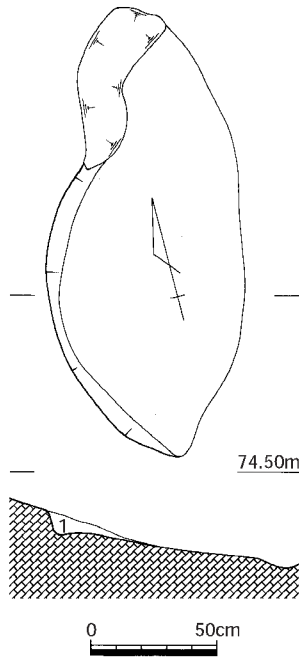
土壇2 (第14・47図)

L区に位置する。平面形は直径90cm程の円形を呈する。底面には杭状の痕跡が確認でき、狩猟のための落とし穴と考え

る。出土遺物がないため特定できないが、時期は縄文時代に属する可能性がある。

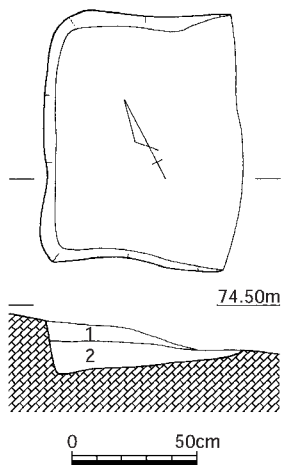
土壇3 (第15・48図)

V区に位置する。平面形は不整形である。長軸は171cmを測る。埋土中からは弥生土器と考える土器細片が出土したが、図化できるものはない。他の弥生時代の遺構と同時期と考える。



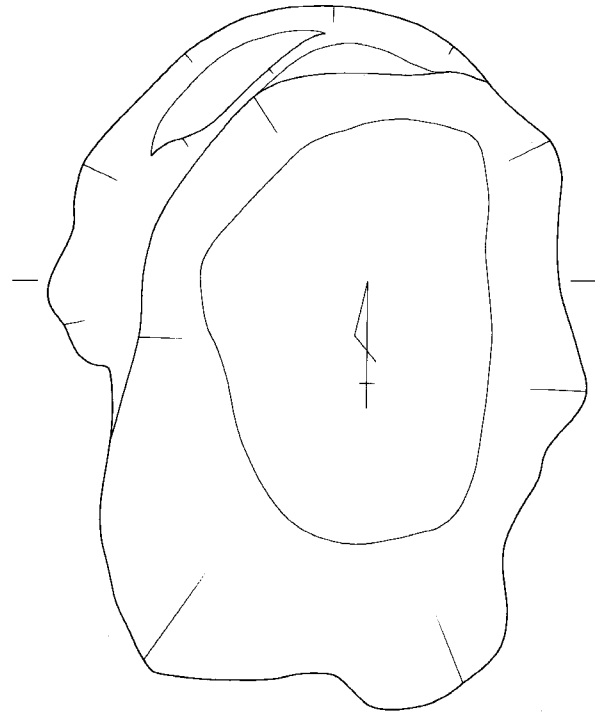
1 明黄褐 (10YR 6/6) 砂質土

土壌3

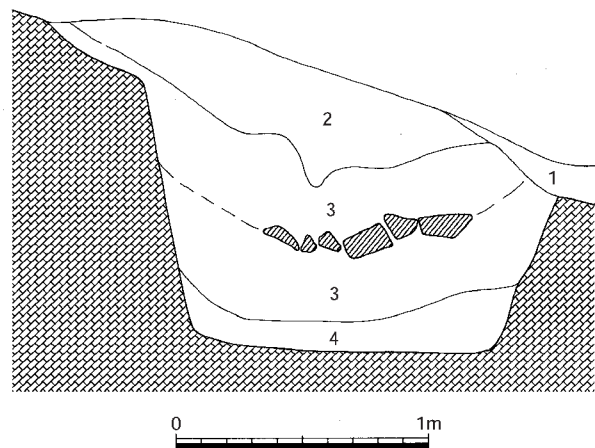


1 略灰黄 (2.5Y 5/2) 砂質土
2 浅黄 (2.5Y 7/3) 砂質土

土壌4



70.10m



1 にぶい黄褐 (10YR 5/4) 砂質土
2 にぶい黄褐 (10YR 6/4) 砂質土※炭含
3 明黄褐 (10YR 6/6) 砂質土※砂質と粘質の互層
4 明黄褐 (2.5YR 7/6) 砂質土

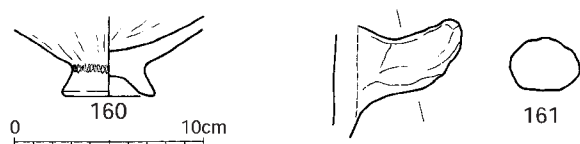
土壌5

土壌4 (第15・48図)

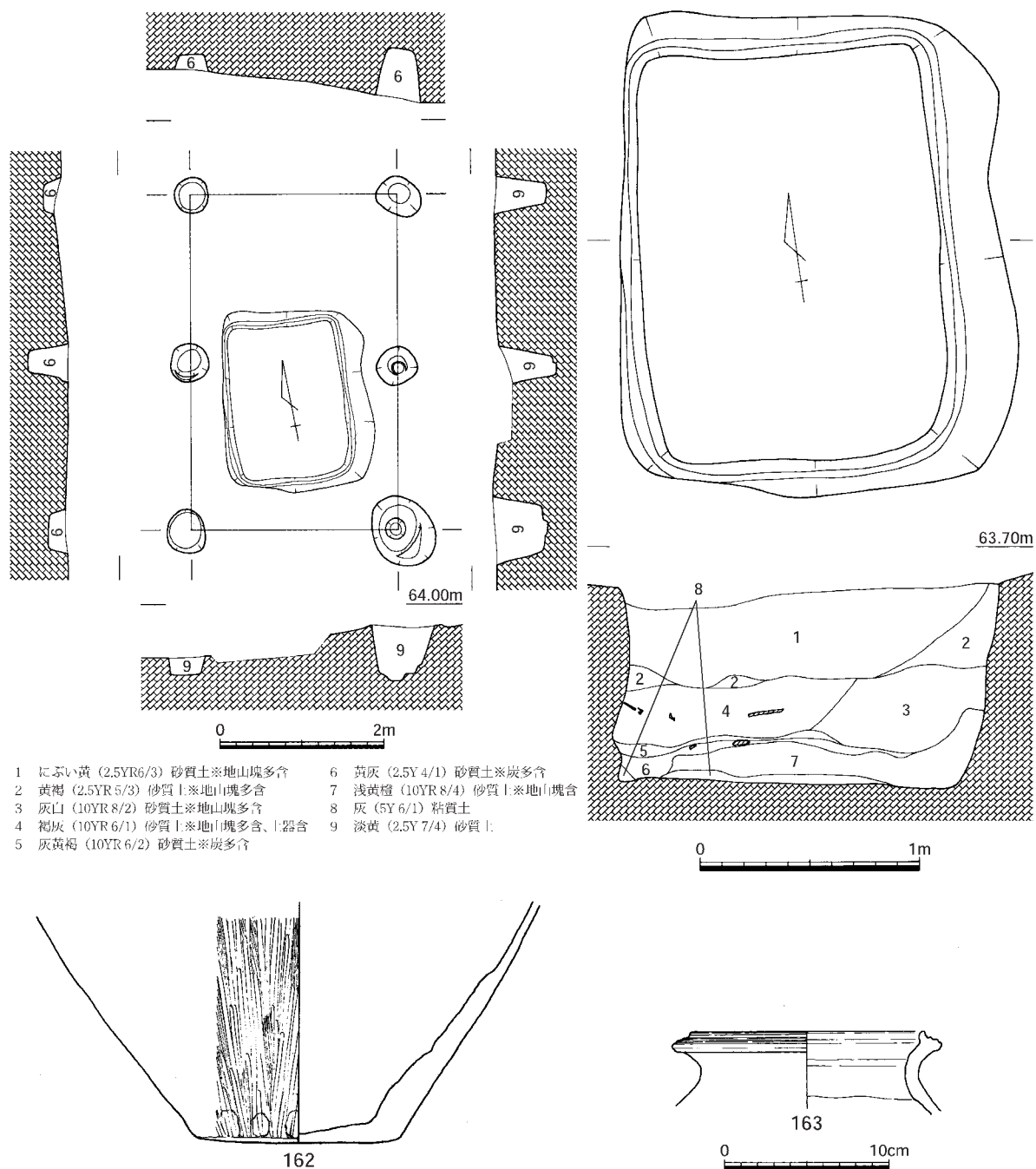
V区に位置する。平面長方形で、長軸は100cmを測る。弥生土器片が出土した。他の弥生時代の遺構と同時期と考える。(重根)

土壌5 (第14・48図)

T区の北東側で検出した大形の土壌で、標高70mの尾根上に位置する。長軸250cm、幅156cmの不整楕円形を呈し、壁面は深さ133cmにある平坦な底面から急な傾斜をもって立ち上がる。遺物は2点しか出土していないが、台付鉢160から弥生時代後期後半と推定される。(亀山)



第48図 土壌3～5 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第49図 土壌6 (1/80・1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌6 (第15・49図)

B・I区に位置する。段状遺構群1南端に隣接し、丘陵西向き斜面でやや平坦となる地点で検出した。平面形は長方形を呈する。長軸219cm、短軸166cm、深さ93cmを測る。埋土第5・6層中には炭を多く含む。底面周囲は低く掘り込み、浅い溝状になる。

この土壌には、桁行2間、梁間1間の平面長方形を呈する掘立柱建物がともなう。桁行の総長は408cmで、柱間の距離は204cmを測る。梁間は339cmを測る。

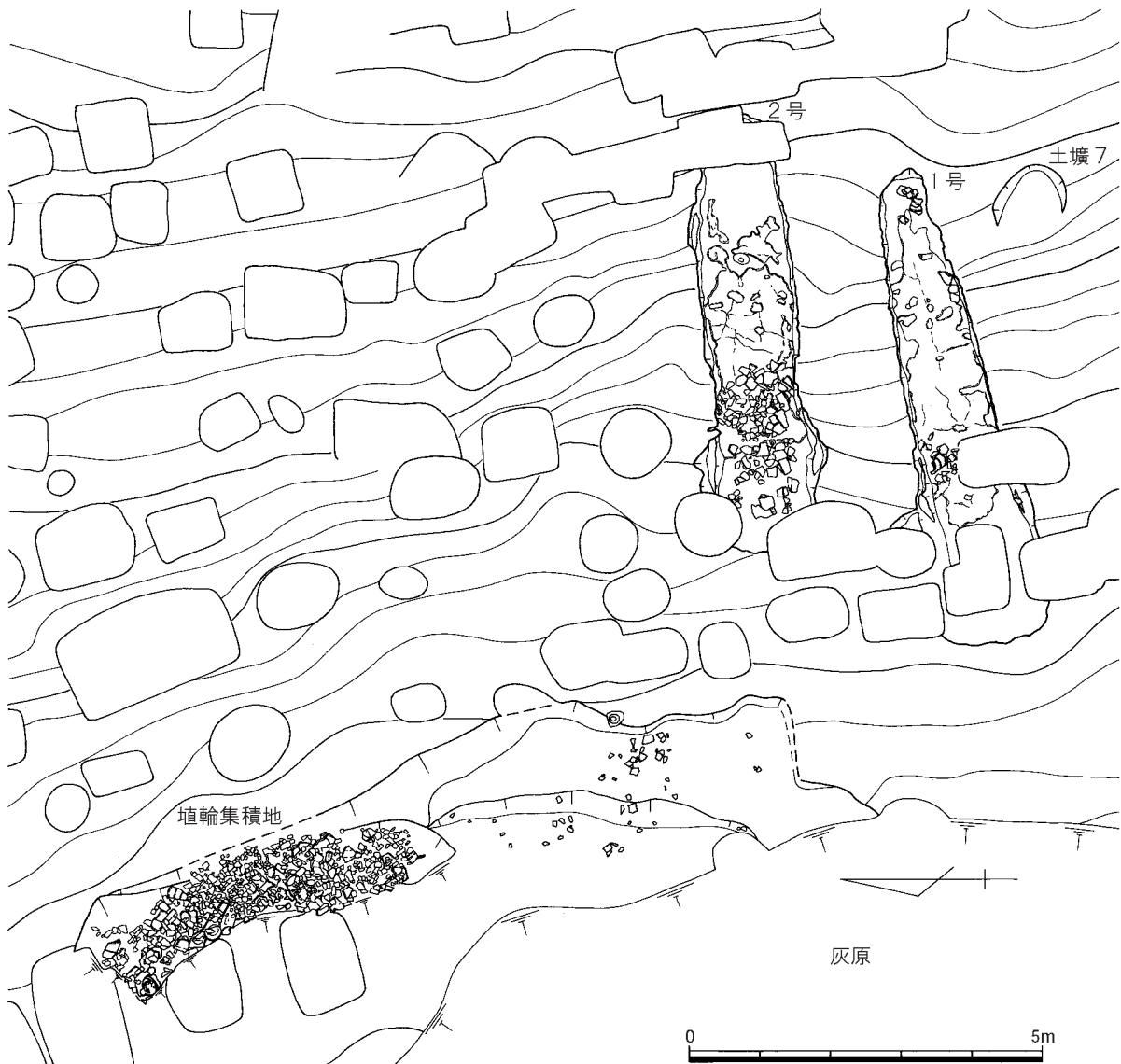
162・163は第5層出土遺物である。162の内面は剥離が著しく、調整は不明であるが、外面にはミガキの痕跡が明瞭に残る。163は風化のため表面剥離が著しい。後期前半に属すると考える。(重根)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

1 窯

丘陵の西向き斜面、やや谷状となる地点で窯跡を2基検出した。南側を1号窯、北側を2号窯と呼称する。1号窯では円筒埴輪を、2号窯では形象埴輪や陶棺等をそれぞれの窯体内で確認した。

窯跡下方は近世に掘削を受けており、窯操業時と地形は大きく異なる。しかしながら、地点によっては炭とともに多量の埴輪を含む層が残存することから、当時は灰原が存在したと想定する。また、2号窯の北西6mの地点でも、破損した埴輪が長さ5mの範囲に集積した状態で見つかった。ここは埴輪集積地と呼称する。製品の選別等を行い、不要品を廃棄した場所と考える。



第50図 1・2号窯と関連遺構 (1/100)

円筒埴輪の分類（第51図、図版26～30）

個別の説明を行う前に、円筒埴輪の分類を明記しておく。調査で得た資料で、全体像が想定できる資料は6点である。6点の中には段数が5段のものと6段のものとがあり、5段のものは2段目と4段目に円孔を穿つ。円孔は各段2個をそれぞれ180°の位置に割り付け、他の段の円孔と90°違って配置する。それに対し、6段のものは3段目と5段目に同様に円孔を穿つ。ここで、検出した円筒埴輪の段数は全て5段か6段であり、円孔の位置も規則正しいということを前提とすると、基底部から2段目まで残存するものは分類が可能となる。すなわち、2段目に円孔が確認できる資料は5段、無い資料は6段となる。まず、この2種類に区分するが、その2分類の中にも差異が明らかな資料が混在する。よって、さらに区分を行うことにする。このとき、主にハケ調整痕を分類基準とした。

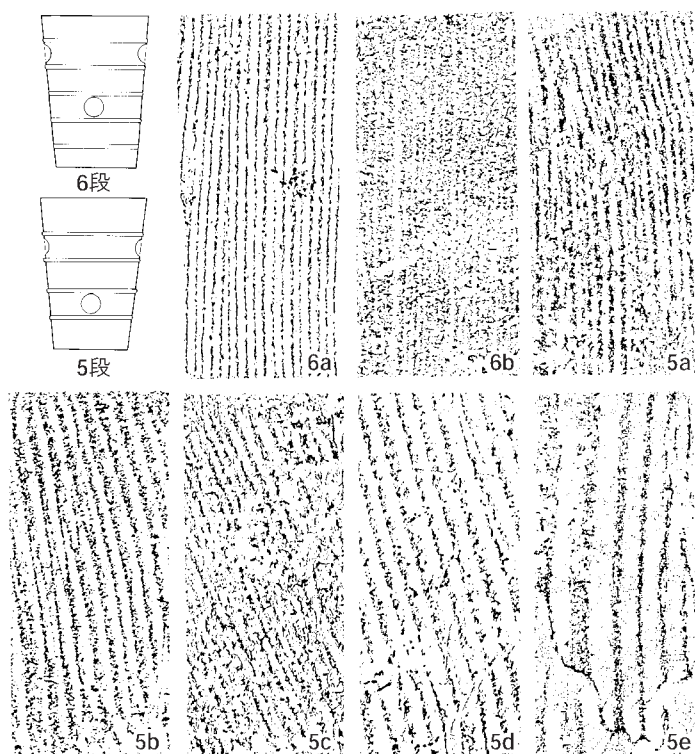
6段の資料は2種類に区分する。一つ目は、ハケが極めて細く、縦方向に規則正しく直線的であり、突帯幅が5mm程度のものである。この分類にあてはまらない資料の突帯幅は全て1cm程度である。基底部調整は行わない。二つ目は、ハケが細く、器高が56.8cmを測り、他より高いものである。基底部調整を行う。5段の資料は5種類に区分する。一つ目は、ハケが極めて細いものである。6段の一つ目より線は細かいが、規則正しく直線的ではない。基底部調整を行う。全体の調整は粗雑であり、突帯の付け方も雑な印象を受ける。最下段突帯に押圧痕が観察できる資料も存在する。二つ目は、ハケが細く、器高が47.3cmで他と比較して低いものである。一つ目もこれと同様の高さで想定するが、器高を復元できる資料が確認できなかった。基底部調整を行う。硬質な資料が多い。この資料群は、ハケを基にさらに二種類の区分をおこなうことも可能と考える。しかしながら、全体の形態、調整方法などが類似すると判断したため、ここでは細分しない。三つ目は、ハケが細く、器高が53～54cm程度のものである。ハケは二つ目より細く、6段二つ目より太いが、後者との区別が困難な資料も多く存在した。軟質な資料が多い。基底部調整を行う。四つ目は、ハケが太いものである。基底部調整を行う

ものも行わないものがあり、ハケもやや異なるものが存在するが、区分はできなかった。五つ目は、ハケが極めて荒く、調整痕が粗雑なものである。焼成も悪く、他より軽い印象を受ける。基底部調整を行い、最下段突帯に押圧痕が観察できる資料も存在する。

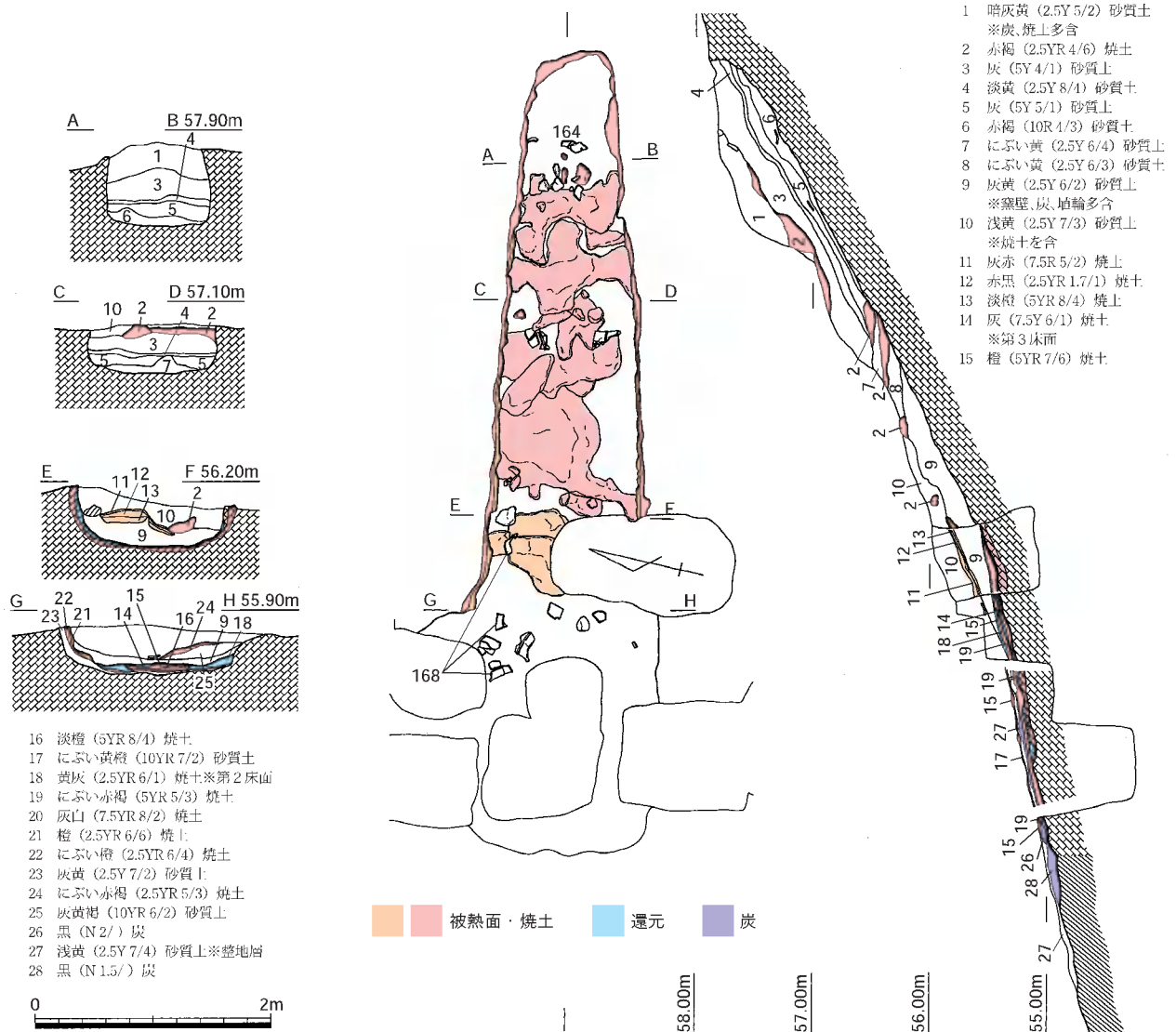
まとめると、つぎのとおりである。

- 6段でハケが極めて細い→ 6a
- 6段でハケが細く高い → 6b
- 5段でハケが極めて細い→ 5a
- 5段でハケが細く低い → 5b
- 5段でハケが細い → 5c
- 5段でハケが太い → 5d
- 5段でハケが極めて荒い→ 5e

この区分をもとに、ハケ調整痕や突帯が残る破片の分類を行った。

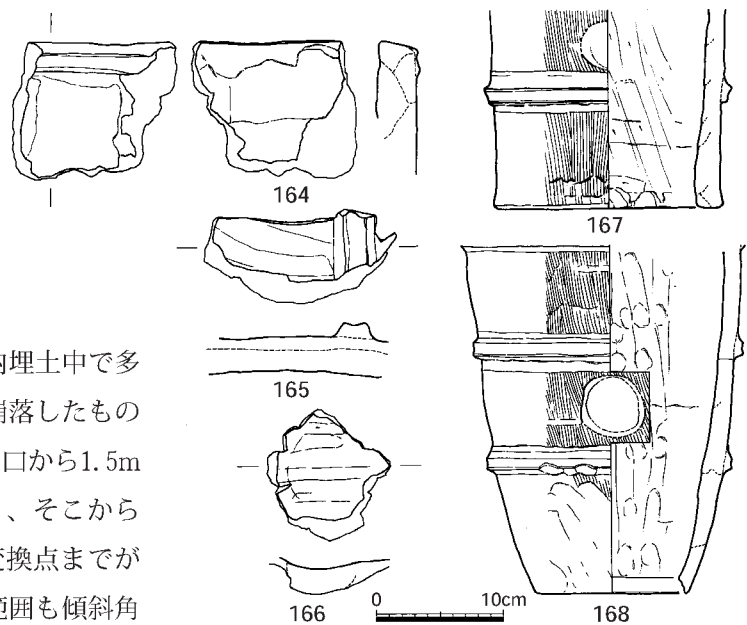


第51図 円筒埴輪分類凡例（拓影原寸）

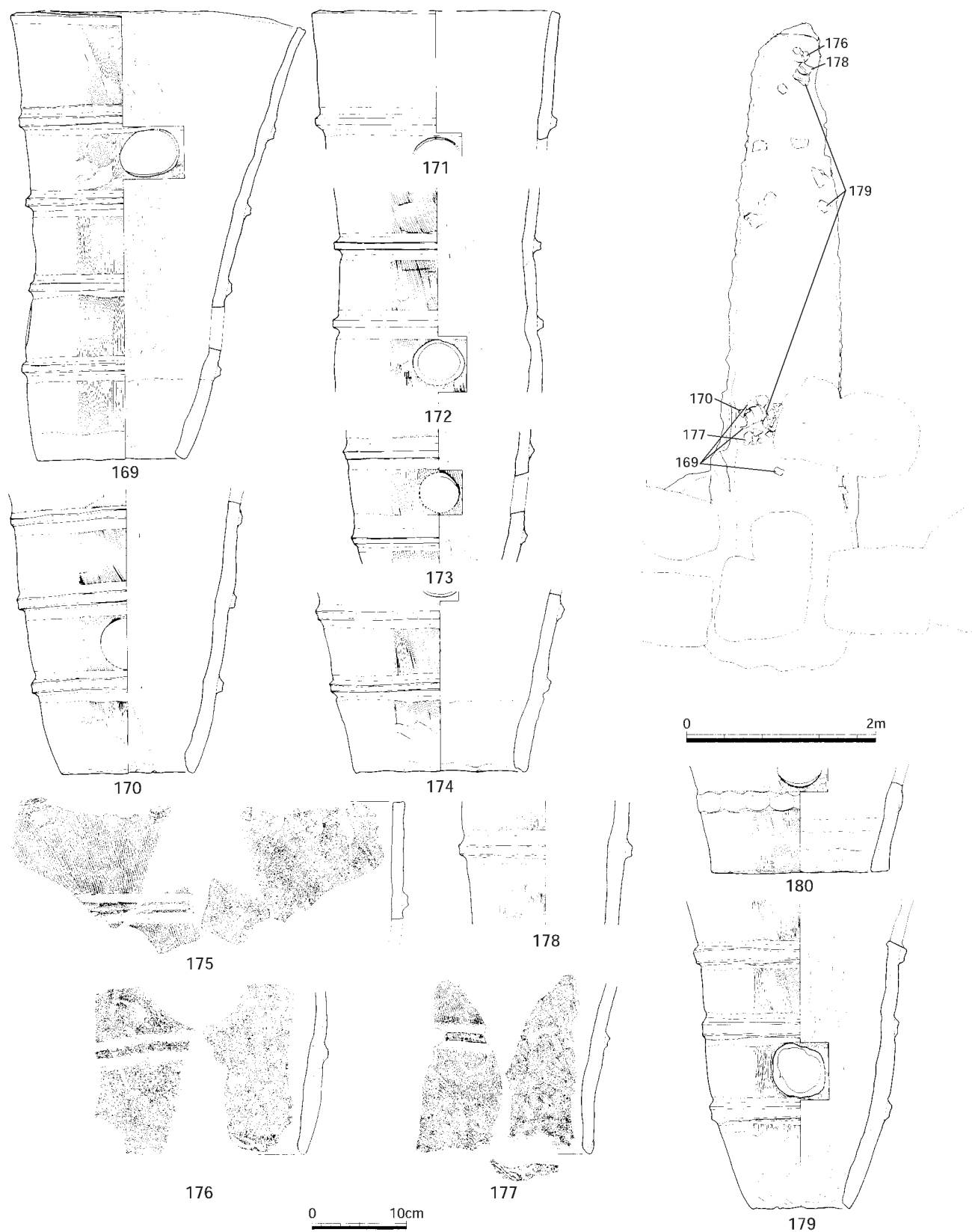


1号窯 (第14・52~55、図版5・6・8)

F区に位置する。半地下式の窖窯である。焚き口付近は近世に攪乱を受ける。長さは斜距離で6.6mを測る。幅は焚き口付近で1.26mを測り、上端に向かって徐々に狭まる。天井部は残存しないが、窯体内埋土中で多量の焼土を確認した。これは天井が崩落したものとする。床面は3面確認した。焚き口から1.5mまでの床面傾斜角度は10°程度であり、そこから煙出しまでは26°を測る。傾斜角度変換点までが焼成部と想定する。これは床面補修範囲も傾斜角度の変換点までであることから妥当と考えるが、焼成部は非常に狭い印象を受ける。

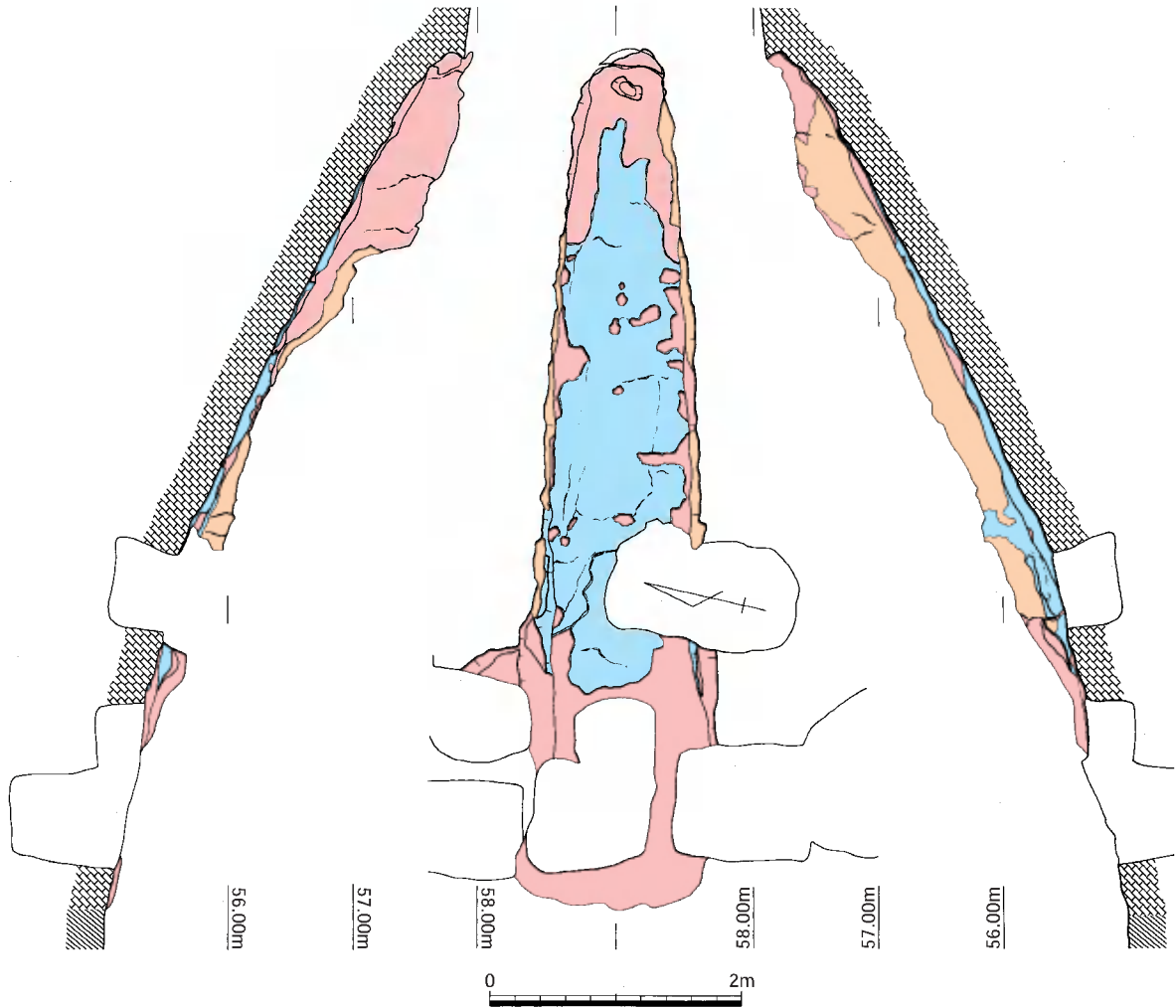


第52図 1号窯 焼土検出状態・土層断面(1/60)
・上層出土遺物(1/6)



第53図 1号窯 第3床面遺物出土状態 (1/60)・出土遺物 (1/6)

焼土の上層で陶棺164～166と円筒埴輪167・168を検出した。いずれも天井崩落後に廃棄したものである。166は身と脚の接合部で、円筒状の脚を蓋状に覆った部分が剥落したものである。167は5 d類、168は5 b類である。168の最下段突帯に布目の痕跡が残る。

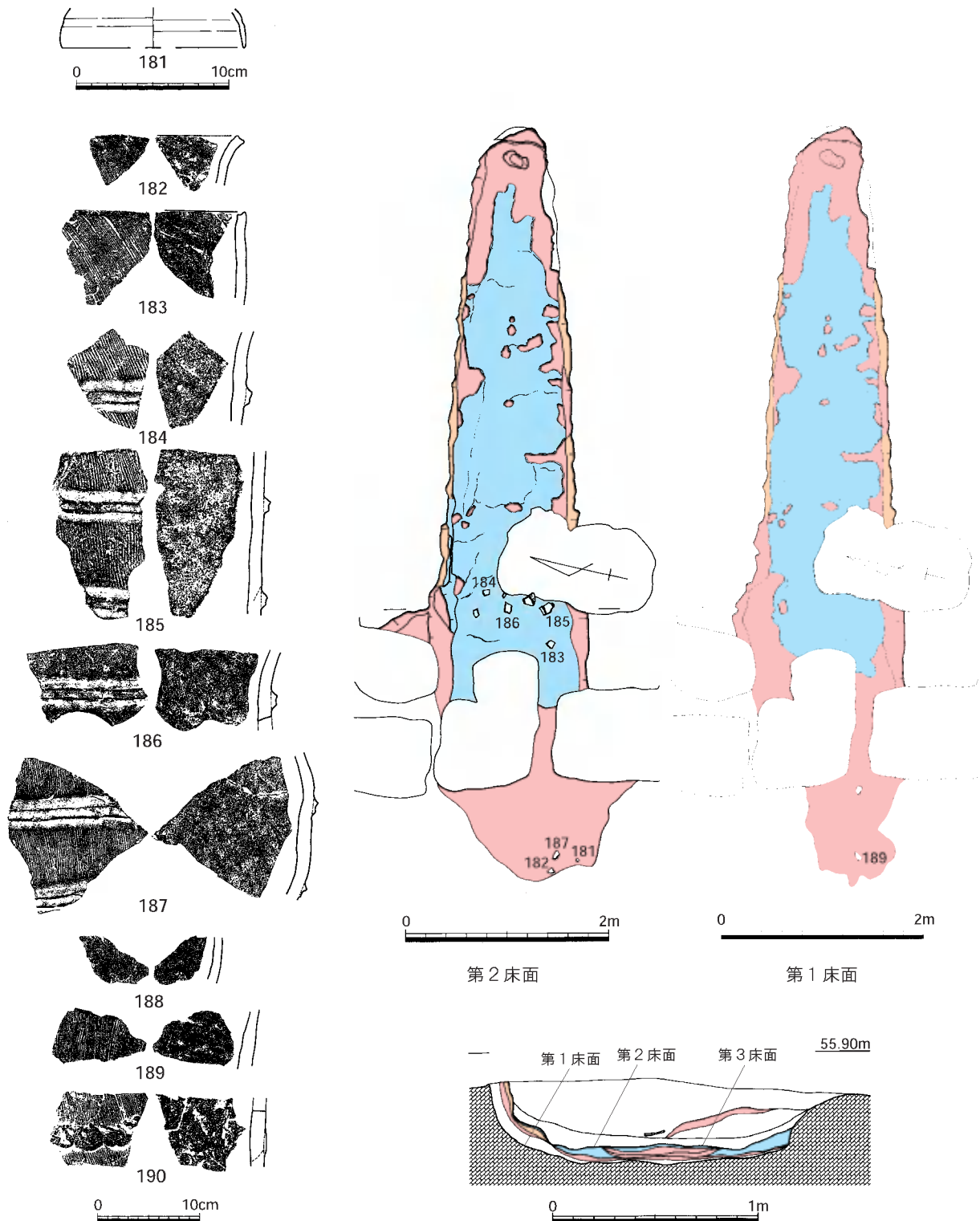


第54図 1号窯 第3床面・側面 (1/60)

床面は、築窯時から順に第1床面、第2床面とし、最終床面を第3床面と呼称する。第3床面では、上端煙出し付近と焚き口付近で円筒埴輪169～180が破損した状態で見つかった。

169～172・175～177は5 b類、178～180は5 a類、173は5 d類である。174は3段目に円孔を穿つことから段数が6段であると考えが、ハケ調整痕が類似する資料が存在しない。あえて最も近いものを探すとすれば、6段で基底部調整を行う6 b類である。歪みが著しく、径も不確かである。169はほぼ全体がわかる資料であり、分類を行う際に基準とした資料の一つである。ただし、同一類型とした170～172・175～177とハケ調整痕のみを比較すると、やや細い印象を受ける。基底部はナデで平滑に仕上げ、内側に入った形状となる。その形状から、ナデを行う前に何らかの工具で押圧を行ったと想定する。基底部には成形時に使用した台の木目痕が残る。最上段で×印のヘラ記号が確認できる。170でも基底部調整を行い、最終的にナデで平滑に仕上げるが、タタキ工具痕が残る。179も基底部調整を行うが、非常に雑であり、工具の痕跡も明瞭である。突帯も太く場所によっては幅1.5cmに及ぶ。窯体内上端煙道付近で検出した破片と、焚き口付近で検出した破片が接合した。180は最下段の突帯に押圧痕が確認できる。基底部には明瞭にハケが残る。

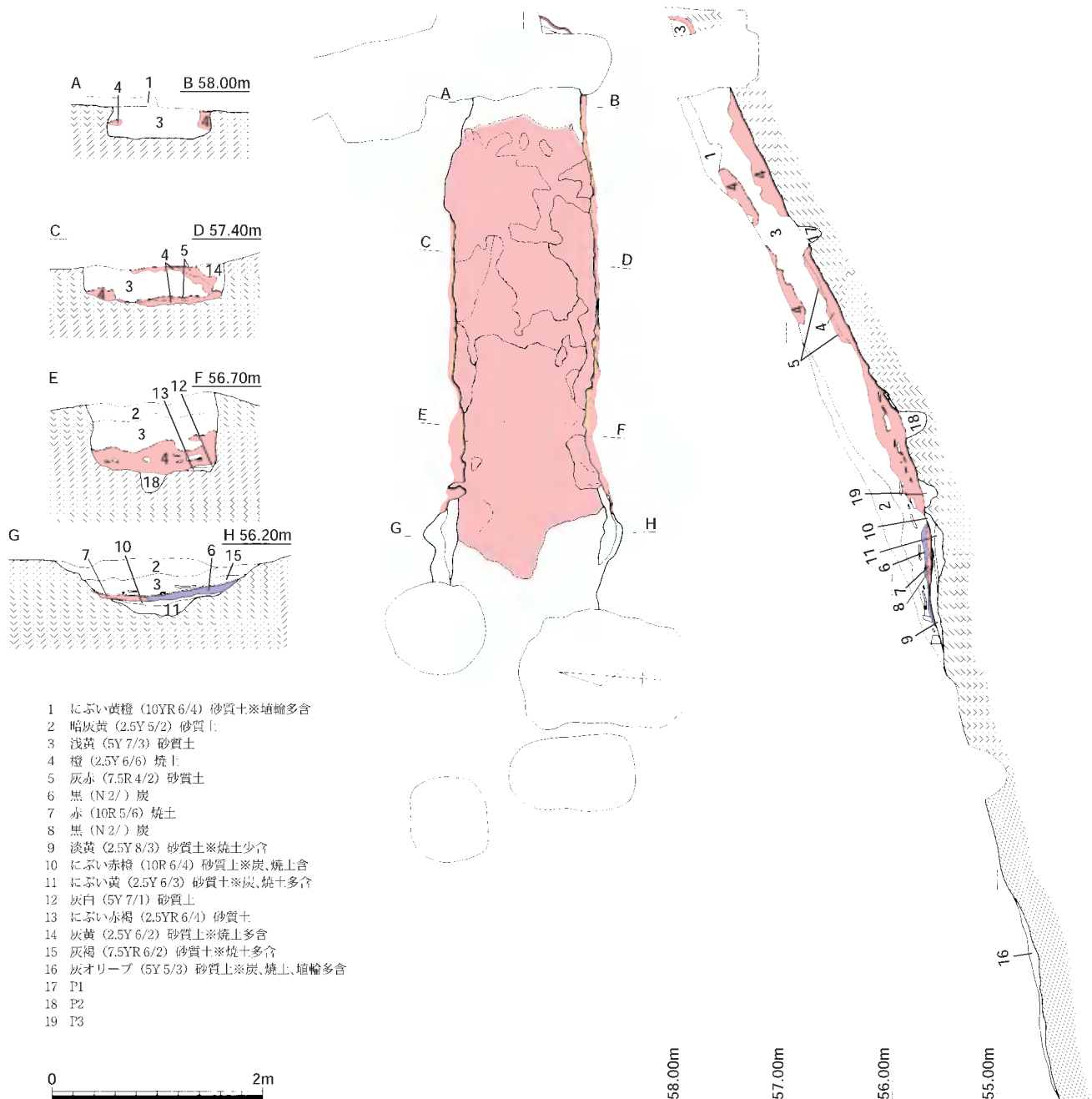
第2床面の焚き口付近のみ補修を行い、第3床面を形成する。その補修した面が青灰色を呈し、上方へ向かい灰色から橙色へと変化し、上端は赤色である。いわゆる還元色から酸化色に変化していく。



第55図 1号窯 第1・2床面 (1/60)・焚口付近横断面 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/6)

第1床面の焚き口周辺から傾斜角度変換点まで、床面だけでなく側面にも補修を加えて第2床面を形成する。第2床面の青灰色を呈する範囲が下方に向かって伸びることから、天井部も付け足したと推察する。第3床面は青灰色の範囲が第1床面よりも上方に向かい、狭くなる。

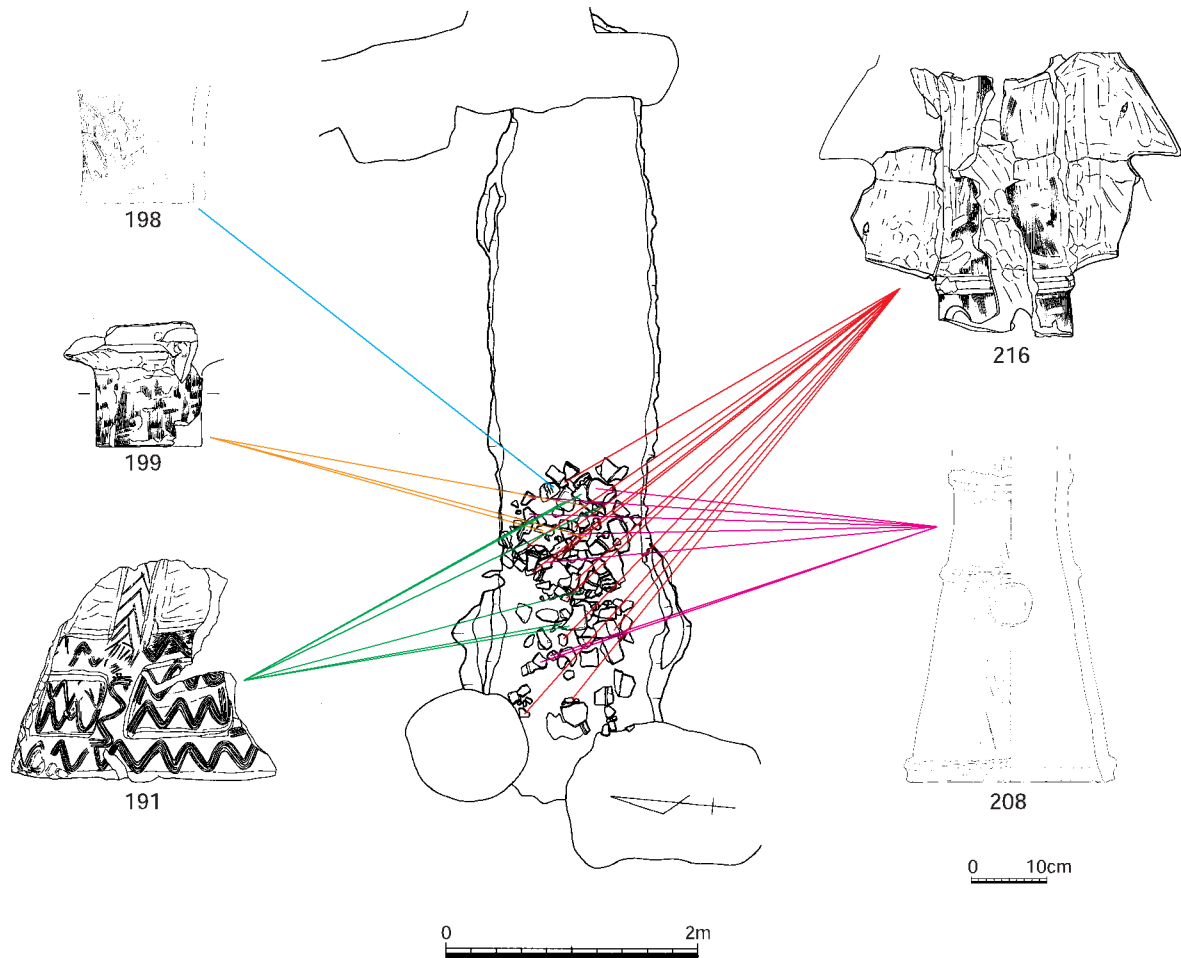
須恵器181、円筒埴輪182～187は第2床面で、円筒埴輪188～190は第1床面で検出した。184・185が5 d類、187が5 b類、他は5 a類であり、190は押圧技法が観察できる。



第56図 2号窯 焼土検出状態・土層断面 (1/60)

2号窯 (第14・56～64図、図版5・7・8・9)

F区に位置する。1号窯の直北1.3mの地点で検出した。半地下式の窖窯である。焚き口付近と上端は近世に攪乱を受ける。長さは斜距離で6.78mを測り、幅は焚き口付近で1.31mである。調査現場では1号窯より幅広く感じたが、これは2号窯が上端に向かって直線的に伸びるのに対し、1号窯は幅が狭まるためであり、最大幅の数値はほぼ同じであった。天井部は残存しないが、窯体内埋土中で多量の焼土を確認した。これは天井が崩落したものと考える。場所によっては崩落した天井が半球形を描いたまま埋没していた。その焼土を観察する限り、天井部は床面ほど硬質にはなっておらず、被熱影響が弱いと言える。床面は2面確認した。焚き口から1.8mまでの床面傾斜角度は7°程度であり、そこから煙出しまでは27°を測る。傾斜角度変換点までの平坦面は1号窯より広い。

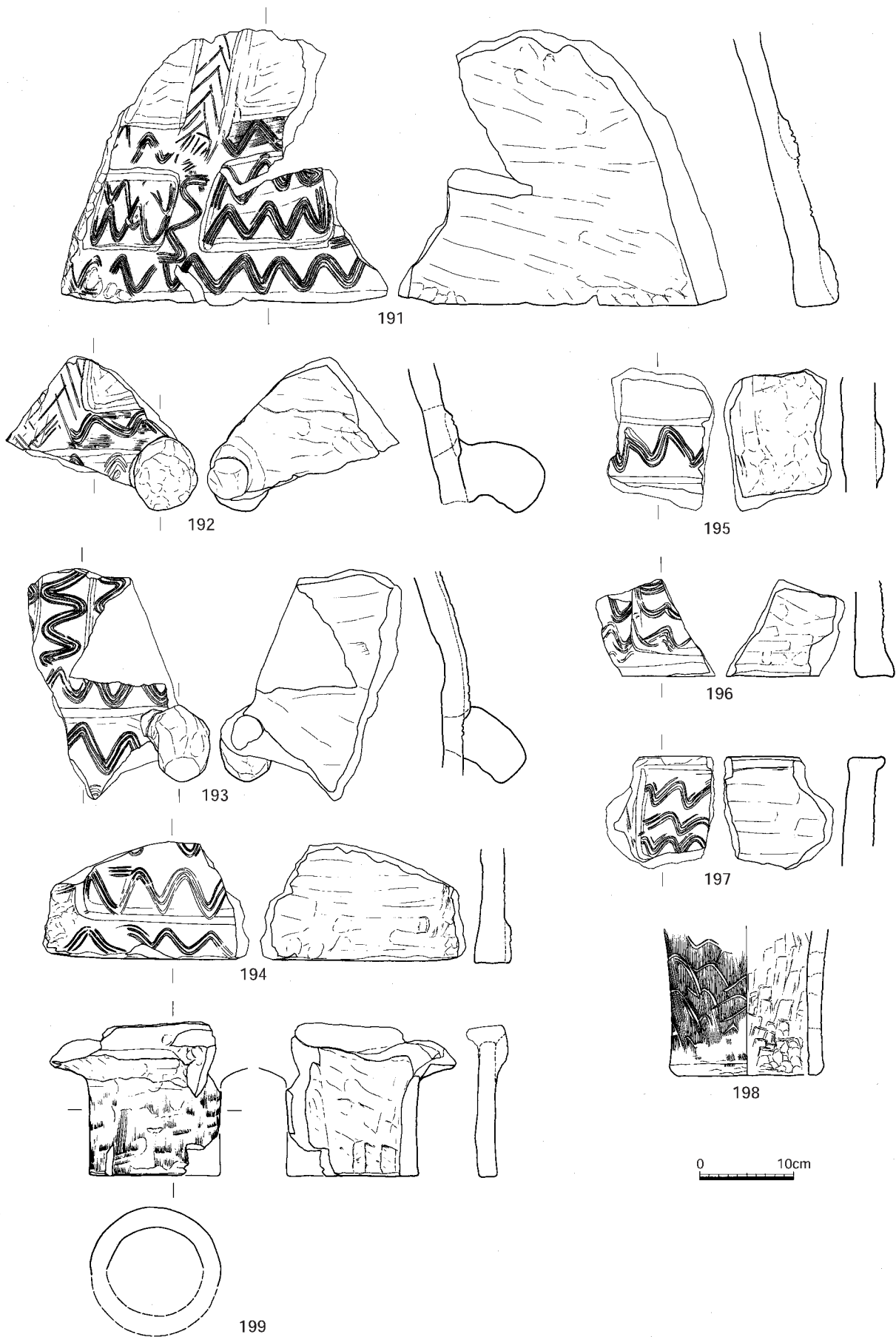


第57図 2号窯 第2床面遺物出土状態 (1/60)・出土遺物 (1/10)

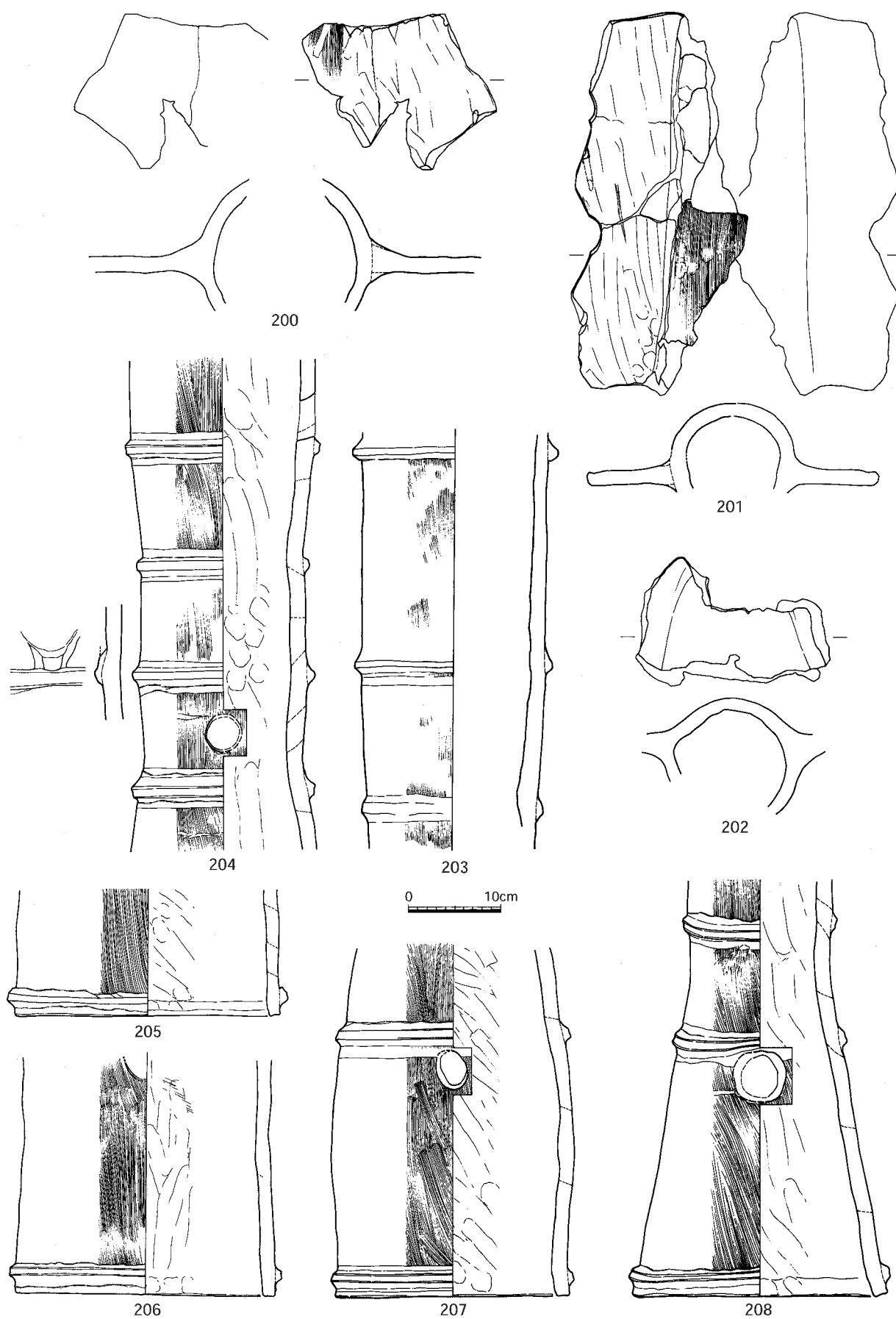
床面は築窯時を第1床面とし、最終床面を第2床面と呼称する。第2床面下半で多量の遺物を検出した。出土遺物には陶棺191～198、石見型盾形埴輪200～216、鳥形埴輪225・226、円筒埴輪217～224がある。いずれも現場では器種判断が困難なほど破損した状態であった。

191は異なるところで検出した6点の破片が接合した。破片の色調は様々であり、橙色のもの他に、灰色を呈する硬質なものもある。この他に192～196も191と同一個体で蓋の一部であると考えが、色調はそれぞれ全く異なる。これは、焼成時に破損し、落下した場所で火の回りが異なったためと推察する。191～196はいずれも3条1単位の波状文を全面に施すが、191と192の縦方向の突帯では、上半部で波状文が突然綾杉状の文様が変わる。文様が変わるところから突帯の貼り付け方やナデも雑になり、突帯間の波状文も省略する。192と193の突起は差し込みである。197は身の一部であり、198と199は脚である。198はハケ調整を行った後に、1本のヘラ状工具で波状文を描く。線の入れ方は不規則に見える。下端の一部が剥離する。199は198と比較すると低く、調整も簡略化されており波状文も施さない。外からは見えない中に入った脚であった可能性もあるが、高さも全く異なることから別個体であった可能性が高い。

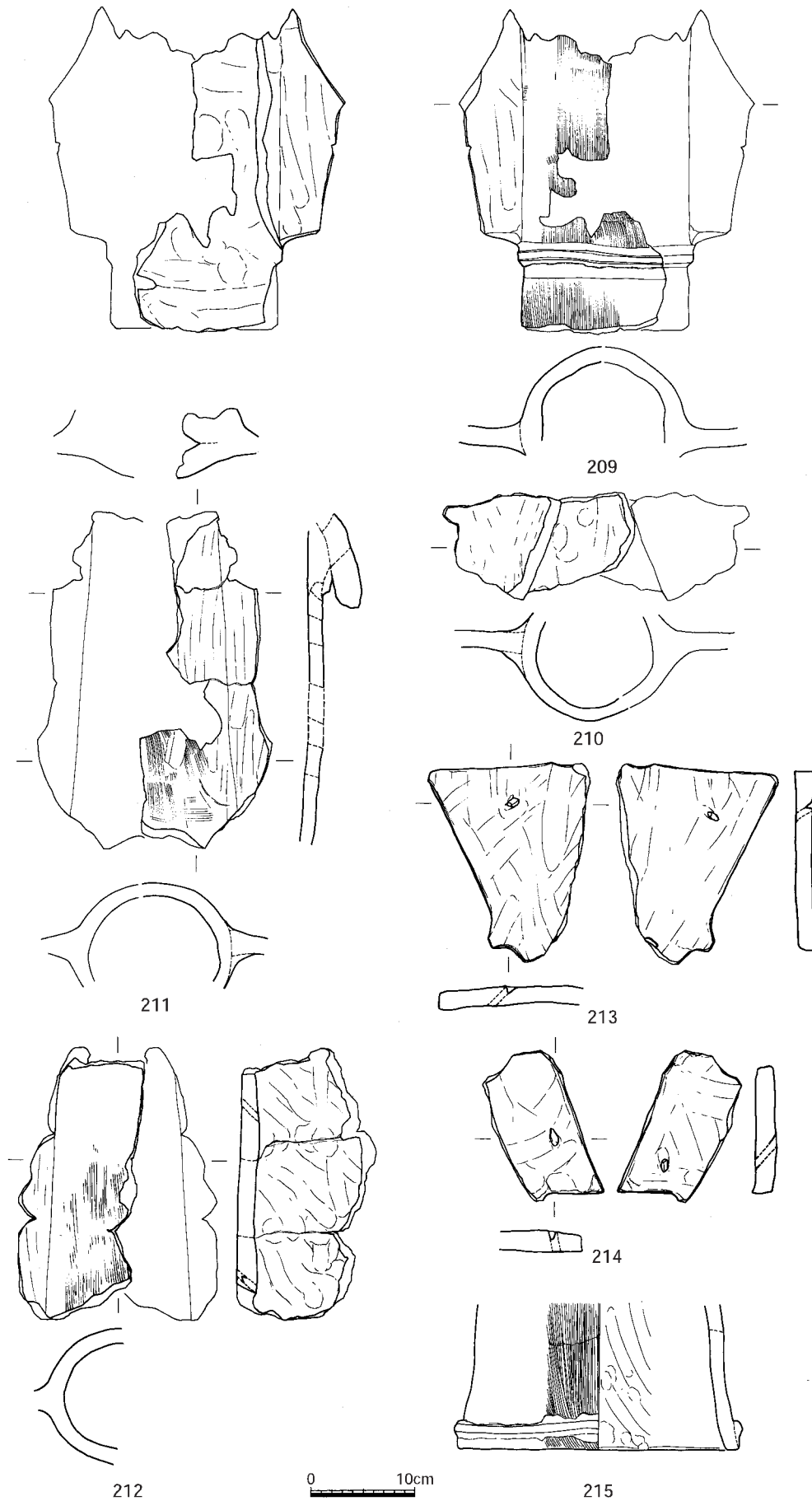
200～216は石見型盾形埴輪の一部である。焼き歪みが著しく、接合した破片でも部位によって色調が全く異なる。破片の出土量が多く数個体混在すると考えるが、全体を復元できる資料がないため、各破片に残る情報から破損前の姿を推測する。200～202・209～214・216を見る限り、線刻は確認で



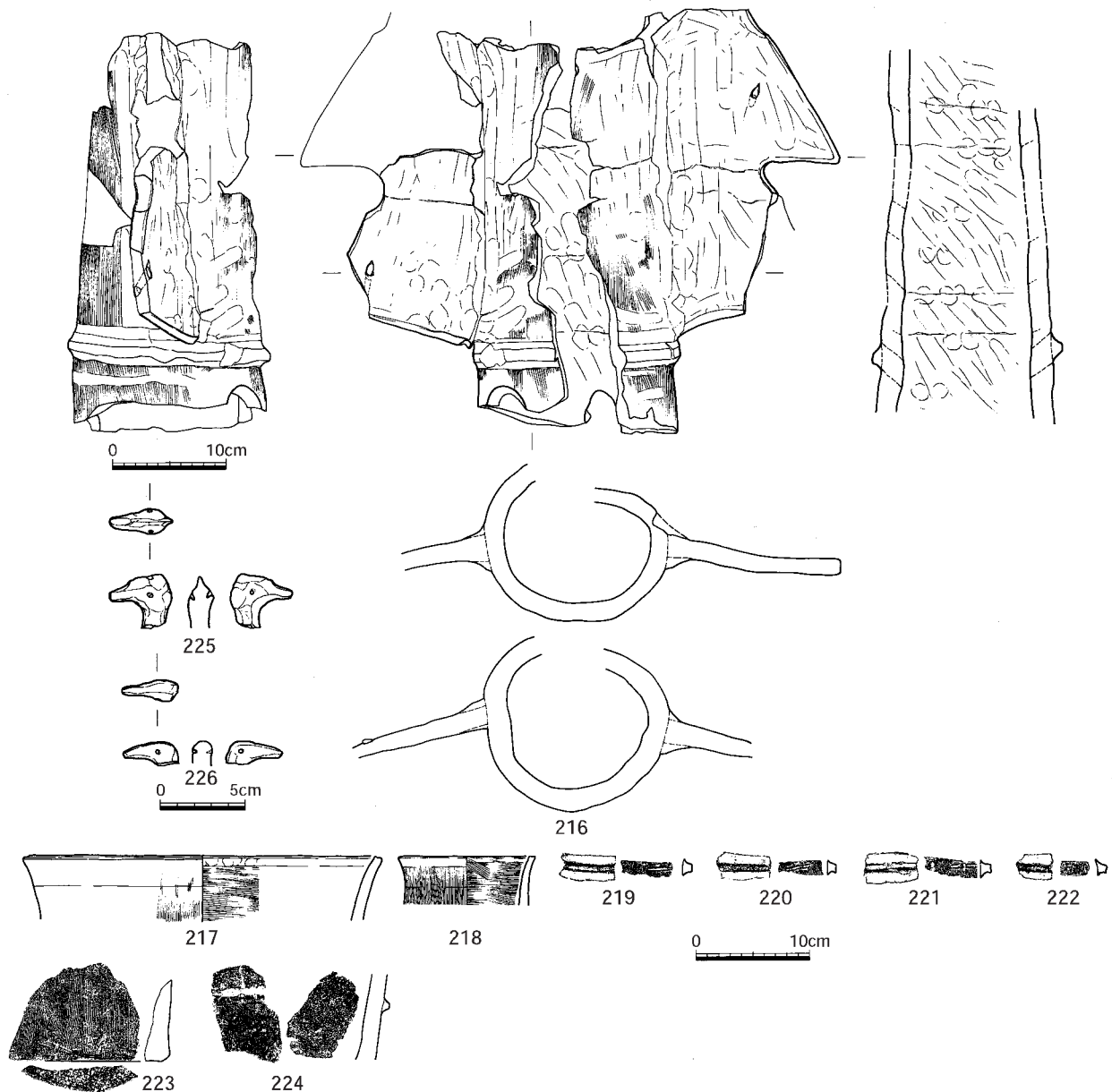
第58図 2号窯 第2床面出土遺物① (1/6)



第59図 2号窯 第2床面出土遺物② (1/6)



第60図 2号窯 第2床面出土遺物③ (1/6)

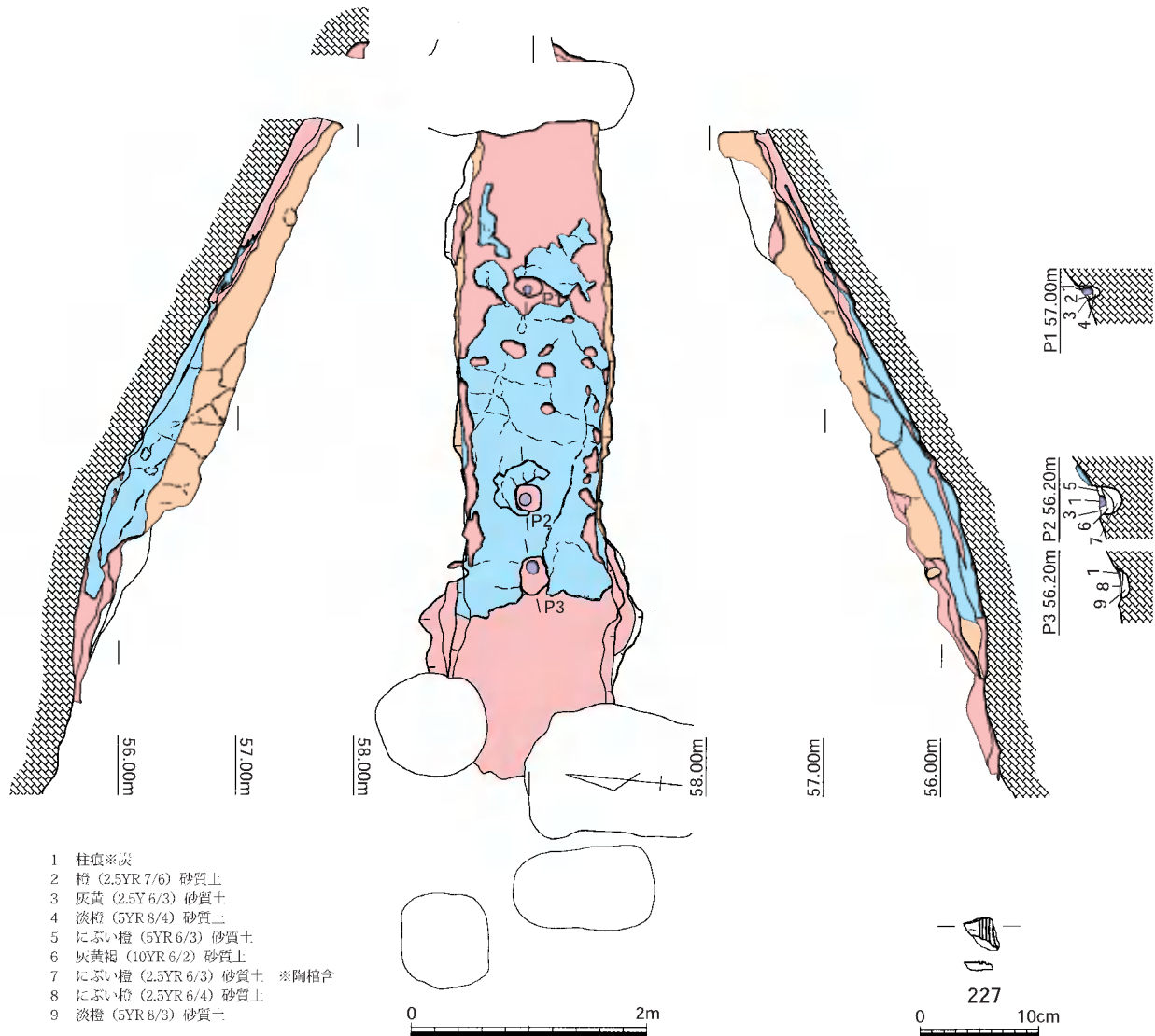


第61図 2号窯 第2床面出土遺物④ (1/6・1/4)

きない。また、鰭状部は円筒の両横中央付近に付す。刺突は器面に対し垂直ではなく、必ず斜め方向に貫通する。脚部は203～208・215から、かなり長く伸びて開いた形状を示すと言える。これらの特徴から、様々な要素が形骸化した最終末段階の姿が浮かび上がる。具体例としては、奈良県岩室池古墳の資料と類似すると考える。204は断面粘土積み上げ痕が数度入れ替わる。突帯の一つに鰭状部の痕跡をとどめる。211・212は形状から上端付近とみる。216は窯体内で広く散乱した状態で検出した。

217～224は6 a 類とハケや突帯が類似する。ただし、218は口径が11cmと小さいことから、円筒埴輪ではなく形象埴輪の可能性もある。223は基底部外面の破片である。黒斑が観察できる。

225は鶏冠とくちばしの表現から、鳥と考える。手捏ねで形を整えており、明瞭に指紋が残る。最大長で3.7cmと小さいことから、本来は人物等形象埴輪の一部に付属していたと想定する。色調はにぶい黄橙色を呈し、土師質である。鶏冠は無いが226も225同様に鳥の頭部で、形象埴輪の一部と考える。色調は灰色で、須恵質である。

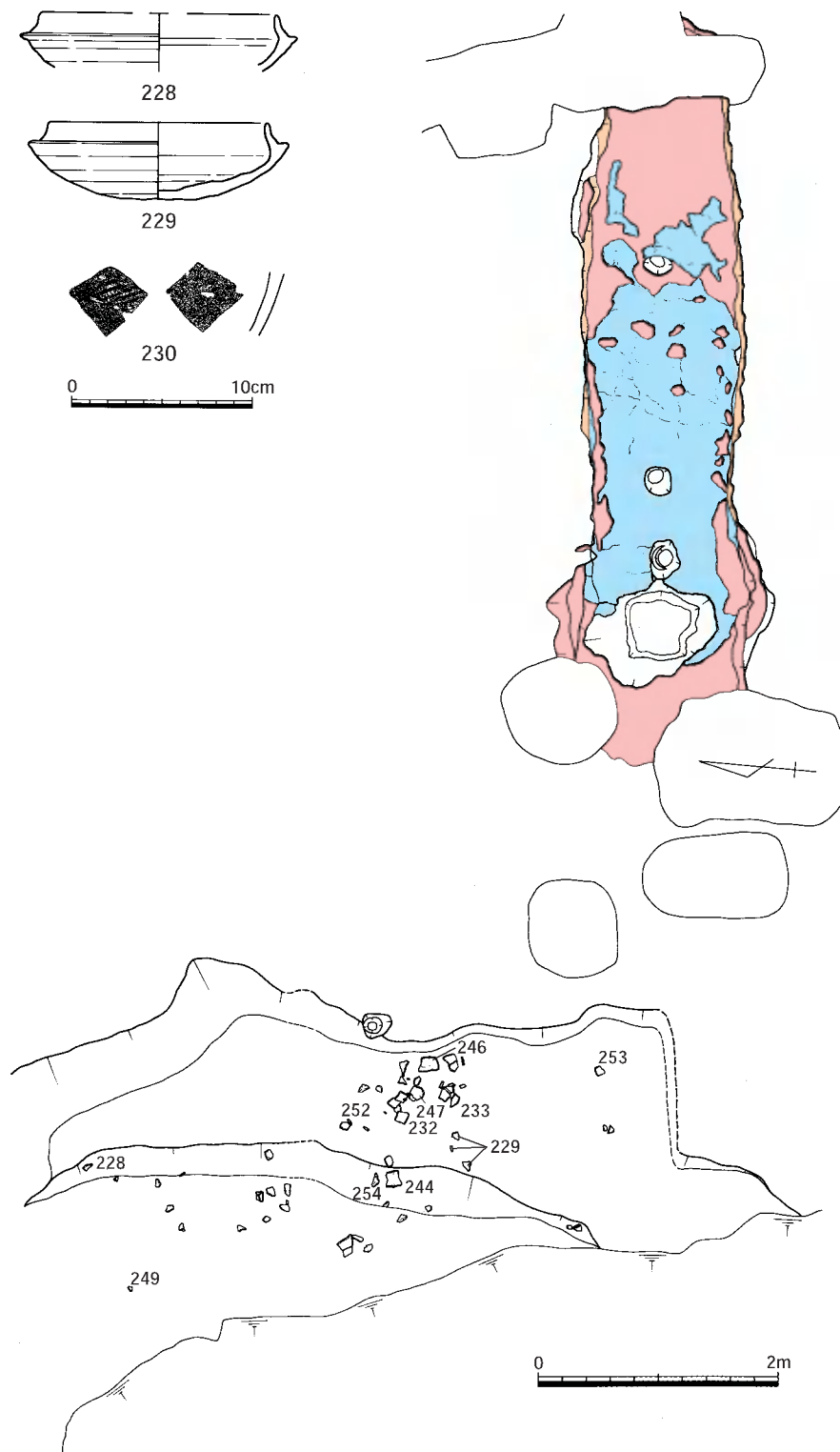


第62図 2号窯 第2床面・側面・P1～3断面 (1/60)・P2出土遺物 (1/6)

第2床面は1号窯の床面と同様に、焚き口から煙出しに向かい、いわゆる還元色から酸化色へと変化していく。床面中軸付近でピットを3つ検出した。いずれも検出面で炭化した柱痕が観察できることから、天井部形成時に使用したものと考ええる。ピットの深さは区々であり、柱痕は底面に及ばない。ピット埋土の上半は被熱のため赤色を呈するが、床面ほど硬質ではない。断面を観察すると床面還元面を掘り抜いており、第2床面形成時もピットを避けるように補修を行う。また、中央に位置するP2の埋土下層で陶棺の破片を確認した。これらのことから、このピットは何度も掘り返して使用したと想定でき、天井部も数度架け直したと考える。

227は陶棺の破片である。細片のため部位の特定はできないが、波状文が確認できる。その工具痕から陶棺の一部と判断した。

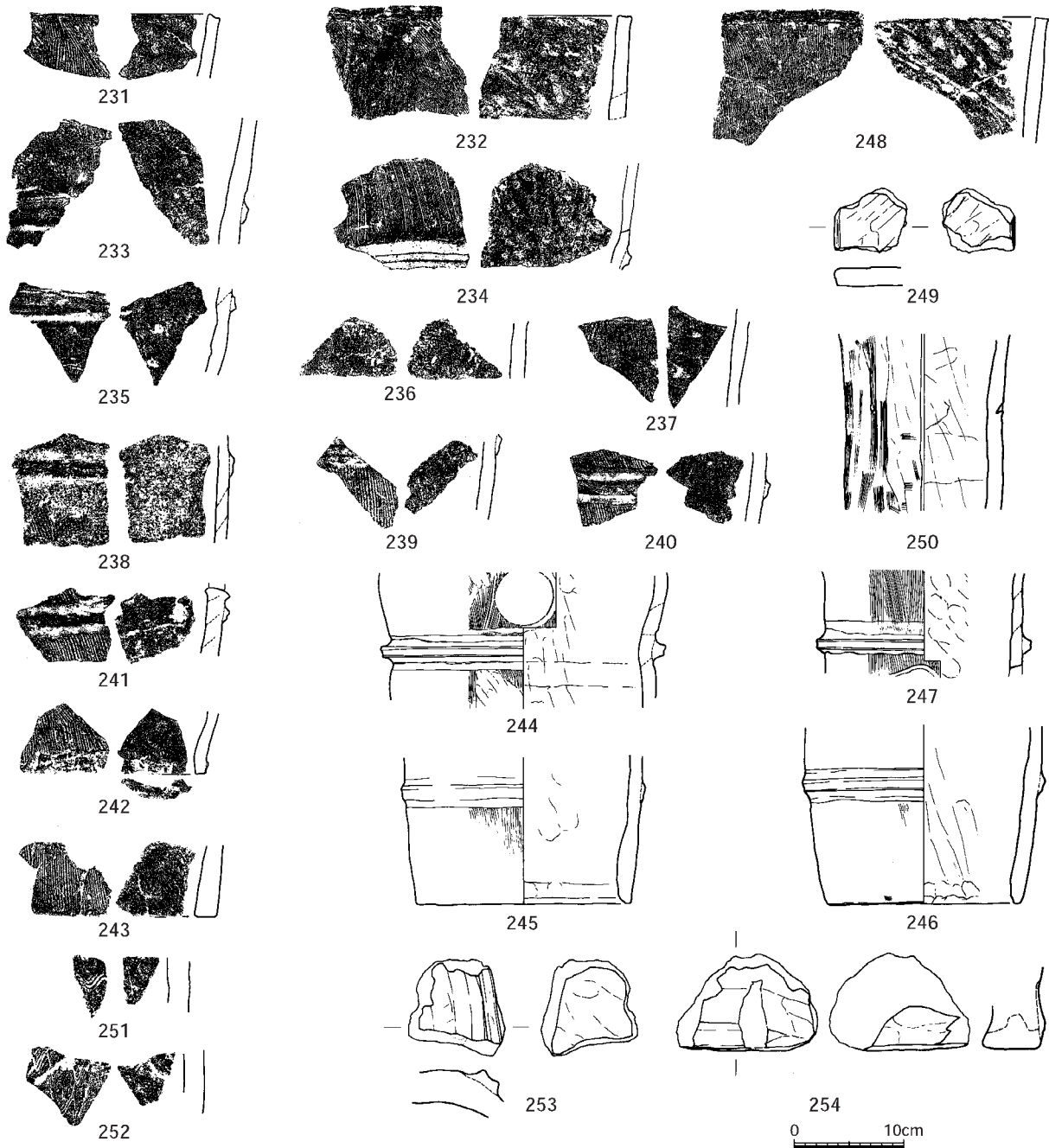
第2床面形成時の補修面は焚き口から傾斜角度変換点に及ぶ。焚き口付近は全面を補修するが、その上方は南半側面沿いのみ行う。それに対し、北半は補修面が確認できないが、P2の周囲には粘土を貼り付けた痕跡が残る。補修面を除去すると、焚き口で一边約50cmを測る不整形の土塊を検出した。この土塊は第1床面を掘り抜く。用途は不明であるが、第2床面補修時のものと考えられる。



第63図 2号窯 第1床面・整地層下遺物出土状態 (1/60)・整地層下出土遺物① (1/4)

窯体下方の通路や作業面と想定する地点も、補修のため造成を行う。その造成面を除去すると、須恵器228～230、円筒埴輪231～247、石見型盾形埴輪249・250、陶棺251～254を検出した。

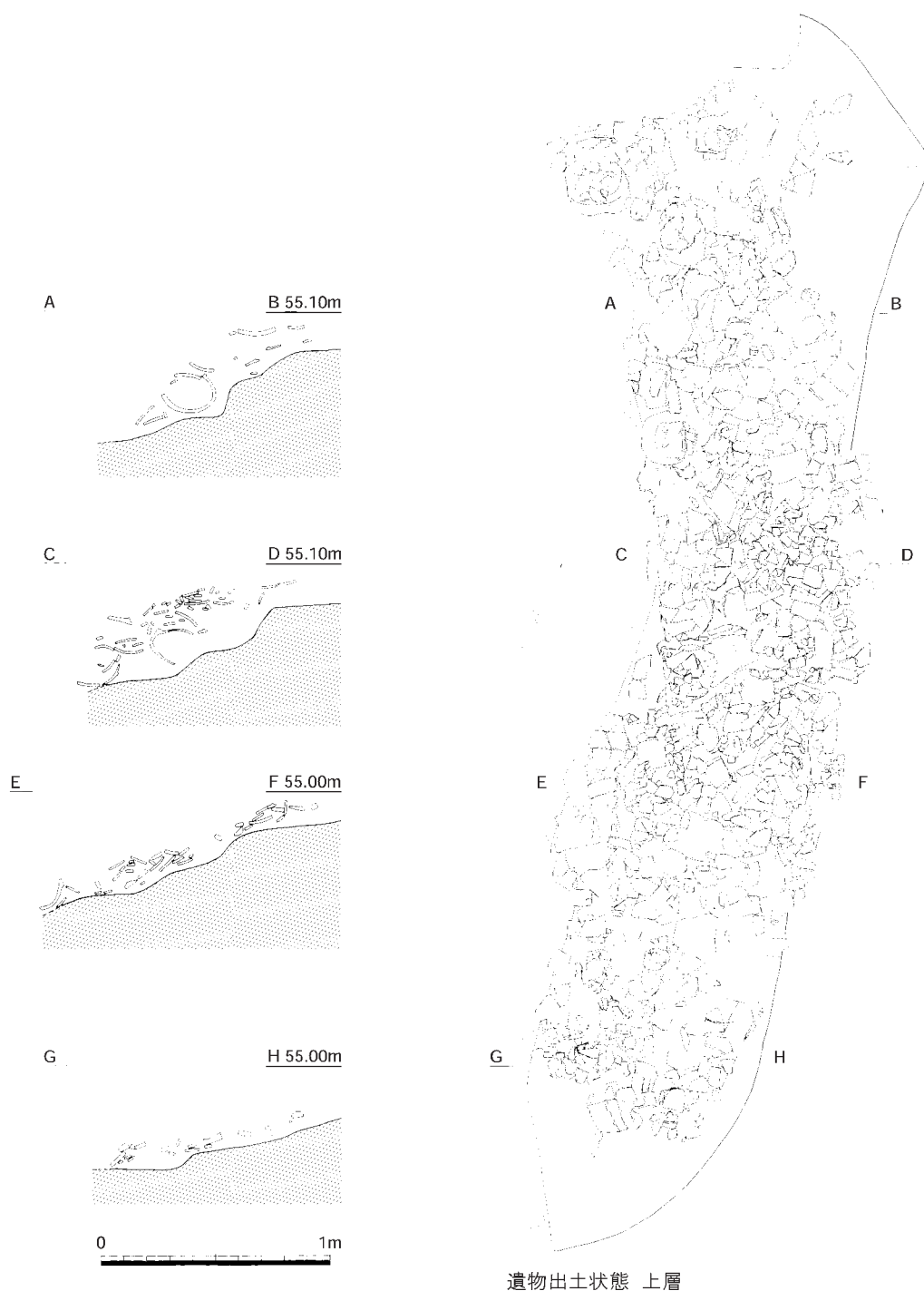
228と229は杯身である。陶邑TK43形式と類似する。248は板状を呈し、形象埴輪の一部と考える。250は外面縦方向に長い剥離痕が観察でき、刺突が確認できる。



第64図 2号窯 整地層下出土遺物② (1/6)

これまで、1・2号窯の調査成果について述べてきた。ここではその成果を基に、二つの窯の前後関係と時期について言及する。1号窯では天井崩落土の上層で陶棺や埴輪を検出したのに対し、2号窯では遺物は一切確認できない。また、1号窯床面には円筒埴輪が僅かに残存するのみであるが、2号窯では多量の遺物が残存しており、その中に陶棺を含む。よって、1号窯廃絶後も2号窯を操業していた可能性が高い。この前後関係は、自然科学年代測定の結果と矛盾しない。それぞれの操業開始時期や同時期の操業の可能性については不明であるが、廃絶時期は2号窯が新しいと言える。

つぎに窯の時期について述べる。出土遺物には埴輪と陶棺がある。窯跡周辺では須恵器を検出した。それぞれの特徴から、操業時期は6世紀後半に属し、二つの窯に大きな時期差は無いと考える。



第65図 埴輪集積地・断面（1/30）

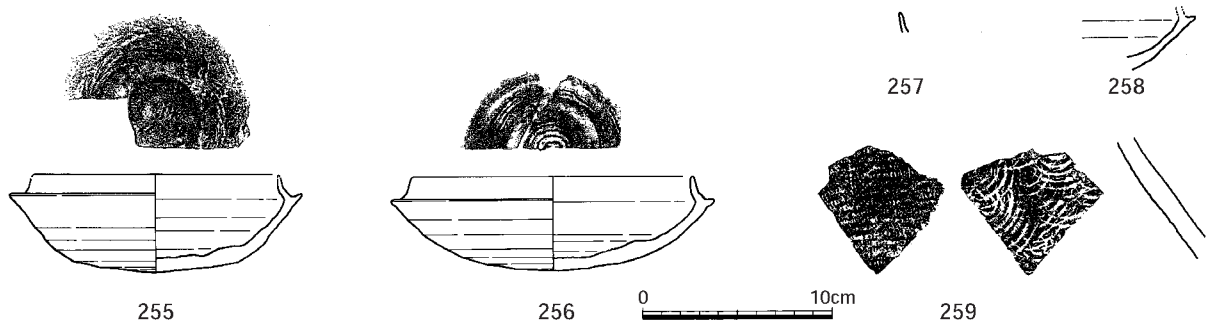
埴輪集積地・灰原（第65～77図、図版10）

埴輪集積地はE区に位置し、2号窯の北西6mで検出した。段状遺構群3埋没後のくぼみを利用する。南北約5mの範囲で多量の埴輪を検出したが、北側と西側は近世に攪乱を受けており、本来の広がり不明である。灰原はF区に位置する。近世の掘削のため、部分的に炭と埴輪が残るだけである。

埴輪集積地で須恵器255～259を検出した。杯身255と256は内面に工具痕が残るが、形態は陶器TK43形式と類似すると考える。このほか鉄滓を0.76kg確認し、その中には炉壁を含む。



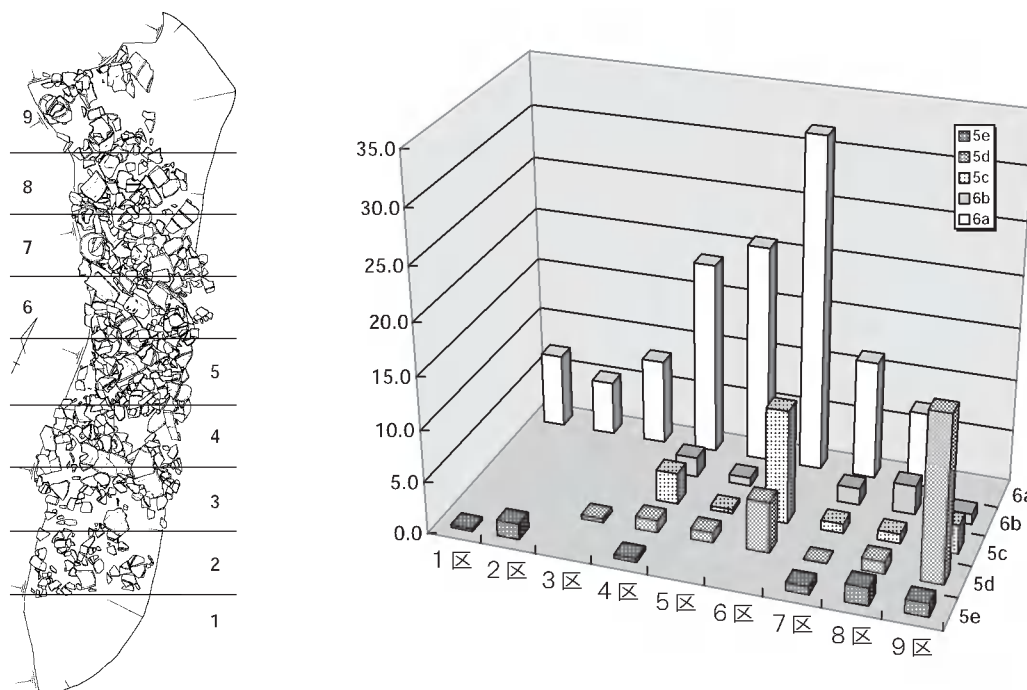
遺物出土状態 下層



第66図 埴輪集積地 (1/30)・出土遺物① (1/4)

第2表 土井遺跡埴輪集積地 区別埴輪出土量（単位：kg）

		6 a	6 b	5 a	5 b	5 c	5 d	5 e	形象	陶棺	分類不可	合計
集積地	1区	7.1						0.3				7.4
	2区	5.2						1.5				6.7
	3区	8.2					0.4					8.6
	4区	18.5	1.9			3.0	1.2	0.4			0.8	25.8
	5区	20.9	0.8			0.4	1.0				7.9	31.0
	6区	31.9				10.9	4.9		11.0			58.7
	7区	11.4	1.6			0.9	0.0	0.8	1.0		1.0	16.7
	8区	7.2	2.8			0.9	1.2	1.7			0.8	14.6
	9区		1.0			2.8	15.9	1.3			0.4	21.4
	攪乱	49.0	2.0	0.7		4.7	9.4	5.2	5.2	2.8	107.9	186.9
灰原		1.6	7.3	4.8	1.9	13.0	7.7	0.5	6.2	1.6	30.3	74.9
合計		161.0	17.4	5.5	1.9	36.6	41.7	11.7	23.4	4.4	149.1	452.7

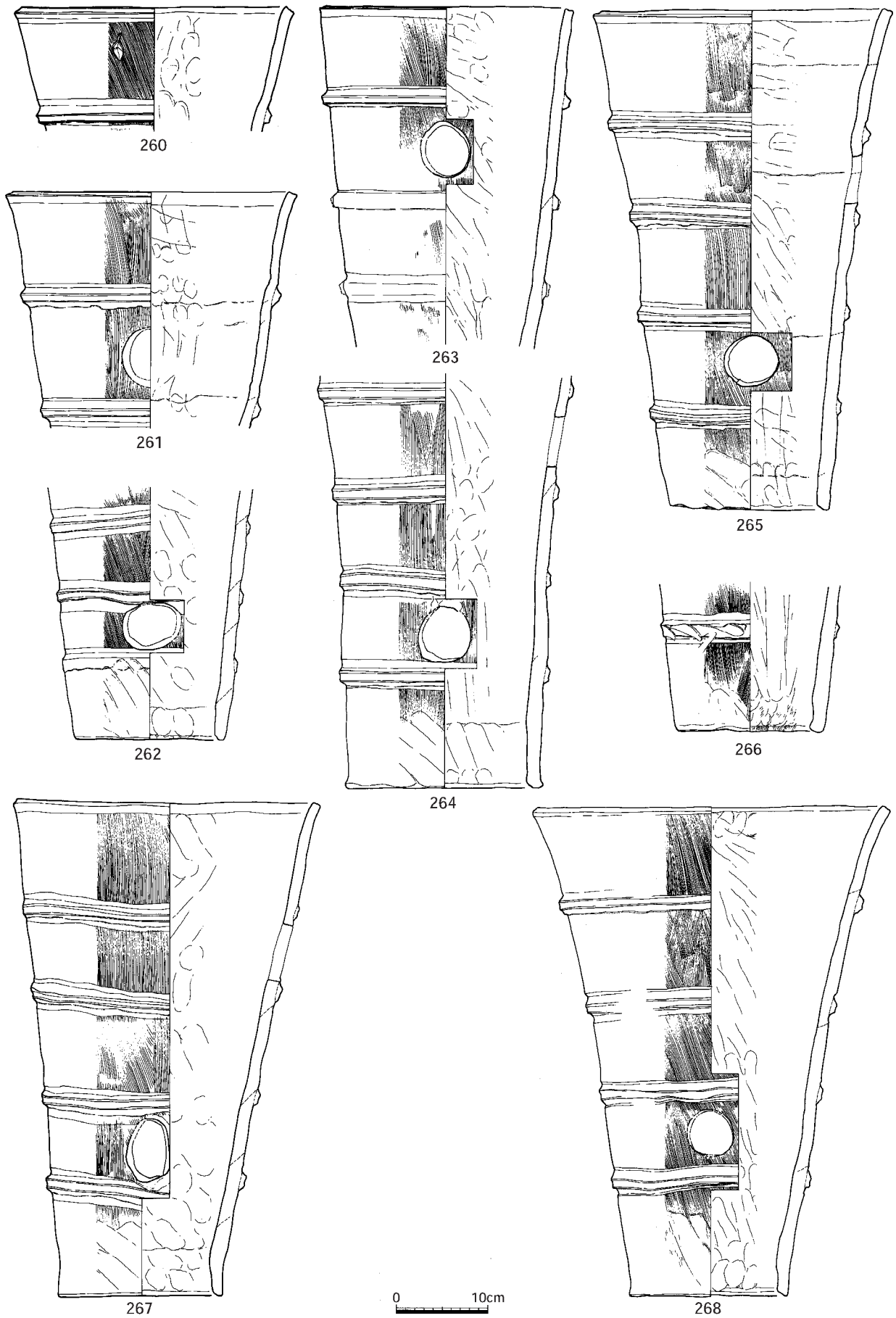


第67図 埴輪集積地区分（1/60）・区別円筒埴輪出土傾向（単位：kg）

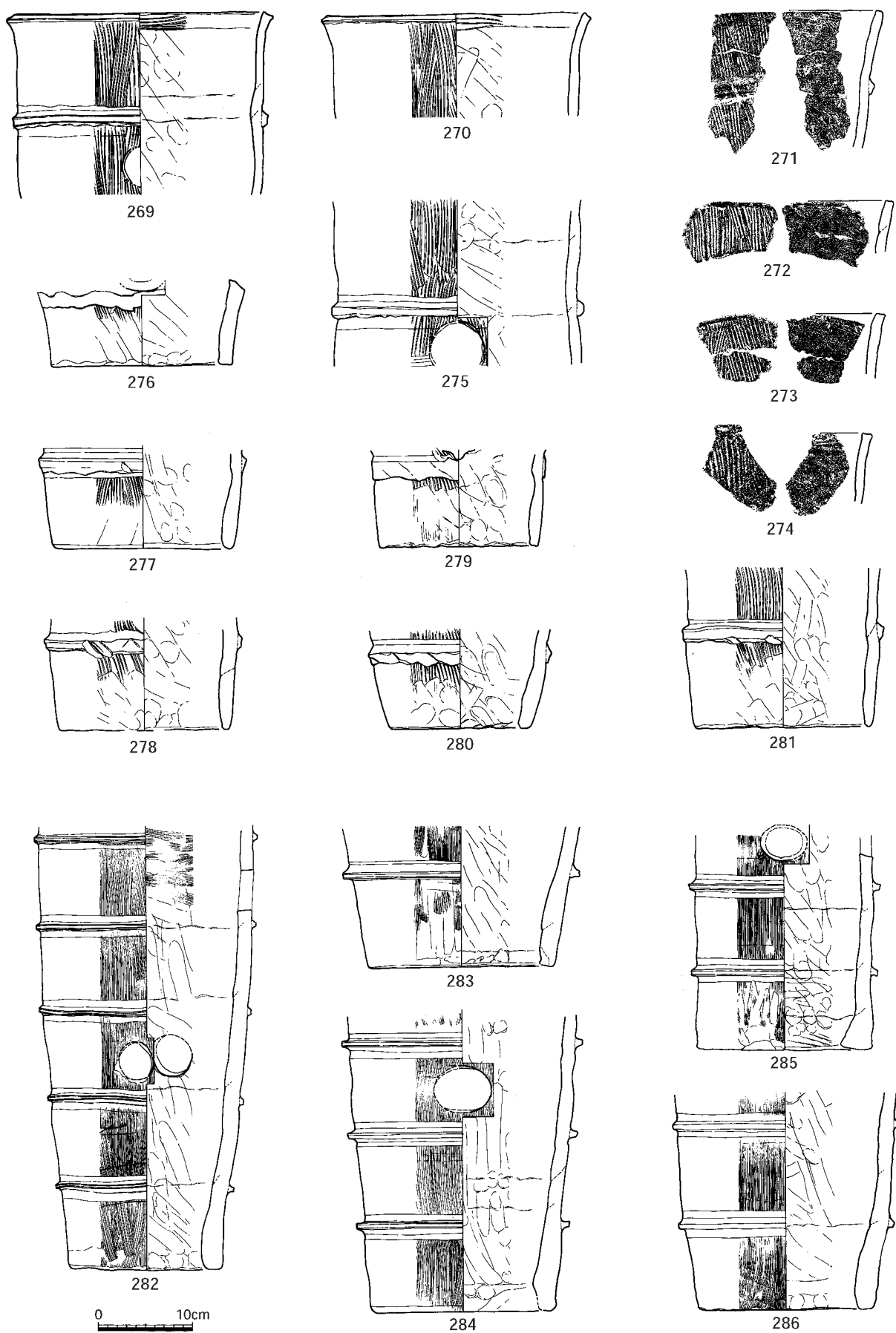
検出遺物の中に形象埴輪や陶棺も確認できるが、その大半は円筒埴輪である。まず、ここでは円筒埴輪の出土傾向について述べる。埴輪集積地については南北50cmごとに区切り、9区分した。

埴輪集積地では6 a類が多数を占める。ここで検出した円筒埴輪総重量の67%に及ぶ。6区に最も多く、そこから離れるほど量は減少するが、比率は9区を除いた全ての区で最高値を示す。9区では5 d類が最も高い割合を占める。5 d類は他に6区でやや多く、3～8区で少数確認できる。先の二つのつぎに量が多かったのが5 c類である。4～9区で確認でき、6区でのみ高い数値を示す。この他は6 b類が4～9区で、5 e類が全ての区で散見する程度である。

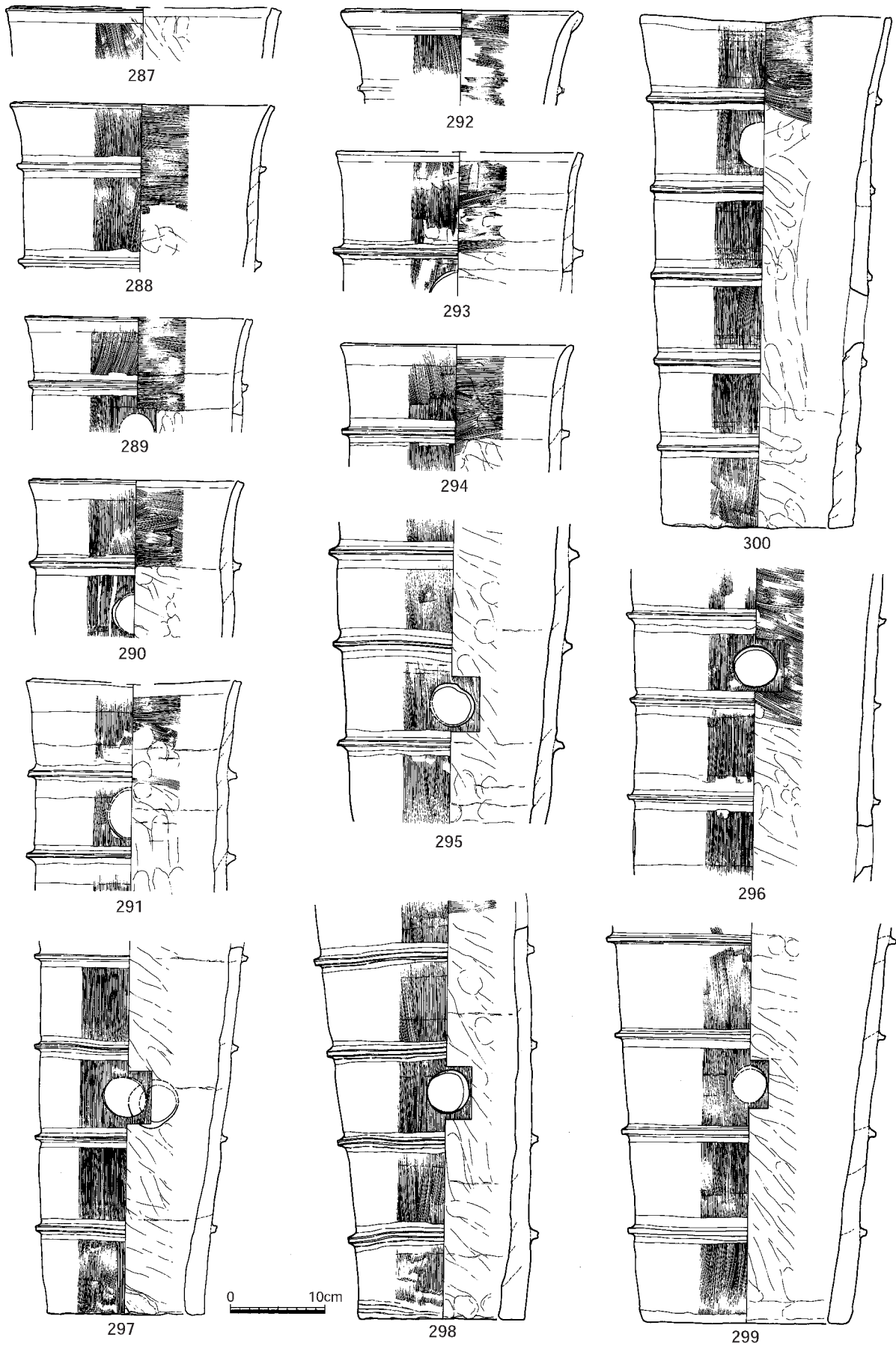
灰原では5 c類が35%と最も高い比率を占める。それ以外は5 d類と6 b類がそれぞれ約20%、5 a類が13%、5 b類・6 a類・5 e類が5%以下である。



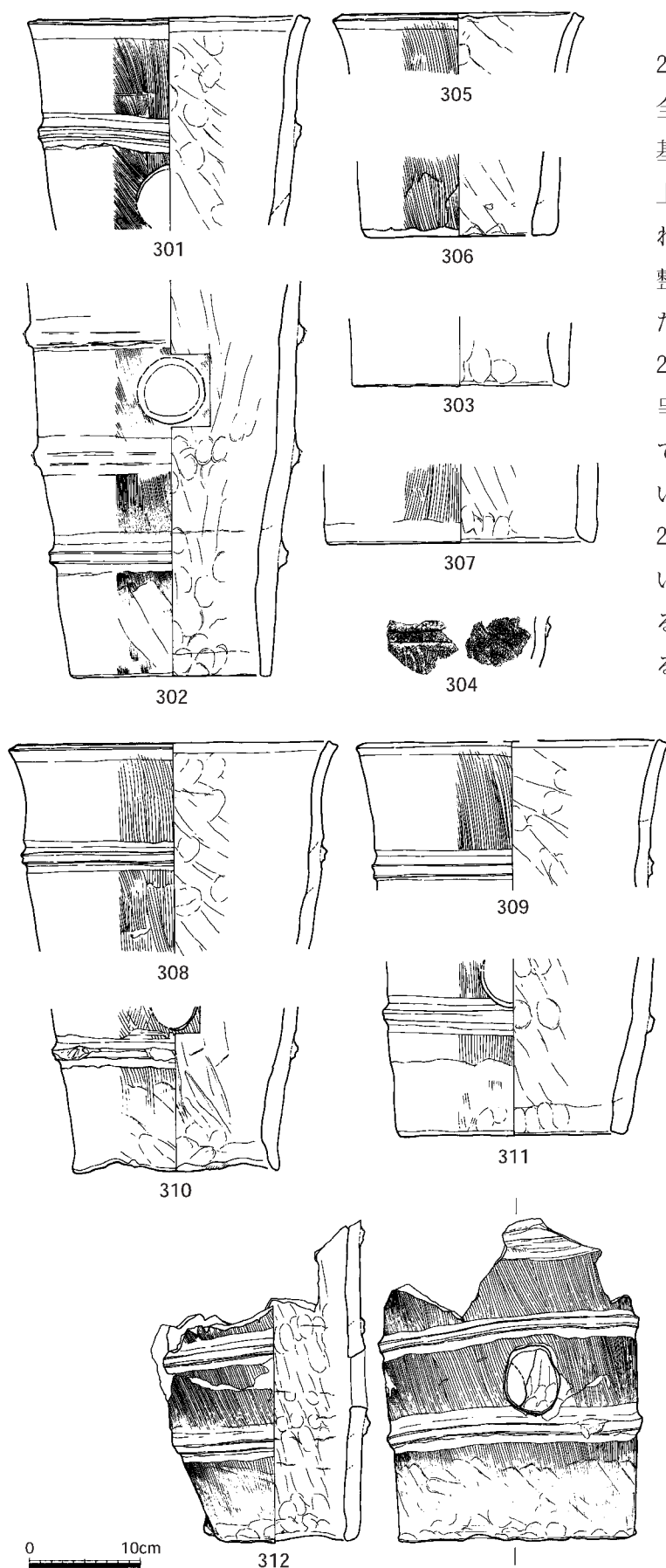
第68図 埴輪集積地出土遺物② (1/6)



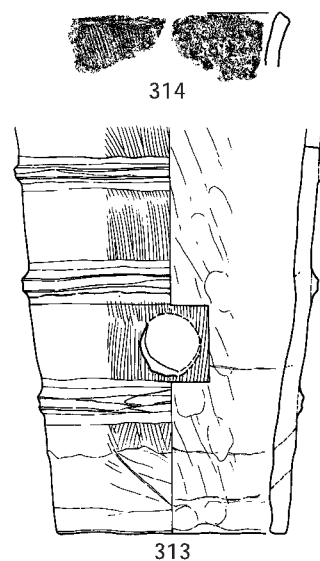
第69図 埴輪集積地出土遺物③ (1/6)



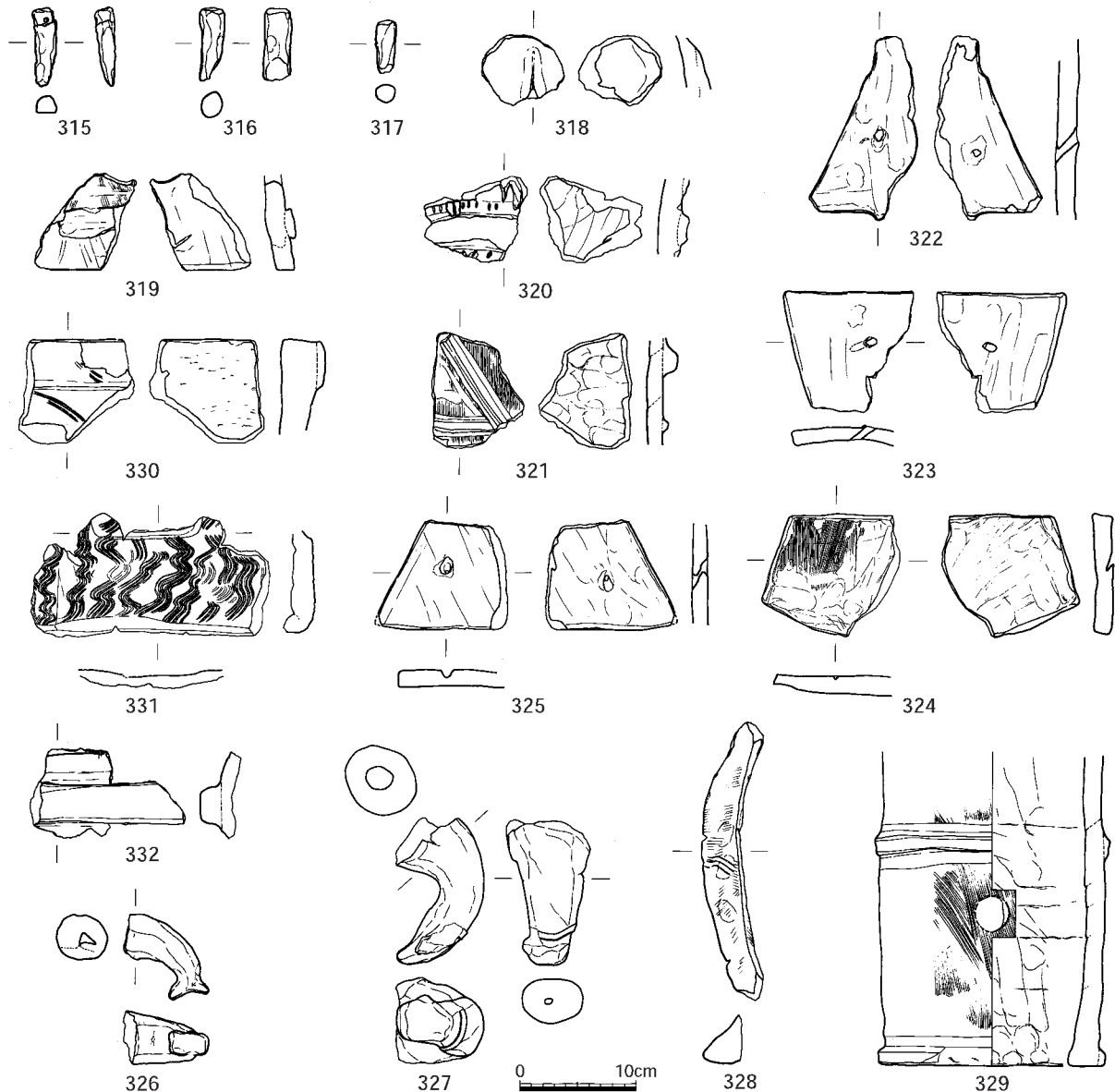
第70図 埴輪集積地出土遺物④ (1/6)



つぎに、個々の説明を行う。260～268・361は5c類である。確認できる全ての資料で基底部調整が観察できる。基底部はタタキを行った後にナデで仕上げる。262と266の最下段突帯はつぶれた形状を呈するが、これは基底部調整時に工具が及んだ結果であり、突帯だけに調整を施したわけではない。268は歪みが著しく、口縁は楕円形を呈する。269～281、362・363は5e類である。276は最下段突帯を押圧するいわゆる押圧技法が観察できる。279・280は最下段突帯に基底部調整が及ぶ。いずれも調整は雑で、焼成は不良である。282～299・356～358は6a類である。基底部調整が観察できる資料は無い。調整は丁寧で、堅緻な印象を受ける資料が多い。292は口縁部に突帯を付す。301～303・336～339は6b類である。336は3段目と4段目で線刻を確認した。偶然の工具痕ではなく、意図的に描いたと考えるが、破損のため全容は不明である。304・340～352・360



第71図 埴輪集積地出土遺物⑤ (1/6)

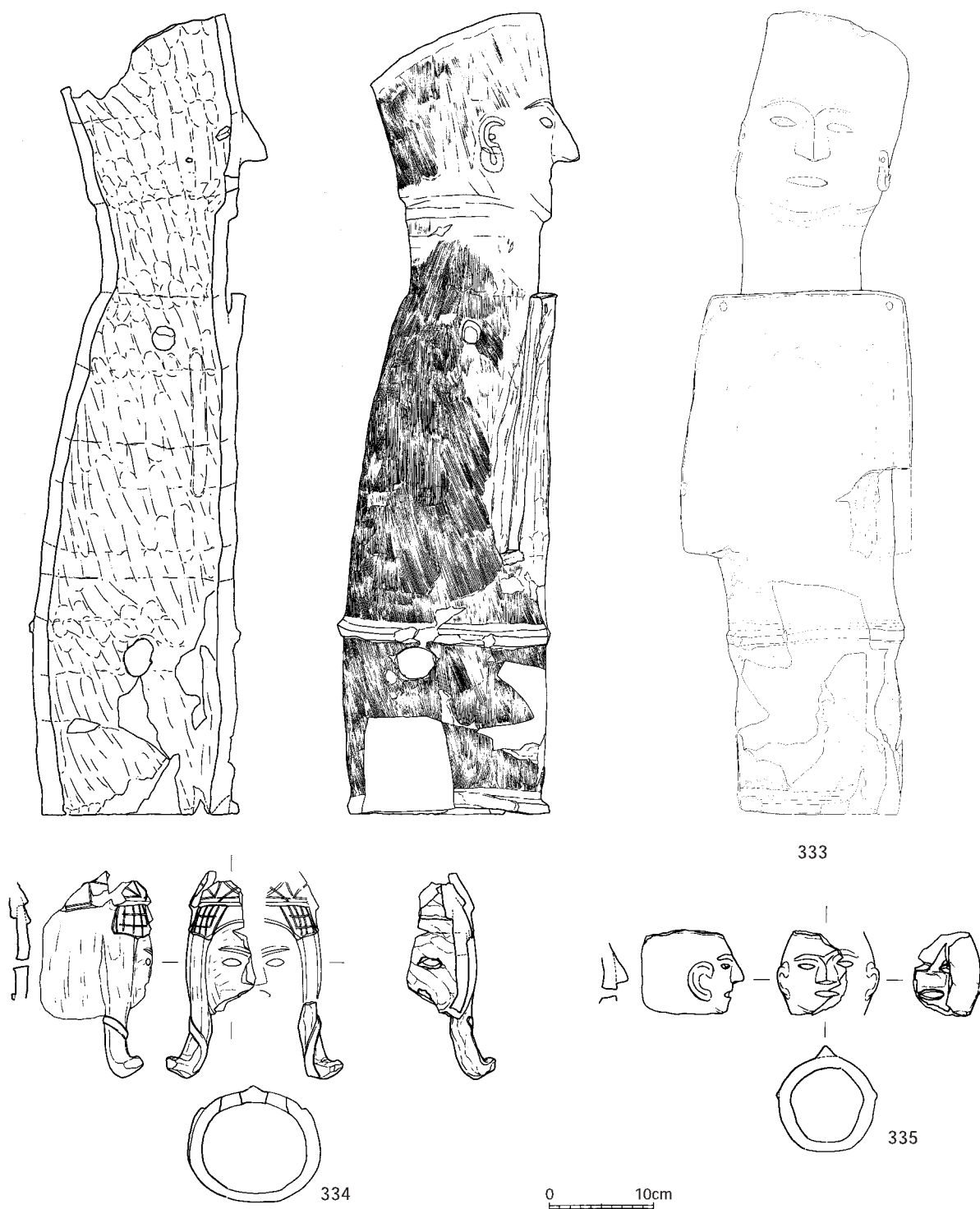


第72図 埴輪集積地出土遺物⑥ (1/6)

は5a類である。359は同様の工具でハケ調整を行うが、端部に突帯を付して倒立することから、形象埴輪と考える。360は他と比較して突帯が高く、幅も広いため、形象埴輪の一部である可能性もある。305～314・355・364～371は5d類である。306は底面で植物繊維痕が観察できる。312は歪みが著しく、横断面が楕円形を呈する。353・354は5b類である。

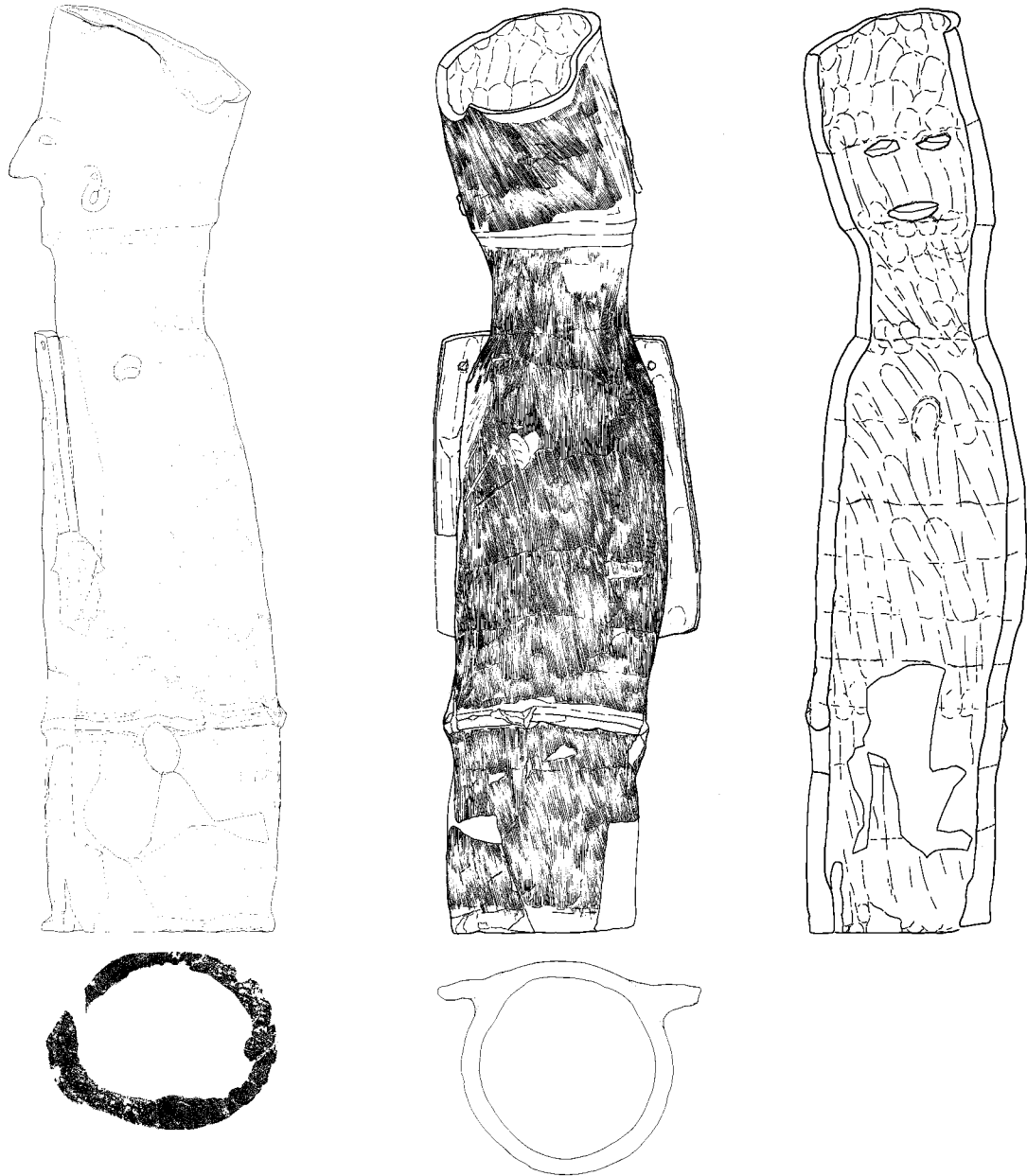
322～325・372～374・379・380は石見型盾で、330～332・379・380は陶棺である。321は畿内地方、中でも南河内地方に多い波状文帯を持つ亀甲形陶棺の可能性はある。ハケは6a類と類似する。329は形象埴輪の基部である。315～320・375～378は形象埴輪の一部と考えるが部位不明である。375は線刻が観察できる。320と377は太い突帯を貼り付けた後に刺突を施し、320は浮文を付す。

326・327は人物埴輪の腕である。326は須恵質で灰白色を呈する。断面には制作時に使用した心棒の痕跡が残る。327は土師質でにぶい黄橙色を呈する。粘土紐を貼り付けて袖口を表現し、親指部分は突起させる。胎土も精製しており、調整も丁寧である。



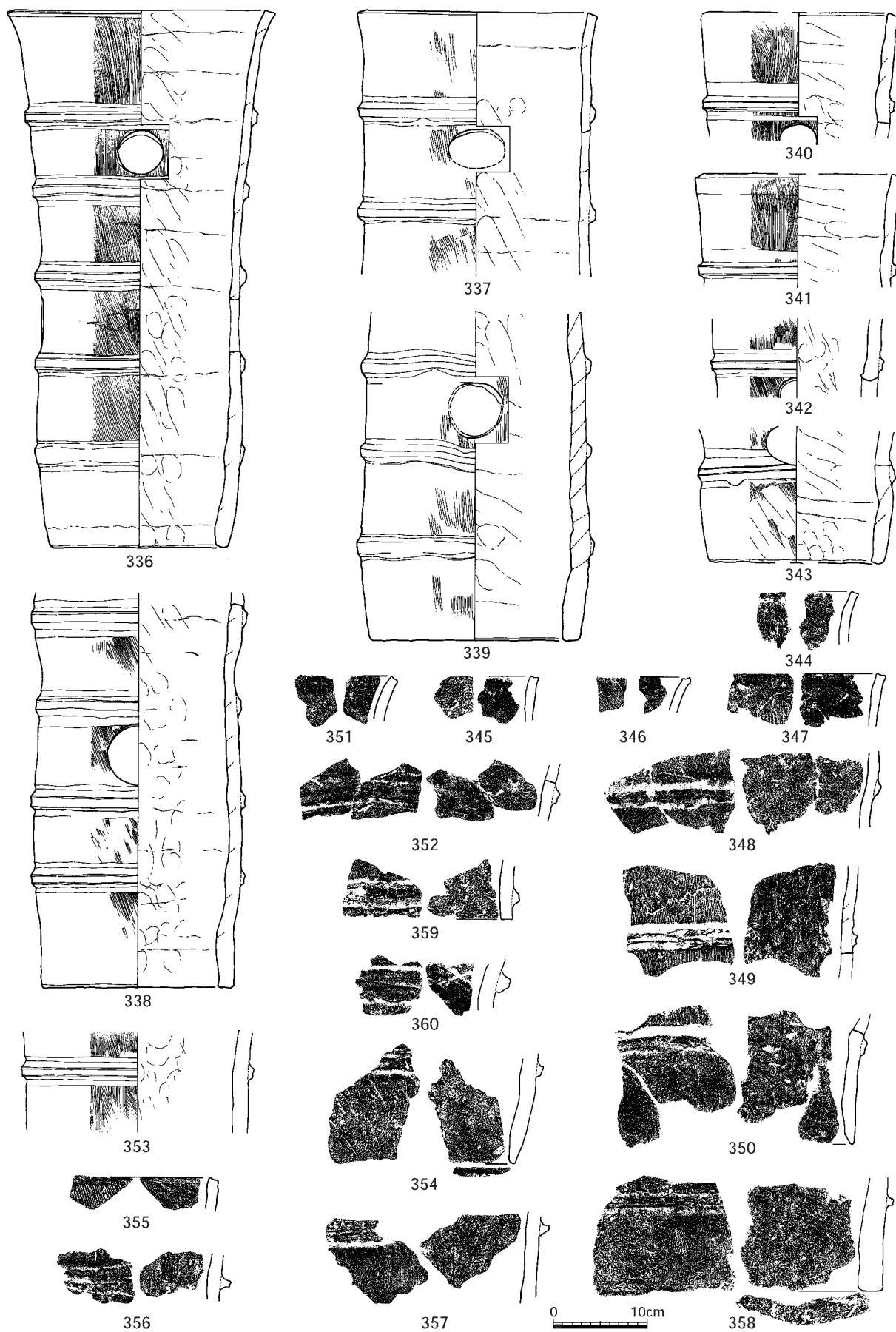
第73図 埴輪集積地出土遺物⑦ (1/6)

334・335は人物埴輪の頭部である。334は美豆良が残存し、頭部に冑の表現があることから武人を表したものとする。須恵質で灰黄褐色を呈する。目と口は穿孔し、鼻と眉は粘土を貼り付けて表現するが、貼り付けた後に丁寧なナデを行ったため貼り付けた境は不明瞭である。とくに眉は僅かに起伏させるだけである。335は土師質でにぶい黄橙色を呈する。精製した胎土を使用する。顔の表現方法は334と同じである。耳は眉や鼻と同様に、粘土を貼り付けた後に丁寧なナデを行う。

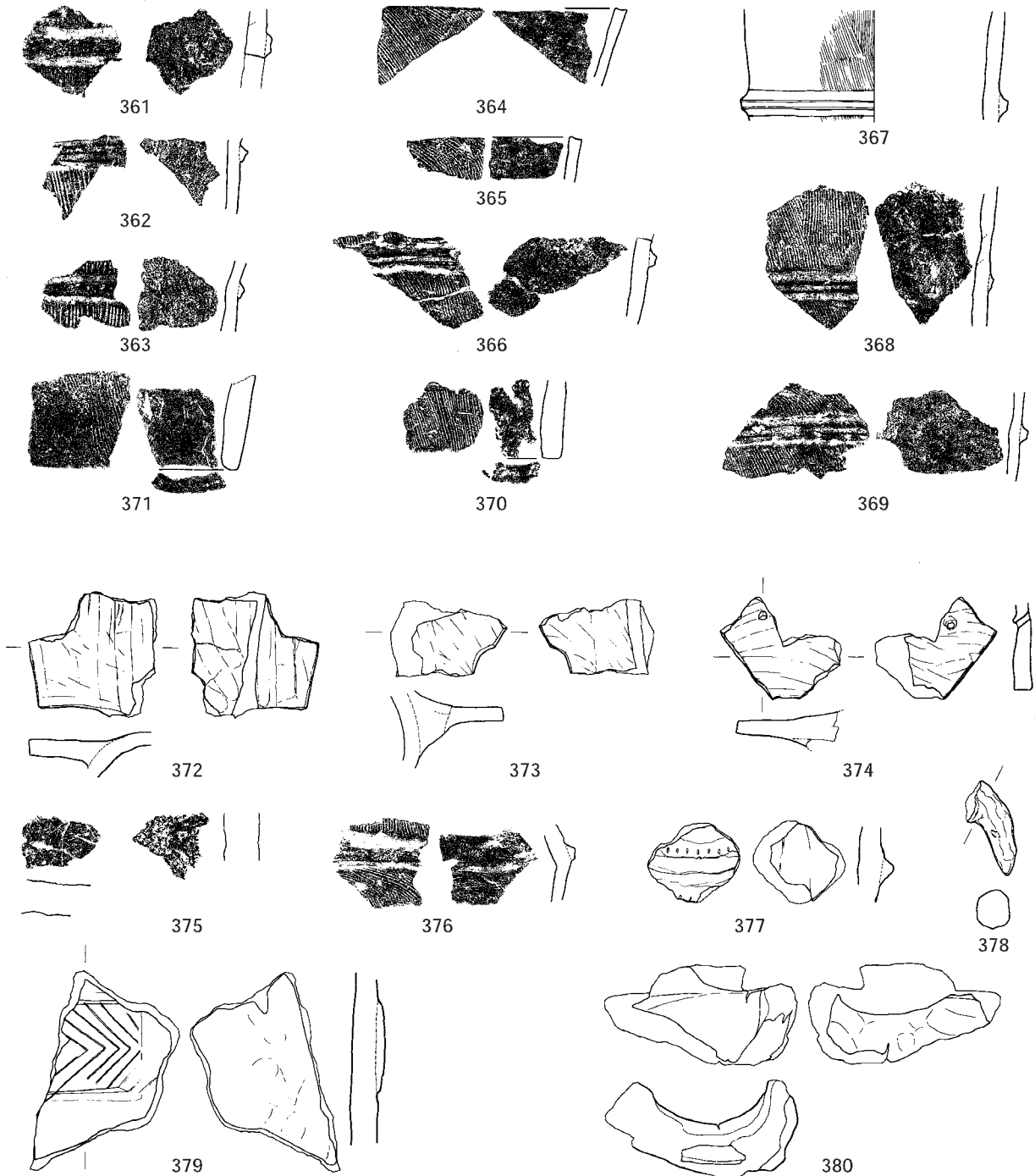


第74図 埴輪集積地出土遺物⑧ (1/6)

333は盾持ち人である。まず粘土紐を積み上げて円筒部を形成し、外面全面をハケ、内面をナデで仕上げて基底部に突帯を貼り付ける。このとき胴部と頸部、頸部と頭部の境は明確にしておく。つぎに、頭部から頸部の前面をナデ調整した後に、粘土を貼り付けて起伏をつけることで眉、鼻、耳、顎を表現し、さらに目と口となる部分を穿孔する。その調整方法は334や335と同様である。耳の穴も刺突で表現し、耳の下には耳環を作りつける。円筒部前面には逆U字形の粘土板を貼り付けて盾部を表現し、丁寧なナデで仕上げる。この結果、背面と盾部より下にのみハケが残る。盾部下端と接合する円筒部分は、盾部側面を面取りする際に挟まれた痕跡が残る。盾部両上端には刺突を施す。これは石見型盾形埴輪と同様に、器表面に対し前面上から背面下へと斜め方向に貫通する。円筒部側面には円孔を2対穿つ。1対は突帯直下に施す。もう1対は頸部やや下の辺りであるが、先の円孔より小さく、やや前面寄りに位置する。焼成は須恵質で色調は灰色であるが、頭部から背面は赤褐色を呈する。



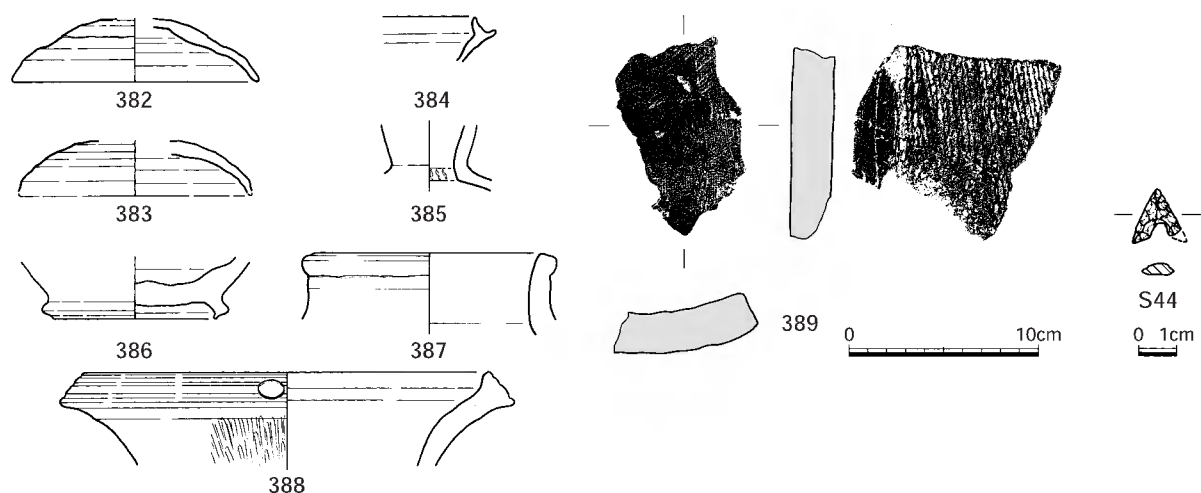
第75図 灰原出土遺物① (1/6)



381は目と推測する2つの透かし孔が残り、その上方には弧を描く接合面が4か所確認できた。復元時には、馬や牛等も案として出たが、接合面が4か所あることから耳の他に角を付す可能性が高く、また、牛は非常に類例が少ないことから鹿であると想定した。写真時の復元は島根県平所窯跡の事例を主に参考にした。須恵質で黄灰色を呈する。灰原では埴輪や陶棺以外に、須恵器382～386、備前焼387、弥生土器388、平瓦389、石鏃S44を確認した。

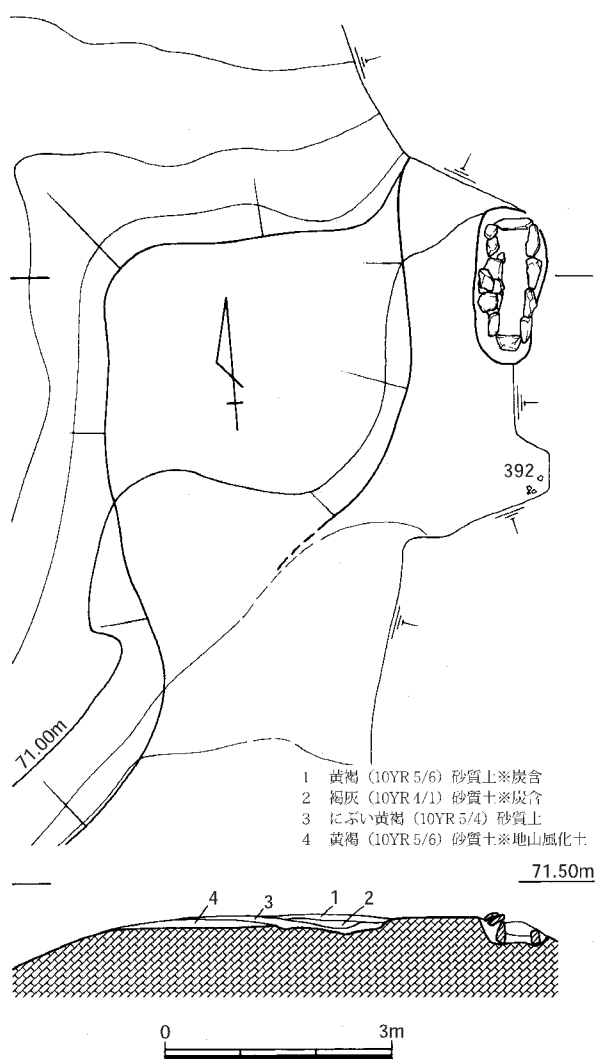
(重根)

第76図 灰原出土遺物② (1/6)



第77図 灰原出土遺物③ (1/4・1/2)

2 箱式石棺・土壙墓

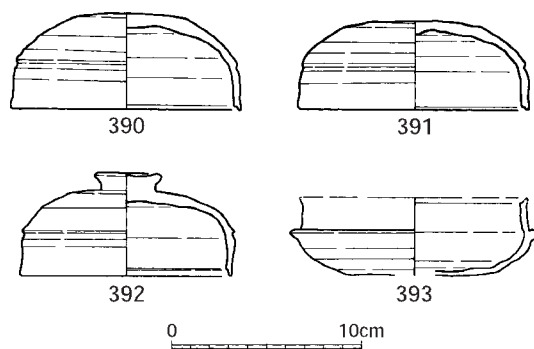


箱式石棺 1 (第15・78～79, 図版3)

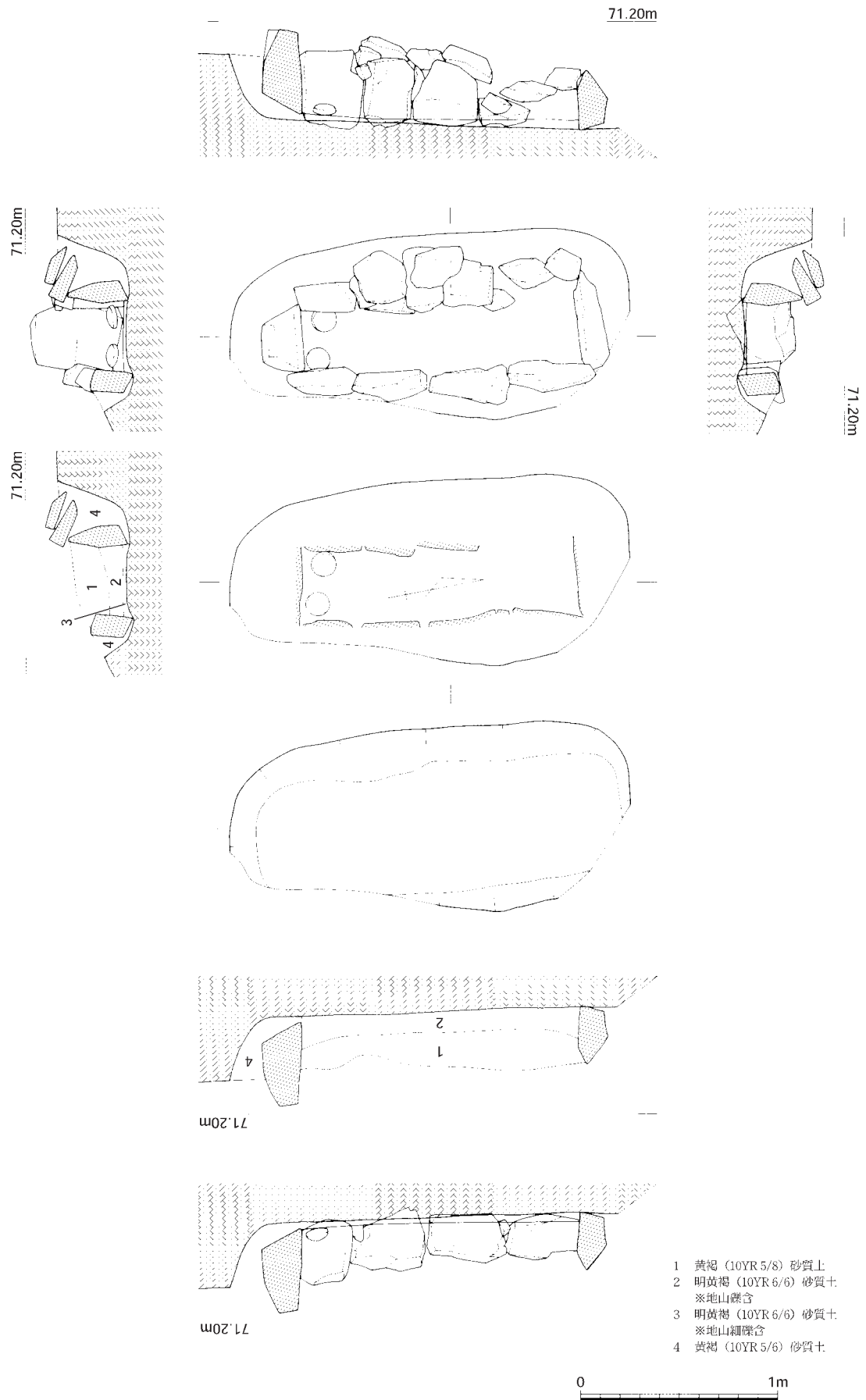
U区の北側中央に位置する。検出した時点で東側石の一部が崖面に露出し、蓋石も失われていた。

短辺に1石を立て、長辺に4石を据えた上に平石を1～2段小口積みして、長さ139cm、幅34cm、高さ49cmの棺を構築しており、その掘り方は長さ200cm、幅90cmの楕円形に復元される。主軸はN-10°-Eで尾根筋と平行し、幅が最大となる南端の床面から6世紀初頭と見られる須恵器の蓋390・391が出土した。また棺の北側や、西側を併走するくぼみからも蓋杯392・393が出土しており、小規模な墳丘が想定される。

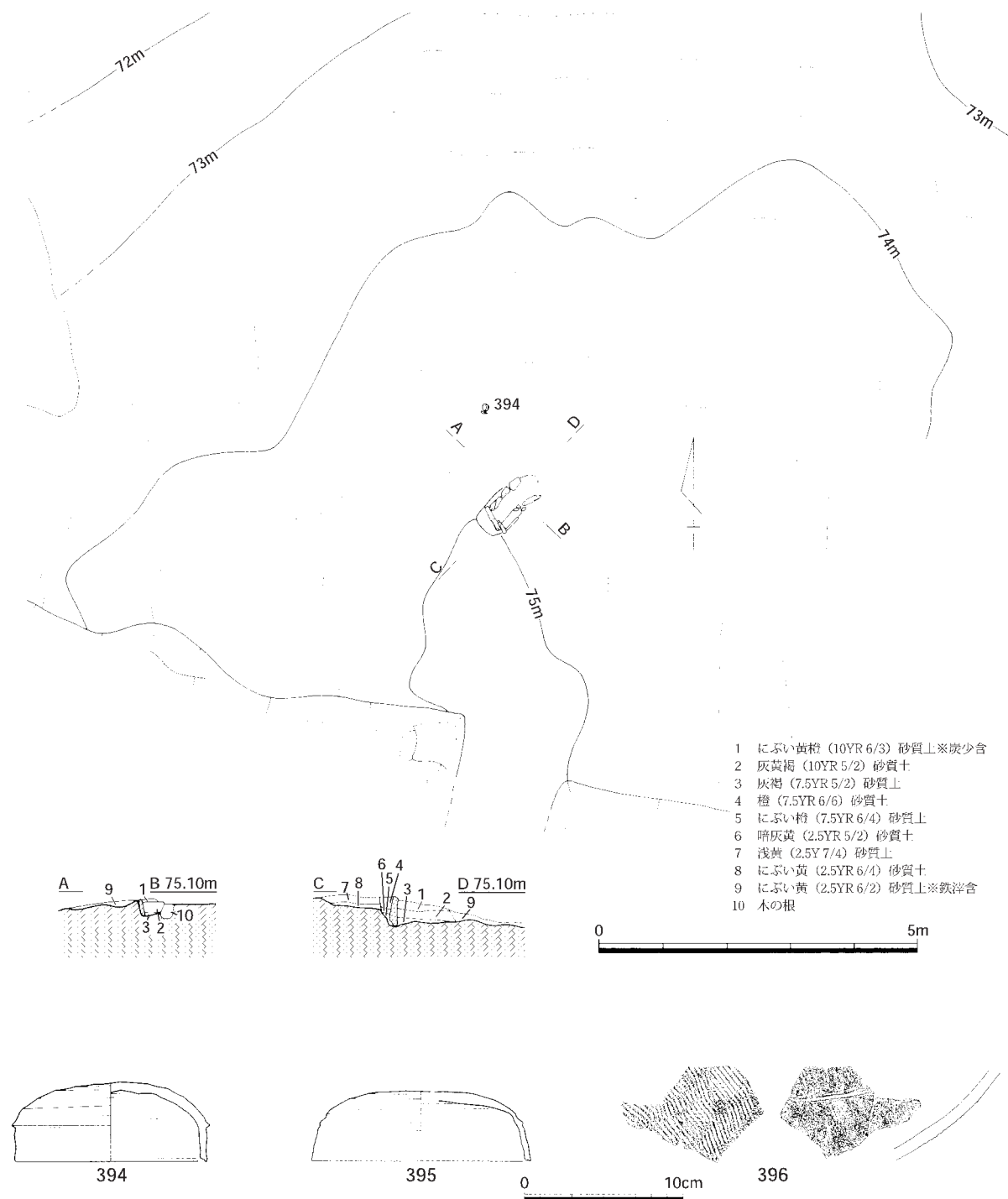
(亀山)



第78図 箱式石棺 1 周辺地形 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第79図 箱式石棺 1 (1/30)

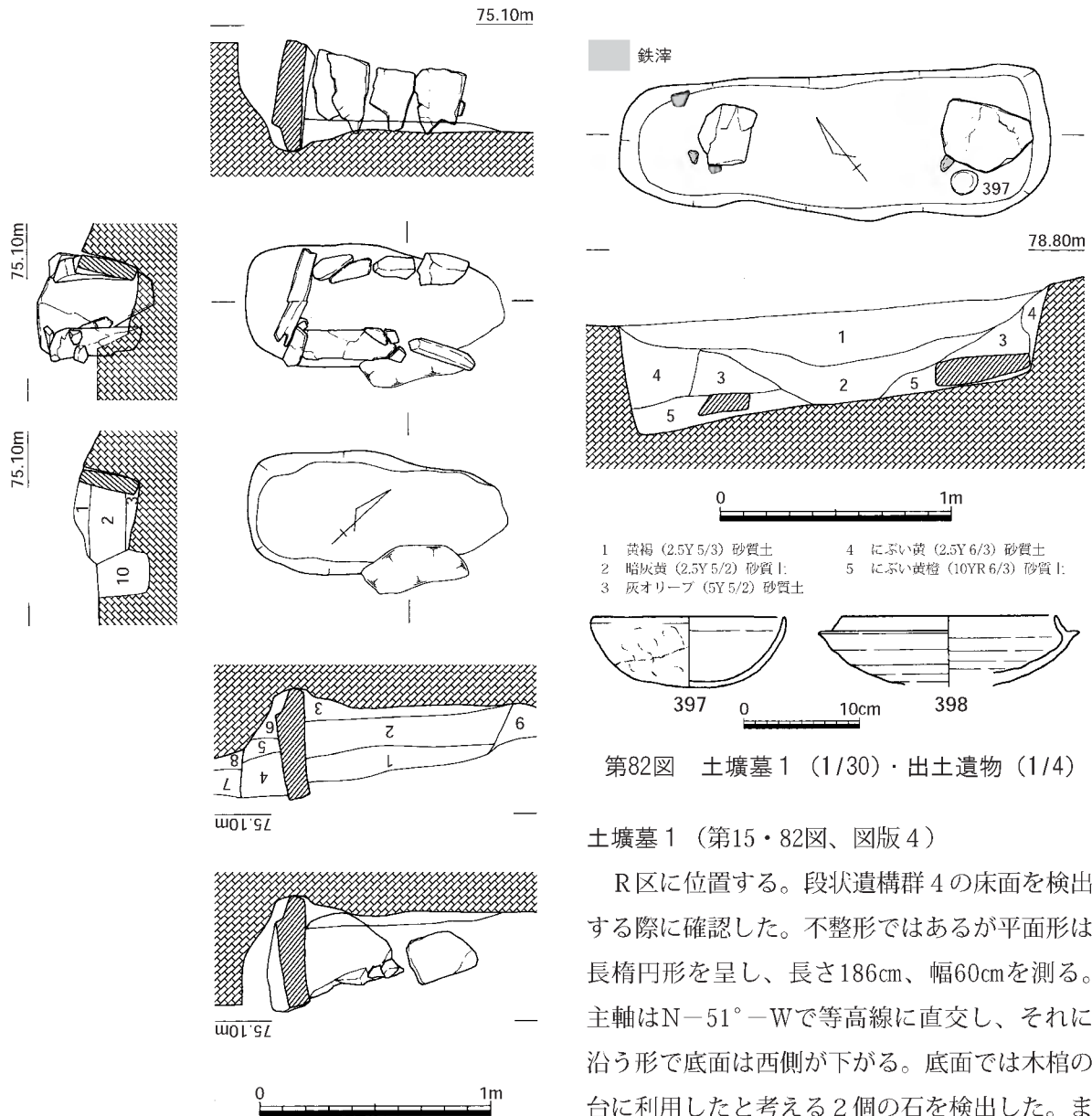


第80図 箱式石棺 2 周辺地形 (1/100)・出土遺物 (1/4)

箱式石棺 2 (第15・80・81図、図版 3)

V区に位置する。尾根頂部の平坦面で検出した。北端は削平を受けて、蓋石も残存しない。残存する棺は長さ70cm、幅は21cm、高さ32cmを測る。石材は流紋岩である。掘り方は長さ111cm、幅52cm、深さ48cmを測り、その平面形は長楕円形を呈する。主軸はN-44°-Eで尾根筋とほぼ平行する。

杯蓋394は石棺から1m離れた地点で検出した。口径12cmを測り、陶器TK47形式と類似する。395は石棺西下方で遺構検出中に確認した。石棺に伴うものではない。396は検出時に出土した。甕底部付近の破片と考える。検出時には鉄滓0.04kgを確認した。394から6世紀初頭と考える。



第82図 土墳墓1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

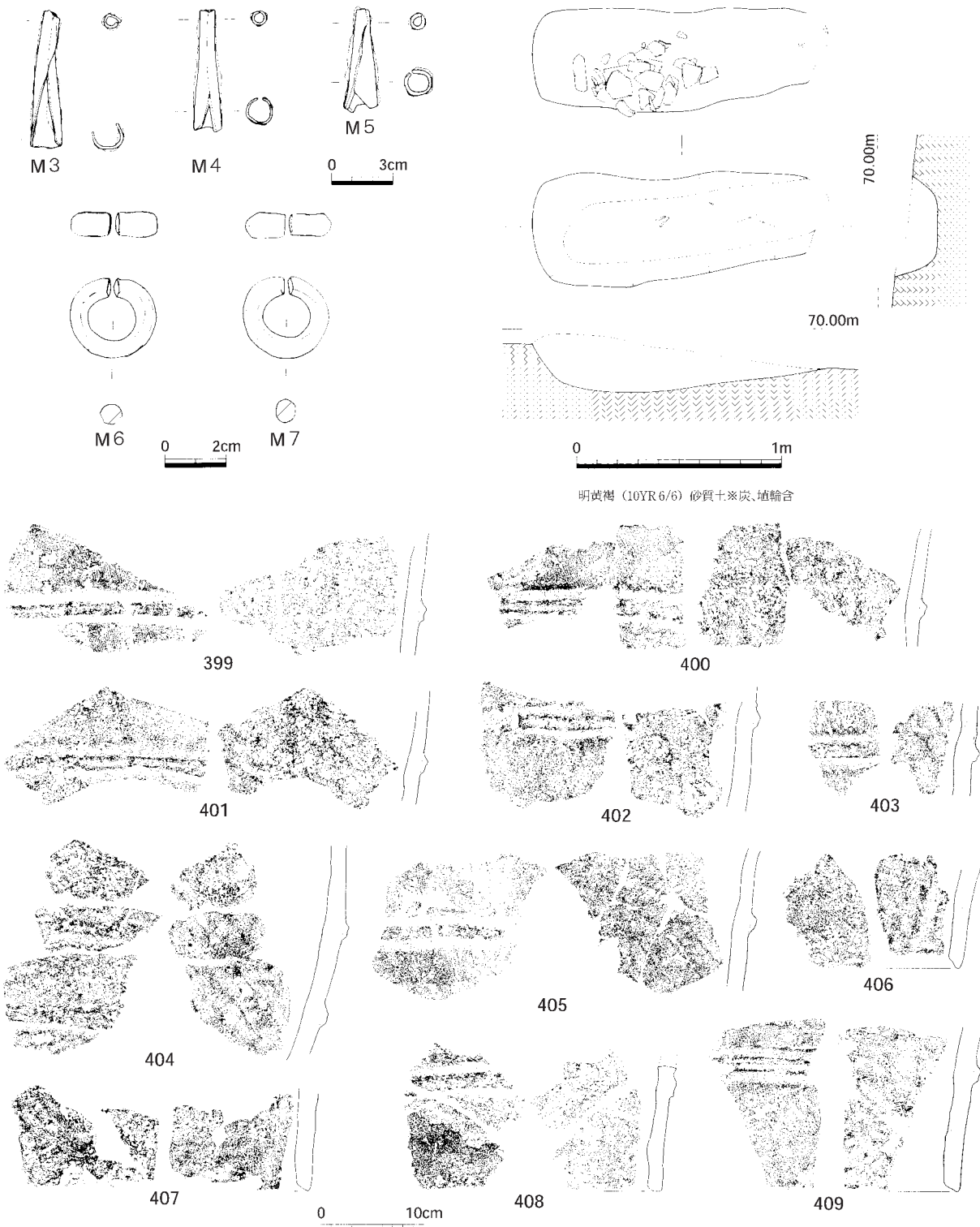
土墳墓1 (第15・82図、図版4)

R区に位置する。段状遺構群4の床面を検出する際に確認した。不整形ではあるが平面形は長楕円形を呈し、長さ186cm、幅60cmを測る。主軸はN-51°-Wで等高線に直交し、それに沿う形で底面は西側が下がる。底面では木棺の台に利用したと考える2個の石を検出した。また、石の周辺からは鉄滓が出土し、これらは棺を安定させるために利用したものとする。

土師器碗397は台石上面とほぼ同じ高さで検出した。螺旋状の粘土積み上げ痕跡が明瞭に残る。須恵器杯398は第5層出土遺物である。陶器TK43形式と類似する。このほか鉄滓が0.84kg出土し、その種別には鍛冶滓、炉内滓、炉壁溶融物がある。土器は6世紀後半に属する。(重根)

土墳墓2 (第14・83図、図版4)

土墳5と重複して検出した土墳墓で、T区の北側中央に位置する。標高70mの尾根頂部からわずかに東へ下った位置で、2点の耳環と埴輪片の集中箇所が確認され、埋葬施設が存在が予想された。このため、その周辺を精査したところ、耳環が出土した南東側はすでに失われていたものの、現状で長さ143cm、幅54cmの長楕円形を呈する掘り方が確認された。N-26°-Wを測る主軸は北東に下る尾根筋と平行し、深さ19cmにある底面は北西に向かってわずかに傾斜している。墓壙中央より北西へ60×30cmの範囲に分布している埴輪片は数十点ある。いずれも円筒埴輪5c類の胴部ないし基底部片で、器表の風化が著しい。これらは墓壙底より高い位置にあり、意図的に配された様子はいくつか見られる。

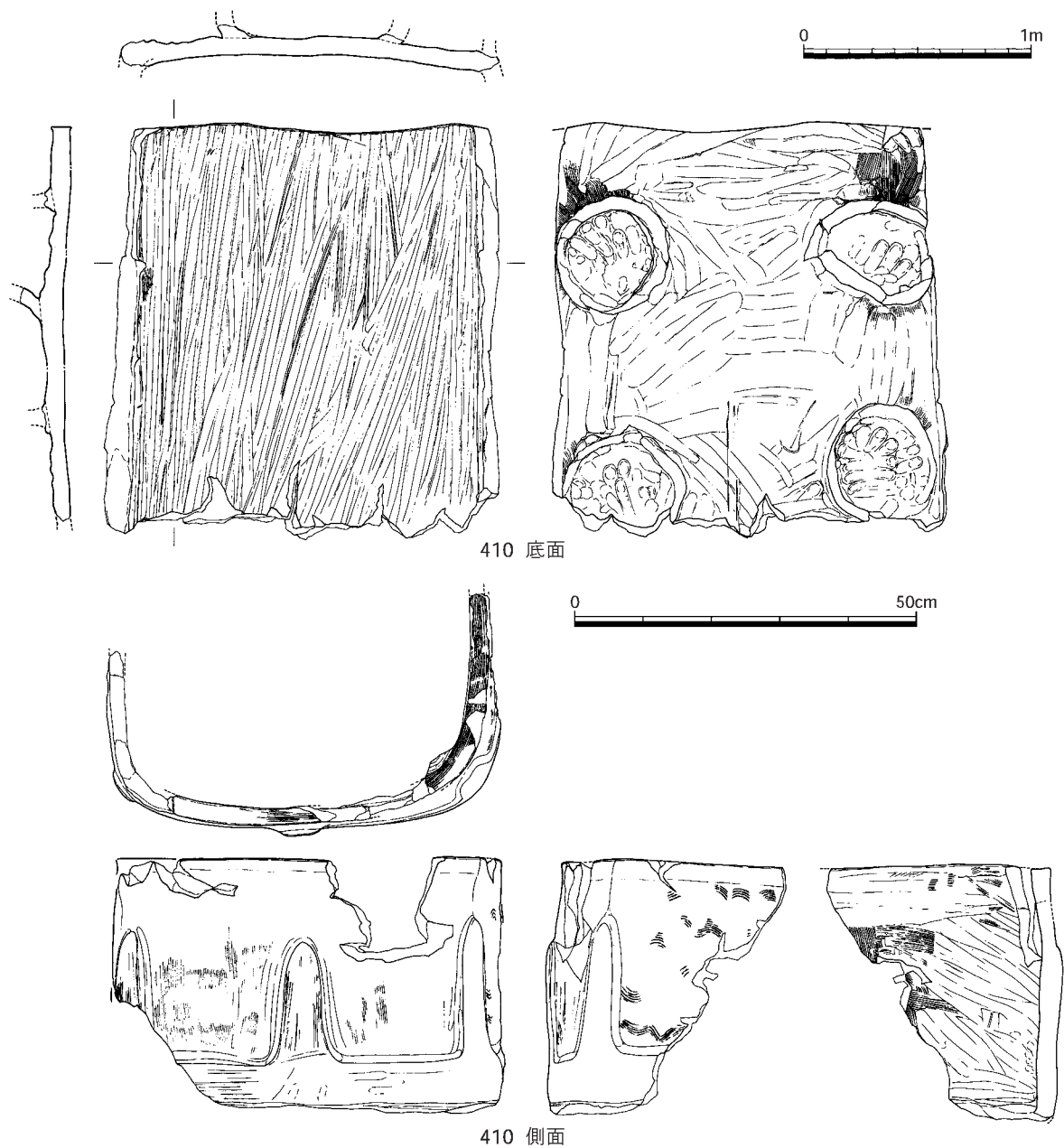
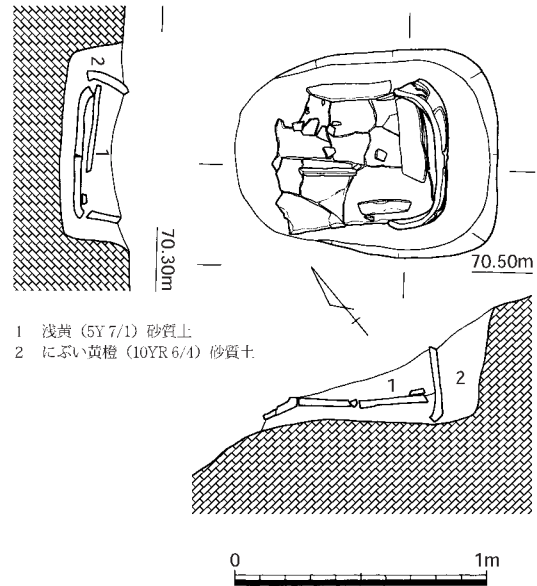


第83図 土壙墓2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

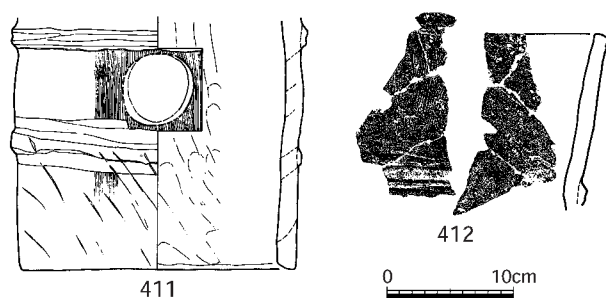
また、複数個体あるようで相互に接合するものは少なく、墓上に樹立されていたものとは考えにくい。埴輪片の下から出土した鉄器M3～5は、鉄板を高さ5.9～6.6cm、径1.5cmの円錐形に折り曲げたもので、その形状や出土状況からして鉄鐸の可能性が指摘される。南東の土壙底から出土した2点の耳環は、径0.8cmの銅芯を曲げて径2.8cmの環状にした金環で、相互に11cmほど離れている。時期は判断し難いが、遺物などから6世紀後半と考えたい。(亀山)

土壙墓3（第15・84・85、図版4）

J区に位置する。西向き急斜面の標高70m付近で検出した。この周辺は数十年前に地滑りが起きたと地元の方から教示を得た。土壙墓3を検出した地点は立つことも難しいほどの急斜面であるが、当時は現在よりは緩やかな斜面であったと考える。地滑りのため、遺構の西半側も大きく削平を受けたようだ。残存部から、掘り方は隅丸長方形を呈していたと考える。現存する長さは102cm、幅は82cm、深さは45cmを測る。主軸はN-50°-Wで等高線に直交する。



第84図 土壙墓3（1/30）・出土遺物①（1/10）



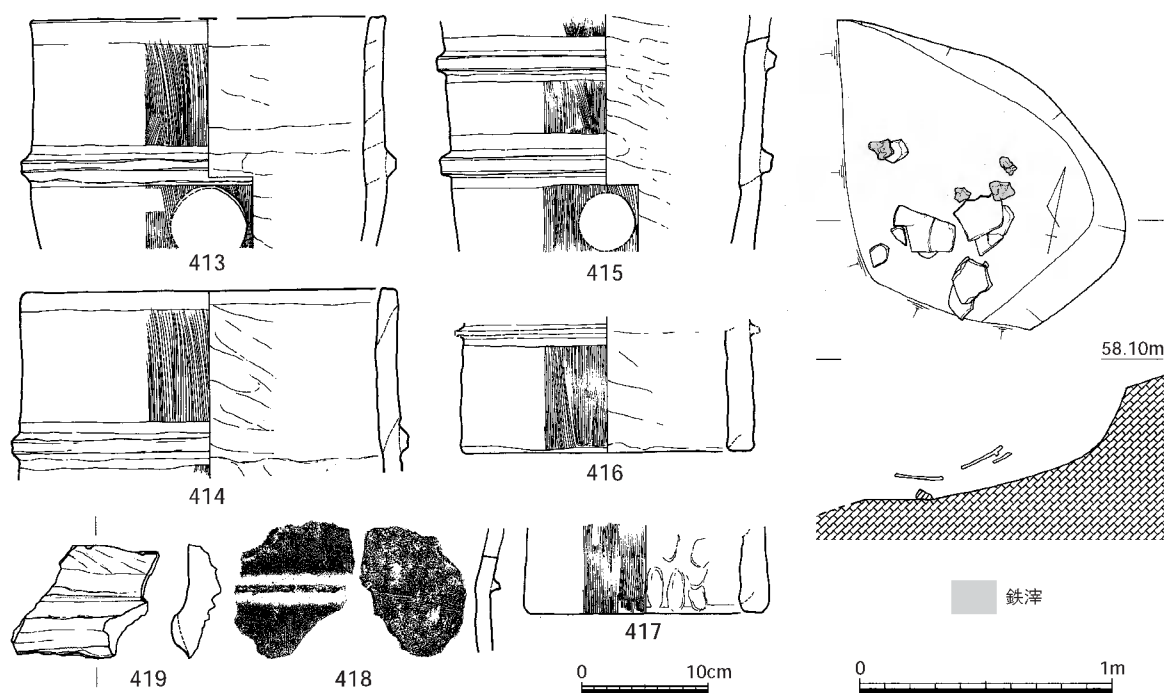
第85図 土墳墓3 出土遺物② (1/6)

埋葬施設には陶棺を利用する。陶棺は斜面
上方にのみ身の側面部が残存する。底面も
残存するが、本来中央部分となるはずの切
断面が180°反対を向き、側面部に面する。
脚も破損して残存しない。こうした出土状
態から、この陶棺は地滑りのため破損した
のではなく、当初から破損していたものを
棺状に組み合わせて使用したものであった
と想定する。2号窯で焼成を行い、何らか

の理由で破損したものを二次的に棺材として利用したのだと考える。棺の蓋は検出時にすでに残存せず、不明である。

410底面の内面には、筋状の調整痕が明瞭に残る。長軸方向に工具を素早く動かし、平滑に仕上げる。切断面は丁寧にナデを行う。外面は脚を接合後、接合部分から脚にかけて板状工具でハケ調整を行う。その後、外面全体を不定方向のナデで仕上げる。脚を接合した中の部分は調整がおよばないため、最初の段階に指で粘土を押圧した痕跡が残る。410側面の内面は、板状工具によるハケ調整後、底面内面と同様の調整を行う。外面には突帯を付した後に丁寧なナデで仕上げ、4条1単位の波状文を施す。縦方向の突帯は上端を丸く仕上げ、口縁部には達しない。口縁部上端面はハケ調整を行う。411・412は埋土中で確認した。円筒埴輪5c類と類似するが、焼成が堅緻でやや印象が異なる。6世紀後半に属すると考える。このほか、検出中に鉄滓を0.04kg（有磁性）確認した。（重根）

3 土墳



第86図 土墳7 (1/30)・出土遺物 (1/6)

土壙 7 (第14・86図)

F区に位置する。1号窯上端付近南直横80cmの地点で検出した。西側は削平を受ける。残存部長軸は108cm、短軸は105cm、深さは20cmを測る。平面不整形で、底面は斜面に沿う形で傾斜する。

出土遺物には円筒埴輪413～418と陶棺419がある。いずれも破片である。413・414は5c類の最上段口縁部にあたる415も5c類である。

416・417は6a類の基底部である。

417は基底部内面に押圧痕が明瞭に残る。418も6a類である。419は陶棺の身の一部と考えるが、何らかの形象埴輪の一部である可能性もある。これらの遺物は2号窯で焼成したものと想定できることから、6世紀後半に属すると考える。

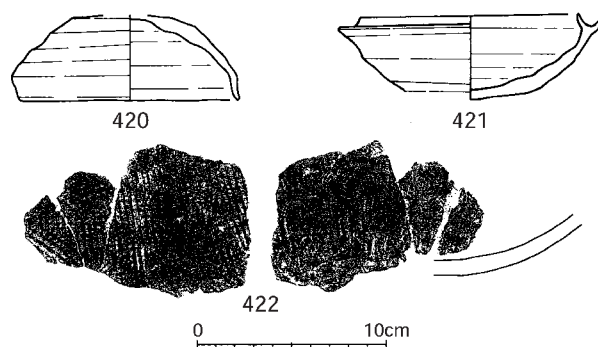
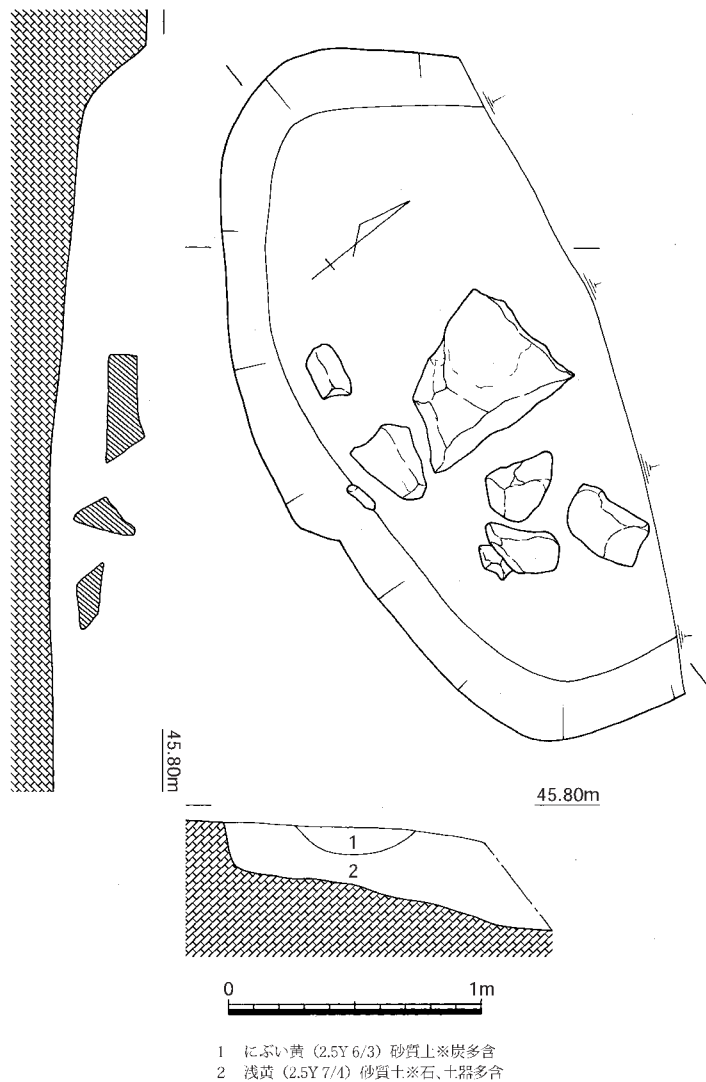
このほかに鉄滓を1.05kg（内磁性0.32kg）検出した。先に報告した土壙7とほぼ同時期である埴輪集積地や土壙墓1からも鉄滓が出土している。また、竪穴住居3の埋土中からも多量の鉄滓が出土し、確認調査時も様々な地点で見つかった。今回の調査範囲内では製鉄に関わると断定できる遺構は検出できなかったが、調査対象地と同一尾根上か、極めて近い地点に製鉄遺構が存在すると想定する。鉄滓の出土状態から、先に挙げた遺構と同時期の6世紀後半か、あるいはそれ以前に操業を開始していたと考える。

土壙 8 (第14・87図)

K区に位置する。尾根先端部の平坦面で検出した。長軸286cmを測る。埋土中には50～100cm大の石を含む。

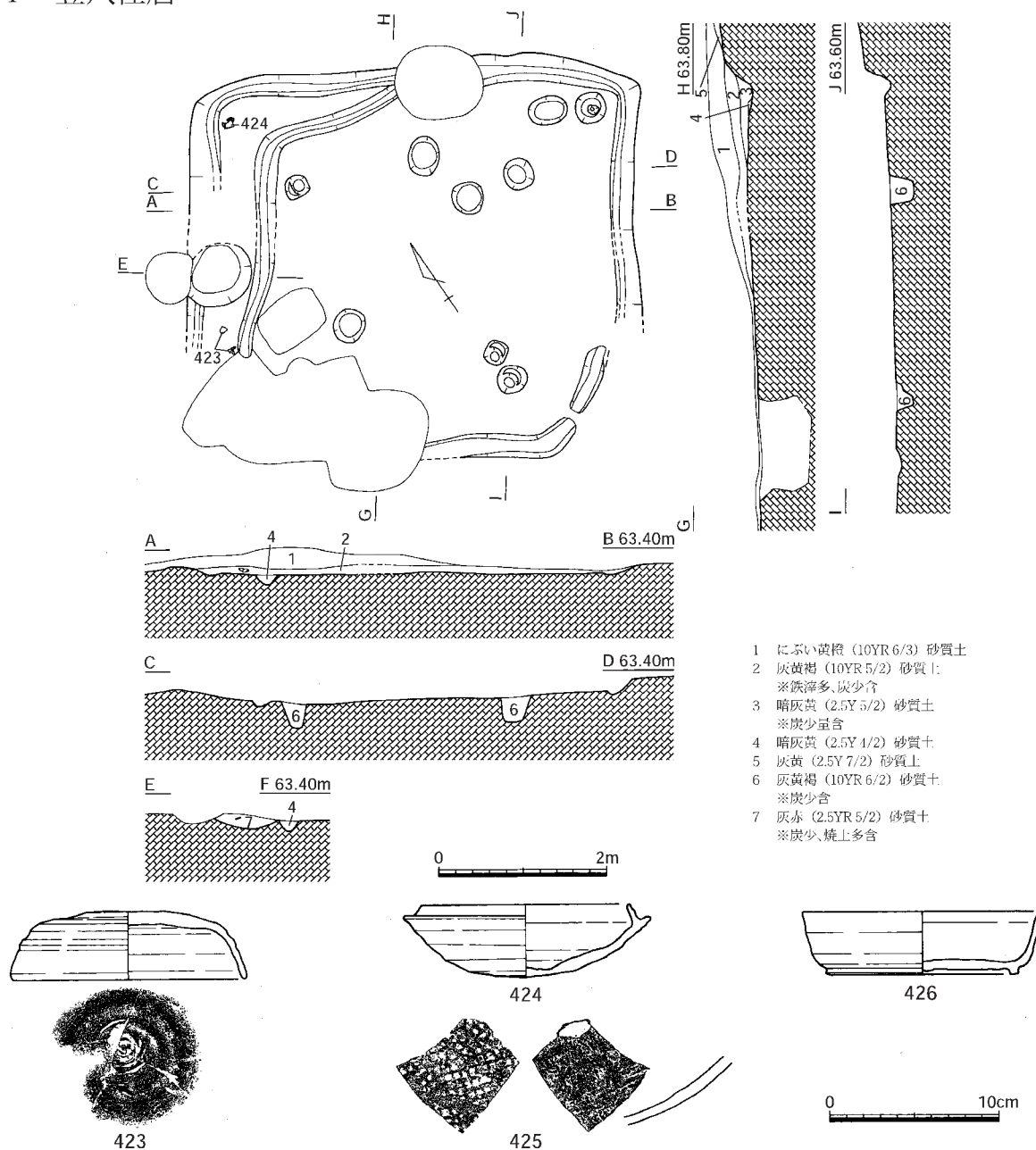
埋土中で須恵器420～422を確認した。杯蓋420は歪みが著しく、天井部のヘラケズリは雑である。杯身421は外底面周辺ケズリ、中央部分ナデを行う。陶邑TK217形式と類似する。7世紀前半に属すると考える。

(重根)



第87図 土壙 8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

4 竪穴住居



第88図 竪穴住居 3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

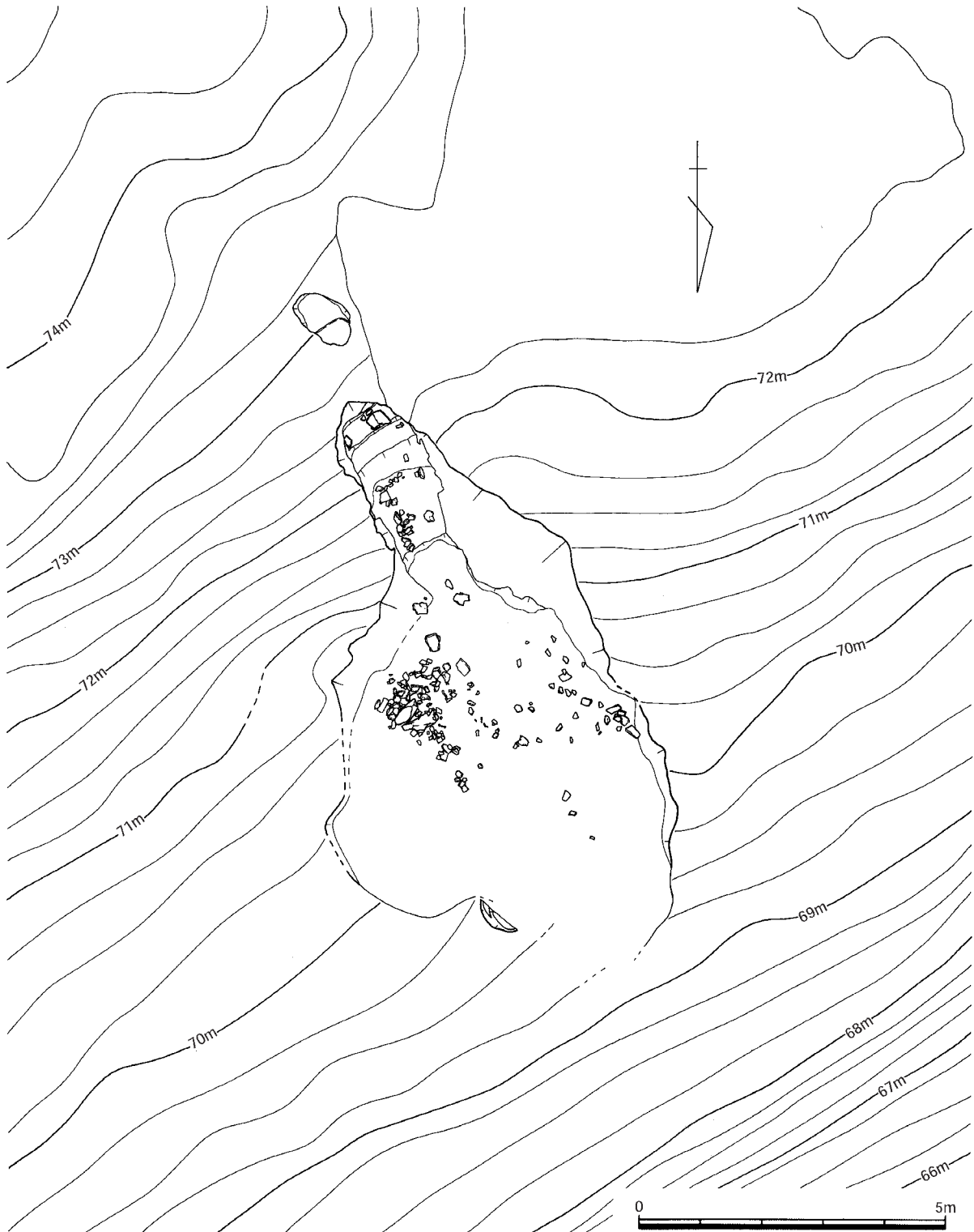
竪穴住居 3 (第15・88図、図版3)

A・H区に位置する。西向き斜面の平坦面で検出した。土壌19～21は、この遺構が浅く埋没した後の平坦面を利用したものである。壁体溝から1回以上の建て替え、あるいは拡張が行われたと想定する。最終段階の平面形は方形を呈するが、南側が削平を受けており不明瞭である。長軸は5.25m、短軸は4.76m、床面積は約25㎡を測る。主柱は4本であるが、1本は近現代攪乱のため残存しない。

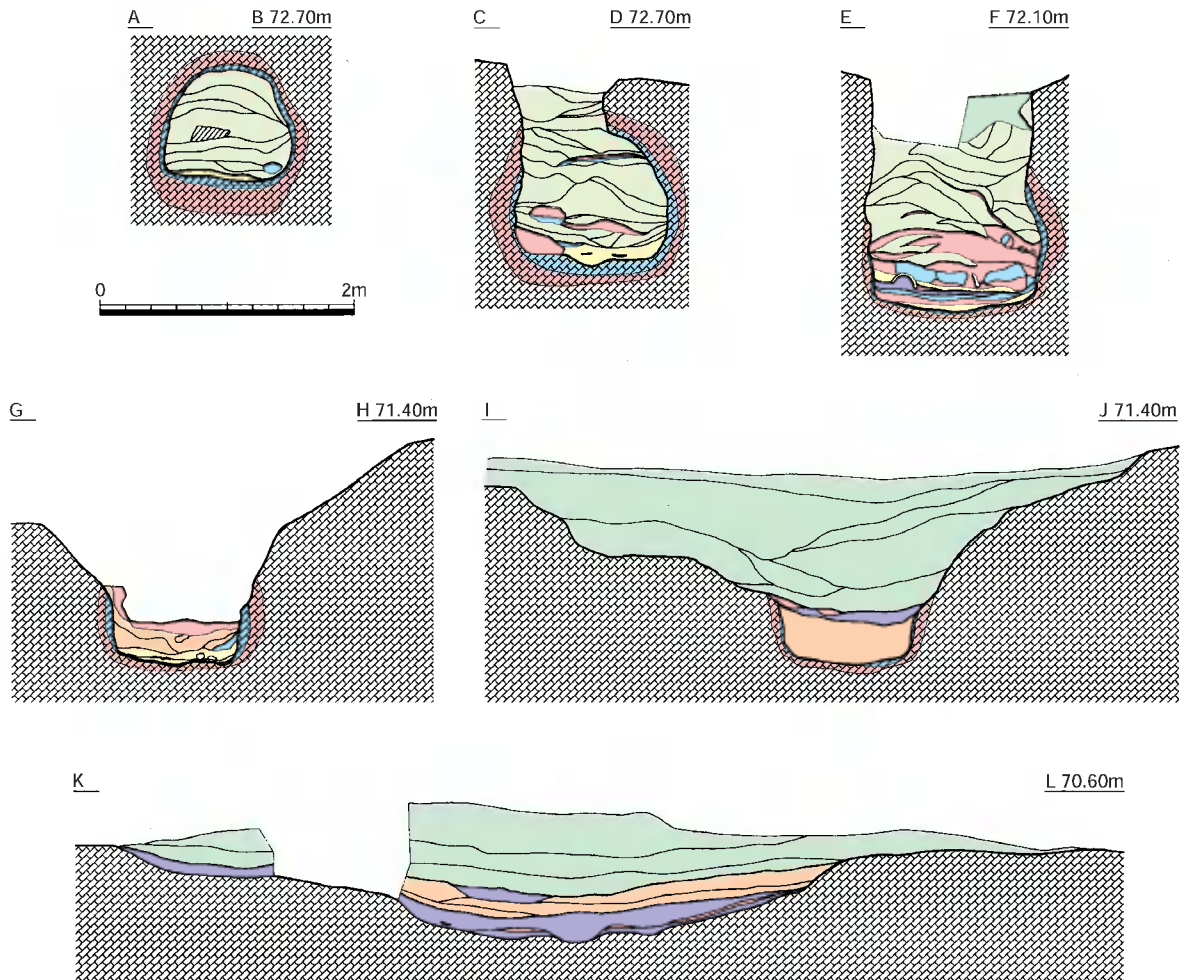
床面で杯蓋423・杯身424を検出した。424に新しい傾向がうかがえるが、陶器TK43形式と類似する。6世紀後半に属する。426は検出時出土遺物である。埋土中から鉄滓が18.96kg（内磁性4.56kg）出土し、その種別には炉内滓、炉外流出滓、製鉄炉壁、炉壁溶融物、椀形鍛冶滓がある。（重根）

第4節 古代以後の遺構・遺物

1 窯



第89図 3号窯 周辺地形 (1/100)



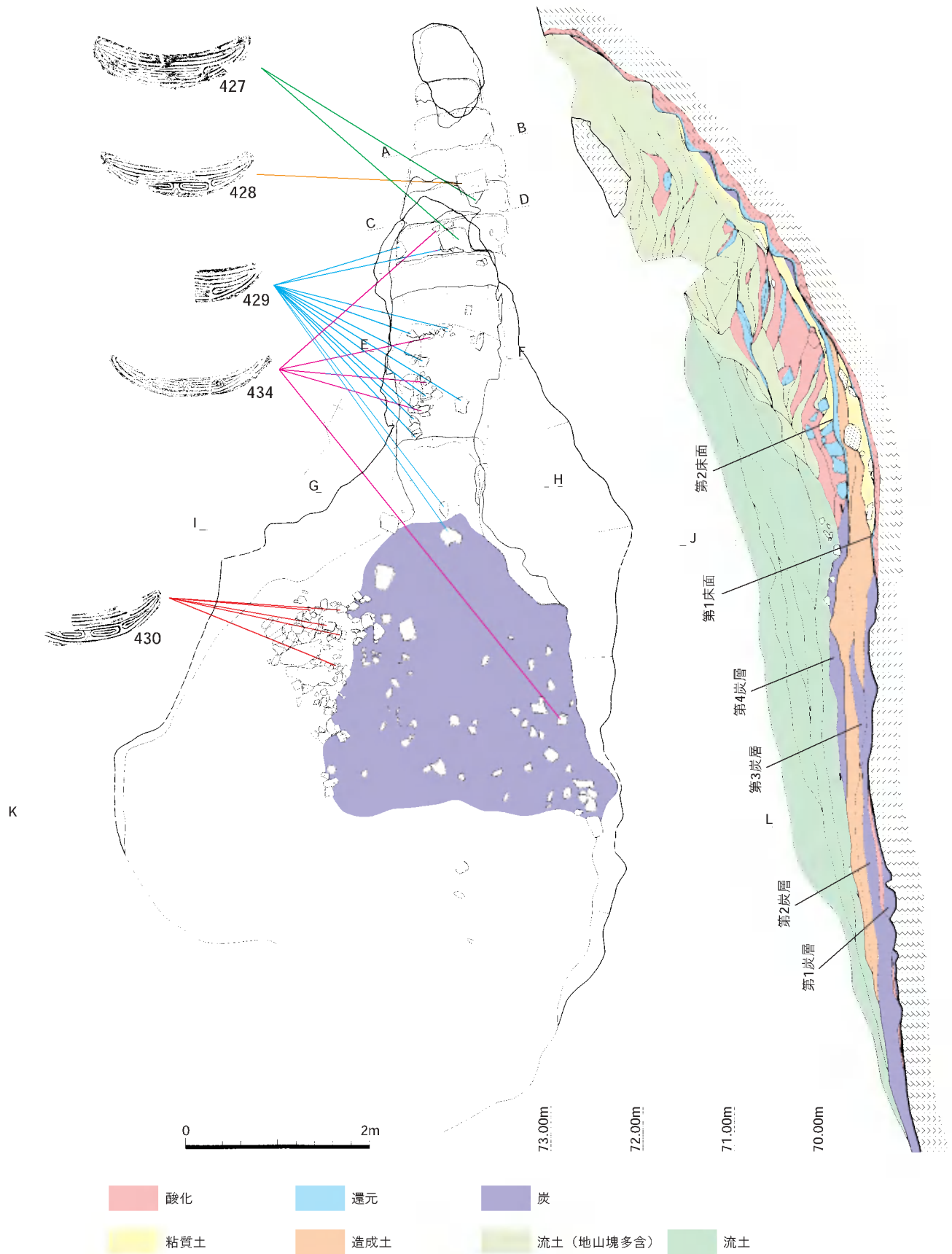
第90図 3号窯 横断面 (1/60)

3号窯（第15・89～106図、図版11）

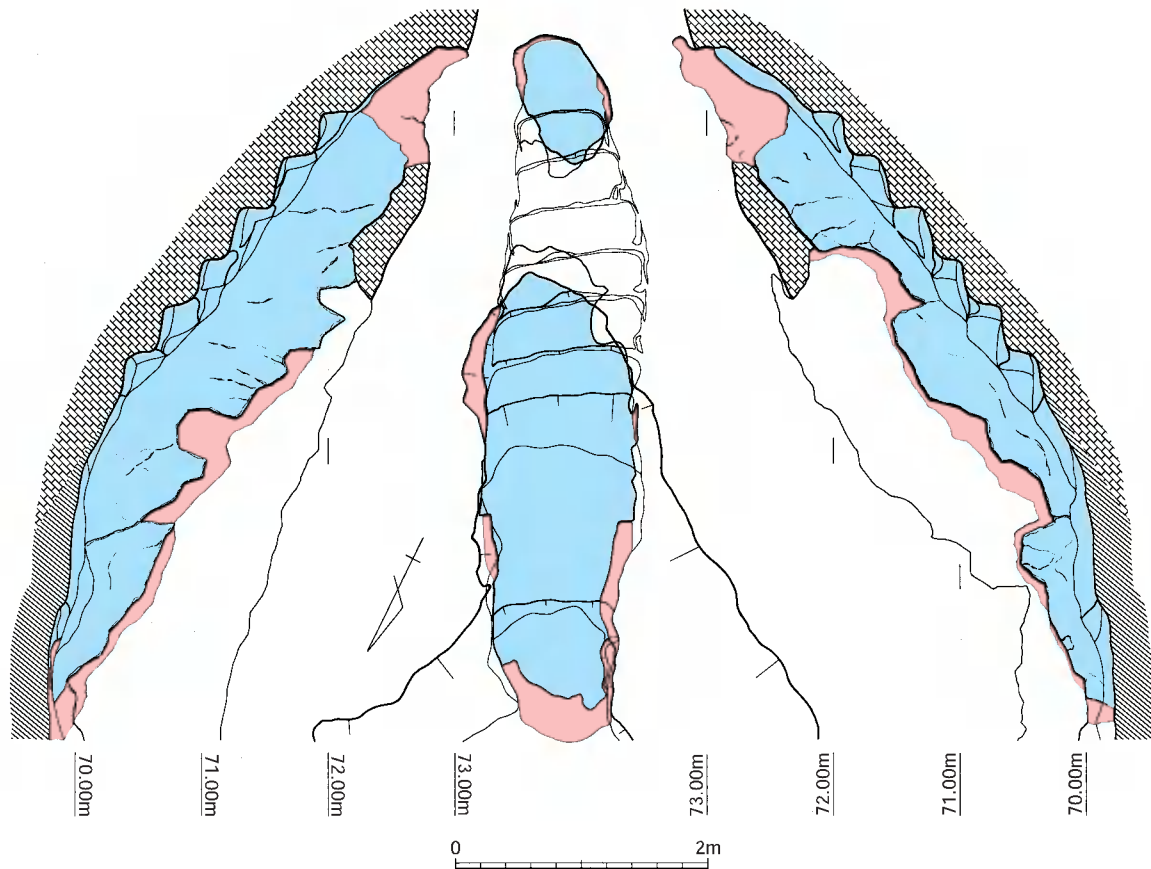
P・Q区に位置する。尾根頂部やや下の谷状となる地点で検出した。1・2号窯との比高差は15mである。竪穴住居2埋没後のくぼみを利用し、等高線に直行する形で基盤層をトンネル状に掘り込む地下式の窖窯である。焚き口は北側を向く。上半部は天井部が残存する。

窯体の長さは約7m、幅は約1.4mを測り、床面上半には6つの段を持つ。床面の傾斜角度は焚き口付近から段の手前までは10°程度であるが、段を有するところから上端の煙出しまでは40°におよぶ。床面は2面確認でき、築窯当初の床面（第1床面）に30cmほど砂質土を造成した後に、最終床面（第2床面）を形成する。このとき、造成を行うのは焚き口から段の手前までであり、階段部分は築窯当初から最終段階まで床面を貼り直すなどの大きな修復は行わない。焚き口から焼成部前半は造成のため傾斜角度は緩やかになり、築窯当初より短くなる。上端煙道部は一度修復を行う。これは、焚き口部の修復を行う際に、煙道の角度を変えることを目的として行ったと考える。

灰原では、炭層を4層確認した。第1、2炭層が第1床面に、第4炭層が第2床面に伴う。第3炭層は最終床面形成時の造成土間に入り広範囲に広がるものでもないことから、焼成の結果生じた炭層ではなく、造成の一行程を示すものと想定する。第1炭層と第2炭層の間では焼土層を確認した。この焼土層は足場を整えることを目的としたものとする。



第91図 3号窯 第2床面遺物出土状態・縦断面 (1/60)



第92図 3号窯 第2床面・側面 (1/60)

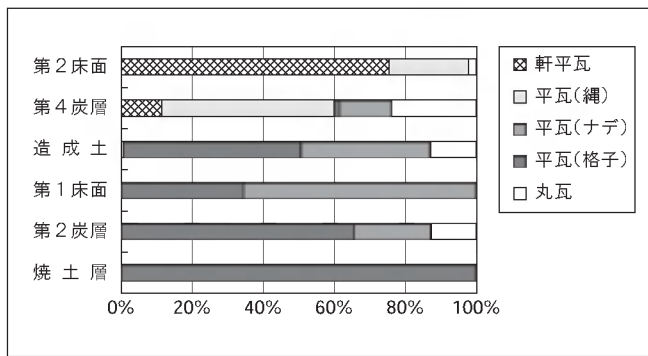
第2床面検出時の窯体内は天井、側面、床面いずれも黒灰色化しており、硬質である。いわゆる還元色を呈する。また、天井部が崩落した部分からは赤化した基盤層が確認できる。床面には上端煙道部を除いて全面に炭が堆積していた。樹種はクリ、ケヤキ、クスノキ科、イネ科、コナラ属である。

第1床面西壁沿いで幅10cm程の細い溝を検出した。この溝は階段部手前から掘削をはじめ、焚き口付近で窯体中軸に向かいながら幅を広げていく。そして、そのまま灰原中央を通るが、焚き口から1.2m付近のところで、焚き口手前両脇から掘削を始める2本の溝と結節する。溝内には炭が充満する。この溝は窯体内では床面還元層を掘り抜き、灰原では焼土層と第1炭層を切る。このことから築窯時から存在したものではなく、焼成時に何らかの不具合が生じたために改善策として施したものとする。その目的は湿気を防ぐことにあると想定するが、明確な根拠はない。また、第1床面検出時に拳大から人頭大の石を多数確認した。これは、造成を行う際の嵩上げを目的としたものとするが、暗渠としての機能を果たした可能性もある。

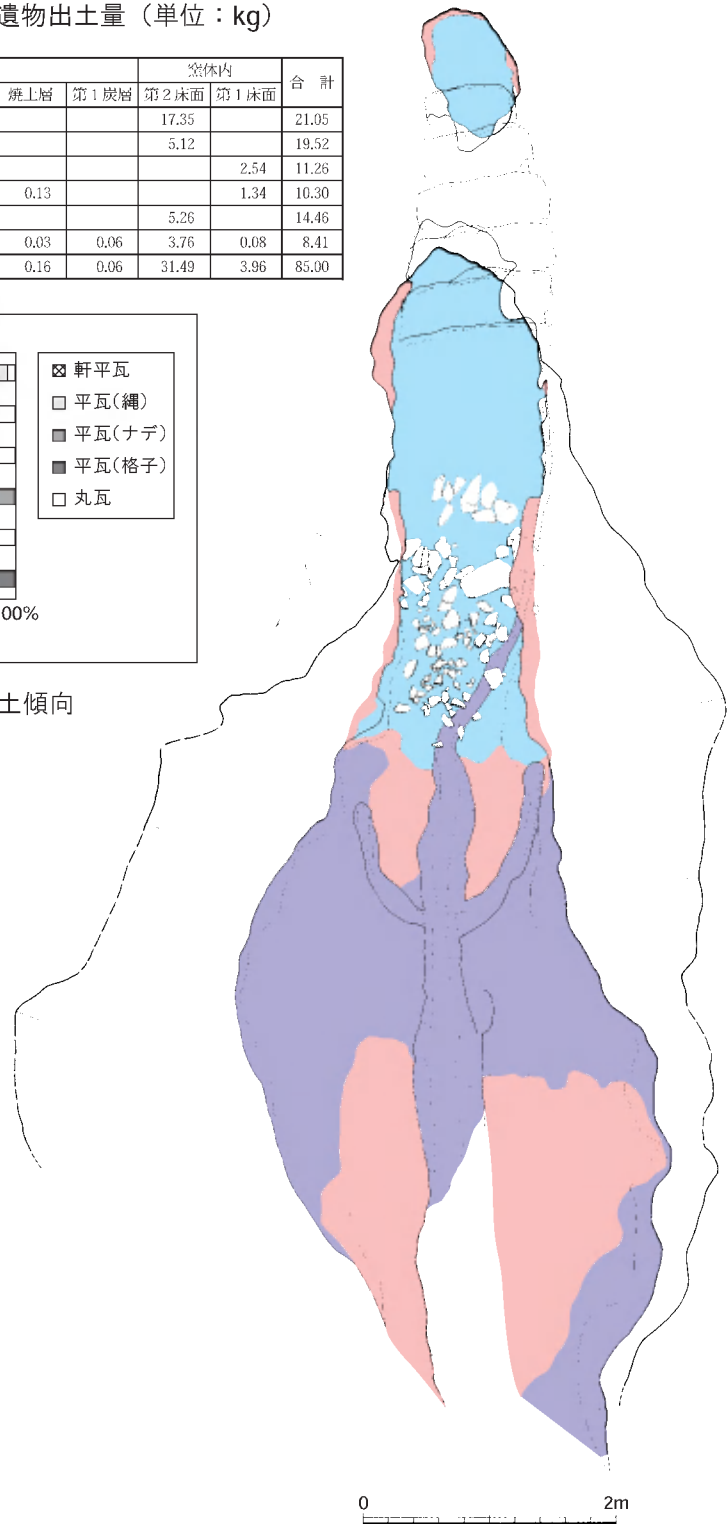
3号窯は床面上半に段を有する地下式の窖窯である。窯体は焚き口から階段部に向かって幅が広がり、階段部から煙出しに向かって細くなる。同様の構造を有する類例は各地に存在する。例えば岡山県内では倉敷市寒田窯跡群、二子御堂奥古窯址群、都窪郡山手村福山城址窯跡がある。こうした事例と築窯当時の姿を比較すると、同様の構造を有しながらも3号窯は焚き口から段を有するまでの間が極端に長い。また、階段の段数も少なく、規模も小さい。この違いが何に起因するものかは特定し難いが、土井遺跡が旧山陽道と近いとはいえ当時の中核部からは離れた地点に位置すること、遺物の出土量が少ないことなどが検討する材料となると考える。

第3表 3号窯 出土地点別遺物出土量（単位：kg）

	流上	灰 原						窯体内		合 計
		第4炭層	造成土	第3炭層	第2炭層	焼土層	第1炭層	第2床面	第1床面	
軒平瓦	0.44	3.26						17.35		21.05
平瓦（縄）	0.58	13.81	0.03					5.12		19.52
平瓦（ナデ）	2.02	4.14	1.47		1.09				2.54	11.26
平瓦（格子）	3.07	0.42	2.02		3.33	0.13			1.34	10.30
丸瓦	1.25	6.78	0.52		0.65			5.26		14.46
分類不可	1.07	2.66	0.72		0.03	0.03	0.06	3.76	0.08	8.41
合 計	8.42	31.07	4.76	0.00	5.10	0.16	0.06	31.49	3.96	85.00

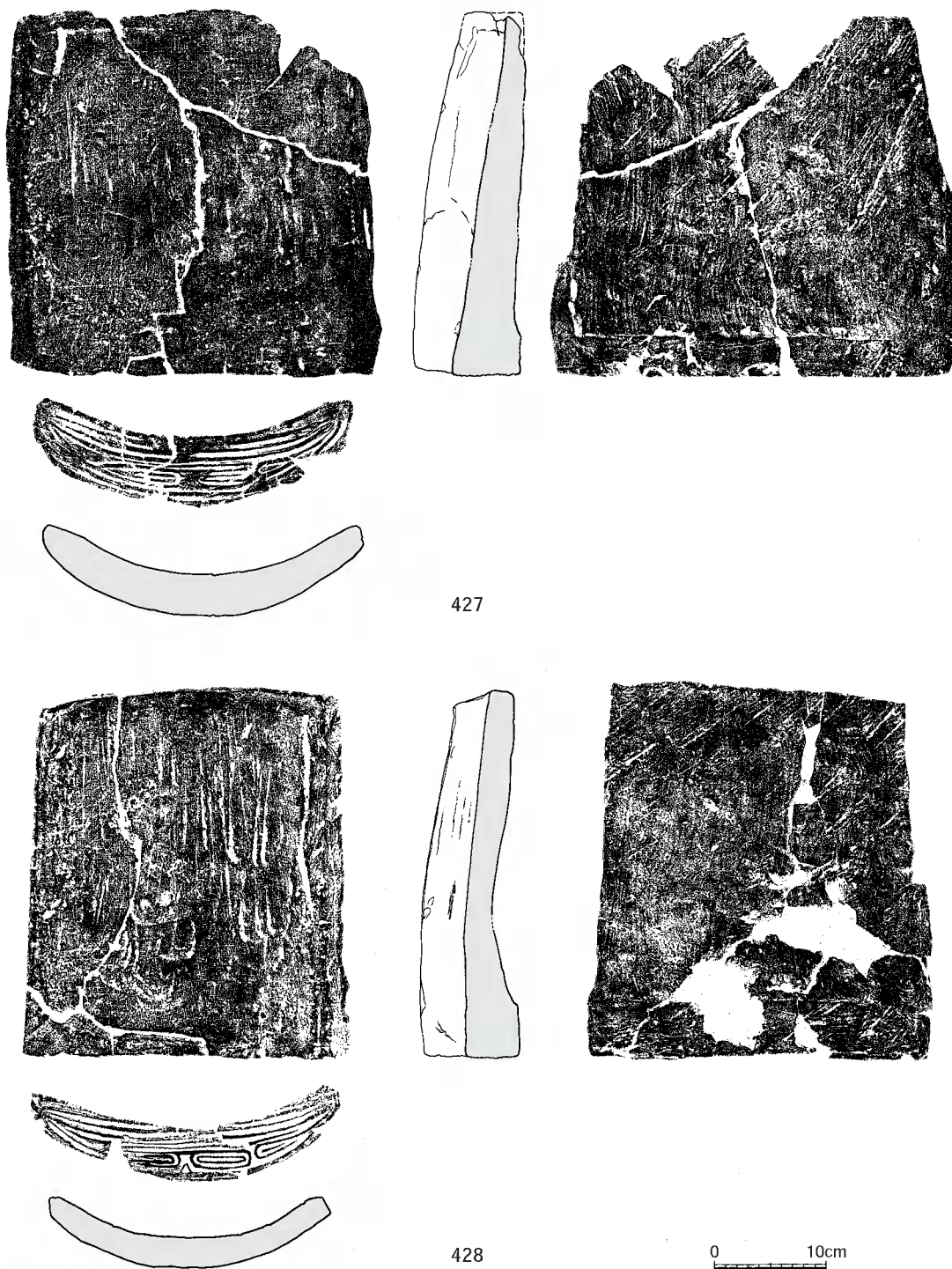


第93図 3号窯 地点別瓦出土傾向



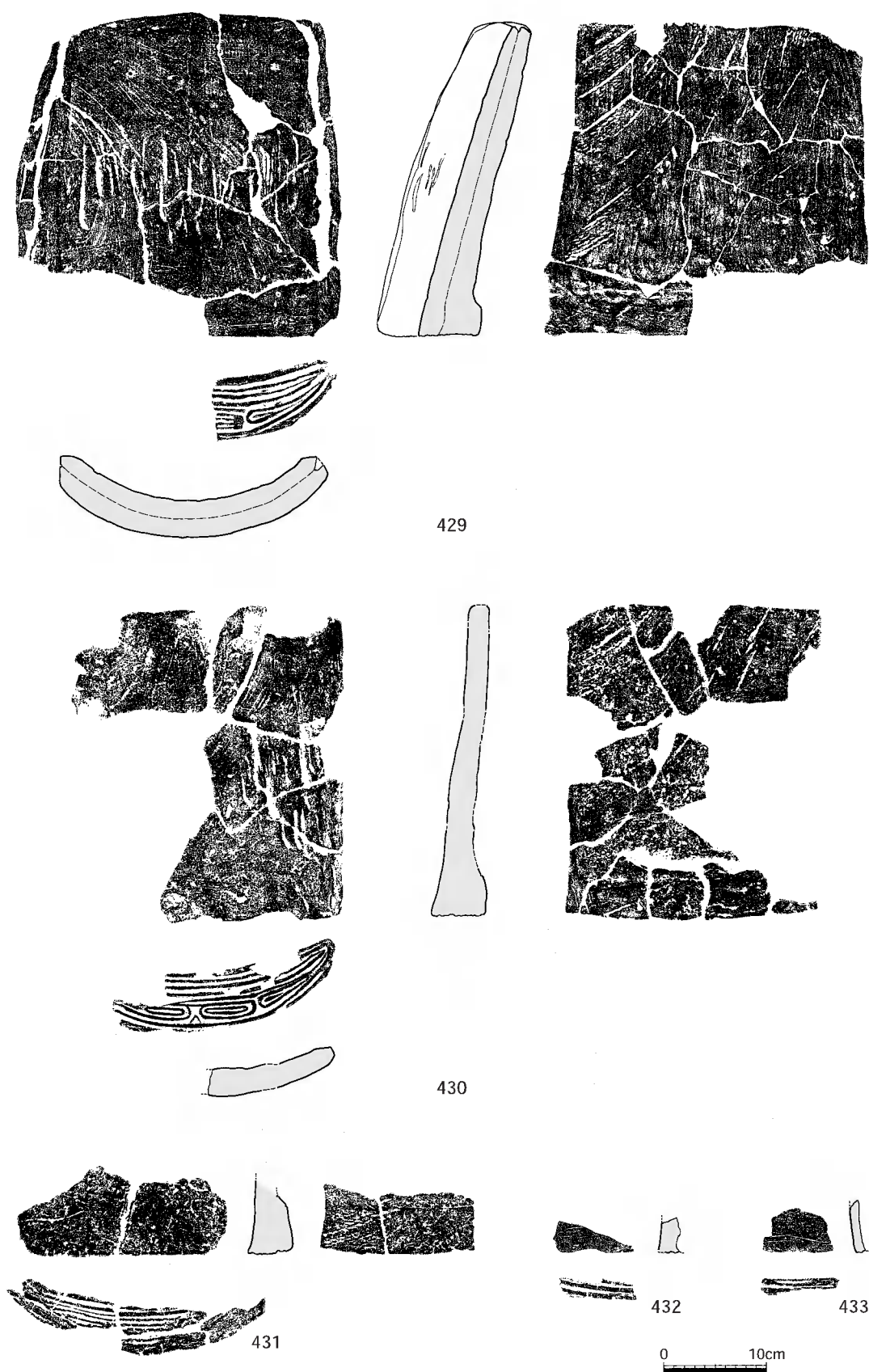
第94図 3号窯 第1床面遺物出土状態（1/60）

出土遺物は瓦と須恵器である。第2床面では瓦を確認した。窯体内には多くの軒平瓦が破損した状態で残存する。第4炭層で検出した瓦と接合するものもある。第1床面には須恵器が多く残存し、その中に瓦が数点混在する。第1床面に伴う第2炭層でも瓦とともに須恵器が出土したが、同時に焼成したかは不明である。第1床面では須恵器と瓦を、修復後の第2床面では瓦のみを焼成したと考える。



第95図 3号窯 第2床面・灰原出土遺物① (1/6)

427～440は軒平瓦である。全て同じ瓦当文を有し、同様の調整痕が確認できる。瓦当文は下弦中心部に三角形を配し、全面に弧線を巡らすことで文様を形成する。文様は左右非対称である。この瓦当文の類例は確認できなかった。凸面は全面にケズリの痕跡が確認でき、一部縄巻きの板状工具によるタタキが残存する。凹面は糸切り痕、布目、棒状工具痕が観察できた。糸切り痕は対角線方向に弧を描く。こうした調整痕から成形過程をつぎのように考える。まず、糸等を使用して粘土板を切り取る。



第96図 3号窯 第2床面・灰原出土遺物② (1/6)

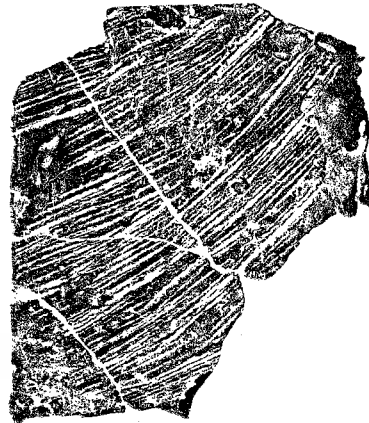


第97図 3号窯 第2床面・灰原出土遺物③ (1/6)

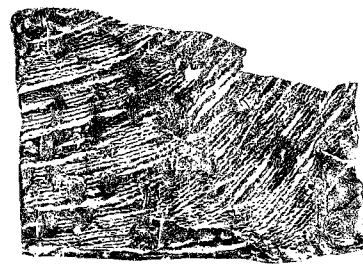
このとき瓦当面として使用する方を厚くしておく。つぎに、切り取った粘土板を成形台の上に置き、縄巻き板状工具で叩き締める。側面の面取りも行う。その後、顎とする部分を決めて、ヘラ状工具で目印となる線を刻む。そして、狭端から線に向かってヘラ状工具で削り、顎部を作り出す。いわゆるケズリ出しである。顎部は先に行った方向と90°向きを違って同様の工具で削る。顎部境界には縄痕が観察できず、そこから離れた狭端や顎に縄痕が残るのは、こうした調整過程によるためである。最後に、範で瓦当文を押して取り上げ、凹面を棒状工具で叩き、場合によっては端部の面取りなど行い形を整える。

軒平瓦は第2床面と第4炭層で確認した。434は窯体内床面で検出したものと第4炭層で検出したものが接合した。いずれも焼成は悪く、軟質である。429や435などは灰色を呈し、燻されたかの印象を受ける。

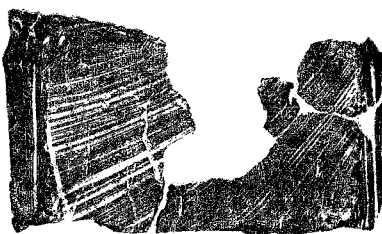
441～447は、凸面に縄巻きの板状工具タタキ痕が残る平瓦（以後、平瓦〔縄〕とする）である。工具は軒平瓦と共通する。成形過程も同様であるが、顎部は必要ないため凸面のケズリは行わない。第



441



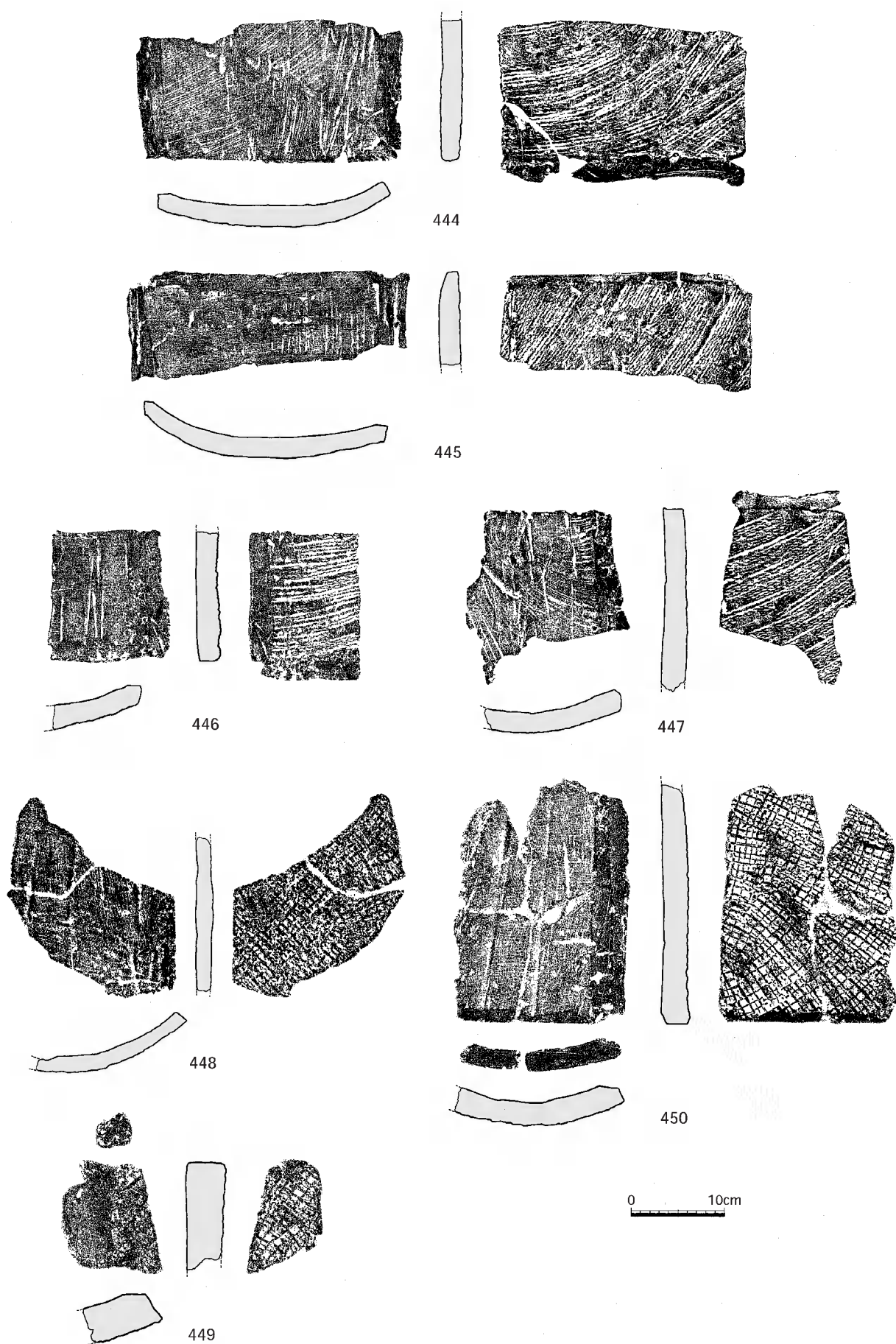
442



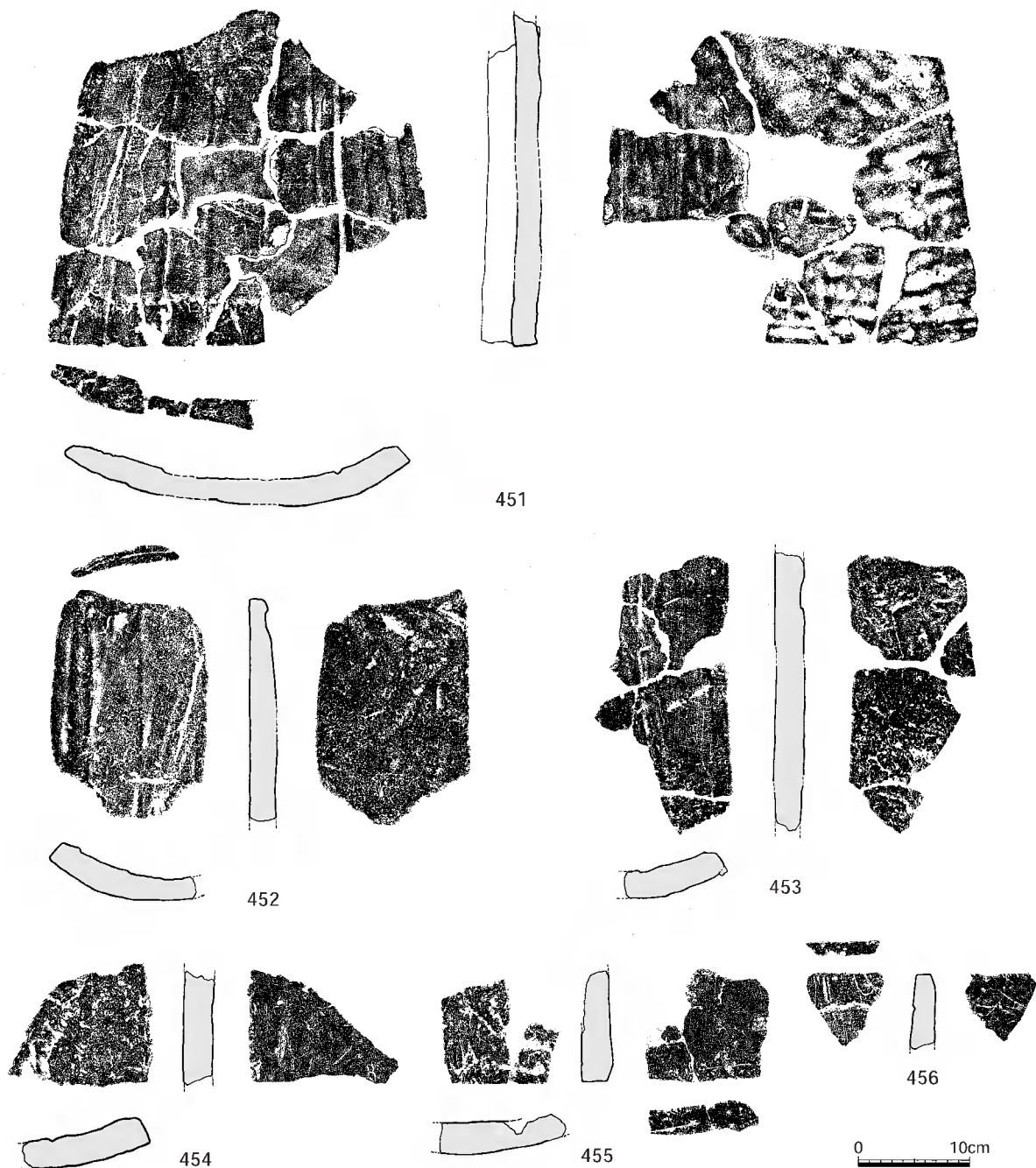
443

0 10cm

第98図 3号窯 第2床面・灰原出土遺物④ (1/6)



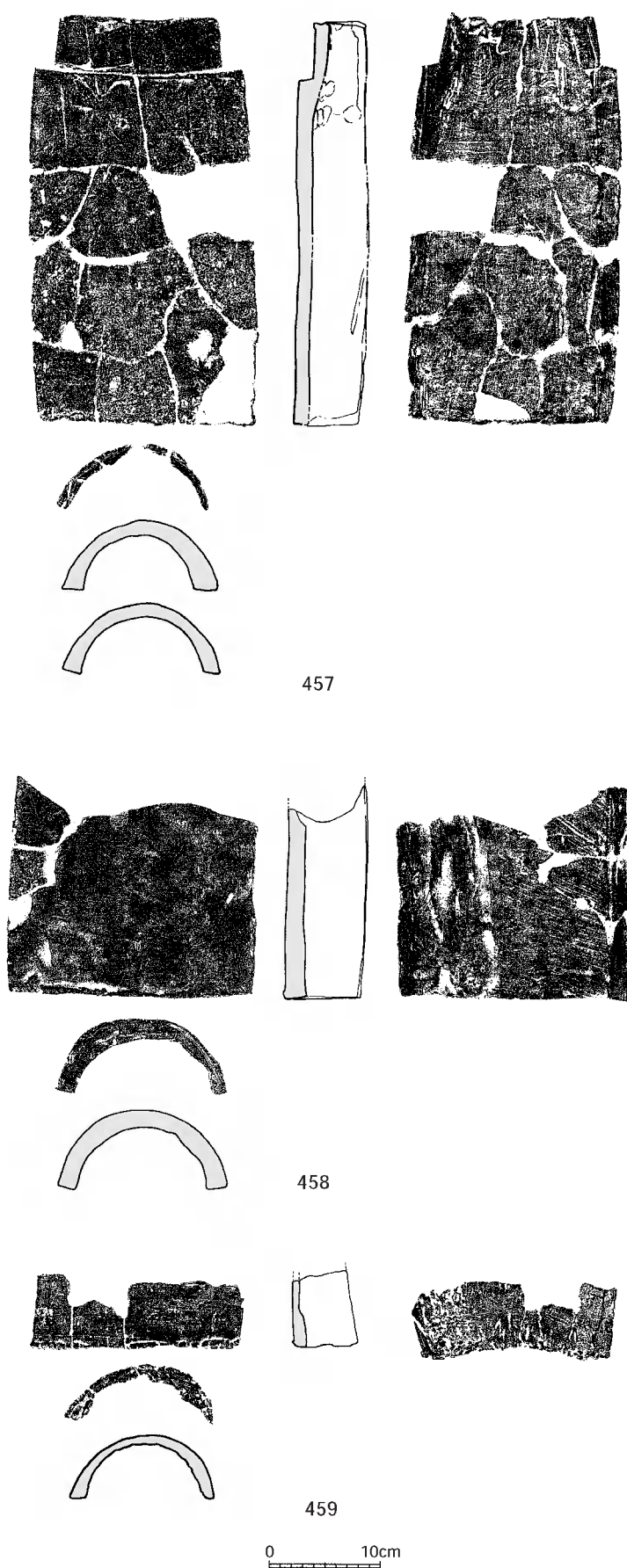
第99図 3号窯 第2床面・灰原出土遺物⑤ (1/6)



第100図 3号窯 第2床面・灰原出土遺物⑥ (1/6)

2床面と第4炭層で確認した。検出した破片には軟質で橙色を呈するものと、442～447同様に須恵質のものがある。造成土からも小片が出土したが、これは調査時の混入と考える。447は側面に布目痕が残る。

軒平瓦と平瓦〔縄〕は凹面に模骨痕が観察できる資料がなく、側面がつぶれた様な形態を呈するものや側断面凸面側の角度が鈍角となるものが多い。また、個体ごとに厚さが全く異なり、側面に布目痕が残る資料が確認できる。このことから一枚作りであると考え、第2床面形成後に焼成したと想定する。



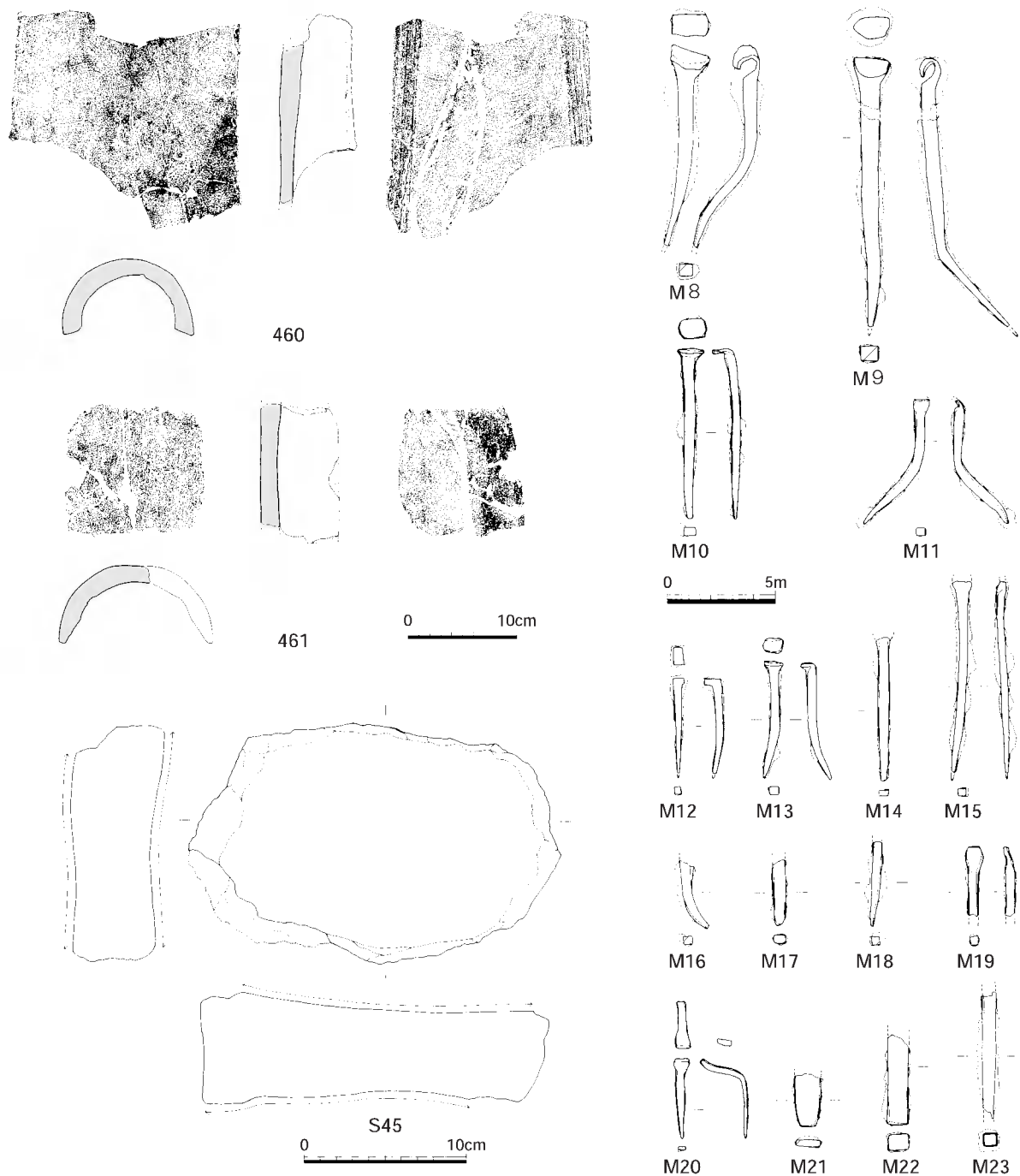
第101図 3号窯 第2床面・灰原出土遺物⑦ (1/6)

448～450・462・463は凸面に格子目タタキ工具痕が残る平瓦である(以後、平瓦〔格子〕とする)。第1床面・造成土・第2炭層で多量、焼土層・第4炭層で少量確認した。448～450は造成土で、462・463は第1床面で検出した。

焼成は軟質で橙色を呈するものが多いが、第1床面で検出した462・463は須恵質で、灰色を呈する。

451～456・464～468は凸面に不定方向ナデが残る平瓦である(以後、平瓦〔ナデ〕とする)。その痕跡から、工具は利用せずに、指の腹で押さえたりなでたりしたと考える。第1床面・造成土・第2炭層・第4炭層で多く確認した。451は造成土、452・453は流土、454は第2炭層、455・456は第4炭層、464～468は第1床面で検出した。焼成は軟質で橙色を呈するものが多いが、第1床面で検出した464～468は須恵質で、灰色を呈する。451の凸面には手の痕跡が明瞭に残る。456は凸面に線刻が確認できるが、小片であるためその全容は不明である。

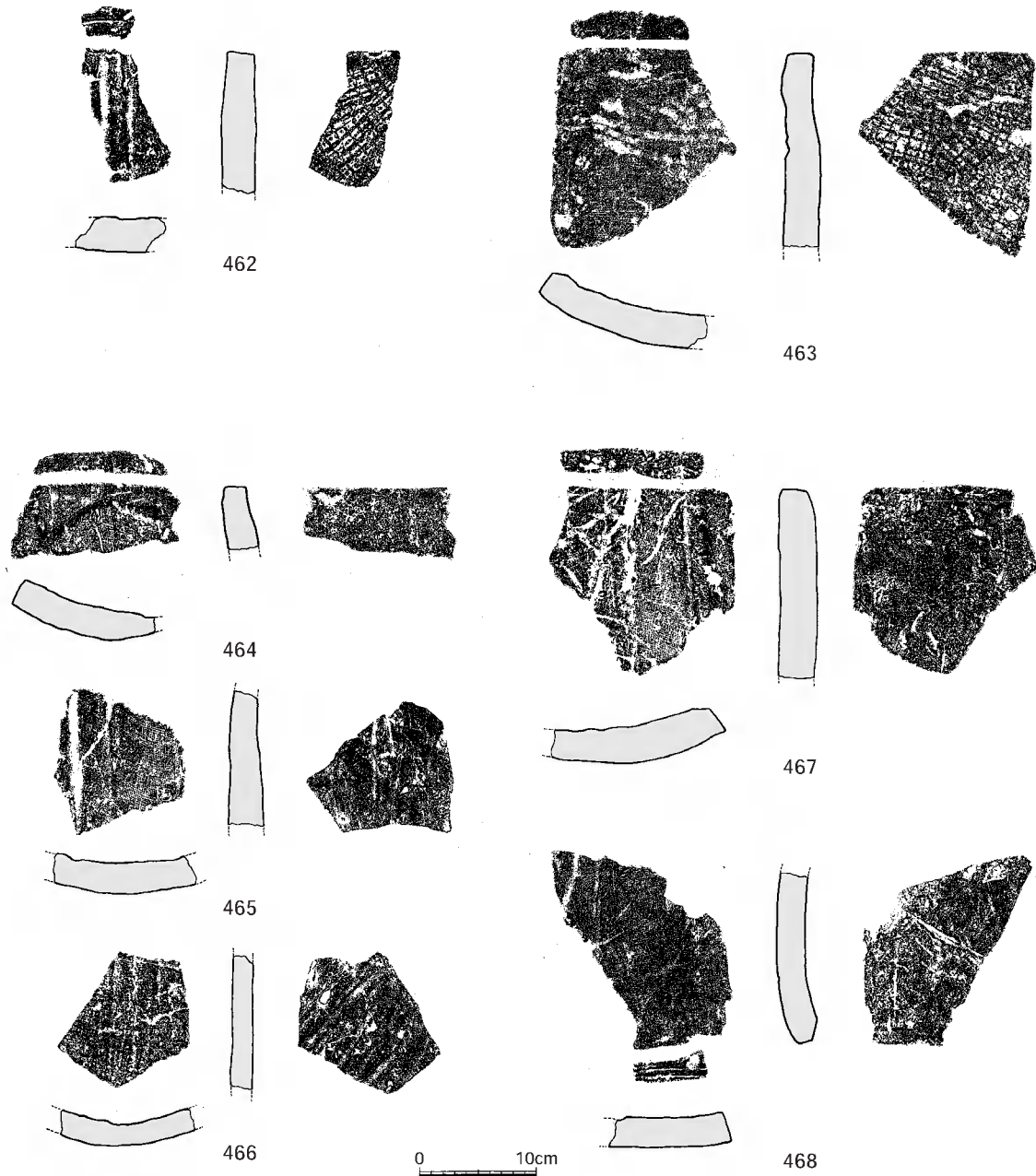
平瓦〔格子〕と平瓦〔ナデ〕は、多くの資料で凹面に模骨痕が観察できる。また、側断面凸面側の角度が90°より内側に入り、横断面の厚さがほぼ均等なものが多い。このことから、桶巻作り(4枚作り)であると考え。ともに第1床面で焼成したと想定する。ただし、平瓦〔格子〕は第2炭層より下層となる焼土層でも確認でき、第4炭層での出土量が平瓦〔ナデ〕の1/10程度であるため、焼成床面は同一であっても、より古い時期であった可能性が高い。よって平瓦の焼成順序は、〔格子〕→〔ナデ〕→〔縄〕となる。



第102図 3号窯 第2床面・灰原出土遺物⑧ (1/6・1/4・1/3)

457～461は丸瓦である。窯体内第2床面、第2炭層、造成土、第4炭層で確認した。457・458・460は第4炭層、461は造成土で検出した。459は第2床面と第4炭層で検出した破片が接合した。457～459は燻したかの印象を受ける。460は須恵質である。残存部中央付近からやや開いた形状を呈するため、軒丸瓦の可能性もある。このほかにその可能性を指摘できる資料は存在しない。凹面に紐の痕跡が観察できる。造成土で検出した461とそれ以外の資料は端部の面取りが異なる。

丸瓦は第1床面と第2床面で焼成したと想定する。破片から焼成時期の区別はできなかった。M8～23は釘等鉄製品である。多くは第4炭層で検出した。燃料に使用した廃材に含まれていたものと想定する。S45は砥石である。第2炭層で検出したが窯との関係が不明で、混入した可能性もある。



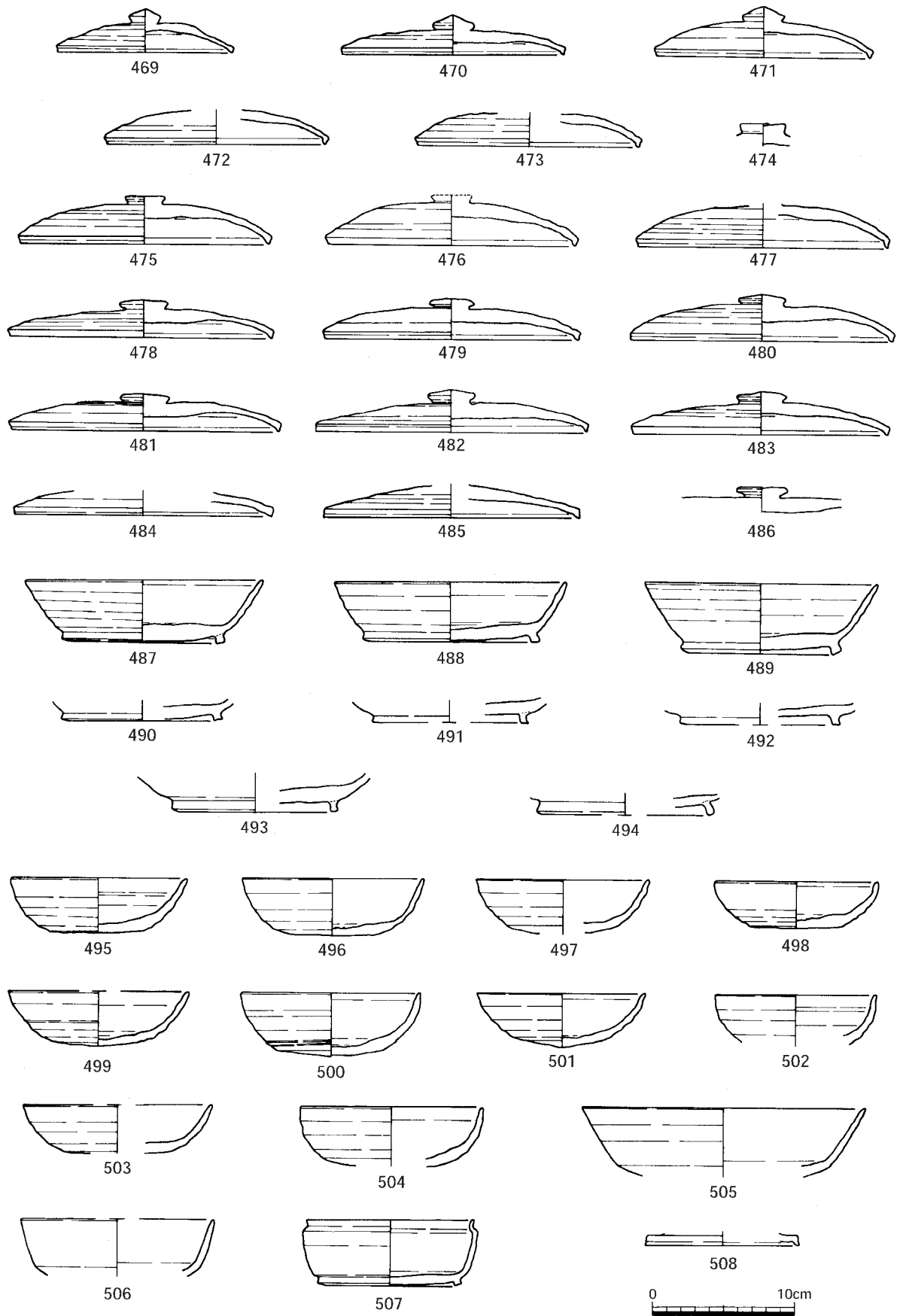
第103図 3号窯 第1床面出土遺物① (1/6)

以上から、瓦の焼成はつぎのとおりであったと考える。

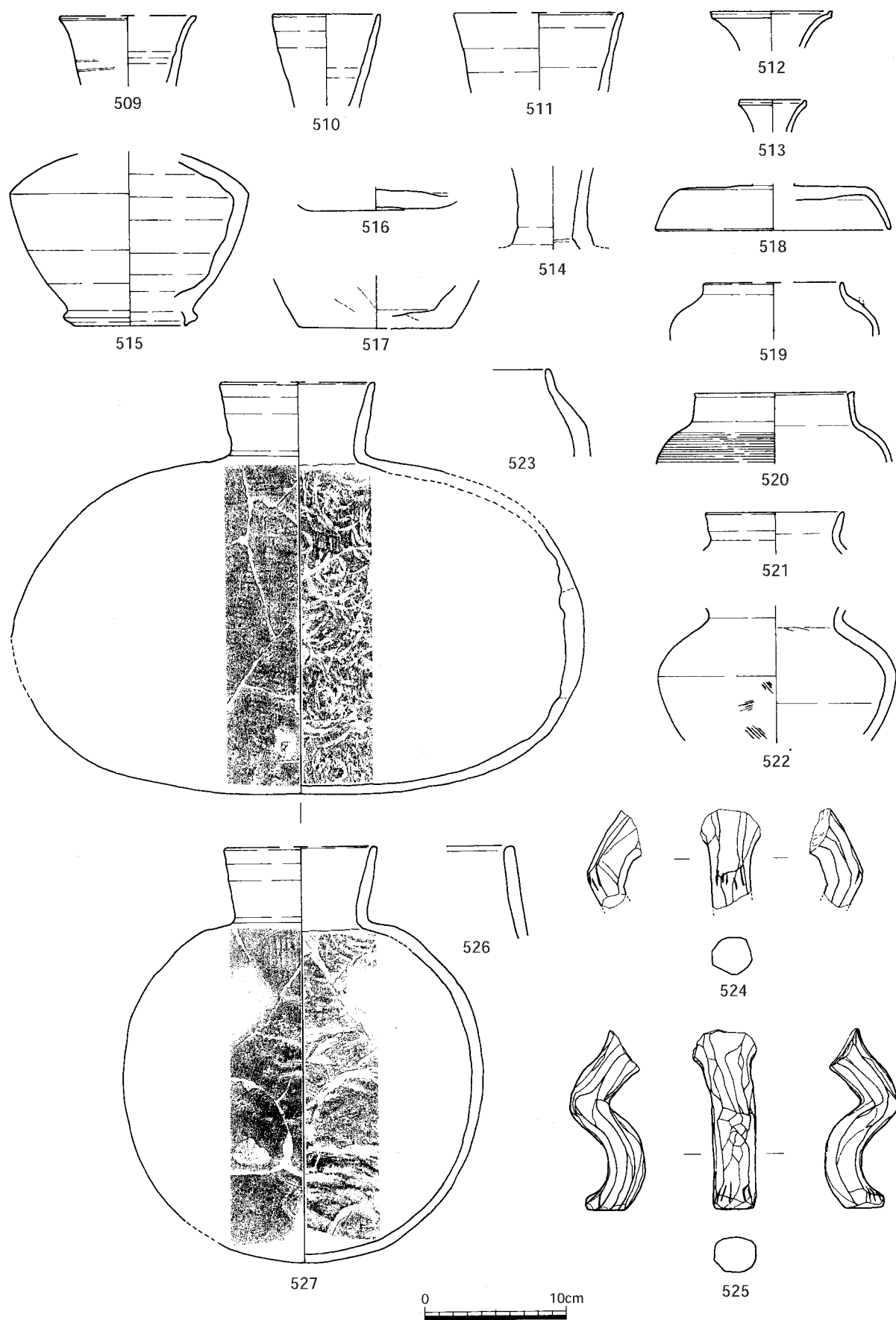
第1床面 平瓦〔格子〕、平瓦〔ナデ〕、丸瓦

第2床面 平瓦〔縄〕、軒平瓦、丸瓦

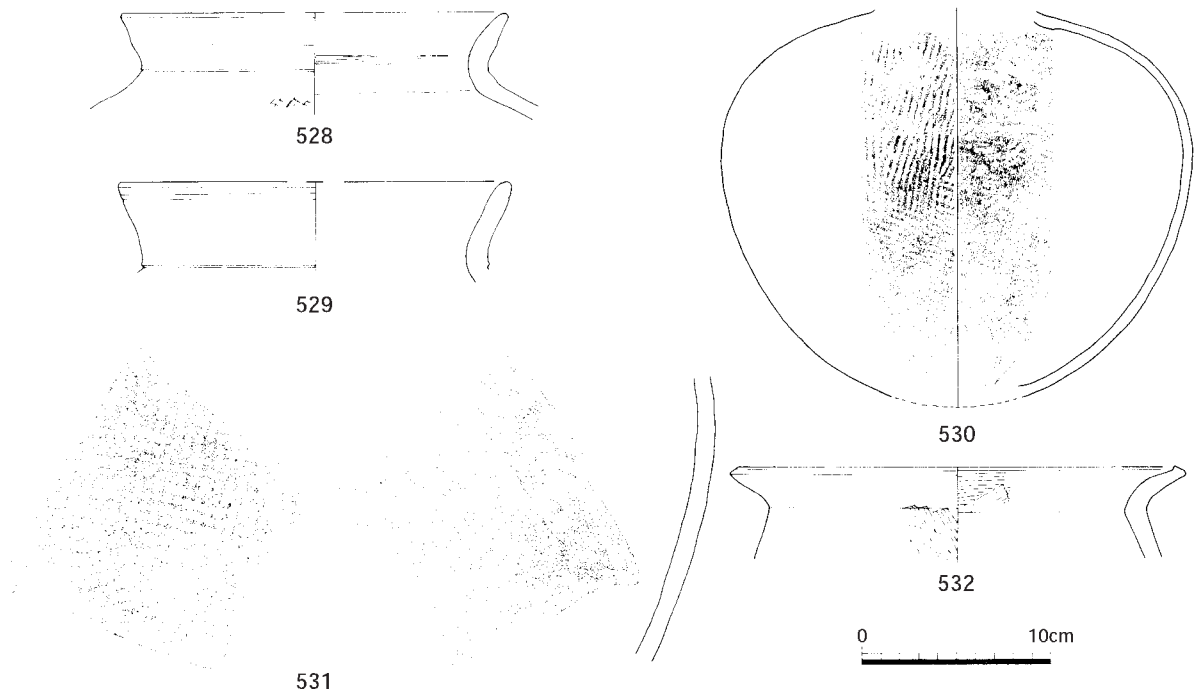
類例が確認できないため、瓦のみで時期を特定するのは困難である。しかしながら、第1床面で須恵器が出土しており、その須恵器が平城宮土器Ⅱと類似する。そこから第1床面出土遺物は8世紀前半に属すると想定できる。また、何十年も時を経て窯を補修するとは考え難いことから、第2床面出土遺物もそれと近い時期であると判断する。これは、第2床面で行った熱残留地磁気測定結果（AD730±15）とも齟齬をきたさない。しかし、放射性炭素年代測定結果（AD597—642）とは異なる。（重根）



第104図 3号窯 第1床面出土遺物② (1/4)



第105図 3号窯 第1床面出土遺物③ (1/4)



第106図 3号窯 第1床面出土遺物④ (1/4)

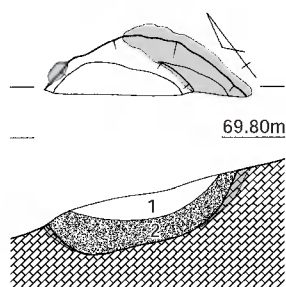
土器は窯体内下層（第1床面）の焚き口付近と灰原から須恵器の杯蓋、有台杯、無台杯、壺類、壺蓋、獣脚、甕・瓶類、横瓶、高杯、鉢等と土師器の甕が出土している。出土量はコンテナで6箱、破片総数で1090点である。このうち杯蓋が、232点で破片数の21.3%、有台杯が51点、4.7%、無台杯は202点、18.5%、杯類の高台の有無の不明なものが119点、10.9%である。ただ無台杯類は椀状をなす器形が大半で、直線的に立ち上がる口縁端部片は有台杯の可能性が強い。杯類総量は破片数にして604点で破片総数の55.4%である。高杯は5点、明らかな焼き台4点がある。

以下、第1床面と灰原出土のおもな土器に説明を加える。

杯蓋469～486は、つまみの形状によって3分類、さらに法量により2分類できる。形態は天井部に丸味を持ち口縁端部で下方に屈曲する。調整はいずれも天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、天井部内面に大半仕上げナデである。A類469～473は、天井部に疑宝珠形の紐を持つ。法量によりA1 469、A2 470～473に分類出来る。焼成はいずれも良好で堅緻である。B類474～477は、天井部に径3cm弱のボタン状の紐が付く。口径は17.5cm前後を測り、他と比較して高さがある。C類478～486は、天井部に碁石状に扁平な紐が付く。窯体内の下層焚き口（第1床面）からの出土が大半を占め、焼成不良で軟質を呈す。有台杯487～484は、器形全体がわかるものは掲載した3点のみで他は小片である。体部は斜め上方に立ち上がり、底部は中央が下方に湾曲する。焼成不良でいずれも焚き口（第1床面）出土で、蓋C類とセットとなる器種である。脚494はやや高い高台をもつ。無台杯495～506は底部が椀形495～504をなすものが大半で、明瞭に箱形で全体のわかる個体は確認できない。内湾する器形の口縁端部は丸く収めたものと若干外反するものとがある。獣脚524・525は、同一個体に付けられた3脚の内の2脚と見られる。いずれもヘラで面取りし、爪先を沈線で現している。524は膝にも沈線を施す。甕531は外面に明瞭な格子タタキ、内面にナデや圧痕調整である。外面平行タタキ、内面同心円タタキの明瞭なものもある。甕530は胎土・焼成や調整等が異なり、上方から混入の古相須恵器である。

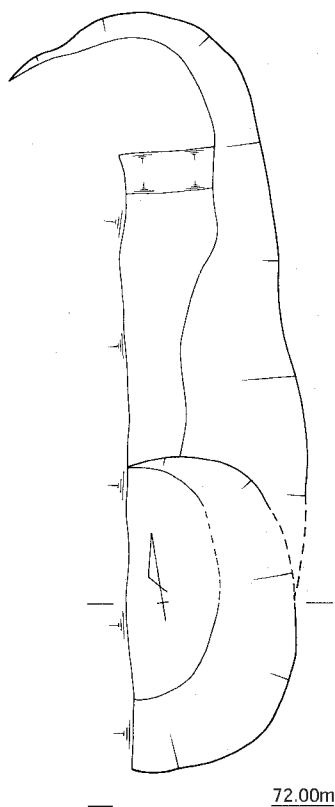
(山磨)

2 土壌



- 1 にぶい黄橙 (10YR 6/4)
2 黒 (N 1.5/) 炭

土壌9



- 1 黄褐 (2.5Y 5/3) 砂質土※炭少含
2 褐灰 (10YR 5/1) 砂質土※炭多含

土壌10

第107図 土壌9・10 (1/30)

土壌9 (第15・107図)

P区に位置する。3号窯の灰原北端と接する地点で検出した。現代攪乱のため南半を失う。第2層炭の樹種はクリで、放射性炭素年代測定の結果はAD619-663であった。

土壌10 (第15・107図)

U区に位置する。尾根の頂部付近、箱式石棺1の東2mの地点で検出した。平面形は不整形な長楕円形を呈し、長軸は300cm、短軸92cm、深さ23cmを測る。出土遺物は皆無である。

土壌11 (第14・108図)

K区に位置する。竪穴住居1埋没後の平坦面を利用する。中央付近を楕円形に掘り込む。周囲は被熱のため赤化し、中には炭が堆積する。炭の樹種はクリである。甕533が底面で出土した。

土壌12 (第14・108図)

K区に位置する、土壌11直西側で検出した。底面周囲が被熱のため赤化する。底面と検出面で炭層を確認した。樹種はクリである。埋土中から甕534、杯535が出土した。8世紀末と考える。

土壌13 (第14・108図)

K区に位置する。土壌12の北東9mで検出した。試掘時に掘削したため、辺の一部と底面のみ残存する。平面不整形楕円形を呈する。底面で炭層を確認した。樹種はクリである。出土遺物は皆無である。

土壌14 (第14・108図)

K区に位置する。土壌11の南東1mで検出した。平面形は不整形楕円形を呈し、段を一段持つ。段の周囲および底面は被熱のため赤化する。段の中で炭層を確認した。出土遺物は皆無である。

土壌15 (第14・108図)

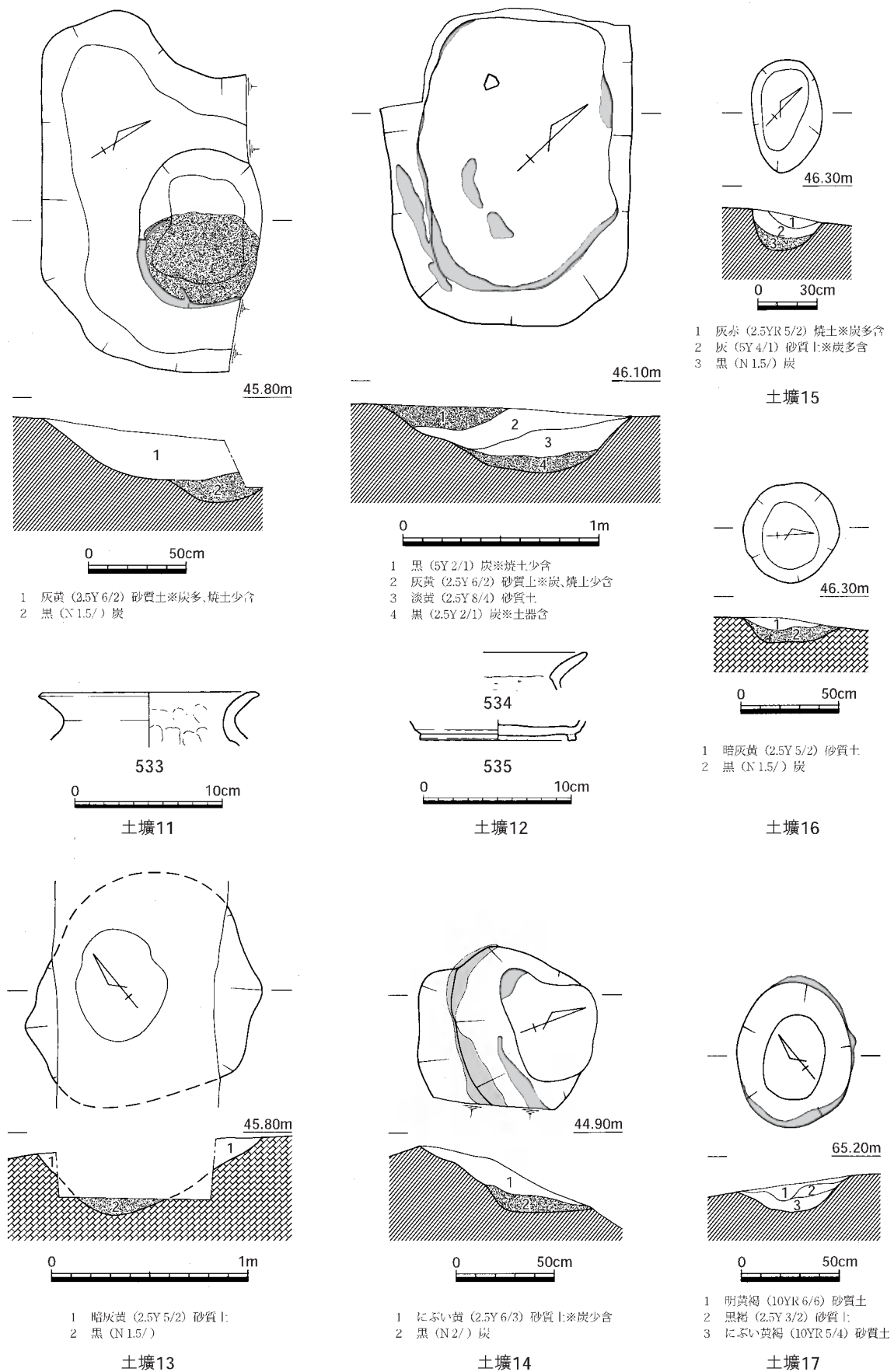
K区に位置する。土壌16の北1mで検出した。土壌8埋没後平坦面を利用する。平面楕円形を呈し、長軸56cm、短軸35cm、深さ21cmを測る。底面で炭層を確認した。出土遺物は皆無である。

土壌16 (第14・108図)

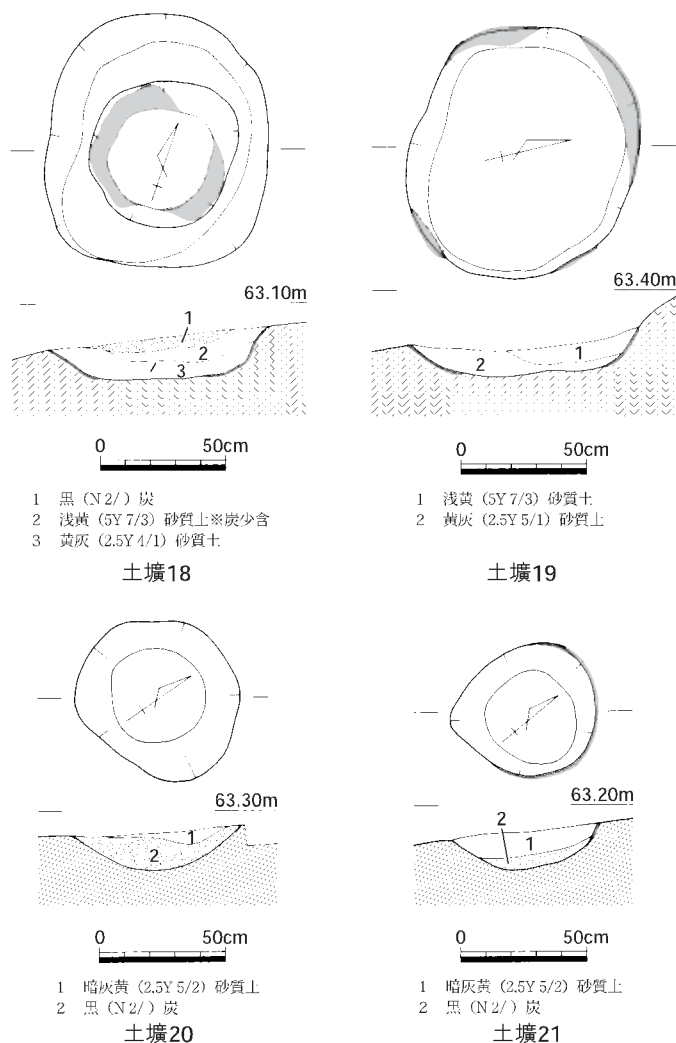
K区に位置する。土壌15の南1m、土壌12の東0.5mの位置で検出した。平面円形を呈し、直径50cm、深さ21cmを測る。底面で炭層を確認した。出土遺物は皆無である。

土壌17 (第14・108図)

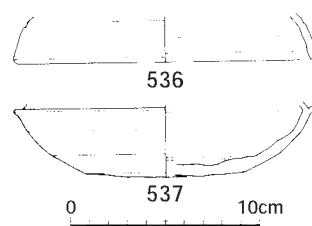
N区に位置する。段状遺構群5上段埋没後の平坦面を利用する。平面楕円形を呈し、長軸74cm、短軸58cm、深さ19cmを測る。検出面周囲は被熱のため赤化する。出土遺物は皆無である。



第108図 土壌11～17 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第109図 土壙18～21 (1/30)・出土遺物 (1/4)



土壙18 (第15・109図)

H区に位置する。土壙20の北東4mで検出した。段状遺構群1の埋没後平坦面を利用する。平面不整楕円形を呈し、長軸100cm、短軸87cm、深さ20cmを測る。中央部分を円形に一段掘り込む。底面から壁面が被熱のため赤化していた。最上層で確認した炭の樹種はクリであった。鉄滓0.2kg以外出土遺物は皆無である。

土壙19 (第15・109図)

H区に位置する。土壙21の南東2mで検出した。竪穴住居3が浅く埋没した後の平坦面を利用する。平面不整楕円形を呈し、長軸99cm、短軸91cm、深さ20cmを測る。底面から壁面が被熱のため赤化する。検出した炭化材の樹種はクリであった。須恵器

杯蓋536が2層から出土した。陶器TK43形式と類似する。炉壁溶融物0.4kgを確認した。

土壙20 (第15・109図)

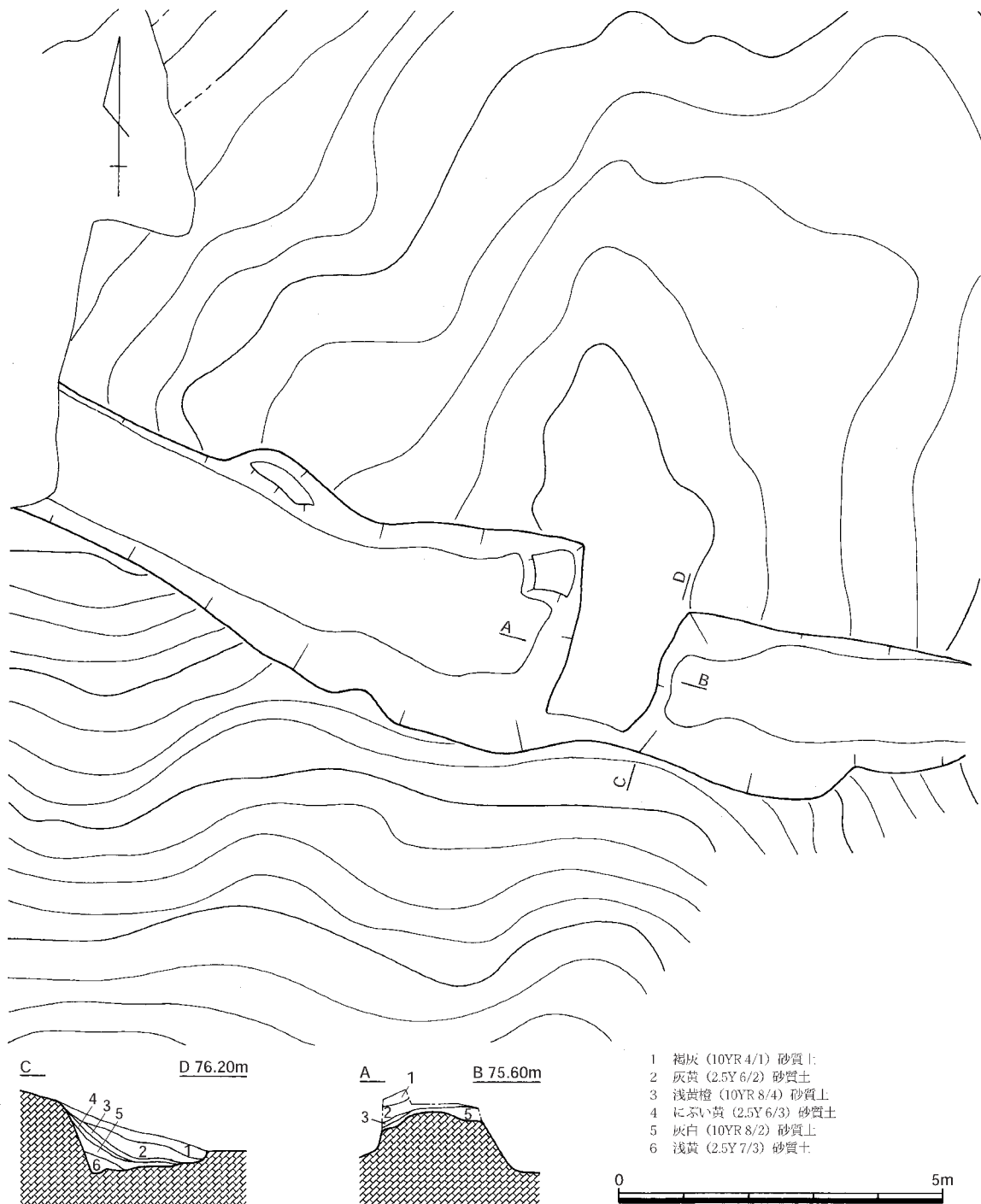
H区に位置する。土壙19の北3mで検出した。竪穴住居3が浅く埋没した後の平坦面を利用する。平面不整円形を呈する。2層炭の樹種はクリで、放射性炭素年代測定の結果はAD896-923であった。須恵器杯537が2層から出土した。陶器TK43形式と類似する。炉内滓0.02kgを確認した。

土壙21 (第15・109図)

H区に位置する。土壙19の西2mで検出した。竪穴住居3が浅く埋没した後の平坦面を利用する。平面不整円形を呈し、径55cm程度、深さ19cmを測る。検出面周囲が被熱のため赤化する。底面で炭層を確認した。樹種はクリであった。出土遺物は皆無である。

土壙9～21はいずれも被熱面あるいは炭層を確認したが、用途は不明であり出土遺物も少ないため、時期が不確定である。土壙11、土壙19などは古墳時代の遺物が確認でき、土壙9も放射性炭素年代測定によると古墳時代に属する可能性がある。しかしながら、古墳時代の遺構を切るものが多いことから、ここでは古代の遺構としてまとめて報告することにした。土壙20の出土遺物は古墳時代であるが、放射性炭素年代測定の結果は古代の範疇となった。(重根)

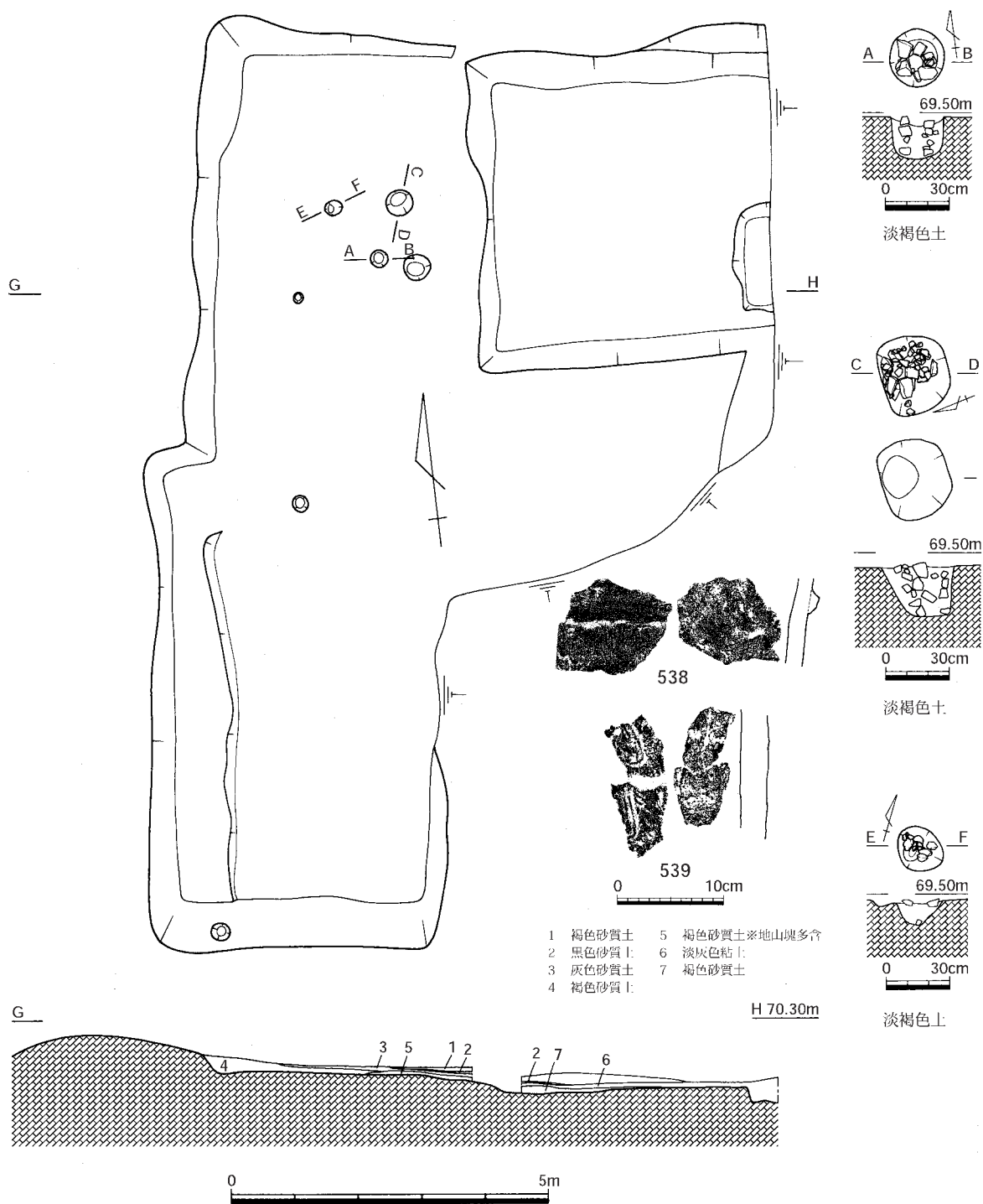
3 堀切・平坦面・火葬墓



第110図 堀切 (1/100)

堀切 (第110図)

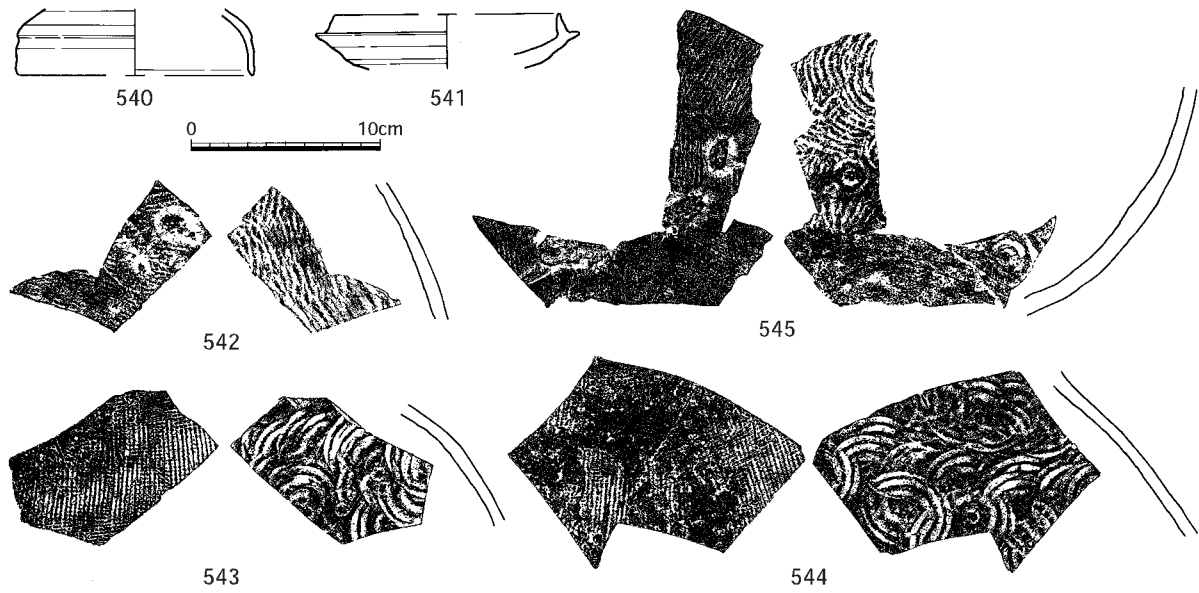
Q・V区に位置する。尾根頂部の斜面変換点で検出した。西端は平坦面2に切られる。残存部最大幅は3.4m、深さ1mを測り、尾根筋の最も標高が高い部分は掘削せずに土橋状に残す。背後の坪山には室町時代の可真上城が存在することから、その関連施設であったと考える。(重根)



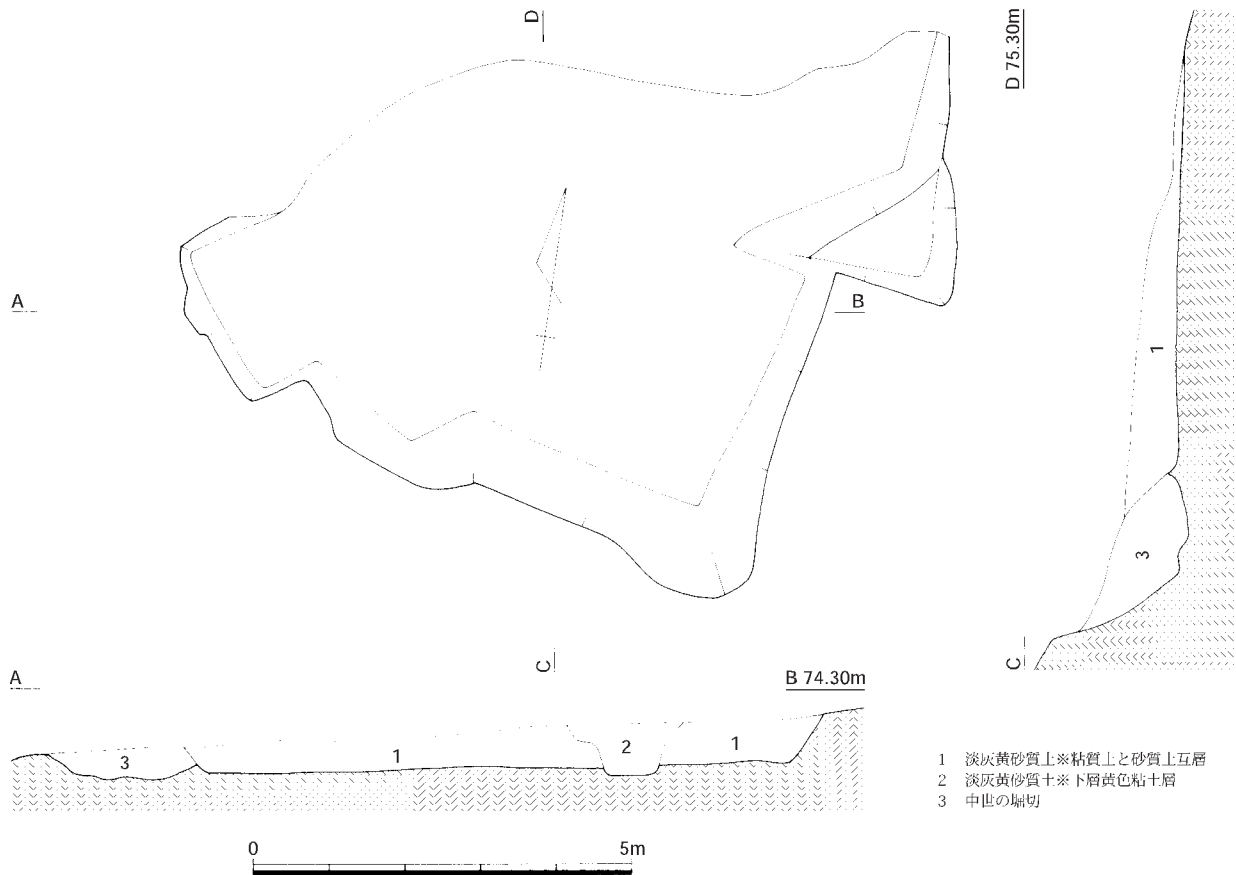
第111図 平坦面1 (1/100)・柱穴 (1/30)・出土遺物 (1/6)

平坦面1 (第15・111・112図)

平坦面1はT区に位置し、尾根稜線が一旦なだらかな部分に立地する。地山を60cmほど掘削して平坦面を作り出している。平面形は1辺5～7mの方形の区画が幾つか重複しているように見えるが、一連の平坦面である。北西部で検出された小穴4個のうち2個は、小石を詰め、直径7cm前後の丸太か棒を立てていたものと推定される。遺物は少なく、時期を限定しがたいが、平坦面の形状から、近世以降の小規模なお堂あるいはお社のような施設の敷地と考えたい。小穴には幟とか旗を立てたのではなかろうか。北端部埋土下層から須恵器片が出土したが、隣接する箱式石棺1に伴うとするには時期が新しいので、また別の古墳時代の遺構を平坦面1が削平しているものだろう。



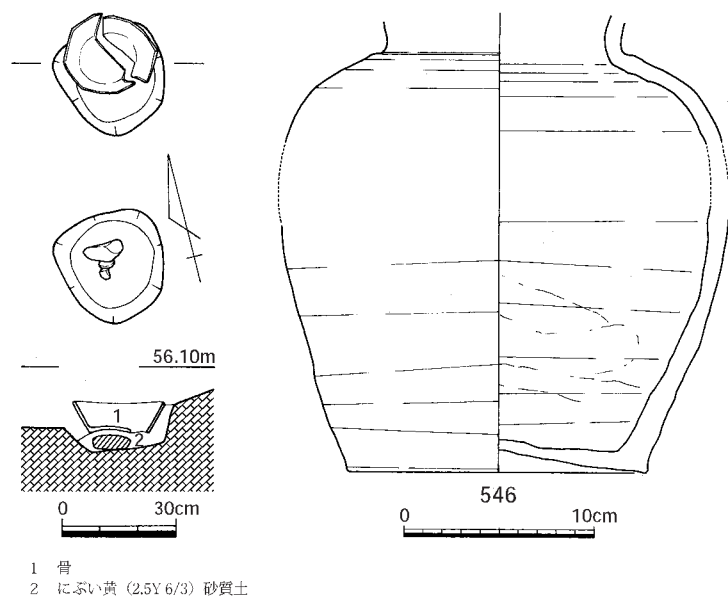
第112図 平坦面1 出土遺物 (1/4)



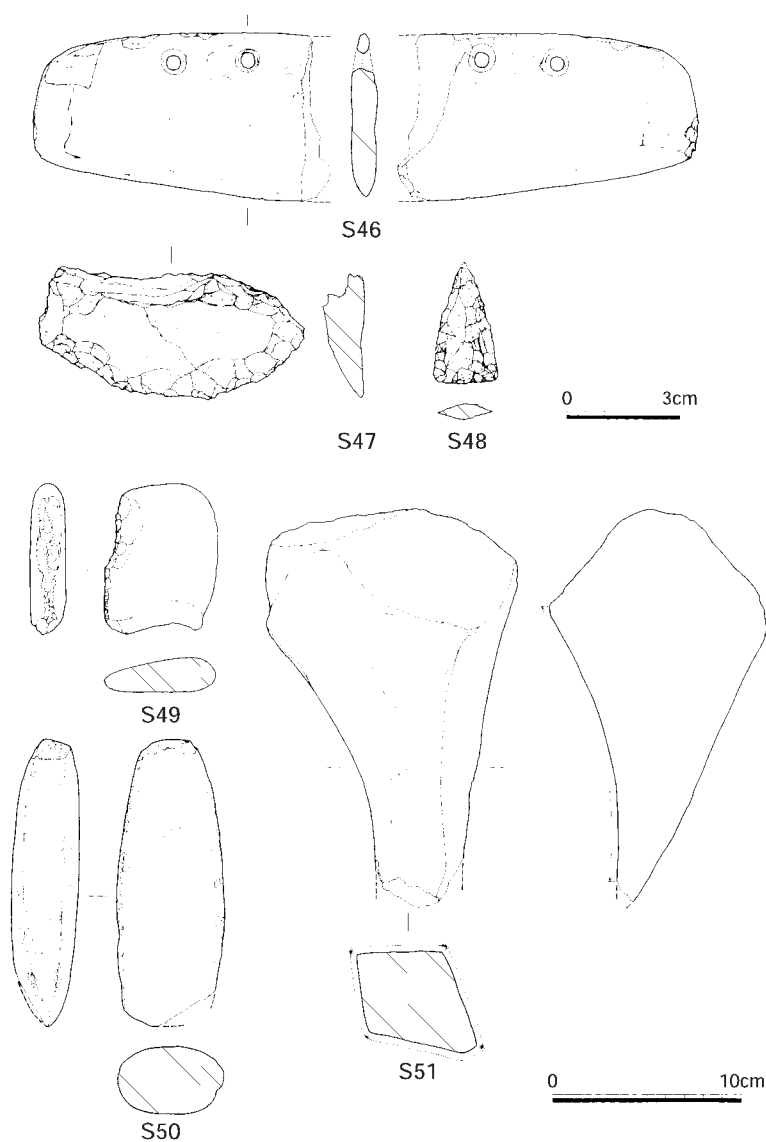
第113図 平坦面2 (1/100)

平坦面2 (第15・113図)

平坦面2はQ区に位置し、尾根稜線から西方に少し下った斜面に立地する。形状は平坦面1とよく似ており、直線的な屈曲が多いが、切り合いは無い。キセルの破片が埋土から出土したことから、やはり、平坦面1と同様に近世の小さな社堂の敷地と想定したい。(物部)



第114図 火葬墓 (1/20)・出土遺物 (1/4)



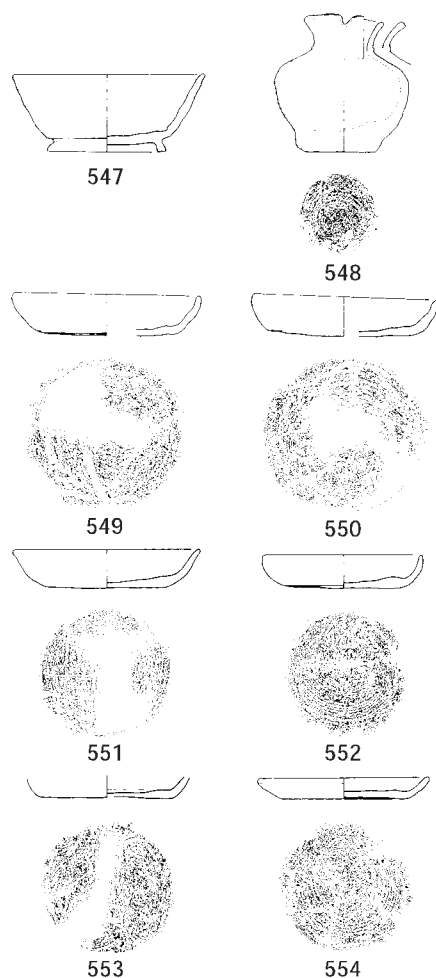
第115図 遺構に伴わない遺物 (1/2・1/4)

火葬墓 1 (第14・114図)

D区に位置する。西向き緩斜面で検出した。不整円形の掘り方に備前焼壺を埋納する。底面には石を置いて安定させる。壺内から出土した火葬骨は成人である。546は口縁部が残存せず特定し難いが、15世紀代と考える。

遺構に伴わない遺物 (第115図)

須恵器杯547はP区斜面で検出した。完形品であるが、周囲で同時期の遺構は確認できなかった。548～554はD区近世墓検出中出土遺物である。S51は埴輪集積地検出中に確認した。最大長210mmを測る流紋岩製の砥石で、よく使い込まれている。(重根)



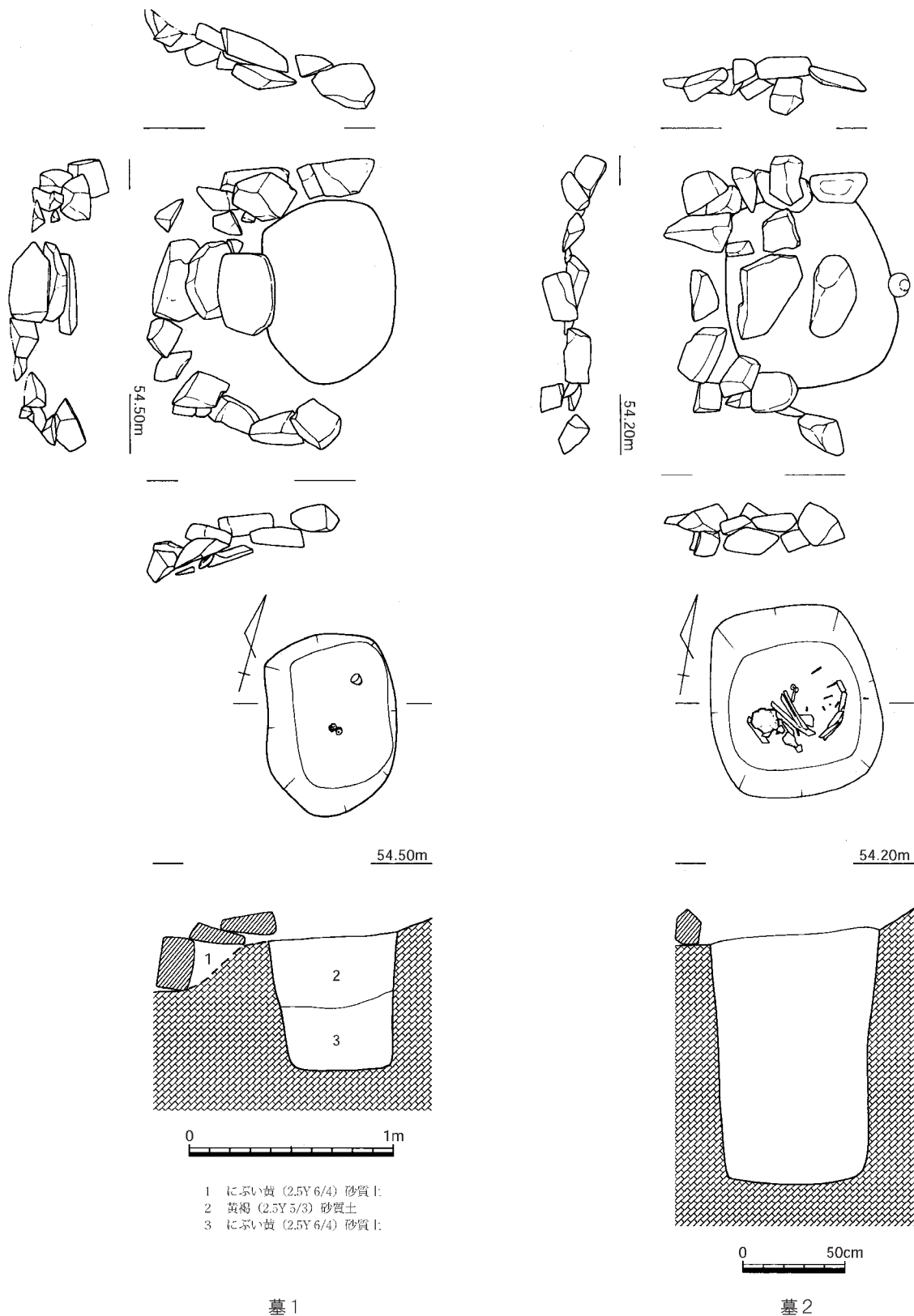
第5節 近世以後の墓



第116図 墓配置図 (1/300)

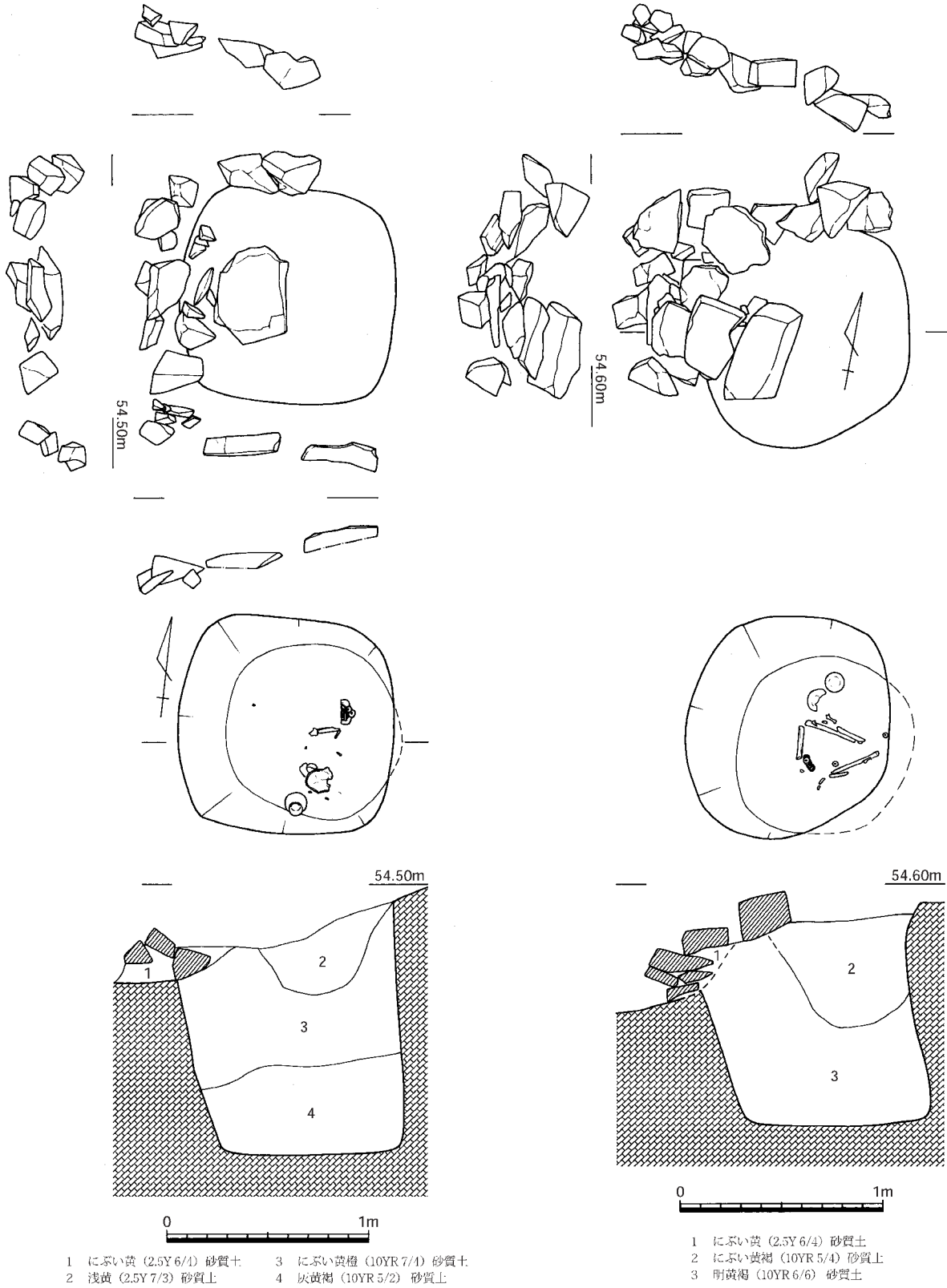
第3章 土井遺跡

番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁 器	土器	釘	銭 貨				煙管		その他	人 骨		
									古寛永	新寛永	その他	計	数	時期		部 位	性 年	備 考
1	長方形	89	61	68	5348	肥前系 1650-1660			11	12		23						
2	方 形	93	76	124	5263			12	3	9		12	1	IV 漆	頭蓋骨ほか		成人	



第117図 墓1・2 (1/30)

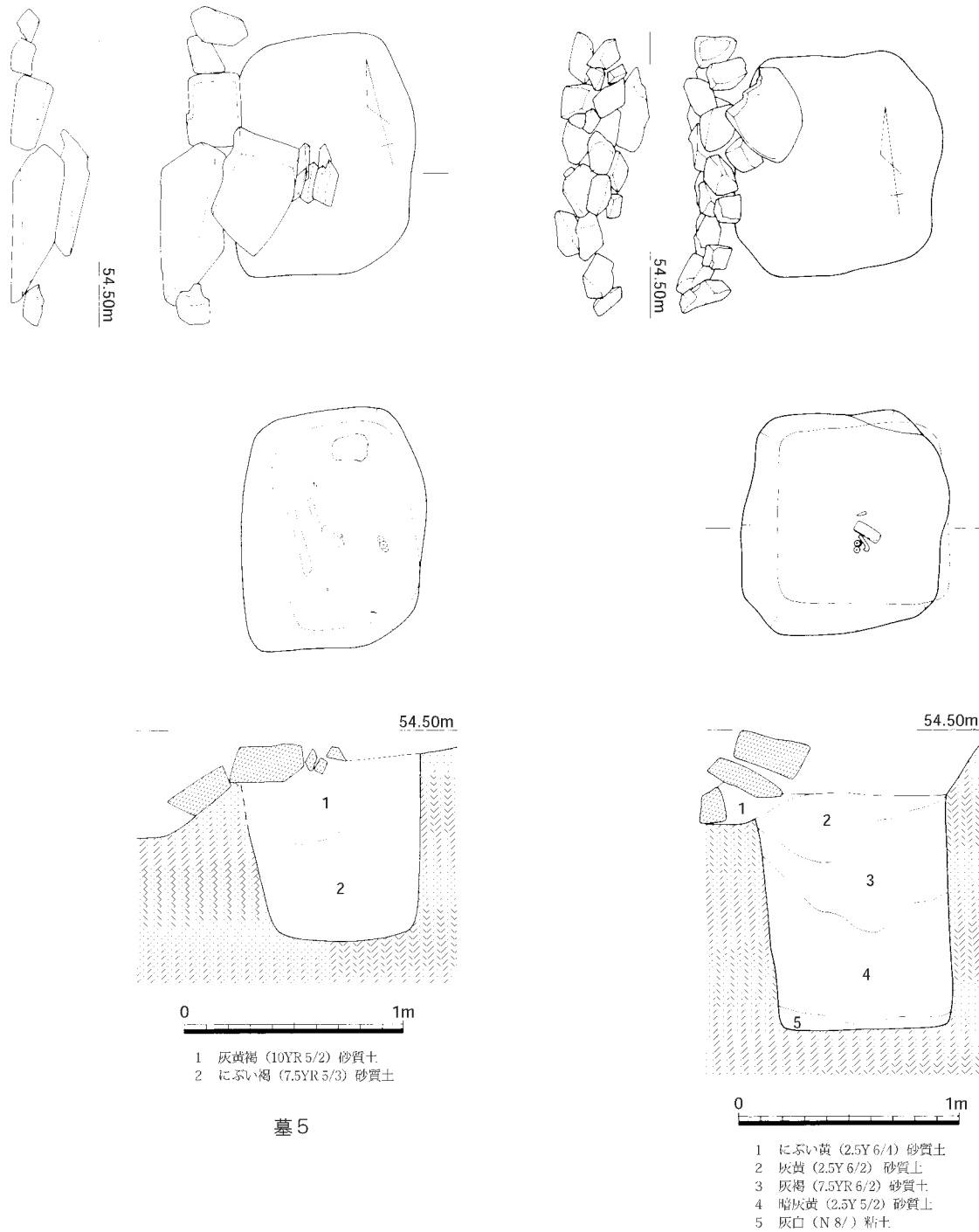
番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁器	土器	釘	銭貨				燂管 数	時期	その他	人 骨			
									古寛永	新寛永	その他	計				部 位	性	年	備 考
3	方 形	107	91	126	5306			5	12	16		28	1	IV		頭蓋骨 後頭骨一部			
4	方 形	110	99	105	5340		小Ⅲ2	7	6	22	嘉祐通寶1	29							



第118図 墓3・4 (1/30)

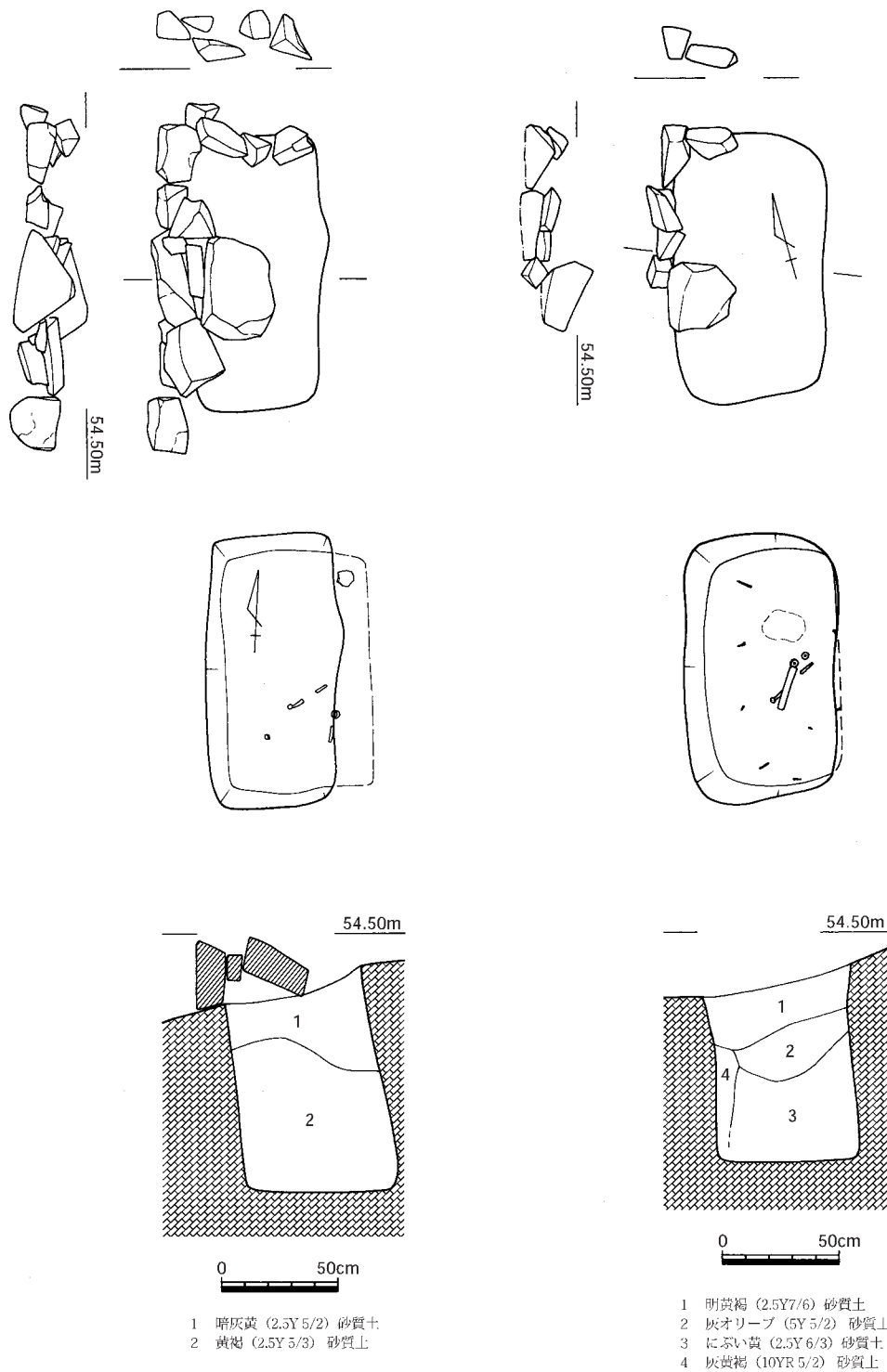
第3章 土井遺跡

番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁 器	土器	釘	銭 貨				煙管		その他	人 骨			
									古寛永	新寛永	その他	計	数	時期		部 位	性 年	備 考	
5	長方形	109	72	86	5354			5		12		12			玉1				
6	方 形	98	83	107	5313			2	3	9		12	1	V	漆	大腿骨 部			

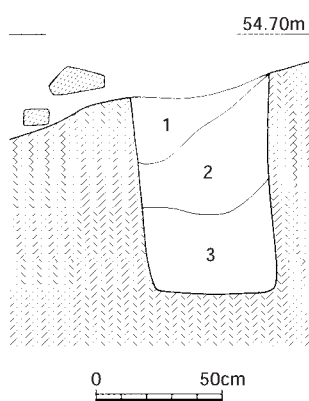
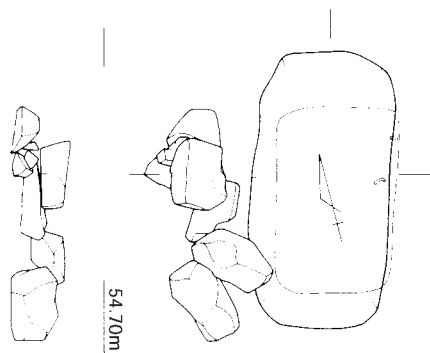


第119図 墓5・6 (1/30)

番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁器	土器	釘	銭貨				煙管 数	時期	その他	人骨			
									古寛永	新寛永	その他	計				部	位	性	年
7	長方形	117	51	97	5339			1	3	9		12	1	IV		頭蓋骨 (頭頂骨)			
8	長方形	115	64	85	5352			14	4	9		13	1	V	金具2、 漆	骨小片			

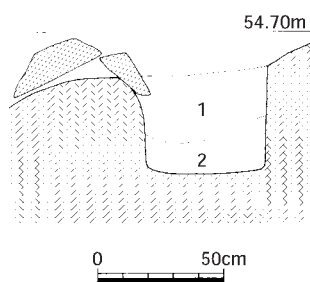
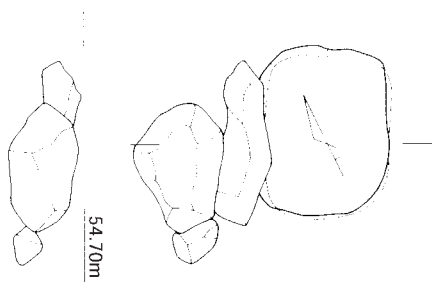


第120図 墓7・8 (1/30)



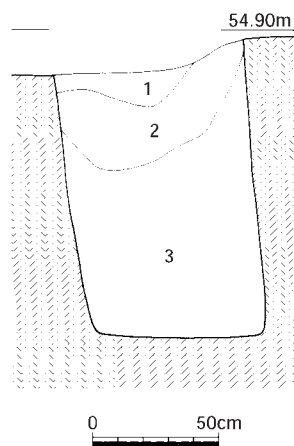
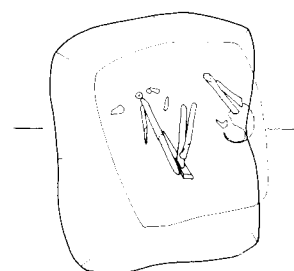
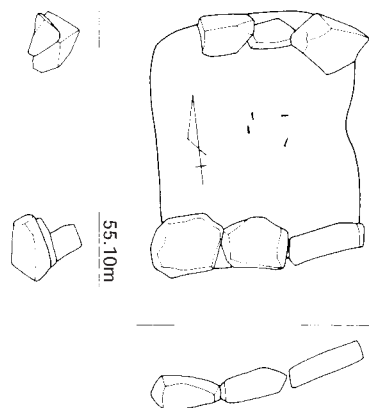
- 1 褐灰 (7.5YR 4/1) 砂質土
2 にぶい黄褐 (10YR 5/3) 砂質土
3 黄灰 (2.5Y 4/1) 砂質土

墓9



- 1 明黄褐 (10YR 6/6) 砂質土
2 黄褐 (10YR 5/8) 砂質土

墓10

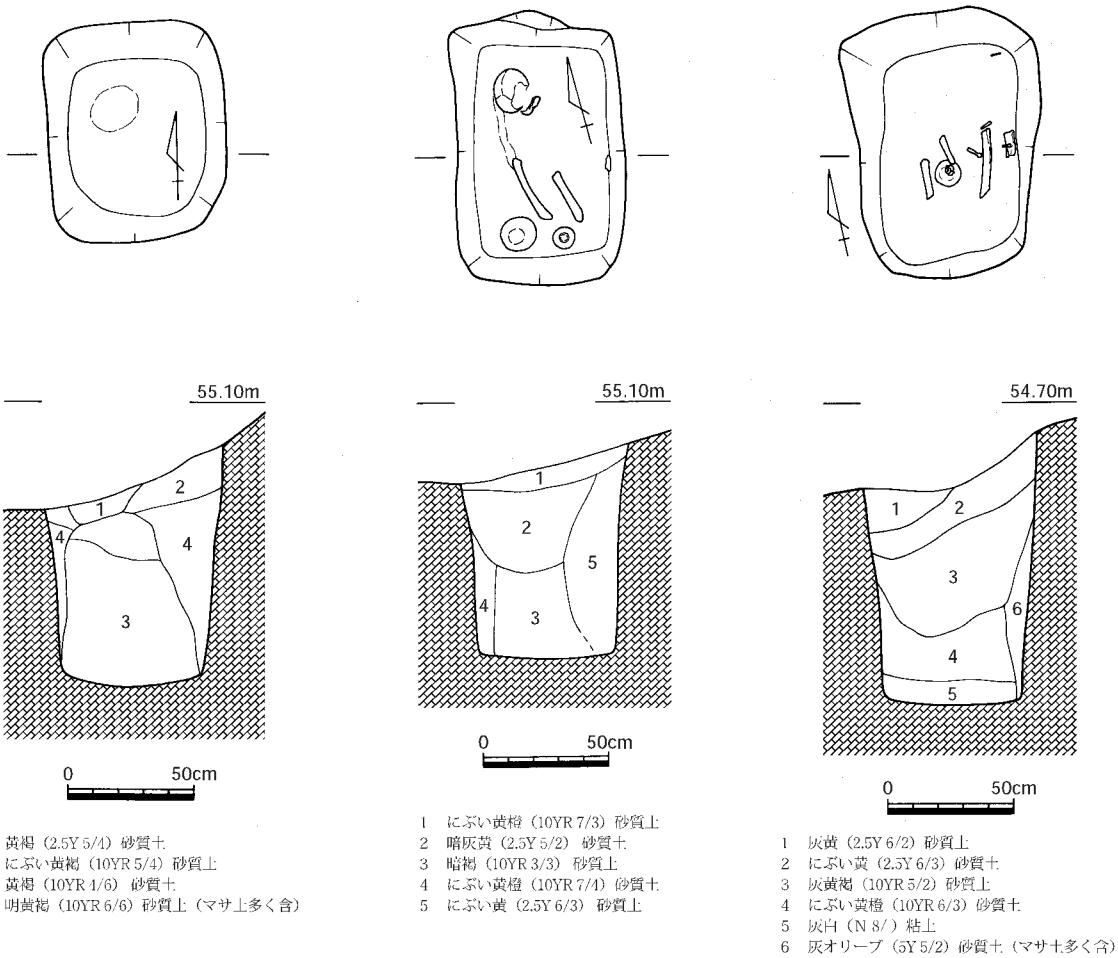


- 1 暗灰黄 (2.5Y 5/2) 砂質土
2 黄灰 (2.5Y 4/1) 砂質土
3 灰黄褐 (10YR 4/2) 砂質土

墓11

第121図 墓9～11 (1/30)

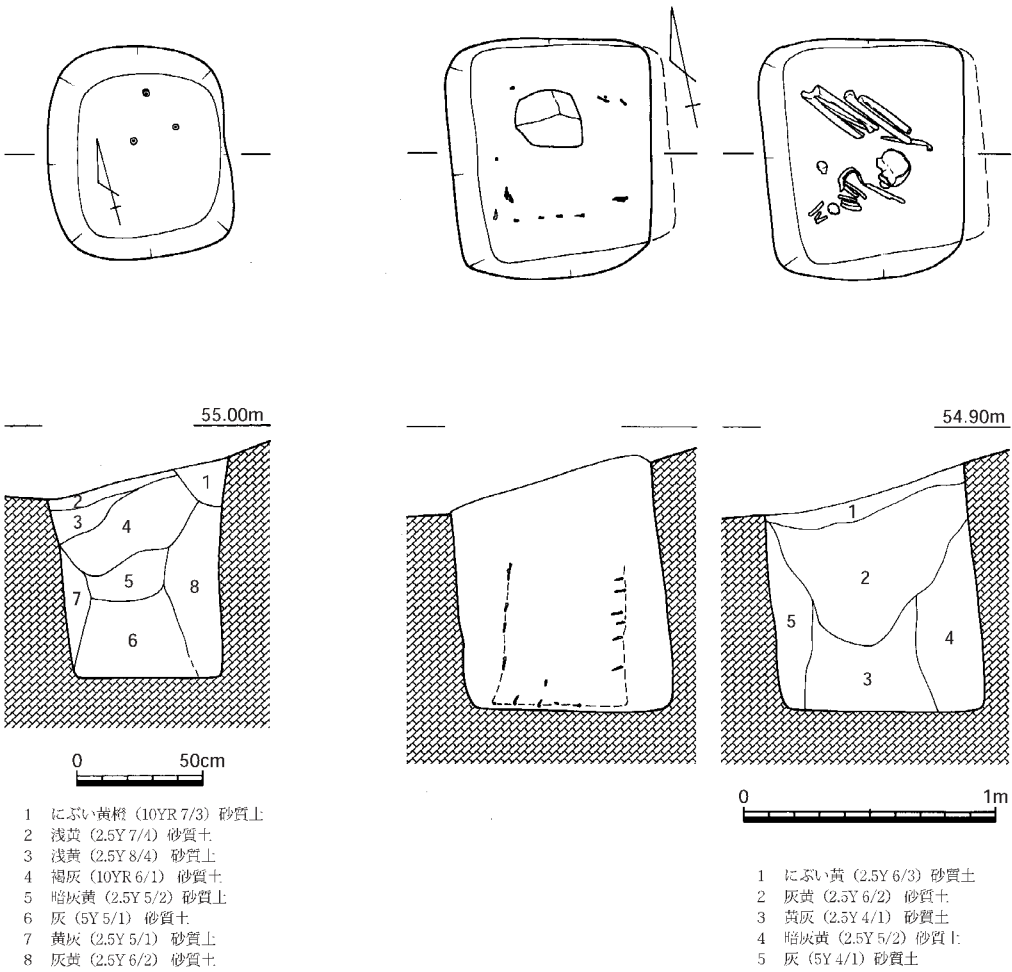
番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁器	土器	釘	銭貨				煙管	その他	人骨			
									古寛永	新寛永	その他	計			部	位	性	年
9	長方形	110	53	88	5366								1	V	金具4			
10	方形	67	49	42	5414													
11	方形	100	76	117	5368			5							小骨片、 大臼歯		成人	
12	方形	87	69	97	5396				1	2	不明9 鉄銭含	12	1	IV	土1 頭蓋骨、 大腿骨、 脛骨、 上腕骨ほか	女	老人	脛骨長27.5cm 推定身長132~137cm 頭蓋骨眼窩上縁は突出せず、 眉弓の隆起もゆるやか
13	長方形	106	65	108	5350				6	6		12	1	V	金具3			
14	長方形	109	66	84	5408	肥前系 18c前-中頃			1	11		12		金具1、 漆			成人	



第122図 墓12~14 (1/30)

第3章 土井遺跡

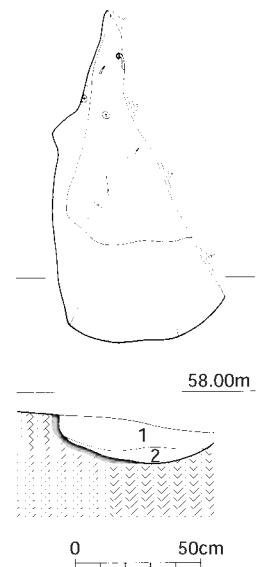
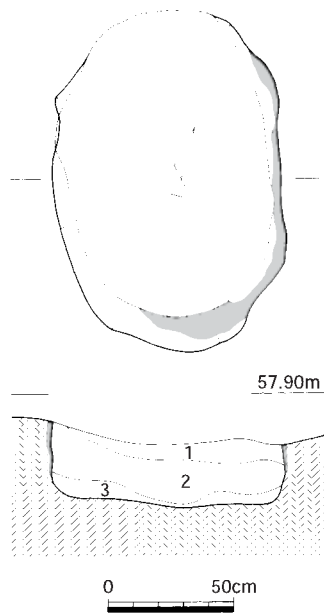
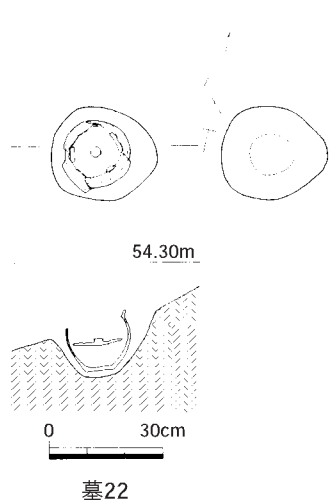
番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁器	土器	釘	銭貨				煙管 数	時期	その他	人骨			
									古寛永	新寛永	その他	計				部	位	性	年
15	方形	67	49	42	5414			3	2	9		11			漆				
16	方形	95	76	99	5377			30	3	9		12	1	IV	櫛	下顎骨、助骨9.10 鎖骨、右大腿骨	女		右大腿骨推定40cm 推定身長156cm
17	方形	91	63	96	5379			55	1	11		12	1	V		頭蓋骨、大腿骨、 脛骨		成人	
18	不整 長方形	131	65	20	5771			8		5	鉄銭1	6	1	V		小片			火葬
19	不整形	135	90	34	5645				1	1		2							火葬
20	不整 長方形	207	89	43	5689	肥前系 1780-1810		57		2		2	1	IV					火葬
21	不整 長方形	165	71	45	5700														火葬
22	円形	28	24	18	5399		備前系												火葬



墓15

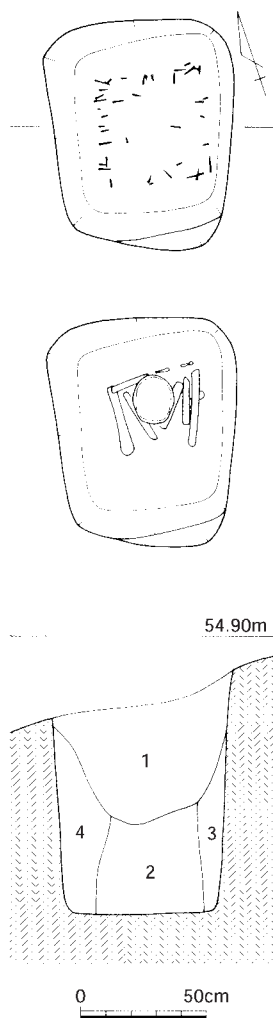
墓16

第123図 墓15・16 (1/30)

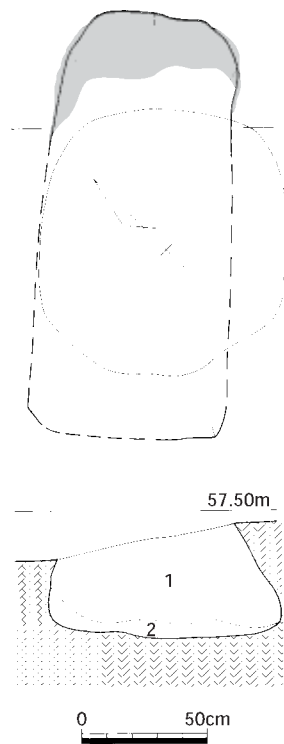


- 1 明黄褐 (10YR 6/6) 砂質土
2 褐灰 (10YR 5/1) 粘質土 (灰層)
3 褐灰 (10YR 4/1) 砂質土 (灰層)

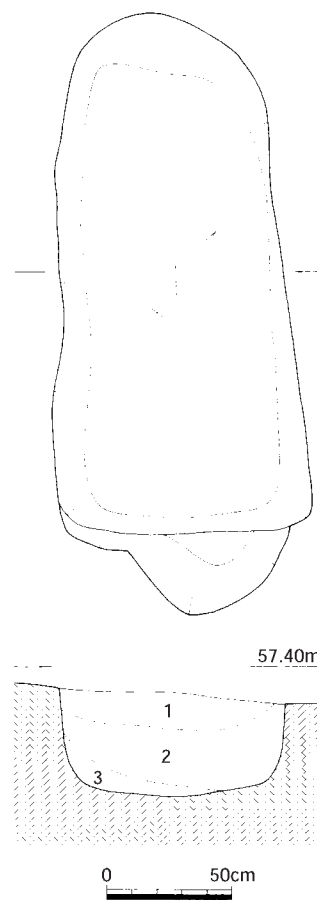
- 1 にぶい黄橙 (10YR 6/4) 砂質土
2 明黄褐 (10YR 6/6) 砂質土
3 褐灰 (10YR 4/1) 砂質土 (灰層)



- 1 灰黄 (2.5Y 6/2) 砂質土
2 にぶい褐 (7.5YR 5/3) 砂質土
3 浅黄 (2.5Y 7/3) 砂質土
4 灰褐 (5YR 5/2) 砂質土



- 1 黄橙 (10YR 7/8) 砂質土
2 炭層

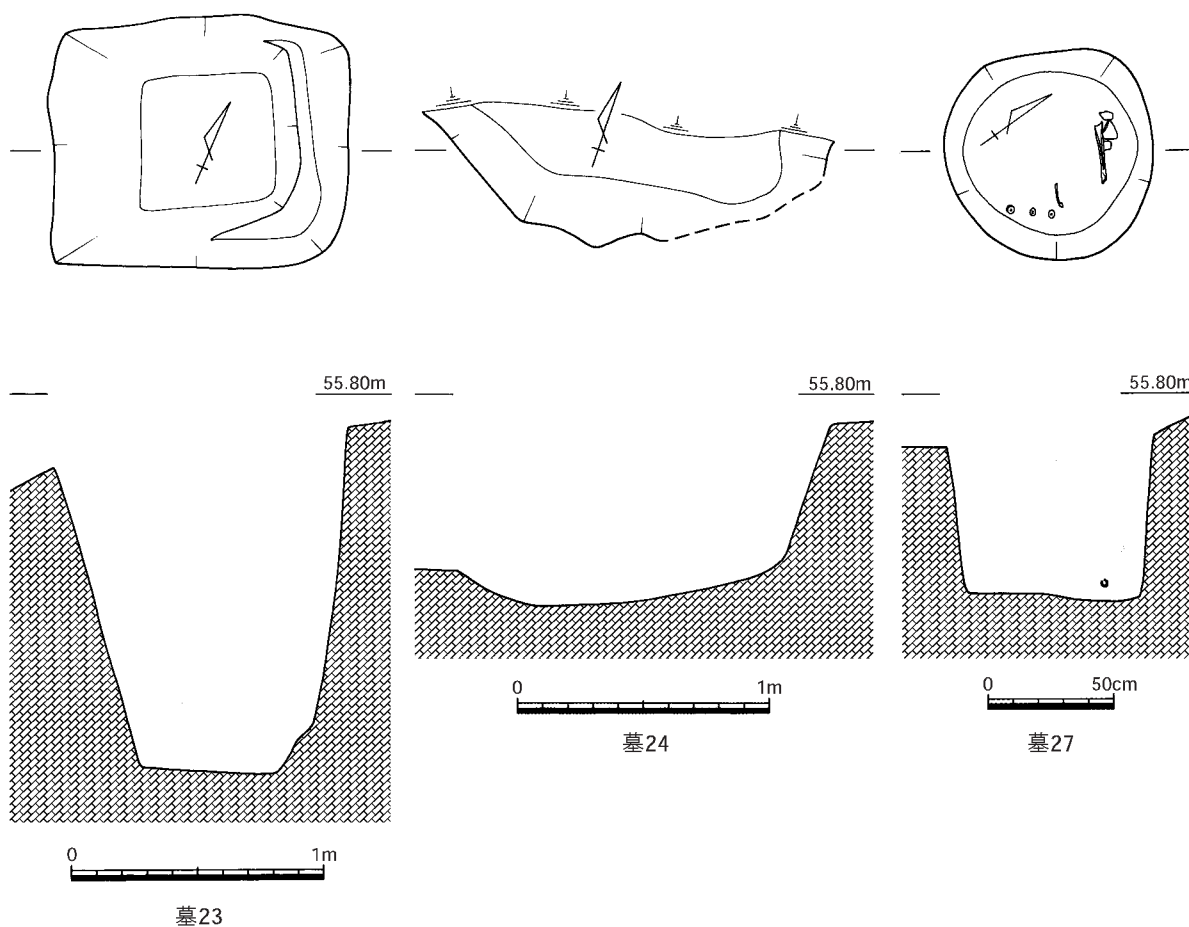


- 1 黄橙 (10YR 7/8) 砂質土
2 明黄褐 (10YR 6/6) 砂質土 ※炭を含
3 炭層

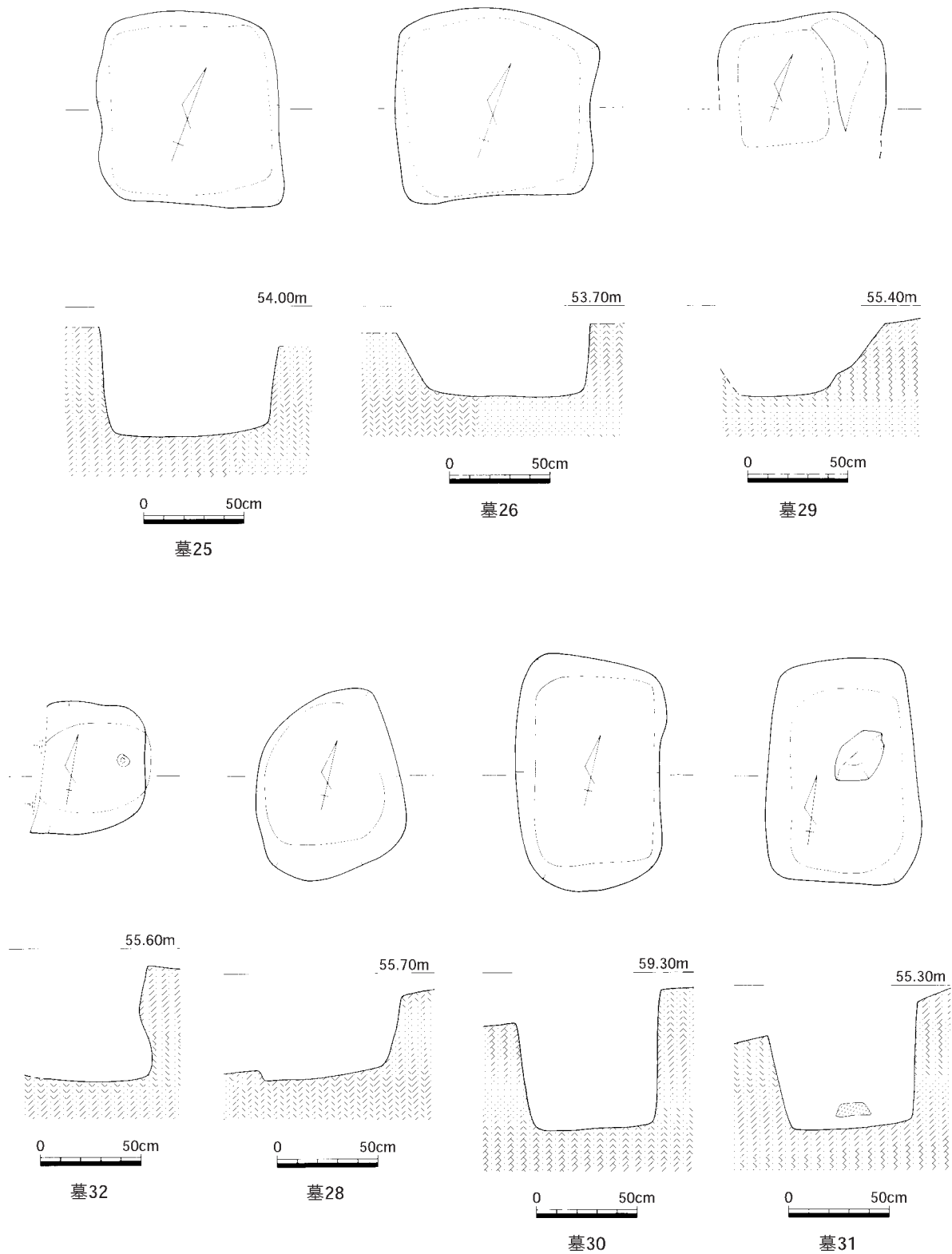
第124図 墓17～22 (1/20・1/30)

第3章 土井遺跡

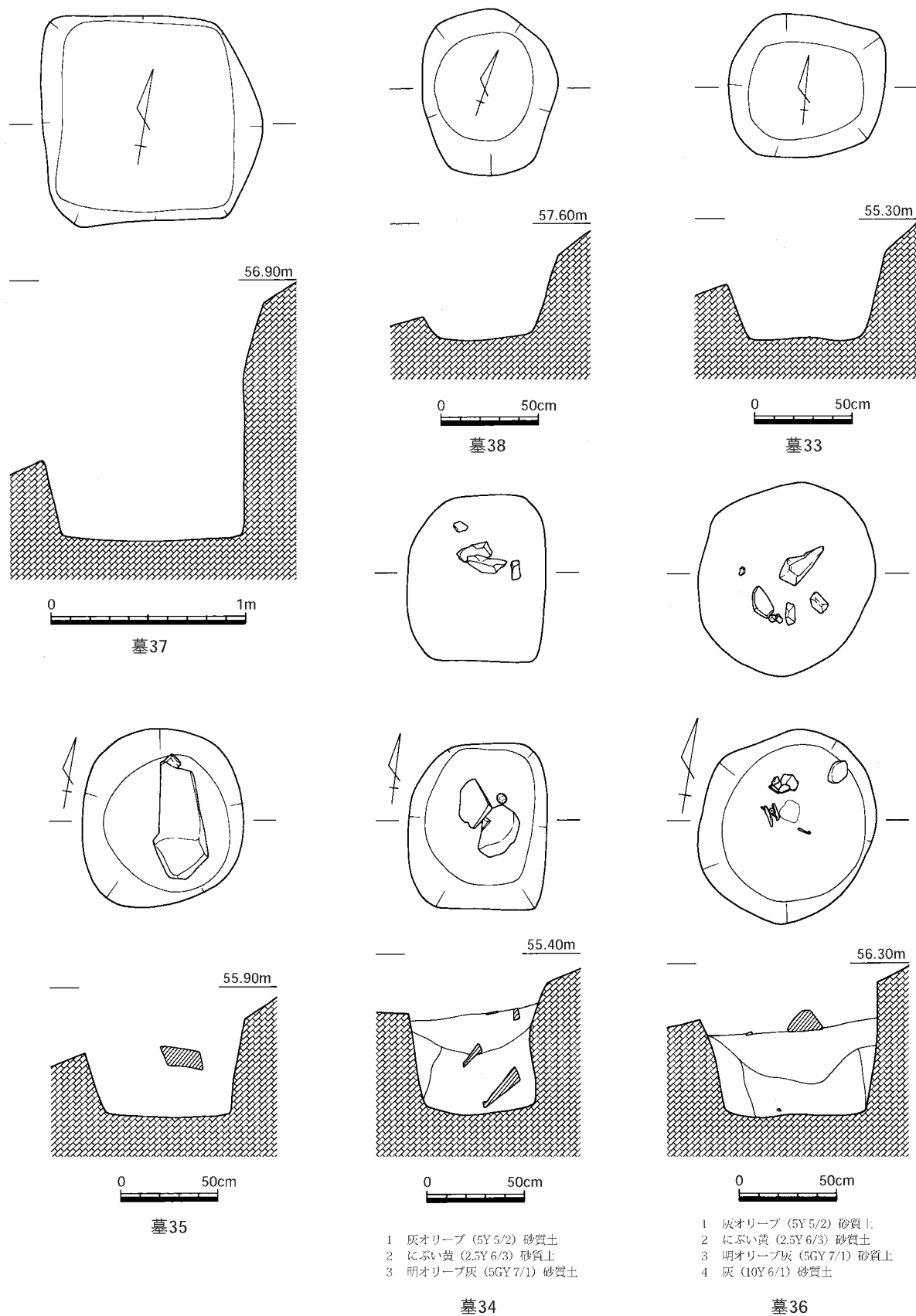
番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁 器	土器	釘	銭 貨				煙管		その他	人 骨		
									占寛永	新寛永	その他	計	数	時期		部 位	性 年	備 考
23	方 形	119	95	138	5329	瀬戸 近代		58		5		5			簪1 鉄2			
24	不整形	151	45	72	5406	瀬戸 近代		13	1	4	嘉祐通寶1	6	1	VI	時計1、 瓶1 財布1			
25	方 形	96	88	55	5335													
26	方 形	101	88	36	5325													
27	円 形	83	81	67	5497		小皿1		9	9		18	1	V				
28	不 整 形	92	70	42	5517													
29	方 形	84	75	36	5495													
30	長方形	117	70	71	5451					3		3			金具1			
31	長方形	112	69	64	5458			5							金具4			
32	方 形	66	49	56	5494	肥前系 17c後半												



第125図 墓23・24・27 (1/30)

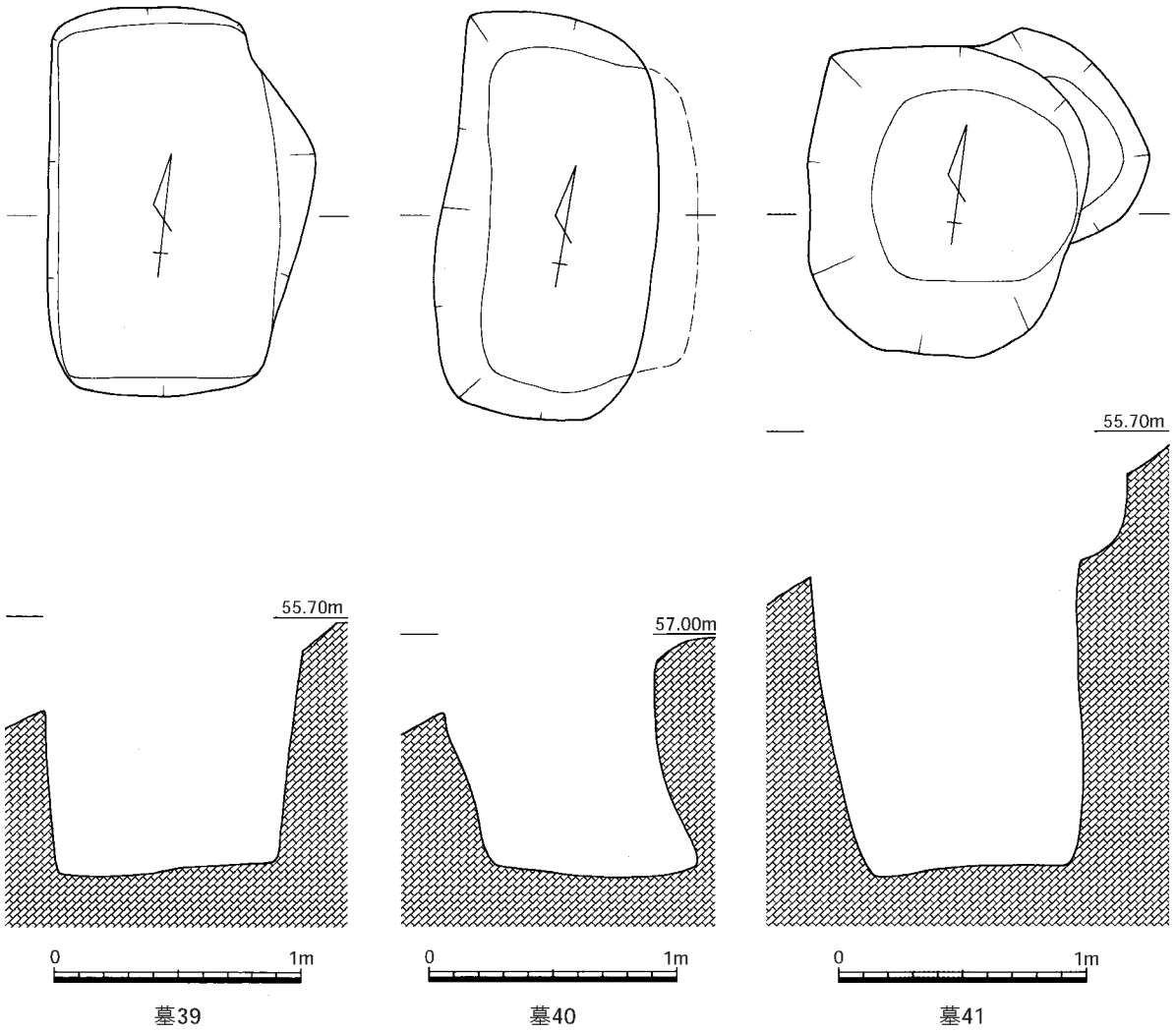


第126図 墓25・26・28～32 (1/30)



第127図 墓33～38 (1/30)

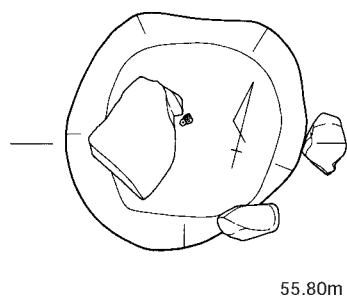
番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁 器	土 器	釘	銭 貨				煙管 数 時期	その他	人 骨			
									古寛永	新寛永	その他	計			部 位	性	年	備 考
33	方 形	80	67	46	5467													
34	方 形	85	71	58	5457		小杯I	13										
35	円 形	92	83	49	5523		小皿I	3										
36	円 形	97	90	68	5541			3	2	16		18	1	V				
37	方 形	113	102	122	5556		小皿I	28		7		7						
38	不整形	85	62	43	5700													
39	長方形	156	79	92	5465													
40	長方形	162	80	88	5602		小皿I	7	1	2		3		金具4				
41	方 形	125	103	164	5390													



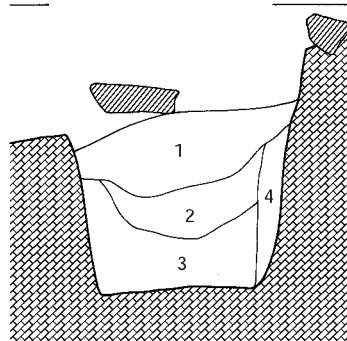
第128図 墓39～41 (1/30)

第3章 土井遺跡

番号	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	磁器	土器	釘	銭貨				煙管	その他	人骨			
									古寛永	新寛永	その他	計	数	時期	部位	性	年	備考
42	長方形	90	73	120	5427			36	7	4		11	1	V				
43	長方形	113	80	98	5435			6	4	9		13	1	V				
44	不整形	94	91	77	5465			13		12		12						
45	不整形楕円形	119	89	88	5501		備前焼								全身	男	12 ~15	頭蓋骨乳輪突起は小さいが若い 第8人に肉着出していない 左大腿骨は第(下)は附じていない 推定身長55cm 身長143cm
46	不整形楕円形	102	91	111	5425	肥前系 18c後-19c初	備前焼							玉2、 針3				
47	不整形楕円形	126	71	82	5572	肥前系 17c後半	備前焼	2	7	6		13		毛抜1、 針1	全身	女	成人	頭蓋骨縫合は閉じていない →幼穉ではない 骨質は附じている 成人 左大腿骨推定34cm身長141cm
48						肥前系 17c後半												
49								3						金具4				
50						肥前系 17c後半	小皿1											
51							小皿1								中手骨		成人	
52																		
53													1	IV				
54								3		12		12	1	IV				
55							小皿1	4	4	7	元口口口	12	1	V	毛抜1			
56								1		12		12	1	不明				
57								6										
58								2	1			1						
59								12	1			1						
60						美濃 岐阜370 昭和16-20												
61								2	2	19		21	1	不明	簪1			
62						瀬戸・美濃 明治後-大正												
63										11		11						
64								1										
65								9										
66								7										
67								6										
68								3										
69								1										
70															左腕骨体部		成人	
71								1										
72								3										
73								2										
74								6										



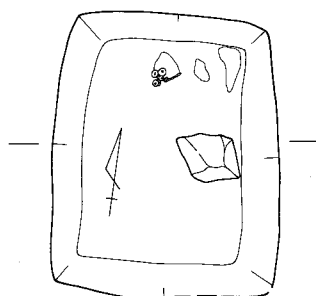
55.80m



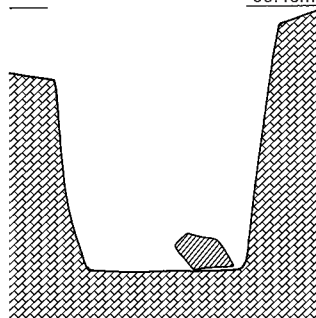
0 50cm

- 1 浅黄 (2.5Y 7/4) 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR 7/4) 砂質土
- 3 灰黄 (2.5Y 6/2) 砂質土
- 4 灰黄 (2.5Y 5/2) 砂質土

墓44

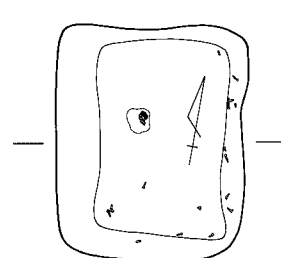


55.40m

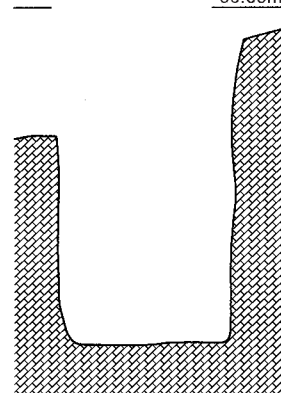


0 50cm

墓43



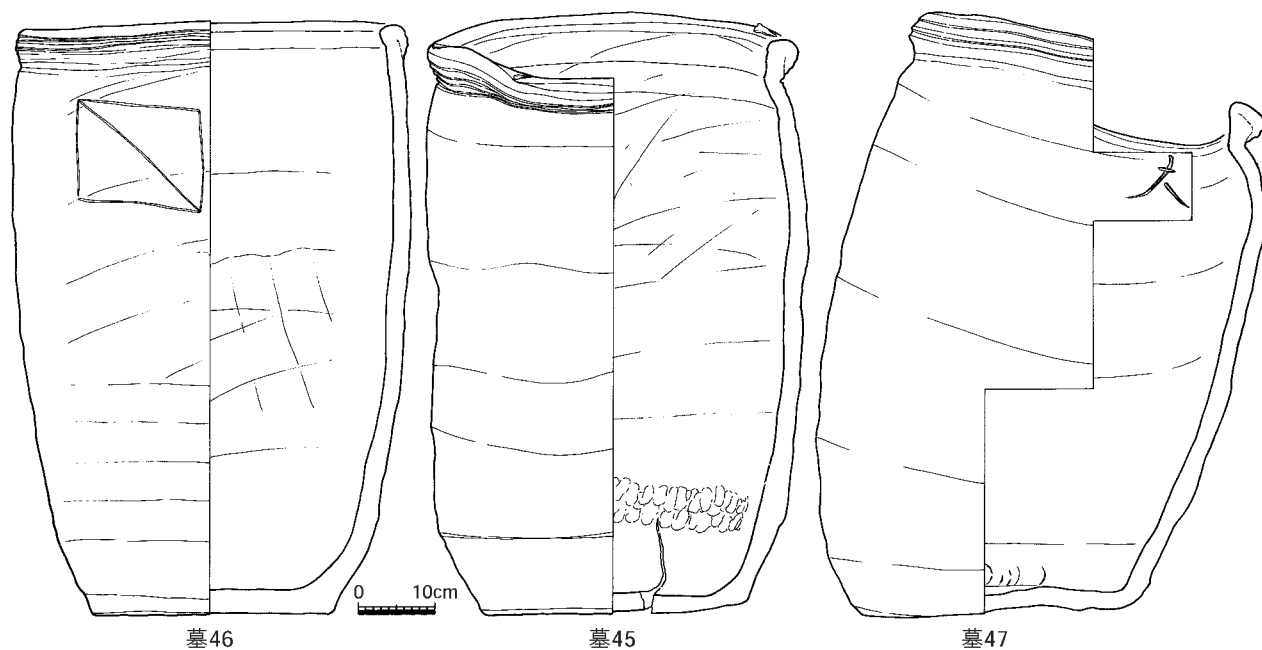
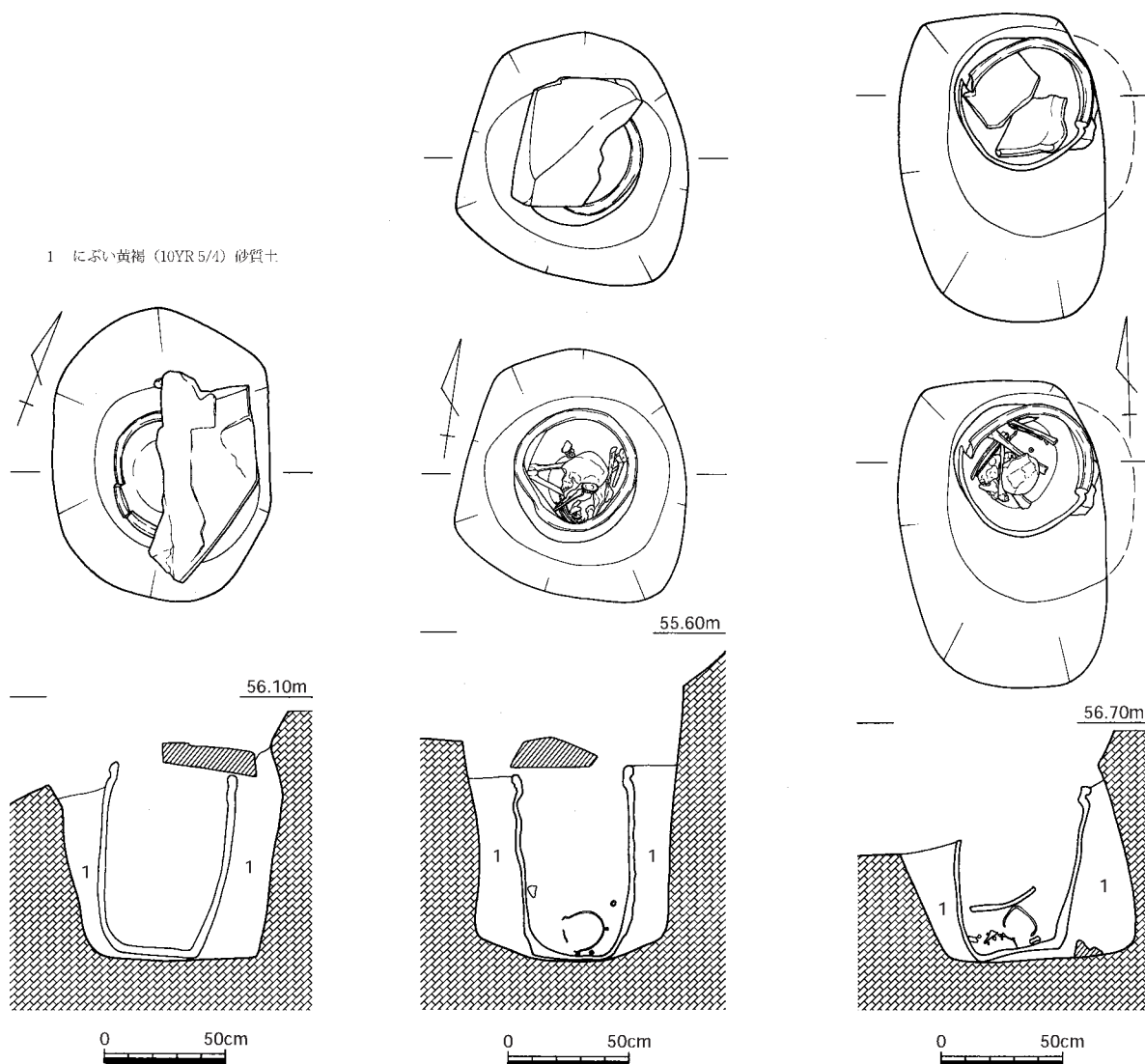
55.60m



0 50cm

墓42

第129図 墓42~44 (1/30)



第130図 墓45～47 (1/30・1/10)

第4表 銭貨出土枚数別墓数
墓数

銭 数	墓数	
	5	10
30		
29		
28		
27		
26		
25		
24		
23		
22		
21		
20		
19		
18		
17		
16		
15		
14		
13		
12		
11		
10		
9		
8		
7		
6		
5		
4		
3		
2		
1		

近世以後の墓

150基以上の墓を検出し、その中で調査対象としたのは47基である。このほか、検出中に27基の墓で遺物を確認した。つぎに概略を記す。

磁器は12基の墓で確認した。その中で最も古い時期に属するのは墓1・32・47・48・50の肥前系磁器で17世紀後半である。また、墓18では18世紀前半から中頃の、墓20・46では18世紀後半から19世紀初頭の肥前系磁器を検出した。このほかには墓23・24・60・62で、近代から現代に属する瀬戸・美濃系の磁器を検出した。以上より、この地域で入手できた磁器は17世紀後半から19世紀初頭までは肥前系磁器が主体を占め、それ以後は瀬戸・美濃系へと変化することがわかる。これは岡山城下でも同様の傾向にある（杉山2001）。

銭貨は35基の墓で確認し、その総枚数は401枚にのぼる。枚数は少ないものでは1枚、多いものでは29枚納めていた。最も多い事例は12枚で、13例確認できた。銭貨

の種類には嘉祐通寶なども存在するが、寛永通寶が多数を占める。なかでも新寛永が多く292枚を数え、全体の約3/4を占めることになる。複数まとまって出土した銭貨には紐が通してあり、布が付着した事例が多い。また漆製品とともに検出することが多かった。おそらく、銭貨を布で包み、漆の椀に入れて棺へ埋納したものと考ええる。

煙管は21基の墓で確認した。多くが古泉弘分類（古泉2001）のIVからVに属し、VIに属する資料が1例確認できる。ここから、この地域では18世紀後半から19世紀末まで煙管を埋納する風習が流行したことがうかがえる。煙管の埋納には性差がなかったことが、人骨鑑定の結果から判断できる。なお、煙管を検出した墓では銭貨を6枚か12枚伴うことが多かった。

備前焼大甕を埋葬施設に利用した墓は3例確認できる。E区南寄りの位置で、3基が並ぶような状態で検出した。墓45の甕底部には肩部と同様の線刻を施す。人骨以外に出土遺物はなく、人骨は年齢12～15才の男性であるとの鑑定を受けた。墓46は18世紀後半から19世紀初頭の肥前系磁器を伴う。また、掘り方底面付近で土師器小皿を検出した。人骨は残存しない。墓47は17世紀後半の肥前系磁器のほかに、寛永通寶13枚が伴う。このほか、針と毛抜きを確認した。甕は肩部に「大」という線刻を施す。人骨は高齢ではない成人女性であると鑑定を受けた。

墓18から21は掘り方が被熱のため赤化しており、火葬を行ったものと考ええる。また、墓22の備前焼小壺に納められた人骨も火葬骨であった。

今回調査した墓数は全体の1/3に満たないものであり、また調査対象としたものも十分な調査を行ったとはいえない。そのため、ここで述べた傾向が全体の傾向を反映しているかは不明である。なお、出土遺物に関しては本土井の共同墓地にて再埋葬した。（重根）

参考文献

古泉弘 2001「喫煙2煙管」『図説 江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会 柏書房

杉山一雄 2001「3. 近世の土器・陶磁器について」『天瀬遺跡・岡山城外堀跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告154

第6節 考察

1 調査成果の概要

はじめに

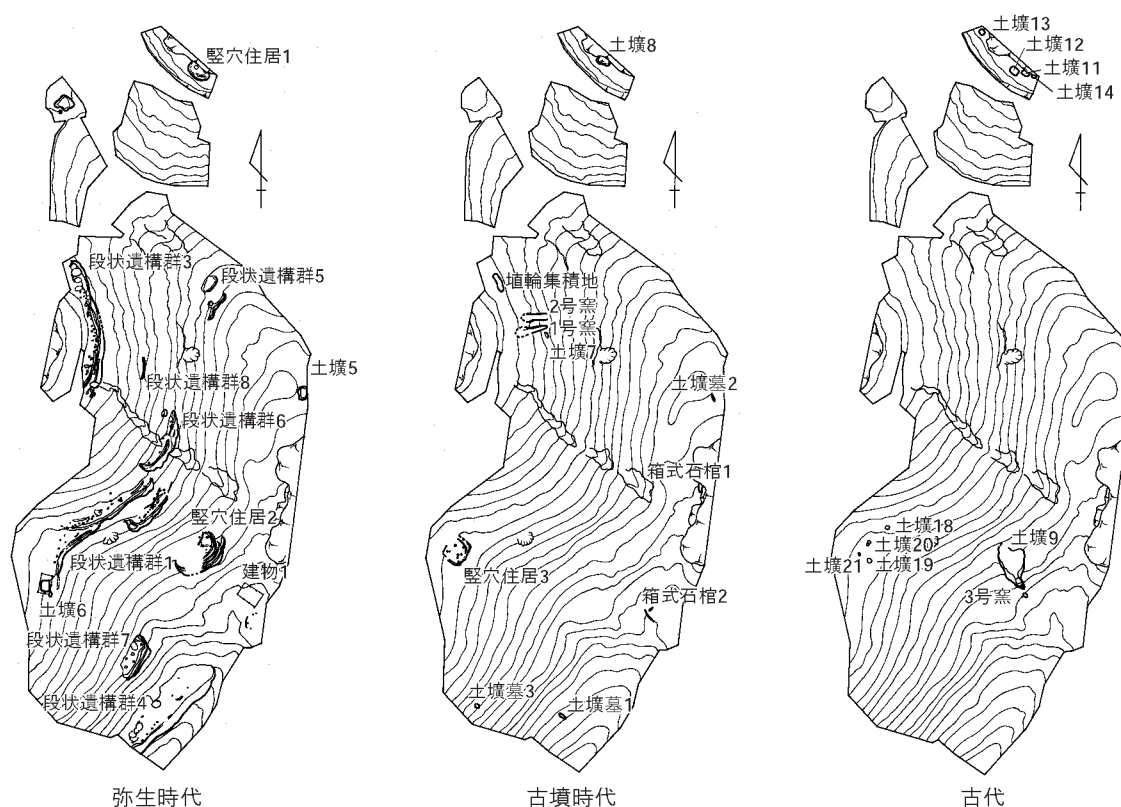
土井遺跡は、吉井川中流域西岸から2 km程離れた丘陵上に位置する。周辺低位部と調査地最高所との比高差は約40mである。目前には吉井川の支流である可真川が東西に流れており、可真川を挟み対面する丘陵には前内池遺跡・前内池古墳群（内藤・蛭原他2003）が存在する。

今回の調査では弥生時代から近現代までの遺構を確認した。その成果を時代ごとに記す。

弥生時代

段状遺構群を8群、竪穴住居を2軒、掘立柱建物を1棟、土壇を6基確認した。段状遺構群はいずれも中期後半から出現し、拡張あるいは建て直しを繰り返して後期前半まで継続するものも存在する。2軒の竪穴住居は後期中頃に属し、段状遺構群と入れ替わるように出現する。後期後半以後の遺構は確認できない。

土器等の遺物は遺構埋土中では多数検出できたが、床面にはほとんど残っておらず、移住する際に片づけた印象を受ける。その中で、竪穴住居2は石器が比較的多く床面に残っており、サヌカイト剥



第131図 土井遺跡 時期別遺構変遷 (1/1,600)

片を53.12g検出した。石器にはいずれも使用痕が観察でき、未成品が存在しないことから、剥片は簡易な加工を行う際に生じたものとする。石包丁は流紋岩を利用した磨製のものと、サヌカイトを利用した打製のものが併存する。鉄器は段状遺構群3と段状遺構群7でわずかに1点ずつ確認できただけである。

土井遺跡の丘陵で生活の痕跡が明確となるのは中期後半以後であるのに対し、前内池遺跡では中期中頃の竪穴住居や段状遺構が確認でき、後期を通じて土器棺墓と土壙墓を継続的に造営する（尾上2003）。また、谷の前遺跡では後期中頃から竪穴住居数が急増し、後半には墳丘墓を築く。居住区が前内池遺跡→土井遺跡→谷の前遺跡と南に向かって移動し、前内池遺跡の墓造営が衰退傾向にある時期に谷の前遺跡に墳丘墓が出現することから、この3遺跡は関係が深いものとする。ただし、土井遺跡の遺構数に対し、前内池遺跡の墓数や谷の前遺跡の竪穴住居数は非常に多く、周辺に未調査の集落遺跡が存在すると想定する。

土井遺跡や前内池遺跡が所在する丘陵周辺の低位部は、昭和58年の可真川改修工事の終了まで氾濫が頻繁に起こり、近年まで居住には適さない地域であった（杉原稔1994）（註1）。こうした地理的条件が集落立地に影響を及ぼしたことは十分に考え得ることではあるが、中期後半前後に丘陵上に遺跡が急増するのはこの周辺地域だけではなく、西日本から関東まで広い地域で確認できる現象である。この丘陵への進出は地理的条件のみが要因ではなく、他にも様々な背景があったと考える。

古墳時代

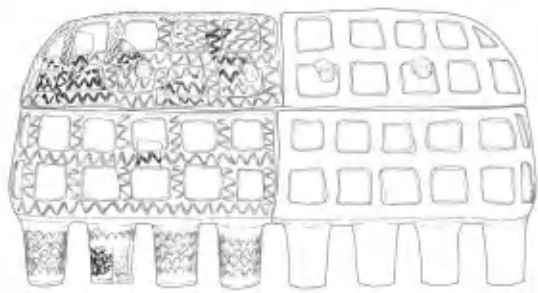
窯を2基、埴輪集積地を1か所、箱式石棺を2基、土壙墓を3基、土壙を2基、竪穴住居を1軒確認した。箱式石棺が5世紀末から6世紀初頭（陶邑TK47形式）（田辺1981）で、土壙8が7世紀前半（陶邑TK217形式）である以外、他の遺構は全て6世紀後半（陶邑TK43形式）に属する。

窯では埴輪と陶棺を検出した。その出土状態から岡山県内でも埴輪と陶棺を同じ窯で焼成していたことが明らかとなり、これは今回の調査の大きな成果である（註2）。2号窯から6m離れた地点で検出した埴輪集積地では多量の円筒埴輪片の中から、県内では類例の少ない「盾持ち人」と呼ばれる人物埴輪がほぼ完形の状態で見つかった。このほかには、陶棺や人物埴輪の頭部等を検出した。今回検出した窯で焼成した製品は、赤坂町西窪田に所在する古墳群や熊山町弥上周辺の古墳に供給したと想定する。詳細については次項で述べる。

土壙墓2では埴輪とともに、耳環と鉄鐸を検出した。鉄鐸は朝鮮半島に出土例が多く、鍛冶との関連が指摘されている（行田1997）（註3）。土井遺跡でも6世紀後半の遺構で鉄滓が確認できること

から、この時期に製鉄か鍛冶が行われていた可能性が高い。

以上より、古墳時代後期には土井遺跡が所在する丘陵で窯業と鉄に関わる生産活動が行われていたと想定でき、埴輪生産の終焉や陶棺の起源等（間壁2003）を検討する上でも重要な成果を得ることができたと言える。



陶棺（稲谷知子氏作成）



石見型盾形埴輪

第132図 2号窯出土陶棺・石見型盾形埴輪復元図（1/30）

光延秀典氏作成
(カシミール3D使用)



第133図 土井遺跡と古代山陽道

古代

窯を1基、土塋を13基確認した。土塋は古墳時代に遡る可能性があるものも含む。

窯は床面上半に段を有する地下式の窖窯である。床面は2面確認でき、第1床面では須恵器と瓦を、最終床面では瓦のみを焼成する。第1床面の平瓦には模骨痕が観察できるのに対し、最終床面の平瓦には観察できない。第1床面で検出した須恵器が8世紀前半と想定でき(註4)、岡山県における平瓦製作技法が桶巻作りから一枚作りへと変換する時期を考える上で、重要な地域事例の一つと言える。なお、今回検出した瓦は類例が確認できず供給先は不明であるが、この時期は古代山陽道の整備が進んだ時期であることから(小橋2000)、おそらく近隣の関連施設へ供給したと考える。

中世以後

土井遺跡背後の坪山には戦国時代に上村出雲守が居城した可真上城が所在し(臼井1994)、今回の調査でも関連施設である堀切を確認した。この時期に旧地形は大きく改変を受けたものと想定する。

17世紀後半から近現代までは墓地や畑として利用し、21世紀には南北を結ぶ一般県道となる。(重根)

註

- 1 地元の方から教示を得た。
- 2 近畿地方では埴輪と陶棺を同じ窯で焼成した事例は複数確認できる。例)大阪府羽曳野市野々上埴輪窯跡群(笠井・森田1981)、奈良県奈良市菅原東遺跡(森下1993)、三重県津市藤谷窯跡群(藤田2000)
- 3 県内では土井遺跡以外に津山市西吉田北1号墳で2点(行田1997)、奥津町杉遺跡で5点(日下2000)出土事例の報告がある。
- 4 年代の問題に関しては、第3項(P139, 20~24)に記述。

参考文献

- 白井洋輔 1994「二その他の城と城主」『第7節山城と武将たち』『第4章中世』『熊山町史』通史編上巻 熊山町
尾上元規 2003「1シダカ鼻調査区の弥生時代墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174 岡山県教育委員会
笠井敏光・森田和伸編 1981「野々上埴輪窯跡群」『古市古墳群』Ⅲ 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書7 羽曳野市教育委員会
小橋国広 1994「四山陽道と珂磨駅」『第2節律令制下の熊山町域』『第3章古代』『熊山町史』通史編上巻 熊山町
日下隆春 2000「杉遺跡」『奥津町埋蔵文化財発掘調査報告』4 岡山県奥津町教育委員会
杉原稔 1994「二治水施設」『第3節吉井川の治水と熊山橋』『第7章現代』『熊山町史』通史編下巻 熊山町
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
内藤善史・蛭原啓介他 2003「前内池遺跡・前内池古墳群・佐古遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174 岡山県教育委員会
間壁菫子 2003「可真・珂磨・かま＝窯」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集
藤田充子編 2000「藤谷窯跡群発掘調査報告」『津市埋蔵文化財センター年報』4 津市埋蔵文化財センター
森下浩行 1991「土師質亀形陶棺小考」『奈良市埋蔵文化財調査研究センター紀要』奈良市教育委員会
行田裕美 1997「鉄鐸について」『西吉田北遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集 津山市教育委員会

2 埴輪について

はじめに

岡山県は埴輪の起源にも関わりが深い地域であり（近藤・春成1967）、その出土事例も多数確認できる。しかしながら、これまで埴輪生産に関わる遺構の調査事例は皆無であった。それが今回の調査で、わずか2例ではあるが、明らかになったことは大きな成果である。ただし、現状ではあくまでも製作地の一つが確認できたにすぎない。そこで、つぎの課題となるのは土井遺跡で焼成した埴輪の供給先である。製作地と供給先が明らかになれば、当時の流通経路や人々の交流などを知る上で有益な材料となり、今回の成果がより意義深いものとなると考える。

ここでは、土井遺跡で検出した埴輪の供給先を検討することを目的とする。またその中で、岡山県内における土井遺跡の位置付けを考えることを試みる。

土井遺跡の埴輪

検討を試みる前に、土井遺跡の埴輪について整理しておく。

まず、今回得た資料について遺構ごとに記す。

- i 1号窯 円筒埴輪
- ii 2号窯 石見型盾形埴輪、種別不明の形象埴輪（鳥頭部等）、陶棺、円筒埴輪
- iii 集積地・灰原 円筒埴輪、人物埴輪、石見型盾形埴輪、種別不明の形象埴輪、陶棺

1号窯床面で検出した遺物が全て円筒埴輪であるのに対し、2号窯で検出した破片の大半は石見型盾形埴輪や陶棺の一部であり、円筒埴輪はわずかに突帯や口縁部の細片が確認できただけであった。

つぎに、円筒埴輪の特徴を記す。

- i 段数（突帯数） 5段（4条）、6段（5条）
- ii 円孔の位置 2段と4段、3段と5段
ともに各段2個を180°の位置に割り付け、他の段とも90°位置を定める
- iii 高さ 47cm、54cm、57cm
- iv 底部調整 行うものを行わないものが併存する
- v 突帯 幅1cm程度で低く断面M字形、幅5mm程度で非常に細い
- vi 突帯間隔 一定しない
- vii 押圧技法 少数観察できる
- viii 外面調整 タテハケ

段数とハケ調整痕をもとに7種類に区分して報告したが、全体の主な特徴をあげると上記のとおりである。これらの特徴から、土井遺跡出土の円筒埴輪は川西編年Ⅴ期のなかでも新しい位置づけとなる（川西1978）。また、埴輪集積地や2号窯下の整地層で検出した須恵器は陶器TK43形式と類似する。こうした埴輪や須恵器の特徴から判断すると、埴輪窯の操業時期は6世紀後半を前後する時期となる。これに対し、熱残留地磁気測定結果では1号窯AD540±10、2号窯AD555±15となり、放射性炭素年代測定結果では1号窯AD540-616、2号窯AD597-652で6世紀中頃から7世紀中頃の数値を示す。この差異が何を起因として生じたものか、現状では考察を加える手段を持ち得ていないため、ここで

は、それぞれの結果を併記するに留めておく。

遺物出土状態と自然化学年代測定結果から、2号窯が1号窯より廃絶時期が遅いと判断する。それに基づくと、1号窯で検出した円筒埴輪5 a・5 b・5 d類より、2号窯で検出した円筒埴輪6 a類が新しい時期に属することになる。さらに1号窯においては、第1床面で5 a類が、第2床面で5 a・5 d類が多く、最終床面では5 b類が多数を占めることから、5 b類が5 a・5 d類より新しい可能性が高い。埴輪集積地と灰原でのみ検出した6 b・5 c・5 e類については2号窯最終床面で検出した6 a類よりは古いと言えるかもしれないが、それ以上前後関係について言及することは難しい。この円筒埴輪の前後関係をまとめると、つぎのとおりである。

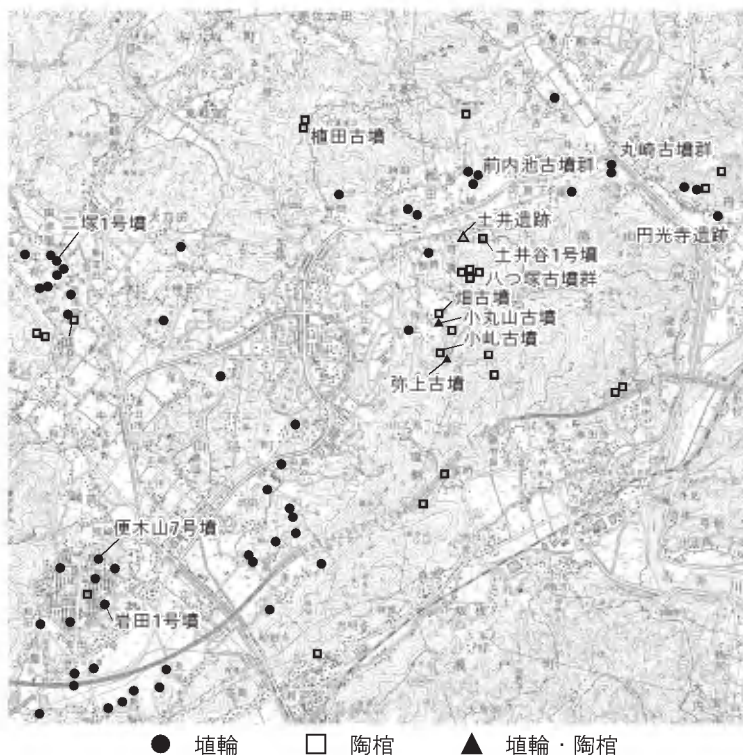
(古) 5 a → 5 d → 5 b → 6 a (新)
 6 b・5 c・5 e ↗

この順序は、あくまでも出土状態から判断した大まかな変遷である。当然、同時に異なる分類の円筒埴輪を焼成していた可能性もあり、ここで示した順序が必ずしも時期差を示すわけではない。

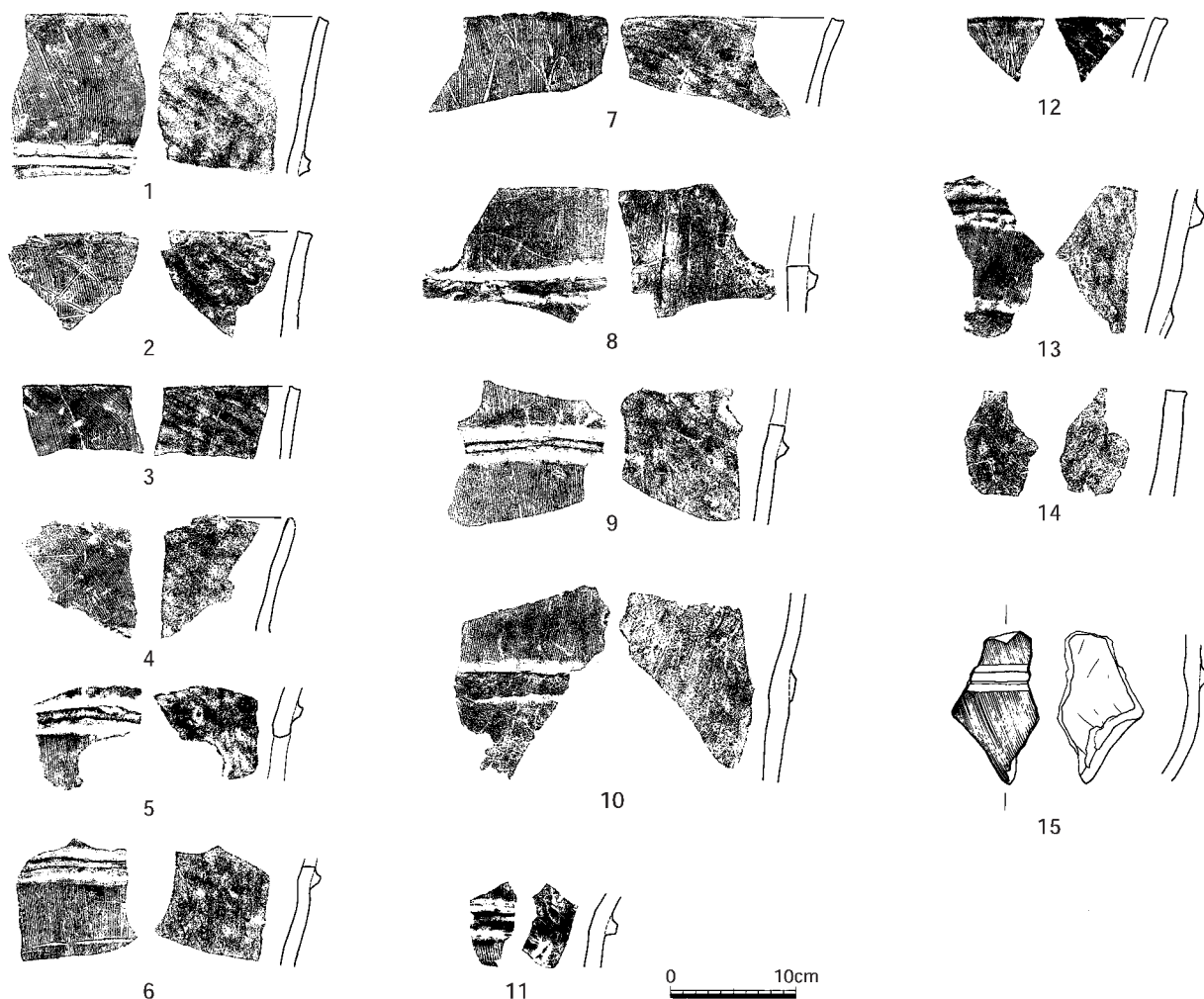
埴輪の供給先

土井遺跡周辺は埴輪を持つ古墳が複数存在するため、まず各事例との比較を行う。これまで熊山町内において、発掘調査時に埴輪を検出した古墳は4例確認できる。弥上古墳（山磨1986）、丸崎2号墳（高畑・光永1987）、前内池1号墳、前内池4号墳（内藤・蛭原他2003）である。

弥上古墳の円筒埴輪は、土井遺跡の埴輪と比較すると突帯が高く、径も大きい。ハケ調整痕も異なる。陶器TK43形式と類似する須恵器が伴うことから、時期は6世紀後半である。丸崎2号墳の円筒埴輪は、外面 Bc 種ヨコハケ（一瀬1988）が観察できる資料も存在し、胴部径は約40cmを測る。基底部分が残存せず、他の古墳から持ち込んだ可能性が高い。陶器TK47形式と類似する須恵器が伴うことから、古墳の時期は5世紀末から6世紀初頭である（註1）。土井遺跡の埴輪とは異なる。前内池古墳群は、可真川を挟んで土井遺跡と対面する丘陵上に位置する。その距離は約500mである。1号墳と4号墳の円筒埴輪は、外面調整ヨコハケとタテハケが併存する。ヨコハケは土井遺跡では一点も確認できず、タテハケも工具が異なると判断した。また、突帯は高く、断面台形を呈する資料が多い。その点も土井の資料とは異なる。器高と突帯数は5 b類と類似しており、円孔の配置も同様である。石見型盾形埴輪も存在する。このような共通点も確認できるが、異なる点を重視し、前内池古墳群の埴輪は



第134図 埴輪・陶棺出土地点（1/100,000）



第135図 前内池下採集資料 (1/6)

土井遺跡で焼成したものではないと判断する。前内池1号墳と4号墳は陶邑TK47形式と類似する須恵器に伴い、時期は5世紀末から6世紀初頭である。土井遺跡の時期は6世紀後半であるため、時期にも開きがある。前内池古墳群から西下15m、標高差30mの地点で埴輪が採集されており（註2）、その中にはほぼ完形となるものも確認できたうえに（註3）、焼き歪みの著しい破片も残存する。おそらくこの付近に窯跡が所在したものと想定する。採集資料は前内池4号墳の資料と共通した特徴を有するものが多く（註4）、石見型盾形埴輪も確認できる。おそらく、土井遺跡より古い段階の窯が存在したと想定する（註5）。

このほか、工事等で埴輪を確認した事例には、円光寺遺跡（鎌木1956）と小丸山古墳（高畑1994）がある。

円光寺遺跡の円筒埴輪は土師質と須恵質があると記載があるのみで、詳細は不明である。円筒以外には人物等の形象埴輪や石見型盾形埴輪があり、石見型盾形埴輪は直弧文が観察できる。小丸山古墳の円筒埴輪は（註6）、土井遺跡のものより突帯間隔が狭く、突帯の付け方も雑な印象を受ける。円孔の配置も異なる。人物埴輪については類似点が多い（註7）。顎や眉から鼻にかけての成形方法や、腕の袖口と指の表現方法など土井遺跡のものと類似する。また、向かって右側の眉が左側より短く、や

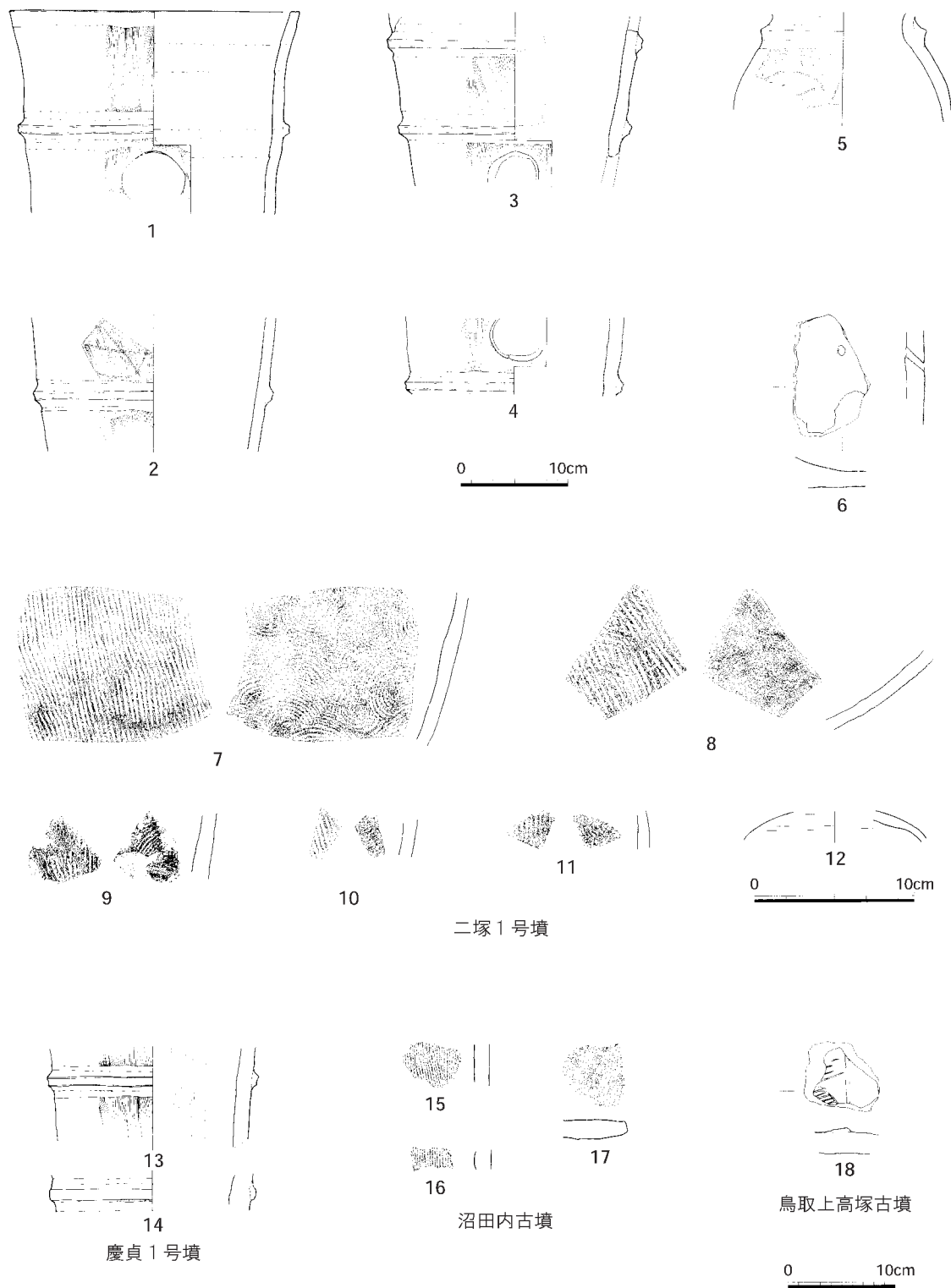


1は安倉清博氏採集資料
9～12は東京国立博物館蔵

第136図 小丸山古墳出土埴輪（1/6）

や上がった形状となる点も共通する。ただ目に関してはやや異なり、小丸山古墳のほうが細長い。このように人物埴輪は類似点が多いことから、土井遺跡で焼成した製品であると考えたいところではある。しかし円筒埴輪が全く異なるため、窯跡がさらに異なる地点に存在することが想定でき、そこで共通の技術を有する工人が製作した人物埴輪である可能性もある。現状で確認できる資料からは明確な根拠は得難いが、円筒埴輪の違いから後者の可能性が高いと考える。

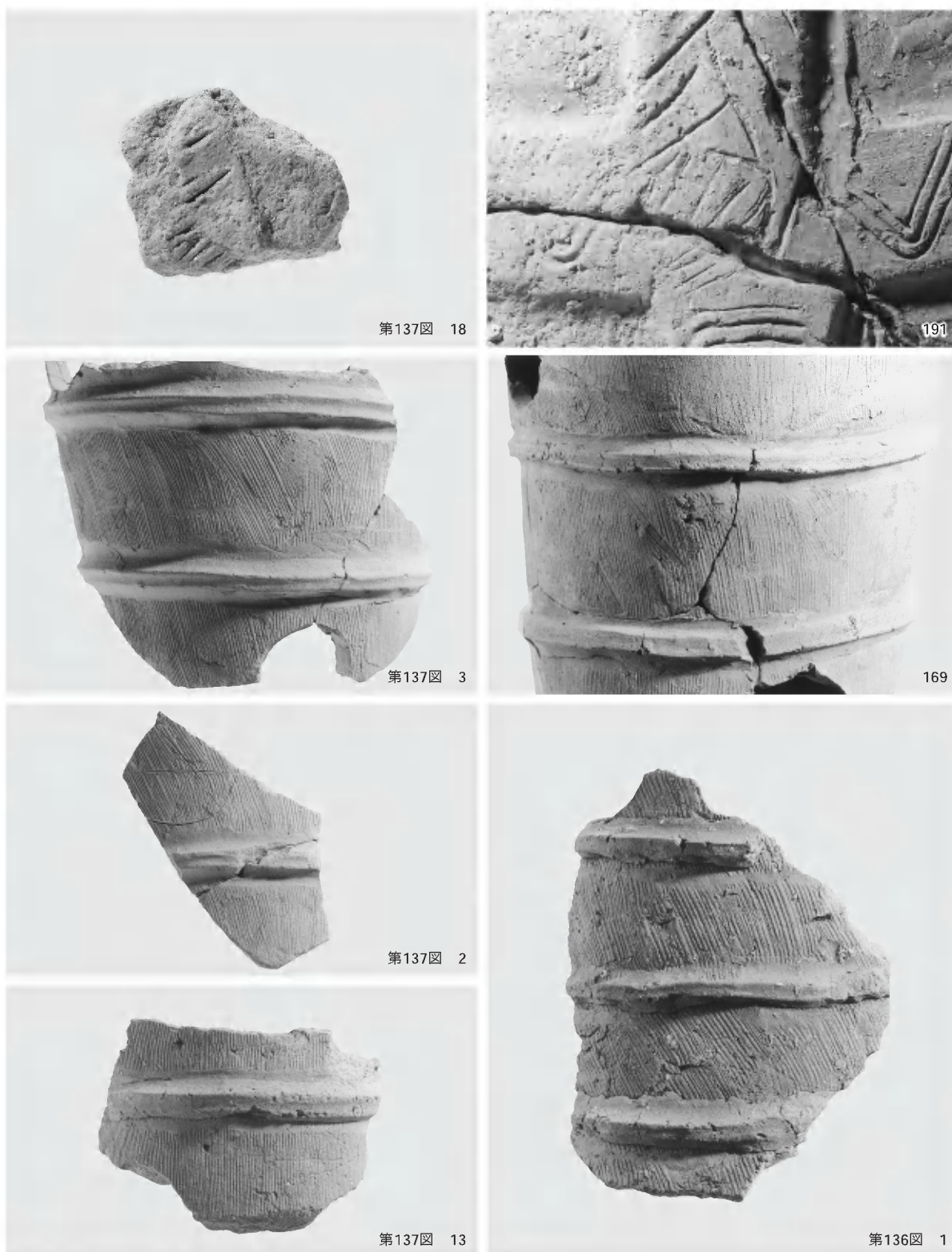
ここまで述べたとおり、熊山町内で現在確認できる埴輪の中で、土井遺跡から供給したと断定できる資料は存在しない。そこで視野を広げたところ、土井遺跡から西へ約2.7km離れた赤磐郡赤坂町西窪田に所在する二塚1号墳で、5b類と類似した埴輪を確認した（註8）。円孔の位置、突帯の形状、ハケ調整痕など類似点が多いことから、土井遺跡から供給したものとする。石見型盾形埴輪も存在



1 ~ 4 · 13 ~ 16 円筒埴輪
5 朝顔形円筒埴輪
6 · 17 石見型盾形埴輪
18 陶棺

7 ~ 12 須恵器
※ 1 ~ 18 宇垣匡雅氏採集資料

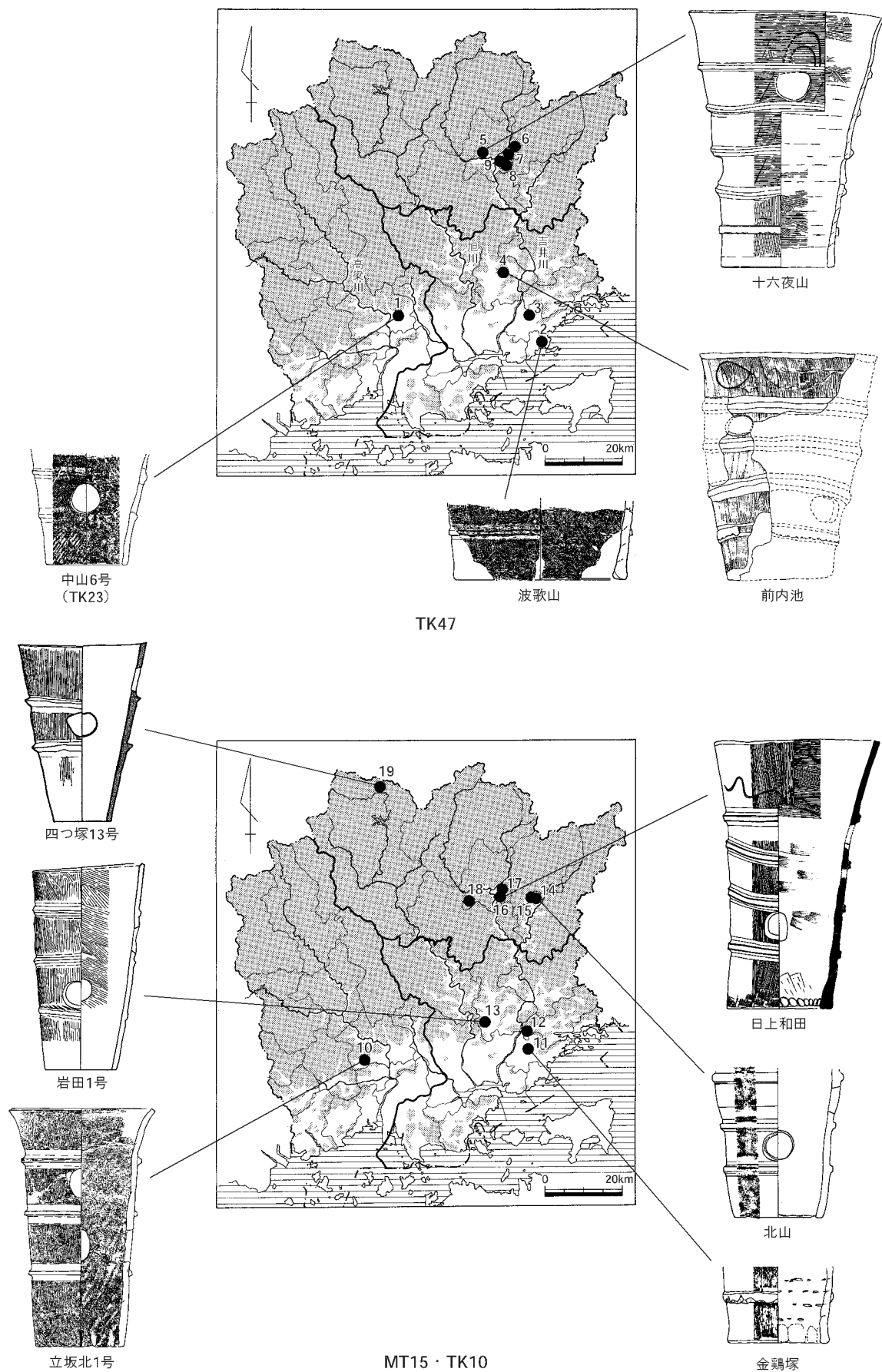
第137図 赤坂町西窪田周辺採集資料 (1/6 · 1/4)



第137図 18 陶棺 鳥取上高塚古墳
第137図 3 円筒埴輪 二塚1号墳
第137図 2 円筒埴輪 二塚1号墳
第137図 13 円筒埴輪 慶貞1号墳

191 陶 棺 土井遺跡
169 円筒埴輪 土井遺跡
第136図 1 円筒埴輪 小丸山古墳

写真3 土井遺跡出土遺物と周辺採集資料



第138図 岡山県 埴輪出土地①（地図：1/1,500,000 埴輪：1/12）



TK43・TK209

- | | | | | | | |
|----------|---------|--------------|---------|-----------|---------|---------|
| 1 中山6号 | 2 波歌山 | 3 牛文茶臼山・小茶臼山 | 4 前内池 | 5 十六夜山 | 6 オノ峪1号 | 7 井口車塚 |
| 8 長畝山北4号 | 9 日上畝山 | 10 立坂北1号 | 11 金鶏塚 | 12 船山 | 13 岩田1号 | 14 北山 |
| 15 大年2号 | 16 日上和田 | 17 河边上原1号 | 18 中宮1号 | 19 四つ塚13号 | 20 箭田大塚 | 21 半俵3号 |
| 22 江崎 | 23 二塚山 | 24 便木山7号 | 25 弥上 | 26 土井 | | |

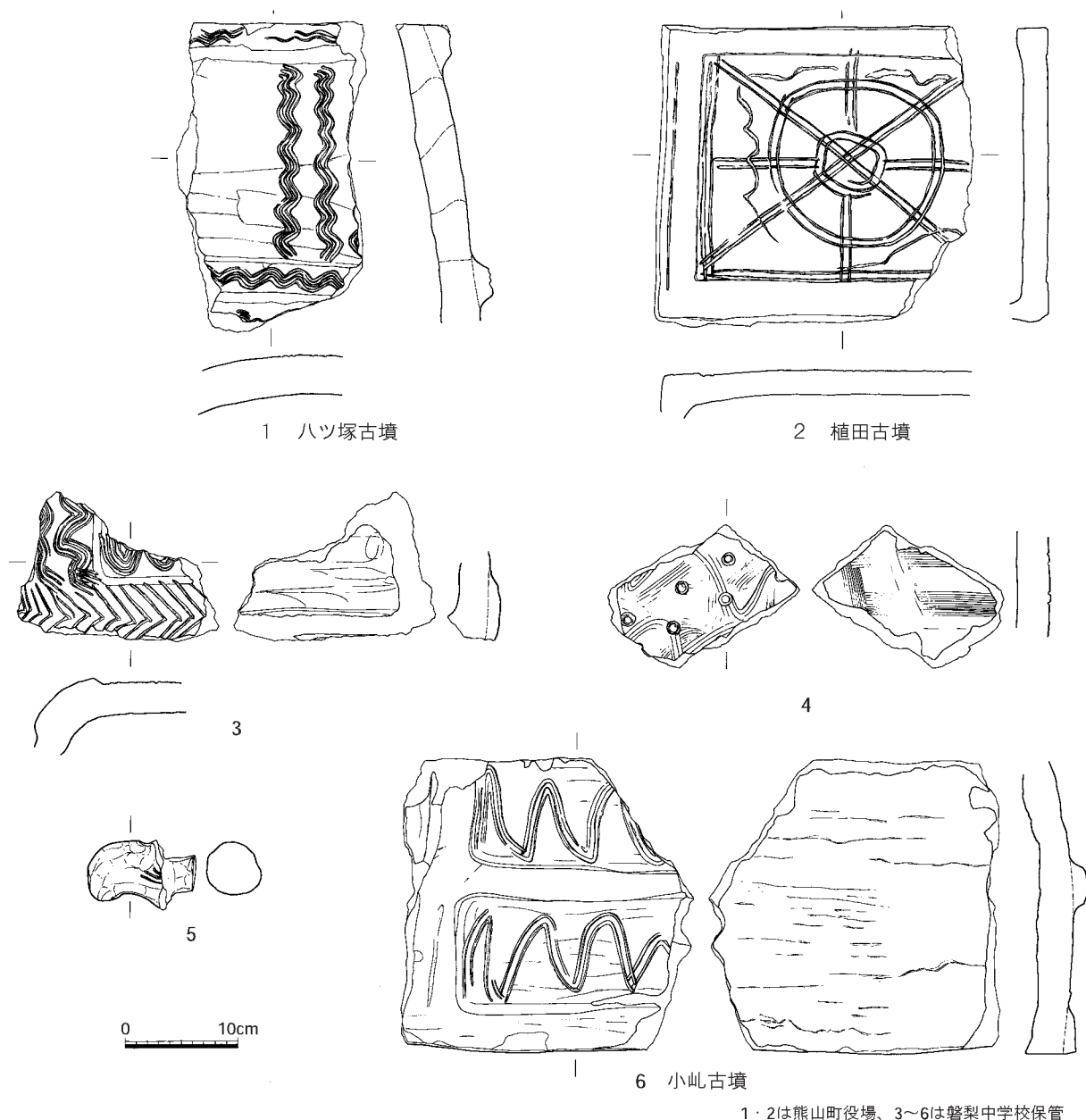
第139図 岡山県 埴輪出土地②（地図：1/1,500,000 埴輪：1/12）

する。また、近隣に所在する沼田内古墳では5 b類、慶貞1号墳では5 c類と類似した小片が表採されており、二塚2号墳でも埴輪が確認できる（小郷・草原2000）（註9）。

つぎに、さらに視野を広げて岡山県内全域を見渡すことにする。

段数と円孔の位置のみに注目すると、先にあげた前内池4号墳のほかに、津山市十六夜山古墳（尾上1998）と日上和田古墳（行田1981）も土井遺跡と共通すると言える。ただし、突帯や工具痕を比較したときに差異が観察できる。このほかの事例は、段数4段で円孔を2段と3段に穿つ資料が多数を占め、その外観は土井遺跡のものとは異なる。ここから、段数5段以上で円孔を一段おきに2対穿つ資料は、熊山町・赤坂町と津山市で確認できるだけで、その他の地域は段数4段で円孔は連続した段に2対穿つ資料が多いことがわかる（註10）。熊山町・赤坂町と接する山陽町の岩田1号墳（神原1976）と便木山7号墳（枝川・池畑1975）でさえも後者である（註11）。こういった状況は奈良県でも確認でき（註12）、小地域内でも異なる形態の埴輪が併存することは決して珍しいことではないようだ。これは、地域内でも異なる情報網が併存していたことの顕れと考える。

このように、岡山県内でも埴輪に地域性が存在することが確認できたが、赤坂町西窪田周辺の古墳群以外に、土井遺跡から供給したと想定できる資料は存在しなかった。



第140図 熊山町内出土陶棺 (1/6)

陶棺の供給先

ここからは視点を変え、埴輪とともに焼成していた陶棺から検討を加えることにする。

土井遺跡の陶棺は、2種類に区分できる(註13)。土師質亀甲特帯型(191～198・379・410)と土師質亀甲岡山型(164・165・332・419)である(註14)。特帯型は2号窯最終床面でまとまって出土したため、全体像を復元することができた。それに対し、岡山型は破片が1号窯の上層や集積地に点在するのみであり、部位すら特定することが困難である(註15)。そのためここでは、主に全容が把握できる特帯型の供給先を検討する。

土井遺跡近辺で、外面に波状文を施す陶棺が確認できるのは畑古墳(杉山1987)、八つ塚古墳群、小嶋古墳(高畑1994)、土井谷1号墳(吉備園子1933)(註16)の4例である。このほかにも、熊山町内では波状文を有する陶棺片が表採されているが、出土地点が特定できない資料が多い(註17)。

ここであげた事例は、いずれも土井遺跡で焼成した可能性が高いと考える。その理由をつぎに述べる。まず、畑古墳と八つ塚古墳の陶棺については、土井遺跡の陶棺と文様等類似点が多いことを根拠とする。つぎに、土井谷1号墳出土陶棺については、波状文の波間隔が広く、土井遺跡では同様の文様は確認できないが、共に分類では特帯型に入り、距離も近いことから、土井遺跡で焼成したと推察する。そして、小峠古墳は土井谷1号墳の資料と類似することを根拠とする。

このほか、土井遺跡の西約2.6kmの地点に位置する赤坂町鳥取上高塚古墳でも、陶棺と推測できる小片が確認できる（註18）。綾杉状の文様と線刻が191と類似することから、これも土井遺跡から供給したと推察する。

つぎに、埴輪同様視野を広げて県内全域を見渡すと、柵原町飯岡丸山古墳（註19）と鏡野町長浜2号墳（立石2000）で外面に波状文を施す陶棺が確認できる。飯岡丸山古墳の資料は波状文の間隔が密ではあるが、土井遺跡のものと類似する。長浜2号墳の陶棺には波状文と共に竹管文が観察できる。土井遺跡では竹管文を施す資料は確認できないが、熊山町磐梨中学校で保管する陶棺の破片に類似した文様を有する資料が存在する。この二つの陶棺以外、県内では外面に波状の文様を施す陶棺は確認できず（註20）、ともに土井遺跡の陶棺と類似性を認めることができる。特に飯岡丸山古墳の資料は類似性が強く、土井遺跡2号窯で焼成したものである可能性が高いと考える。しかしながら形状の類似性という主観的な根拠しかないため、現状では断定し難い（註21）。

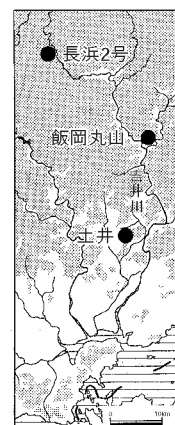
飯岡丸山古墳は、土井遺跡から直線距離で約15km離れた吉井川とその支流吉野川との合流点に位置し、長浜2号墳は飯岡丸山古墳からさらに吉井川を25km遡った地点に所在する。吉井川は、いわゆる「高瀬舟」を昭和10年代まで利用していた記録が残っており（石田寛1980）、古くから重要な流通経路であったことが知られる（近藤1960・1998、今井1988）。こうした陶棺の分布から、古墳時代後期に、この経路を利用して運搬したとまでは言えなくとも、吉井川があまり類例の多くない墓制の一形態を共有する程度に情報が行き来する経路であったと想定できる。この点は、これまでも陶棺や石見型盾形埴輪をはじめとするさまざまな研究で指摘されてきたことである（村上1980、杉山1987・1992、尾上1998・2000、横田2003、野崎2003）。

上記のとおり、波状文を有する陶棺は、土井遺跡周辺と吉井川沿いに分布することを確認した。ただし、吉井川沿いで確認した事例はわずか2例であり、土井遺跡で焼成したとは現状では断定できない。仮にそうであったとしてもごく希な事例であり、土井遺跡に築いた窯はこうした広域な流通を目的として築いたのではなく、分布が示すとおり近隣の古墳への供給を主な目的としたものと考えられる。おわりに

土井遺跡と前内池古墳群下の窯は、赤磐郡赤坂町西窪田に群集する前方後円墳造営を契機に築窯したものである。そして、埴輪は主にこの古墳群に供給し、最終段階に位置する鳥取上高塚古墳には陶棺を供給する。このほか、陶棺は熊山町畑古墳や八つ塚古墳群等近隣の古墳にも供給し、熊山町可真上から弥上周辺で多く確認できる（註22）。

以上より、今回検出した窯は広域流通を目的としたものではなく、近接する古墳群の需要を満たすために築いたものであったと考える。

ただし、確認した埴輪や陶棺はこの地域で独自に成立したとはいえず、突然何の理由もなく埴輪



第141図 外面波状文を施す陶棺出土地

や陶棺を必要とする古墳が出現したとも考えにくい。何らかの必然性があるはずである。その点について若干考察を加えておく。

陶棺と石見型盾形埴輪は、岡山県内では吉井川沿いに分布し、畿内地方との関わりが指摘されることが多い資料であることは先に触れた(註23)。ここから、畿内とのかかわりが墓制の一部に顕在化する吉井川流域で、その生産の一端を担うために築いたのが土井遺跡の窯であったと考える。土井遺跡が所在する丘陵は旧山陽道のすぐ南に位置し、吉井川を経路とした南北方向だけではなく、東西の交流においても利便性が高い。窯業を営む材料を容易に入手できる場所であり、さらに交通や環境も考慮に入れて築窯する位置を選択したと推察する。

また、土井遺跡では製錬滓と鍛冶滓が確認でき、さらに土壙墓2では鉄鐸を検出した(註24)。おそらく、近隣で製鉄と鍛冶を行っていた可能性が高いと考える。この推測が正しければ、土井遺跡が所在する丘陵は、窯業と鉄生産がほぼ同時期に営まれていたことになり、小規模ながらも当時の重要な手工業生産が集まる工業地帯の様相を呈する(註25)。こうした地域の墓制に畿内の影響が見て取れることは興味深い(註26)。ただし、鉄生産と畿内の墓制が有機的な結びつきがあったかは未証明である。今回の調査はその点を検証するうえでも、有益な材料のひとつを得ることができたと言える。

(重根)

今回整理作業を行う際に、稲谷知子・上栴武・尾上元規・亀山行雄・杉山一雄・野崎貴博・弘田和司・物部茂樹各氏から多くの教示を得た。資料実見や文献収集に際しては宇垣匡雅・江浦洋・岡本明郎・金田晋敏・亀田修・草原孝典・臼神賢二・島内洋二・角南勝弘・高畑知功・時枝孝・新納泉・古谷穀・松村さを里・光本順・森内秀造・安永周平・和田剛各氏に便宜をはかっていただいた。また、全ての方のお名前を記すことはできませんが、調査や整理にかかわり、担当者の無理な注文にも応えてくださった方々に末筆ではありますが記して謝意を表します。

註

- 1 丸崎2号墳の資料は未報告であるが、調査担当者高畑知功氏のご厚意により実見する機会を得た。また、詳細について説明を受けた。
- 2 森和雄氏より教示を得た。
- 3 現在所在不明。
- 4 蛭原啓介氏から教示を得た。
- 5 前内池古墳群が主な供給先ではなく埴輪生産に関わる人物の墓であれば(蛭原2003)、歪みが著しい埴輪が多いことは興味深い。
- 6 安倉清博氏採集資料。
- 7 小丸山古墳ではなく塚本古墳の出上品である可能性もある(高畑1994)。
- 8 宇垣匡雅氏採集資料。
- 9 赤磐郡赤坂町西窪田に所在する古墳群で表採した埴輪と土井遺跡の埴輪が類似すると草原孝典氏から教示を得た。
- 10 津山市周辺の資料が全て5段以上であるわけではなく、4段以下の資料も確認できる。
- 11 土井遺跡では確認できない断続ナデが観察できる資料も存在する。
- 12 小栗明彦氏の研究を主に参考にした(小栗2003)。ここで集成された埴輪を見る限り、Ⅴ期に関しては奈良県と岡山県の埴輪は類似したものが多く印象を受ける。
- 13 間壁葎子氏の分類に従う(間壁1983)。
- 14 この他、土師質亀甲特帯型でも畿内地方のものと類似する資料も確認できるが(319・321)、細片のため陶棺と断定できず、形象埴輪の一部である可能性もある。以下、土師質亀甲特帯型は特帯型、土師質亀甲岡山型は岡山型と略す。
- 15 2号窯最終床面で検出した遺物が、最終焼成時のものであると考えるのが妥当であれば、灰原や集積地で検出した陶棺はこれより古いことになり、特帯型と岡山型が併存する時期が存在することになる。それぞれの出現期については不明である。
- 16 赤磐郡可真村大字可真下字西谷小字大明寺と呼ぶところの東西二か所の古墳で、西からは無文の、東からは波状の文様が観察できる陶棺を発見したとの記載がある。これは、字名から西側が土井谷2号墳、東側が土井谷1号墳にあたると考える。現在吉備考古館にて展示中である。この他、吉備考古館には可真村大字弥上字畑田西之手古墳と注記のある陶棺片が存在するが、これは畑古墳の陶棺の一部と考える。
- 17 吉備考古館展示の小丸山古墳出土陶棺にも波状文があると記録が残るが(杉山1987)、現在は特定できない。
- 18 宇垣匡雅氏採集資料。
- 19 吉備考古館展示。
- 20 櫛描き波状文だけを取り上げたため、波状文を突帯で表現した総社市こうもり塚古墳と新見市正田(横田2003)の陶棺は除外した。

- 21 飯岡丸山古墳では円筒埴輪も確認されており（近藤1960）、その全容が把握できればさらに検討を加えることが可能となる。
- 22 埴輪と陶棺は主な供給先が異なる印象を受けるが、発掘調査で得た資料が少ないため断定できない。また、赤坂町西窪田の古墳群で土井遺跡の円筒埴輪全種類が確認できたわけではなく、他にも供給先が存在する見込みは十分にあり得る。土井遺跡のすぐ背後に位置する八つ塚古墳群は20基以上の古墳が群集することから、陶棺以外に埴輪も供給した可能性があると考えるが、いずれにしろ全て未調査の資料をもとにした推測にすぎない。
- 23 前内池1号墳の石見型盾形埴輪に観察できる帆立貝様の文様は、奈良県纏向遺跡出土の石見型盾形埴輪（石野・関川1976）でも同様の文様が観察できると蛸原啓介氏から教示を得た。
- 24 鉄鐙は鍛冶との関連や朝鮮半島とつながりを持つ可能性が指摘されている（行田1997）。
- 25 このほか、熊山町では猿喰池製鉄遺跡で古墳時代後期の製鉄炉を5基確認した（白神2004）。
- 26 陶棺と鉄生産の関係はこれまでの陶棺研究でも指摘されている（杉山1987・1992、横田2003）。ただ、石見型盾形埴輪や陶棺が必ずしも畿内に起源があると断定できる資料ではなく、その点も今後検討を加える必要がある。

参考文献

- 石田寛 1980「吉井川」『岡山県大百科事典』山陽新聞社
- 石野博信・関川尚功 1976『纏向』榎原考古学研究所
- 一瀬和夫 1988「古市古墳群における大型古墳集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』Ⅴ 大阪府教育委員会
- 今井亮 1988「吉備における古墳被葬者の検討」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会
- 枝川陽・池畑耕一 1975「便木山7号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9 岡山県教育委員会
- 蛸原啓介 2003「3前内池4号墳の円筒埴輪について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174 岡山県教育委員会
- 小栗明彦 2003「大和の円筒埴輪」『埴輪論叢』第5号 埴輪検討会
- 小郷利幸 1994「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第52集 津山市教育委員会
- 小郷利幸 1994「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第54集 津山市教育委員会
- 小郷利幸・草原孝典 2000「吉井川、砂川地域の古墳の測量調査」4『古代吉備』第22集 古代吉備研究会
- 尾上元規 1998「十六夜山古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』130 岡山県教育委員会
- 尾上元規 2000「吉備の形象埴輪」『国家形成過程の諸変革』考古学研究会例会委員会編
- 尾上元規ほか 1995「大年古墳群ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』102 岡山県教育委員会
- 鎌木義昌 1956「人物埴輪を出土する備前・円光寺遺跡」『考古学雑誌』第41巻第4号 日本考古学協会
- 亀田修一 1997「波歌山古墳」「二塚山古墳」「牛窓町史」資料編Ⅱ 牛窓町
- 亀田修一 1998「牛文茶臼山古墳」「小茶臼山古墳」「舟山古墳」「金鶏塚古墳」『長船町史』資料編（上）考古 長船町
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 古備團子 1933「Ⅲと可真の陶棺について」『古備考古』第22集 古備考古会
- 葛原克人・小野雅美・宇垣匠雅 1986「箭田大塚古墳」『岡山県史』岡山県
- 神原英朗 1976「岩田古墳群」『岡山県菅山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』6 山陽町教育委員会
- 近藤義郎 1952「佐良山古墳群の研究」第1冊 津山市
- 近藤義郎 1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- 近藤義郎 1987「江崎古墳」『総社市史』総社市
- 近藤義郎 1992『蒜山原四つ塚古墳群』岡山県八束村
- 近藤義郎 1998『月の輪古墳』吉備人出版
- 近藤義郎・春成秀一 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会
- 白神賢士 2004「猿喰池製鉄遺跡」『熊山町埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県熊山町教育委員会
- 杉山尚人 1987「陶棺の研究」『考古学研究』第38巻第4号 考古学研究会
- 杉山尚人 1992「陶棺」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社
- 高田明人 1991「立坂北古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9 総社市教育委員会
- 高畑知功 1994「古墳時代」『熊山町史』通史編 熊山町
- 高畑知功・光永真一 1987「丸崎古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』17 岡山県教育委員会
- 立石盛詞 2000「長浜古墳群」『鏡野町史』考古資料編 鏡野町
- 椿真治 1997「中山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- 内藤善史・蛸原啓介 2003「前内池古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174 岡山県教育委員会
- 中山俊紀 1992「オノ峪古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第23集 津山市教育委員会
- 野崎貴博 2003「吉備地域における円筒埴輪製作技法の伝播と受容」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 藤田憲司・小野一臣・間壁葎子 1974「平俵古墳群3号」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会
- 間壁葎子 1983「岡山の陶棺」『岡山の歴史と文化』藤井駿先生喜寿記念会
- 松本和男 1973「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4
- 村上幸雄 1980「陶棺について」『榎山遺跡群』Ⅱ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- 安川豊史 1998「日上畝山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第63集 津山市教育委員会
- 山磨康平 1986「弥上古墳」『岡山県史』考古資料 岡山県史編纂委員会
- 行田裕美 1981「口上和田古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第6集 津山市教育委員会
- 行田裕美 1992「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第45集 津山市教育委員会
- 行田裕美 1997「鉄鐙について」「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集 津山市教育委員会
- 横田美香 2003「吉備地域の土師質亀甲形陶棺」『古代吉備』第24集 古代吉備研究会

3 磐梨古窯跡群の分布

概要 岡山県下の備前地区には、吉井川左岸の邑久の丘陵地に古墳時代から平安時代まで続く県下最大規模の邑久古窯跡群が所在し、現在110か所以上の窯跡が確認されている。平安時代末以降は、邑久古窯に後続して備前市伊部周辺で中世六古窯の1つである備前焼窯跡群があり、近世から現代に至るまで生産されている。備前地区のもう1か所の古窯跡群は、今回調査を行った土井遺跡3号窯を含む赤磐郡瀬戸町と熊山町を中心に吉井川右岸の丘陵地に所在する磐梨古窯跡群が知られている。

本古窯跡群については、1940年に荒木誠一氏により編纂された『改修赤磐郡誌』に、須恵器と土師器・瓦窯等の所在が掲載がされているものが最初である。その後、1965年に刊行された岡山県全域を網羅した『岡山県遺跡地図』によると瀬戸町内で8か所の窯跡が記載されている。近年では、2003年刊行の『改訂岡山県遺跡地図』に30か所近くの窯跡の存在が知られているが、既に消滅したものも多く実態は不明瞭である。同古窯跡群の呼称については、1967年刊行の『日本の考古学VI』に西川宏氏により須恵器窯の分布として記載されている。その変遷と実態については、古墳時代後半の熊山町殿谷所在の牛神2号窯を先駆として、平安時代末から鎌倉時代初期の赤磐郡内あなみ谷1号窯の時期まで操業されたとされているものが唯一の成果である。

分布 窯跡群の分布状況を既存資料や新たな踏査資料等をもとに主に熊山町内の可真、殿谷地区と瀬戸町内の万富周辺地区とに大きく南北に2つの地域に分割して記載する。

熊山地区 熊山町弥上、可真、殿谷から一部佐伯町父井原にかけての吉井川の支流である小野田川と可真川により形成された平地周辺の低丘陵上に所在し、さらに大きく東西の2地域に分割できる。西地区は大字可真下、可真上、弥上等の東西に開けた可真川の周辺丘陵部に位置する。今回の土井遺跡3号窯の調査と周辺部の踏査資料を含めて4か所の窯と窯跡の可能性のある散布地が判明している。土井遺跡の埴輪窯が須恵器と同様な窯窯であった点は考慮する必要があるが、『改修赤磐郡誌』に記載の土師器窯については不明な点が多い。東地区は殿谷および佐伯町父井原周辺の低丘陵上に9か所の窯がある。ただ殿谷付近は大規模な団地造成や宅地造成により既に数か所は消滅している。



- | | | |
|------------------------|---------------|----------------|
| 1 手洗 (古墳・奈良) | 11 土井3号 (奈良) | 21 倉谷 (鎌倉) |
| 2 大成 (2基・鎌倉) (あなみ谷?) | 12 坪山散布地 (奈良) | 22 大谷 (鎌倉) |
| 3 沢原池東 (鎌倉) | 13 源坂 (鎌倉) | 23 妙見堂 (鎌倉) |
| 4 亀目郷地上池東岸 (奈良・鎌倉) | 14 別所 (古墳) | 24 勘定口 (鎌倉) |
| 5 馬ヶ谷 (古墳) | 15 松尾 (鎌倉) | 25 万富東大寺瓦 (鎌倉) |
| 6 亀目郷地下池東 (牛神) (古墳・奈良) | 16 建旗 (鎌倉) | 26 万富上の山 (鎌倉) |
| 7 榎本 (平安?) | 17 肥前格坊 (鎌倉) | 27 ばかしよ (鎌倉) |
| 8 殿谷A・B (平安・鎌倉) | 18 辛音口 | 28 五反田 (奈良・鎌倉) |
| 9 荒神谷 (鎌倉) | 19 藤畑 (鎌倉) | 29 寺山 (鎌倉) |
| 10 三ツ池1号 (古墳・平安) | 20 西奥行當 (鎌倉) | 30 二の倉 (?) |

第142図 磐梨古窯跡群分布 (1/75,000)

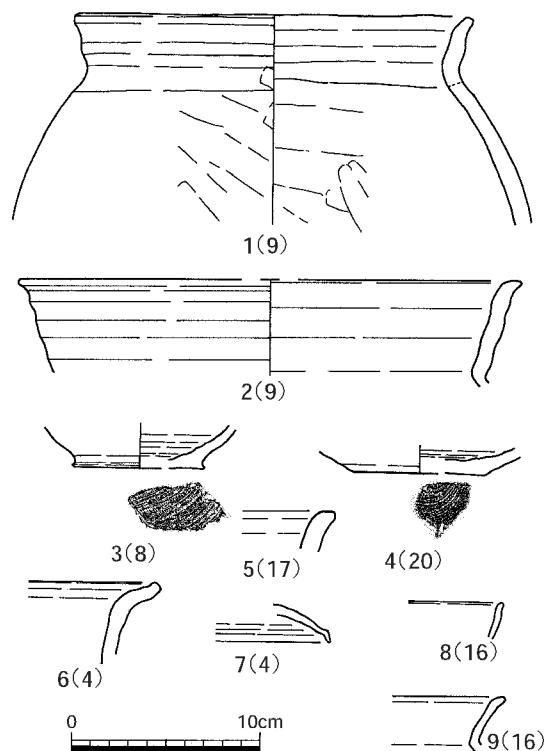
瀬戸地区 瀬戸町万富の平地周辺部の丘陵上に16か所確認されている。特に熊山町可真地区と町境をなす標高350mの大盛山山塊の南山麓周辺に所在するものが大半である。この一角に史跡万富東大寺瓦窯跡群も所在する。万富東大寺瓦窯は、備前国が東大寺再建の為に東大寺造営料国となった建久4年(1193)以降の10年間ほどに造られた瓦窯と考えられている。近年二度にわたり史跡整備の為に確認調査が行われ、10数基のロストル式平窯が確認された。それ以外にも新たに備前焼Ⅱ期に相当する鉢、甕、椀等を焼成した備前焼窯や瓦質・土師質土器を焼成した窯を確認している。

まとめ 当古窯跡群については、発掘調査された窯跡が土井遺跡3号窯を含め3か所と少ないが、近年の調査や新たな分布調査等の成果を含めて現時点で窯跡群の分布の実態を検討してみたい。

備前地区での須恵器生産は、古墳時代後半期(6世紀中葉頃)に佐伯町の戸瀬池窯で始まる。ついで若干遅れて、磐梨古窯跡群の範疇と捉えても可能な山陽町別所窯と邑久古窯跡群の木鍋山窯で生産を開始する。磐梨古窯跡群の本格的な須恵器生産は6世紀後半代の熊山町牛神2号窯がその先駆と云われている。8世紀代には今回の土井3号窯が操業されている。土井3号窯下層焚き口の一括土器類は、丸味を持つ笠形の杯B蓋に扁平なつまみ、椀形状の杯A、杯B高台の若干の退化等から寒風Ⅲ式の範疇でも若干後出の時期と考えられる。実年代では8世紀の第一四半期までに比定できそうである。また操業の開始は杯A類から推察し7世紀末まで遡る可能性がある。この他に亀目郷地上池東岸窯で8世紀後半代の杯B蓋7が出土している。9世紀代にはいと須恵器生産は衰退した可能性が強い。

再び窯業生産が開始されるのは、殿谷A・B窯跡3の平安時代後半期からと見られる。その後、同末から鎌倉時代初期の初期備前焼段階には瓦の生産を伴って急速に拡大していく。特に万富周辺の丘陵南斜面で顕著で瀬戸町の大半がこの時期の窯で占め、その範囲は北の大盛山の山塊を超えて弥上、殿谷の熊山町に広がる。掲載の窯跡採集資料1・2・5・9は、甕の口縁端部が平坦面を持つ特色を有し、ハケメ調整でタタキの痕跡は認められない。須恵器的な焼成、色調をなすものが多い。いずれも初期備前焼Ⅰ期後半頃の特徴を有す。万富東大寺瓦窯で新たに検出された備前焼窯では、切り合い等から東大寺瓦窯操業時より新しい時期と確認されており、備前焼編年のⅡ期段階である。松尾古窯跡群からも同時期の出土が報告されている。

窯跡の採集資料を考慮する必要があるものの、備前焼Ⅰ期後半からⅡ期段階の爆発的な操業の拡大は、東大寺瓦窯の操業と密接な関係が推察される。万富東大寺瓦窯は、鎌倉初期(12末～13初)段階の短期間に集中した操業が行われており、操業終了後に従事していた工人が新たに備前焼や瓦の生産を万富周辺で開始した結果が分布の拡大を示している可能性が考えられる。その後、継続した操業は行われなく伊部地区の本格的な備前焼生産に吸収されたのではなかろうか。(山磨)



第143図 表採資料(1/4)()は窯番号

第5表 段状遺構群一覧表

遺構名	地区名	長さ (cm)	床面残存幅 (cm)	床面海拔高 (cm)	時 期	拡張数	備 考
段状遺構群1	H・I・O	2720	224	6230	弥生時代中期後半	14以上	
段状遺構群2	H・P	1349	220	6410	弥生時代中期後半	4以上	
段状遺構群3	E・F・G	2950	240	5400	弥生時代中期後半から後期前半	11以上	土壌4基
段状遺構群4	J・Q・R	2370	720	7850	弥生時代中期後半から後期前半	4以上	土壌3基
段状遺構群5	M・N	758	290	6490	弥生時代中期後半	2以上	
段状遺構群6	O	1342	210	6150	弥生時代中期後半	5以上	
段状遺構群7	I・Q	884	300	7270	弥生時代中期後半	2以上	
段状遺構群8	N	506	90	5830	弥生時代中期後半	なし	

第6表 竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	長軸	短軸	床面積 (㎡)	床面海拔高 (cm)	柱穴	時期	建て替え数	備考
竪穴住居1	隅丸方形	510			4560		弥生時代後期中頃	1	数値は最終段階
竪穴住居2	円形	740	—	(43)	6950	(2+6)	弥生時代中期後半から後期中頃	5	数値は最終段階
竪穴住居3	方形	525	476	(25)	6300	4	古墳時代後期	1	数値は最終段階

第7表 建物一覧表

遺構名	地区名	規 模	柱間距離		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	時 期
			桁 (cm)	梁 (cm)				
建物1	V	1×3	140～180	306	468	306	14.32	弥生時代中期後半（～後期前半）
土壌6	B・I	1×2	204	339	408	339	13.83	弥生時代後期前半

第8表 墓一覧表

遺構名	地区名	埋葬施設	平面形	主 軸	墓方上面 (cm)		墓方底 (cm)		深さ (cm)	埋葬施設内 (cm)		出土 遺 物	時 期	備 考
					長さ	幅	長さ	幅		長さ	幅			
箱式石棺1	U	箱式石棺	長楕円形	N-10°-E	200	90	185	62	38	139	34	須恵器	古墳時代後期	
箱式石棺2	V	箱式石棺	長楕円形	N-44°-E	111	52	103	42	48	70	21		古墳時代後期	長さは現存長
土壌墓1	R	木棺	長楕円形	N-51°-W	186	60	170	54	48	—	—	須恵器、土師器、鉄滓	古墳時代後期	
土壌墓2	T	—	長楕円形	N-26°-W	143	54	123	28	19	—	—	埴輪、耳環、鉄鐙	古墳時代後期	長さは現存長
土壌墓3	J	陶棺	隅丸長方形	N-50°-W	102	82	100	75	45	68	50	陶棺、埴輪	古墳時代後期	長さは現存長
火葬墓1	D	備前焼壺	不整形		29	27	24	22	13			大甕、小門闕、大門闕、骨片多数	中世	成人、火葬

第9表 窯一覧表

遺構名	地区名	焼成物	構 造	長さ (cm)	幅 (cm)	傾斜角度		床面数	時 期	備 考
						焚口付近 (°)	以後 (°)			
1号窯	F	埴輪	半地下式竈窯	660	126	10	26	3	古墳時代後期	
2号窯	F	埴輪、陶棺	半地下式竈窯	677	131	7	27	2	古墳時代後期	柱穴3つ
3号窯	P・Q	瓦、須恵器	地下式竈窯	698	137	10	40	2	古代	第一床面に溝

第10表 土壌一覧表

遺 構 名	地区名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時 期	備 考
段状遺構群3土壌1	E	不整形	長方形	165	140	22	5441	弥生時代後期前半	
段状遺構群3土壌2	F	不整形	台形（袋状）	72	43	49	5370	弥生時代後期前半	
段状遺構群3土壌3	F	隅丸長方形	逆台形	111	45	40	5392	弥生時代中期後半～後期前半	
段状遺構群3土壌4	F	不整形	逆台形	113	95	32	5428	弥生時代中期後半	
段状遺構群4土壌1	J・R	不整楕円形	逆台形	154	120	82	7788	弥生時代中期後半～後期前半	2回以上掘り直し
段状遺構群4土壌2	R	不整楕円形	逆台形	175	142	90	7750	弥生時代中期後半～後期前半	
段状遺構群4土壌3	J	不整楕円形	逆台形	229	140	112	7754	弥生時代中期後半～後期前半	
土壌1	F	不整形	不整形	210	—	40	5418	弥生時代後期中頃	
土壌2	L	円形	逆台形	92	86	105	5172	不明	縄文時代落とし穴か
土壌3	V	不整形	長方形	171		11	7455	弥生時代	
土壌4	V	長方形	長方形	103	—	21	7423	弥生時代	
土壌5	S・T	不整楕円形	逆台形	250	156	133	6860	弥生時代後期後半	
土壌6	B・I	長方形	長方形	219	166	93	6210	弥生時代後期前半	
埴輪集積地	E	不整形	不整形	543	—	30	5455	古墳時代後期	斜面窪みを利用
土壌7	F	不整形	不整形	108	105	20	5760	古墳時代後期	数値は残存長
土壌8	K	不整形	長方形	286	147	20	4550	古墳時代後期	数値は残存長
土壌9	P	—	逆台形	82	—	34	6933	古代	
土壌10	U	不整楕円形	逆台形	300	92	23	7167	古代	
土壌11	K	不整形	逆台形	177	112	44	4525	古代	数値は残存長
土壌12	K	楕円形	逆台形	162	120	35	4563	古代	
土壌13	K	不整楕円形	逆台形	115	85	39	4538	古代	
土壌14	K	不整楕円形	逆台形	98	90	34	4449	古代	数値は残存長
土壌15	K	楕円形	逆台形	56	35	21	4597	古代	
土壌16	K	円形	逆台形	50	48	13	4606	古代	
土壌17	N	楕円形	逆台形	74	58	19	5491	古代	
土壌18	H	不整楕円形	逆台形	100	87	20	6280	古代	
土壌19	H	不整楕円形	逆台形	99	91	20	6305	古代	
土壌20	H	不整円形	逆台形	65	62	18	6306	古代	
土壌21	A	不整円形	逆台形	57	52	19	6295	古代	
平坦面1	T	長方形	長方形	1470	992	35	6930	近現代	須恵器、埴輪、陶棺出土
平坦面2	Q	（長方形）	逆台形	800	710	75	7330	近現代	キセル出土

第11表 土器観察表①

番号	遺構名	地 点	土 層	種別	器種	計測値 (cm)			色 内 測			備 考
						口径	底径	器高	外	内	断	
1	段状遺構群 1	変遷 2	下層	弥生	甕				にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	
2	段状遺構群 1	変遷 6	下層	弥生	甕	16.3			橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	褐灰 (7.5YR 4/1)	外面風化著しい
3	段状遺構群 1	変遷 5	下層	弥生	甕	18.4			浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	明赤褐 (5YR 5/6)	
4	段状遺構群 1	変遷 2	下層	弥生	甕	15.1			橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	風化著しい
5	段状遺構群 1	変遷 2	下層	弥生	甕	16.0			にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	
6	段状遺構群 1	変遷 2	下層	弥生	高杯	28.5			にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	
7	段状遺構群 1	変遷 4	下層	弥生	高杯	26.9			にぶい 黄橙 (10YR 8/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	一部すす付着
8	段状遺構群 1	変遷 2	下層	弥生	高杯	13.1			にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	橙 (5YR 6/6)	
9	段状遺構群 1	変遷 2	下層	弥生	高杯		12.4		にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	
10	段状遺構群 1	変遷 5	下層	弥生	高杯	11.3			橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	褐灰 (7.5YR 4/1)	
11	段状遺構群 1	変遷 5	下層	弥生	高杯	12.4			明赤褐 (2.5YR 5/6)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	刺突未完通、4つ一単位
12	段状遺構群 1	変遷 2	下層	弥生	器台	16.1			橙 (7.5YR 7/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	橙 (5YR 6/6)	
13	段状遺構群 1	変遷 2	32	弥生	甕	2.4			明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	ミニチュア、外面風化著しい
14	段状遺構群 1	変遷 3 壁体溝		弥生	高杯	19.8			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	褐 (7.5YR 4/4)	
15	段状遺構群 1	変遷 6 壁体溝	15	弥生	高杯	22.6			橙 (5YR 6/6)	にぶい 赤褐 (5YR 5/4)	明赤褐 (5YR 5/6)	
16	段状遺構群 1		検出	弥生	甕	12.4			にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	灰白 (2.5Y 8/2)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	
17	段状遺構群 1		検出	弥生	甕	14.8			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	
18	段状遺構群 1	T25	試掘	弥生	高杯		17.4		にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 橙 (7.5YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	円盤充填、脚根に凹線 1 条
19	段状遺構群 1		検出	弥生	器台				にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	スタンプ文
20	段状遺構群 1		検出	弥生	器台				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	端部風化が著しい、剥離か
21	段状遺構群 1		検出	弥生	器台	19.6			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	
22	段状遺構群 1		検出	弥生	器台	31.6			橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	
23	段状遺構群 2	北半	床面	弥生	甕	13.0			にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	明赤褐 (5YR 5/6)	
24	段状遺構群 2	P1		弥生	甕	16.8			浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/3)	
25	段状遺構群 2	北半	床面	弥生	甕	13.7			橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	
26	段状遺構群 2	南半	床面	弥生	高杯	19.7			浅黄橙 (10YR 8/3)	にぶい 橙 (7.5YR 7/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	
27	段状遺構群 2	南半		弥生	甕	14.1			浅黄 (2.5Y 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	
28	段状遺構群 2	南半		弥生	台付甕				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	
29	段状遺構群 2	南半		弥生	高杯		12.6		明赤褐 (2.5YR 5/6)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	円盤充填、スカシは一つのみ直通
30	段状遺構群 2	南半	1	弥生	器台	25.6			にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	
31	段状遺構群 3	変遷 6	床面	弥生	直口甕	8.6			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	口縁ハケ工でヨコナデ
32	段状遺構群 3	変遷 1	53	弥生	甕	10.8			にぶい 黄橙 (10YR 7/2)	灰黄 (2.5Y 7/2)	橙 (5YR 6/6)	
33	段状遺構群 3	南端	床面	弥生	鉢	17.5			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	内面風化著しい
34	段状遺構群 3	P1		弥生	甕		6.4		灰黄 (2.5Y 4/1)	にぶい 黄橙 (7.5YR 6/4)	灰黄 (2.5Y 7/2)	底面に丸み
35	段状遺構群 3	P3		弥生	高杯				にぶい 橙 (5YR 6/4)	にぶい 橙 (5YR 6/4)	橙 (5YR 6/6)	
36	段状遺構群 3	P2		弥生	高杯				にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	外面風化著しい
37	段状遺構群 3	南端	床面	弥生	高杯	23.2			橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/8)	外面風化著しい
38	段状遺構群 3	変遷 1	床面	弥生	高杯				橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	
39	段状遺構群 3	南端	上層	弥生	甕	16.6			にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	
40	段状遺構群 3	変遷 2	上層	弥生	甕	16.3			にぶい 橙 (5YR 6/3)	にぶい 橙 (5YR 6/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	口縁部が剥離して茶色味、風化著しい
41	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	甕	13.7			にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	
42	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	甕	14.4			にぶい 黄 (7.5YR 5/3)	灰褐 (7.5YR 6/2)	にぶい 黄 (7.5YR 5/4)	器壁厚く粗雑
43	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	甕	12.7			浅黄 (2.5Y 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	
44	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	甕	11.9			にぶい 黄橙 (7.5YR 7/3)	浅黄橙 (10Y 8/3)	にぶい 黄 (10YR 6/4)	
45	段状遺構群 3	変遷 1	下層	弥生	甕	6.8			にぶい 赤褐 (5YR 5/4)	浅黄 (2.5Y 7/3)	明褐 (7.5YR 5/6)	風化著しい
46	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	鉢	17.9	6.7		橙 (5YR 6/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	にぶい 赤褐 (5YR 5/4)	外面板状工具痕多く残る
47	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	甕				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	
48	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	甕	14.0			灰白 (2.5Y 8/2)	灰白 (10YR 8/2)	明赤褐 (5YR 5/6)	
49	段状遺構群 3	南端	上層	弥生	甕	14.8			にぶい 橙 (10YR 7/3)	にぶい 橙 (10YR 7/3)	橙 (5YR 6/6)	
50	段状遺構群 3	南端	上層	弥生	甕	17.8			灰白 (10YR 8/2)	にぶい 橙 (5YR 6/4)	灰白 (10YR 8/2)	
51	段状遺構群 3	南端	上層	弥生	甕	9.0	3.5	11.2	にぶい 橙 (5YR 6/4)	にぶい 橙 (5YR 6/4)	にぶい 赤褐 (5YR 5/4)	調整縫
52	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	台付鉢	8.1	4.3	8.6	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	内外面がほぼ方向ナデ (ケズリ)、粗雑
53	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	甕		5.9		にぶい 赤褐 (5YR 5/4)	にぶい 赤褐 (5YR 5/4)	明赤褐 (5YR 3/6)	
54	段状遺構群 3	南端	検出	弥生	高杯	24.3			浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	にぶい 黄橙 (2.5YR 6/4)	円盤充填
55	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	高杯	21.7	9.4	12	にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	橙 (5YR 6/6)	端部上面凹線 2 条
56	段状遺構群 3	変遷 1	上層	弥生	高杯				にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	浅黄 (2.5Y 7/3)	凹線不明瞭
57	段状遺構群 3	変遷 1	下層	弥生	高杯				橙 (7.5YR 6/6)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)	風化著しい
58	段状遺構群 3	南端	上層	弥生	高杯				にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	橙 (7.5YR 6/6)	片割れ風、二角スカシの上端のみ残る
59	段状遺構群 3	変遷 1	下層	弥生	高杯				にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	浅黄 (2.5Y 8/3)	浅黄 (2.5Y 8/3)	装飾高杯の脚か
60	段状遺構群 3	変遷 1	下層	弥生	器台	21.9			にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	にぶい 黄 (7.5YR 6/3)	鋳造文の線細く雑
61	段状遺構群 3	上層 1		弥生	甕	12.8			にぶい 黄橙 (10YR 6/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	頸部までケズリ
62	段状遺構群 3	上層 1		弥生	甕				にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 6/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	もみ痕、口縁部欠損
63	段状遺構群 3	上層 4		弥生	甕	18.2			にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	橙 (5YR 6/6)	
64	段状遺構群 3	土城 2		弥生	甕	17.5			橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	
65	段状遺構群 3	土城 2		弥生	甕	15.5			橙 (5YR 7/6)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	明赤褐 (5YR 5/6)	
66	段状遺構群 3	上層 1		弥生	甕	12.0			浅黄 (2.5Y 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	橙 (7.5YR 6/6)	頸部までケズリ
67	段状遺構群 3	土城 1		弥生	甕		9.3		灰 (5Y 6/1)	浅黄 (2.5Y 7/3)	灰 (5Y 4/1)	
68	段状遺構群 3	上層 1		弥生	甕		7.6		にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	
69	段状遺構群 3	上層 4		弥生	台付鉢	12.4			にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	脚部との境に篆刻あり、円盤欠損
70	段状遺構群 4	EF-GH	埋土	弥生	甕	13.0			にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	
71	段状遺構群 4	土城 1	3	弥生	甕	11.0			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい 黄 (7.5Y 5/3)	
72	段状遺構群 4	GH-I-J	埋土	弥生	甕	12.8			にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	にぶい 黄橙 (7.5YR 7/4)	橙 (5Y 6/6)	
73	段状遺構群 4	土城 1	3	弥生	甕				浅黄 (2.5Y 7/4)	浅黄 (2.5Y 7/4)	橙 (5YR 6/6)	
74	段状遺構群 4	南端	埋土	弥生	甕				にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	にぶい 黄橙 (10YR 6/4)	
75	段状遺構群 4	GH-I-J	埋土	弥生	甕	16.6			浅黄橙 (10Y 8/4)	にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5Y 6/6)	
76	段状遺構群 4	CD-EF	埋土	弥生	甕	17.6			浅黄 (2.5YR 7/4)	浅黄 (2.5YR 7/4)	灰白 (2.5YR 8/2)	
77	段状遺構群 4	GH-I-J	埋土	弥生	高杯	33.5			明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	灰白 (7.5YR 4/2)	
78	段状遺構群 4		埋土	弥生	高杯		9.0		橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	褐灰 (7.5Y 4/1)	刺突性通、未完通あり、4つ一単位
79	段状遺構群 4	GH-I-J	埋土	弥生	高杯	7.4			にぶい 橙 (5YR 7/4)	にぶい 橙 (5YR 7/4)	橙 (2.5Y 6/6)	スカシ貫通しない
80	段状遺構群 4	AB	1	弥生	高杯	8.0			にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	浅黄 (2.5Y 8/3)	浅黄 (2.5Y 8/3)	
81	段状遺構群 4	EF-GH	埋土	弥生	高杯		12.6		にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	にぶい 橙 (7.5YR 6/4)	
82	段状遺構群 4	EF GH	埋土	弥生	台付鉢	41.0			にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	にぶい 黄橙 (10YR 7/3)	
83	段状遺構群 4	埋土	弥生	甕		8.0			にぶい 黄橙 (10YR 7/4)	にぶい 黄橙 (10YR 5/3)	灰黄橙 (10YR 4/2)	

土器観察表②

番号	遺構名	地 点	土 記	種別	器種	計測値 (cm)			色 調			備 考	
						口径	底径	器高	外	内	断		
84	段状遺構群 4	EF-GH	2	弥生	器台			27.6	明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/6)		
85	段状遺構群 4	GH-IJ	2	弥生	器台			23.6	浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)		
86	段状遺構群 4	CD-GH	2	弥生	台付鉢			10.2	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	オリーブ黒 (5Y 3/1)		
87	段状遺構群 4	南端	埴土	弥生	台付鉢			10.5	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい褐 (7.5YR 5/3)		
88	段状遺構群 4	EF-GH	埴土	弥生	鉢			4.2	明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	明赤褐 (2.5YR 5/6)		
89	段状遺構群 6	北半	床面	弥生	甕			11.3	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)		
90	段状遺構群 6	北半	床面	弥生	甕			13.7	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	灰黄 (2.5Y 6/2)		
91	段状遺構群 6	北半	床面	弥生	甕		7.3		浅黄 (2.5Y 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)		
92	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	甕			13.6	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	外壁全面ミガキ、単位不明瞭	
93	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	甕			14.0	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	浅黄橙 (10Y 8/4)	橙 (7.5Y 7/6)		
94	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	甕			17.2	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	すす付着	
95	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	甕			14.1	浅黄橙 (10Y 8/4)	灰白 (7Y 8/2)	橙 (7Y 7/6)		
96	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	甕				にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)		
97	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	甕		8.8		にぶい橙 (5YR 6/4)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	すす付着	
98	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	甕		13.4		橙 (7.5YR 6/8)	橙 (7.5YR 6/8)	暗灰黄 (2.5YR 4/2)	風化著しい	
99	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	甕		16.6		橙 (7.5YR 6/8)	橙 (7.5YR 6/8)	暗灰黄 (2.5YR 4/2)	風化著しい	
100	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	高杯				にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	灰 (N 4/)		
101	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	高杯				にぶい橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (10YR 7/4)	黒褐 (2.5Y 3/1)	円盤状	
102	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	高杯		21.0	11.0	21.1	浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	スカーシ粗雑、切り残りあり
103	段状遺構群 6	南半	床面	弥生	高杯			10.9		橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	灰黄、灰黄あり、下段一つ一輪
104	段状遺構群 6	南半	上層	弥生	甕		20.3		浅黄 (2.5Y 7/4)	浅黄 (2.5Y 7/4)	浅黄 (2.5Y 7/4)		
105	段状遺構群 6	南半	T20	弥生	甕		11.2		にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	明褐 (7.5YR 5/6)		
106	段状遺構群 6	南半	T20	弥生	甕		20.1		にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)		
107	段状遺構群 6	南半	T20	弥生	甕		16.1		にぶい黄橙 (10YR 7/4)	明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)		
108	段状遺構群 6	南半	下層	弥生	甕		20.5		にぶい橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (10YR 7/4)		
109	段状遺構群 6	南半	上層	弥生	甕		10.7		橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)		
110	段状遺構群 6	南半	上層	弥生	高杯		23.0		にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)		
111	段状遺構群 6	南半	下層	弥生	高杯		22.0		橙 (7.5YR 6/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	橙 (7.5YR 6/6)		
112	段状遺構群 6	南半	下層	弥生	高杯			11.4		明褐 (7.5YR 5/6)	浅黄 (2.5Y 7/4)	浅黄 (2.5Y 7/4)	
113	段状遺構群 7		床面	弥生	甕		24.0		にぶい橙 (5YR 6/4)	にぶい橙 (5YR 6/4)	明赤褐 (5YR 5/6)		
114	段状遺構群 7		床面	弥生	甕		11.3		にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5Y 6/6)		
115	段状遺構群 7	北半	床面	弥生	甕		17.0		にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	にぶい褐 (7.5YR 5/4)		
116	段状遺構群 7		床面	弥生	甕		17.5		にぶい黄橙 (10YR 6/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)		
117	段状遺構群 7		床面	弥生	鉢		17.2		橙 (5YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	黒灰 (10Y 4/1)		
118	段状遺構群 7		床面	弥生	高杯		21.0		にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	風化著しい	
119	段状遺構群 7		床面	弥生	高杯		25.2		橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	にぶい赤褐 (5YR 6/4)		
120	段状遺構群 7	南半	3	弥生	甕		11.6		橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)		
121	段状遺構群 7	南半	3	弥生	甕		16.2		橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)		
122	段状遺構群 7		埴土	弥生	甕		25.0		橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)		
123	段状遺構群 7		3	弥生	甕				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)		
124	段状遺構群 7	南半	3	弥生	甕		18.2		浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	明黄褐 (10YR 7/6)		
125	段状遺構群 7		埴土	弥生	甕		16.6		にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (5YR 6/4)	橙 (5YR 6/6)		
126	段状遺構群 7		1	弥生	鉢		23.8		橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	黒褐 (5Y 3/1)		
127	段状遺構群 7	南半	3	弥生	台付鉢		35.8		にぶい赤褐 (5YR 5/4)	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	にぶい赤褐 (5YR 5/4)		
128	段状遺構群 7	南半	3	弥生	高杯		14.7		橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)		
129	段状遺構群 7	北半	2	弥生	高杯		14.2		にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/6)		
130	段状遺構群 7		1	弥生	台付鉢		14.0		にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	スカーシ貫通しない	
131	段状遺構群 7	南半	5	弥生	器台				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	灰黄 (7.5YR 4/2)		
132	段状遺構群 7	北半	3	弥生	器台		26.0		浅黄 (2.5Y 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	にぶい褐 (7.5YR 5/4)		
133	段状遺構群 7	北半	3	弥生	甕			1.4	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	にぶい赤褐 (5YR 5/3)	ミニチュア	
134	段状遺構群 8		埴土	弥生	甕		20.3		にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	明黄褐 (10YR 6/6)		
135	竪穴住居 1		埴土	弥生	甕				にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	底部と肩段を境、両側ケズリ面まで	
136	竪穴住居 1	炉	4	弥生	甕		11.8		にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)		
137	竪穴住居 1	P2	3	弥生	鉢		11.4	8.4	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	底部打ち欠き	
138	竪穴住居 1		1	弥生	高杯		17.9		にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	脚差し込み	
139	竪穴住居 1	市段階		弥生	高杯		29.4		にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい褐 (7.5YR 6/3)	外面ヨコナデ	
140	竪穴住居 2	変遷 4 壁体溝		弥生	甕		12.6		橙 (5Y 6/6)	橙 (5Y 6/6)	橙 (5Y 6/6)		
141	竪穴住居 2	変遷 5	床面	弥生	甕				にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい褐 (7.5YR 5/4)		
142	竪穴住居 2		14	弥生	甕		13.0		橙 (7.5Y 6/6)	にぶい橙 (7.5YR 6/6)	にぶい橙 (7.5YR 6/6)	風化著しい	
143	竪穴住居 2	変遷 5	14	弥生	甕		14.0		にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	若干すす付着、風化著しい	
144	竪穴住居 2	変遷 5	床面	弥生	甕		17.8		橙 (7.5Y 7/6)	橙 (5Y 6/6)	浅黄橙 (10Y 8/4)		
145	竪穴住居 2	変遷 5	14	弥生	甕		18.6		橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)	風化著しい	
146	竪穴住居 2	変遷 5 P2	20	弥生	器台		18.7		明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)		
147	竪穴住居 2	変遷 5	床面	弥生	器台		20.6		にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	明赤褐 (2.5YR 5/6)		
148	竪穴住居 2	変遷 1	5	弥生	甕				橙 (7.5YR 6/6)	オリーブ褐 (5Y 4/3)	黒褐 (5Y 3/1)		
149	竪穴住居 2	変遷 1	5	弥生	器台		19.4		橙 (5YR 6/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)		
150	竪穴住居 2		埴土	弥生	甕		21.4		にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)		
151	竪穴住居 2		下層	弥生	器台		21.8		にぶい黄橙 (10YR 6/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (5YR 6/6)		
152	竪穴住居 2		下層	弥生	甕		16.0		橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙 (10YR 7/6)	灰黄橙 (10YR 4/2)	風化著しい	
153	竪穴住居 2		下層	弥生	高杯			11.1	灰黄褐 (10YR 7/6)	灰黄褐 (10YR 7/6)	灰黄褐 (10YR 7/6)	風化著しい	
154	竪穴住居 2		埴土	弥生	高杯		24.2		灰黄 (2.5Y 7/2)	灰黄 (2.5Y 7/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)		
155	竪穴住居 2		上層	弥生	高杯				にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	灰オリーブ (5Y 6/2)	内面らせん状粘土痕跡	
156	竪穴住居 2		上層	弥生	台付鉢		11.8		にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	明赤褐 (5YR 5/6)		
157	竪穴住居 2			弥生	高杯		9.2		浅黄橙 (10Y 8/4)	浅黄橙 (10Y 8/4)	明黄褐 (10Y 7/6)		
158	竪穴住居 2		上層	弥生	土製品				橙 (7.5Y 6/6)	橙 (7.5Y 6/6)	橙 (7.5Y 6/6)	厚1.2cm、幅0.9cm、重量7.57g	
159	土壌 1			弥生	器台		20.1	27.1	21.4	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	底部4カ所穿孔、肩部4個4列穿孔
160	土壌 5		上層	弥生	台付鉢		4.6			橙 (2.5YR 6/6)	にぶい橙 (2.5YR 6/4)	橙 (5YR 6/8)	
161	土壌 5			土師器	甕				橙 (2.5YR 6/8)	橙 (2.5YR 6/6)	明赤褐 (2.5YR 5/8)		
162	土壌 6		5	弥生	甕			12.4	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)	内面剥落	
163	土壌 6		5	弥生	甕		14.1		にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	風化著しい	
181	1号窯	第2床面		須恵器	杯蓋		12.0		にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	小片のため底口径不確定、焼成不良	
228	2号窯	敷地層	16	須恵器	杯身		13.0		灰 (7.5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)		
229	2号窯	敷地層	16	須恵器	杯身		12.0	4.2	灰 (10Y 5/1)	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	焼き金目著しい、図上復元	

土器観察表③

番号	遺構名	地 点	土 層	種別	器種	計測値 (cm)			色 調			備 考
						口径	底径	器高	外	内	断面	
230	2号窯	整地層	16	須恵器	甕				にぶい黄橙 (2.5YR 6/3)	にぶい黄橙 (2.5YR 6/4)	灰 (5Y 5/1)	
255	埴輪集粘地	5区		須恵器	杯身	13.0		5.2	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	内面工具痕
256	埴輪集粘地	5区、1区		須恵器	杯身	14.8		5	灰 (N 6/)	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	内面同心円タタキ、工具痕
257	埴輪集粘地	1区		須恵器	杯身				灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	
258	埴輪集粘地	1区		須恵器	杯身				灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	
259	埴輪集粘地		検出	須恵器	甕				灰白 (N 7/)	灰白 (N 7/)	灰白 (N 7/)	
382	灰原			須恵器	杯蓋	12.8		3.3	灰 (N 5/)	灰 (10Y 5/1)	灰 (10Y 5/1)	
383	灰原			須恵器	杯蓋	12.1		2.9	灰 (10Y 5/1)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	
384	灰原			須恵器	杯身				灰 (7.5Y 7/1)	灰 (7.5Y 7/1)	灰 (7.5Y 7/1)	
385	灰原			須恵器	平皿				灰白 (10Y 7/1)	灰 (N 6/)	灰黄 (2.5Y 7/2)	内面自然釉
386	灰原			須恵器	甕		8.4		灰 (N 4/)	灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	
387	灰原			備前焼	壺	11.8			にぶい橙 (7.5YR 5/3)	灰褐 (5Y 5/2)	灰褐 (5Y 5/2)	
388	灰原			弥生	器台	21.3			にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	内面剥離が著しい
390	石槽 1	西枕		須恵器	杯蓋	12.0		5.1	灰白 (7.5Y 8/1)	灰白 (7.5Y 8/1)	灰白 (7.5Y 8/1)	風化著しい
391	石槽 1	東枕		須恵器	杯蓋	12.1		4.6	灰白 (7.5Y 8/1)	灰白 (7.5Y 8/1)	灰白 (7.5Y 8/1)	風化著しい、端部形態不明
392	石槽 1	墳丘裾		須恵器	杯蓋	11.0		5.5	灰 (N 4/)	暗青灰 (10BG 4/1)	灰赤 (2.5YR 4/2)	
393	石槽 1	周溝		須恵器	杯身	12.1		4.1	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	山縁部残像か、縁、傾き不明
394	石槽 2	周溝		須恵器	杯蓋	12.0		5.0	灰 (N 5/)	灰 (N 5/)	灰 (N 5/)	天井部やや歪み
395	石槽 2	周溝		須恵器	杯蓋	13.8		4.3	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	外面自然釉
396	石槽 2	周溝		須恵器	甕				灰 (N 4/)	灰 (N 6/)	灰白 (5Y 7/2)	内面同心円タタキ後ナデ、オサエ
397	土壇壁 1			土師器	甕	11.1	5.6	4.1	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	粘土の継ぎ目が螺旋状に残る
398	土壇壁 1		5	須恵器	杯身	12.2			灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	山縁部残像か、縁、傾き不明
420	土壇 8			須恵器	杯蓋	12.3		4.5	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	歪み著しい、ヘラケズリ縁
421	土壇 8			須恵器	杯身	11.4		4.5	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	外底面周溝ケズリ、中央部分ナデ
422	土壇 8			須恵器	甕				灰白 (2.5Y 8/2)	灰白 (5Y 7/1)	灰白 (5Y 7/1)	内面同心円タタキ後ナデ
423	竪穴住居 3		床面	須恵器	杯蓋	13.6		4.0	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	歪み著しい、甕蓋縁、内面同心円工痕
424	竪穴住居 3		床面	須恵器	杯身	12.4		4.3	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	外底面溶岩物あり
425	竪穴住居 3			須恵器	甕				灰 (10Y 6/1)	暗青灰 (5B 4/1)	暗青灰 (5B 3/1)	内外面タタキ後ナデ
426	竪穴住居 3		検出	須恵器	杯	14.2	11.4	3.7	灰 (5Y 5/2)	灰 (5Y 5/2)	灰 (5Y 5/2)	混入
469	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B蓋	12.2		3.1	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	浅黄 (5Y 8/3)	天井ケズリ
470	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B蓋	15.5		2.7	黄灰 (2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	紫灰 (5R 6/1)	天井ケズリ、堅
471	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、第2炭層	須恵器	杯B蓋	14.9		3.6	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	天井ケズリ、堅
472	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、造成土	須恵器	杯B蓋	15.1			灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	天井ケズリ、堅
473	3号窯	灰原	第2炭層、造成土	須恵器	杯B蓋	15.4			灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	天井ケズリ、堅
474	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯B蓋				灰白 (5Y 7/1)	灰白 (5Y 7/1)	灰白 (5Y 7/1)	軟質、剥離
475	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、第2炭層	須恵器	杯B蓋	17.3		3.4	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	灰白 (7.5Y 7/1)	天井ケズリ、堅
476	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、第2炭層	須恵器	杯B蓋	17.2		3.6	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	天井ケズリ、軟質
477	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B蓋	17.4			灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	天井ケズリ
478	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B蓋	18.3		2.7	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	天井ケズリ、軟質
479	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯B蓋	17.6		2.9	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	天井ケズリ、堅
480	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B蓋	18.4		3.3	暗青灰 (5B 4/1)	暗青灰 (5B 4/1)	暗青灰 (5B 4/1)	天井ケズリ、堅
481	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B蓋	18.6		2.6	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	天井ケズリ、軟質
482	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B蓋	19.0		3.0	青灰 (5B 6/1)	青灰 (5B 6/1)	淡黄 (5Y 8/3)	天井部までケズリ、堅
483	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、第2炭層	須恵器	杯B蓋	17.7		3.0	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	軟質、剥離
484	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、第2炭層	須恵器	杯B蓋	17.8			暗青灰 (5B 4/1)	暗青灰 (5B 4/1)	暗青灰 (5B 4/1)	天井ケズリ、堅
485	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、造成土	須恵器	杯B蓋	17.9			暗青灰 (5B 4/1)	暗青灰 (5B 4/1)	暗青灰 (5B 4/1)	天井ケズリ、やや軟
486	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯B蓋				青灰 (5BG 6/1)	青灰 (5BG 6/1)	灰 (10Y 7/1)	天井ケズリ、堅
487	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、第2炭層	須恵器	杯B	16.6	11.5	4.3-4.8	青灰 (5B 5/1)	青灰 (5B 5/1)	青灰 (5B 5/1)	やや軟、底ケズリ
488	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B	16.2	12.5	4.2	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	軟質、底ケズリ
489	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯B	16.2	11.2	5.0	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	やや軟、底ケズリ
490	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯B		11.2		灰 (N 5/)	灰 (N 5/)	灰 (N 5/)	底片状圧痕、堅
491	3号窯	灰原		須恵器	杯B		11.3		灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	底ケズリ？
492	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯B		11.2		灰 (10Y 7/2)	灰 (10Y 7/2)	灰 (10Y 7/2)	底ケズリ？、軟質
493	3号窯	灰原	造成土	須恵器	杯B		11.6		暗緑灰 (10G 4/1)	暗緑灰 (10G 4/1)	紫灰 (5RP 4/1)	底ケズリ、堅
494	3号窯	灰原		須恵器	杯B		12.5		灰オリーブ (5Y 6/2)	灰 (5Y 6/1)	紫灰 (5P 4/1)	底ケズリ？、堅
495	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、第2炭層	須恵器	杯桶状	12.4		3.9	暗緑灰 (10G 4/1)	灰オリーブ (7.5Y 5/2)	暗赤灰 (5R 4/1)	底ヘラキリ、堅
496	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯桶状	12.8		4.0	青灰 (5PG 6/1)	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	底ヘラキリ
497	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯桶状	12.2		3.8	灰オリーブ (5Y 4/2)	灰オリーブ (5Y 4/2)	紫灰 (5P 5/1)	底ヘラキリ、堅
498	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯桶状	11.5		3.3	青灰 (10BG 5/1)	青灰 (10BG 5/1)	青灰 (10BG 5/1)	底ヘラキリ、堅
499	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯桶状	12.8		3.9	青灰 (5 PB 6/1)	青灰 (5 PB 6/1)	青灰 (5 PB 6/1)	底ヘラキリ、堅
500	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯桶状	12.6		4.5	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	底ヘラキリ、軟質
501	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯桶状	11.8		3.9	暗赤 (N 3/)	暗赤 (N 3/)	暗赤 (N 3/)	底ヘラキリ、堅
502	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯桶状	11.4			灰 (7.5Y 6/1)	青灰 (5 PB 5/1)	暗赤灰 (5 PB 4/1)	堅、自然釉
503	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯桶状	13.3		3.4	青灰 (10BG 6/1)	緑灰 (10G 6/1)	緑灰 (10G 6/1)	底ヘラキリ
504	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯桶状	13.0		4.2	青灰 (10BG 4/1)	青灰 (10BG 4/1)	青灰 (5 BG 6/1)	底ヘラキリ
505	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	杯A ?	19.8			灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 7/1)	底ケズリ、軟質
506	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	杯A ?	13.4			灰オリーブ (5Y 6/2)	灰オリーブ (5Y 6/2)	灰オリーブ (5Y 6/2)	下層ケズリ？
507	3号窯	灰原	第2炭層、造成土	須恵器	壺	11.8	10.2	4.6	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	底ケズリ、堅
508	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	高杯		10.8		灰 (10Y 7/1)	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	やや軟
509	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	長頸壺		9.6		灰 (7.5Y 5/1)	灰 (7.5Y 5/1)	灰 (7.5Y 5/1)	堅
510	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	長頸壺		7.1		黒 (N 2/)	黒 (N 2/)	暗赤灰 (5 RP 4/1)	堅
511	3号窯	灰原		須恵器	長頸壺	12.0			オリーブ黄 (5 Y 6/4)	オリーブ黄 (5 Y 6/4)	暗赤灰 (5 PG 4/1)	堅
512	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	長頸壺	8.6			暗赤灰 (10BG 4/1)	暗赤灰 (10BG 4/1)	暗赤灰 (10BG 4/1)	堅
513	3号窯	灰原		須恵器	長頸壺	4.6			オリーブ黒 (5 Y 6/4)	オリーブ黒 (5 Y 6/4)	暗赤灰 (5 R 3/1)	堅
514	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	長頸壺				オリーブ黄 (5 Y 6/4)	灰オリーブ (7.5Y 6/2)	紫灰 (5 RP 5/1)	堅、自然釉
515	3号窯	窯体内、灰原	第1床面、第2炭層	須恵器	長頸壺		9.5		青黒 (5 B 2/1)	灰 (N 6/)	灰 (5 Y 7/1)	堅、自然釉
516	3号窯	窯体内	第1床面	須恵器	壺底部		11.0		灰 (10Y 7/1)	紫灰 (5P 6/1)	青灰 (5 PB 5/1)	
517	3号窯	灰原	造成土	須恵器	壺底部		10.8		青灰 (5 PB 5/1)	青灰 (5 PB 5/1)	青灰 (5 PB 5/1)	堅
518	3号窯	灰原	第2炭層、造成土	須恵器	壺蓋	16.6			紫灰 (5P 6/1)	紫灰 (5P 6/1)	暗赤灰 (5 RP 3/1)	堅、歪み、自然釉
519	3号窯	灰原		須恵器	短頸壺	9.8			青灰 (5 B 6/1)	青灰 (5 B 6/1)	暗赤灰 (5P 4/1)	堅、自然釉
520	3号窯	灰原	第4炭層	須恵器	壺	11.3			青灰 (10BG 6/1)	青灰 (10BG 6/1)	青灰 (10BG 6/1)	カギズ
521	3号窯	灰原	第2炭層	須恵器	壺	9.9			灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	

第3章 土井遺跡

土器観察表④

番号	遺構名	地 点	土 層	種別	器種	計測値 (cm)			色 調			備 考
						口径	底径	器高	外	内	断	
522	3号窯	灰原	流土	須恵器	甕				にぶい黄(2.5Y 6/4)	灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	堅、自然釉
523	3号窯	灰原	第2灰層、造成土	須恵器	短頸甕				暗青灰(5B 3/1)	暗青灰(5B 3/1)	暗紫灰(5P 4/1)	堅
524	3号窯	室内内灰原	第1灰層 造成土、第3灰層	須恵器	甕				灰白(7.5Y 7/1)	灰白(7.5Y 7/1)	灰(7.5Y 6/1)	
525	3号窯	室内内灰原	第1灰層 造成土、第3灰層	須恵器	甕				灰白(5Y 7/1)	灰白(5Y 7/1)	灰白(5Y 7/1)	
526	3号窯	灰原		須恵器	鉢?				青灰(5B 6/1)	青灰(5B 6/1)	青灰(5B 6/1)	
527	3号窯	室内内灰原	第1灰層 第2.3灰層、造成土	須恵器	横瓶	10.5		29.2	灰(N 5/)	灰(N 5/)	灰(N 5/)	旋きむら
528	3号窯	灰原	造成土	須恵器	甕	20.5			青灰(5B 5/1)	青灰(5B 5/1)	青灰(5B 5/1)	堅
529	3号窯	灰原	造成土	須恵器	甕	20.8			青灰(5PG 6/1)	青灰(5PG 6/1)	青灰(5PG 6/1)	
530	3号窯	灰原	第2灰層	須恵器	甕				灰(5Y 6/1)	灰(5Y 6/1)	灰(7.5Y 4/1)	
531	3号窯	灰原	第1灰層	須恵器	甕				暗青灰(5B 4/)	暗青灰(5B 4/)	にぶい赤褐(2.5YR 4/4)	堅
532	3号窯	灰原	造成土	土師器	甕	23.0			にぶい黄褐(10YR 7/4)	にぶい黄褐(10YR 7/4)	にぶい赤褐(2.5YR 6/4)	風化
533	土壇9		底面	土師器	杯身	14.4			にぶい黄褐(10YR 6/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	灰黄褐(10YR 6/2)	外面ナデ、内面頸部押圧痕
534	土壇10		埋上	土師器	甕				浅黄(2.5Y 7/3)	浅黄(2.5Y 7/3)	黄灰(2.5Y 4/1)	内外面ナデ
535	土壇10			須恵器	杯身		10.6		灰(N 6/)	灰(N 6/)	灰(10Y 6/1)	内面不定方向ナデ
536	土壇19		2	須恵器	杯蓋	15.6			灰(N 6/)	灰(N 7/)	灰(N 7/)	釉片のため狂、様不明、目付線不明瞭
537	土壇20		2	須恵器	杯身				明青灰(5B 7/1)	明青灰(5B 7/1)	明青灰(5B 7/1)	口縁残存せず、細く低いものか
540	平坦面1		上層	須恵器	杯蓋	12.4			灰(N 5Y 7/2)	灰(N 5Y 7/2)	灰(N 5Y 7/1)	
541	平坦面1		上層	須恵器	杯身	11.8			灰(7.5Y 6/1)	灰(7.5Y 6/1)	灰(7.5Y 6/1)	
542	平坦面1		7	須恵器	甕				灰(N 5/)	灰(N 5/)	明赤灰(10Y 4/1)	浴槽物あり
543	平坦面1		7	須恵器	甕				灰(N 7/)	灰(N 6/)	灰黄褐(10YR 6/2)	自然釉、544と同一個体か
544	平坦面1		7	須恵器	甕				灰(N 7/)	灰(N 6/)	灰黄褐(10YR 6/2)	自然釉、543と同一個体か
545	平坦面1		下層	須恵器	甕				灰(N 4/)	灰(N 5/)	灰赤(7.5R 5/2)	
546	火葬窯			甕前焼	甕	15.7			にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	
547	遺構に伴わない	D区		須恵器	杯	10.0	6.1	4.1	灰(N 5/)	灰(N 6/)	灰(N 5/)	
548	遺構に伴わない	D区		甕前焼	甕口小甕	4.0	3.7	7.4	にぶい赤褐(5YR 5/3)	にぶい褐(7.5YR 5/3)	にぶい褐(7.5YR 5/3)	底部付近で台から切り取った部分
549	遺構に伴わない	D区		土師器	小皿	9.7	7.4	2.1	浅黄(2.5Y 7/3)	浅黄(2.5Y 7/3)	浅黄(2.5Y 7/3)	内面不定方向ナデ
550	遺構に伴わない	D区		土師器	小皿	9.6	7.9	1.9	浅黄(2.5Y 7/3)	浅黄(2.5Y 7/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	内面不定方向ナデ
551	遺構に伴わない	D区		土師器	小皿	9.7	5.3	2.1	浅黄(2.5Y 7/3)	浅黄(2.5Y 7/3)	浅黄(2.5Y 7/3)	内面不定方向ナデ
552	遺構に伴わない	D区		土師器	小皿	8.2	6.6	1.8	灰黄(2.5Y 7/2)	灰黄(2.5Y 7/2)	灰黄(2.5Y 7/2)	内面不定方向ナデ
553	遺構に伴わない	D区		土師器	小皿	8.6	7.1	1.3	浅黄(2.5Y 7/3)	灰(N 10Y 8/2)	灰(N 10Y 8/2)	内面不定方向ナデ
554	遺構に伴わない	D区		土師器	小皿	8.9	6.6	1.2	にぶい黄褐(10YR 6/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	内面不定方向ナデ

第12表 埴輪・陶棺観察表①

番号	遺構名	地点	上層	種別	分類	計測値(cm)			色 調			基底部調整		備 考
						口径	底径	器高	外	内	断	有無	痕 跡	
164	1号窯		上層	陶棺	身				橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	—	—	突帯の痕跡残る
165	1号窯		上層	陶棺	身				灰黄(2.5Y 6/2)	灰黄(2.5Y 6/2)	橙(7.5YR 7/6)	—	—	
166	1号窯		上層	陶棺	脚身長合部				橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	—	—	
167	1号窯		上層	内筒	5d	18.0			にぶい黄褐(10YR 6/3)	橙(5YR 7/6)	橙(5YR 7/6)	×	ハケ明瞭	底面飾物線彫痕、基底部内筒口部明瞭
168	1号窯		上層	内筒	5b	11.6			灰黄褐(10YR 6/2)	黄灰(2.5Y 6/1)	黄灰(2.5Y 6/1)	○	タタキ後ナデ	最下段突帯に布目が骨かに残存
169	1号窯		第3灰	内筒	5b	26.0	13.0	47.3	にぶい黄褐(10YR 7/4)	褐灰(10YR 5/1)	黄灰(2.5Y 5/1)	○	ナデ	基底部ナデの部に押圧か、ヘラ記号あり
170	1号窯		第3灰	内筒	5b	13.8			灰(7.5YR 6/1)	灰(N 5/)	灰(N 5/)	○	タタキ後ナデ	
171	1号窯		第3灰	内筒	5b	24.5			黄褐(7.5YR 7/8)	にぶい黄褐(10YR 7/4)	橙(5YR 7/8)	—	—	風化著しい
172	1号窯		第3灰	内筒	5b				灰黄褐(10YR 5/2)	にぶい黄褐(10YR 5/3)	にぶい赤褐(5YR 5/4)	—	—	
173	1号窯		第3灰	内筒	5d				灰(N 6/)	灰(N 6/)	灰(N 6/)	—	—	
174	1号窯		第3灰	内筒	5b	18.0			黄灰(2.5Y 4/1)	黄灰(2.5Y 4/1)	黄灰(2.5Y 4/1)	○	タタキ後ナデ	底面木目痕
175	1号窯		第3灰	内筒	5b				にぶい黄褐(10YR 6/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	褐灰(10YR 5/1)	—	—	端部剥離
176	1号窯		第3灰	内筒	5b				にぶい黄褐(10YR 7/4)	にぶい黄褐(10YR 7/4)	にぶい黄褐(10YR 7/4)	○	不明瞭	風化著しい、内面板状工具痕
177	1号窯		第3灰	内筒	5b				灰(N 6/)	灰(N 6/)	灰(N 6/)	○	タタキ後ナデ	底面木目痕
178	1号窯		第3灰	内筒	5a				灰(N 6/)	灰(N 6/)	橙(7.5YR 6/6)	—	—	
179	1号窯		第3灰	内筒	5a	10.2			褐(7.5Y 4/3)	褐(7.5Y 4/3)	褐(7.5Y 4/3)	○	タタキ後ナデ	
180	1号窯		第3灰	内筒	5a	18.6			黄灰(2.5Y 4/1)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	×	ハケ明瞭	突帯押圧
182	1号窯		第2灰	内筒	5a				黄灰(2.5Y 5/1)	黄灰(2.5Y 5/1)	黄灰(2.5Y 5/1)	—	—	
183	1号窯		第2灰	内筒	5a				灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	—	—	
184	1号窯		第2灰	内筒	5d				灰(5Y 6/1)	灰(5Y 6/1)	灰(5Y 6/1)	—	—	
185	1号窯		第2灰	内筒	5d				にぶい黄褐(10YR 6/4)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	—	—	
186	1号窯		第2灰	内筒	5a				黄灰(2.5Y 4/1)	黄灰(2.5Y 4/1)	黄灰(2.5Y 4/1)	—	—	
187	1号窯		第2灰	内筒	5b				灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	灰(5Y 5/1)	—	—	玉み著しい
188	1号窯		第1灰	内筒	5a				灰(N 6/)	灰(N 6/)	灰(N 6/)	—	—	
189	1号窯		第1灰	内筒	5a				灰(N 6/)	褐灰(10YR 5/1)	灰(N 6/)	—	—	
190	1号窯		第1灰	内筒	5a				黄灰(2.5Y 5/1)	灰黄(2.5Y 6/2)	灰黄(2.5Y 6/2)	—	—	突帯押圧
191	2号窯		第2灰	陶棺	蓋				にぶい橙(7.5YR 6/4)	橙(7.5YR 7/6)	橙(7.5YR 7/6)	—	—	一部灰(7.5Y 4/1)
192	2号窯		第2灰	陶棺	蓋				灰(5Y 6/1)	灰(5Y 6/1)	灰(5Y 6/1)	—	—	内面布痕、部にぶい黄褐(10YR 7/4)
193	2号窯		第2灰	陶棺	蓋				橙(7.5YR 6/6)	橙(7.5YR 6/6)	橙(7.5YR 6/6)	—	—	突起のみ灰黄褐(10YR 6/2)
194	2号窯		第2灰	陶棺	蓋				にぶい黄褐(10YR 6/4)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	—	—	突起部より付け部分内外面工具痕明瞭
195	2号窯		第2灰	陶棺	蓋				橙(7.5YR 6/8)	橙(7.5YR 6/8)	橙(7.5YR 6/8)	—	—	
196	2号窯		第2灰	陶棺	蓋				にぶい黄褐(10YR 6/4)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	にぶい黄褐(10YR 6/4)	—	—	
197	2号窯		第2灰	陶棺	身				明黄褐(10YR 7/6)	明黄褐(10YR 7/6)	灰(N 5Y 7/1)	—	—	
198	2号窯		第2灰	陶棺	脚	14.8			灰(5Y 6/1)	灰(5Y 6/1)	灰(5Y 6/1)	—	—	波状文、下部剥離、内面下半工具痕明瞭
199	2号窯		第2灰	陶棺	脚				橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	—	—	脚と身の接合部分残存
200	2号窯		第2灰	形象	石見型直				灰黄(2.5Y 6/2)	にぶい黄褐(10YR 7/4)	にぶい黄褐(10YR 7/4)	—	—	風化著しい
201	2号窯		第2灰	形象	石見型直				明黄褐(10YR 7/6)	明黄褐(10YR 7/6)	明黄褐(10YR 7/6)	—	—	一部灰黄褐(10YR 6/2)
202	2号窯		第2灰	形象	石見型直				にぶい黄褐(10YR 6/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	—	—	風化著しい
203	2号窯		第2灰	形象	石見型直				橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/8)	にぶい黄褐(10YR 7/4)	—	—	風化著しい
204	2号窯		第2灰	形象	石見型直				橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	—	—	一部剥離(10YR 4/1)、倒立、底面剥離、玉み著しい
205	2号窯		第2灰	形象	石見型直	28.2			にぶい黄褐(10YR 6/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	にぶい黄褐(10YR 6/3)	—	—	倒立、玉み著しい
206	2号窯		第2灰	形象	石見型直	27.6			灰(N 6/)	黄褐(7.5YR 7/8)	明黄褐(10YR 7/6)	—	—	部位により色調異なる、倒立
207	2号窯		第2灰	形象	石見型直	25.0			橙(5YR 7/6)	橙(5YR 7/6)	橙(5YR 7/6)	—	—	部位により色調異なる、倒立、突起付き
208	2号窯		第2灰	形象	石見型直	26.0			橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	橙(5YR 6/6)	—	—	一部灰黄褐(10YR 6/2)、倒立

埴輪・陶棺観察表②

番号	遺構名	地点	土層	種別	分類	計測値(cm)			色 調			基底部調整		備 考
						口径	底径	高さ	外	内	断	有無	痕 跡	
209	2号窯		第2床	形象	石見型盾				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
210	2号窯		第2床	形象	石見型盾				橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	—	—	背曲僅ハケ残る、部位で色調異なる
211	2号窯		第2床	形象	石見型盾				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	一部灰黄褐 (10YR 6/2)
212	2号窯		第2床	形象	石見型盾				橙 (2.5YR 6/6)	にぶい褐 (7.5YR 5/3)	にぶい赤褐 (2.5YR 5/3)	—	—	肩部穿孔 2カ所残
213	2号窯		第2床	形象	石見型盾				にぶい褐 (7.5YR 5/3)	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	—	—	
214	2号窯		第2床	形象	石見型盾				にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	—	—	
215	2号窯		第2床	形象	石見型盾			26.8	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	倒立
216	2号窯		第2床	形象	石見型盾				にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	—	—	部位により色調異なる、赤み著しい
217	2号窯		第2床	円筒	6a	30.4			灰黄 (2.5Y 7/2)	灰黄 (2.5Y 7/2)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	—	—	
218	2号窯		第2床	円筒	6a	11.0			灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	—	—	赤み著しい、口径小さい、形象か
219	2号窯		第2床	円筒	6a				灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	—	—	
220	2号窯		第2床	円筒	6a				にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	—	—	
221	2号窯		第2床	円筒	6a				灰 (7.5YR 6/1)	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	—	—	
222	2号窯		第2床	円筒	6a				灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	—	—	
223	2号窯		第2床	円筒	6a				にぶい黄橙 (10YR 6/4)	—	橙 (7.5YR 7/4)	×	ハケ明瞭	黒斑
224	2号窯		第2床	円筒	6a				にぶい橙 (5YR 6/3)	にぶい橙 (5YR 6/3)	褐灰 (10YR 5/1)	—	—	
225	2号窯		第2床	形象	鳥				にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	—	—	最大径3.7cm、残存高1.1cm
226	2号窯		第2床	形象	鳥				灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	—	—	最大径3.2cm、残存高1.3cm
227	2号窯		P2	7	陶瓶				にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	—	—	3条波状文
231	2号窯		整地層	16	円筒	5b			灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	灰 (N 6/)	—	—	
232	2号窯		整地層	16	円筒	5b			灰 (5Y 6/1)	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	—	—	外面ハケ後ナデ
233	2号窯		整地層	16	円筒	5c			橙 (5YR 6/6)	褐灰 (10YR 5/1)	橙 (2.5YR 6/6)	—	—	
234	2号窯		整地層	16	円筒	5c			灰褐 (7.5YR 5/2)	灰黄褐 (10YR 5/2)	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	—	—	
235	2号窯		整地層	16	円筒	5a			灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	—	—	
236	2号窯		整地層	16	円筒	6a			橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
237	2号窯		整地層	16	円筒	6b			にぶい黄橙 (10YR 6/3)	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	—	—	
238	2号窯		整地層	16	円筒	5d			橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 7/8)	—	—	風化著しい
239	2号窯		整地層	16	円筒	5d			灰 (N 6/)	灰 (5Y 5/)	灰 (5Y 5/)	—	—	
240	2号窯		整地層	16	円筒	5d			にぶい橙 (5YR 6/4)	黄灰 (2.5Y 5/1)	にぶい橙 (2.5YR 6/4)	—	—	
241	2号窯		整地層	16	円筒	5d			灰黄褐 (10YR 5/2)	灰黄褐 (10YR 5/2)	灰黄褐 (10YR 5/2)	—	—	
242	2号窯		整地層	16	円筒	5d			にぶい黄橙 (10YR 6/3)	黄灰 (2.5Y 5/1)	灰黄褐 (10YR 5/2)	×	ハケ明瞭	外面付着物あり、径小さい、形象か
243	2号窯		整地層	16	円筒	5d			にぶい橙 (5YR 7/4)	にぶい橙 (5YR 7/4)	橙 (5YR 6/6)	×	ハケ明瞭	
244	2号窯		整地層	16	円筒	5c			にぶい橙 (7.5YR 7/4)	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	—	—	突帯高い
245	2号窯		整地層	16	円筒	5d			橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	○	タタキ後ナデ	風化著しい
246	2号窯		整地層	16	円筒	5d		27.2	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	○	風化で不明瞭	風化著しい
247	2号窯		整地層	16	円筒	5a			灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	—	—	
248	2号窯		整地層	16	形象				にぶい橙 (7.5YR 6/4)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	板状
249	2号窯		整地層	16	形象	石見型盾			灰 (5Y 5/1)	灰 (N 5/)	灰 (7.5Y 6/1)	—	—	
250	2号窯		整地層	16	形象	石見型盾			灰 (7.5YR 5/1)	灰 (7.5YR 6/1)	灰 (7.5YR 6/1)	—	—	盾跡難直あり、鋭角あり、赤み著しい
251	2号窯		整地層	16	陶瓶				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	3～4条波状文
252	2号窯		整地層	16	陶瓶				にぶい橙 (7.5YR 6/4)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	—	—	細い4条波状文
253	2号窯		整地層	16	陶瓶				にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	—	—	
254	2号窯		整地層	16	陶瓶				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
260	埴輪集積地	9区		円筒	5c	28.8			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	—	—	工具痕有
261	埴輪集積地	9区		円筒	5c	30.0			浅黄 (2.5Y 7/3)	橙 (7.5YR 7/6)	黄橙 (7.5YR 7/8)	—	—	
262	埴輪集積地	9区		円筒	5c		16.0		橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	○	タタキ後ナデ	底面木目痕、基底部調整時最下段潰す
263	埴輪集積地	4区		円筒	5c	25.7			橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	灰黄褐 (10Y 5/2)	—	—	
264	埴輪集積地	5区		円筒	5c		21.0		橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	○	タタキ後ナデ	
265	埴輪集積地	5、6区		円筒	5c	30.6	16.7	54.1	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 5/4)	灰黄 (2.5Y 6/2)	○	タタキ後ナデ	
266	埴輪集積地		検出	円筒	5c		15.0		黄灰 (2.5Y 6/1)	灰黄褐 (10YR 5/2)	にぶい赤褐 (2.5YR 5/3)	○	タタキ後ナデ	底面木目痕、基底部調整時最下段潰す
267	埴輪集積地	5区		円筒	5c	32.2	17.7	53.3	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	○	タタキ後ナデ	
268	埴輪集積地	7、8区		円筒	5c	37.7	17.5	53.0	橙 (7.5YR 6/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	○	タタキ後ナデ	口縁部縮円形に歪む
269	埴輪集積地	7区		円筒	5e	26.4			にぶい黄褐 (10YR 5/3)	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	—	—	
270	埴輪集積地	8区		円筒	5e	27.2			にぶい黄褐 (10YR 5/3)	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	—	—	赤み著しい
271	埴輪集積地	9区		円筒	5e				灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	—	—	
272	埴輪集積地		検出	円筒	5e				灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	にぶい黄橙 (2.5Y 6/3)	—	—	
273	埴輪集積地		検出	円筒	5e				灰 (5Y 5/1)	灰 (10YR 6/2)	黄灰 (2.5Y 5/1)	—	—	
274	埴輪集積地	8区		円筒	5e				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	灰 (2.5YR 8/2)	—	—	
275	埴輪集積地	2区		円筒	5e				にぶい黄褐 (10YR 5/3)	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	—	—	
276	埴輪集積地	2区		円筒	5e		19.1		灰オリーブ (5Y 6/2)	灰オリーブ (5Y 6/2)	灰オリーブ (5Y 6/2)	○	タタキ後ナデ	最下段突帯押圧
277	埴輪集積地	4区		円筒	5e	18.4			明黄褐 (10YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい黄橙 (2.5Y 6/3)	○	タタキ後ナデ	底面木目痕
278	埴輪集積地		検出	円筒	5e	17.3			灰黄 (2.5Y 6/2)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	○	タタキ後ナデ	基底部調整時最下段突帯に及ぶ
279	埴輪集積地		検出	円筒	5c	16.6			にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/4)	○	タタキ後ナデ	底面木目痕、基底部調整時最下段突帯潰す
280	埴輪集積地		検出	円筒	5e	15.4			にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄橙 (7.5Y 6/4)	灰 (N 7/)	○	タタキ後ナデ	基底部調整時最下段突帯潰す
281	埴輪集積地	9区		円筒	5c	18.2			浅黄 (2.5Y 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	黄灰 (2.5Y 7/2)	○	タタキ後ナデ	
282	埴輪集積地	6-8区		円筒	6a	17.4			にぶい橙 (5YR 6/6)	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	にぶい赤褐 (5YR 5/4)	×	ハケ明瞭	赤み著しい、底面木目痕、底面押圧、基部と2段ヘラ痕
283	埴輪集積地	5区		円筒	6a	19.2			にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	×	ハケ明瞭	基底部外面ハケ後ナデ、底面厚いまま
284	埴輪集積地	4区		円筒	6a	18.4			橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	×	ハケ明瞭	底面木目痕、底面押圧
285	埴輪集積地	7、8区		円筒	6a	16.8			灰 (5Y 6/1)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	灰 (N 8/)	×	ハケ明瞭	基底部外面ハケ後ナデ、底面厚いまま
286	埴輪集積地	1、2区		円筒	6a		18.6		橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	×	ハケ明瞭	底面木目痕、底面押圧
287	埴輪集積地	8区		円筒	6a	27.1			にぶい橙 (7.5YR 5/4)	にぶい橙 (7.5YR 5/3)	にぶい黄橙 (10YR 4/6)	—	—	
288	埴輪集積地	6区		円筒	6a	27.1			にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	—	—	
289	埴輪集積地		検出	円筒	6a	23.0			にぶい黄橙 (5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 5/3)	暗灰黄 (2.5YR 5/2)	—	—	
290	埴輪集積地	7区		円筒	6a	21.6			橙 (7.5YR 6/6)	褐灰 (10YR 5/1)	褐灰 (10YR 5/1)	—	—	
291	埴輪集積地		検出	円筒	6a	21.2			にぶい橙 (7.5YR 5/4)	橙 (5YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 5/3)	—	—	赤み著しい
292	埴輪集積地	7区		円筒	6a	24.2			橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	口縁部に準陸り付け
293	埴輪集積地		検出	円筒	6a	25.1			にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	—	—	
294	埴輪集積地	5区		円筒	6a	23.8			橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	口縁部磨滅
295	埴輪集積地	5、6区		円筒	6a				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	
296	埴輪集積地	4、6、7区		円筒	6a				にぶい橙 (5YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	—	—	
297	埴輪集積地	4、7区		円筒	6a		15.0		橙 (2.5YR 6/6)	灰褐 (7.5Y 5/2)	灰 (5Y 5/1)	×	ハケ明瞭	底面押圧
298	埴輪集積地	6区		円筒	6a	17.2			橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	×	ハケ明瞭	底面木目痕、底面押圧

埴輪・陶棺観察表③

番号	遺構名	地点	土層	種別	分類	計測値(cm)			色 調			基底部調整		備 考
						口径	底径	器高	外	内	断	有無	痕 跡	
299	埴輪集積地	3区		円筒	6a			21.4	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	×	ハケ明瞭	底面押圧
300	埴輪集積地	8区		円筒	6a	25.4	20.1	53.5	黄灰(2.5Y 5/1)	灰黄褐(10YR 5/2)	黄灰 (2.5Y 6/1)	×	ハケ明瞭	山縁さびみしい、底面木目痕、底面押圧
301	埴輪集積地	8区		円筒	6b	23.5			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	
302	埴輪集積地	8区		円筒	6b			18.9	橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 7/8)	○	タタキ後ナデ	
303	埴輪集積地	9区		円筒	6b			18.8	黄橙(7.5YR 7/8)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	黄橙 (7.5YR 7/8)	○	不明瞭	風化著しい
304	埴輪集積地		検出	円筒	5a				灰 (10Y 5/1)	黄灰(2.5Y 5/1)	にぶい赤褐 (2.5YR 5/4)	—	—	
305	埴輪集積地		検出	円筒	5d	21.0			暗灰黄 (2.5YR 5/2)	暗灰黄 (2.5YR 5/2)	暗灰黄 (2.5YR 5/2)	—	—	
306	埴輪集積地	3区		円筒	5d			16.0	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	×	ハケ明瞭	底面植物痕、底面押圧
307	埴輪集積地	9区		円筒	5d			23.8	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	○	押圧	底面板痕
308	埴輪集積地	9区		円筒	5d	28.0			にぶい黄褐 (10YR 5/3)	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	にぶい黄褐 (10YR 5/3)	—	—	
309	埴輪集積地	8区		円筒	5d	26.6			にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい黄橙(10YR 7/3)	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	—	—	
310	埴輪集積地		検出	円筒	5d			18.2	にぶい黄橙(10YR 6/3)	にぶい黄橙 (10YR 5/3)	橙 (5YR 6/6)	○	タタキ後ナデ	底面木目痕
311	埴輪集積地	7-9区		円筒	5d	20.0			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	○	タタキ後ナデ	
312	埴輪集積地	9区		円筒	5d	18.2			灰 (7.5Y 6/1)	灰黄(2.5Y 5/1)	灰黄 (2.5Y 6/1)	○	タタキ後ナデ	さびみしい、底面木目痕
313	埴輪集積地	9区		円筒	5d	17.8			にぶい褐 (7.5YR 5/3)	灰 (7.5YR 4/2)	灰 (7.5YR 4/2)	○	タタキ後ナデ	底面木目痕
314	埴輪集積地	7区		円筒	5d				橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 7/8)	—	—	
315	埴輪集積地	6区		形象					橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 7/8)	—	—	穿孔あり
316	埴輪集積地	6区		形象					橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	—	—	
317	埴輪集積地	6区		形象					橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	—	—	
318	埴輪集積地		検出	形象					明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	橙 (5YR 7/6)	—	—	突起跡り付け
319	埴輪集積地		検出	形象					にぶい橙 (7.5YR 6/4)	明黄褐 (10YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	—	—	突起跡り付け、スカシ一部現存、彫刻が
320	埴輪集積地		検出	形象					にぶい橙 (7.5YR 6/3)	橙 (5YR 6/6)	灰黄(2.5Y 6/2)	—	—	突起跡り付け後、刺突、突起跡り付け
321	埴輪集積地	2区		形象					橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	突起跡り付け、陶板か
322	埴輪集積地	8区		形象	石見型盾				にぶい黄橙 (10YR 6/4)	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)	—	—	
323	埴輪集積地	8区		形象	石見型盾				にぶい橙 (7.5YR 5/3)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
324	埴輪集積地	7区		形象	石見型盾				にぶい黄橙 (10YR 6/4)	黄橙 (7.5YR 7/8)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	—	—	
325	埴輪集積地	8区		形象	石見型盾				橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/8)	—	—	
326	埴輪集積地		検出	形象	人物腕				灰口(N 7/1)	灰褐 (7.5YR 5/2)	灰褐 (7.5YR 5/2)	—	—	
327	埴輪集積地		検出	形象	人物腕				にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	胎土精製
328	埴輪集積地	6区		形象					橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	突起部分か、接合面にハケ裂
329	埴輪集積地	7区		形象	胴部	18.6			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	底面木目痕
330	埴輪集積地		検出	陶棺	身				灰黄(2.5Y 7/2)	明黄褐(10YR 7/6)	灰黄 (2.5Y 6/2)	—	—	波状文、風化著しい
331	埴輪集積地	4区		陶棺	身				橙 (7.5YR 6/6)	—	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	4条波状文
332	埴輪集積地		検出	陶棺	身				橙 (5YR 6/1)	灰黄(2.5Y 7/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	—	—	突起跡り付け、縁刻あり、形象彫刻か
333	埴輪集積地	6区		形象	ほぼ完形	長17.3 短12.5	長19.2 短15.3	77.6	灰 (N 5/1) 頭、肩上赤褐 (10R 5/4)	赤灰 (2.5YR 4/1)	灰赤 (10R 5/2)	—	—	全面丁寧ナデ、背面ハケ痕 肩最大幅22.0cm、胴最大径19.6cm
334	埴輪集積地		検出	形象	人物頭部				灰黄褐 (10YR 5/2)	灰褐 (7.5YR 5/2)	褐灰 (10YR 5/1)	—	—	
335	埴輪集積地	9区		形象	人物頭部				にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	胎土精製
336	灰原			円筒	6b	26.4	18.2	56.8	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	○	風化で不明瞭	3、4段にヘラ状工具痕、文様か
337	灰原			円筒	6b	23.6			橙 (7.5YR 7/8)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	風化著しい
338	灰原			円筒	6b		20.2		橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/8)	橙 (7.5YR 7/8)	○	タタキ後ナデ	風化著しい
339	灰原			円筒	6b		21.6		橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (5YR 6/6)	○	風化で不明瞭	風化著しい
340	灰原			円筒	5a	19.0			灰黄褐 (10YR 5/2)	暗灰黄 (2.5Y 5/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	—	—	
341	灰原			円筒	5a	20.2			にぶい褐 (7.5YR 6/3)	褐灰 (10YR 5/1)	灰黄褐(10YR 6/2)	—	—	
342	灰原			円筒	5a				灰 (N 6/1)	灰 (N 6/1)	灰 (N 5/1)	—	—	スカシ径小さい
343	灰原			円筒	5a		17.4		にぶい黄橙 (5YR 6/4)	褐灰 (7.5YR 4/1)	明青灰(5B 3/1)	○	タタキ後ナデ	
344	灰原			円筒	5a				にぶい橙(7.5YR 6/4)	褐灰 (7.5YR 5/1)	褐灰 (7.5YR 5/1)	—	—	
345	灰原			円筒	5a				にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	—	—	
346	灰原			円筒	5a				灰 (N 6/1)	灰 (N 6/1)	灰 (N 5/1)	—	—	
347	灰原			円筒	5a				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/4)	橙 (7.5YR 6/4)	—	—	ヘラ記号
348	灰原			円筒	5a				黄灰(2.5Y 6/1)	灰 (5Y 4/1)	灰 (5Y 4/1)	—	—	
349	灰原			円筒	5a				黄灰(2.5Y 5/1)	暗灰黄(2.5Y 5/2)	灰 (5Y 6/1)	—	—	
350	灰原			円筒	5a				にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	○	タタキ後ナデ	基底部タタキが一部突帯に及ぶ
351	灰原			円筒	5a				灰 (N 6/1)	灰 (N 6/1)	灰 (N 6/1)	—	—	
352	灰原			円筒	5a				灰 (N 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	黄灰(2.5Y 4/1)	—	—	
353	灰原			円筒	5b				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
354	灰原			円筒	5b				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 7/8)	○	タタキ後ナデ	
355	灰原			円筒	5d				灰黄褐 (10YR 6/2)	褐灰 (10YR 5/1)	褐灰 (10YR 5/1)	—	—	
356	灰原			円筒	6a				にぶい褐 (7.5YR 6/3)	明赤褐 (2.5Y 5/6)	緑灰 (7.5GYR 5/1)	—	—	
357	灰原			円筒	6a				橙 (5YR 6/6)	橙 (2.5YR 6/8)	灰 (7.5Y 6/1)	—	—	
358	灰原			円筒	6a				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	にぶい黄橙 (7.5YR 7/4)	×	ハケ明瞭	
359	灰原			形象	5a				暗灰黄 (2.5Y 5/2)	黄灰 (2.5Y 4/1)	灰 (7.5Y 5/1)	—	—	倒立
360	灰原			円筒	5a				灰 (5Y 6/1)	灰 (5Y 6/1)	灰 (N 5/1)	—	—	突起が他の円筒埴輪と比べて太い
361	灰原			円筒	5c				にぶい褐 (7.5YR 5/4)	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	にぶい褐 (7.5YR 5/4)	—	—	突起部くつぶれて太い
362	灰原			円筒	5e				褐灰 (10YR 5/1)	灰黄褐(10YR 5/2)	褐灰 (10YR 4/1)	—	—	突起に布目痕残る
363	灰原			円筒	5c				にぶい橙 (7.5YR 5/4)	にぶい黄橙(10YR 5/3)	黄灰 (2.5Y 5/1)	—	—	
364	灰原			円筒	5d				黄灰 (2.5Y 6/1)	褐灰 (10YR 5/1)	褐灰 (10YR 6/1)	—	—	
365	灰原			円筒	5d				灰 (N 5/1)	黄灰 (2.5Y 5/1)	灰 (N 6/1)	—	—	
366	灰原			円筒	5d				橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
367	灰原			円筒	5d				橙 (5YR 7/6)	橙 (10YR 6/2)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	—	—	
368	灰原			円筒	5d				暗灰黄 (2.5Y 5/2)	暗灰黄 (2.5Y 5/1)	褐灰 (10YR 5/1)	—	—	
369	灰原			円筒	5d				褐灰 (10YR 6/1)	褐灰 (10YR 6/1)	褐灰 (10YR 5/1)	—	—	
370	灰原			円筒	5d				灰 (N 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	×	ハケ明瞭	基底面破損、一部ナデ
371	灰原			円筒	5d				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	○	ナデ、内面押圧	
372	灰原			形象	石見型盾				黄灰(2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	—	—	372～374同一個体か
373	灰原			形象	石見型盾				黄灰 (2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	—	—	
374	灰原			形象	石見型盾				黄灰 (2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	—	—	
375	灰原			形象					にぶい黄橙 (7.5YR 6/4)	にぶい黄橙 (7.5YR 6/4)	にぶい黄橙 (7.5YR 6/4)	—	—	縁刻有り
376	灰原			形象					灰黄褐 (10YR 6/2)	橙 (7.5YR 6/6)	オリーブ黄 (5Y 6/8)	—	—	ハケは3と類似
377	灰原			形象					橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	灰黄(2.5Y 7/2)	—	—	風化著しい、突起跡り付け後刺突
378	灰原			形象					にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい黄橙 (7.5YR 6/4)	にぶい黄橙 (7.5YR 6/3)	—	—	人物の腕か
379	灰原			陶棺	蓋				にぶい黄橙 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい橙 (10YR 7/6)	—	—	
380	灰原			陶棺	脚				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	脚と身の接合部分
381	灰原			形象	動物産				黄灰(2.5YR 6/1)	灰褐 (7.5YR 5/2)	灰褐 (7.5YR 6/1)	—	—	腹面一部、復元モデルは平所(鳥船)

埴輪・陶棺観察表④

序号	遺構名	地点	土層	種別	分類	計測値(cm)			色 調			基底部調整		備 考
						口径	底径	器高	外	内	断	有無	痕 跡	
399	上墳墓2			円筒	5c				にぶい黄橙 (10YR 6/3)	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	—	—	風化著しい
400	上墳墓2			円筒	5c				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	内面風化著しい
401	上墳墓2			円筒	5c				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	風化著しい
402	上墳墓2			円筒	5c				にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	—	—	風化著しい
403	上墳墓2			円筒	5c				にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	—	—	
404	上墳墓2			円筒	5c				橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	—	—	風化著しい
405	上墳墓2			円筒	5c				橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 7/8)	橙 (5YR 6/6)	—	—	風化著しい
406	上墳墓2			円筒	5c				にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	○	不明瞭	風化著しい
407	上墳墓2			円筒	5c				橙 (5YR 7/8)	にぶい橙 (5YR 6/4)	橙 (5YR 6/8)	○	タタキ、不明瞭	風化著しい
408	上墳墓2			円筒	5c				灰白(2.5YR 7/1)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	○	タタキ後ナデ	風化著しい
409	上墳墓2			円筒	5c				にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	○	タタキ後ナデ	
410	上墳墓3			陶棺	身(側面)				にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	—	—	風化著しい、残存高 37.7cm、最大幅 57.3cm、残存長 34.4cm
411	上墳墓3			円筒	身(底面)				橙 (7.5YR 7/6)	にぶい橙 (5YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/5)	—	—	脚内指頭圧痕明瞭、最大幅 57.0cm、最大長 59.7cm
412	上墳墓3			円筒	5c			21.5	にぶい橙 (5YR 6/6)	にぶい橙 (5YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	○	タタキ後ナデ	
413	上墳墓3			円筒	5c				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	
414	上墳墓7			円筒	5c	27.7			橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	—	—	
415	上墳墓7			円筒	5c				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
416	上墳墓7			円筒	5c				橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	—	—	
417	上墳墓7			円筒	6a		22.6		橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	×	ハケ明瞭	
418	上墳墓7			円筒	6a		18.2		橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	×	ハケ明瞭	基底部内面押圧痕明瞭
419	上墳墓7			円筒	6a				橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
419	土壌7			陶棺	身				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	—	—	突帯貼り付け
538	平坦面1		検出	円筒	5c				橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/8)	橙 (5YR 6/6)	—	—	
539	平坦面1		検出	陶棺	身				明黄褐 (10YR 7/6)	にぶい橙 (5YR 6/4)	にぶい橙 (5YR 6/4)	—	—	3条波状文

第13表 瓦観察表

番号	種別	調査	出土位置	土層	計測値		色 調				凹 面				凸 面							
					長さ (cm)	幅 (cm)	凹 面		凸 面		断 面		模様	布	タタキ	糸切り	備 考	全周ナデ	格子	縄	押入ナデ	切り込み
389	平瓦		灰原(埴輪)				灰10Y 5/1		灰10Y 6/1		灰10Y 5/1		○	○				○				
427	軒平瓦		窯体内	第2床面	32.5	27.5	浅黄(2.5Y 7/4)		にぶい橙(5YR 6/4)		明黄褐(10YR 7/6)		○	○	○			○	○	○		
428	軒平瓦		窯体内	第2床面	32.5	26.5	灰黄褐(10YR 6/2)		にぶい赤褐(5YR 5/4)		にぶい橙(7.5YR 6/4)		○	○	○			○	○	○		
429	軒平瓦		窯体内	第2床面	31.5	26.5	灰(7.5Y 5/1)		灰(5Y 4/1)		灰白(2.5Y 7/1)		○	○	○	○		○	○	○	粘土接合痕明瞭	
430	軒平瓦		灰原	第4炭層	30.0		灰(5Y 4/1)		灰(5Y 4/1)		にぶい黄(2.5Y 6/4)		○	○	○	○		○	○	○	風化著しい	
431	軒平瓦		灰原	第4炭層			灰黄(2.5Y 7/2)		灰(7.5Y 5/1)		浅黄(2.5Y 7/3)						風化で不明瞭	○	○	○		
432	軒平瓦		灰原	流土			灰(5Y 6/2)		—		灰黄(2.5Y 6/2)		○								残存せず	
433	軒平瓦		灰原	流土			灰(7.5Y 5/1)		—		にぶい黄(2.5YR 6/3)		○								残存せず	
434	軒平瓦		窯体内、灰原	第2床面、第4炭層			—		灰黄(2.5Y 7/2)		灰黄(2.5Y 7/2)						残存せず	○	○	○		
435	軒平瓦		窯体内	第2床面			—		灰(7.5Y 4/1)		灰黄(2.5Y 6/2)						残存せず	○	○	○		
436	軒平瓦		灰原	第4炭層			—		灰黄(2.5Y 6/2)		にぶい黄(2.5YR 6/3)						残存せず	○	○	○		
437	軒平瓦		窯体内	第2床面			—		灰(7.5Y 4/1)		にぶい黄橙(10YR 7/4)						残存せず	○	○	○		
438	軒平瓦		窯体内	第2床面			—		灰(7.5Y 4/1)		浅黄(5Y 7/3)						残存せず	○	○	○		
439	軒平瓦		灰原	第4炭層			—		—		浅黄(7.5Y 8/3)						残存せず				残存せず	
440	軒平瓦		灰原	流土			浅黄(2.5Y 7/4)		—		にぶい橙(7.5YR 6/4)						残存せず				残存せず	
441	平瓦		窯体内	第2床面	31.3	25.7	にぶい黄橙(10YR 7/4)		明黄褐(10YR 7/6)		にぶい橙(7.5YR 7/6)		○	○				○	○			
442	平瓦		灰原	第4炭層		25.7	灰白(5Y 7/1)		灰白(5Y 7/1)		灰白(5Y 7/1)		○	○	○			○	○			
443	平瓦		灰原	第4炭層		23.3	灰(2.5Y 7/1)		浅黄(2.5Y 7/3)		灰白(2.5Y 7/1)		○	○	○	○	糸切り明瞭	○	○			
444	平瓦		灰原	第4炭層		24.2	オリーブ灰(5GY 6/1)		青灰(5B 6/1)		灰(10Y 6/1)		○	○	○	○		○	○			
445	平瓦		灰原	第4炭層		26.2	灰黄(2.5Y 7/2)		灰黄(2.5Y 7/3)		灰白(2.5Y 7/1)		○	○	○			○	○			
446	平瓦		灰原	第4炭層			青灰(5B 6/1)		青灰(5B 6/1)		青灰(5B 6/1)		○	○	○			○	○			
447	平瓦	3号窯	灰原	第4炭層			灰黄(2.5Y 6/2)		灰黄(2.5Y 6/2)		灰黄(2.5Y 6/2)		○	○	○	○	側面布紋	○	○			
448	平瓦		灰原	造成土			橙(7.5YR 7/6)		橙(7.5YR 7/6)		橙(7.5YR 7/6)		○	○	○							
449	平瓦		灰原	造成土			橙(7.5YR 7/6)		橙(7.5YR 7/6)		橙(7.5YR 7/6)		○	○								
450	平瓦		灰原	第2炭層、造成土			橙(5YR 6/8)		橙(5YR 6/8)		橙(5YR 6/8)		○	○								
451	平瓦		灰原	第4炭層		29.1	橙(7.5YR 6/6)		にぶい黄橙(10YR 7/4)		にぶい橙(7.5YR 6/4)		○	○				○			手の痕跡明瞭	
452	平瓦		灰原	流土			橙(7.5YR 6/6)		橙(7.5YR 6/6)		橙(7.5YR 6/6)		○	○				○				
453	平瓦		灰原	流土			橙(10YR 7/4)		にぶい黄橙(7.5YR 7/4)		にぶい黄橙(7.5YR 7/4)		○	○				○			調整不明瞭	
454	平瓦		灰原	第2炭層			灰白(7.5Y 7/1)		灰(7.5Y 5/1)		灰(10Y 5/1)		○	○								
455	平瓦		灰原	第4炭層			にぶい橙(7.5YR 6/4)		にぶい橙(7.5YR 6/4)		にぶい橙(7.5YR 6/4)		○	○				割落して不明瞭	○			
456	平瓦		灰原	第4炭層			にぶい黄橙(10YR 7/4)		にぶい黄橙(10YR 7/4)		にぶい黄橙(10YR 7/4)		○	○							線刻	
457	丸瓦		灰原	第4炭層	36.3	14.1	にぶい黄橙(10YR 7/4)		にぶい黄(2.5Y 6/3)		にぶい黄橙(10YR 7/3)		○	○					○			
458	丸瓦		灰原	第4炭層		15.1	灰(N 4/)		灰(N 4/)		灰(N 4/)		○	○	○				○			
459	丸瓦		窯体内、灰原	第2炭層、第4炭層		12.8	にぶい黄橙(10YR 7/4)		浅黄(2.5Y 7/4)		橙(7.5YR 7/6)		○						○			
460	丸瓦		灰原	第4炭層		12.3	灰(N 5/)		灰(7.5Y 6/1)		灰(N 5/)		○		○				○		舌みが著しい	
461	丸瓦		灰原	造成土			橙(5YR 6/6)		橙(5YR 6/6)		橙(5YR 6/6)			○					○			
462	平瓦		窯体内	第1床面			灰白(2.5Y 7/1)		灰白(2.5Y 7/1)		灰白(2.5Y 7/1)		○	○					○			
463	平瓦		窯体内	第1床面			灰(7.5Y 6/1)		灰白(10Y 7/1)		灰(7.5Y 6/1)		○	○					○			
464	平瓦		窯体内	第1床面			灰黄褐(10Y 6/2)		灰黄褐(10Y 6/2)		灰黄褐(10Y 6/2)		○	○	○			○				
465	平瓦		窯体内	第1床面			灰白(10Y 7/1)		灰白(10Y 7/1)		暗灰(N 3/)		○	○				○				
466	平瓦		窯体内	第1床面			灰白(5Y 7/1)		灰白(10Y 7/1)		灰白(10Y 7/1)		○	○				○				
467	平瓦		窯体内	第1床面			灰黄(2.5Y 6/2)		灰黄(2.5Y 6/2)		灰黄(2.5Y 6/2)		○	○				○				
468	平瓦		窯体内	第1床面			灰白(10Y 8/1)		灰(7.5Y 6/1)		灰(N 5/)		○	○				○				

第14表 石器観察表

番号	種 別	遺構名	地点	土層	計 測 値				石 材	備 考
					最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)		
S1	砥石	段状遺構群1	変遷1	土層	43.5	39.5	12.8	38.93	流紋岩	
S2	磨製石包丁	段状遺構群1		検出	89.0	38.0	5.5	29.54	頁岩	両側穿孔
S3	スクレイパー	段状遺構群1		上層	67.5	52.0	8.5	24.31	サヌカイト	
S4	石鏃	段状遺構群2	壁体溝	5	35.5	18.5	5.5	3.60	サヌカイト	
S5	磨製石斧	段状遺構群3	南端	上層	60.0	42.5	16.0	58.30	流紋岩	火を受けた可能性
S6	石鏃	段状遺構群3	南端	埋土	35.5	20.0	5.0	3.21	サヌカイト	先端欠損
S7	石鏃	段状遺構群3	変遷6	検出	20.0	13.0	4.0	0.89	サヌカイト	
S8	磨製石包丁	段状遺構群3	変遷7	上層	18.0	15.5	3.0	0.86	粘板岩	破片、ケイ酸付着
S9	石鏃	段状遺構群4	CD EF	埋土	35.0	15.0	3.5	2.04	サヌカイト	先端欠損
S10	磨製石包丁	段状遺構群5	上段	床面	66.0	60.5	10.5	74.55	流紋岩	使用のため刃部欠損、穿孔未通過
S11	砥石	段状遺構群6	南半	床面	96.8	57.5	26.7	240.05	流紋岩	
S12	石鏃	段状遺構群6	南半	床面	26.5	16.5	4.0	1.82	サヌカイト	
S13	R・F	段状遺構群6	南半	床面	80.0	79.0	18.0	134.64	サヌカイト	
S14	磨製石包丁	段状遺構群6		埋土	103.0	34.0	7.5	35.31	粘板岩	両側穿孔
S15	打製石包丁	段状遺構群7		2	38.5	38.0	8.0	10.40	サヌカイト	破片、若しケイ酸付着
S16	打製石鏃	段状遺構群7	南半	床面	110.0	67.0	22.5	167.40	流紋岩	石包丁の未製品の可能性あり
S17	スクレイパー	段状遺構群7	北半	床面	21.0	26.0	5.3	3.13	サヌカイト	
S18	砥石	段状遺構群7		床面	166.0	96.7	33.3	616.90	流紋岩	
S19	砥石	段状遺構群7		1	138.0	94.5	51.0	778.43	流紋岩	
S20	スクレイパー	段状遺構群7		検出	49.0	46.0	7.0	16.60	サヌカイト	
S21	石鏃	段状遺構群8		埋土	22.0	4.0	4.0	0.74	サヌカイト	
S22	石鏃	竪穴住居1		1	17.5	14.5	3.3	0.75	サヌカイト	先端欠損
S23	磨製石包丁	竪穴住居2		埋土	104.0	43.0	11.0	65.61	流紋岩	両側穿孔、欠損後も使用
S24	磨製石包丁	竪穴住居2	変遷5	床面	73.0	48.0	9.5	42.11	流紋岩	若干摩滅
S25	打製石包丁	竪穴住居2	変遷1	床面	112.0	50.0	11.0	62.48	サヌカイト	
S26	打製石包丁	竪穴住居2	変遷1	床面	75.5	45.5	10.0	44.98	サヌカイト	風化進行のため白色化
S27	スクレイパー	竪穴住居2		上層	72.5	53.5	9.0	33.71	サヌカイト	
S28	フレイク	竪穴住居2	変遷5	床面	87.5	63.5	10.5	60.92	サヌカイト	
S29	石鏃	竪穴住居2	変遷5	床面	28.5	12.0	3.0	1.30	サヌカイト	先端欠損
S30	石鏃	竪穴住居2		検出	32.5	15.5	3.0	1.53	サヌカイト	
S31	石鏃	竪穴住居2		検出	32.0	16.5	4.5	2.17	サヌカイト	
S32	石鏃	竪穴住居2		埋土	29.0	11.0	5.0	1.42	サヌカイト	
S33	石鏃	竪穴住居2		上層	26.5	15.0	4.0	1.54	サヌカイト	先端欠損
S34	石鏃	竪穴住居2	P1	16	21.5	13.5	3.0	0.81	サヌカイト	先端欠損
S35	石鏃	竪穴住居2	変遷5	床面	19.0	12.0	3.5	0.67	サヌカイト	
S36	石鏃	竪穴住居2		埋土	22.5	17.0	4.0	1.74	サヌカイト	
S37	石鏃	竪穴住居2	変遷5	床面	29.0	12.0	3.6	1.43	サヌカイト	
S38	石鏃	竪穴住居2	変遷5	床面	32.5	13.5	4.0	2.07	サヌカイト	
S39	加工斧	竪穴住居2	変遷5	床面	27.0	18.5	3.0	1.96	粘板岩	磨製石包丁の転用か
S40	柱状片刃石斧	竪穴住居2	変遷5	床面	145.5	22.0	36.0	226.21	珒岩	使用のため先端摩滅
S41	石鏃	竪穴住居2	変遷5	床面	59.0	66.3	43.9	230.16	珒岩	
S42	砥石	竪穴住居2	変遷5	床面	64.9	22.0	17.7	37.91	流紋岩	全面使用
S43	管玉	竪穴住居2	変遷5	床面	12.0	1.8	4.0	0.13	緑色凝灰岩	
S44	石鏃	灰原(埴輪)			14.0	12.5	2.8	0.28	サヌカイト	風化が進行し、調整不明瞭
S45	砥石	3号窯	灰原	第2炭層	230.0	148.0	66.0	3,100	流紋岩	
S46	磨製石包丁	遺構に伴わない	L区	表土	78.5	44.0	8.0	42.37	頁岩	両側穿孔
S47	スクレイパー	遺構に伴わない	M区	表土	69.5	34.5	12.0	25.36	サヌカイト	風化のため調整不明瞭
S48	石鏃	遺構に伴わない	V区	表土	30.5	17.0	4.8	1.97	サヌカイト	
S49	砥石	遺構に伴わない	F区	表土	79.6	60.1	18.7	140.92	珒岩	
S50	磨製石斧	遺構に伴わない	E区	表採	151.0	57.0	36.0	452.91	珒岩	先端欠損
S51	砥石	遺構に伴わない	E区	表採	210.0	134.0	105.0	2,600	流紋岩	埴輪集積地近くで表採

第15表 鉄器観察表

番号	器 種	遺 構	地点	土 層	計 測 値				材質	時 期	備 考
					現存長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)			
M1	鐵鉋	段状遺構群3	土壌1		52.1	14.1	2.2	9.12	鉄	弥生時代	
M2	鐵鉋	段状遺構群7		床面	43.5	16.8	2.4	5.25	鉄	弥生時代	
M3	鉄鏝	土壌墓2			66.85	15.4	1.4	11.59	鉄	古墳時代	舌は確認できない
M4	鉄鏝	土壌墓2			59.9	13.6	1.2	12.41	鉄	古墳時代	舌は確認できない、下端部山形に切る
M5	鉄鏝	土壌墓2			50.8	16.1	2.0	13.66	鉄	古墳時代	舌は確認できない
M6	耳環	土壌墓2			(外径)28.45	(内径)15.7	8.0	14.82	銅	古墳時代	
M7	耳環	土壌墓2			(外径)28.0	(内径)10.55	7.9	13.78	銅	古墳時代	
M8	釘	3号窯	灰原	第4炭層	94.35	8.1	6.8	24.72	鉄	古代	
M9	釘	3号窯	灰原	第4炭層	125.3	9.55	7.1	32.45	鉄	古代	
M10	釘	3号窯	灰原	第4炭層	78.7	7.4	4.4	10.56	鉄	古代	
M11	釘	3号窯	灰原	第4炭層	58.3	5.1	4.6	7.24	鉄	古代	
M12	釘	3号窯	灰原	第4炭層	45.7	3.9	3.9	2.76	鉄	古代	
M13	釘	3号窯	灰原	第4炭層	54.2	4.3	4.1	6.30	鉄	古代	
M14	釘	3号窯	灰原	第4炭層	66.35	5.5	3.6	6.54	鉄	古代	
M15	釘	3号窯	灰原	第4炭層	88.8	5.67	3.5	7.74	鉄	古代	
M16	釘	3号窯	灰原	第4炭層	31.8	6.4	5.5	2.85	鉄	古代	
M17	釘	3号窯	灰原	造成土	30.2	6.1	5.4	2.04	鉄	古代	
M18	釘	3号窯	灰原	第4炭層	39.2	4.3	4.2	3.19	鉄	古代	
M19	釘	3号窯	灰原	第4炭層	32.6	4.9	4.6	2.47	鉄	古代	
M20	釘	3号窯	灰原	第4炭層	37.15	4.25	3.1	2.86	鉄	古代	
M21	鉄片	3号窯	灰原	第4炭層	24.6	12.3	3.5	3.29	鉄	古代	
M22	角棒状鉄片	3号窯	灰原	第4炭層	41.8	10.0	7.4	13.0	鉄	古代	
M23	角棒状鉄片	3号窯	第2床面	竪体内床面	59.0	6.6	5.8	7.95	鉄	古代	中空

第4章 谷の前遺跡

第1節 発掘調査の概要

1 調査範囲と調査方法

本遺跡の調査の範囲は、道路用地幅全体ではなく、右図のように極めて変形している。確認調査の結果からこのような形状に結果的に成ったものである。

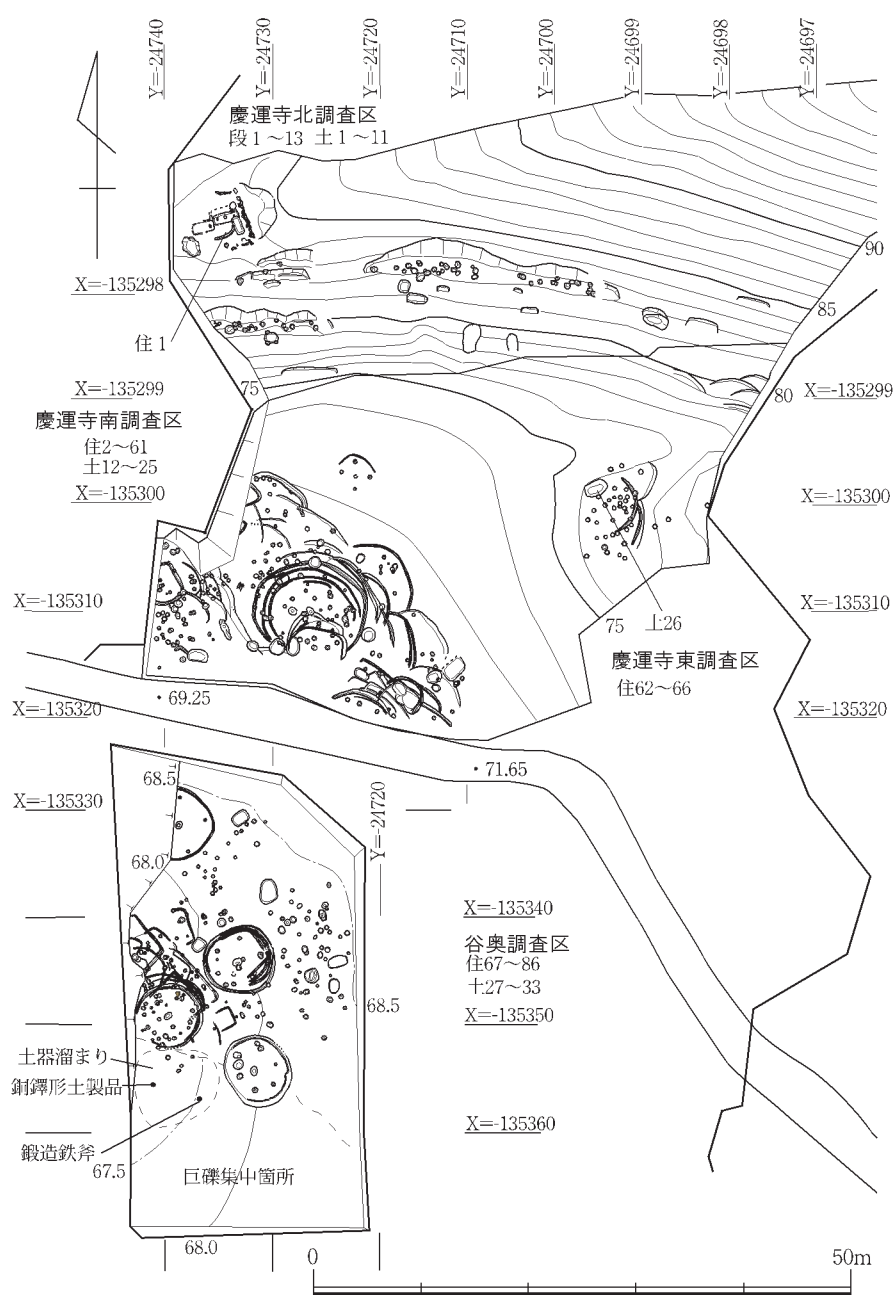
本遺跡の調査は慶運寺東調査区からはじまり、慶運寺南調査区、谷奥調査区、最後に慶運寺北調査区の順に実施した。

慶運寺南調査区については中世までの堆積層を重機で取り除いた。

2 調査成果の概要

慶運寺北調査区には、墳丘墓・段状遺構・土塋など30遺構、慶運寺東調査区には、竪穴住居・土塋など9遺構、慶運寺南調査区には、竪穴住居・土塋など70遺構、谷奥調査区には、竪穴住居・土塋など27遺構、合計136遺構を検出している。

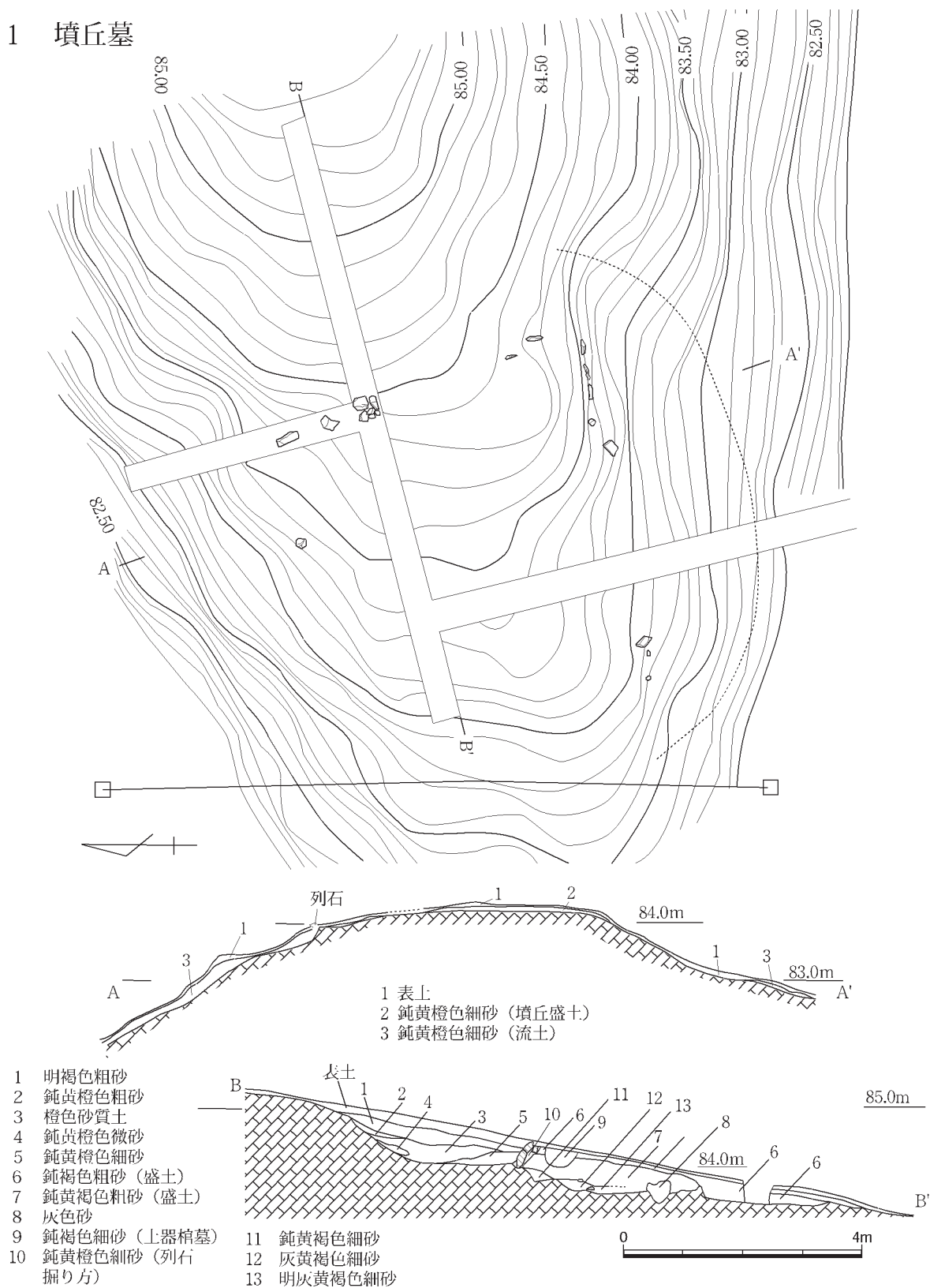
遺物は、収載した土器447点・鉄器8点・石器92点などである。(浅倉)



第144図 谷の前遺跡 遺構配置 (1/700)

第2節 弥生時代の遺構・遺物

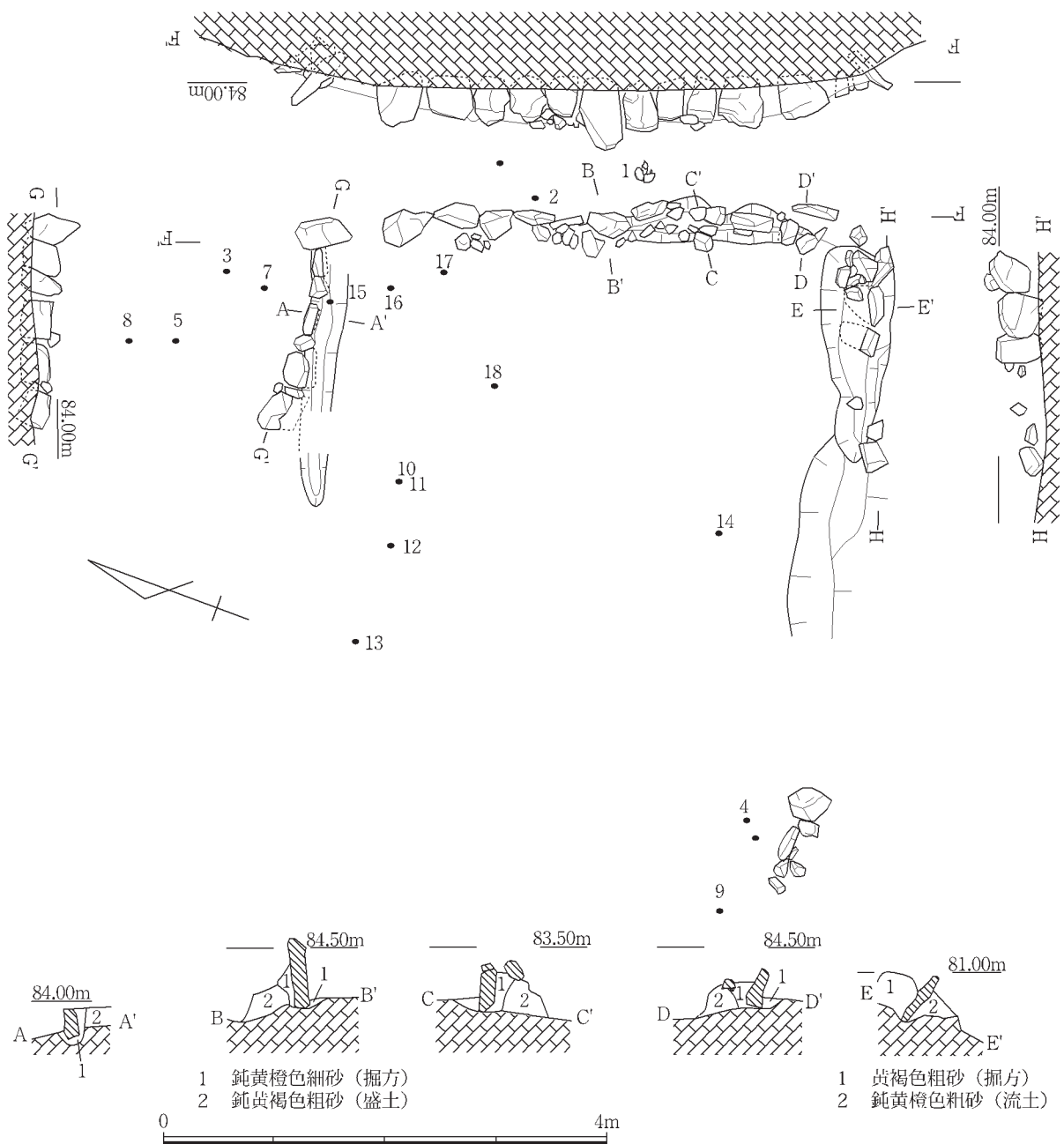
1 墳丘墓



墳丘墓は、幅の狭い丘陵鞍部の調査区東端に位置する。現況地形では、第145図の85mの等高線よりも東側が鞍部の幅が狭く傾斜がきつくなっている。これとは反対に、墳丘墓が位置する西側は鞍部の傾斜が緩くなり、やや広さを増している。丘陵東側は表土直下で花崗岩の基盤層となる。そこまでの厚さは、表土となる腐葉土を除去した程度である。

第145図は、立木伐採後の表土面におけるものである。この段階では、南東部分が抉れ、そこから西方向に直線的な等高線となる。さらに、一部に露出した状態で列石が認められている。南側に破線で示した部分は、平坦面が認められたが後世の山道と思考される。

溝は、西側に認められるが、第145図B－B'上層断面に示すように明確な溝としては把握できなかった。このことは、先の図に見られるように列石側の基盤層に手加えられ、立ち上がりが認められ



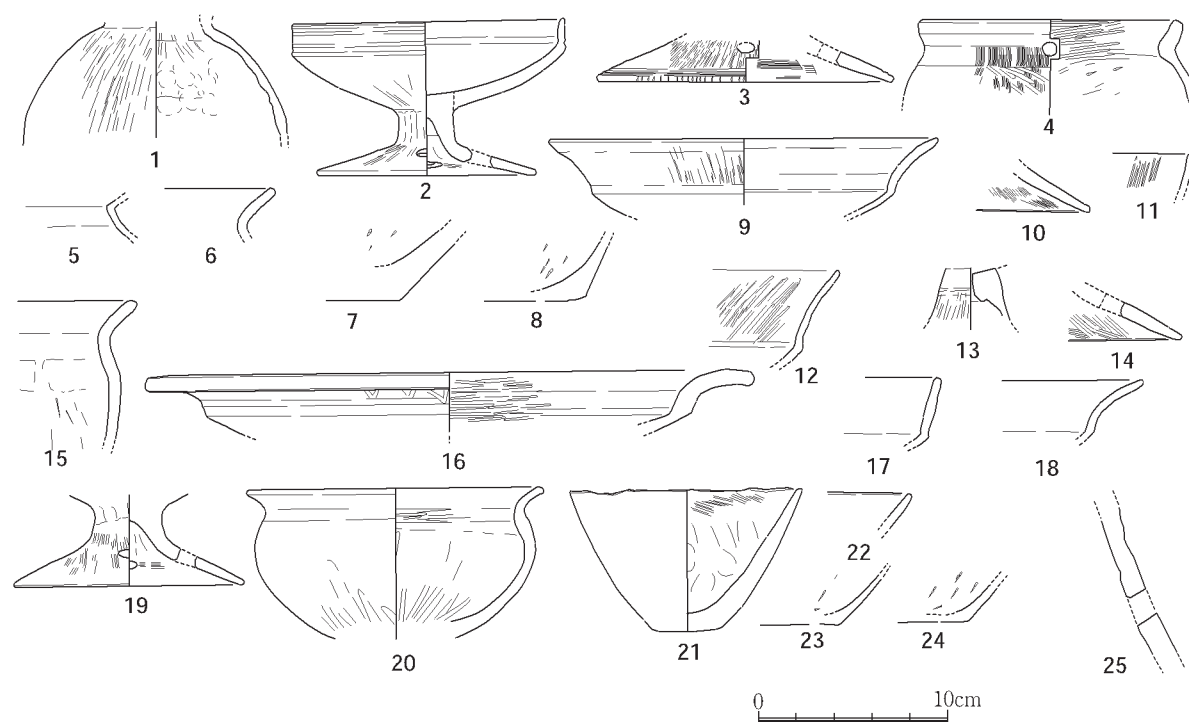
第146図 墳丘墓列石 (1/60)

ない。このことから、東辺に列石を据えることと、墳丘をきわだたせることで平坦部の形成が窺われるのである。

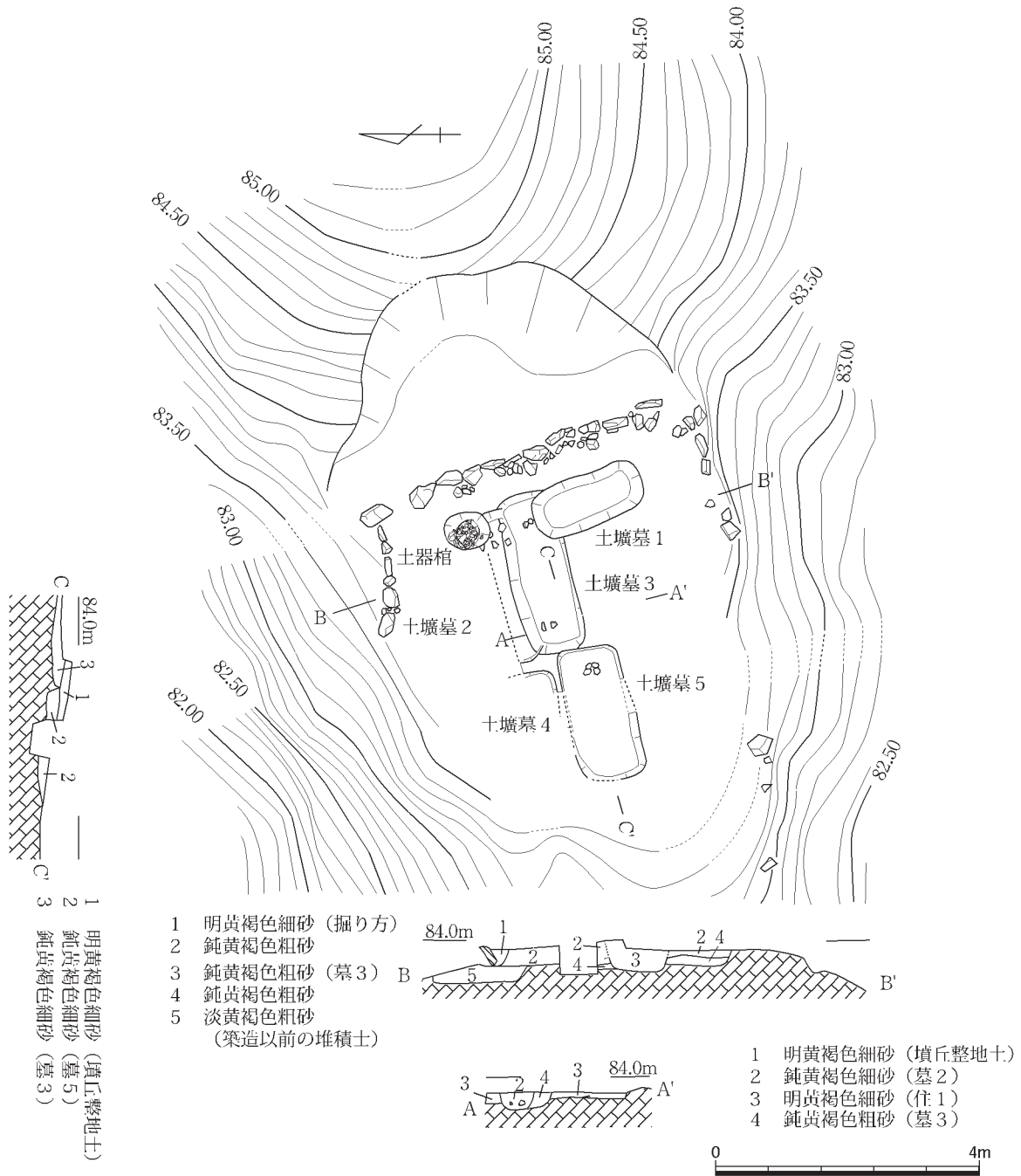
列石は、西辺を除いて確認されている。列石の遺存は、東辺がほぼ全容が遺り、北辺は東よりに一部、そして南辺は中央部分を除き認められた。この列石からした墳丘墓の規模は、南北510cm、東西610cmを測る。石列の敷設は、第146図に示すように、一部において溝が認められている。石は、盛り土から掘り込み、墳丘側に立てた状態で据えられているのが確認されている。石列の墳丘外側については、第146図E-E'で堆積土が認められる。しかしながら、この堆積土は二次的な流土であり、元々他の石と同様に墳丘外側には土が存在しなかったことが推測される。このようなことから、石列は、墳丘側に立てて配置されていたことが理解される。

墳丘は、第145図に示したB-B'土層断面第6と7層の2層が認められている。墳丘と盛り土の関係は、先に記したように盛り土をした後、それを掘り込んでいることを示した。しかしながら、盛り土の高さについては28cmほどを測るが、第146図に示したF-F'土層断面のように盛り土が石列よりも低くなり、石列が頭を出している状態となる。この状態は、墳丘墓確認時点ですでに石列が表面にでていた状態で認められ、露出部分は表面の風化の度合いが強く、墳丘中にある部分と明瞭に識別できた。このことから、造成時において墳丘が石列より低くなっていた可能性も考慮される。

出土遺物は、第147図に示すように1～11が墳丘内と列石外側周辺で検出され、出土位置が明らかなものである。12と15は列石付近から、13は東側平坦面から、14は第145図B-B'の土手から等の検出である。さらに、17と18、22～25は、遺構検出作業中に認められた破片である。この他の、16と19～21の遺物は、墳丘下に検出された竪穴住居に伴うと思われる。東側列石外の平坦面から検出されたのが1～3である。1は壺の破片で、外面にタテヘラミガキ、内面には押圧痕が認められる。2は、当該遺構で唯一原位置に置かれた状態で検出、復元された。口径14.1cm、脚部径11.4cm、器高8.4cmを測



第147図 墳丘墓出土遺物 (1/4)



第148図 墳丘墓埋葬遺構 (1/100)

る高杯である。3は、高杯の裾部の破片である。端部近くに2条の沈線文と端面には、刻み目を施している。

埋葬遺構は、土壙墓5基と土器棺1基である。土器棺は、第145図のB-B'土層断面で、盛り土最上面から掘り込まれていることが確認されている。土壙墓1は、墳丘中に掘り込まれているが、他は基盤層まで掘り下げている。しかしながら、その掘り込みは浅く、平面の検出においても基盤層近くであった。土壙の掘り込みは、墳丘中と考えられるが、第148図B-B'土層断面に見られる土壙墓3の掘り込みは破線で示すように明確に把握できなかった。

土壙墓 1 (第149図)

土壙墓 1 は、東石列と平行し、土壙墓 3 と重複している。規模は、 176×80 cm で深さ 25cm を測る。土壙墓 1 と土壙墓 3 は、前者が後者の検出面よりも 18cm ほど上面で認められている。土壙は、各コーナー部分が丸くなり、壁面から底面に移行するに従い丸みを形成させている。土壙の埋土は、2 層の形状が認められ、それ以外の土層は認められなかった。また、木棺痕跡を窺わせる土層内容または、小口溝については確認できなかった。

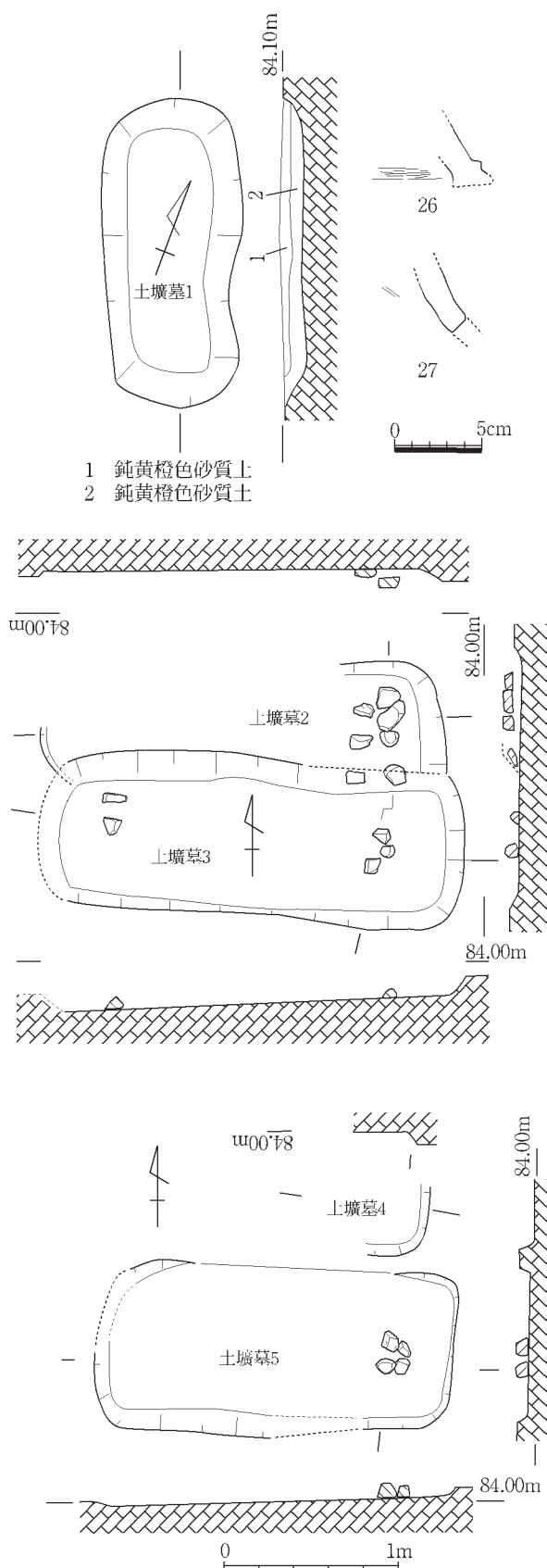
出土遺物は、26 と 27 が埋土中から検出されている。26 は、器台脚部の小片である。外面には突帯が認められ、端部は広がる内容を示している。27 は、器台裾部の小片で、円形の透かし穴が認められる。

土壙墓 2 (第149図)

土壙墓 2 は、東西方向の石列に平行し、土壙墓 3、土器棺と重複している。北辺から北西隅部分は、B-B' のトレンチにかかり、南辺は土壙墓 3 に切られている。このようなことから、土壙墓 2 は西辺から北東コーナーにかけてと南西コーナー部分の一部が検出されている。遺存している規模は、 $231 \times (60)$ cm で深さ 7 cm 前後を測る。土壙埋土は、鈍い黄褐色細砂の 1 層のみ認められている。土壙内には、東短辺側に 7 個の礫が認められた。礫は、大きいもので 19×10 cm、小さいもので 11×9 cm を測る。これらの石は、一部に並べた状態で検出された。西側については、断面観察のトレンチにおいて確認していたが、崩落のため作図はできなかった。

土壙墓 3 (第149図)

土壙墓 3 は、東西方向の石列に平行し、土壙墓 2 と北辺で土壙墓 5 とは西辺で重



第149図 土壙墓 1～5 (1/40)・出土遺物 (1/4)

複している。重複関係は、土壙墓2を切り土壙墓5には切られている。規模は、 $244 \times 90\text{cm}$ で深さ10cm前後を測る。土壙埋土は、鈍い黄褐色細砂である。土壙内には、東短辺側に3個と西短辺側には2個の礫が認められた。

土壙墓4（第149図）

土壙墓4は、東西方向の石列に平行し、土壙墓5とも平行して検出されている。しかしながら、当該土壙墓は第145図に示した南北と東西のトレンチのために南東隅部分が検出されたのである。

土壙墓5（第149図）

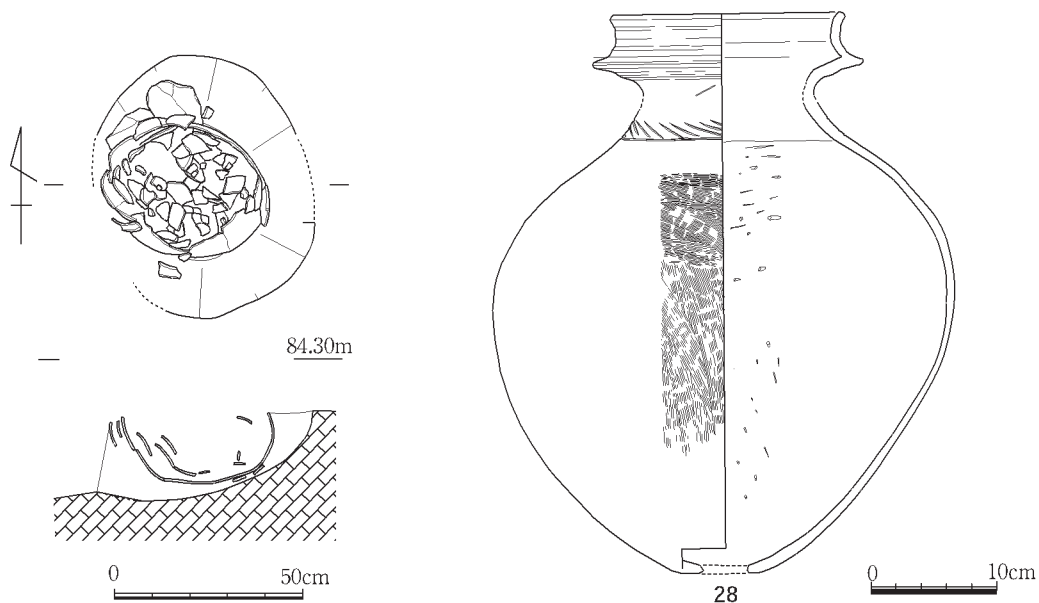
土壙墓5は、東西方向の石列に平行し、土壙墓4と平行して検出されている。規模は、 $206 \times (100)\text{cm}$ で深さ7cm前後を測る。土壙埋土は、鈍い黄褐色細砂である。東短辺側には、10cm前後の4個の礫が認められたが、西短辺側は検出の壁の立ち上がりがわずかに確認できたことから、削平による影響が考えられる。

土器棺（第150図）

土器棺は、列石の北東隅よりの土壙墓2の北東隅部分と重複して位置する。規模は、 $66 \times 55\text{cm}$ で深さ24cmを測り、平面形態は円形を示す掘り込みの中に検出された。土器棺は、第145図B－B'土層断面図の第9層が当該遺構に相当することから、墳丘中から掘り込まれていることが理解される。

棺に使用された土器は、28の壺である。壺は、土壙掘り方の短軸方向に横向きに据えられ、北側に礫を置き安定させている。口縁部の位置は、西側にあると思われる。土器の復元作業では、頸部との接合面が認められないことから、口縁部を意識的に欠いたことが窺われる。この口縁部が、どのような状態であったかについて、先に記したように詳細は不詳である。しかしながら、口縁部破片が、頸部との接合面が見出されなかったことから判断して、蓋と類似するような用い方を想定されることが許されるであろうか。

壺は、口径18cm、器高（45）cmを測る。底部には、焼成前の穿孔が認められる。文様は、頸部に認められるが、先に記したように接合点がないことから詳細は不詳である。しかし、肩部よりには直線文と右下がりの斜線がヘラ描きされ、口縁部側には左下がりのヘラ描きが認められている。（下澤）



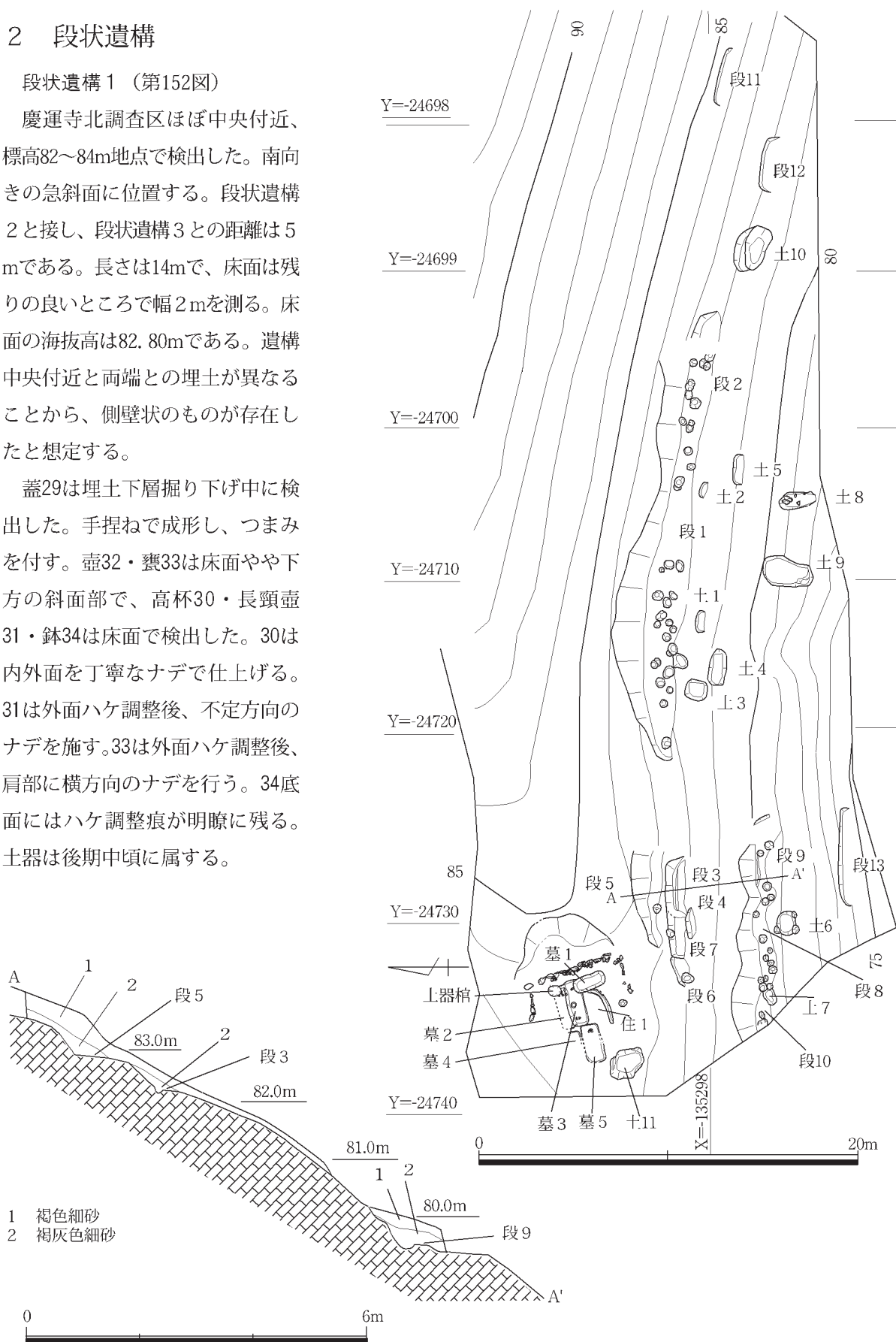
第150図 土器棺（1/20）・出土遺物（1/6）

2 段状遺構

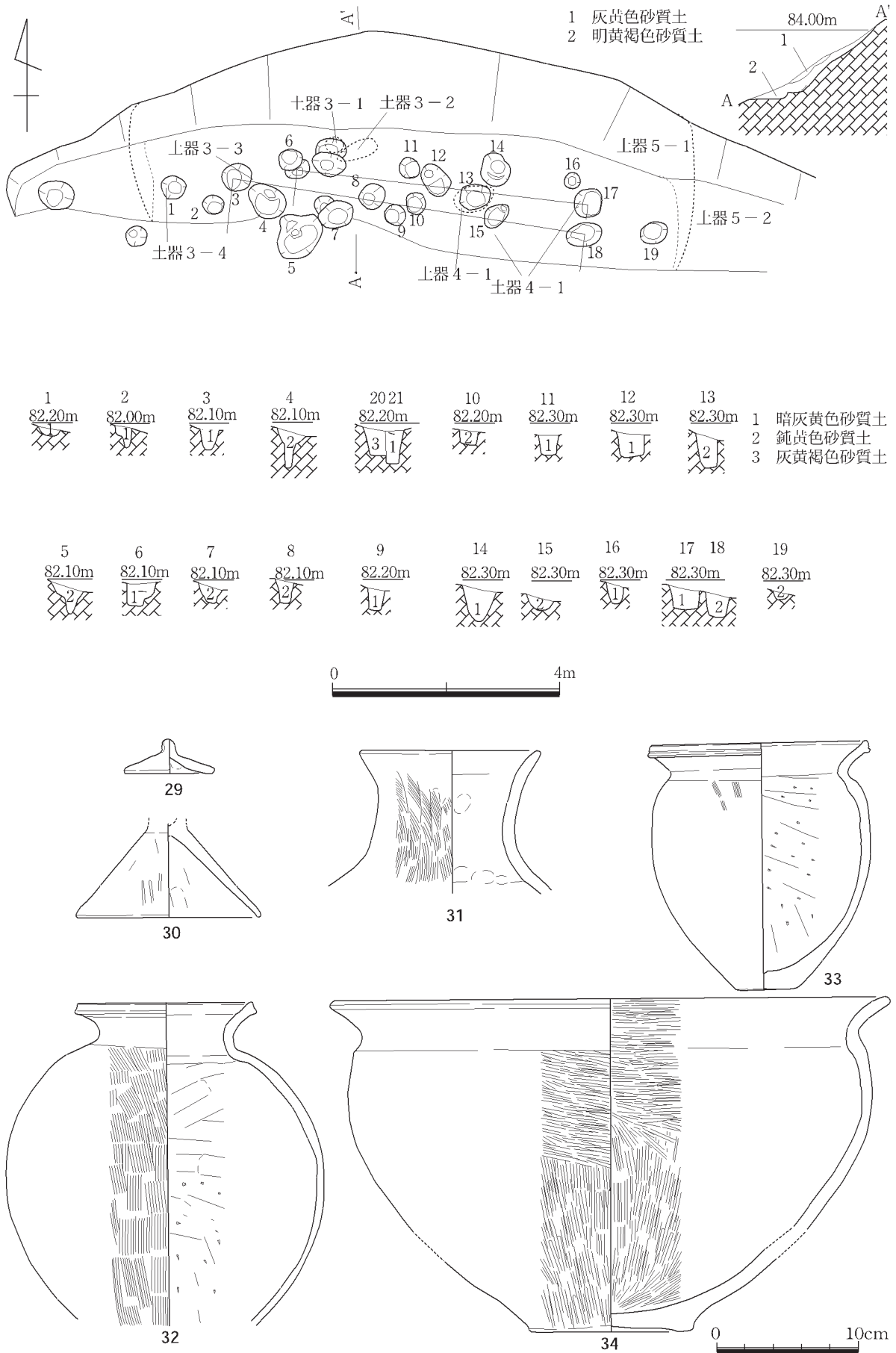
段状遺構 1（第152図）

慶運寺北調査区ほぼ中央付近、標高82～84m地点で検出した。南向きの急斜面に位置する。段状遺構2と接し、段状遺構3との距離は5mである。長さは14mで、床面は残りの良いところで幅2mを測る。床面の海拔高は82.80mである。遺構中央付近と両端との埋土が異なることから、側壁状のものが存在したと想定する。

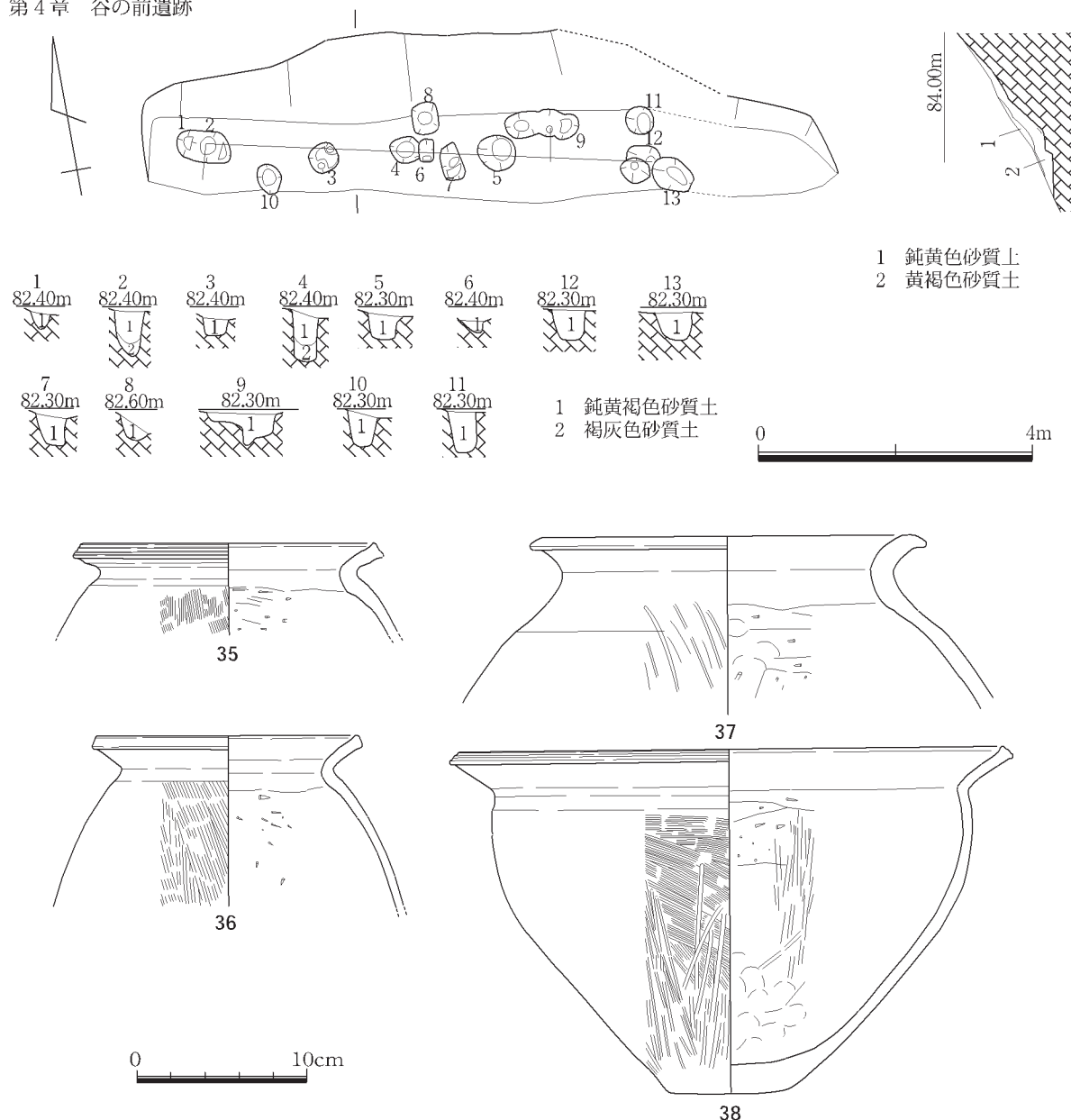
蓋29は埋土下層掘り下げ中に検出した。手捏ねで成形し、つまみを付す。壺32・甕33は床面やや下方の斜面部で、高杯30・長頸壺31・鉢34は床面で検出した。30は内外面を丁寧なナデで仕上げる。31は外面ハケ調整後、不定方向のナデを施す。33は外面ハケ調整後、肩部に横方向のナデを行う。34底面にはハケ調整痕が明瞭に残る。土器は後期中頃に属する。



第151図 慶運寺北調査区 遺構配置 (1/300)・断面 (1/100)



第152図 段状遺構1 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第153図 段状遺構2 (1/100)・出土遺物 (1/4)

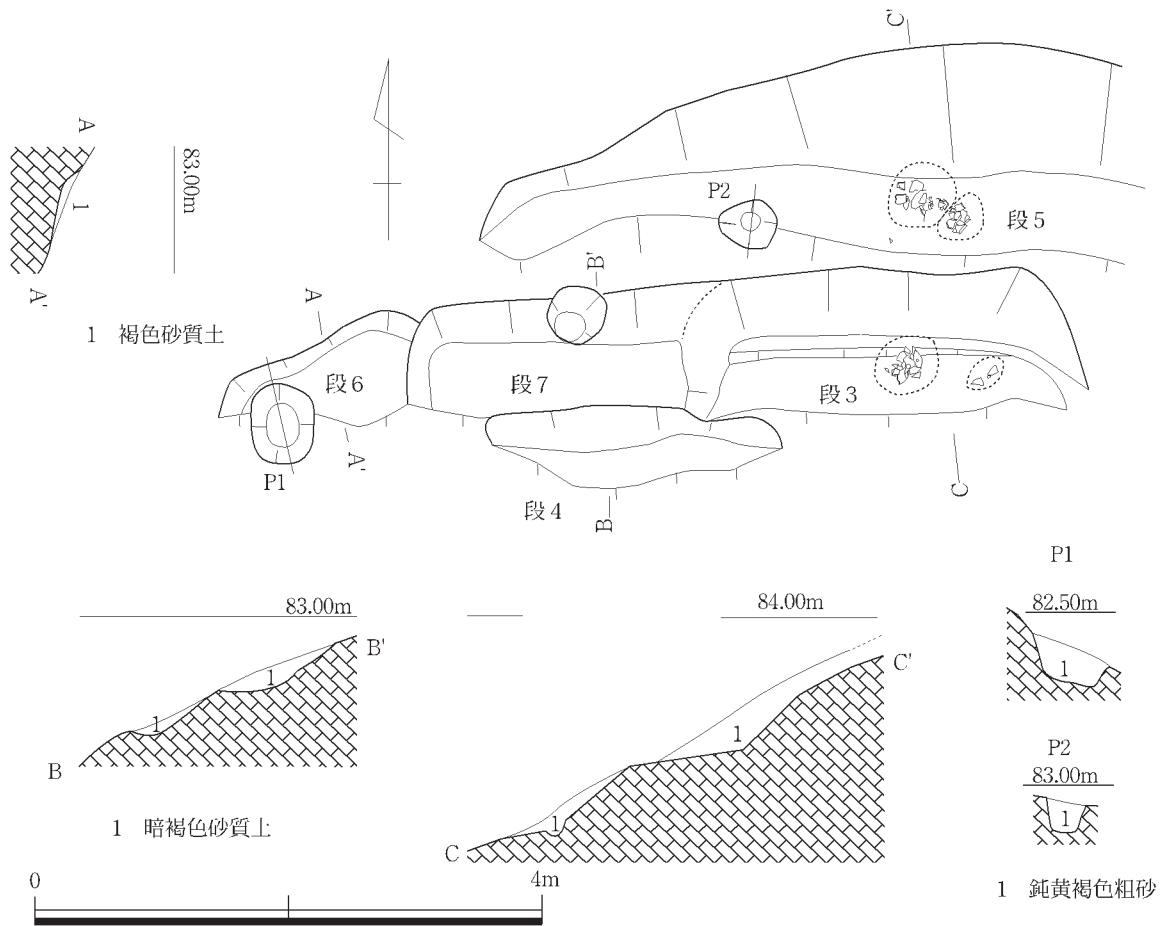
段状遺構2 (第153図)

慶運寺北調査区ほぼ中央付近、標高82～84m地点で検出した。南向きの急斜面に位置する。段状遺構1と接し、段状遺構12との距離は6mである。長さは10mで、床面は残りの良いところで幅1.5mを測る。床面の海拔高は82.40mである。段状遺構1と同じく遺構中央付近と両端との埋土が異なることから、側壁状のものが存在したと想定する。段状遺構1との前後関係は不明である。

甕35は第2層掘削中に検出した。内外面橙色を呈するが、断面中央付近は黒色である。甕36はP11上面で、壺37はP10上面で、鉢38は床面で検出した。すべて内面のヘラケズリが頸部付近までおよぶ。38は内面丁寧なミガキで平滑に仕上げる。土器は後期中頃に属する。(重根)

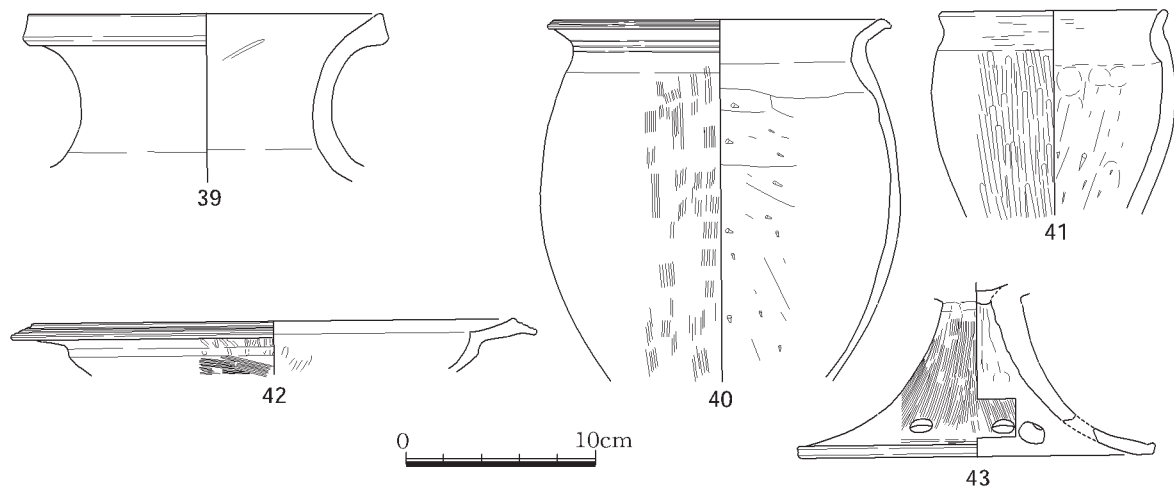
段状遺構3 (第154図)

段状遺構3は、段状遺構5の下方に位置し、段状遺構7と重複している。規模は、316×115cmを測り、鋸状に検出された。壁体溝が検出されたのみである。段状遺構7との関係は、当該遺構に切られている。出土遺物は、39～43である。39は壺で、口縁端部を肥厚させる。40と41は、内面ヘラケズリ



第154図 段状遺構3～7 (1/60)

を肩部まで施している。42と43は高杯で、42は杯端部が外方へ拡張し、端部が斜め下方に肥厚する。その端面には、凹線が施されている。脚部43は、裾部を大きく広げる。



第155図 段状遺構3 出土遺物 (1/4)

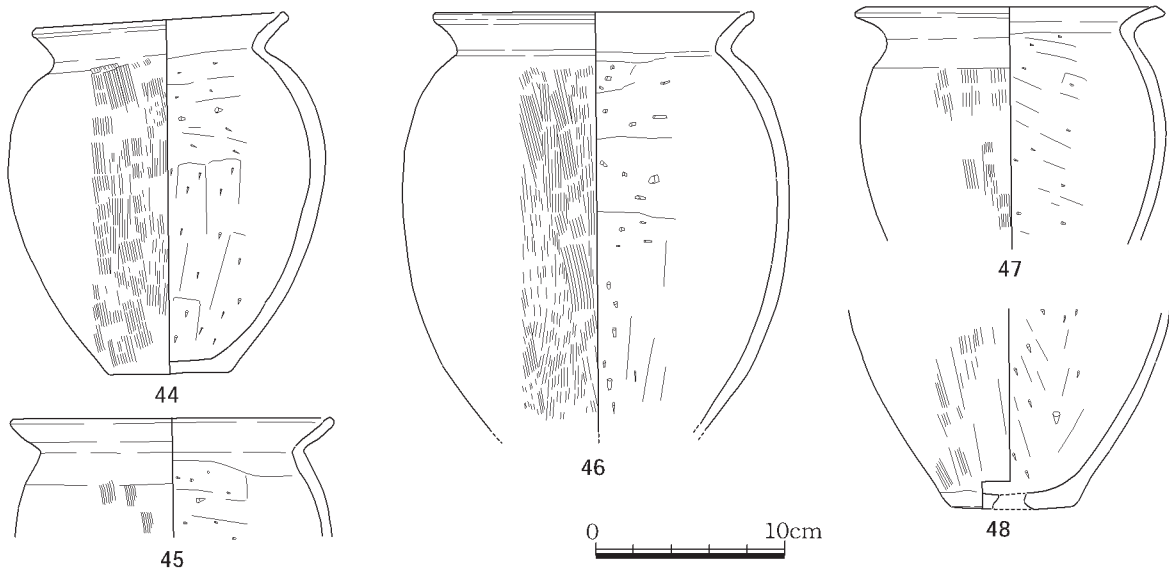
段状遺構4 (第154図)

段状遺構4は、段状遺構3と7の重複部分の下方に位置する。遺存の規模は、267×75cmで、壁の高さは25cmほどである。壁体溝、柱穴などは、認められなかった。重複する段状遺構との前後関係は、把握することができなかった。

段状遺構5（第154・156図）

段状遺構5は、墳丘墓の南東下方に位置する。規模は、520×64cmを測るが、東側の流失が著しく、作図できなかった。壁体溝は認められなかったが、ピットを検出している。このピットが柱穴として用いられたと判断できなかった。

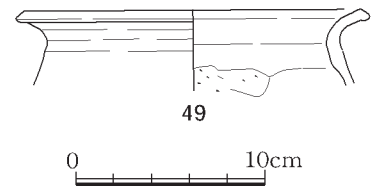
出土遺物は、44～48のいずれも甕である。45は、口縁部に稜線を形成させる。47は、頸部が「く」の字状に屈曲し、端部をやや肥厚気味にさせる。いずれも外面調整はハケ、内面は頸部までヘラケズリを施している。48は、底部に焼成後の穿孔がなされている。



第156図 段状遺構5 出土遺物（1/4）

段状遺構6（第154・157図）

段状遺構6は、段状遺構7の西側に重複して位置する。遺存規模は、175×75cmで、壁の高さ32cmを測る。段状遺構7に切られ、壁体溝、柱穴などは認められていない。床面には、規模が62×43cm、深さ30cmの土壌が認められる。当該遺構には、伴わないと考えている。



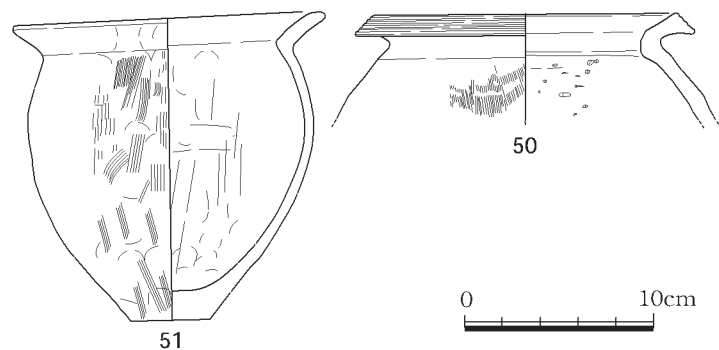
第157図 段状遺構6 出土遺物（1/4）

段状遺構7（第151・154図）

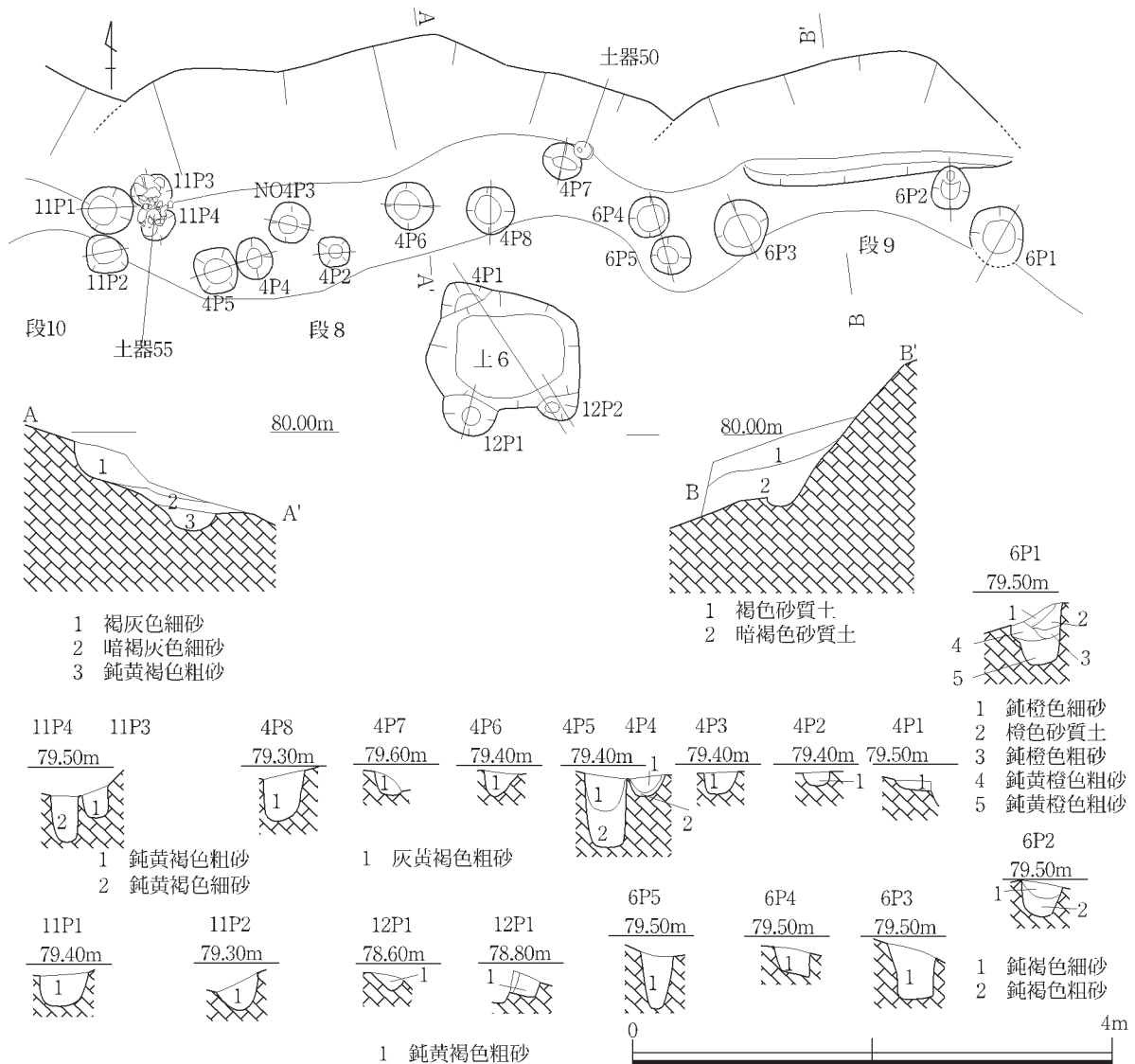
段状遺構7は、段状遺構5の下方に位置する。当該遺構は、段状遺構6を切り、同3に切られている。遺存規模は、215×95cmで、壁の高さ32cmを測る。壁体溝、柱穴などは、確認することができなかった。

段状遺構8（第158・159図）

段状遺構8は、段状遺構4の下方にあり、同9と10と重複している。遺存規模は、445×190cmを測る。ピットを多く確認できたが、柱穴として用いられたのは不詳である。出土遺物は、51と50の甕であり、50は口縁端部に凹線を施す。



第158図 段状遺構8 出土遺物（1/4）

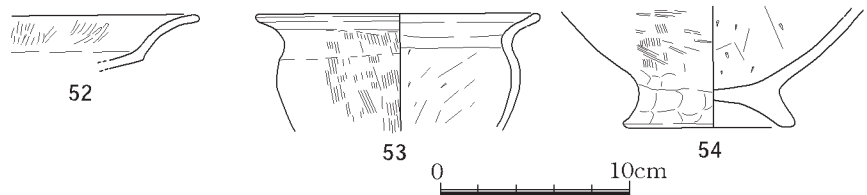


第159図 段状遺構8～10 (1/60)

段状遺構9 (第159・160図)

段状遺構9は、段状遺構3の下方に位置する。当該遺構は、西側で段状遺構8を切って重複している。遺存規模は、270×130cmで、壁の高さ32cmほどを測る。壁体溝は、北壁部分に直線的に認められた。ピットは、認められるが、柱穴としての把握はできなかった。

出土遺物は、52～54である。52は高杯の破片で、杯部から外方に大きく屈曲する。53は、鉢で頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部は丸く納め、内面にはヘラケズリが認められる。54は、台部片である。

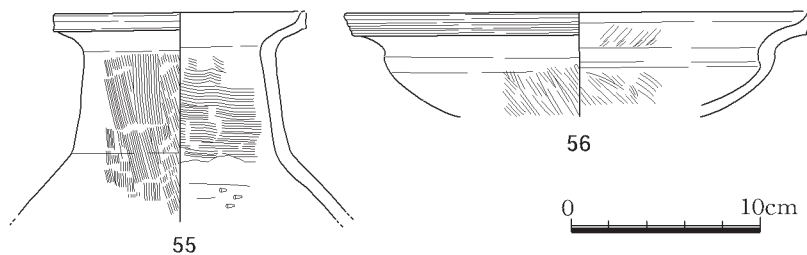


段状遺構10 (第159・161図)

第160図 段状遺構9 出土遺物 (1/4)

段状遺構10は、段状遺構6の斜め下方に位置する。遺存規模は、60×120cmを測るが、調査区境に接している関係から、詳細は不詳である。

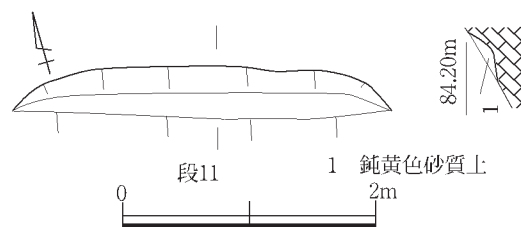
出土遺物は、55と56である。55は長頸壺で、口縁端部を上方へ拡張させる。56は高杯で、杯部から屈曲させ、口縁端部を拡張し、端面に沈線を施している。



第161図 段状遺構10 出土遺物 (1/4)

段状遺構11 (第162図)

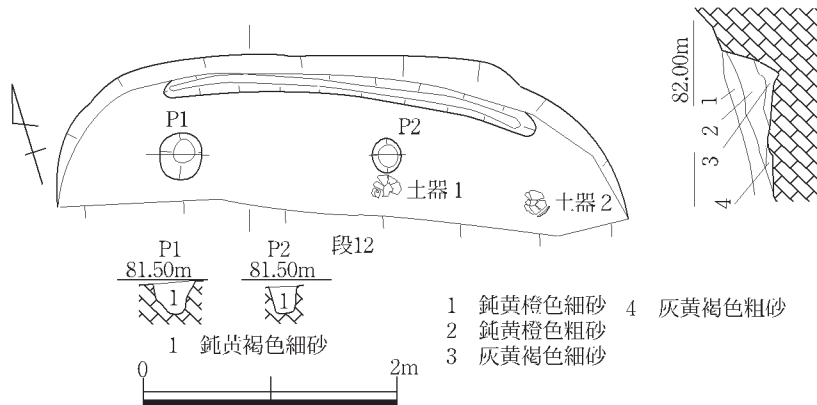
段状遺構11は、段状遺構12の南東上方に位置する。遺存規模は、310×45cmで、壁の高さ20cmほどを測る。壁体溝、柱穴などは、確認することはできなかった。この周辺で比較的多く土器が認められたが、埋土中など伴うものは検出できなかった。



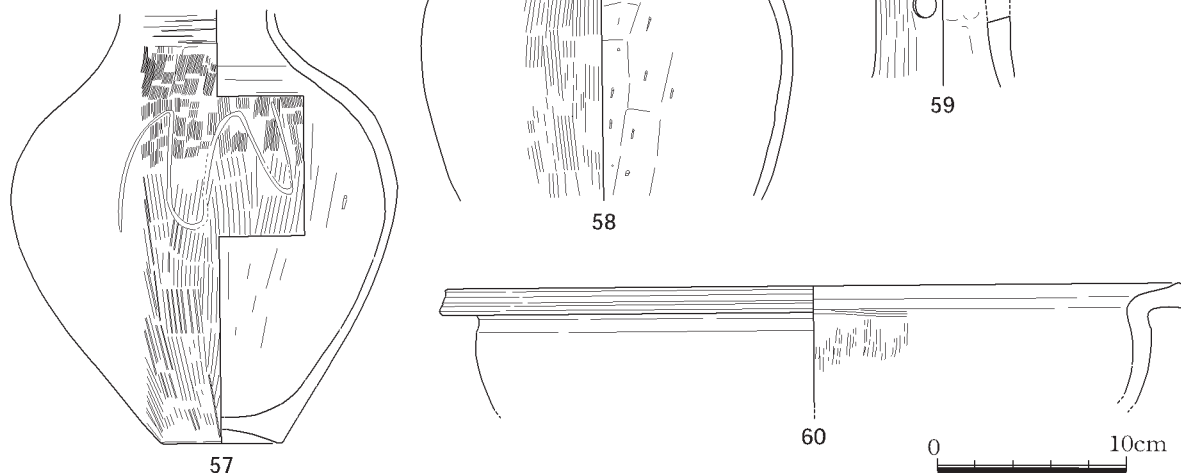
第162図 段状遺構11 (1/60)

段状遺構12 (第163図)

段状遺構12は、土壙10の東側に位置する。規模は、460×130cmを測る。北壁に沿って壁体溝を検出し、柱穴2本確認した。



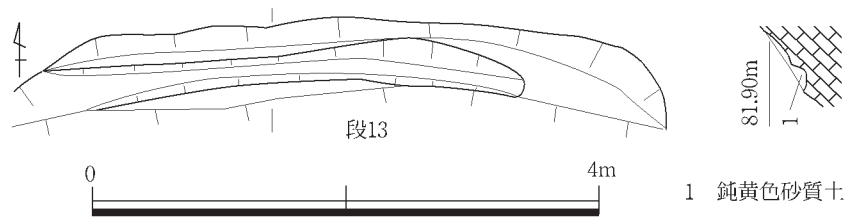
出土遺物は、57～60である。57の胴部には、ハケで文様風の施文が認められる。58は、口縁端部をやや下方に拡張気味にさせ、端面に凹部を形成する。59は、口縁端面に鋸歯文を施文している。



第163図 段状遺構12 (1/60)・出土遺物 (1/4)

段状遺構13（第164図）

段状遺構13は、段状遺構9の下方に位置する。遺存規模は、515×60cmで、壁の高さ30cmを測る。この部分から下方は、斜面の傾斜角度がきつくなる状況を呈している。北壁側には壁体溝が検出されたが、柱穴は確認することができなかった。



第164図 段状遺構13（1/60）

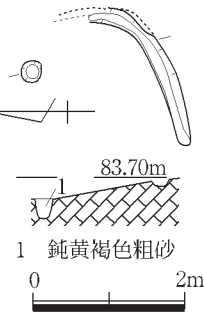
（下澤）

3 竪穴住居

竪穴住居 1（第144・165図）

慶運寺北調査区で検出した竪穴住居で、墳丘墓下遺構である。

壁体溝は北側に一状に260cm残存していたにすぎない。主柱穴は 1本を検出している。床面の海拔高は84.2mである。遺物は、弥生土器小片が出土しているにすぎない。時期は、遺物の特徴と遺構の切り合いから弥生後期と考えられる。



第165図 竪穴住居 1（1/100）

竪穴住居 2（第167図）

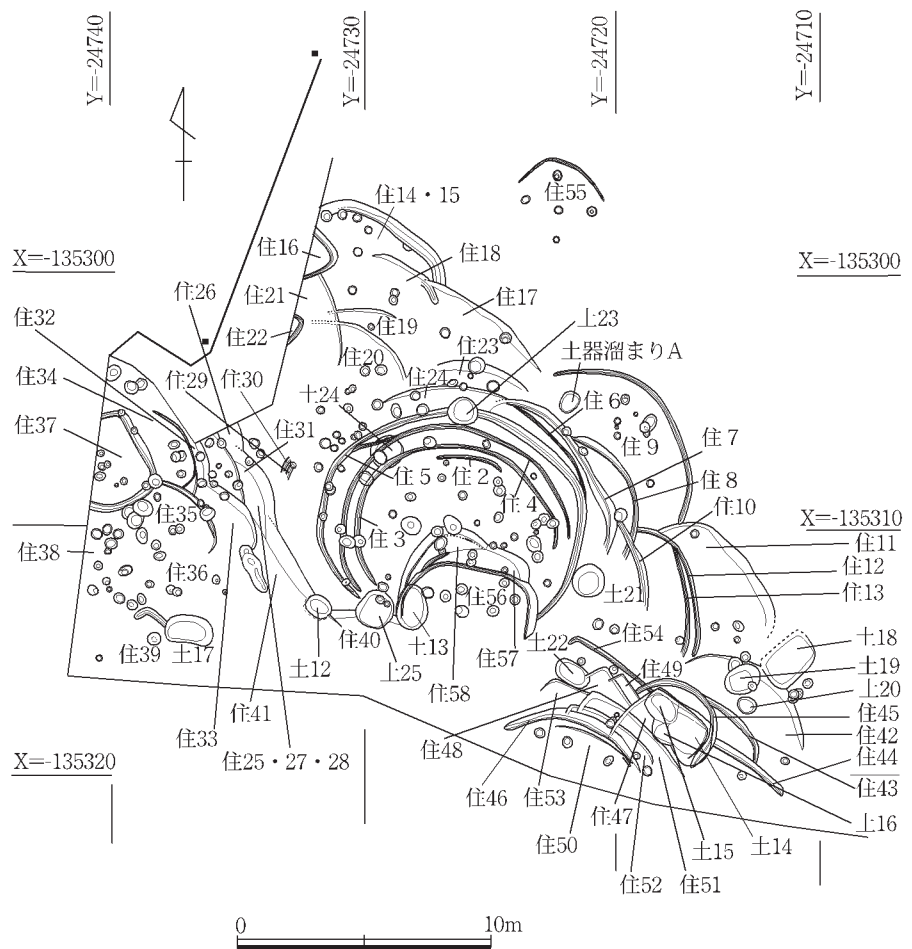
慶運寺南調査区で検出した竪穴住居で、住居3の下層遺構である。壁体溝は北側に弧状に260cm残存していたにすぎない。主柱穴は6本中5本を検出している。中央穴は楕円形で、炭が堆積していた。住居の推定規模は直径660cm、床面の海拔高は71.2mである。

遺物は、砥石 S2 が出土しているほか弥生土器小片が出土しているにすぎない。

時期は、遺構の切り合いから弥生後期と考えられる。

竪穴住居 3（第167図）

慶運寺南調査区で検



第166図 慶運寺南調査区遺構配置（1/300）

出した竪穴住居で、住居2の上層遺構である。壁体溝は円形に残存し、南側の一部が欠損している。主柱穴は、6本と考えられ、その中すべての6本を検出できた。中央穴は円形で、炭が堆積していた。住居の推定規模は直径770cm、推定床面積は46.54㎡、床面の海拔高は71.2mである。

遺物は、床からガラス小玉2点・鉄鏃M1が出土している。弥生土器は小片である。

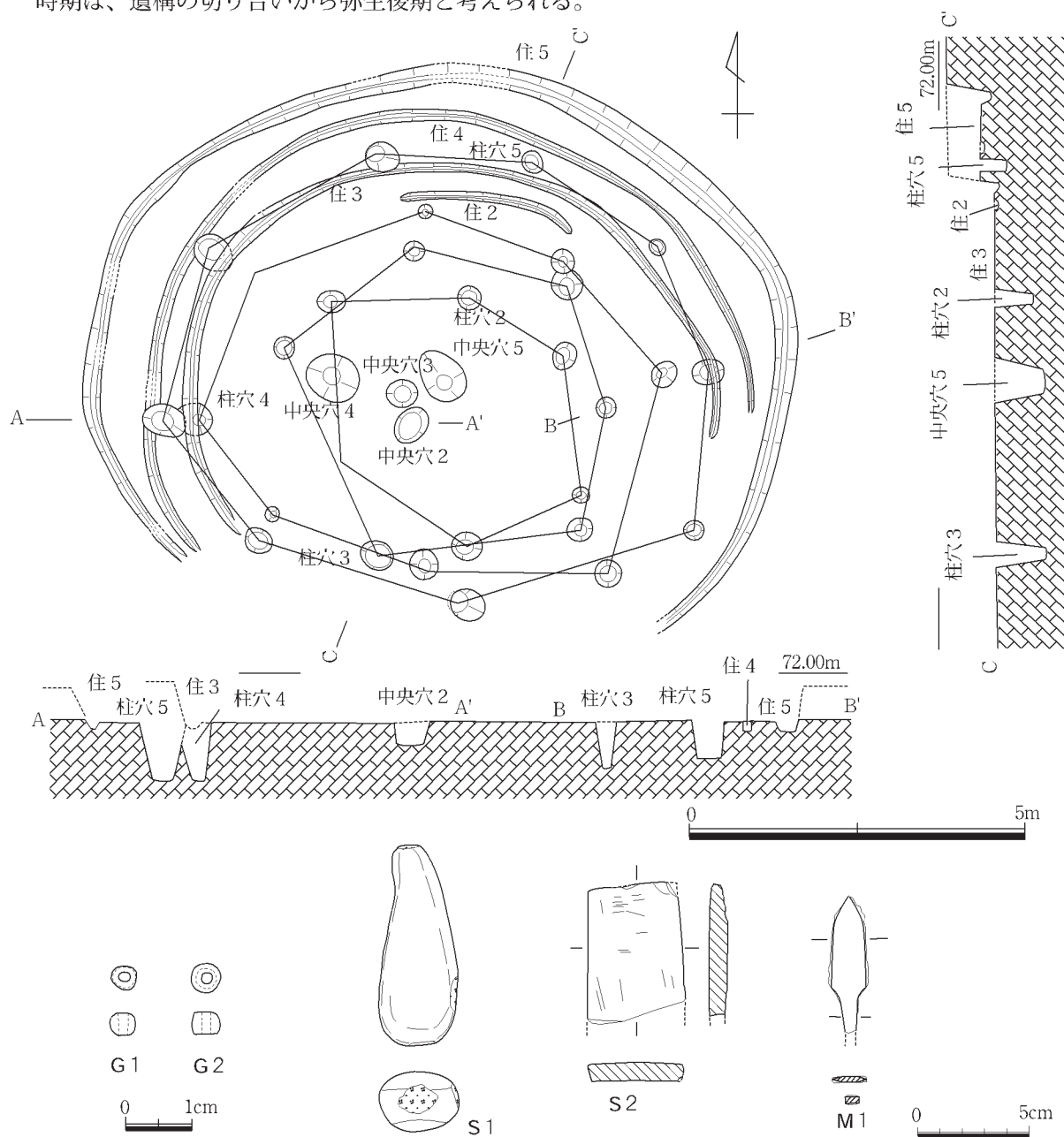
時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居4（第167図）

慶運寺南調査区で検出した竪穴住居で、住居5の下層遺構である。壁体溝は円形に残存し、南東側の1/3が欠損している。主柱穴は、推定した8本中、7本を検出している。中央穴は中央よりかなり西寄りにる。住居の推定規模は直径880cm、床面の海拔高は71.3cmである。

遺物は、埋土・柱穴・壁体溝から弥生土器小片が出土しているにすぎない。

時期は、遺構の切り合いから弥生後期と考えられる。



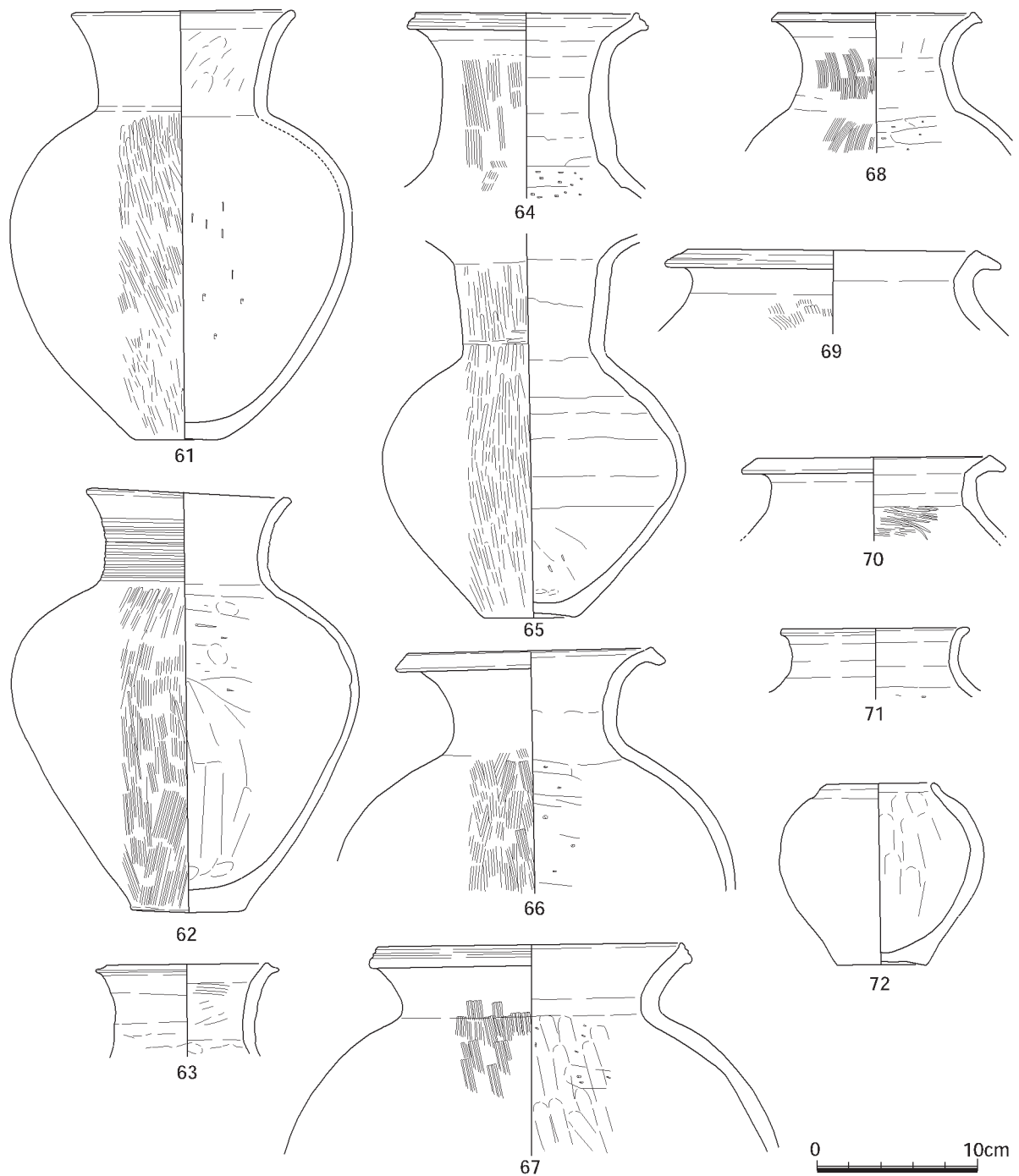
第167図 竪穴住居2～5（1/100）・出土遺物①（1/1・1/3）

竪穴住居 5（第167・168図）

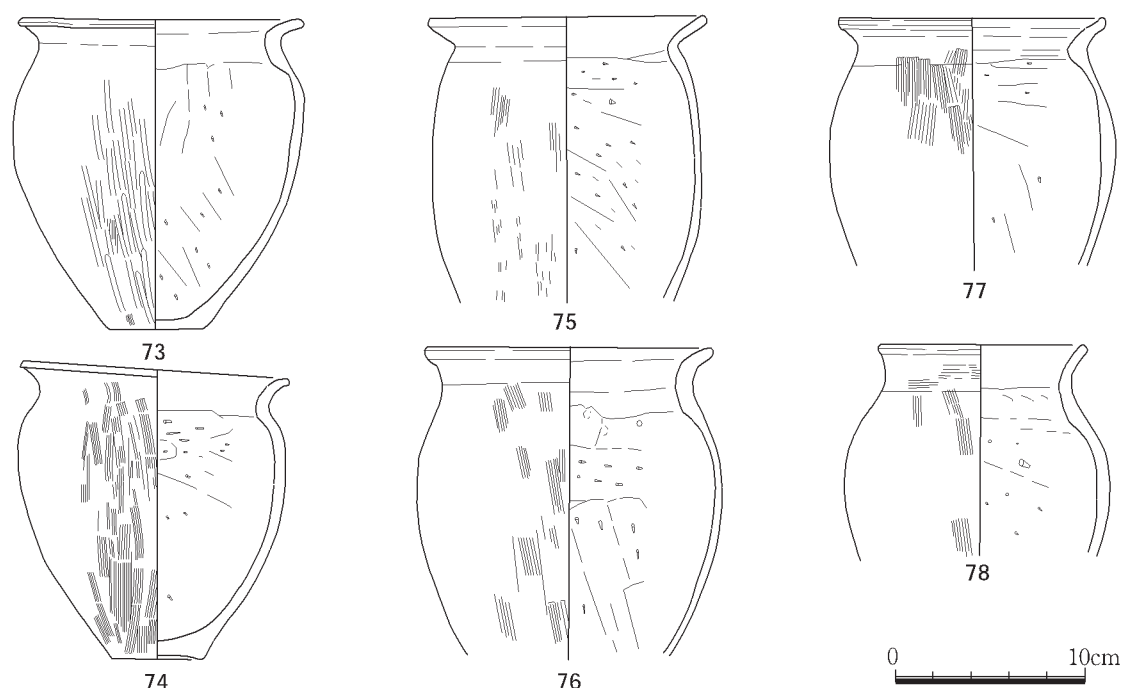
慶運寺南調査区で検出した本遺跡最大の竪穴住居で、住居 4 の上層遺構である。壁体溝は楕円形に残存し、南側の一部が欠損している。主柱穴は、9 本と推定でき、その中すべての 9 本とも検出している。中央穴は楕円形で、炭が堆積していた。住居の規模は長軸1000cm・短軸860cm、推定の床面積は78.50㎡、床面の海拔高は71.4mである。住居 4 との関係は拡張したものと推定したい。

遺物は、弥生土器が多数出土している。壺・甕・鉢・高杯・手捏ね土器・器台など61～99の39点である。

時期は、遺物の器形特徴と遺構の切り合い関係から弥生後期中葉と考えられる。



第168図 竪穴住居 2～5 出土遺物②（1/4）



第169図 竪穴住居2～5 出土遺物③ (1/4)

竪穴住居2～5 出土土器 (第168～169図)

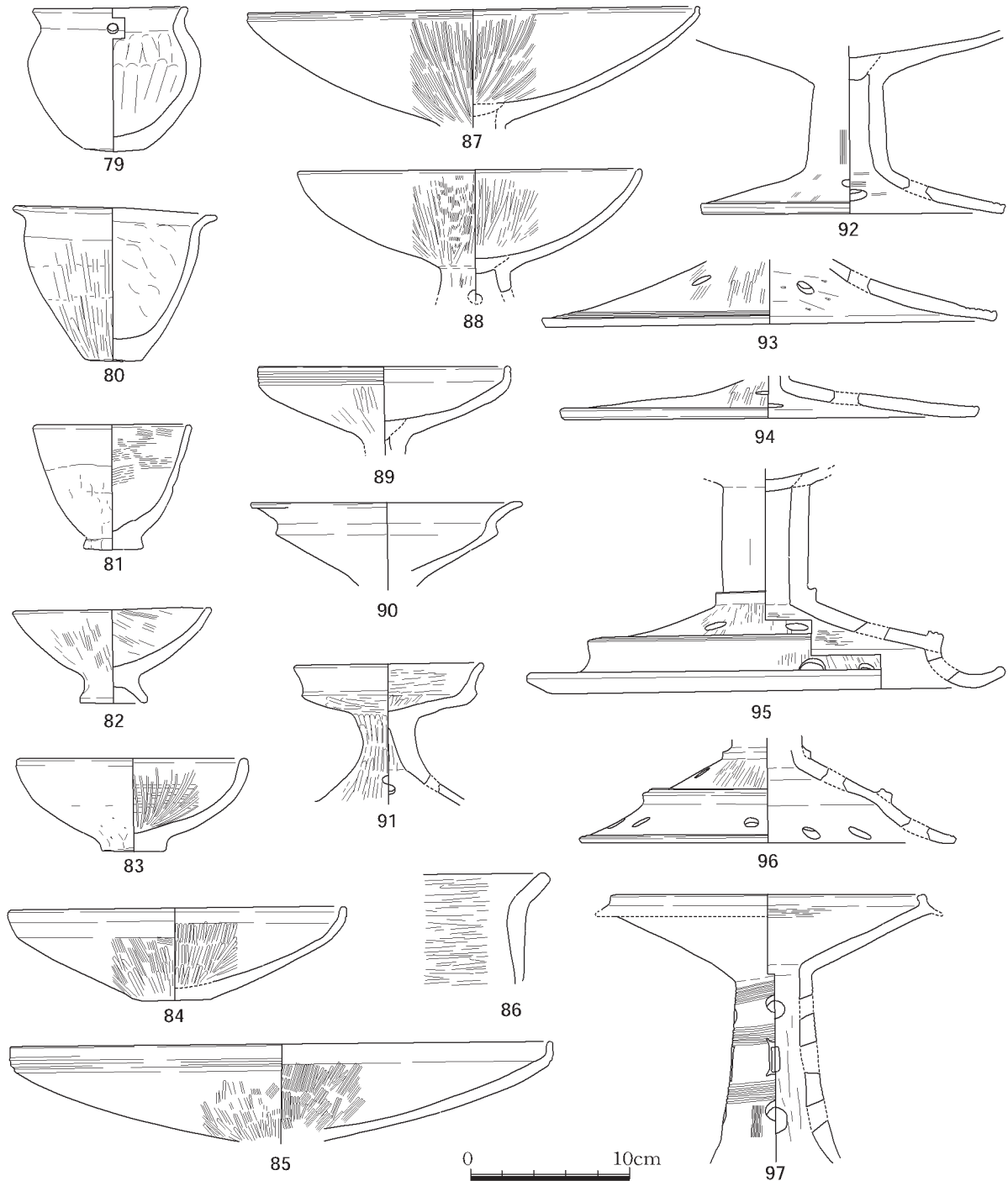
61～72は壺形土器である。61は、口縁部が撥形に開く壺で、体部は無花果形、底部は平底である。62は、口縁部が撥形に開く壺で、頸部に多条の凹線を施す。体部は無花果形、底部は平底である。63は、口縁部が撥形に開く壺で、長頸部は無紋である。口縁部端部に凹みがある。64は、口縁部が撥形に開く長頸壺で、頸部はタテハケである。口縁部端部に2条の凹線を施す。65は、口縁部端部が欠損した長頸壺で、頸部・胴部はタテハケである。66は、口縁部端部が垂れ下がる長頸壺で、胴部外面はタテハケ・内面はヘラケズリしている。67は、口縁部が逆八の字状に開く壺で、端面は2条の凹線を施す。胴部外面はタテハケ・内面はナデ。68は、口縁部が撥形に開く長頸壺で、頸部・胴部はタテハケである。器壁が薄く作られている。69は、口縁部端部が垂れ下がる壺で、端面は2条の凹線を施す。胴部はタテハケである。70は、口縁部端部が垂れ下がる壺で、器壁が薄く作られている。内面はハケメ。71は、口縁部端部がわずかに外に出る壺で、器壁が薄く作られている。72は、口縁部が短く内傾する無頸壺で、胴部外面は無紋・内面はナデている。

73～78は甕形土器である。73は、口縁部が逆八の字状に開く甕で、端部は丸く収める。胴部外面はタテハケの後タテヘラミガキ・内面はヘラケズリしている。74は、口縁部が逆八の字状に開く甕で、端部はやや角ばる。胴部外面はタテハケの後タテヘラミガキ・内面はヘラケズリしている。底部は少し上げ底。75は、口縁部がくの字状に開く甕で、端部は丸い。胴部外面はタテハケの後タテヘラミガキ・内面はヘラケズリしている。胴部はやや長い。76は、口縁部が逆八の字状に開く甕で、端部は丸い。胴部外面はタテハケ・内面はヘラケズリしている。77は、口縁部がくの字状に開く甕で、端部は心持ち上方につまみ上げる。胴部外面はタテハケ・内面はヘラケズリしている。78は、口縁部が逆八の字状に開く甕で、端部は丸い。胴部外面はタテハケ・内面はヘラケズリしている。

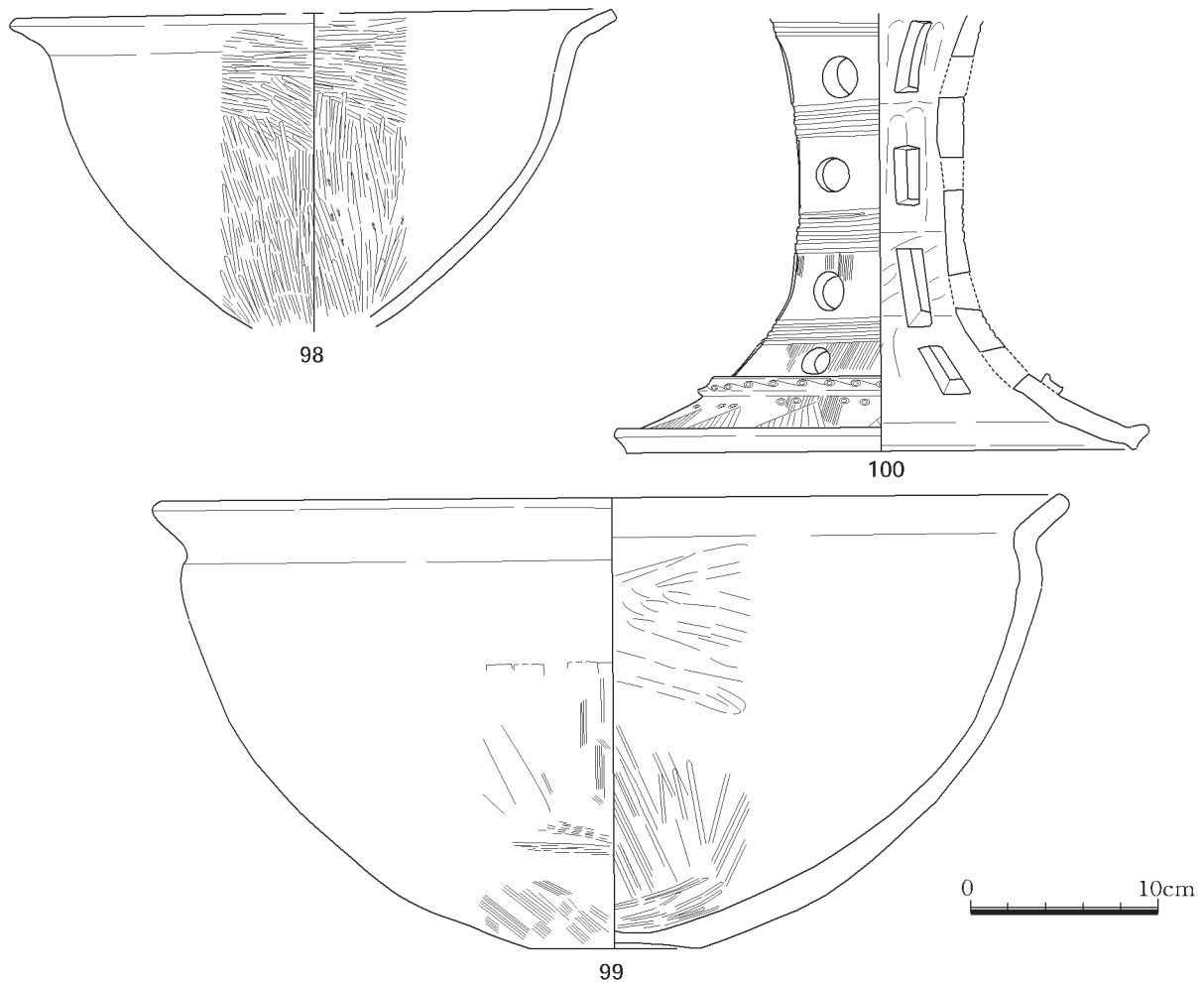
79～84は鉢形土器である。79は、口縁部が逆八の字状に開く壺に近い頸のすぼんだ鉢で、端部は丸

い。胴部内面はナデている。頸部に小さい円孔が1対穿たれている。80は、口縁部がくの字状に開く鉢で、端部は丸く、上端は水平。胴部外面はタテヘラミガキ・内面はナデている。81は、口縁部が内湾する胴部から逆八の字状に開く鉢で、端部は丸い。底部は円盤状に厚底である。82は、口縁部が内湾する胴部から直に開く鉢で、端部は丸い。底部は高台風である。蓋としても使用できる。83は、口縁部が内湾する胴部から直行する鉢で、端部は丸い。底部は円盤状に厚底である。内面はタテヘラミガキしている。84は、口縁部が内湾し、直立する浅い鉢で、端部は丸い。底部は平底である。内外面はタテヘラミガキしている。

85は、口縁部が内湾し、直立する浅い鉢か高杯の杯部で、端部は丸い。器面はタテヘラミガキ。



第170図 竪穴住居2～5 出土遺物④ (1/4)



第171図 竪穴住居2～5 出土遺物⑤ (1/4)

86は鉢形土器の口縁部小片である。内面ヨコハケが見られる。

87～97は高杯形土器である。87は杯部が内湾し、短く直立する口縁の高杯で、外端面には2条の凹線を施す。器面はタテヘラミガキ。杯部底部は円盤充填している。88は杯部が内湾し、短く直立する口縁の高杯で、端部は丸い。器面はタテヘラミガキ。杯部底部は円盤充填している。89は杯部が内湾し、短く直立する口縁の高杯で、外端面には3条の凹線を施す。90は杯部がわずかに内湾し、短く直立した後外反する口縁をもつ高杯で、端部は丸い。91は杯部から短く直立した後外反する口縁をもつ小形高杯で、端部は丸い。脚と裾部の境目は明確で、裾部には円孔を4個穿つ。92は杯部から裾部までの破片で、裾部には円孔を4個穿つ。93は裾部の破片で、裾部には円孔を3個穿つ。端部上面に沈線を施す。94は裾部の破片で、裾部には円孔を4個穿つ。95は杯下部から裾部までの破片で、裾部には円孔を2段に穿つ。脚と裾部および裾の屈曲部上面に凸帯を貼り付けた飾られた高杯である。96は裾部の破片で、裾部には円孔を2段に穿つ。脚と裾部および裾の屈曲部上面に凸帯を貼り付けた飾られた高杯である。97は口縁部から脚部までの破片で、脚部には円孔を2段・長方形透かし穴を1段穿つ。脚部外面に多条の沈線を3段巡らす。

98は中形の鉢形土器である。器面にはヘラミガキが見られる。

99は大形の鉢形土器である。器面にはヘラミガキ・ハケメが見られる。

100は器台形土器である。脚部には円孔・長方形透かし穴・多条の凹線を4段穿つ。鋸歯文を施す。

竪穴住居 6（第172図）

慶運寺南調査区で検出した竪穴住居で、住居7の床面を調査中に確認できた下層遺構である。壁体溝は北東側に弧状に長さ480cm残存していたにすぎない。主柱穴は検出していない。中央穴も未検出。住居の床面の海拔高は71.92mである。

遺物は、弥生土器小片が出土しているにすぎない。

時期は、遺構の切り合いから弥生後期と考えられる。

竪穴住居 7（第172図）

慶運寺南調査区で検出した隅丸方形と考えられる竪穴住居で、住居6の上層遺構である。壁体溝は北東側に弧状に長さ750cm残存していた。主柱穴・中央穴は検出していない。住居の床面の海拔高は71.92cmである。

遺物は、弥生土器小片とS3の石鏃出土している。

時期は、遺物の器形特徴と遺構の切り合いから弥生後期と考えられる。

竪穴住居 8（第172図）

慶運寺南調査区で検出した円形と考えられる竪穴住居で、住居7に切られている。壁体溝は北東側に弧状に長さ507cm残存していた。主柱穴は2本検出している。住居の床面の海拔高は72.43mである。遺物は、弥生土器小片が出土しているにすぎない。

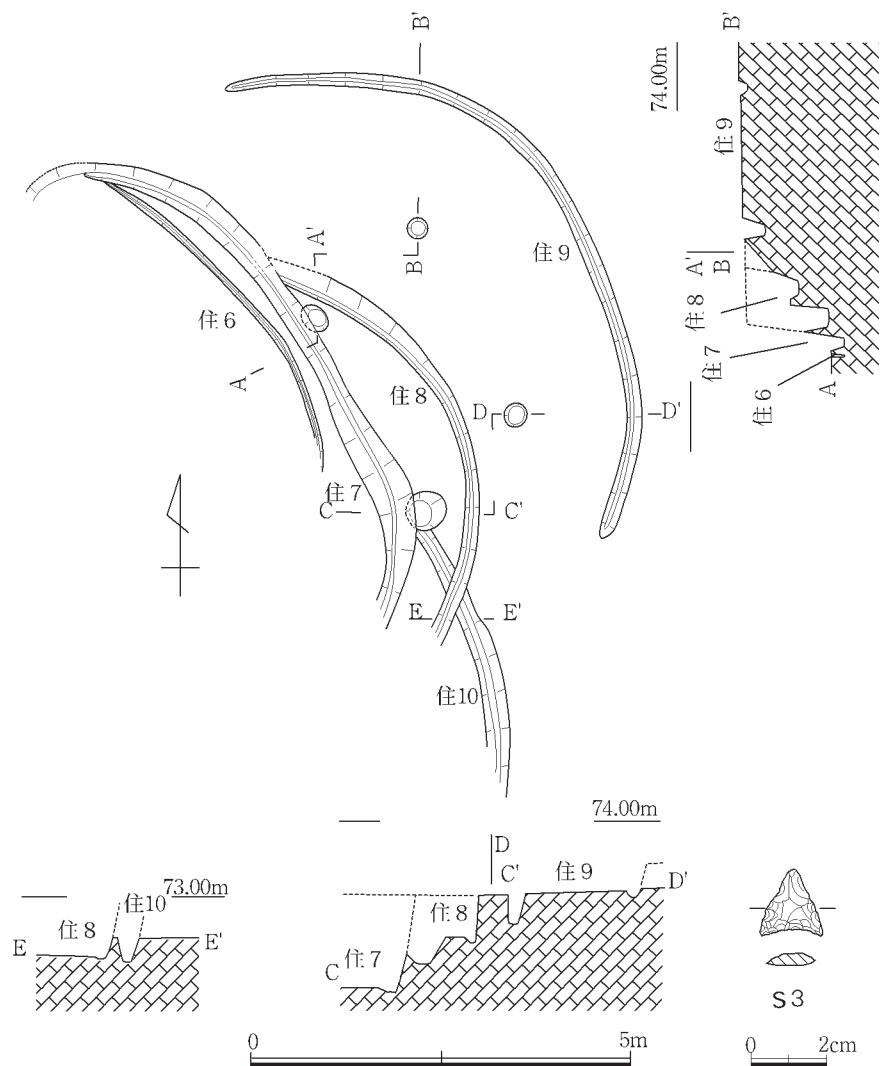
時期は、遺物の器形特徴と遺構の切り合いから弥生後期と考えられる。

竪穴住居 9（第172図）

慶運寺南調査区で検出した円形と考えられる竪穴住居で、住居8の上層遺構。壁体溝は北東側に弧状に長さ78cm残存していた。主柱穴は2本検出している。住居の床面の海拔高は73.10mである。

遺物は、弥生土器小片が出土しているにすぎない。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。



第172図 竪穴住居6～10（1/100）・出土遺物（1/2）

竪穴住居10（第172図）

慶運寺南調査区で検出した円形と考えられる竪穴住居で、住居7・8に切られている。壁体溝は東側に弧状に長さ370cm残存していた。主柱穴は未検出である。住居の床面の海拔高は72.45mである。

遺物は、弥生土器小片が出土しているにすぎない。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居11（第173図）

慶運寺南調査区で検出した隅丸方形を呈する竪穴住居で、住居12・13に切られている。壁体溝はない。長軸600cm、短軸150cm残存していた。主柱穴は2本検出できた。住居の床面の海拔高は72.42mである。

遺物は、弥生土器小片が出土しているにすぎない。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居12（第173図）

慶運寺南調査区で検出した隅丸方形を呈する竪穴住居で、住居11を切っている。壁体溝は東側と北東側に一状に長さ560cm残存していた。主柱穴は1本検出できた。住居の床面の海拔高は72.37mである。

遺物は、弥生土器小片が出土しているにすぎない。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居13（第173図）

慶運寺南調査区で検出した隅丸方形を呈する竪穴住居で、住居12に切られている。壁体溝は東側に長さ450cm残存していた。主柱穴は未検出である。住居の床面の海拔高は72.37mである。

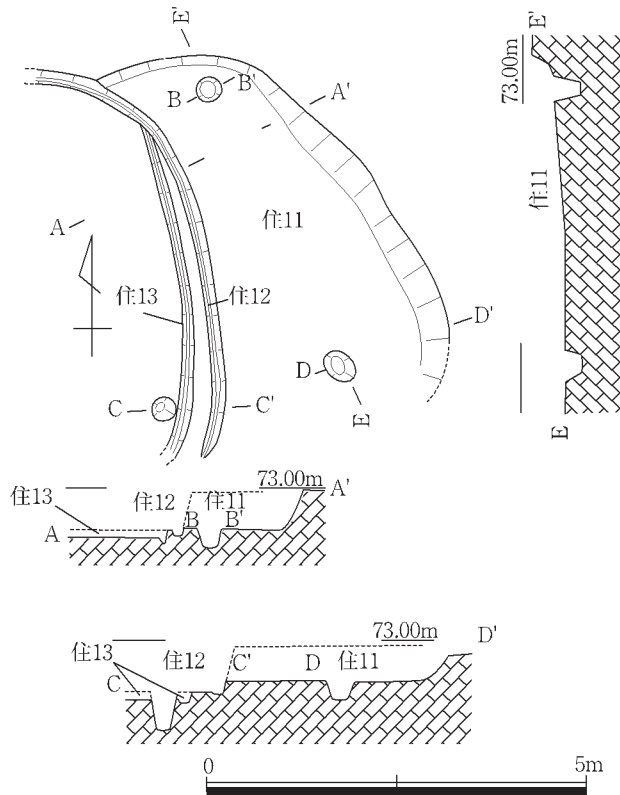
遺物は、弥生土器小片が出土しているにすぎない。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居14（第174・175図）

慶運寺南調査区北西部で検出した隅丸方形を呈する竪穴住居で、壁体溝は北東側にコの字状に長さ600cm残存していた。主柱穴は未検出である。住居の床面の海拔高は72.88mである。

遺物は、101～104の弥生土器とS4の叩き石が出土している。101の甕は、体部内面のヘラケズリが上半部で終わっている。弥生後期の甕は、ヘラケズリが頸部まで施されている。102の甕は、体部外面ハケメ、内面ヘラケズリは頸部まで施されている。103の甕は、体部外面ハケメの中に縦方向に鋸歯文が施されているので、拓本で表示した。104の甕は、内面ヘラケズリは頸部まで施されている。S4の叩き石は、花崗岩の河原石を利用し、両端を敲き、両平面を磨いている。



第173図 竪穴住居11～13（1/100）

時期は、遺物の器形特徴から弥生中期末～後期初頭と考えられる。

竪穴住居15（第174・175図）

慶運寺南調査区北西部で検出した隅丸方形を呈する竪穴住居で、住居14の上層で重複して検出できた。主柱穴は未検出である。住居の床面の海拔高は73.00mである。

遺物は、105の弥生土器が出土している。105の小形丸底壺は、口縁部が一部欠損している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居16（第174・175図）

慶運寺南調査区北西部で検出した方形を呈する竪穴住居で、住居15を切る。東の角の部分しか検出できなかった。道路用地境であるため西は調査できなかった。そのこともあって、主柱穴は未検出である。住居の床面の海拔高は72.43mである。

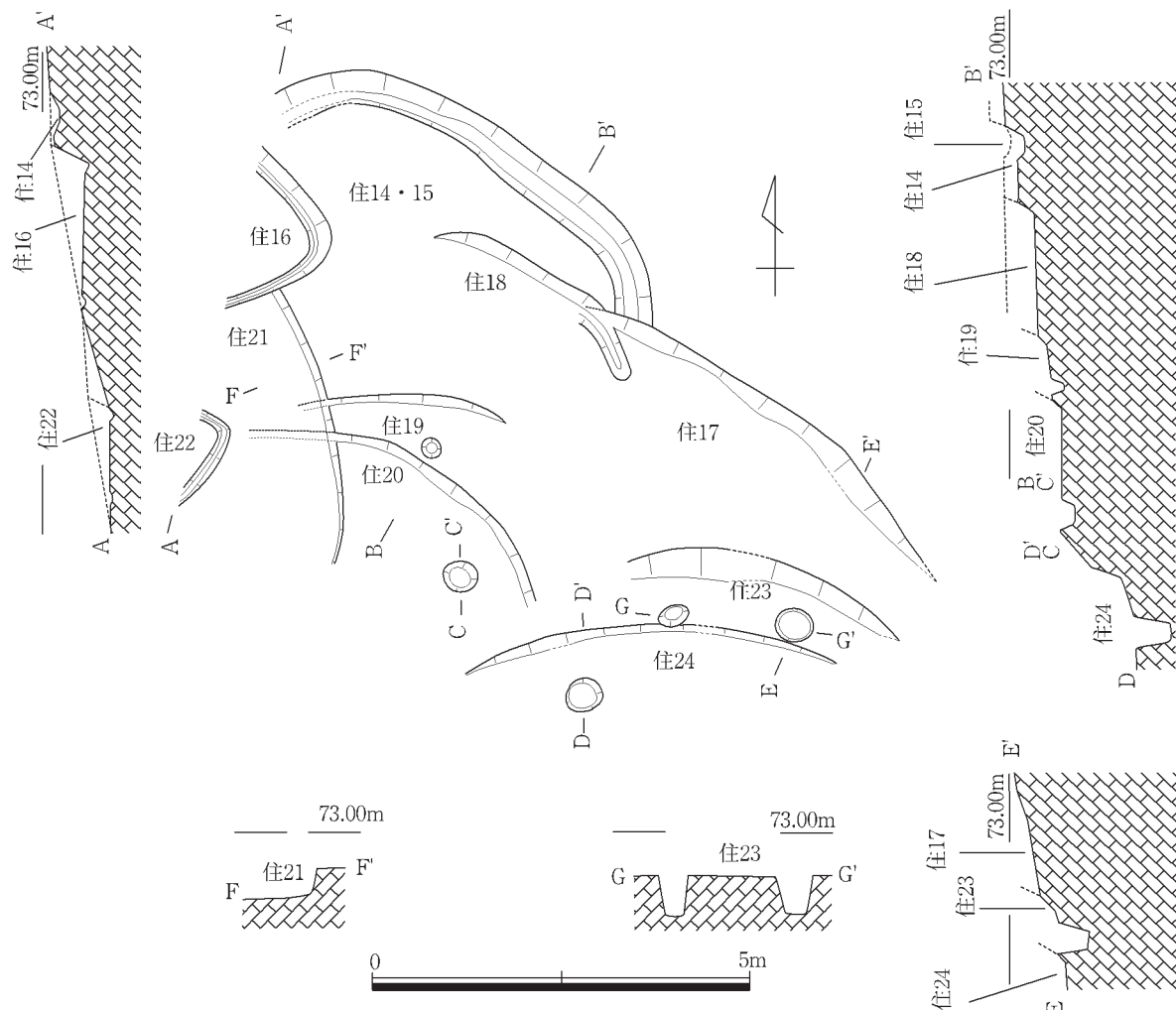
遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居17（第174・175図）

慶運寺南調査区北西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、住居14・15を切る。壁体溝、主柱穴は未検出である。住居の長軸は600cm、短軸は160cm、床面の海拔高は72.77mである。

遺物は、106～109の弥生土器が出土している。106の甕は、口径10cmの小形品である。107・108の



第174図 竪穴住居14～24（1/100）

小形鉢は、手捏ねである。109の高杯は、裾部1/8の破片である。

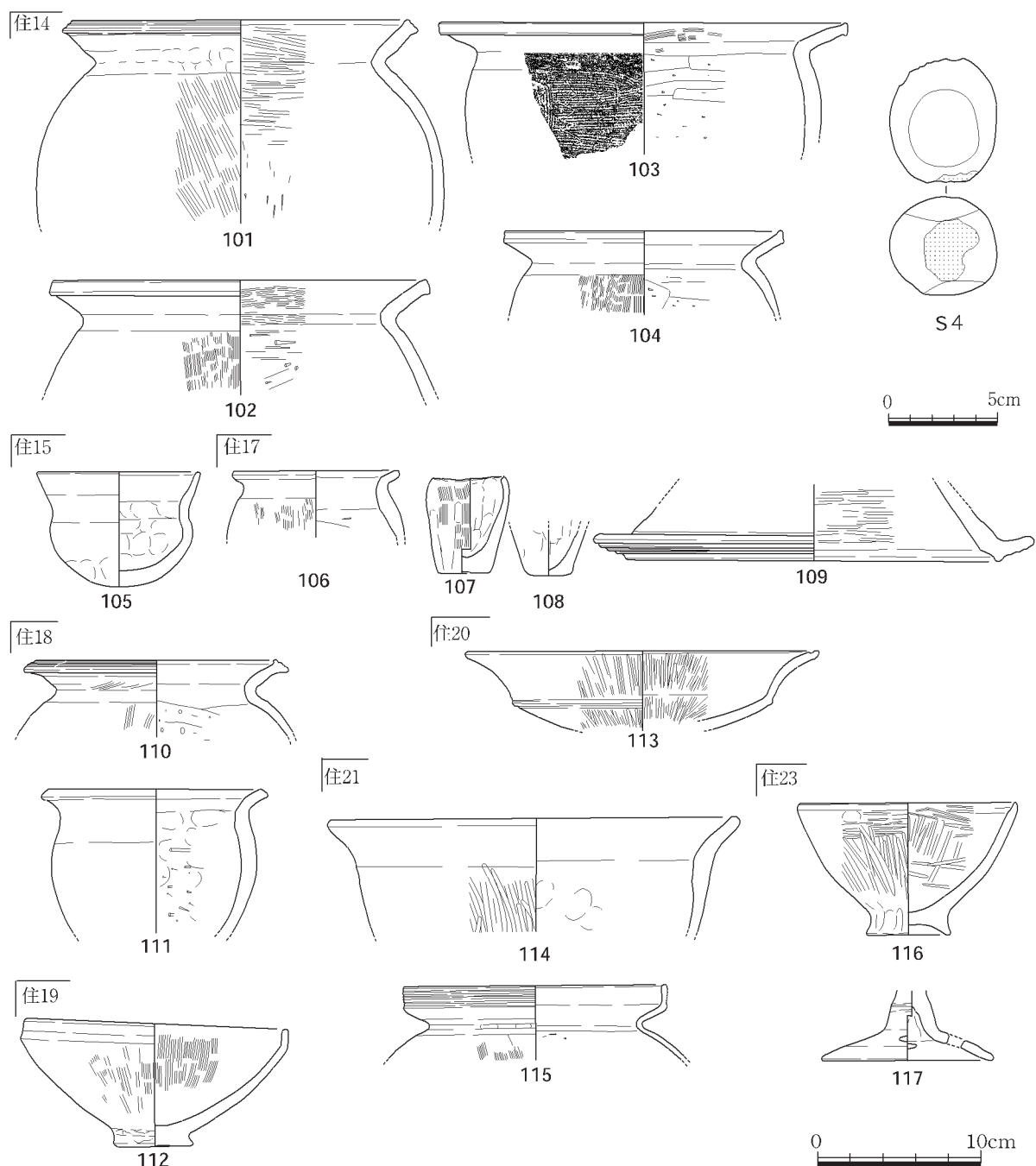
時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居18（第173・174図）

慶運寺南調査区北西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、住居17を切る。壁体溝は320cm残存する。支柱穴は未検出である。床面の海拔高は72.65mである。

遺物は、110・111の弥生土器が出土している。110の甕は、口縁部1/4の破片である。111の鉢は、口径13cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。



第175図 竪穴住居14～23 出土遺物（1/3・1/4）

竪穴住居19（第174・175図）

慶運寺南調査区北西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、住居18の南に位置し、断面では住居18を切っていることが観察できた。壁体溝はないが、主柱穴は1本検出した。床面の海拔高は72.16mである。

遺物は、112の弥生土器が出土している。112の鉢は、口縁部1/2の破片で、口径15.9cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居20（第174・175図）

慶運寺南調査区北西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、住居19の南に位置し、断面では住居19を切っていることが観察できた。壁体溝はないが、主柱穴は1本検出した。床面の海拔高は71.69mである。

遺物は、113の弥生土器が出土している。113の高杯は、推定口径21.3cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居21（第174・175図）

慶運寺南調査区北西部西端で検出した段状を呈する竪穴住居で、住居19の西に位置し、断面では住居19に切られていることが観察できた。壁体溝はなく、主柱穴も未検出。床面の海拔高は72.16mである。

遺物は、114・115の弥生土器が出土している。114の鉢は、推定口径24.8cmを測る。115の甕は、推定口径16.0cmを測る吉備地方特有の沈線を持つ土器である。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居22（第174図）

慶運寺南調査区北西部西端で検出した方形を呈する竪穴住居で、住居21の南に位置し、断面では住居21を切っていることが観察できる。壁体溝は北東角を検出したが、主柱穴は未検出。床面の海拔高は72.06mである。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居23（第174・175図）

慶運寺南調査区北西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、住居17の南に位置し、土層断面では住居17を切っていることが観察できた。壁体溝はなく、主柱穴は2本検出。床面の海拔高は72.41m。

遺物は、116・117の弥生土器が出土している。116の鉢は、推定口径13.3cmを測る。117の高杯は、短脚で、裾部に円孔を4個開けている。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居24（第174図）

慶運寺南調査区北西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、住居23の南に位置し、土層断面では住居23を切っていることが観察できた。壁体溝はなく、主柱穴は1本検出している。柱穴は深さ39cmある。床面の海拔高は72.00mである。住居5には切られている。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居25（第176図）

慶運寺南調査区西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、土層断面では住居26を切っており、住居32には切られていることが観察できる。壁体溝はなく、支柱穴は1本検出している。床面の海拔高は70.4mである。

遺物は、118・119の弥生土器が出土している。118は蓋と考えられる。推定口径10.8cmを測る。119の甕は、推定口径13.4cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居26（第176図）

慶運寺南調査区西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、土層断面では住居25に切られていることが観察できる。壁体溝はなく、支柱穴は1本検出。床面の海拔高は70.28mである。

遺物は、120・121の弥生土器が出土している。120は小形壺で、平底を残している。口径10.3cmを測る。121の小形高杯は、推定口径12.2cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居27・28（第176図）

慶運寺南調査区西部で検出した段状を呈する竪穴住居で、土層断面では住居25の上層で検出したが実測図には表現できなかった。床面の海拔高は、住居27が70.45m、住居28が70.55mである。

遺物は、住居28で122～126の弥生土器とS5の砥石が出土している。122の甕は、口径17.9cmを測る。123の小形甕は、推定口径11.6cmを測る。124の小形壺は、口径4.1cmを測る。125の小形鉢は、口径6.0cmを測る。S5の砥石は、流紋岩製で長さ175cm、重さ712gある。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居29・30（第176図）

慶運寺南調査区西部で壁体溝だけを検出した竪穴住居で、土層断面では住居29の上層で検出したのが住居30である。床面の海拔高は、住居29が71.44m、住居30が71.51mである。

遺物は、住居29で127の弥生土器が出土している。127の鉢は、口径17.9cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居31（第176図）

慶運寺南調査区西部で扇形に検出した竪穴住居で、壁体溝は浅い。柱穴は2本検出した。土層断面では住居25を切り住居32に切られている。床面の海拔高は、70.31mである。

遺物は、弥生土器小片とC1の勾玉形土製品が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居32（第176・177図）

慶運寺南調査区西部で扇形に検出した竪穴住居で、壁体溝は浅い。柱穴は未検出。土層断面では住居25・31を切り住居34に切られている。床面の海拔高は、70.30mである。

遺物は、128・129の弥生土器が出土している。128の壺は、推定口径15.2cm、器高31.6cmを測る大形品。129の甕は、推定口径22.5cm、推定器高34.8cmを測るが上下は直接接合できなかった。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居33（第176・177図）

慶運寺南調査区西部で扇形に検出した竪穴住居で、壁体溝は浅い。柱穴は1本検出。土層断面では住居35を切り住居31に切られている。床面の海拔高は、70.25mである。

遺物は、130・131の弥生土器が出土している。130の甕は、推定口径16.2cmを測る。131の甕は、推定口径16.4cmを測る。

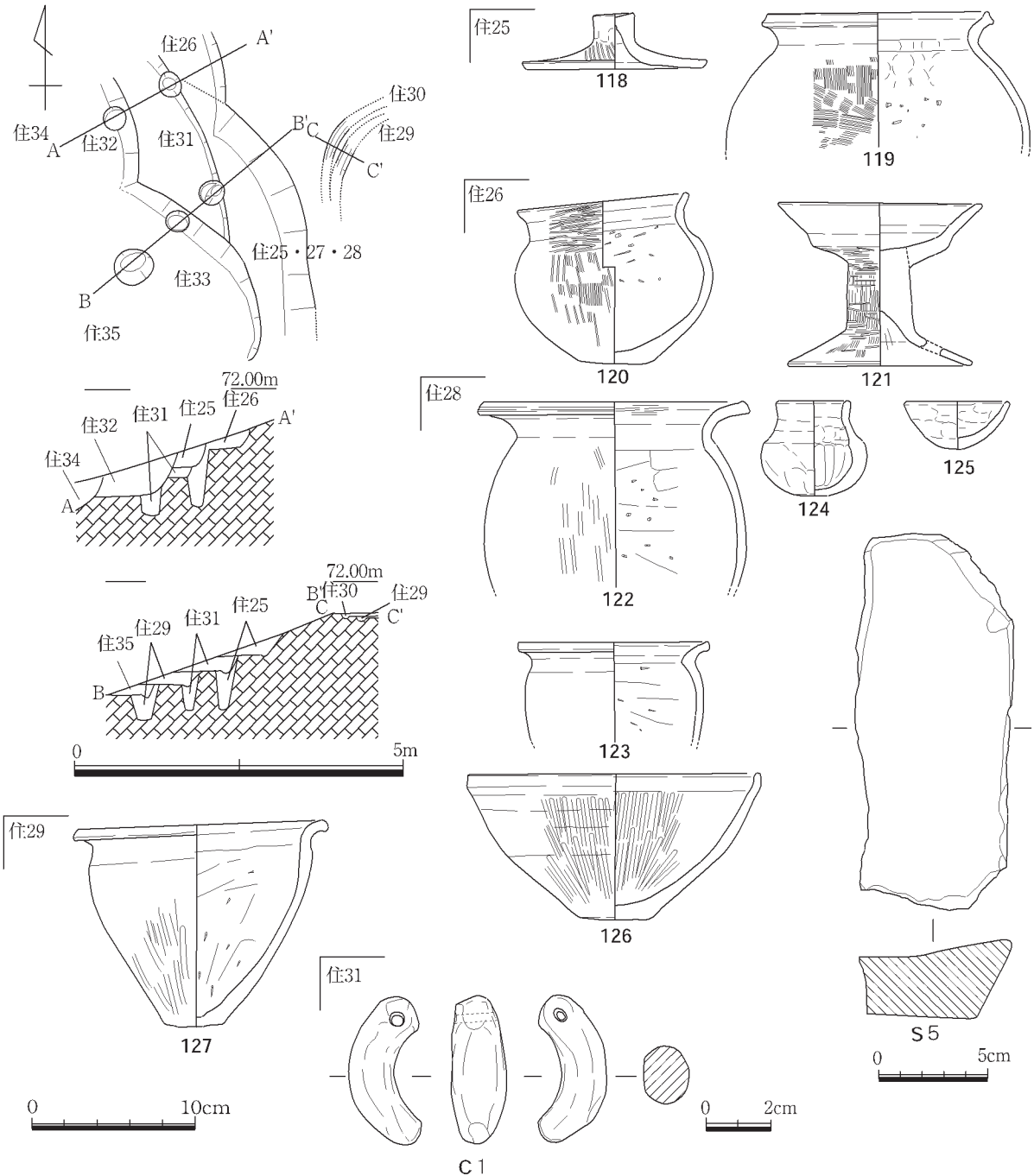
時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居34（第178図）

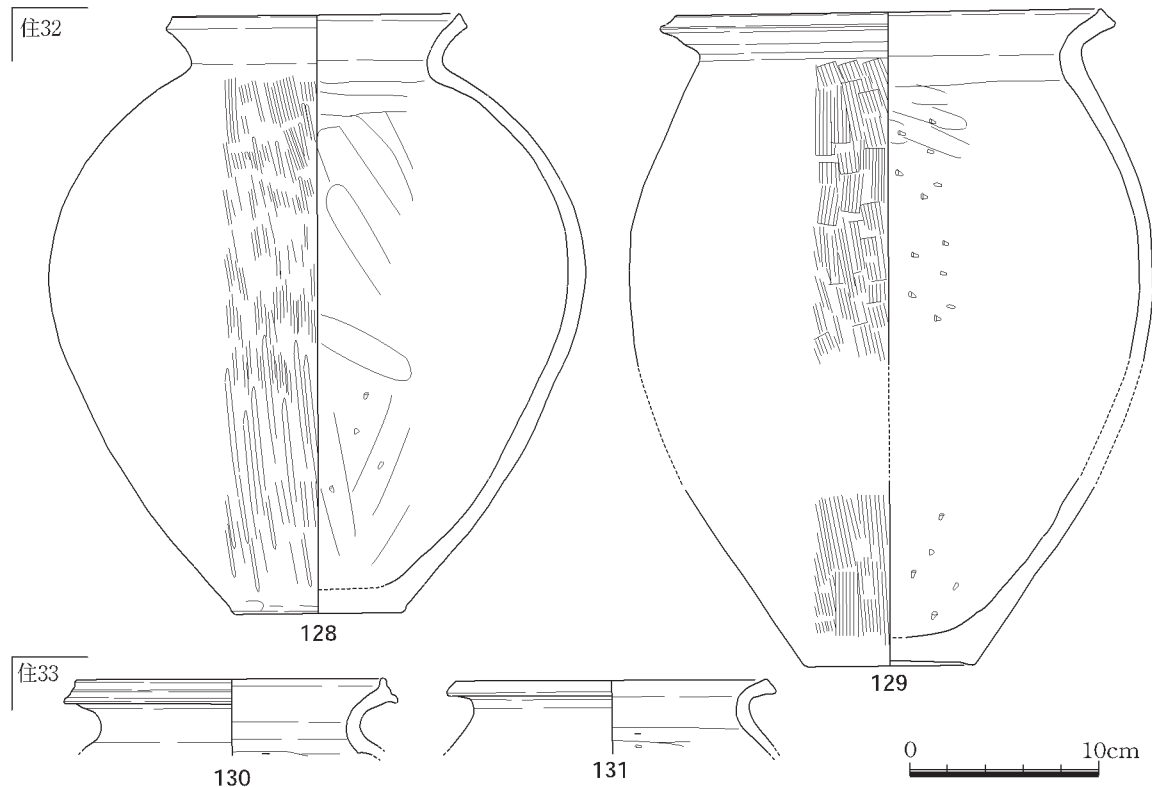
慶運寺南調査区西部で扇形に検出した竪穴住居で、壁体溝は浅い。柱穴は1本検出。土層断面によると住居30・34に切られていることが判る。床面の海拔高は、70.23mである。

遺物は、132・133の弥生土器が出土している。132の大形高杯は、推定口径34.0cmを、133の小形鉢は、口径9.5cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。



第176図 竪穴住居25～35 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)



第177図 竪穴住居32・33 出土遺物（1/4）

竪穴住居35（第178図）

慶運寺南調査区西部で弧状に検出した竪穴住居で、壁体溝は長さ350cm、深さ21cmと深い。柱穴は4本、中央穴も検出。土層断面によると住居30・34に切られていることが判る。床面の海拔高は、70.20mである。

遺物は、134の弥生土器が出土している。134の台付鉢は、口縁端部の玉縁が珍しい。口径16.7cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居36（第178図）

慶運寺南調査区西部で検出した竪穴住居で、壁体溝がなく、柱穴は1本、床面を検出。床面の海拔高は、70.36mである。

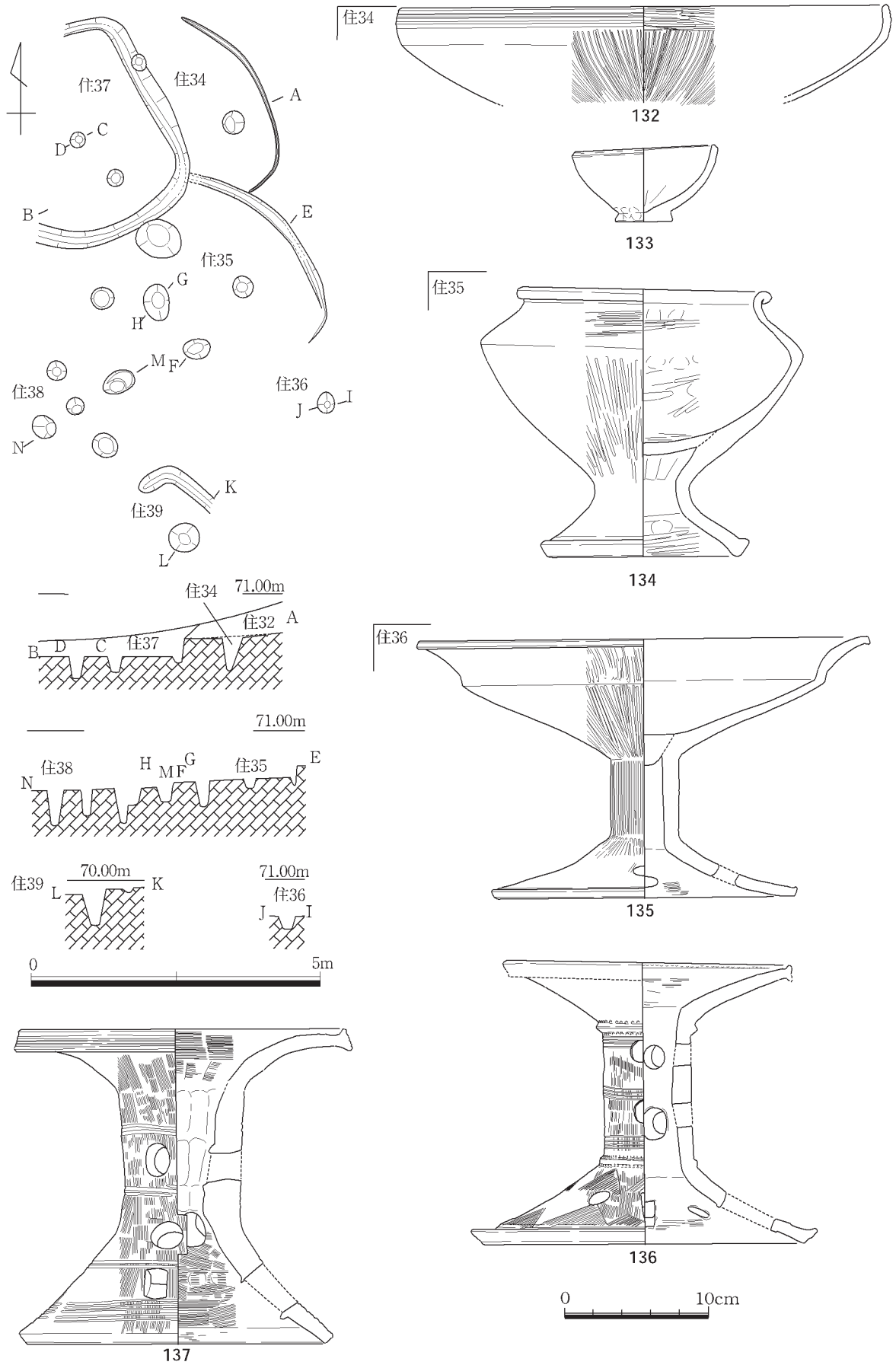
遺物は、135～137の弥生土器が出土している。135の大形高杯は、口径31.2cmを測る。136の器台は、口径19.5cmを測り、円形・方形の透かし穴と沈線文・凸帯・竹管文・鋸歯文などで装飾している。137の器台は、22.4cmを測り、円形・方形の透かし穴と沈線文で装飾している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

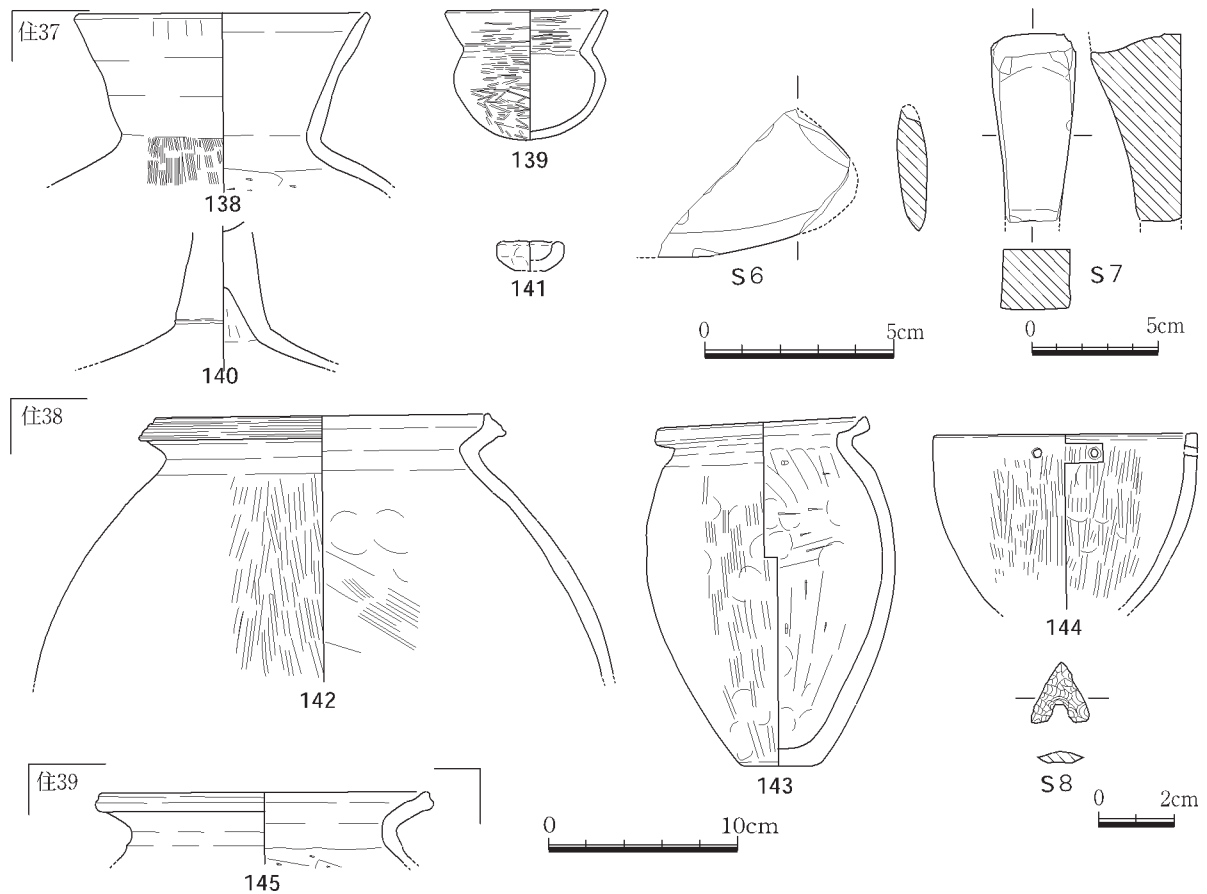
竪穴住居37（第178・179図）

慶運寺南調査区西端で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は3辺、柱穴は1本、中央穴を検出。住居の規模は長軸380cm、短軸300cm、床面の海拔高は69.86mである。

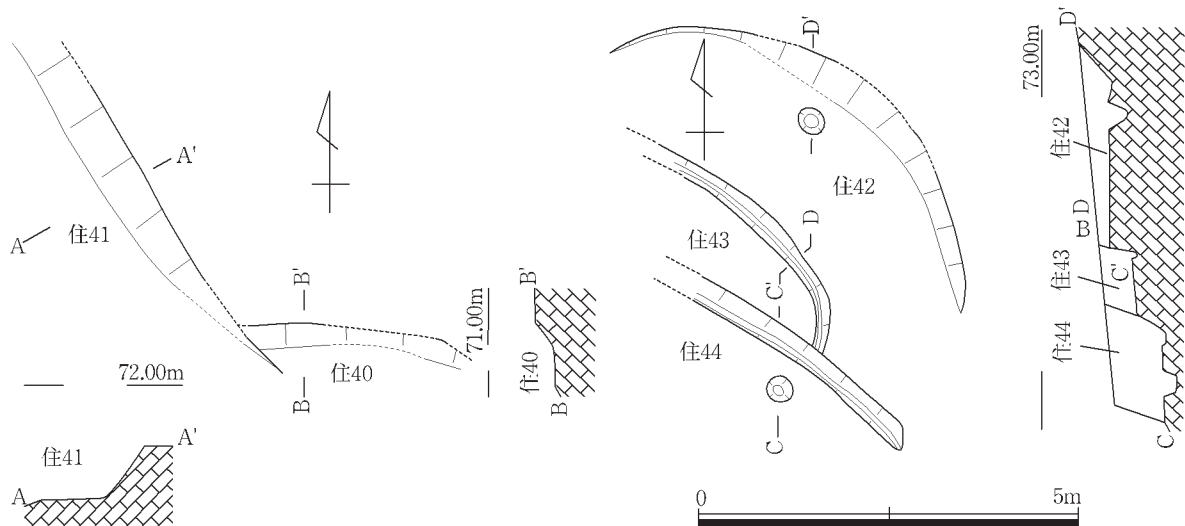
遺物は、138～141の弥生土器とS6・S7の石器が出土している。138の壺は、口径15.3cmを測る。139の小形壺は、推定口径8.3cmを測る。140の高杯は、脚部の破片である。141の手捏ね鉢は、推定口径2.9cmを測る。



第178図 竪穴住居34～39 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第179図 竪穴住居37～39 出土遺物 (1/2・1/3・1/4)



第180図 竪穴住居40～44 (1/100)

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居38 (第178・179図)

慶運寺南調査区西部で検出した竪穴住居で、壁体溝がなく、柱穴は4本、中央穴と床面を検出。床面の海拔高は、69.84mである。

遺物は、142～144の弥生土器とS8のサヌカイト製石鏃が出土している。142の大形甕は、口径17.6cmを測る。143の甕は、口径10.9cmを測る。144の鉢は、推定口径13.6cmを測り、円孔を穿つ。

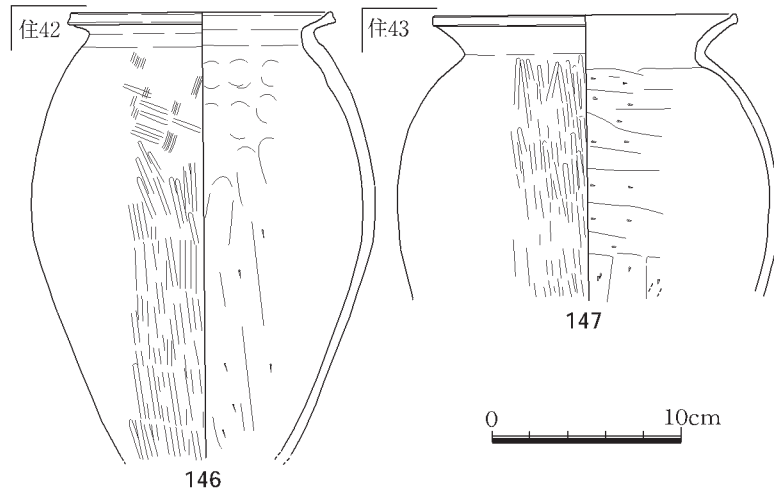
時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居39（第178・179図）

慶運寺南調査区西部で検出した竪穴住居で、壁体溝が一形に残存、柱穴は1本を検出。床面の海拔高は、69.75mである。

遺物は、145の弥生土器が出土している。145の甕は、口径17.2cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。



第181図 竪穴住居42・43 出土遺物（1/4）

竪穴住居40（第180図）

慶運寺南調査区西部で検出した段状の竪穴住居で、壁体溝、柱穴は未検出。床面の海拔高は、70.15mである。壁の高さは、11cmである。遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居41（第180図）

慶運寺南調査区西部で検出した段状の竪穴住居で、壁体溝、柱穴は未検出。床面の海拔高は、70.50mである。壁の高さは69cmある。遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居42（第180・181図）

慶運寺南調査区東部で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は、未検出。柱穴は、1本検出できた。床面の海拔高は、72.19mである。壁の高さは38cmある。

遺物は、146の弥生土器が出土している。146の甕は、口径13.6cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生中期と考えられる。

竪穴住居43（第180・181図）

慶運寺南調査区東部で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は、350cm検出。柱穴は、未検出。床面の海拔高は、70.38mである。

遺物は、147の弥生土器が出土している。147の壺は、口径15.9cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居44（第180図）

慶運寺南調査区東部で検出した竪穴住居で、壁体溝は、直線的に340cm残存。柱穴は、1本検出できた。床面の海拔高は、71.40mである。住居43を切っている。遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居45（第182図）

慶運寺南調査区東部で検出した半円形の竪穴住居で、壁体溝は、596cm検出。住居の直径は180cmである。柱穴は、未検出。床面の海拔高は、70.81mである。

遺物は、148～155の弥生土器が出土している。148の壺は、口径14.2cmを測る。149の甕は、推定口径22.5cmを測る。150の高杯は、短脚である。151～154は、鉢に分類できる。151の器台は、裾部に円

孔がある。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居46（第182・183図）

慶運寺南調査区東部で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は、580cm検出。住居の壁の高さは100cmもある。柱穴は、2本検出し、深さは21～25cmある。床面の海拔高は、70.47mである。

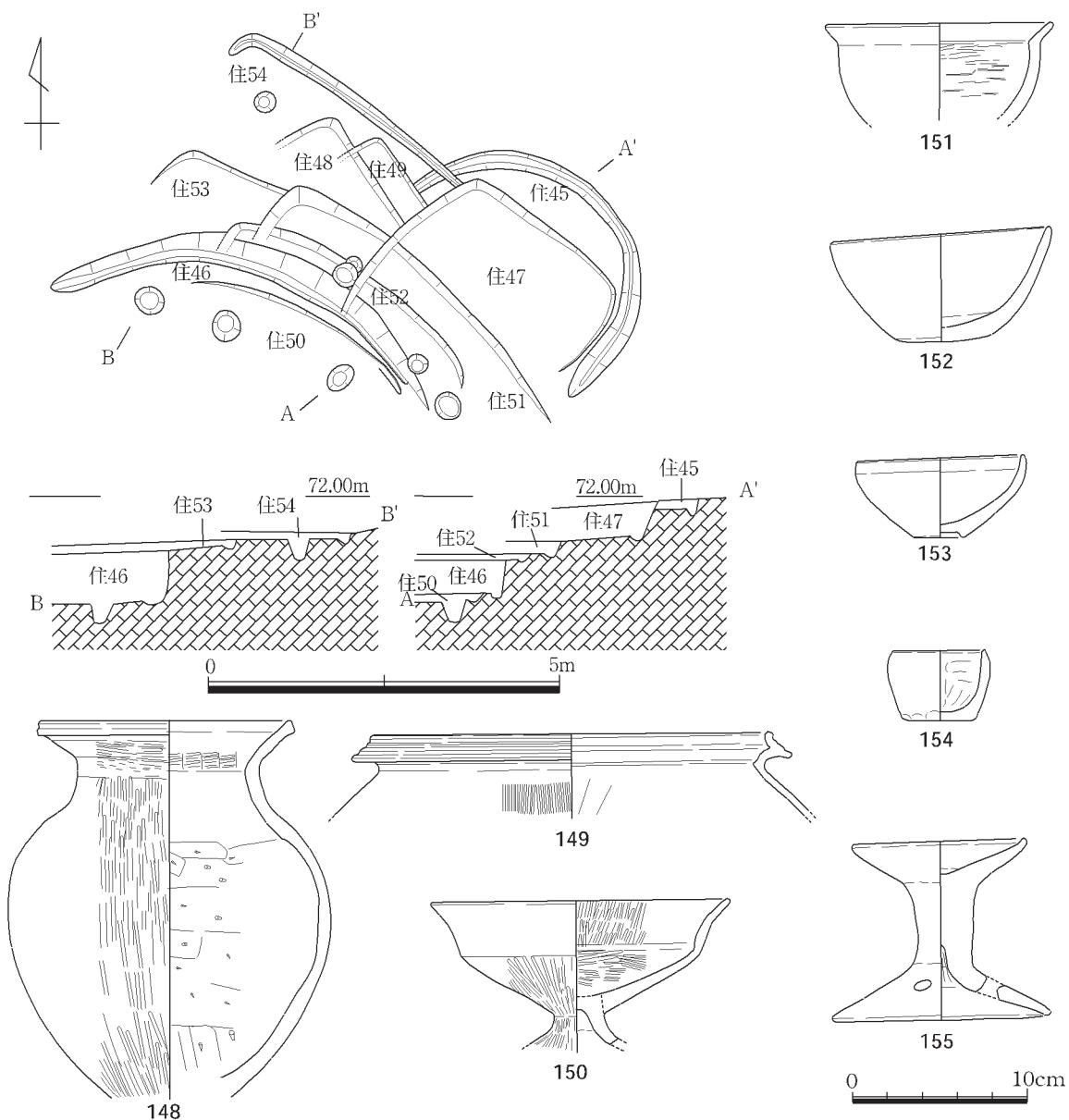
遺物は、156・157の弥生土器が出土している。156の高杯は、口径17.1cmを測る。157の広口壺は、玉ねぎ形の胴部片である。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

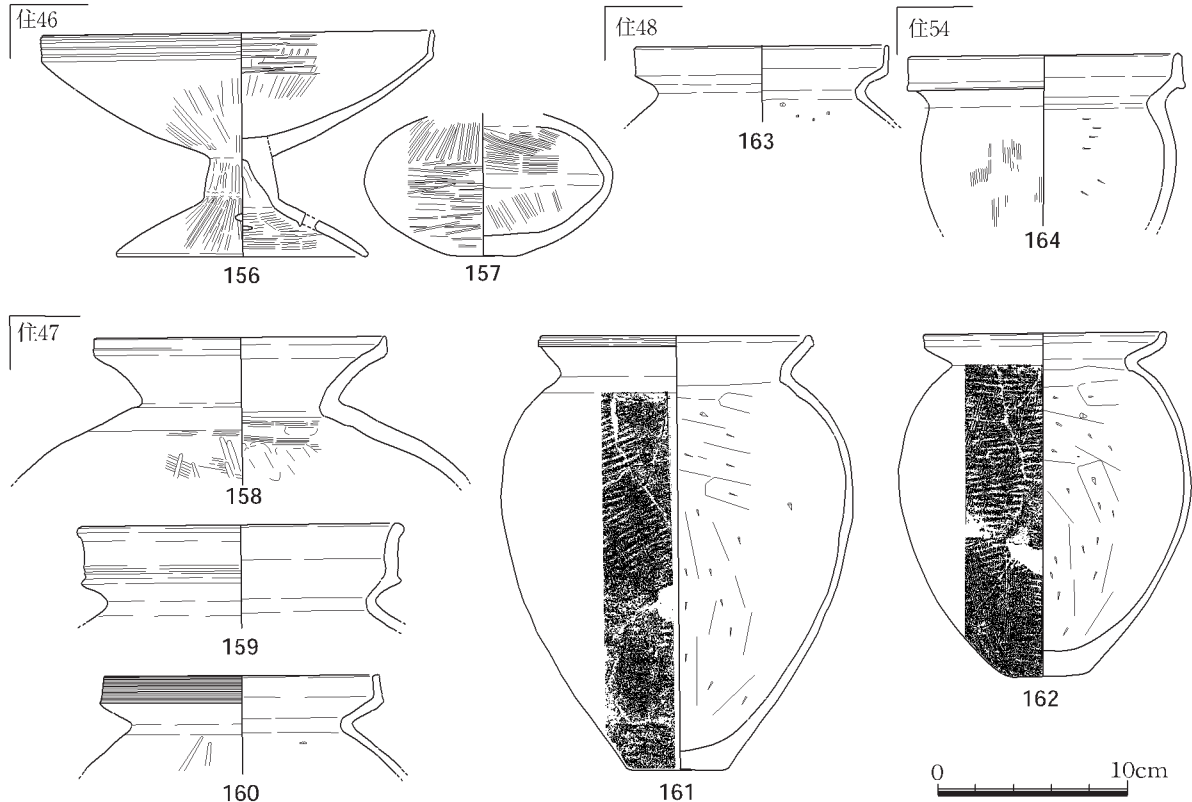
竪穴住居47（第182・183図）

慶運寺南調査区東部で検出した方形の竪穴住居で、住居45の中に納まる。壁体溝は、断面では検出。住居の壁の高さは27cmである。柱穴は、未検出。床面の海拔高は、71.43mである。

遺物は、158～162の弥生土器が出土している。158の壺は、推定口径15.2cmを測る。159の壺は、二



第182図 竪穴住居45～54 (1/100)・同45 出土遺物 (1/4)



第183図 竪穴住居46～54 出土遺物（1/4）

重口縁である。160の甕は、沈線文を口縁立ち上がり外面に施す。161・162の甕は、体部外面にタタキメが残存している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居48（第182・183図）

慶運寺南調査区東部で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は、断面で検出。住居47に切られている。柱穴は、未検出。床面の海拔高は、71.40mである。

遺物は、163の弥生土器が出土している。163の甕は、推定口径13.4cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居49（第182図）

慶運寺南調査区東部で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は、断面で検出。住居47に切られている。住居48の上層にあたる。柱穴は、未検出。床面の海拔高は、71.45mである。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居50（第182図）

慶運寺南調査区東部南端で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は、340cm検出。住居46の下層遺構にあたる。柱穴は、2本検出。床面の海拔高は、70.54mである。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居51（第182図）

慶運寺南調査区東部で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は、断面で検出。住居47に切られている。

柱穴は、2本検出。床面の海拔高は、71.17mである。住居の長軸は500cm、短軸は90cmを測る。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居52（第182図）

慶運寺南調査区東部で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は、断面で検出。住居51の下層遺構にあたる。柱穴は、2本検出。床面の海拔高は、71.09mである。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

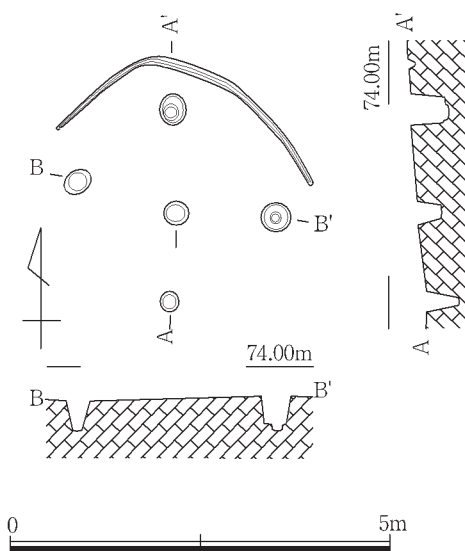
時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居53（第182図）

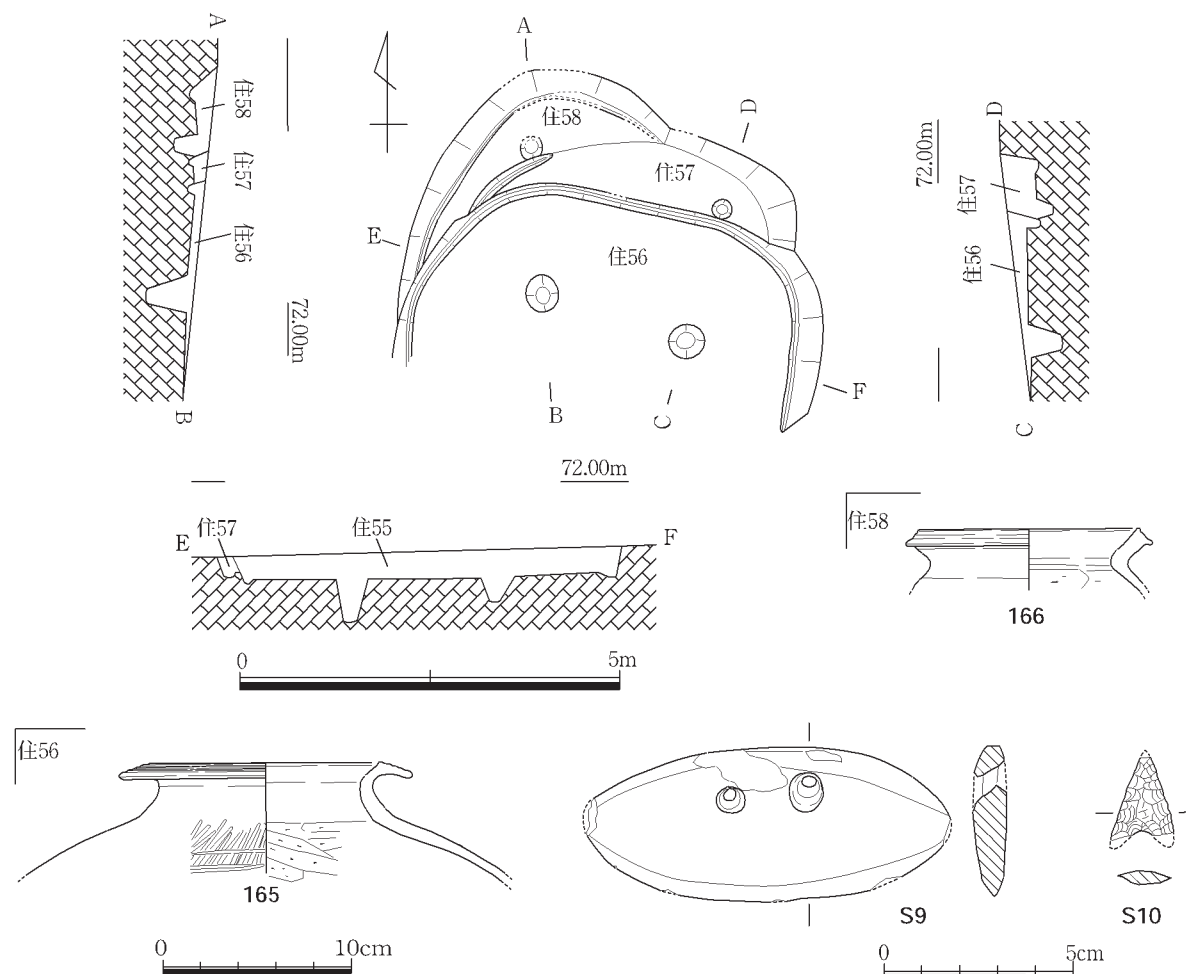
慶運寺南調査区東部で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は、断面で検出。住居51に切られる。柱穴は、未検出。床面の海拔高は、71.12mである。遺物は、弥生土器小片が出土している。時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居54（第182・183図）

慶運寺南調査区東部で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は、一形に検出。住居47に切られる。柱



第184図 竪穴住居55（1/100）



第185図 竪穴住居56～58（1/100）・出土遺物（1/2・1/4）

穴は、1本検出。床面の海拔高は、71.38mである。

遺物は、164の弥生土器が出土している。164の甕は、口径14.2cmを測る。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居55（第184図）

慶運寺南調査区北部で検出した隅丸方形の竪穴住居で、壁体溝は、一状に390cm残存し、柱穴は、4本、中央穴も検出している。床面の海拔高は、73.7mである。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居56（第185図）

慶運寺南調査区南部で検出した隅丸方形の竪穴住居で、壁体溝は、コの字状に残存し、住居の長軸560cm、短軸280cm、床面の海拔高は、70.7mである。柱穴は、2本検出している。住居2の下層で、住居57・58を切っている。

遺物は、165の弥生土器と S9・S10 の石器が出土している。165の壺は、推定口径12.1cmを測る口縁端部が垂れ下がる土器である。S9の石包丁は、ホルンフェルス磨製である。S10の石鏃は、サヌカイト打製である。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居57（第185図）

慶運寺南調査区南部で検出した隅丸方形の竪穴住居で、壁体溝は、西角に一部分残存し、住居の長軸430cm、短軸100cm、床面の海拔高は、70.7mである。柱穴は、1本検出している。住居2の下層で、住居58を切って、住居56に切られている。

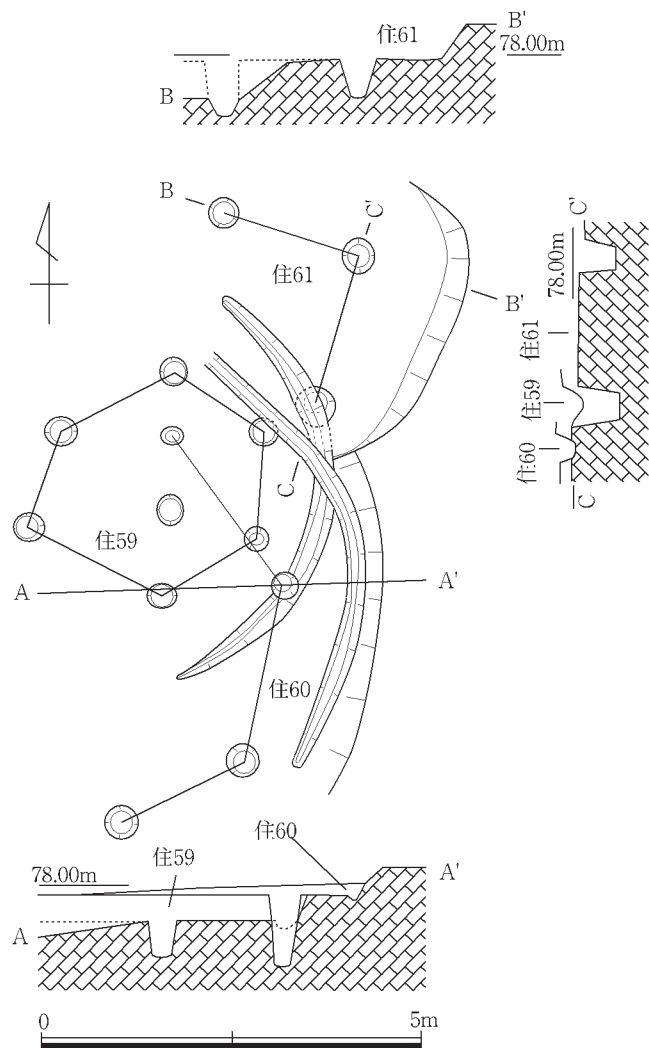
遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居58（第185図）

慶運寺南調査区南部で検出した隅丸方形の竪穴住居で、壁体溝は、西角に一部分残存し、住居の長軸400cm、短軸250cm、床面の海拔高は、70.8mである。柱穴は、1本検出している。住居2の下層で、住居57に切られている。

遺物は、166の弥生土器が出土している。166の甕は、推定口径11.6cmを測る。時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。



第186図 竪穴住居59～61（1/100）

竪穴住居59（第186図）

慶運寺東調査区南部で検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は、東側で弧状に残存し、住居の長軸520cm、短軸420cm、床面の海拔高は、77.53mである。柱穴は、6本検出している。

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居60（第186図）

慶運寺東調査区南部で検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は、東側で弧状に残存し、住居の長軸520cm、短軸420cm、床面の海拔高は、77.87mである。柱穴は、4本検出している。

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居61（第186図）

慶運寺東調査区南部で検出した隅丸方形の竪穴住居で、壁体溝は未検出。住居の長軸370cm、短軸360cm、床面の海拔高は、77.91mである。柱穴は、3本検出している。

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居62（第187図）

慶運寺東調査区北部で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は未検出。住居の長軸250cm、短軸110cm、床面の海拔高は、80.09mである。柱穴は、未検出である。

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居63（第187図）

慶運寺東調査区北部で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は未検出。住居の長軸280cm、短軸50cm、床面の海拔高は、80.75mである。柱穴は、未検出である。

遺物は、弥生土器片が出土している。

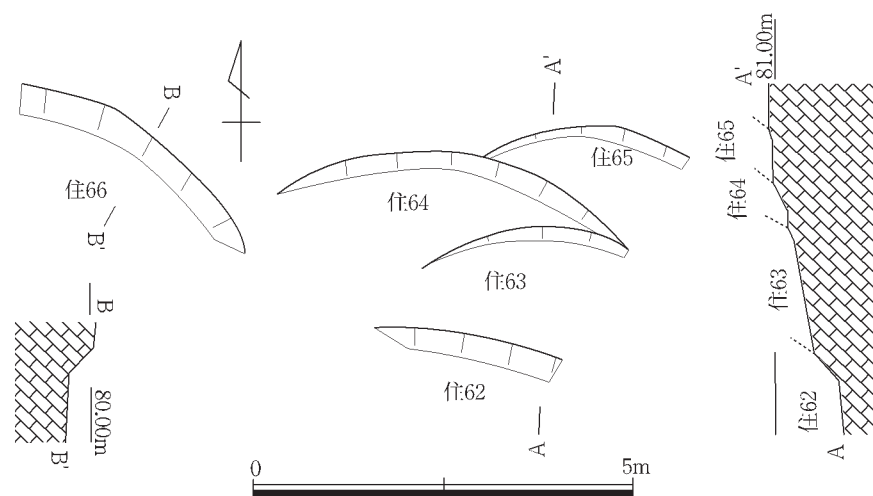
時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居64（第187図）

慶運寺東調査区北部で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は未検出。住居の長軸470cm、短軸70cm、床面の海拔高は、80.84mである。柱穴は、未検出である。

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。



第187図 竪穴住居62～66（1/100）

竪穴住居65（第187図）

慶運寺東調査区北部で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は未検出。住居の長軸270cm、短軸70cm、床面の海拔高は、81.04mである。柱穴は、未検出である。

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居66（第187図）

慶運寺東調査区北部で検出した弧状の竪穴住居で、壁体溝は未検出。住居の長軸370cm、短軸130cm、床面の海拔高は、79.7mである。柱穴は、未検出である。

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居67（第188・189図）

谷奥調査区北端部で検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は半円に検出できた。西側は現代の圃場整備事業で破壊されていた。住居の長軸690cm、短軸420cm、床面の海拔高は、68.12mである。主柱穴4本のうち、3本を検出できた。

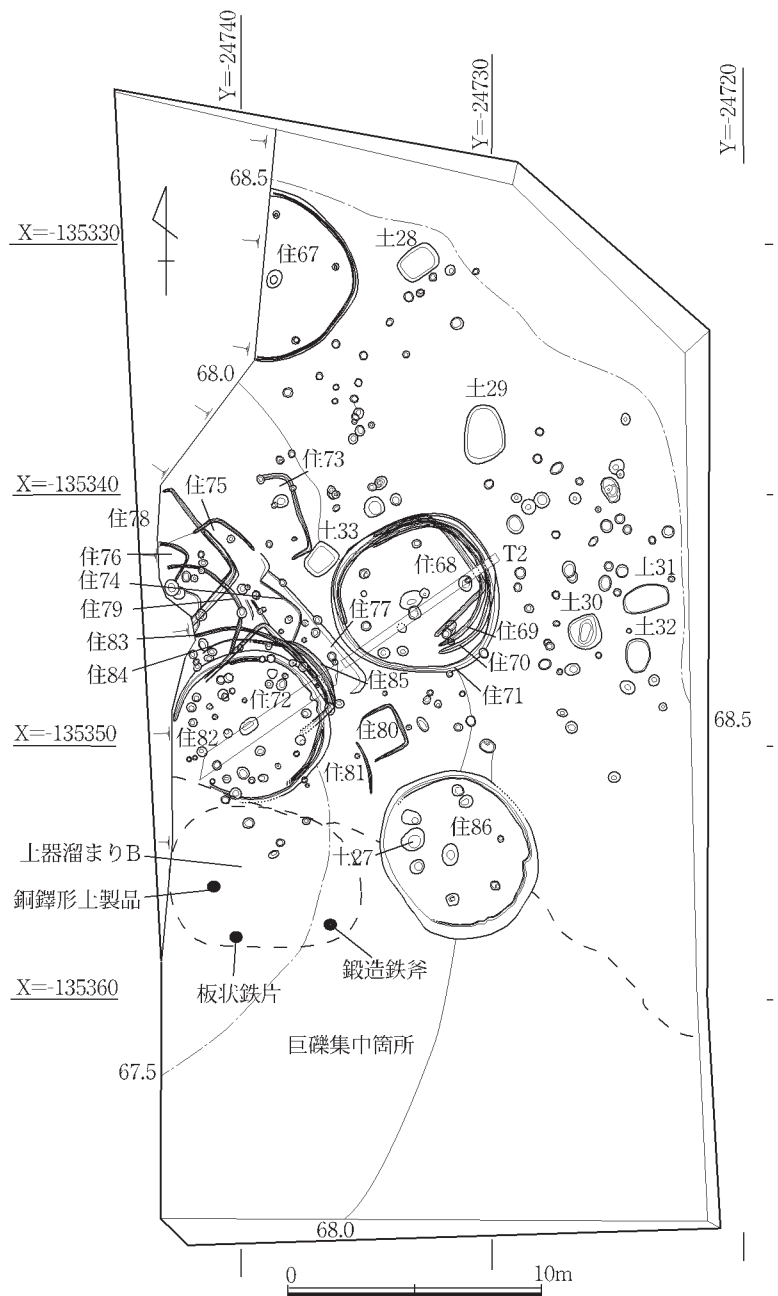
中央穴も存在した。住居は焼失していたため、台石や石器は強い火力で割れた状態で床面で出土している。

遺物は、167～172の弥生土器と S11～S19 の石器が出土している。167の甕は、推定口径14.3cmを測るくの字状口縁の土器である。168の甕は、推定口径20.0cmを測る。169・170の甕は、推定口径11.0cmを測る。171の高杯は、口径21.0cm、器高17.3cmを測る。S11～S15 の石鏃は、サヌカイト打製である。S16 の石器は、玢岩製砥石である。S17 の石器は、ホルンフェルス製砥石である。S18・19の石器は、玢岩製石斧である。

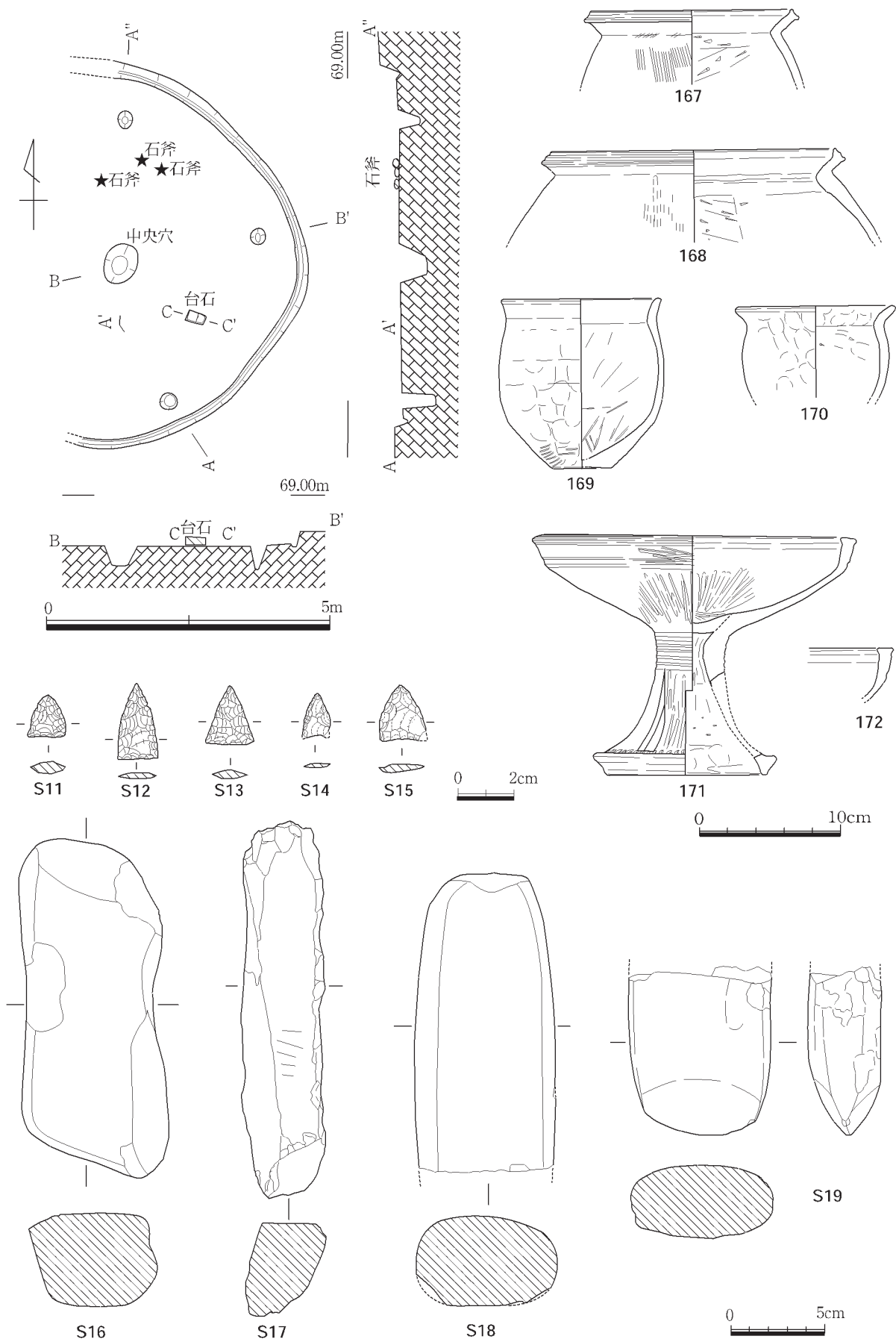
時期は、遺物の特徴から弥生後期初頭と考えられる。

竪穴住居68（第190図）

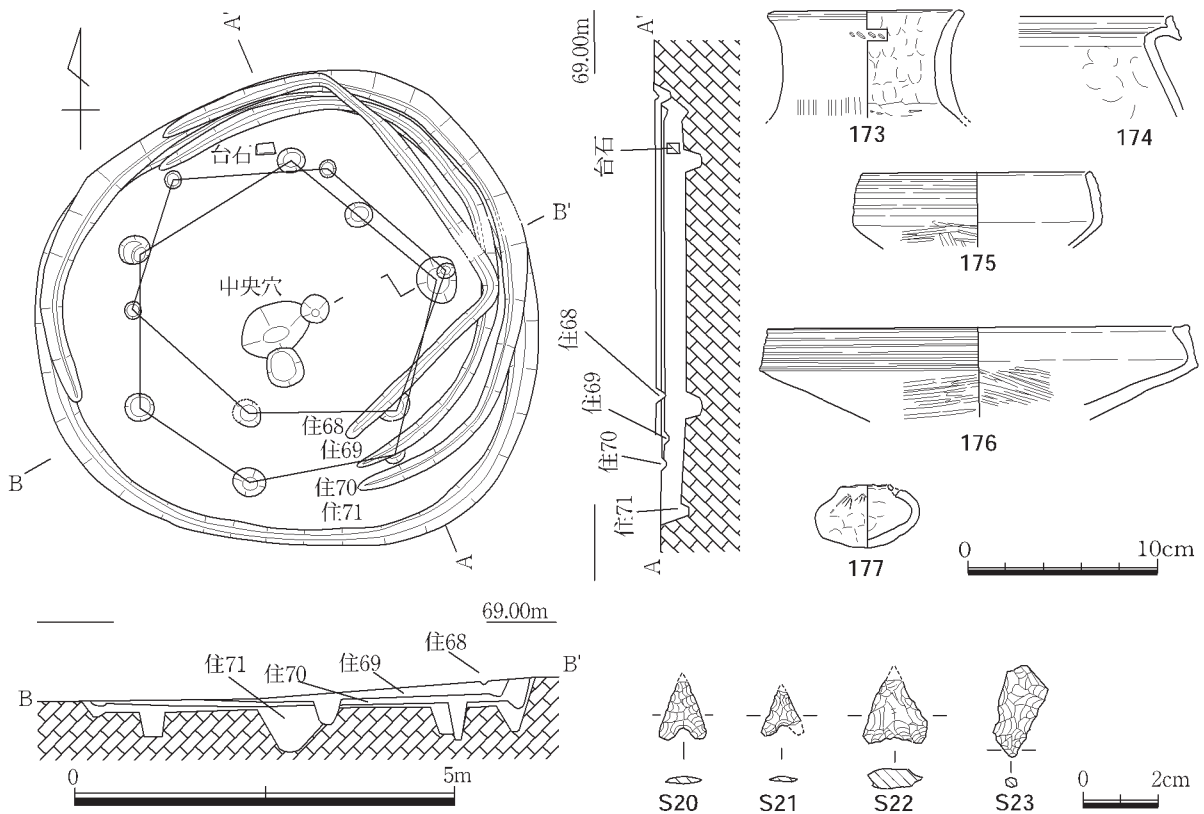
谷奥調査区中央部で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝はコの字状に検出できた。住居の長軸480cm、短軸300cm、床面の海拔高は、68.20mである。主柱穴は、未検出。



第188図 谷奥調査区 遺構配置 (1/300)



第189図 竪穴住居67 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)



第190図 縦穴住居68～71 (1/100)・同71 出土遺物 (1/2・1/4)

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

縦穴住居69 (第190図)

谷奥調査区中央部で検出した円形の縦穴住居で、壁体溝は半円形に検出できた。住居の長軸500cm、短軸300cm、床面の海拔高は、68.11mである。主柱穴は、4本と考えられる。住居68の下層にあたり、住居70の上層にあたる。中央穴を持つが特定できない。

遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

縦穴住居70 (第190図)

谷奥調査区中央部で検出した円形の縦穴住居で、壁体溝は半円形に検出できた。住居の長軸550cm、短軸330cm、床面の海拔高は、68.11mである。主柱穴は、6本と考えられる。住居69の下層にあたり、住居71の上層にあたる。中央穴を持つが特定できない。

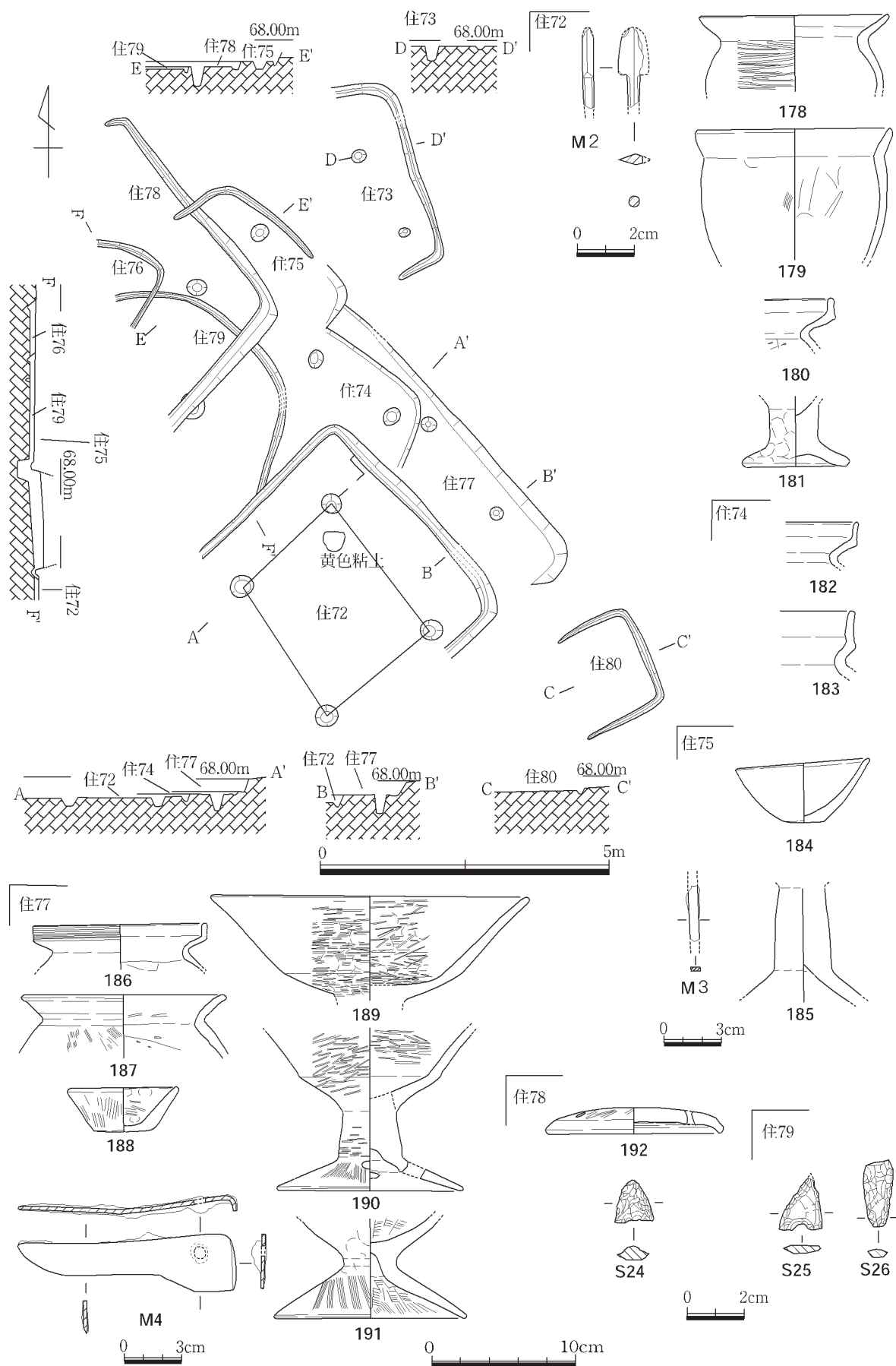
遺物は、弥生土器片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

縦穴住居71 (第190図)

谷奥調査区中央部で検出した円形の縦穴住居で、壁体溝は完全円形に検出できた。住居の直径650cm、床の面積は33.17㎡、床面の海拔高は、67.86mである。主柱穴は、6本と考えられる。住居70の下層にあたり、住居68～70の最下層遺構になる。楕円形の中央穴を持っている。

遺物は、173～177の弥生土器と S20～S23 のサヌカイト打製石鏃が出土している。173の壺は、推定



第191図 竪穴住居72～80 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

口径9.7cmを測り、口縁に米粒大の刺突文のある土器である。152の甕は、口縁部小片。175の高杯は、推定口径12.0cmを測る。176の高杯は、推定口径22.0cmを測る。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居72（第191図）

谷奥調査区中央部西部、住居71の西で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝はコの字状に検出できた。住居の長軸440cm、短軸350cm、床面の海拔高は、67.61mである。主柱穴は、4本検出。北東柱穴の脇には黄色粘土の塊が残存していた。土器の原料粘土であろうか。本遺跡では初見である。

遺物は、178～181の弥生土器と M2 の銅鏃が出土している。178の甕は、推定口径13.1cmを測り、タタキメが残る。179の鉢は、推定口径13.5cmを測る。180の甕は、口縁細片で、二重口縁である。181は、台付鉢か小形器台であろう。

時期は、遺物の特徴から弥生後期後葉と考えられる。

竪穴住居73（第191図）

谷奥調査区中央部西部、住居72の北で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝はコの字状に検出できた。住居の長軸360cm、短軸110cm、床面の海拔高は、67.89mである。主柱穴は、2本検出した。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居74（第191図）

谷奥調査区中央部西部、住居72と住居73の間に検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は断面で検出できた。住居の長軸240cm、短軸130cm、床面の海拔高は、67.39mである。主柱穴は、2本検出した。

遺物は、182・183の弥生土器片が出土している。182・183の甕は、口縁細片で、二重口縁である。時期は、土層断面から住居72より新しく住居77より古い弥生後期後葉と考えられる。

竪穴住居75（第191図）

谷奥調査区中央部西部、住居73の西で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝はコの字状に検出できた。住居の長軸320cm、短軸120cm、床面の海拔高は、67.63mである。主柱穴は、1本検出した。

遺物は、184・185の弥生土器と M3 の鉄器が出土している。184の小鉢は、口径9.1cmを測る。185の高杯は、やや長脚である。M3 の鉄器は、鉄鏃の茎であろう。

時期は、遺物の特徴から弥生後期後葉と考えられる。

竪穴住居76（第191図）

谷奥調査区中央部西端、住居75の西で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は一状に検出できた。住居の長軸130cm、短軸120cm、床面の海拔高は、67.47mである。主柱穴は、未検出である。

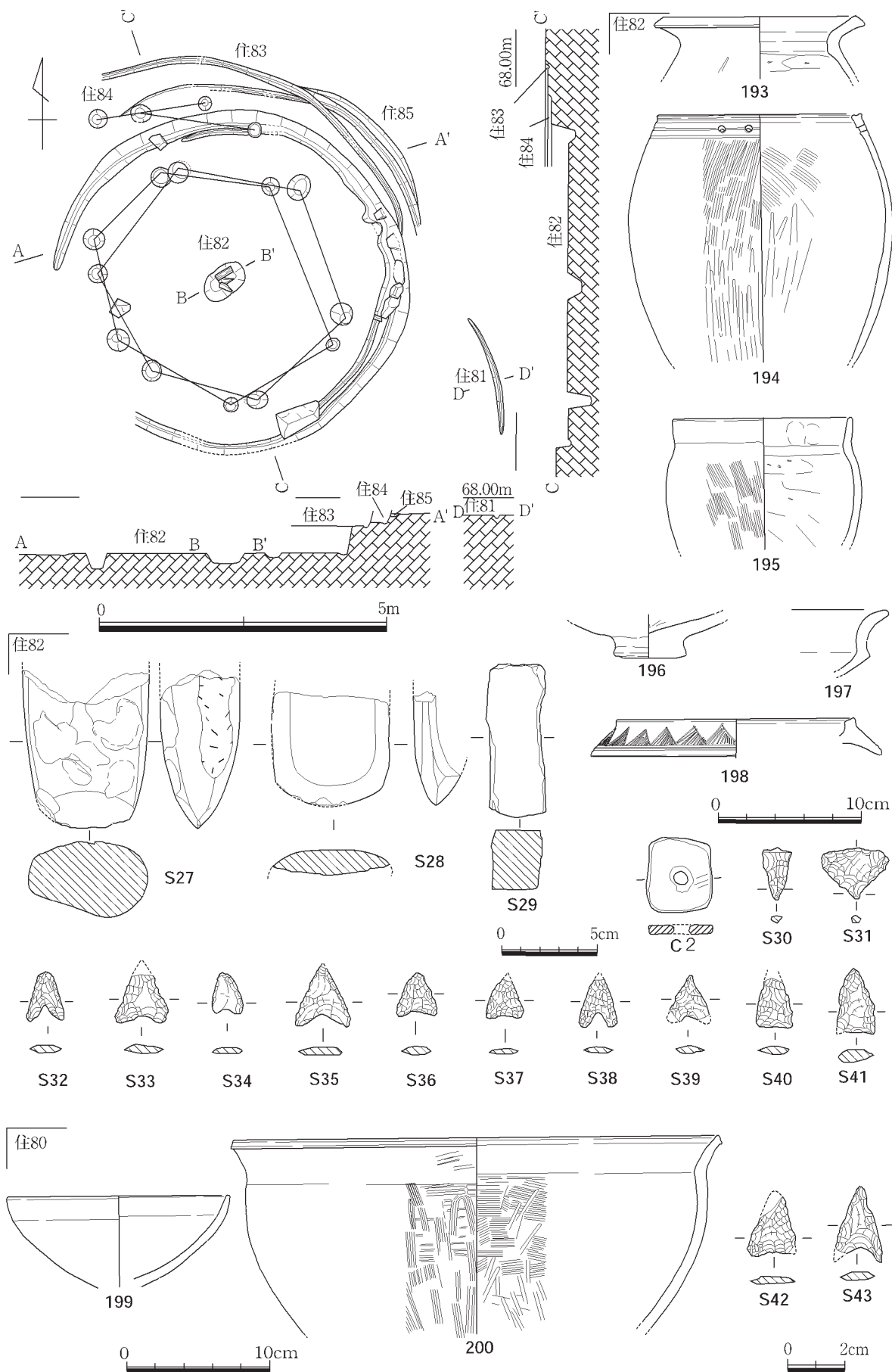
遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期後葉と考えられる。

竪穴住居77（第191図）

谷奥調査区中央部西部、住居72の東で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝は断面で検出できた。住居の長軸600cm、短軸100cm、床面の海拔高は、67.76mである。主柱穴は、2本検出。

遺物は、186～191の弥生土器と M4 の鉄鎌が出土している。186の甕は、推定口径12.0cmを測り、櫛描き沈線を有す。187の甕は、推定口径14.0cmを測る。188の小鉢は、手捏ねである。189～191は高杯で、口縁は45度に開いている。M4 の鉄鎌は、完形品で、長さ11.5mmである。



第192図 竪穴住居81～85 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

時期は、住居72より古い、遺物の特徴から弥生後期後葉と考えられる。

竪穴住居78（第191図）

谷奥調査区中央部西端部、住居75の西で検出した方形の竪穴住居で、壁体溝はコの字状に検出できた。住居の長軸480cm、短軸280cm、床面の海拔高は、67.54mである。主柱穴は、1本検出した。

遺物は、192の弥生土器と S24 のサヌカイト製石鏃が出土している。192の蓋は、口径11.8cmを測る。S24 のサヌカイト製石鏃は、最大長15.0mmを測る。

時期は、住居75より古く、遺物の特徴から弥生後期後葉と考えられる。

竪穴住居79（第191図）

谷奥調査区中央部西端部、住居78の西南下層で検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は弧状に検出できた。住居の長軸430cm、短軸190cm、床面の海拔高は、67.54mである。主柱穴は、1本検出した。

遺物は、弥生土器片と S25・S26 のサヌカイト製石器が出土している。S25 の石鏃は、最大長18.0mmを測る。S26 の石器は、最大長23.0mmを測り、石錐と考えられる。

時期は、住居78より古く、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居80（第191図）

谷奥調査区中央部西部、住居77の南で検出した方形の小形竪穴住居で、壁体溝はコの字状に検出できた。住居の長軸190cm、短軸160cm、床面の海拔高は、67.72mである。主柱穴は、未検出。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居81（第192図）

谷奥調査区中央部西部、住居77の西で検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は弧状に検出できた。住居の長軸210cm、短軸30cm、床面の海拔高は、67.68mである。主柱穴は、未検出。

遺物は、弥生土器小片が出土している。土器溜まりBの遺物の一部はこの遺構に伴うものがある。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

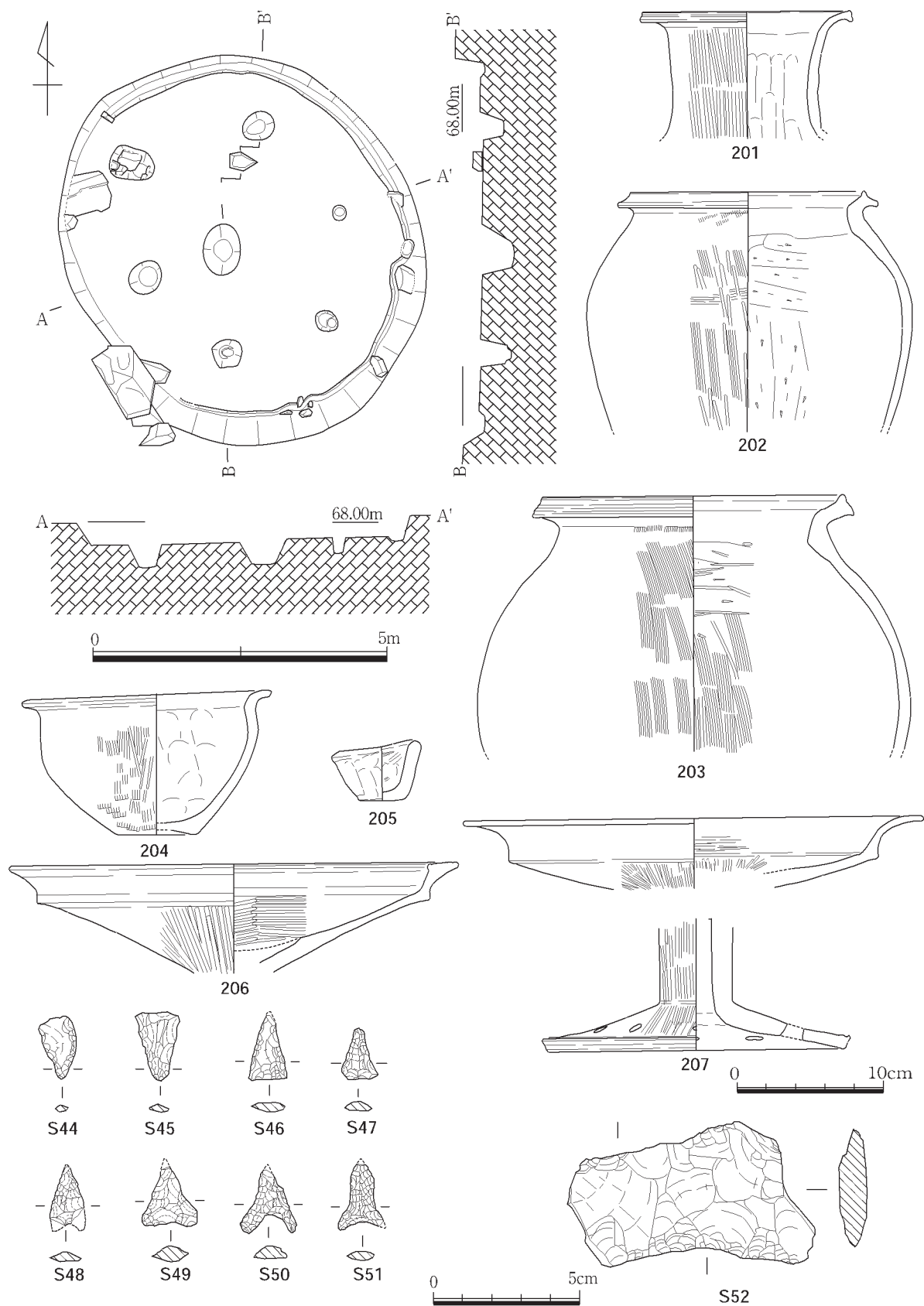
竪穴住居82（第192図）

谷奥調査区中央部西部、住居72の下層で検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は西端の一部を除いて検出できた。この付近から南側は土石流による巨礫集中地域になっているので、竪穴住居を掘削するのにその巨礫を取り除く必要があったと推測するが、動かせない礫はそのまま残して壁体溝を歪めて掘っていることが判る。住居の直径600cm、床面積28.26㎡、床面の海拔高は、67.16m、壁の高さは48cmである。主柱穴6本と中央穴を検出。2軒の住居が重なっている。

遺物は、193～198の弥生土器、S27～S41 の石器、C2 の土製品が出土している。193の甕は、推定口径13.4cmを測る。194の鉢は、推定口径14.0cmを測り、口縁下部に円孔を持つ。195の鉢は、推定口径12.2cmを測る。196の底部は、鉢か。197は、高杯の口縁部破片。198は、壺か器台の口縁部破片で鋸歯文を付ける。S27 の玢岩製磨製石斧は、最大長83.0mmを測る。S28 の閃緑岩製磨製石斧は、最大長60.0mmを測る。S29 の流紋岩製砥石は、1面使用し、最大長81.0mmを測る。S30～S41の石器は、サヌカイト製品で、S30・S31は、石錐である。S32～S41石鏃である。C2の土製品は、土器の体部破片を加工して、円形の紡錘車を作ろうとした未製品であろう。

時期は、遺物の特徴から弥生後期中葉と考えられる。

竪穴住居83（第193図）



第193図 竪穴住居86 (1/100)・出土遺物 (1/2・1/4)

竪穴住居83（第192図）

谷奥調査区中央部西部、住居82の上層検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は弧状に検出できた。住居の長軸600cm、短軸160cm、床面の海拔高は、67.44mである。主柱穴は、2本を検出している。

遺物は、199・200の弥生土器、S42・S43のサヌカイト製石鏃が出土している。199の高杯か鉢は、推定口径15.4cmを測る。200の大形鉢は、推定口径24.2cmを測る。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居84（第192図）

谷奥調査区中央部西部、住居82の上層、住居83の下層で検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は弧状に検出できた。住居の長軸560cm、短軸160cm、床面の海拔高は、67.38mである。主柱穴は、2本検出。

遺物は、出土していない。

時期は、遺構の切り合いから弥生後期と考えられる。

竪穴住居85（第192図）

谷奥調査区中央部西部、住居82の上層、住居84の下層で検出した円形の竪穴住居で、壁体溝は弧状に検出できた。住居の長軸330cm、短軸60cm、床面の海拔高67.67mである。主柱穴は、2本検出。

遺物は、弥生土器小片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

竪穴住居86（第193図）

谷奥調査区南部、遺構検出最南端で検出した楕円形の竪穴住居で、壁体溝は西端の一部を除いて検出できた。この付近は住居82よりさらに土石流による巨礫集中地域になっているので、竪穴住居を掘削するのに動かせない礫はそのまま残して壁体溝を歪めて掘ったり、巨石を掘り沈めたりしている。住居の長軸690cm、短軸600cm、床面積32.50㎡、床面の海拔高67.70m、壁の高さは最大36cmである。主柱穴6本と中央穴を検出している。

遺物は、201～207の弥生土器、S44～S52のサヌカイト製石器が出土している。201の長頸壺は、口径14.1cmを測る。202の壺は、口径15.8cmを測る。203の壺は、推定口径20.8cmを測る。204の鉢は、口径16.2cmを測る。205は、手捏ねの鉢である。206の高杯は後期初頭の特徴をもつ。207の高杯は後期中葉の特徴をもつ。S44・S45は、石錐である。S46～S51石鏃である。S52は、削器である。

この住居の廃棄された時期は、遺物の特徴から弥生後期中葉と考えられる。（浅倉）

4 土壇

土壇1（第151・194図）

慶運寺北調査区中央付近、段状遺構1のすぐ下方で検出した。土壇4からの距離は1mである。平面形は楕円形を呈し、長軸108cm、短軸50cm、深さ32cmを測る。底面海拔高は81.34mである。検出面で土器片を多数確認したが、図化できるものはなく、時期は特定できない。おそらく、近接する段状遺構1と同時期で、後期中頃に属すると考える。

土壇2（第151・194図）

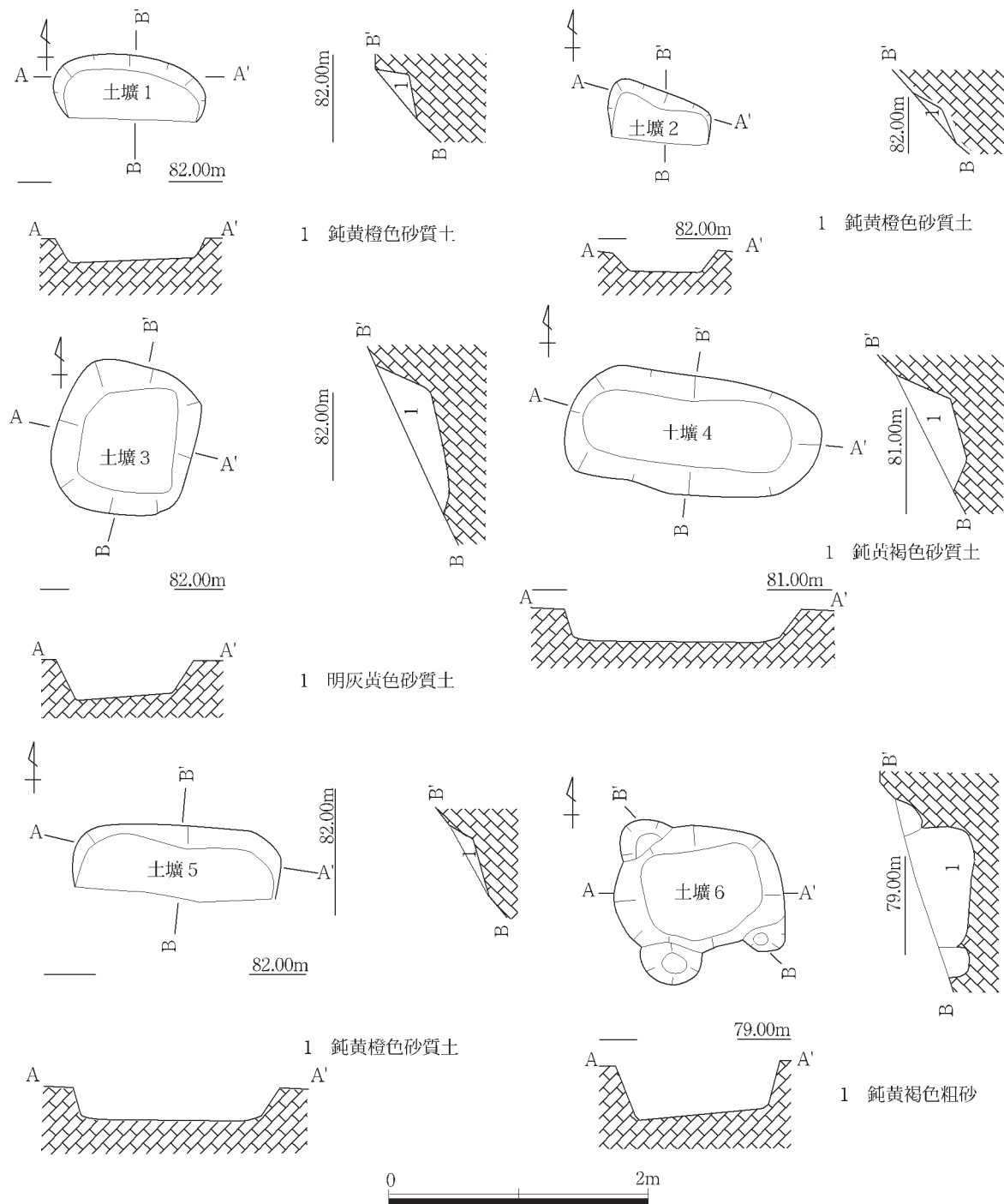
慶運寺北調査区中央付近、段状遺構2のすぐ下方で検出した。土壇1からの距離は6mである。平面形は長方形を呈し、長軸90cm、短軸45cm、深さ33cmを測る。底面海拔高は81.63mである。出土遺物が無いため時期は特定できないが、段状遺構2と同じ後期中頃に属すると想定する。

土壙3（第151・194図）

慶運寺北調査区中央付近、段状遺構1西端のすぐ下方で検出した。土壙1からの距離は2mであり、土壙4と隣接する。平面形は正方形を呈し、長軸110cm、短軸110cm、深さ65cmを測る。底面海拔高は81.03mである。出土遺物が無いため時期は特定できないが、段状遺構1と同じ後期中頃に属すると想定する。

土壙4（第151・194図）

慶運寺北調査区中央付近、段状遺構1西端のすぐ下方で検出した。土壙1からの距離は1mであり、土壙3と隣接する。平面形は長楕円形を呈し、長軸194cm、短軸93cm、深さ57cmを測る。底面海拔高は



第194図 土壙1～6（1/50）

80.52mである。出土遺物は皆無である。土壌1・3・4は段状遺構1に伴うと考える。

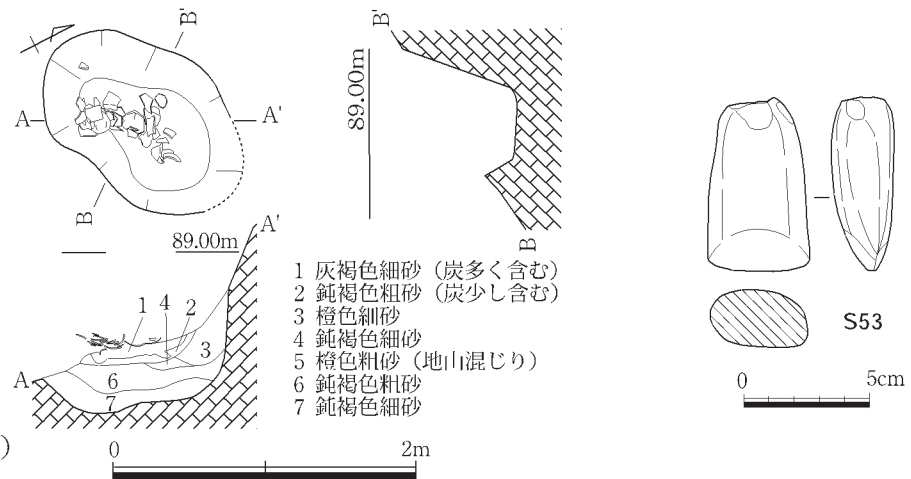
土壌5（第151・194図）

慶運寺北調査区中央付近、段状遺構2の2m下方で検出した。土壌2からの距離は1.5mである。平面形は長方形を呈し、長軸160cm、短軸55cm、深さ26cmを測る。底面海拔高は80.86mである。土器等の遺物は検出できなかったが、段状遺構2と同時期で後期中頃に属すると考える。（重根）

土壌6（第151・194図）

土壌6は、段状遺構8の下方に位置する。規模は130×95cm、深さ42cmを測り、方形を呈する。

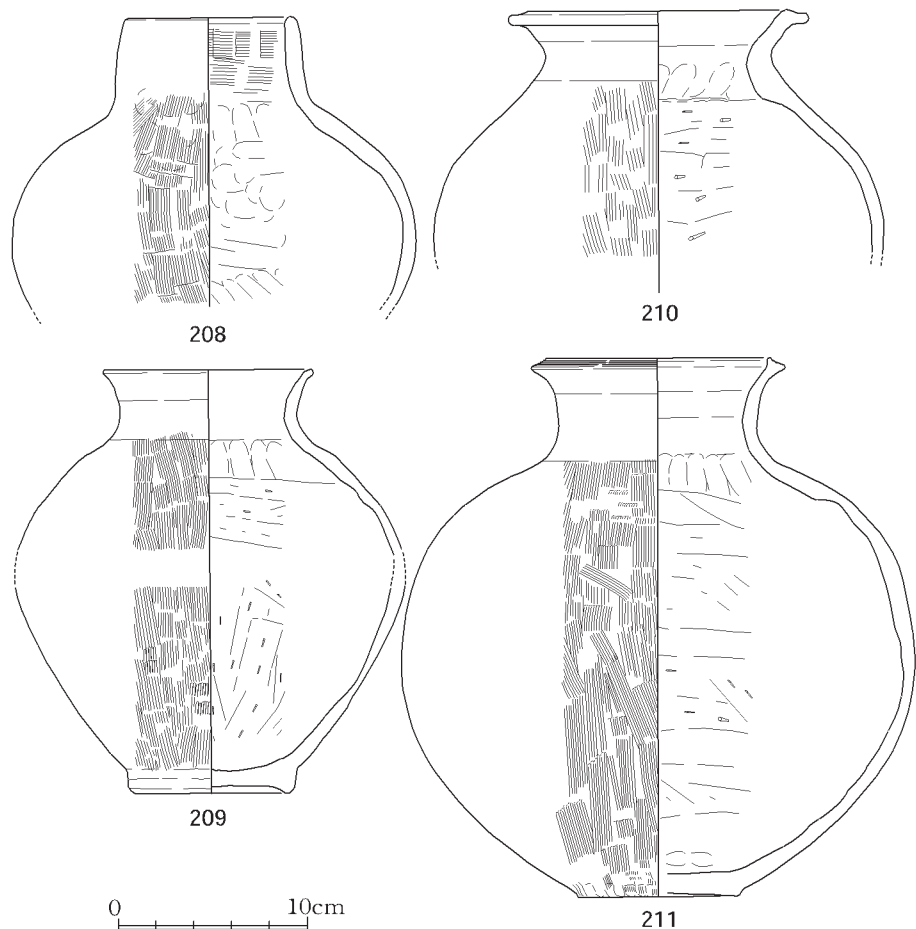
土壌の隅に重複して認められたピットは、いずれも土壌を切っていることを確認できた。



土壌7（第151・195図）

土壌7は、段状遺構8と重複して位置する。規模は152×97cm、深さ40cmほどを測り、平面形態は楕円形を呈する。

なお、断面図の状態から本来の深さは、これよりも深くなると思われる。プラン検出時の上面には、208～211の土器が認められた。土器は、同一面上に認められていることから段状遺構に伴うことが想定された。しかしながら、当該遺構の床面と考



第195図 土壌7（1/50）・出土遺物（1/3・1/4）

えられる面よりも高い位置で認められたが、土壌に伴うものとした。

出土遺物は、208～211のいずれも壺である。208は、口径8.5cmを測り、直口する口縁部を有するものである。210は、口径11cm、底部径8.2cmを測り、緩やかに外反する頸部で、端部は丸くおさめる。210は、口径14cmを測り、口縁端部を外方へ拡張する。211は、口径12cm、器高28.3cm、底部径8.6cmを測り、口縁端面に沈線を施す。

土壌8（第151・196図）

土壌8は、土壌5の下方に位置する。規模は215×80cm、深さ46cmを測り、楕円形を呈する。埋土中には、礫と炭化材が多く認められている。土壌は、丘陵斜面に対し直行する状態で検出されたことから、斜面下方側にあたる南端はどうか立ち上がりを確認することができた。土壌内の北側には、長さ65×10cmの平石が据えられるように認められた。この他にもこれと同様ではあるが、厚みのある石が東側に、これ以外に人頭大の角礫が検出されている。これらの石は、土壌を囲う内容ではなく、平面的におかれた状態として把握された。

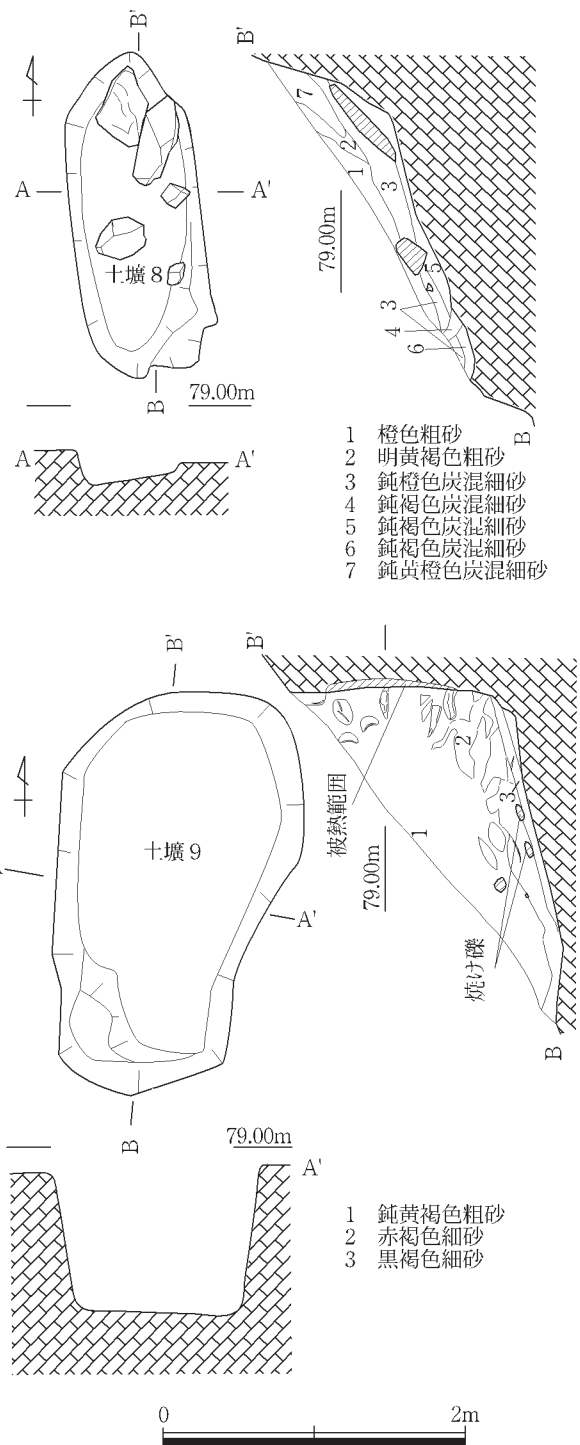
土壌埋土は、3～6層において炭が多く認められた5層は、細かい炭化粒が底面に堆積している状況である。しかしながら、4層は3mm、5層は5mm大の炭化材が含まれていた。

土壌9（第151・196図）

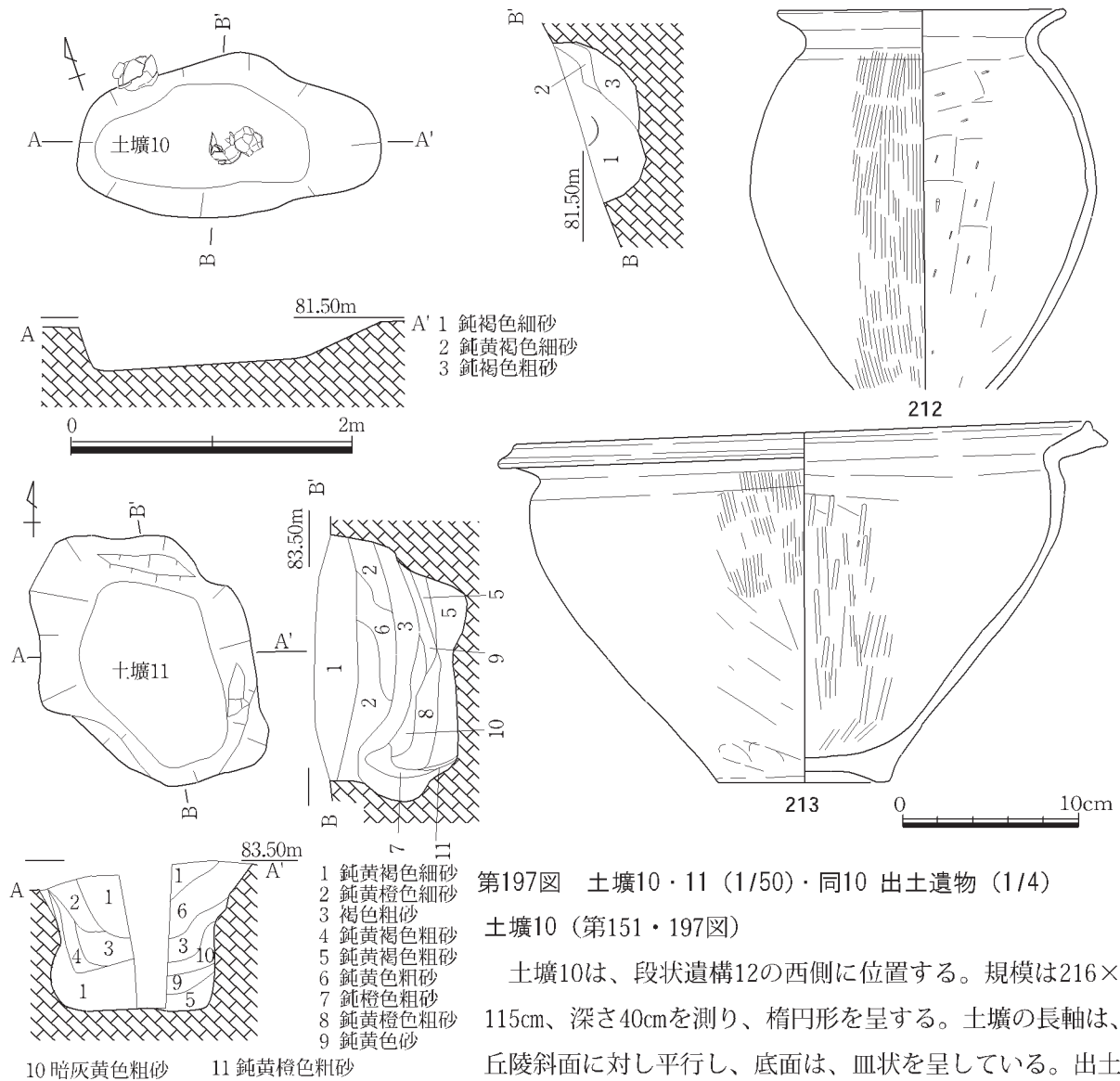
土壌9は、土壌8の東側に位置する。規模は253×135cm、深さ105cmを測り、楕円形を測る。土壌は、丘陵斜面に対し直行する状態で検出されたことから、斜面下方側になる南壁の立ち上がりは、わずかに確認することができた。

土壌の北壁面は、火による被熱部分が顕著であり、その影響は壁面の厚さ5cmにわたり影響が認められた。また、底面には厚さ6cmほどの炭が確認されている。1層中には、2層がブロック状に認められる。

当該土壌は、土壌8に比べ顕著に火の影響を認めるのである。具体的には、時期を判断するものがなく不詳ではあるが、火葬骨の検出から、これらに伴う可能性が考慮される。



第196図 土壌8・9 (1/50)



第197図 土壙10・11 (1/50)・同10 出土遺物 (1/4)

土壙10 (第151・197図)

土壙10は、段状遺構12の西側に位置する。規模は216×115cm、深さ40cmを測り、楕円形を呈する。土壙の長軸は、丘陵斜面に対し平行し、底面は、皿状を呈している。出土遺物は212の甕と213の鉢である。

甕は、土壙埋土上層から認められたが、鉢は土壙プラン検出面上で検出されていることから、上方からもたらされたと判断される。212は、口縁部をくの字状に屈曲させ、端部は丸く納める。内面ヘラケズリは、頸部から行われている。213は、口縁端部を肥厚させ、端面に凹線を施す。

土壙11 (第150・197図)

土壙11は、墳丘墓の南西隅に位置する。規模は213×143cm、深さ107cmを測り、不整の楕円状を呈する。当初は、墳丘墓の主体部と想定したが、一部の壁面が外に決ることと、列石がこの上に来ることが認められることから伴わないものと判断している。当該土壙は、他の土壙と異なり一部の壁が掘り方よりも外側にくることが認められている。この部分は、掘り方の半ばほどで決るように掘り込まれている。先に記したように、墳丘墓には伴わないが出土遺物がなく、時期の判断ができない。しかしながら、列石の一部から列石の一部がプラン検出時に認められたことにより、土壙の埋没後に墳丘墓が造成されたものと考えられる。

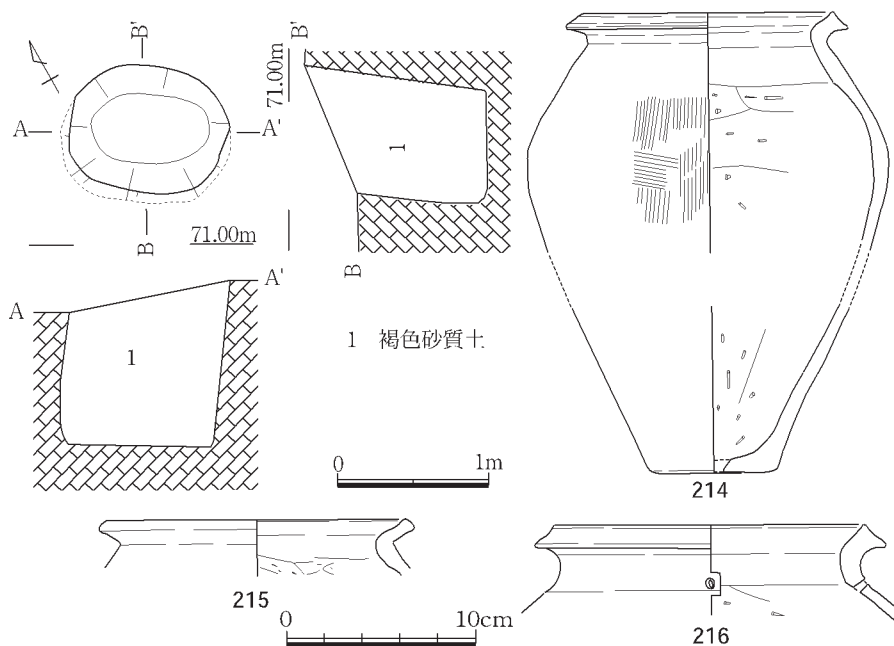
(下澤)

土壙12 (第166・198図)

慶運寺南調査区南西部、住居36と住居41の交点で検出した楕円形で、わずかに袋状を呈した土壙である。長軸104cm、短軸85cm、深さ126cmを測る。

遺物は、214～216の弥生土器が出土している。214の甕は、口径13.2cmである。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。



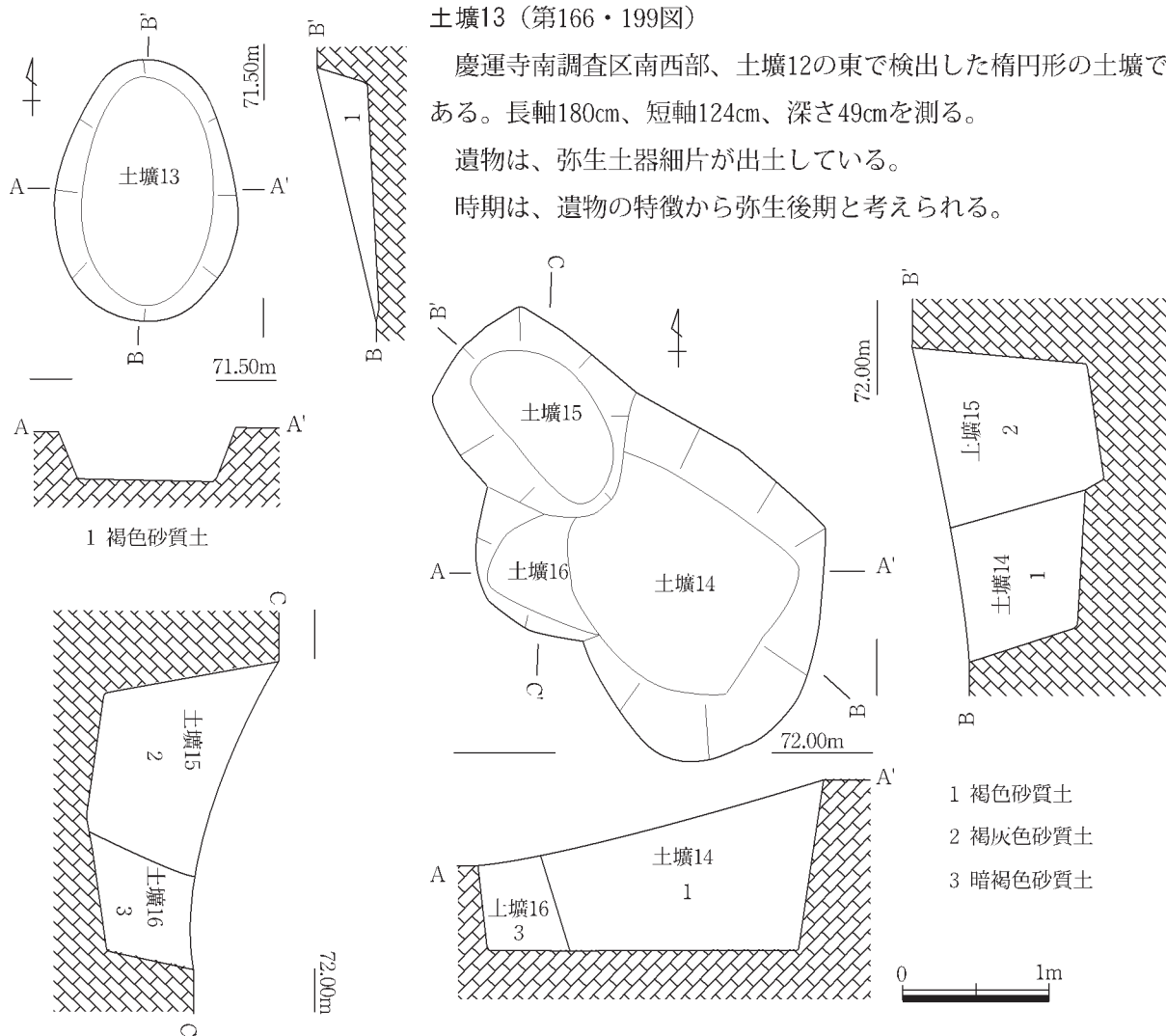
第198図 土壙12 (1/50)・出土遺物 (1/4)

土壙13 (第166・199図)

慶運寺南調査区南西部、土壙12の東で検出した楕円形の土壙である。長軸180cm、短軸124cm、深さ49cmを測る。

遺物は、弥生土器細片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。



第199図 土壙13～16 (1/50)

土壌14（第166・199・200図）

慶運寺南調査区南東部、住居47の中で検出した変形した長方形の土壌である。長軸230cm、短軸195cm、深さ82cmを測る。

遺物は、多数の弥生土器細片が出土している。217の甕は、推定口径14.2cmである。218～222は甕の口縁部である。223は高杯で、224は器台である。

時期は、遺物の特徴から弥生後期後葉～終末期と考えられる。

土壌15（第166・199・200図）

慶運寺南調査区南東部、土壌14を切る長方形の土壌である。規模は、長軸118cm、短軸110cm、深さ66cmである。

遺物は、225の弥生土器細片が出土している。225の甕は、推定口径17.0cmである。

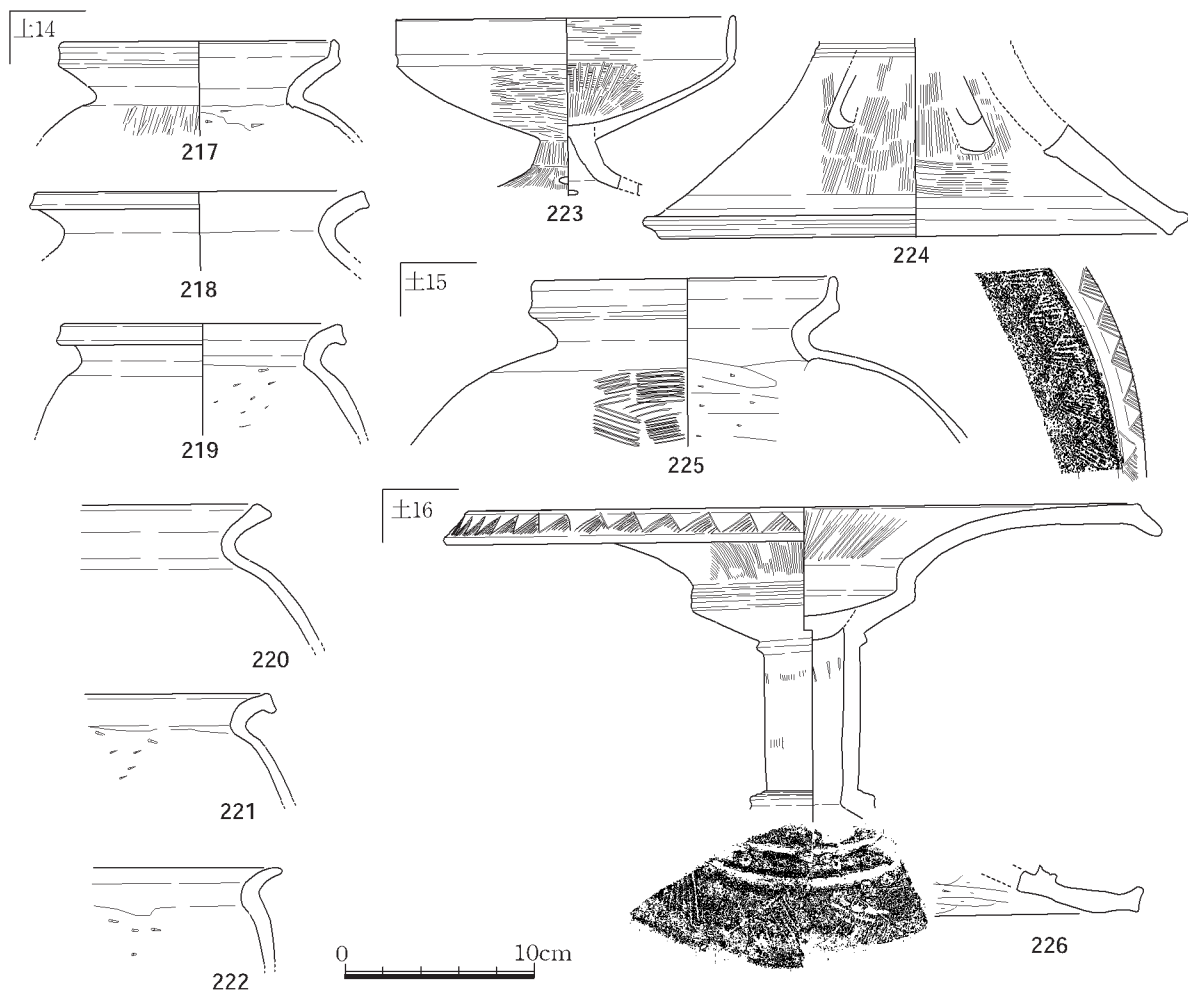
時期は、遺物の特徴から弥生後期終末期と考えられる。

土壌16（第166・199・200図）

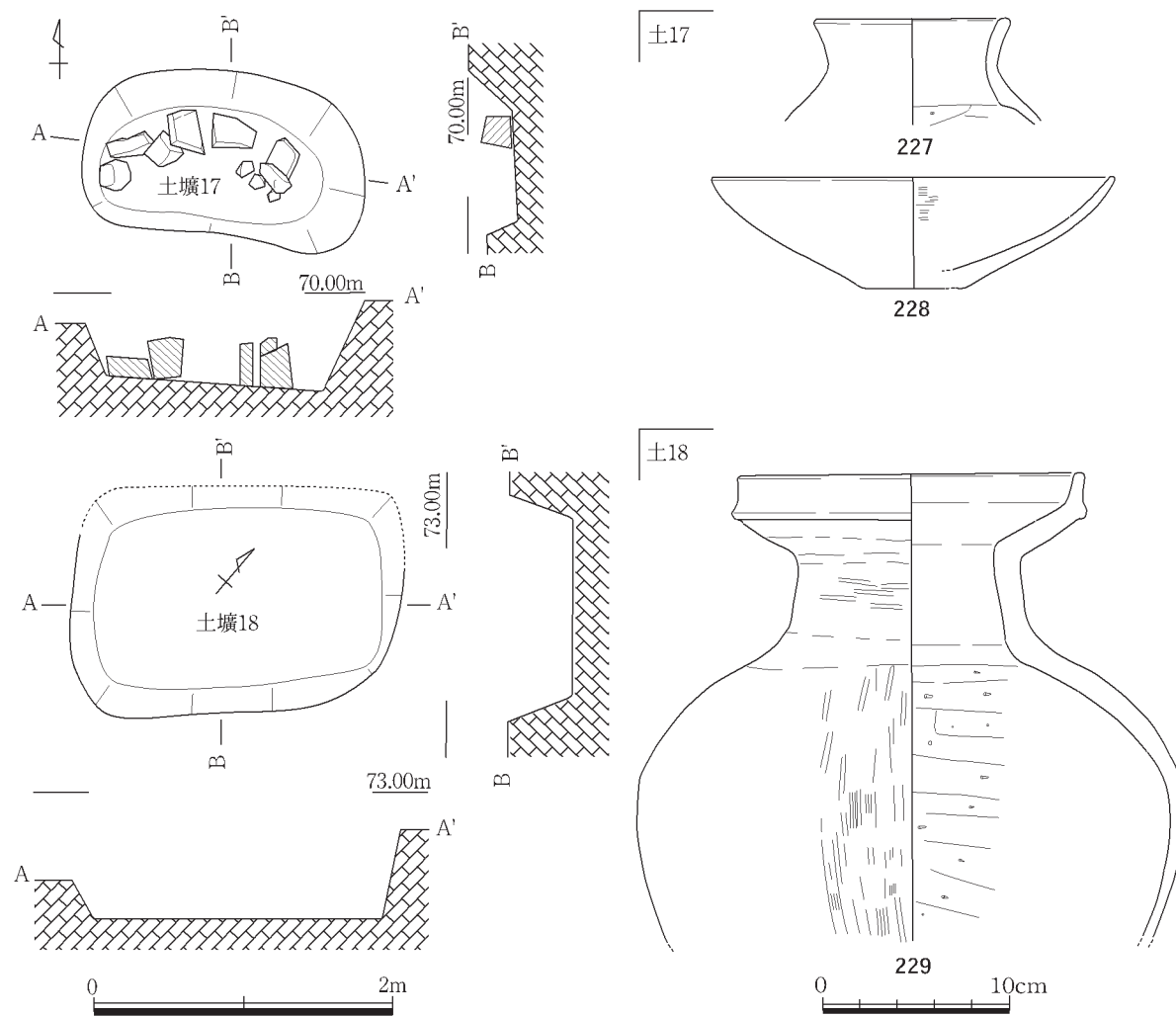
慶運寺南調査区南東部、土壌14に切られる長方形の土壌である。現存規模は、長軸110cm、短軸80cm、深さ59cmである。

遺物は、226の装飾高杯が出土している。口径35.6cmである。

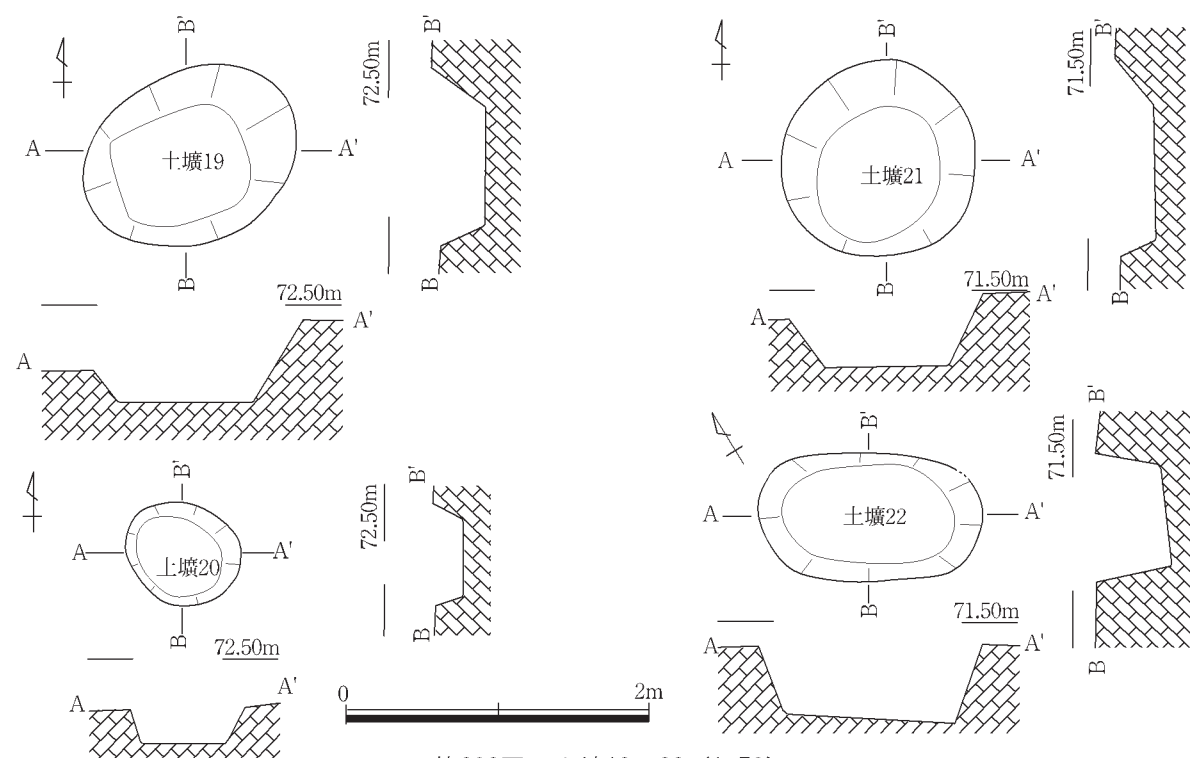
時期は、遺物の特徴から弥生後期終末期と考えられる。



第200図 土壌14～16 出土遺物（1/4）



第201図 土壙17・18 (1/50)・出土遺物 (1/4)



第202図 土壙19～22 (1/50)

土壙17 (第166・201図)

慶運寺南調査区南西部、住居39を切る隅丸長方形の土壙である。規模は、長軸188cm、短軸110cm、深さ66cmである。角礫が配置されているので、他の土壙とは性格が異なるようである。

遺物は、227の壺と228の鉢が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙18 (第166・201図)

慶運寺南調査区東部、住居37を切る長方形の土壙である。長軸220cm、短軸152cm、深さ43cmを測る。

遺物は、229の壺が出土している。口径18.2cmである。底部は欠損している。

時期は、遺物から弥生後期後葉と考えられる。

土壙19 (第166・202図)

慶運寺南調査区東部、土壙18の西で検出した楕円形土壙である。規模は、長軸148cm、短軸114cm、深さ54cmである。

遺物は、弥生土器細片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙20 (第166・202図)

慶運寺南調査区東部、土壙19の南で検出した楕円形小土壙である。規模は、長軸80cm、短軸65cm、深さ23cmである。

遺物は、弥生土器細片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙21 (第166・202図)

慶運寺南調査区中央部、住居5の東で検出した円形土壙である。規模は、直径130cm、深さ44cmである。

遺物は、弥生土器細片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙22 (第166・202図)

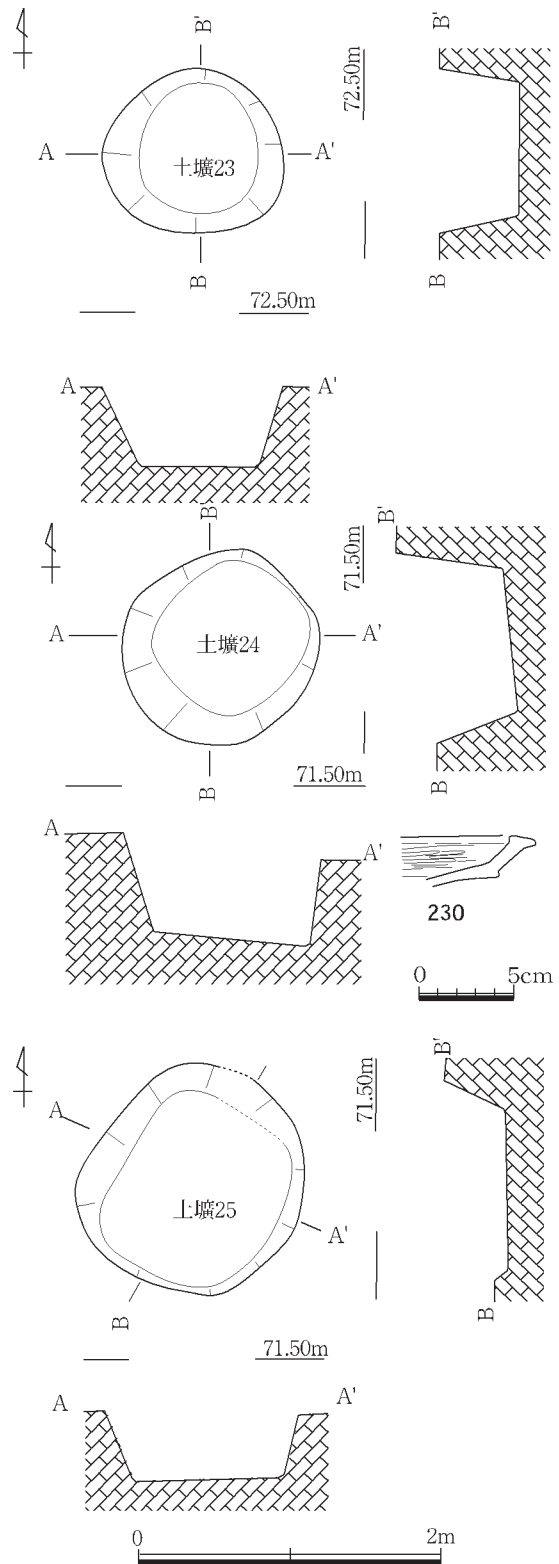
慶運寺南調査区南部、土壙21の南で検出した小判形土壙である。規模は、長軸150cm、短軸85cm、深さ53cmである。

遺物は、弥生土器細片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙23 (第166・203図)

慶運寺南調査区中央部、住居5の北で検出した不整形円形土壙である。長軸120cm、短軸110cm、深さ54cmである。



第203図 土壙23～25 (1/50)・出土遺物 (1/4)

遺物は、弥生土器細片が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙24（第166・203図）

慶運寺南調査区中央部、住居5中の北西部で検出した隅丸方形土壙である。規模は、長軸130cm、短軸125cm、深さ86cmである。

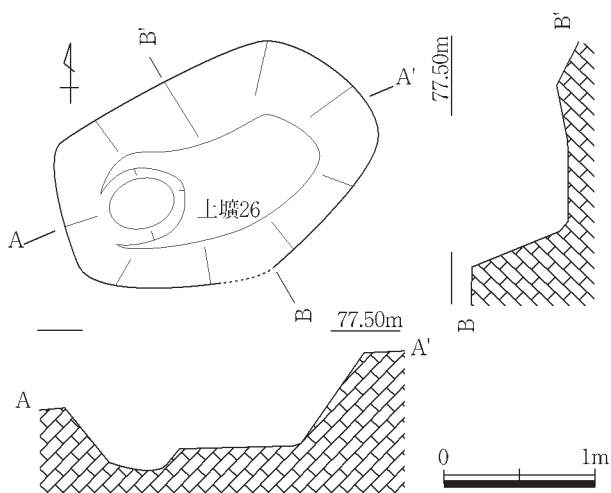
遺物は、230の高杯片が出土している。

時期は、遺構の切り合いと遺物の特徴から弥生後期初頭と考えられる。

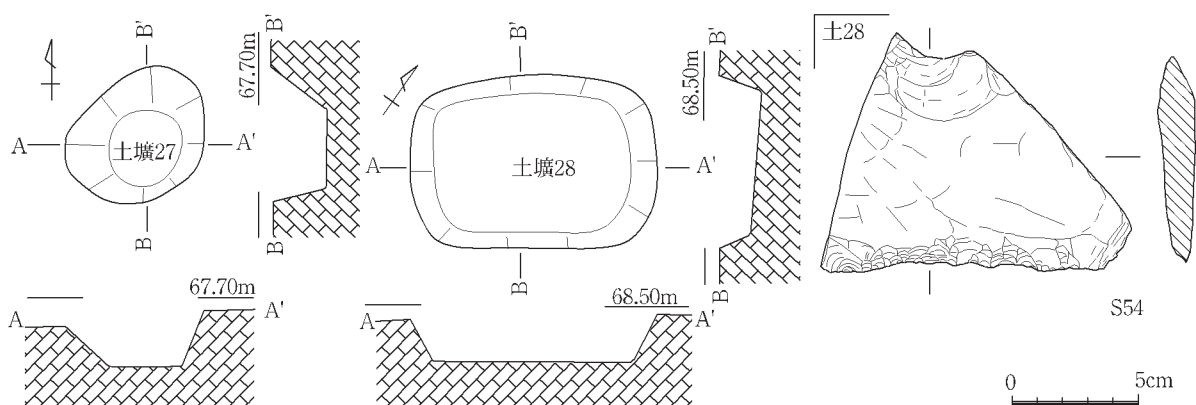
土壙25（第166・203図）

慶運寺南調査区南部、土壙13の西で検出した隅丸方形土壙である。規模は、長軸152cm、短軸140cm、深さ52cmである。

時期は、遺構の切り合いと遺物の特徴から弥生後期と考えられる。



第204図 土壙26 (1/50)



土壙26（第144・204図）

慶運寺東調査区南部、住居56中の北西部で検出した不整長方形土壙である。規模は、長軸220cm、短軸142cm、深さ65cmである。

時期は、遺構の切り合いと遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

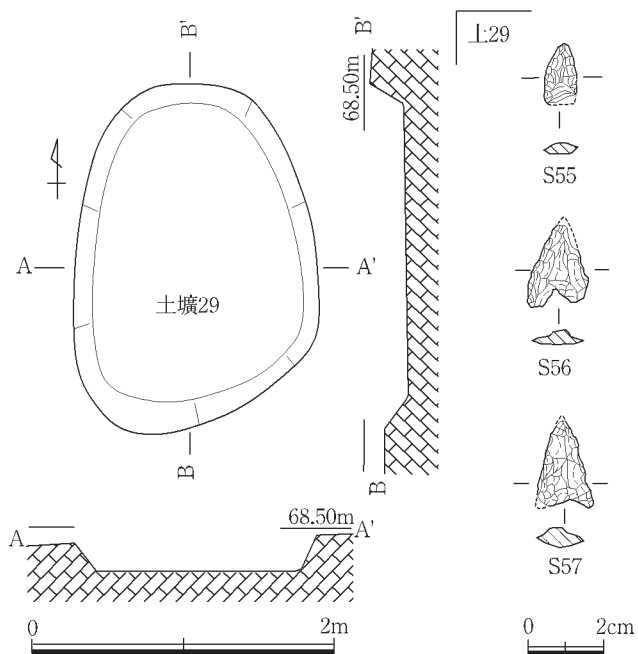
土壙27（第188・205図）

谷奥調査区南部、住居86中の西部で検出した不整楕円形土壙である。規模は、長軸100cm、短軸80cm、深さ36cmである。

時期は、遺構の切り合いと遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙28（第188・205図）

谷奥調査区北部、住居67の東で検出した長



第205図 土壙27～29 (1/50)・出土遺物 (1/2・1/3)

方形土壙である。規模は、長軸164cm、短軸115cm、深さ31cmである。

遺物は、弥生土器片と S54 のサヌカイト製削器が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙29（第188・205図）

谷奥調査区北部、住居68の北東で検出した不整楕円形土壙である。規模は、長軸230cm、短軸160cm、深さ24cmである。

遺物は、弥生土器片と S55～S57 のサヌカイト製石鏃が出土している。

時期は、遺物の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙30（第188・206図）

谷奥調査区中央部東部、住居68の東で検出した不整方形土壙である。規模は、一辺130cm、深さ43cmである。2段に掘り込まれている。下段は不整長楕円形を呈する。

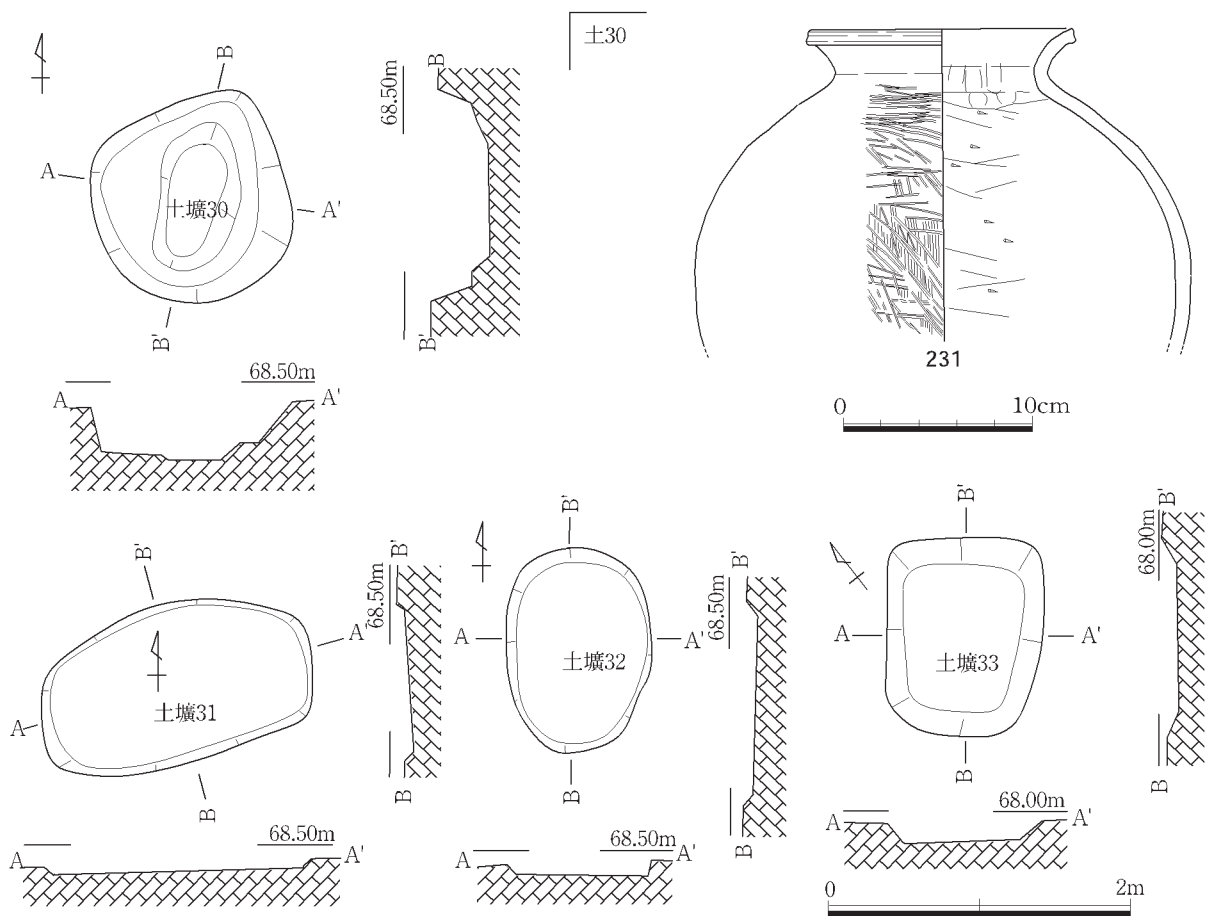
時期は、出土遺物231の壺の特徴から弥生後期と考えられる。

土壙31～33（第188・206図）

土壙31は土壙30の東で検出した長楕円形土壙である。長軸185cm、短軸106cm、深さ11cmである。土壙32は土壙30の東で検出した楕円形土壙である。長軸136cm、短軸96cm、深さ10cmである。土壙33は住居68の西で検出した長方形土壙である。長軸130cm、短軸104cm、深さ21cmである。3基とも遺物は弥生土器細片しか出土していない。

時期は、遺物の弥生土器片の特徴から弥生後期と考えられる。

（浅倉）

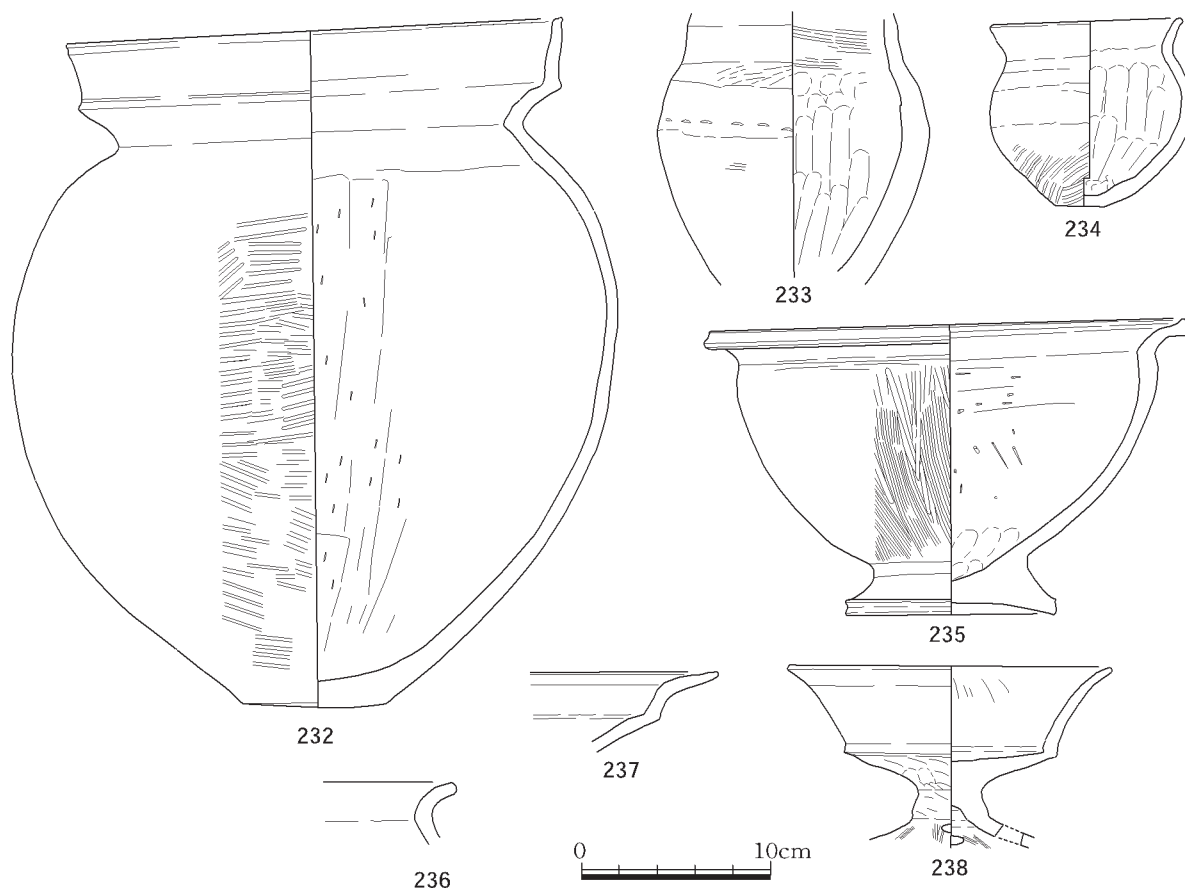


第206図 土壙30～33（1/50）・出土遺物（1/4）

5 土器溜まり

土器溜まりA（第166・207図）

慶運寺南調査区中央部、住居9北部で検出した楕円形の土壇状土器溜まりである。弥生後期の前葉～後葉の土器が多数出土したが、その内232～238の7点を載せた。232は、二重口縁の壺で、全体の4/5が残存している。233の壺は、体部に刺突文が施されている。234の鉢は、ほぼ完形である。235の台付鉢は、口径25.0cmを測る。236は、甕の口縁部細片である。237は、高杯の口縁部細片である。238の高杯は、口縁部が長く伸び、脚は短く、裾部には円孔を4個持つ。

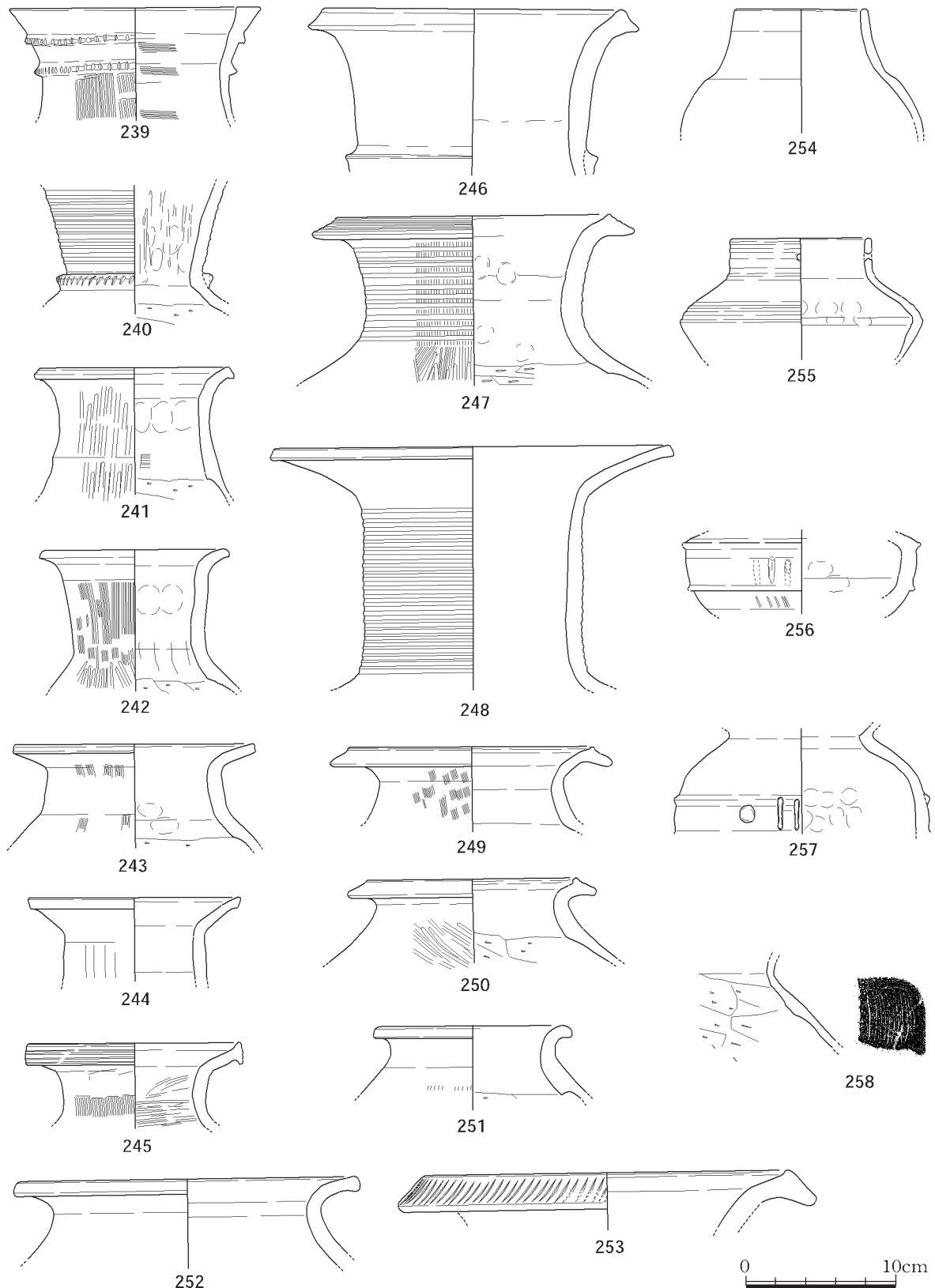


第207図 土器溜まりA 出土遺物（1/4）

土器溜まりB（第188・208～213図）

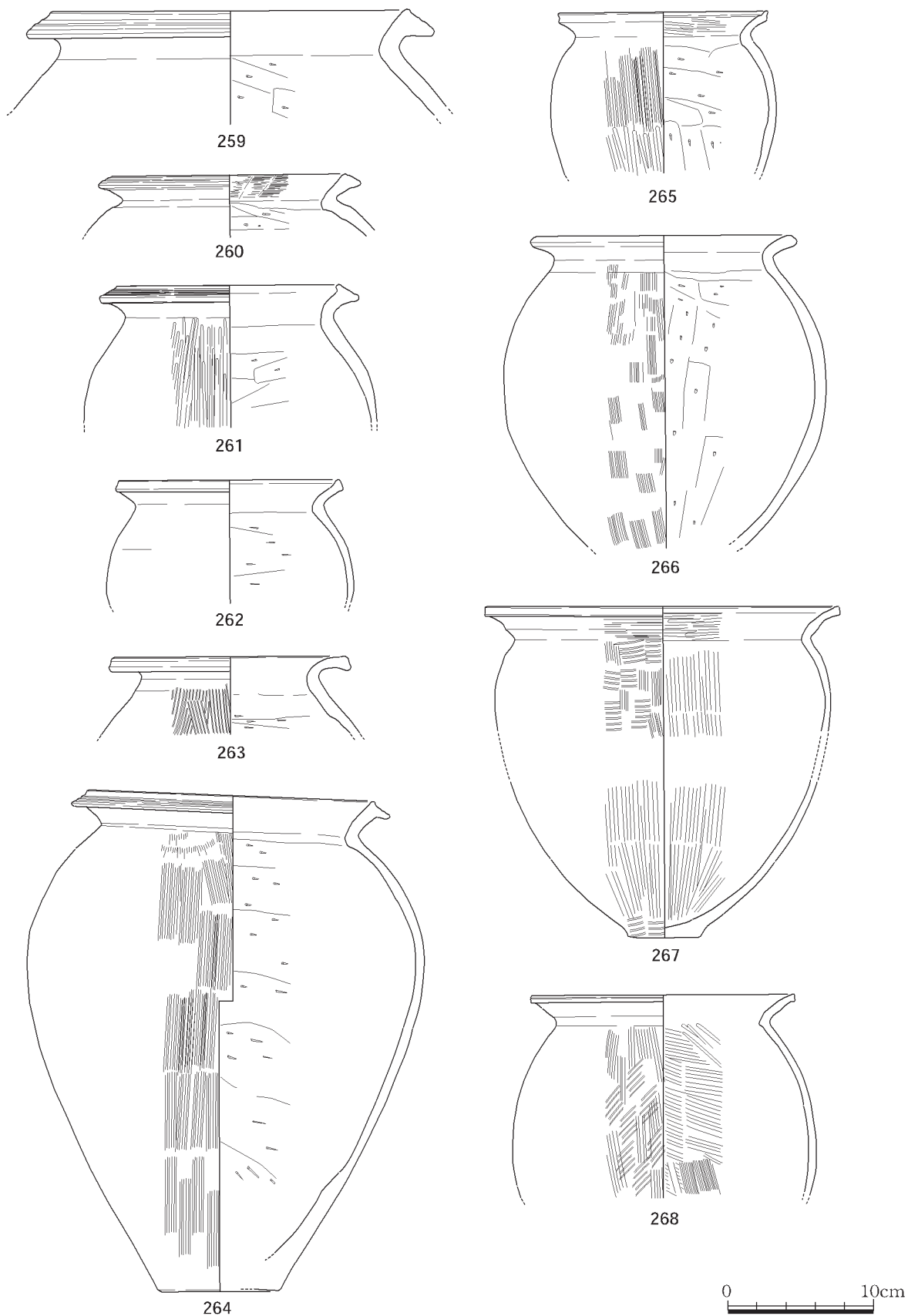
谷奥調査区南部、住居79の南、住居86の西部で検出した楕円形の凹地状土器溜まりである。弥生中期中葉～後期終末期の土器が多数出土したが、その内239～332の94点を載せた。第208図は壺、第209図は甕、第210図は甕と鉢、第211図は鉢と高杯、第212図は高杯と器台、第213図は器台を収載している。239の壺は、口縁部に2条の凸帯に刻みが施されている。240の壺は、頸部は凹線文で、下端に刻み目凸帯。241の長頸壺は、胴部上端まで内面へラケズリされている。242の長頸壺も、同様である。243の長頸壺も、同様であるが、頸部がやや短い。244の長頸壺は、器壁が薄い。245の長頸壺は、口縁端面に3条の凹線。246の長頸壺は、頸部下端に凸帯。247の長頸壺は、頸部はタテハケの後凹線文。248の長頸壺も、同様である。249の短頸壺は、口縁端部が外下方に伸びる。250の壺は、口縁端部が上下方に伸びる。251の壺は、口縁端部を丸く収める。252の壺も、口縁端部を丸くする。253の壺は、口縁

端面にヘラによる刺突文が施されている。254の直口壺は、推定口径8.4cm。255の直口壺は、口頸部に小円孔。256・257の壺には、体部に2条の凸帯とその間に棒状浮文。258の壺肩部には、線刻があるが、何を表現しているのか不明である。259は大形の甕で、推定口径24.4cmである。260の甕は、推定



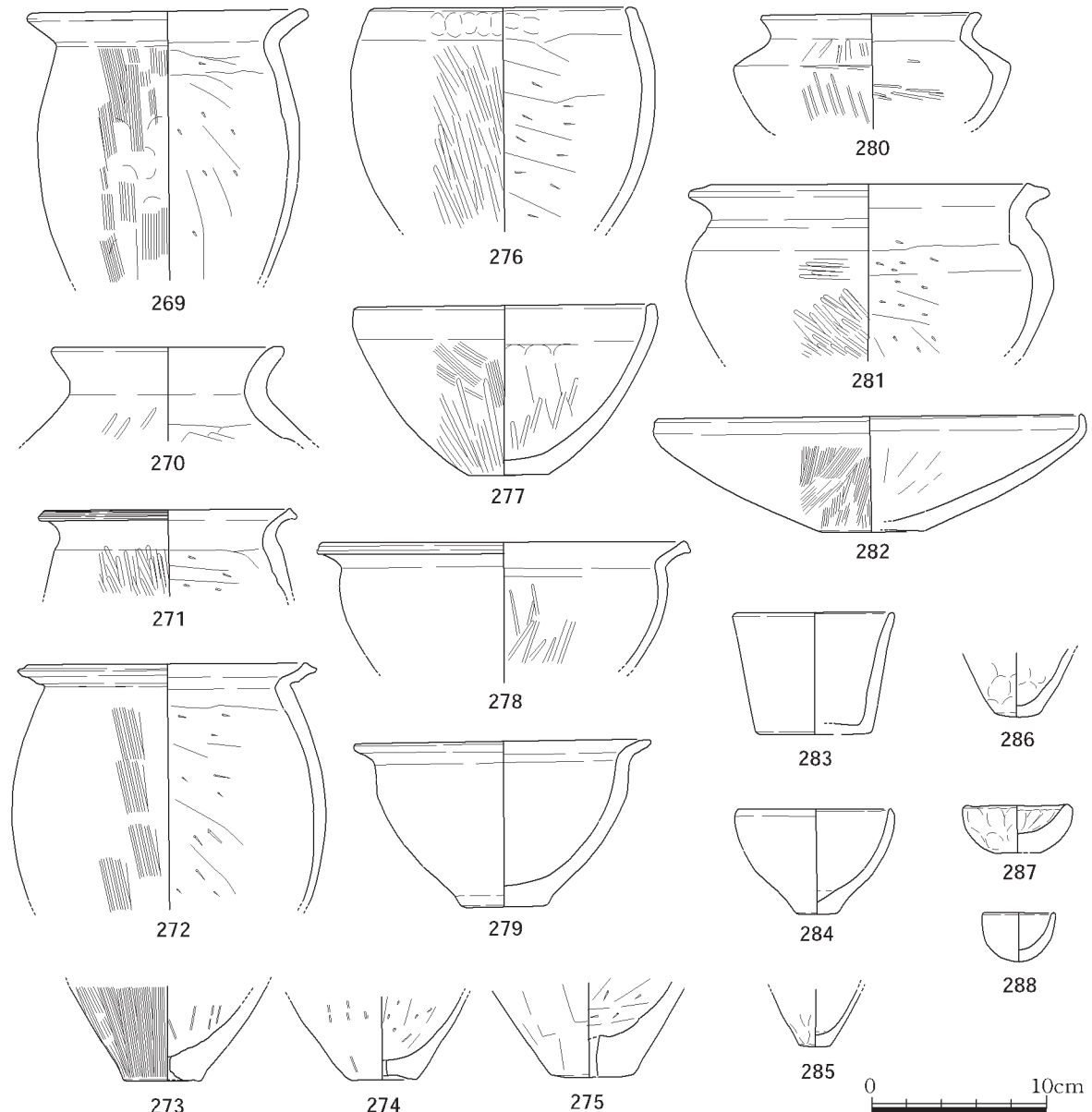
第208図 土器溜まりB 出土遺物① (1/4)

口径16.0cmである。261の甕は、口径15.0cm。262の甕は、推定口径15.0cm。263の甕は、推定口径15.8cm。264の甕は、推定口径19.6cm、推定底径8.0cm、推定器高34.7cmを測る。265の甕は、口縁部に癖。



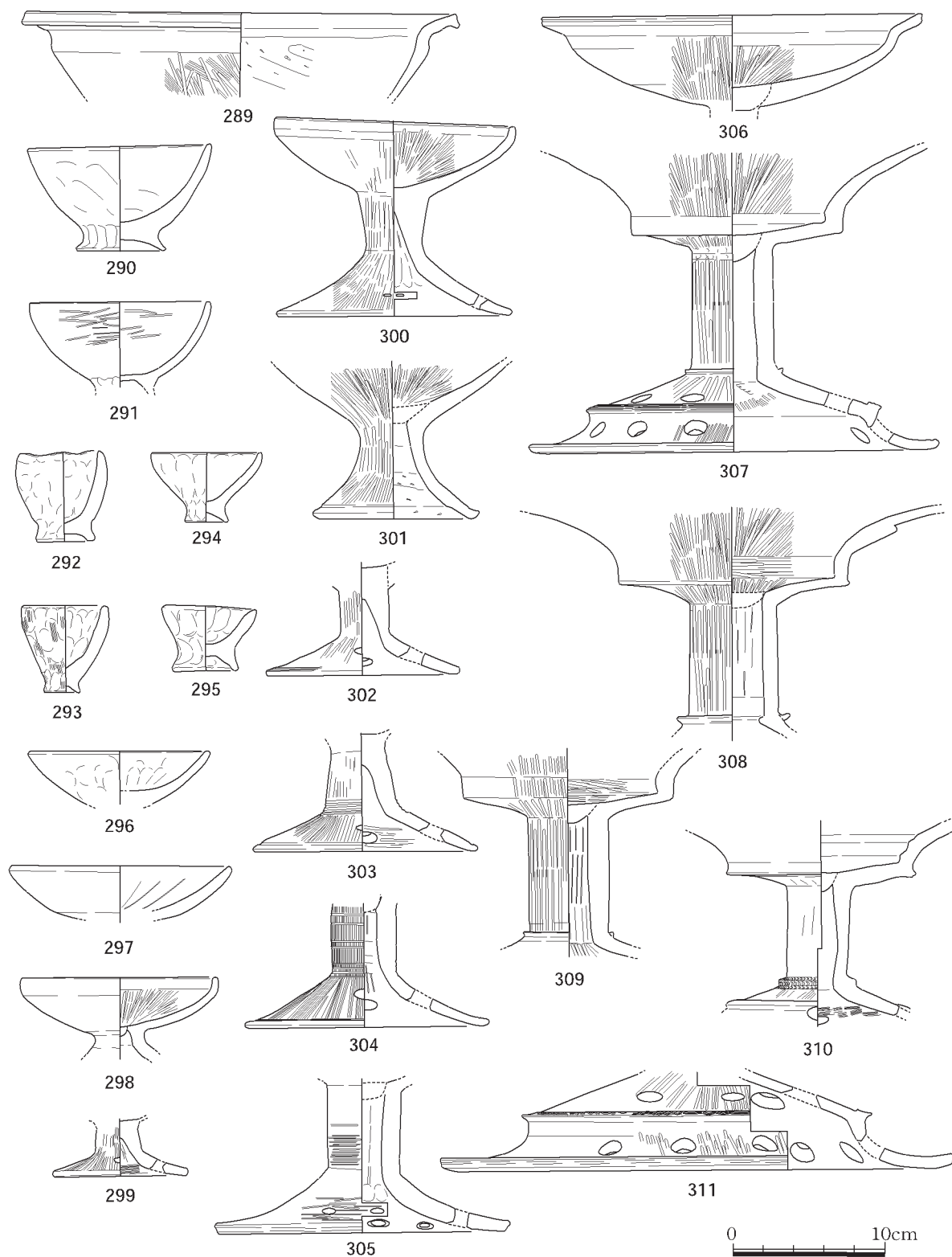
第209図 土器溜まりB 出土遺物② (1/4)

266の甕は、体部が丸い。267・268の甕は、外面にタタキが残る。269の甕は、推定口径15.4cm。270の甕は、推定口径13.0cm。271の甕は、口径14.0cm。272の甕は、口径15.7cm。273～275は、焼成前に穿孔された甕の底部片。276の鉢は、口径14.5cm。277の鉢は、1/3の残存で、口径16.8cm、推定底径4.4cm、推定器高9.8cmを測る。278の鉢は、推定口径20.6cmを測る。279の鉢は、1/4の残存で、推定口径16.4cm、推定底径4.4cm、推定器高9.4cmを測る。280の鉢は、体部が扁平で、推定口径12.2cm。281の甕も、体部がやや扁平で、口径18.1cm。282の浅鉢は、口縁部が直立し、推定口径24.2cm、推定底径6.2cm、器高6.6cmを測る。283の小形鉢は、口縁部が直立し、推定口径9.0cm、推定底径6.6cm、器高7.0cmを測る。284の小形鉢は、口縁部が内湾直立し、推定口径8.7cm、推定底径2.5cm、器高6.1cmを測る。285の手捏ね鉢は、底径1.8cm、残存器高3.1cmを測る。286の手捏ね鉢は、底径2.6cm、残存器高3.6cm。287の手捏ね鉢は、推定口径5.8cm、底径2.5cm、器高2.7cmを測る。288の手捏ね鉢は、丸底で、推定口径4.0cm、器高2.8cmを測る。289の浅鉢は、口縁部が外反し、端面を作る。口径18.4cm。



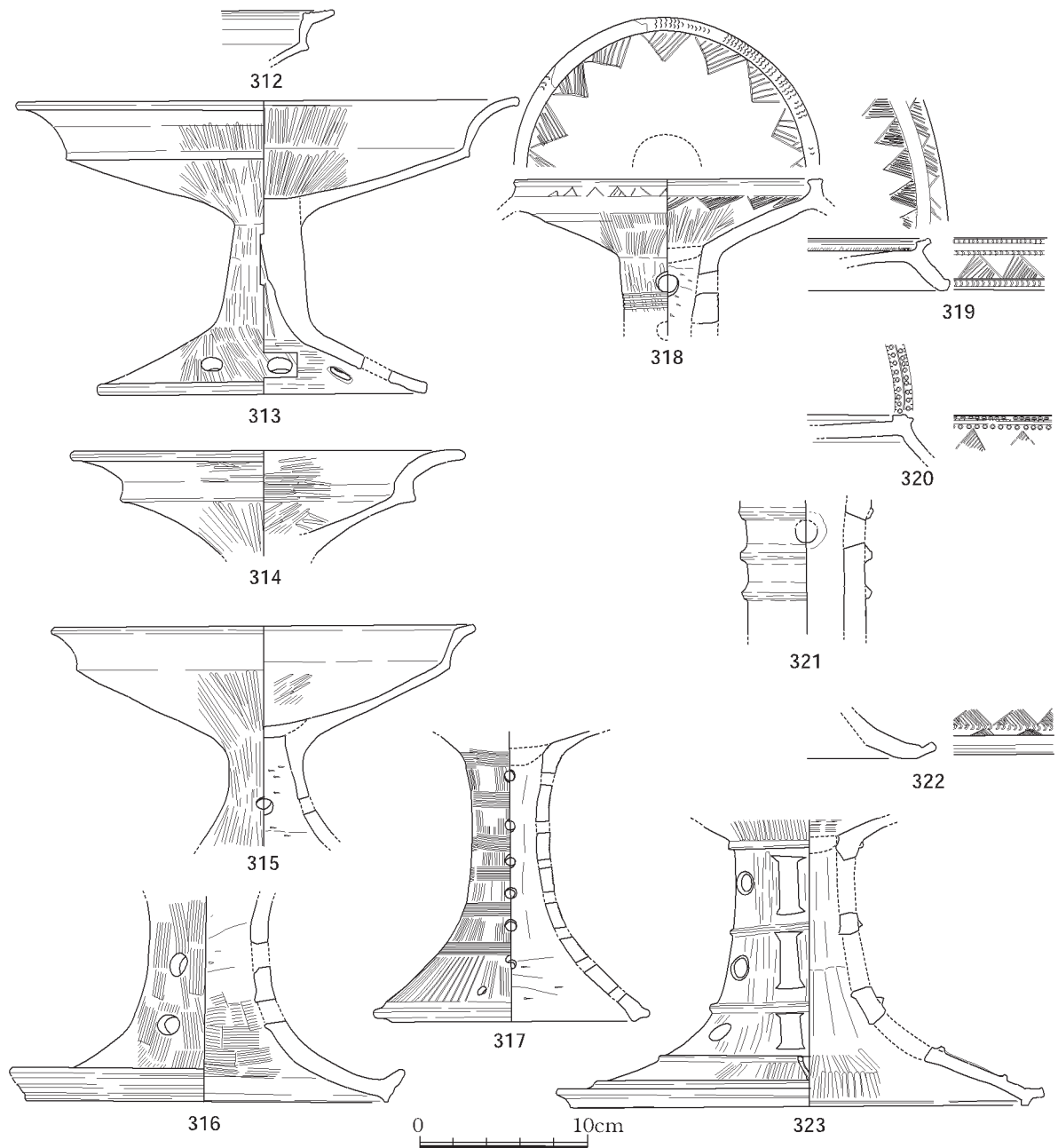
第210図 土器溜まりB 出土遺物③ (1/4)

290・291の台付鉢は、口縁部が内湾し、端部を丸く収める。292～295の台付鉢は、口縁部が内湾し、端部を丸く収める手握ね製品である。296・297の鉢は、浅い皿に台が付く。298は、浅い杯部に短脚が付く高杯である。299は、高杯の短い脚部で、円孔が4個ある。300の高杯は、浅い杯部に長脚が付く。301～305は、高杯の脚部である。306は、浅い杯部の高杯で、杯底部が円盤充填である。307～



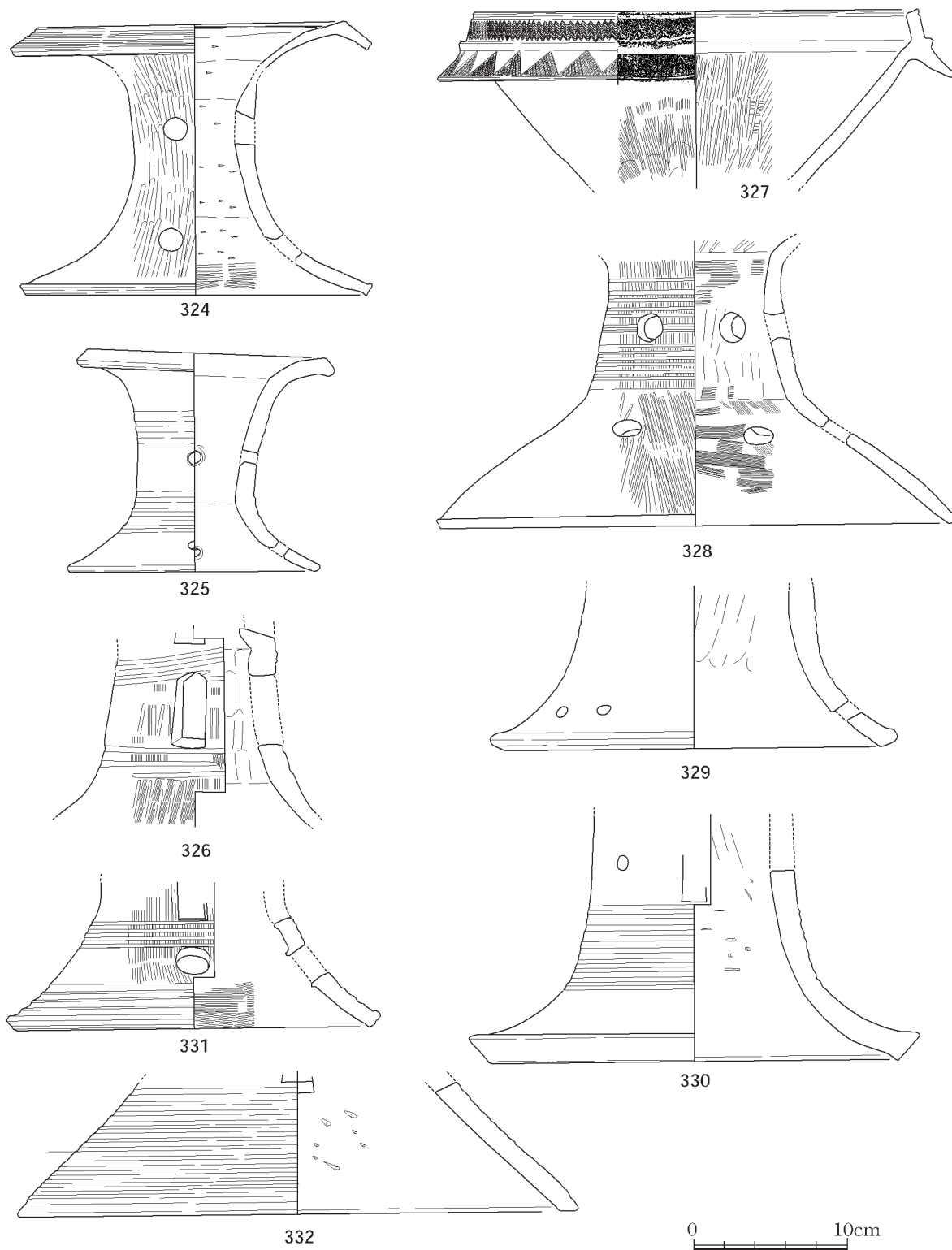
第211図 土器溜まりB 出土遺物④ (1/4)

311は、飾られた高杯である。307は、脚柱下端に断面三角形の凸帯を、そして裾の屈曲部に断面方形の凸帯を貼り付け、その上下の円孔を穿つ。杯部底部は円盤充填である。308の脚柱下端にある断面三角形の凸帯は、細くて高い。また内面も飛び出している。310の脚柱下端にある断面三角形の凸帯には、3段に半裁竹管の刺突文を施す。311の裾の屈曲部にある断面方形の凸帯には、波状文を施す。312の高杯口縁端部は、水平面を作り、凹線文を施す。313の高杯口縁部は、内湾する。脚柱は長く、屈曲して裾部になり、円孔を持つ。314の高杯口縁部も、内湾する。315の高杯口縁部は、折れ曲がる。杯部底部は円盤充填。脚柱に円孔がある。316は、器台下半部で、脚柱に円孔がある。317は、器台下半部で、脚柱に円孔、6段に櫛描き沈線がある。円盤充填の痕跡が残る。318は、器台上半部で、杯部内外面に鋸歯文、口縁端上面に半裁竹管の刺突文を施す。脚柱に円孔、櫛描き沈線がある。円盤充填の痕跡が残る。319・320は、器台口縁部で、鋸歯文、竹管の刺突文を施す。321の器台は、脚柱に



第212図 土器溜まりB 出土遺物⑤ (1/4)

円孔、断面三角の凸帯がある。322は、器台の脚端部で、2段の鋸歯文と半裁竹管文を持つ。323は、器台下半部で、脚柱に3段の円孔、3段のIの字状透かし孔、5段に断面三角形の凸帯を貼り付ける。円盤充填の痕跡が残る。324～330は、器台である。324・325・328・329の器台には円孔が、326・330～332には方形の透かしがある。327は、器台の口縁部で、波状文・鋸歯文と半裁竹管文で飾られる。328は、器台の下半部で、脚柱にタテハケの後沈線を13条巡らせている。(浅倉)

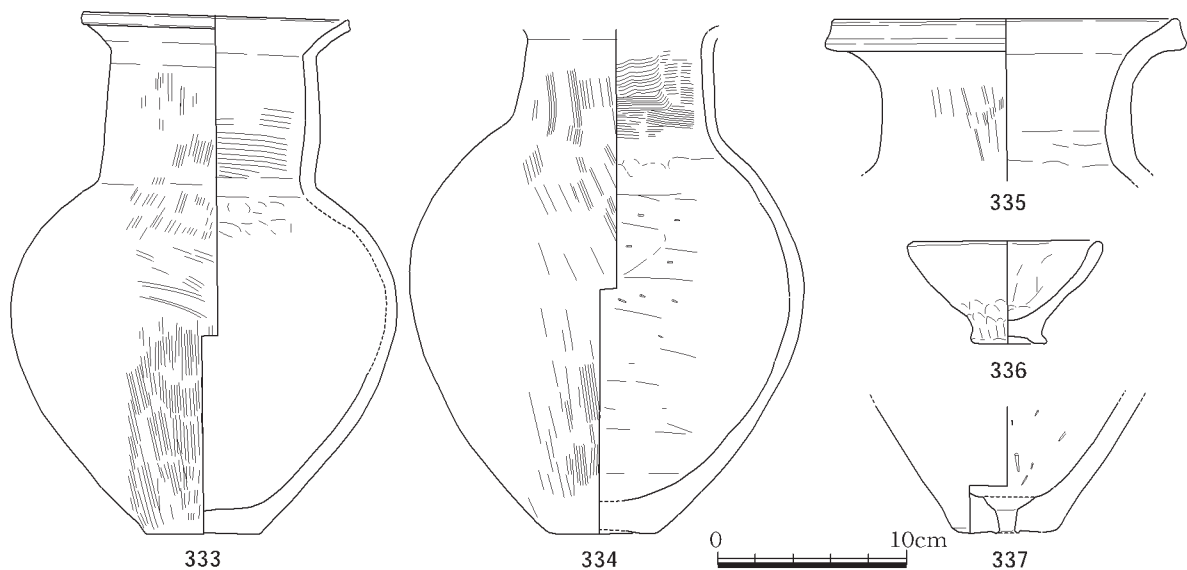


第213図 土器溜まりB 出土遺物⑥ (1/4)

第3節 遺構に伴わない遺物

慶運寺北調査区 包含層出土遺物（第214図）

333の長頸壺は、頸部は少し胴膨らみで、体部は無花果状をなし、底部は平底である。口径18.8cm、底径6.1cm、推定器高27.4cmを測り、段状遺構8の上層から出土しているが、流れ込みとして扱った。334の長頸壺は、口縁部は欠損し、体部はなで肩をなし、底部はやや上げ底である。推定底径6.1cm、推定器高27.0cmを測り、同じく段状遺構8の上層から出土している。335の壺は、口縁部端部し、体部は肥厚し、凹面を作る。336の台付き鉢は、口縁部1/2の残存である。337の底部は、焼成前の穿孔で、甑である。

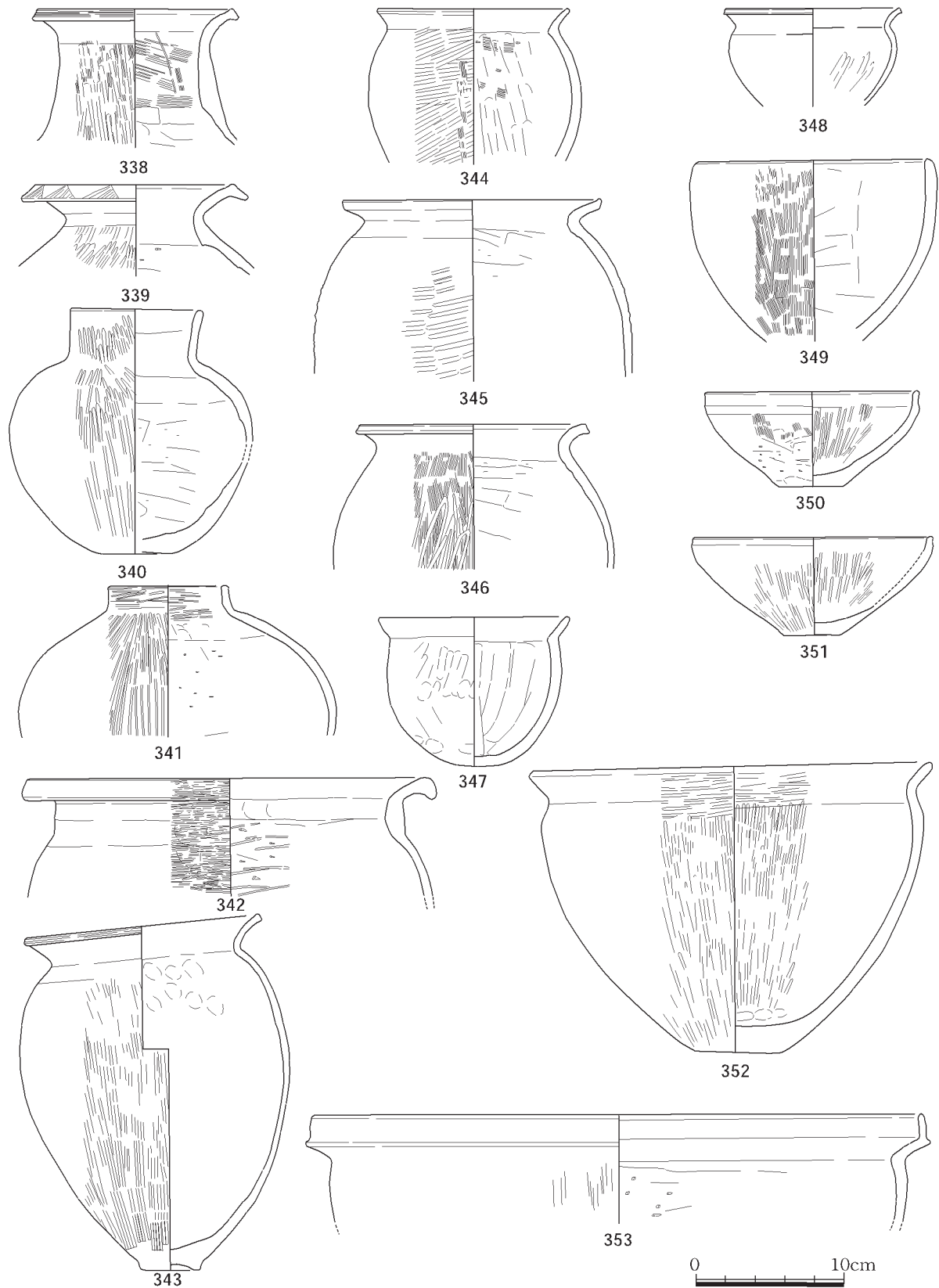


第214図 慶運寺北調査区 包含層出土遺物（1/4）

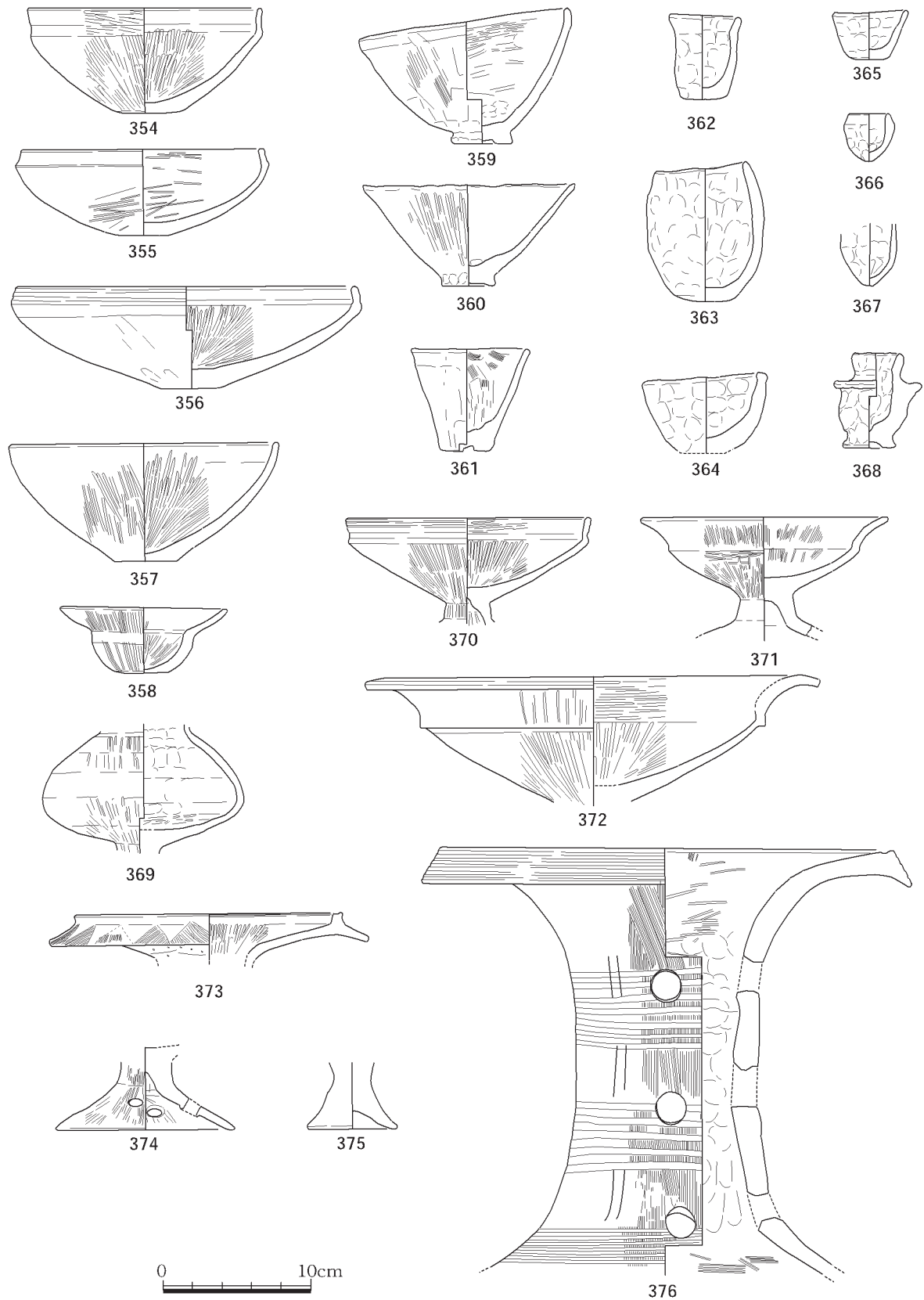
慶運寺南調査区 包含層出土遺物（第215・216図）

338の長頸壺は、頸部は少し下膨らみである。口径8.0cmを測る。339の壺は、口縁部は外下方に垂れ下がり、その外面に鋸歯文がある。340の壺は、口縁部は直立し、体部は球形だが、底部は平底になる。341の壺は、口縁部は直立するが、短い。体部は球形。342の壺は、口縁部は肥厚し、少し垂れ下がり気味。343の甕は、外反する口縁部端部は角ばり、1条凹線を持つ。体部はやや肩の張った長胴形。底部は上げ底である。344の甕は、外反する口縁部端部は角ばる。体部はなで肩で、外面に平行タタキが残る。345の甕は、外反する口縁部端部を上につまむ。体部はなで肩で、外面に平行タタキが残る。346の甕は、外反する口縁部端部は角ばり、1条凹線を持つ。体部はなで肩で、外面にハケメ後ヘラミガキ。347の鉢は、外反する口縁部端部は丸く収める。底部は丸底に見える。348の鉢は、外反する口縁部端部は角ばる。底部は欠損。349の鉢は、口縁部と体部の境界がない。底部は欠損。350・351の鉢は、短く直立する口縁部、内湾する体部、底部は平底である。352の鉢は、外反する口縁部端部は丸く収める。底部は平底。口縁部1/6残存。353の鉢は、口縁部端部は短く立ち上がる。二重口縁になる。354～356の鉢は、短く直立する口縁部、内湾する体部、底部は平底である。355・356は浅鉢である。357の鉢は、口縁部と体部の境界がない。底部は平底。358の鉢は、口縁部は内湾し、小さい体部、底部は平底。359・360の鉢は、底部は上げ底。361～367の鉢は、手捏ねの土器である。

368の手捏ねの土器は、羽釜形の土製品である。369は、台付き壺の体部である。370～372は、高杯である。373は、器台の口縁部であり、鋸歯文で飾られる。374は、高杯の脚部で、裾部に円孔がある。375は、台付き鉢の台部である。376の器台は、口縁部に4条の凹線、筒部には3段に凹線文・円孔・



第215図 慶運寺南調査区西部 包含層出土遺物① (1/4)



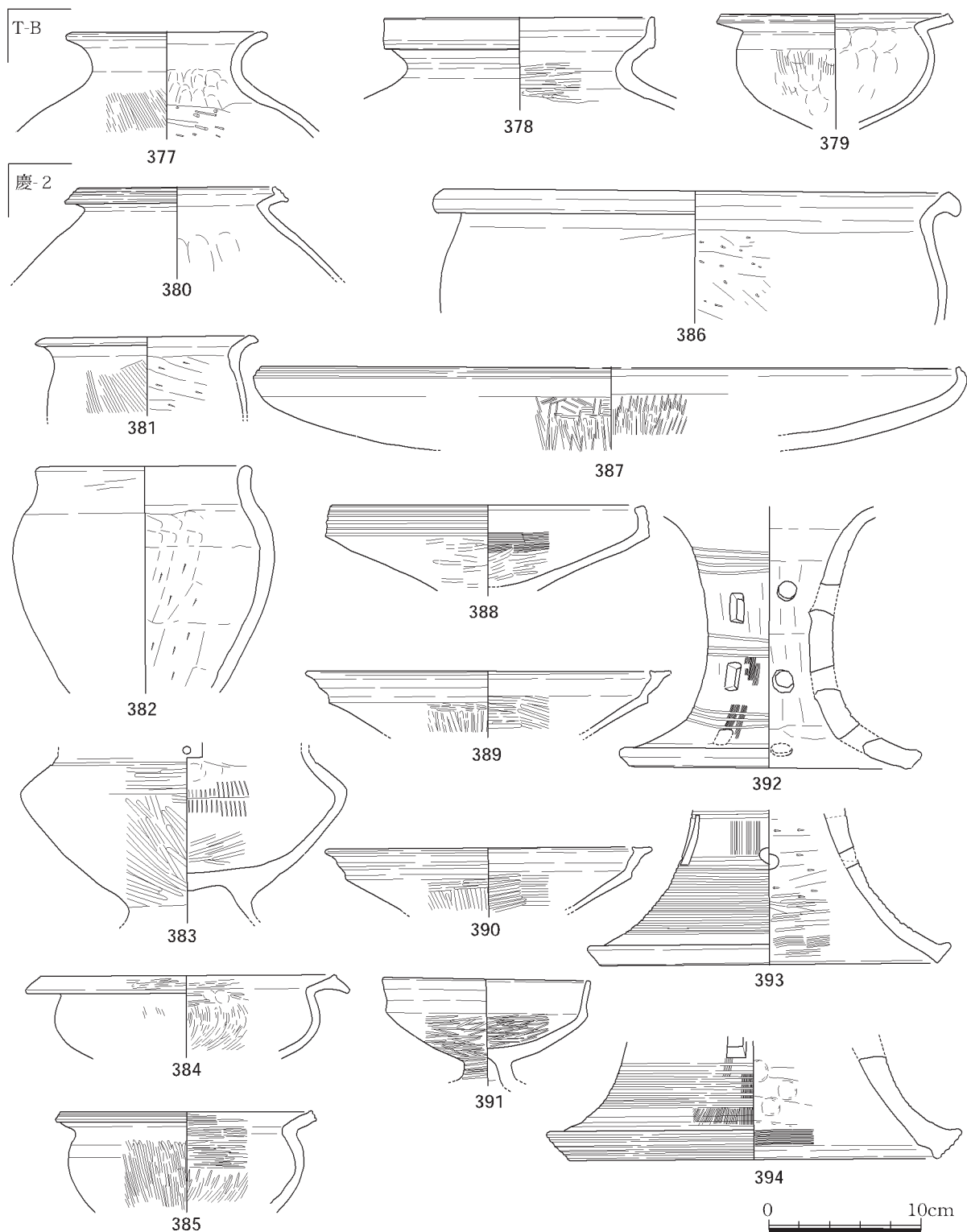
第216図 慶運寺南調査区西部 包含層出土遺物② (1/4)

線刻で飾られている。これらの土器は竪穴住居32の周辺から出土したものである。

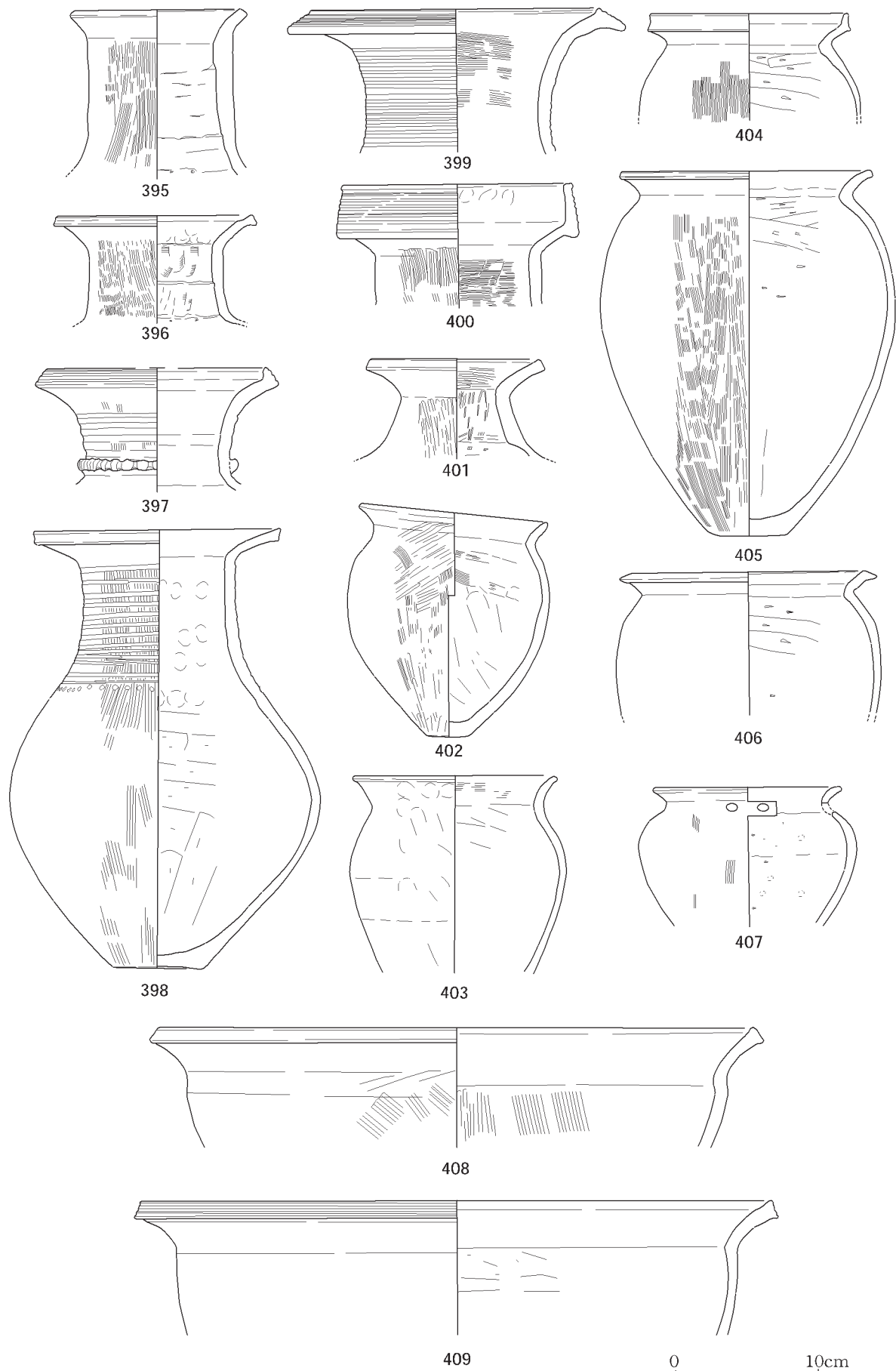
慶運寺東調査区 包含層出土遺物 (第217図)

これらの土器は竪穴住居59の周辺から出土したものである。377～379は、慶運寺跡2区の確認調査

TBから出土している。377は、壺である。378は、口縁が立ち上がる甕である。379は、鉢である。380～382は、甕である。383～386は、鉢である。387は、大形の高杯である。388～391は、高杯で弥生中期から後期まで時期差がある。392～394は、器台である。394の器台は、筒部には3段に凹線文・円孔・方形透かし孔があり、器形の特徴から弥生後期に属する。393・394の器台は、筒部には凹線文・円孔・方形透かし孔があり、弥生中期に属する。



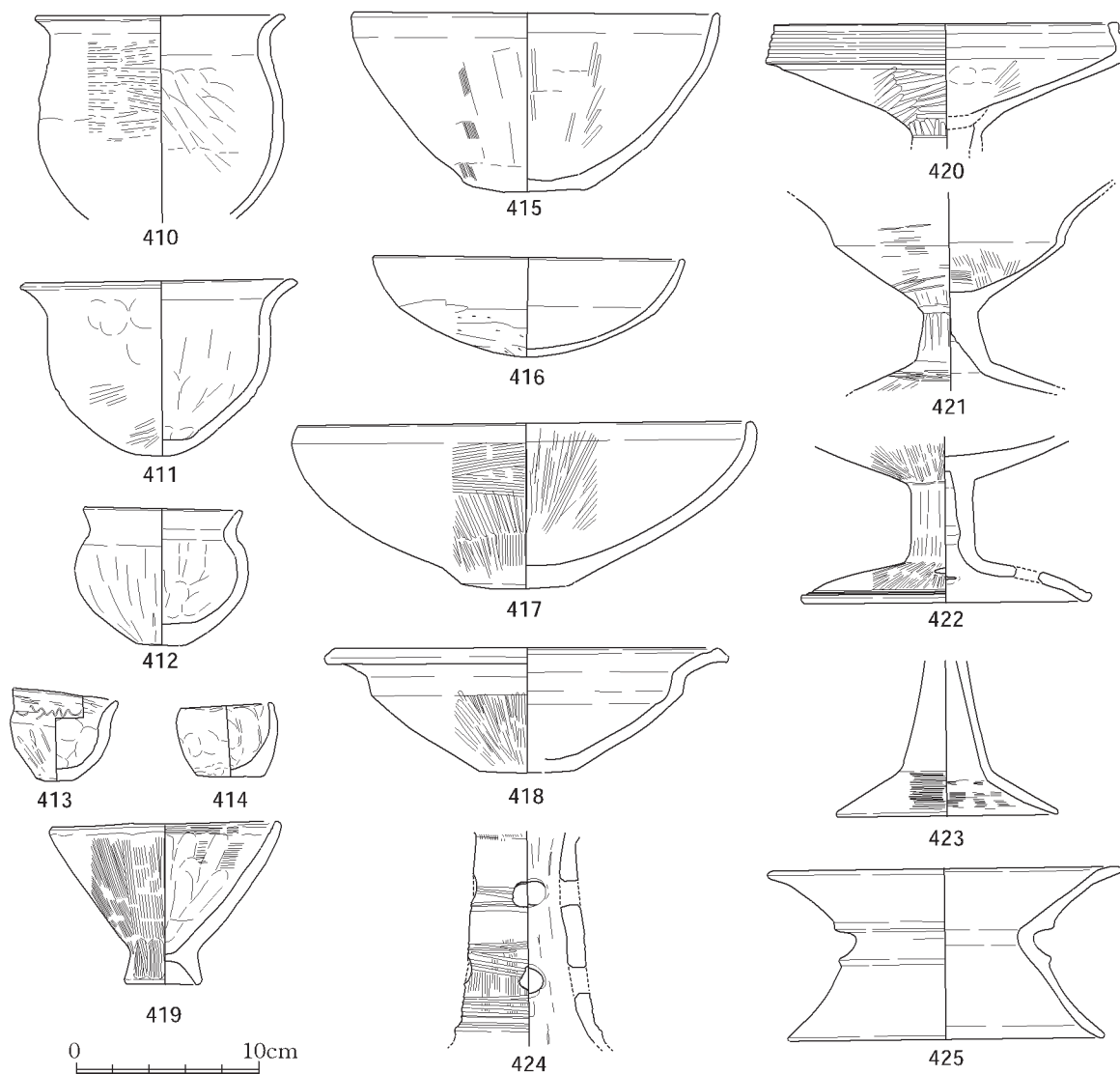
第217図 慶運寺東調査区 包含層出土遺物 (1/4) (竪穴住居59周辺)



第218図 慶運寺南調査区南部 包含層出土遺物① (1/4) (竪穴住居5周辺)

慶運寺南調査区南部 包含層出土遺物（第218・219図）

これらの土器は竪穴住居5の周辺から出土したものである。395～401は、壺である。395・396の壺は、長い頸部外面はタテハケである。397の壺は、長い頸部下端には指頭による刻みを入れた凸帯を貼り付けている。398の長頸壺は、弥生後期の東備地域の典型的な土器である。399の壺は、長い頸部外面は多条の凹線文である。400の特殊壺と考えられる土器は、口縁部が高く立ち上がり、その外面に多条の凹線文を持つ。401の壺は、短い頸部外面はヘラミガキである。402～406は、甕である。402の甕は、体部外面はタタキが残る。404の甕は、口縁端部が短く立ち上がる。405の甕は、推定口径17.3cm、底径5.5cm、器高25.7cmを測る。407の鉢は、くびれ部に小円孔がある。408・409の大形の鉢は、口縁端部が肥厚する。410～418は、鉢である。413・414は、手捏ね鉢である。416～418は、浅い鉢である。419は、台付き鉢である。420～423は、高杯である。420の高杯は、弥生中期に属す。423の高杯は、弥生終末期に属す。424の筒部は、器台であろう。425は、鼓形器台である。



第219図 慶運寺南調査区南部 包含層出土遺物②（1/4）（竪穴住居5周辺）

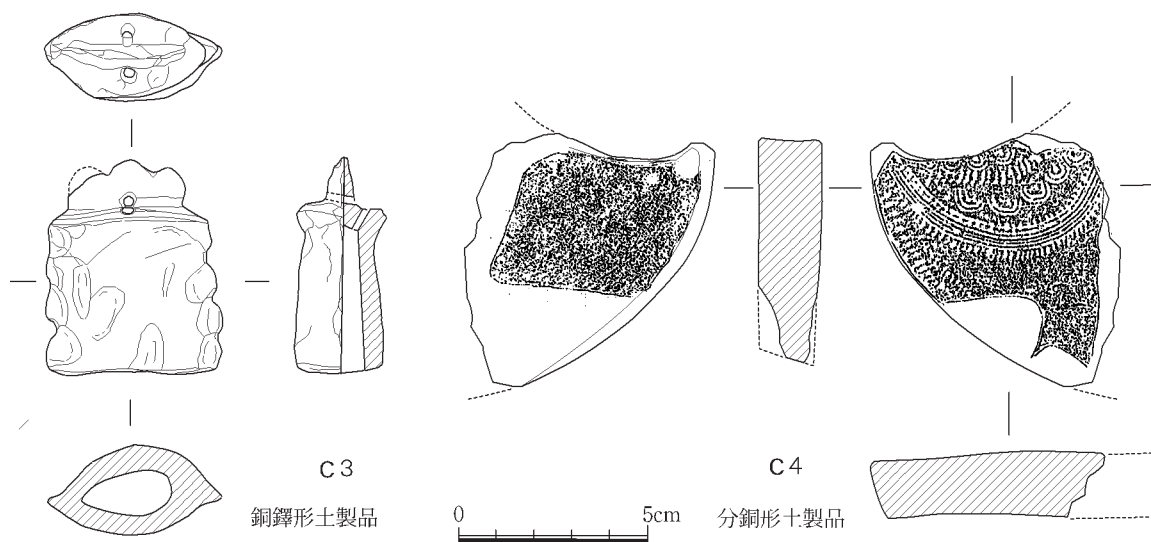
弥生時代の遺物1（第220図）

土製品が2点出土している。C3は、土器溜まりBの最下層で出土した銅鐸形土製品で、発掘中に削

られた部分を除くと完形品であった。出土位置と高さ、そして層位は明確であるが、残念ながら出土状態について詳細が不明である。土製品の紐や鱗が波打っているのは、飾り耳を表現しているのであろう。胴部は扁平で舞に2個の直径3mmの円孔を穿つ。紐には1個の直径3mmの円孔を穿つ。銅鐸にある型持たせ孔の表現はない。色調は黒褐灰色を呈し、大きさは最大長56mm、最大幅47mm、最大厚23mm、重さ40.1gを測る。この土製品の県内出土例は、現時点で8例目にあたる。一番近い場所は、山陽町門前池遺跡である。C4は、慶運寺東調査区TBで出土した分銅形土製品で、全形の下左半部分が残存している。出土位置と高さ、そして層位は明確であるが、竪穴住居59に近い包含層としか言えない。1/4の残存であるが、現存の大きさは最大長64mm、最大幅62mm、最大厚17mm、重さ76.4gを測る。復元の大きさは、推定長128mm、推定幅124mmであり、これは岡山県内では百間川兼基遺跡出土の土製品に匹敵する大きさである。この土製品は、吉備地方を中心に多数の出土例があるが、本遺跡から最も近いのは山陽町使木山遺跡である。次に兼基遺跡に近い。

第16表 銅鐸形土製品出土地名表

番号	遺跡名	所在地	型式	時期	報告書
1	百間川原尾島遺跡	岡山市原尾島	袈裟襷文	弥生後期	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
2	百間川原尾島遺跡	岡山市原尾島	無文	弥生後期	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
3	津島遺跡	岡山市津島	袈裟襷文か	弥生後期	津島遺跡3
4	門前池遺跡	赤磐郡山陽町	波状文	弥生後期	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9
5	清水谷遺跡	阿哲郡哲西町	無文	弥生中期	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告22
6	川戸古墳群	英田郡大原町	突線文鋸歯文	不明	川戸古墳群発掘調査報告書
7	上伊福九ノ坪	岡山市上伊福	不明	弥生後期	岡山県埋文報告25
8	谷の前遺跡	赤磐郡熊山町	無文	弥生後期	本書

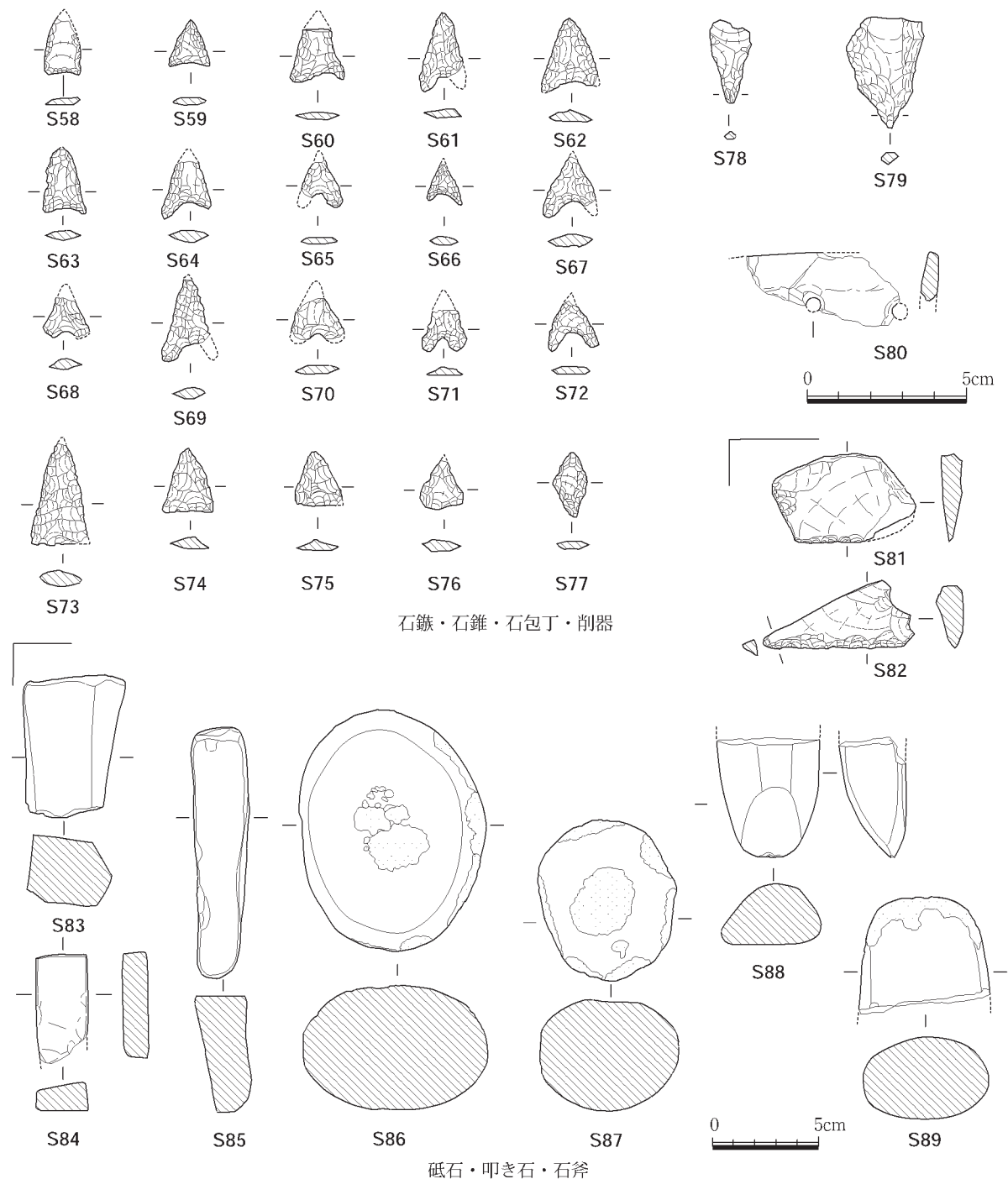


第220図 弥生時代の遺物①(1/2)(土製品)

弥生時代の遺物2(第221図)

遺構に伴わない石器は S58～S89 の32点出土している。S58～S72 は、サヌカイト製凹基式石鏃である。S73～S75 は、サヌカイト製平基式石鏃である。S73 の平基式石鏃は、本遺跡では最大で、長さ32mm、最大幅18.0mm、最大厚5.0mm、重量2.32gを測る。S76・S77 は、サヌカイト製凸基式石鏃で

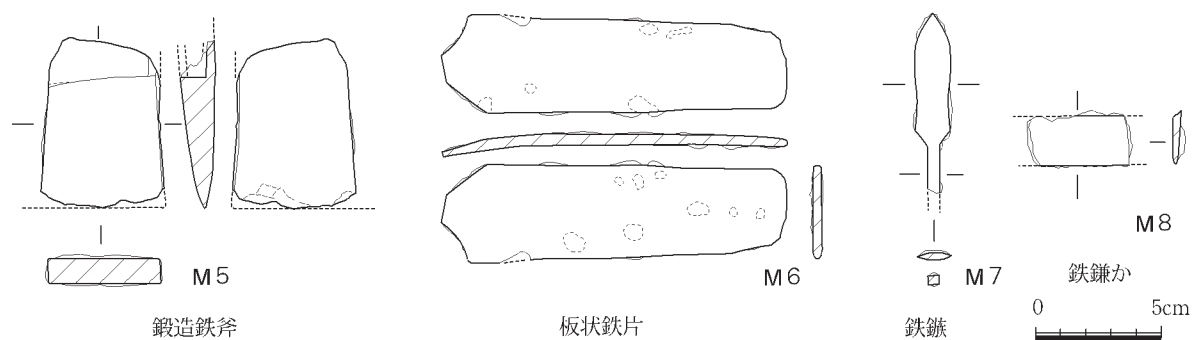
ある。S78・S79 は、サヌカイト製石錐である。S80 は、頁岩製磨製石包丁の破片である。S81・S82 は、サヌカイト製削器である。S83 は、花崗岩製砥石で、4 面使用痕がある。S84 は、頁岩製砥石で、4 面使用痕がある。薄く軽いので、携帯用砥石と考えられる。S85 は、ホルンフェルス製砥石で、1 面のみ使用痕がある。S86・S87 は、花崗岩・閃緑岩製叩石で、広い面は凹み、側面は叩き痕がある。S88 は、角閃玢岩製磨製蛤刃石斧である。S89 は、閃緑岩製磨製石斧の基部である。



第221図 弥生時代の遺物② (1/2・1/3) (石器)

弥生時代の遺物3 (第222図)

遺構に伴わない鉄器は M5～M8 の 4 点出土している。M5 は、鉄斧であるが、複数の肉眼鑑定では鋳造品の可能性が高いとされたが、TACセンターでの切断面分析結果は鍛造品と出た。出土地点は谷奥調査区の土器溜まり B の南東部最上層であった。鍛造鉄斧ということで、時期についてやや疑

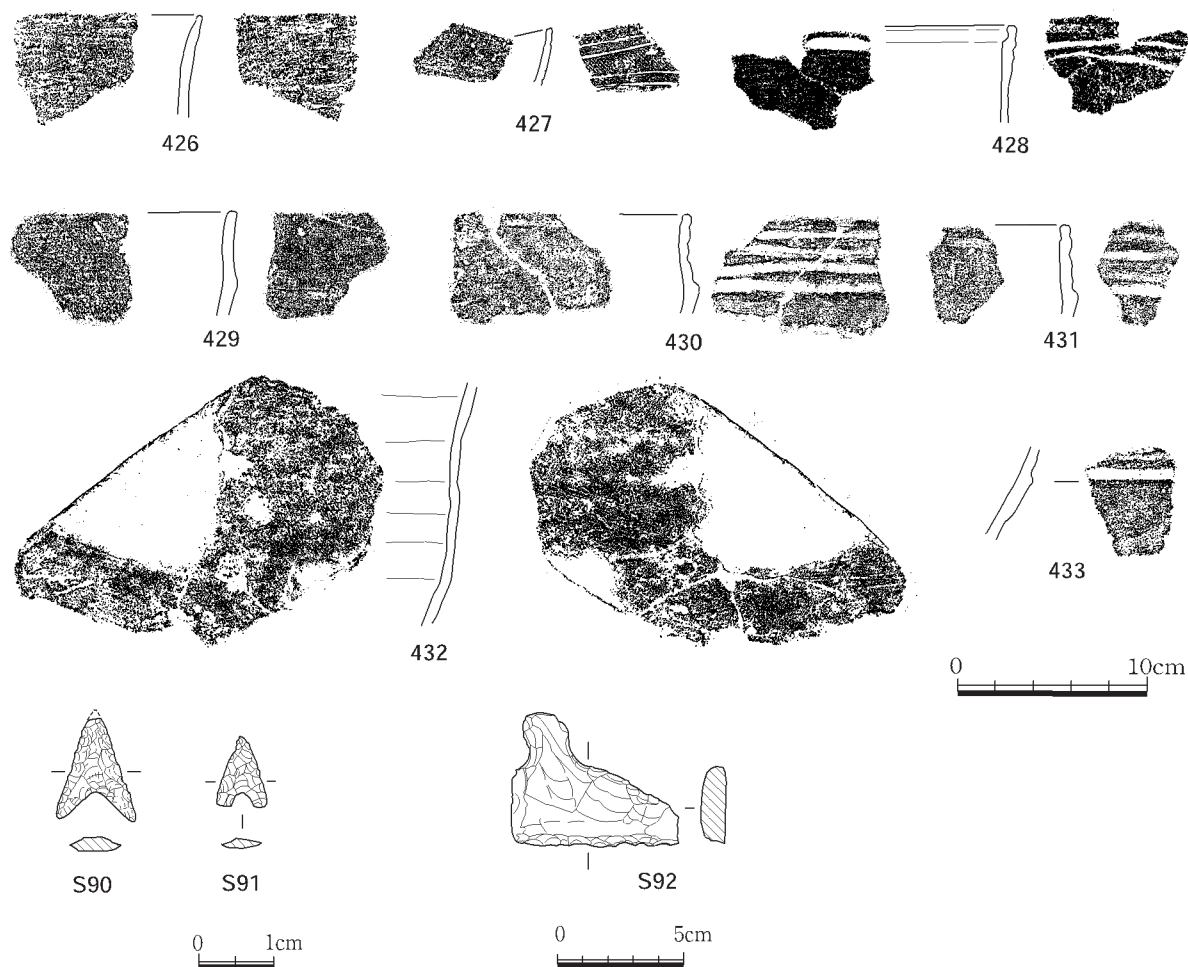


第222図 弥生時代の遺物③ (1/3) (鉄器)

間が出てきた。M6は、用途不明の鉄板である。若干加工痕もある。出土地点は谷奥調査区の土器溜まりBの南巨礫集中箇所内で、周囲からは弥生土器片しか出ていない。M7は、M1 柳葉式有茎鉄鍬と同様の鉄鍬で、住居2～5付近の包含層で出土した。M8は、鉄板で、鍬の破片と考えられる。住居5西方包含層から出土している。

縄文時代の遺物 (第223図)

縄文土器は、426～433の8点出土している。すべて深鉢と考えられる破片で、426～431は口縁部片、432・433は体部片である。426は巻貝条痕、427は磨消縄文を持つ。すべて縄文時代後期に属する土器である。石器は、サヌカイト製の凹基式石鍬2点と石匙1点が縄文時代に属すと考えられる。(浅倉)



第223図 縄文時代の遺物 (1/1・1/3・1/4)

第4節 小結

1 遺構について

谷の前遺跡では、慶運寺北調査区において墳丘墓1基・段状遺構13基・竪穴住居1軒・土壇11基の26遺構を、慶運寺南調査区において竪穴住居57軒・土壇14基・土器溜まり1か所の74遺構を、慶運寺東調査区において竪穴住居8軒・土壇1基の9遺構を、谷奥調査区において竪穴住居20軒・土壇7基・土器溜まり1か所の28遺構を検出した。

墳丘墓は、主体部として土壇墓5基と土器棺墓1基を検出している。幅の狭い尾根を直角に溝で区画し、列石を長方形に巡らし、墓域を造成した弥生時代後期後葉の墳丘墓である。熊山町前内池墳墓群は、尾根の鞍部に立地する。石囲いを有し、土壇墓と土器棺で構成され、特殊器台や特殊壺を伴わないことは共通している。

段状遺構としたものは、急斜面に立地し、細長い床面を持つ遺構である。竪穴住居としたものは、緩斜面ないし平地に立地し、ある程度幅広い床面を有する遺構を呼んだ。壁体溝・柱穴の有無は関係ない。どちらも住居あるいは工房か機能は曖昧なものが多い。時期は、弥生中期後葉から始まって、弥生終末期まで続いているが、中心は後期後葉であろう。最大の住居がこの時期である。山陽町門前池遺跡・佐伯町才地遺跡・熊山町土井遺跡が、中期を中心とした集落であるので、本遺跡はこのあたりでは珍しい存在となる。

2 遺物について

土器については、慶運寺北調査区において弥生後期土器を、慶運寺南調査区においては縄文後期土器・弥生中期から後期土器を、慶運寺東調査区において弥生中期から後期土器を、谷奥調査区において縄文後期土器・弥生中期から後期土器を出土した。

縄文土器は、細片が8点出土しているが、遺構に伴っていない。

弥生土器は、中期後葉から終末期までのものであるが、後期後葉の土器が最も多いようである。遺構に伴うものが整理箱200箱中約1/3程度出土している。調査区別では、概ね慶運寺北：慶運寺南：慶運寺東：谷奥＝1：9：1：9の比率である。器種構成は、壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋・手捏ねである。実測したものでは、鉢が多いが、その理由は、復元ができ易いことにある。

土製品は、銅鐸形土製品と分銅形土製品が出土している。前者は、県内で8例目の出土になる。いままでの7例はすべて破片であるが、本品は完形である。遺構でなく、土器溜まりの出土である。後者も包含層出土である。吉備地方を中心として多数の出土例があるけれど、本品の大きさは復元すると百間川兼基遺跡のものに匹敵し、最大級となる。上下左右どちらにあたるかは、分銅形土製品の文様の成り立ちから考えなければならない。土偶のように人の全身を模倣しているのではなく、この土製品は人の顔を単純化しているのである。そして、上方にあたる半分の同心円は髪を表現し、細い端面に糸を並べるように細い斜めに貫通した円孔が1列開けられている。その穴の開いていない方が下方と言える。このことから図に示したように、本品は下方左側になる。なお、この2種類の土製品の組み合わせで出土している遺跡は、岡山市津島遺跡・同百間川原尾島遺跡だけである。（浅倉）

第5章 慶運寺跡

第1節 発掘調査の概要

1 調査の方法

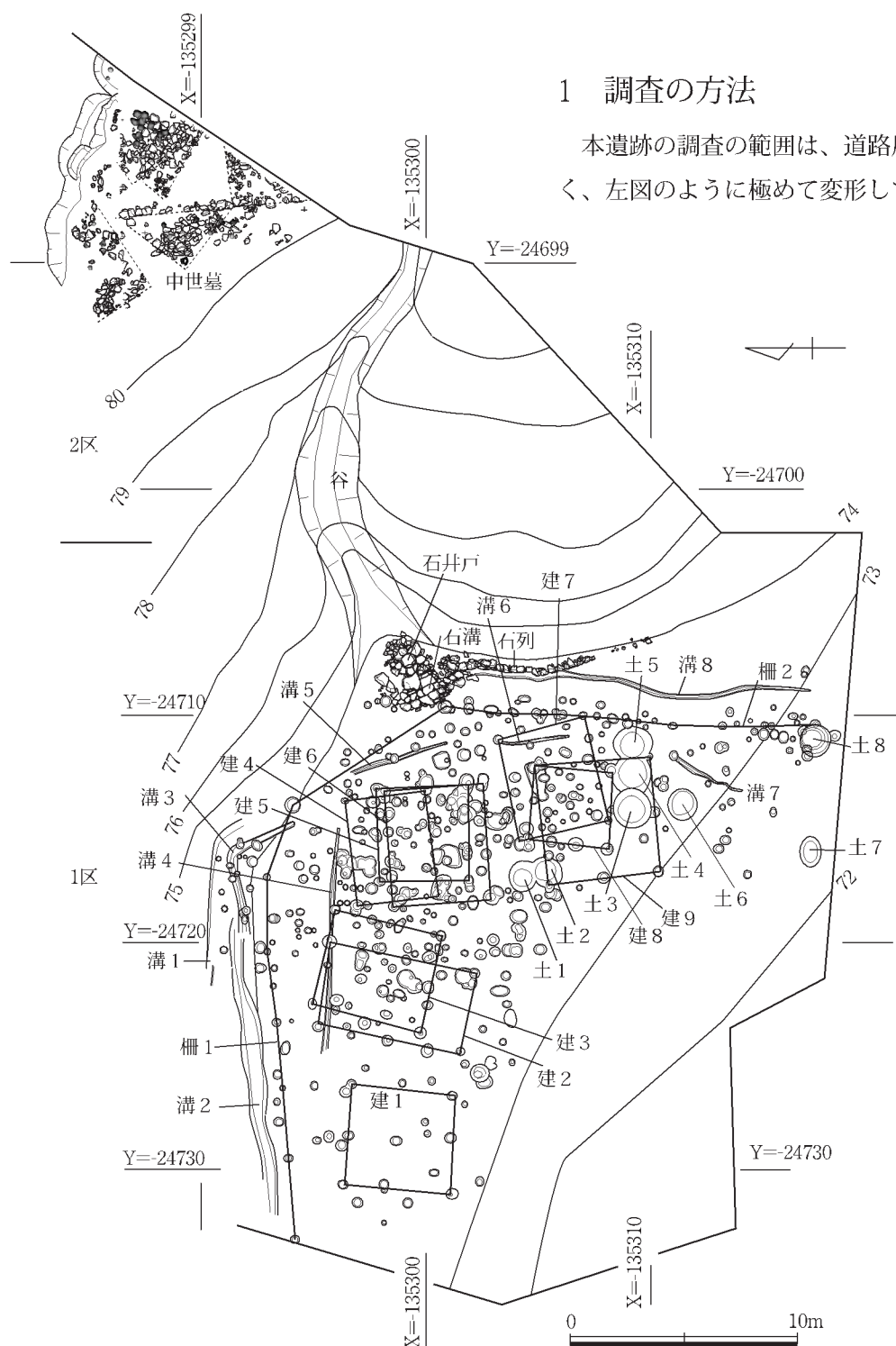
本遺跡の調査の範囲は、道路用地幅全体ではなく、左図のように極めて変形している。確認調査

の結果からこのような形状に結果的に成ったものである。

本遺跡の調査は慶運寺1区からはじまり、慶運寺2区、の順に実施した。

慶運寺1区は、調査前には平坦な雑木林の中に慶運寺跡の石碑が建てられた祭壇が存在していた。中世遺構面は、地表下50～120cmであったため、重機で堆積土を除去した。

2mほど高い位置にある



第224図 慶運寺跡 遺構配置 (1/300)

2区も重機で表土を掘削したところ20～40cmで中世墓の石材が出土した。

2 調査成果の概要

慶運寺1区には、建物・柵・柱穴・井戸・溝・土壇など26遺構、慶運寺2区には、中世墓の1遺構、合計27遺構を検出している。

遺物は、収載した土器109点・金属器55点・石器3点などである。(浅倉)

第2節 中世の遺構・遺物

1 建物

建物1 (第225・226図)



第225図 1区遺構配置 (1/200)

1区西北部に検出した桁行1間、梁間2間のほぼ正方形掘立柱建物である。規模は、桁行全長470cm、梁間450cm、床面積21.15㎡である。柱穴は円形で、直径40～50cm、深さは30～60cmと差がある。南西隅の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでいる。建物の棟方向はN－5度－Eでほぼ南北方向である。

遺物は、中世土器細片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

建物2（第225・227図）

1区建物1の東に検出した桁行2間、梁間1間の長方形掘立柱建物である。規模は、桁行全長630cm、梁間380cm、床面積23.94㎡である。柱穴は円形で、直径35～60cm、深さは35～70cmと差がある。西側中央の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでいる。建物の棟方向はN－11度－Eでほぼ南北方向である。

遺物は、中世土器細片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

建物3（第225・227図）

1区建物1の東に検出した桁行1間、梁間2間の長方形掘立柱建物である。規模は、桁行全長500cm、梁間425cm、床面積21.25㎡である。柱穴は円形か楕円形で、直径40～60cm、深さは38～73cmと差がある。南東隅の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでいる。建物の棟方向はN－15度－Eで建物2より東に傾いている。

遺物は、南西隅の柱穴から S93 の方形石硯が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

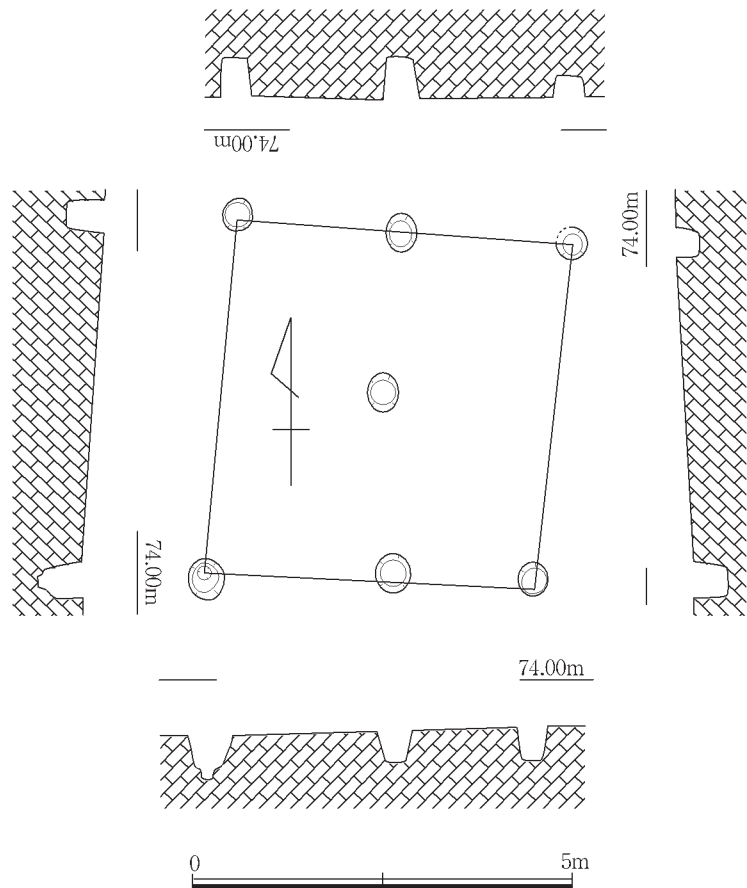
建物4（第225・228図）

1区建物3の東に検出した桁行1間、梁間1間の長方形掘立柱建物である。規模は、桁行全長530cm、梁間360cm、床面積19.08㎡である。柱穴は円形か隅丸方形で、直径あるいは一辺35～80cm、深さは64～80cmと差があるが、かなり深い。南東隅の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでいる。建物の棟方向はN－83度－Eでほぼ東西方向である。

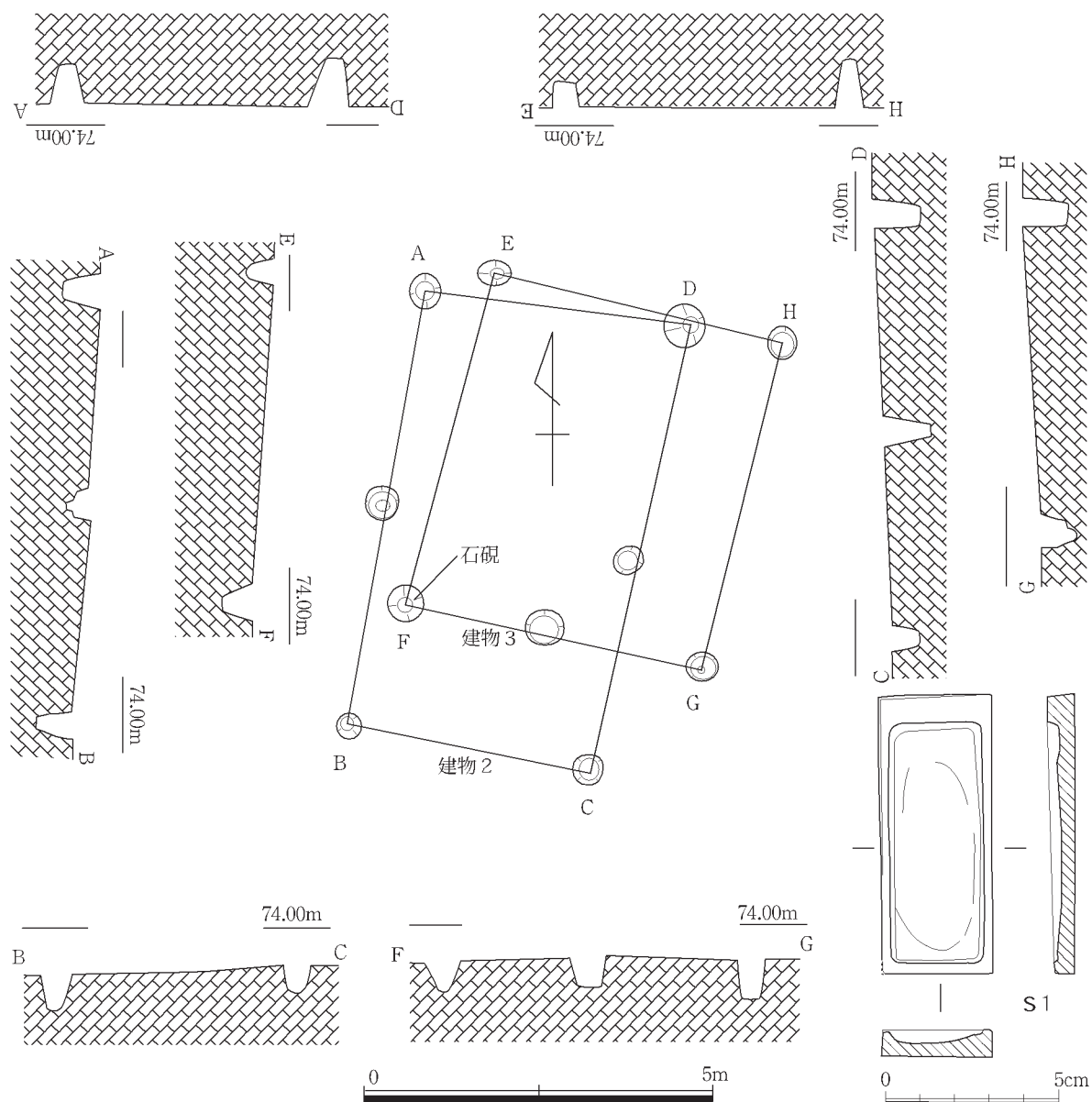
遺物は、中世土器細片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

建物5（第225・228図）



第226図 建物1（1/100）



第227図 建物2・3 (1/100)・同3 出土遺物 (1/2)

1区建物4と重複してやや南寄りに検出した桁行1間、梁間1間の正方形掘立柱建物である。規模は、桁行全長410cm、梁間390cm、床面積15.99㎡である。柱穴は楕円形か隅丸方形で、長径あるいは一辺50～80cm、深さは30～90cmと差があるが、かなり深い。北東隅の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでいる。南西隅の柱穴には、角礫が裏込めされている。建物の棟方向はN－89度－Eでほぼ東西方向であるが、正方形建物であることから棟方向は参考値である。

遺物は、中世土器細片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

建物6 (第225・228図)

1区建物5と重複してやや西寄りに検出した桁行1間、梁間1間の長方形掘立柱建物である。規模は、桁行全長510cm、梁間430cm、床面積21.93㎡である。柱穴は円形か隅丸方形で、直径あるいは一辺45～70cm、深さは47～65cmと差があるが、かなり深い。建物の棟方向はN－85度－Eでほぼ東西方向である。

遺物は、中世土器細片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

建物7（第225・229図）

1区建物6の南に検出した桁行1間、梁間1間の長方形掘立柱建物である。規模は、桁行全長450cm、梁間400cm、床面積18.00㎡である。柱穴は円形で、直径30～60cm、深さは25～62cmと差があるが、かなり深い。建物の棟方向はN-75度-Eでほぼ東西方向である。

遺物は、中世土器細片が出土している。

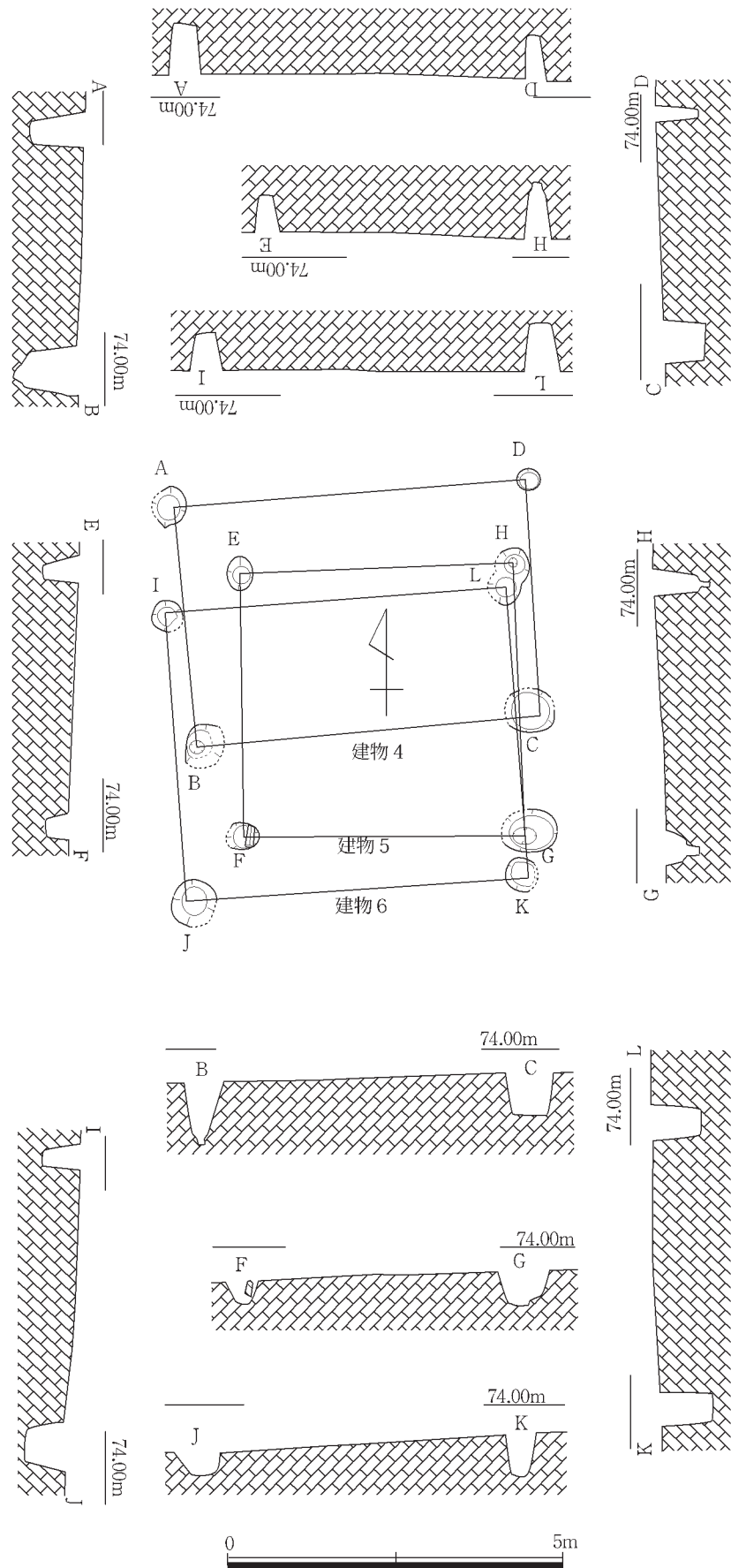
時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

建物8（第225・229図）

1区建物7と重複してやや南西寄りに検出した桁行1間、梁間2間の正方形掘立柱建物である。規模は、桁行全長350cm、梁間350cm、床面積12.25㎡である。柱穴は円形で、直径45～60cm、深さは11～75cmと差がある。南東隅の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでいる。建物の棟方向はN-2度-Wでほぼ東西方向である。正方形建物であることから棟方向は参考値である。

遺物は、中世土器細片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。



第228図 建物4～6 (1/100)

建物9（第226・229図）

1区建物8と重複してやや南西寄りに検出した桁行2間、梁間2間の正方形掘立柱建物である。規模は、本遺跡中最大で桁行全長510cm、梁間500cm、床面積25.50㎡である。柱穴は円形で、直径30～50cm、深さは24～51cmと差がある。北西隅の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでいる。建物の棟方向はN－5度－Wでほぼ東西方向である。正方形建物であることから棟方向は参考値である。

遺物は、中世土器細片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

2 柵

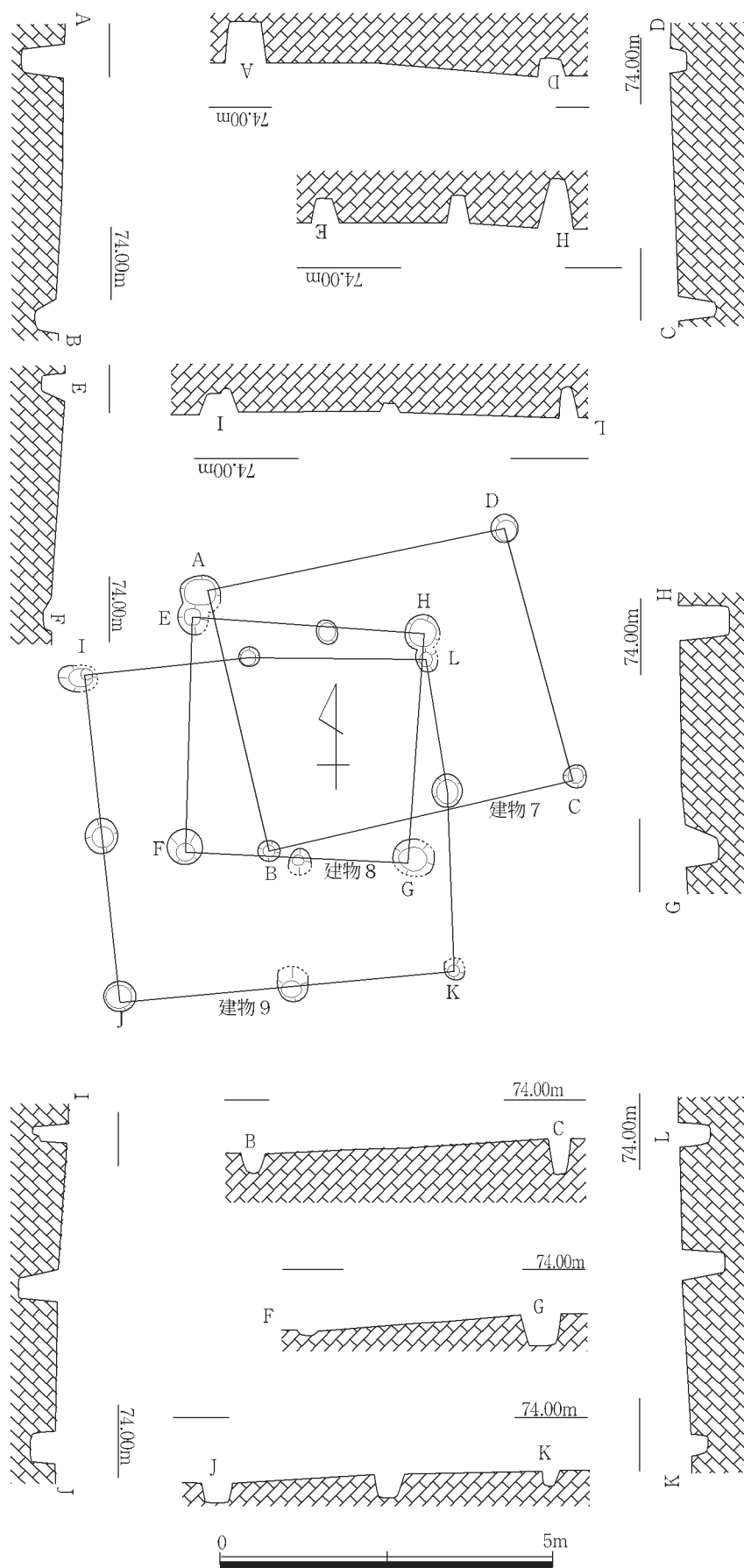
柵1（第225・230図）

1区建物群の北に検出したA～Bの6本の柱穴列である。規模は、1間の長さは西から360cm、310cm、290cm、320cm、320cmで、5間の全長1600cmである。柱穴は円形で、直径25～30cm、深さは15～45cmと差がある。

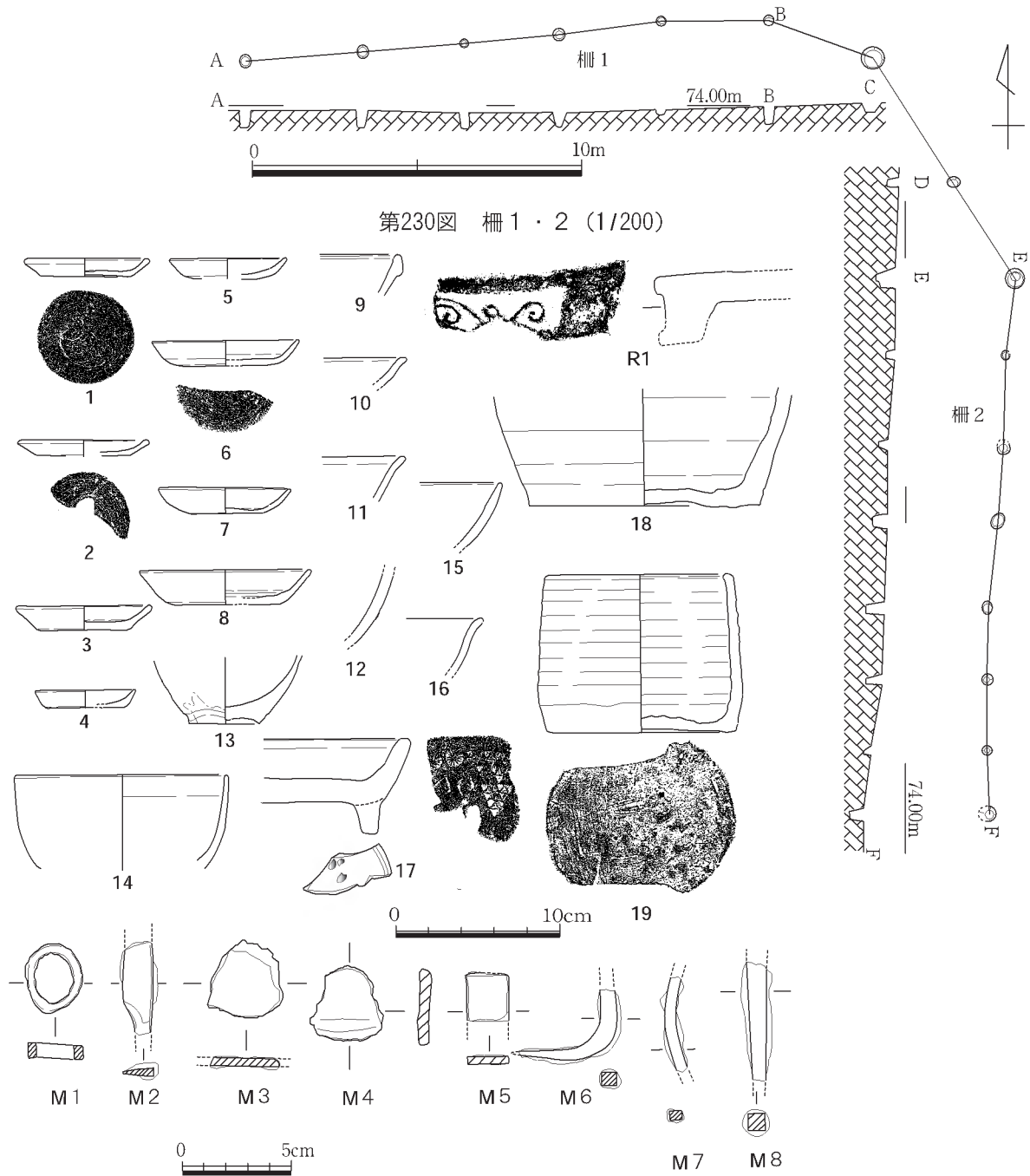
遺物は、中世土器細片が出土している。

時期は、遺物の器形特徴から中世と考えられる。

柵2（第225・230図）



第229図 建物7～9（1/100）



第230図 柵1・2 (1/200)

第231図 柱穴 出土遺物 (1/3・1/4)

1区建物群の東に検出したE～Fの8本の柱穴列である。規模は、1間の長さは北から250cm、270cm、230cm、270cm、210cm、210cm、210cmで、7間の全長1650cmである。柱穴は円形あるいは楕円形で、直径20～60cm、深さは20～70cmと差がある。北端の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでいる。

時期は、遺物の中世土器細片から中世と考えられる。

3 柱穴

柱穴 (第224図)

1区では、建物にまもらない柱穴が多数検出できた。建物と柵周辺に集中している。つまり1区北部と東部に集中しているのである。逆に言えば南西部には柱穴の空白地域があることが確認できた。

柱穴出土遺物 (第231図)

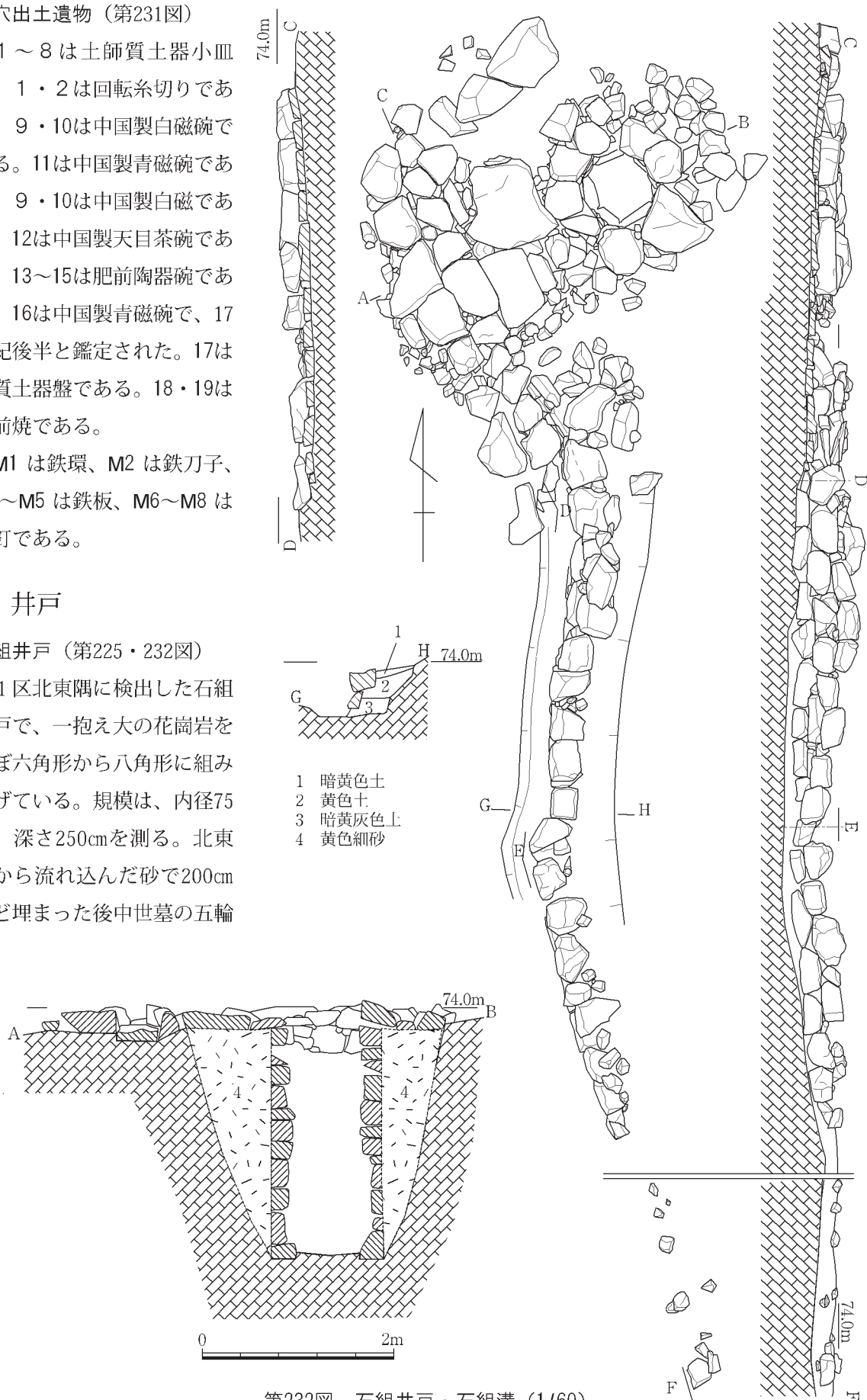
1～8は土師質土器小皿で、1・2は回転糸切りである。9・10は中国製白磁碗である。11は中国製青磁碗である。9・10は中国製白磁である。12は中国製天目茶碗である。13～15は肥前陶器碗である。16は中国製青磁碗で、17世紀後半と鑑定された。17は瓦質土器盤である。18・19は備前焼である。

M1 は鉄環、M2 は鉄刀子、
M3～M5 は鉄板、M6～M8 は
鉄釘である。

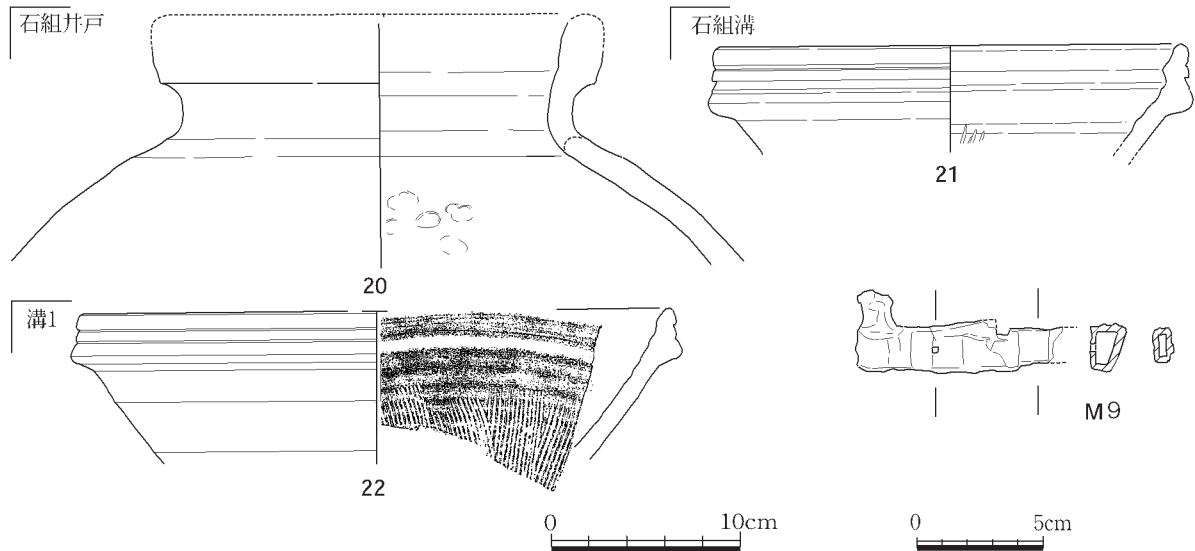
4 井戸

石組井戸 (第225・232図)

1区北東隅に検出した石組井戸で、一抱え大の花崗岩をほぼ六角形から八角形に組み上げている。規模は、内径75cm、深さ250cmを測る。北東谷から流れ込んだ砂で200cmほど埋まった後中世墓の五輪



第232図 石組井戸・石組溝 (1/60)



第233図 石組井戸・石組溝・溝1 出土遺物(1/3・1/4)

塔の1部材である球形の水輪が3個落ち込んでいた。自然落下と考えられる。その上にはすべての周用の洗い場も含めて120cmもの流土が堆積していた。埋積土をすべて除去したところ、湧き水があって、井戸の機能は復活した。井戸の掘り方については調査中の安全が確保できないため未調査である。石敷き洗い場(第225・222図)

井戸の最上面と同じ高さに合わせて、花崗岩の平石を2～3枚西側に接して、敷き詰め洗い場を築いている。平石の1個は一辺90cmもある。

石組溝(第225・222図)

洗い場の西には石敷きでかつ側壁も石組の溝が附属している。その長さは430cmで、幅は20cm、深さ15cmを測る。さらにこの溝は片側だけ石垣状に600cm延びている。

出土遺物(第233図)

石組井戸の裏込め部分から20の備前焼大甕口縁部細片が出土している。石組溝の側壁の間から21の備前焼播鉢片が出土した。M9の鉄器は鉋前であるが、石組溝の周辺からの出土である。

5 溝

溝1～3(第225・233図)

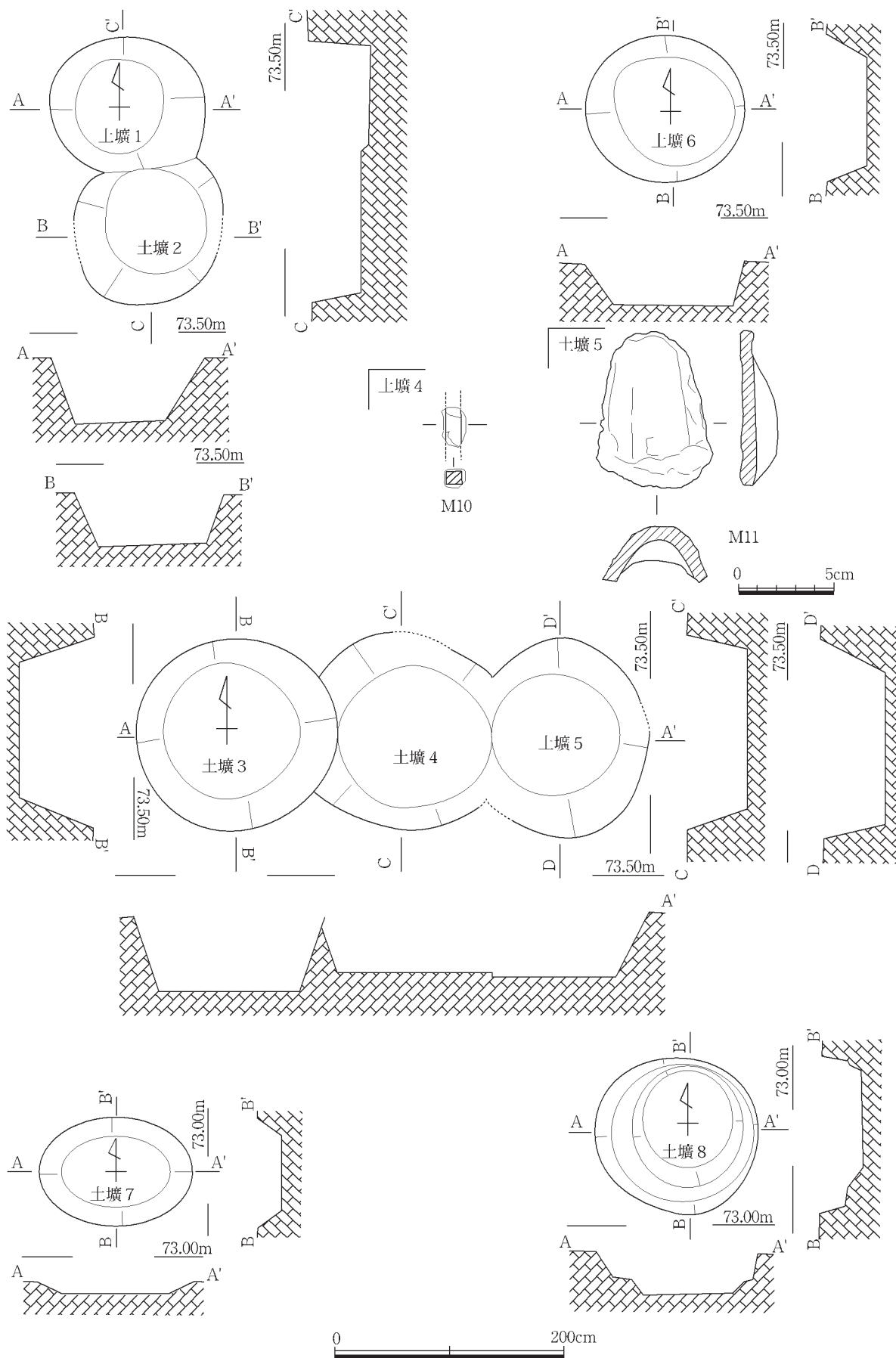
1区の北側に検出した素掘り溝である。溝1は一状で柵1の北東隅側にある。長さ650cm、最大幅100cm、深さ10cmを測る。溝2は直線的に柵1の北側に並行する。長さ1300cm、最大幅90cm、深さ10cmを測る。溝3は一状で溝1の南側にある。長さ600cm、最大幅30cm、深さ10cmを測る。

22の備前焼播鉢は溝1から出土したものである。

これらの溝の時期は、近世初期まで存続したものと考えられる。

溝4～7(第225図)

1区の北側および東側に検出した素掘り溝である。溝4は柵1の南側にある。長さ1000cm、最大幅15cm、深さ10cmを測る。溝5は柵2の西側にある。長さ450cm、最大幅15cm、深さ10cmを測る。溝6は溝5の南側にある。長さ320cm、最大幅10cm、深さ10cmを測る。溝7は溝6の南側にある。長さ340cm、最大幅20cm、深さ10cmを測る。



第234図 土壇 1～8 (1/50)・出土遺物 (1/3)

溝 8 (第225図)

1 区の東側に検出した素掘り石組溝の続きの溝である。石敷きが切れたところからの長さ1500cm、最大幅20cm、深さ10cmを測る。

6 土壇

土壇 1・2 (第225・234図)

1 区建物 7 の西で検出した楕円形の土壇である。土壇 1 の規模は、長軸136cm、短軸124cm、深さ54cmで、土壇 2 の規模は、長軸136cm、短軸130cm、深さ44cmである。上層観察では、土壇 2 が土壇 1 を切っていた。いずれも最下層には灰色粘土が 1 cmの厚さに堆積していた。

遺物の出土がないので検出面から近世と推定したい。

土壇 3～5 (第225・234図)

1 区建物 7 などの南で検出した楕円形の土壇である。土壇 3 の規模は、長軸176cm、短軸170cm、深さ65cmで、土壇 4 の規模は、長軸180cm、短軸175cm、深さ56cmである。土壇 5 の規模は、長軸174cm、短軸150cm、深さ55cmである。土層観察では、土壇 3 が土壇 4 を切っていた。土壇 4 は土壇 5 を切っていた。いずれも最下層には灰色粘土が 1 cmの厚さに堆積していた。

遺物は、土壇 5 から M11 の鍬の柄と考えられる鉄器が出土したので近世と推定したい。

土壇 6 (第225・234図)

1 区土壇 3 などの南で検出した楕円形の土壇である。その規模は、長軸140cm、短軸130cm、深さ36cmである。最下層には灰色粘土が 1 cmの厚さに堆積していた。

遺物の出土がないので検出面から近世と推定したい。

土壇 7 (第225・234図)

1 区南端、土壇 6 の南で検出した楕円形の土壇である。その規模は、長軸135cm、短軸95cm、深さ23cmである。最下層には灰色粘土が 1 cmの厚さに堆積していた。

遺物の出土がないので検出面から近世と推定したい。

土壇 8 (第225・234図)

1 区南端、土壇 7 の東で検出した円形の土壇である。その規模は、長軸142cm、短軸140cm、深さ36cmである。二段に掘り込まれている。遺物の出土がないが、上層の土壇は検出面から近世と推定したい。下層の土壇は弥生の可能性もある。

7 中世墓

中世墓 (第224・235図)

慶運寺跡 2 区北東隅に検出した無縁墓地である。重機で表土掘削中に多数の角礫が出土したため、急遽精査することにした。北東隅の石敷き状の角礫はほとんど五輪塔の地輪と火輪が逆さまになっていたものである。調査は南部と北部に分けて実施した。図面は両方を重ねたものである。急な斜面を切り取って墓地造成を行っている様子が北に加工段として現れている。石の集中箇所の横に破線を記入したのは、墓地の単位をこの様に想定できるのではないかと考えたからである。大きく 6 単位を仮定した。五輪塔の元位置を保っているものは見当たらない。火葬骨の詰まった備前焼の壺は、埋納状態の判る物が多い。石で囲うものとそうでないものがある。



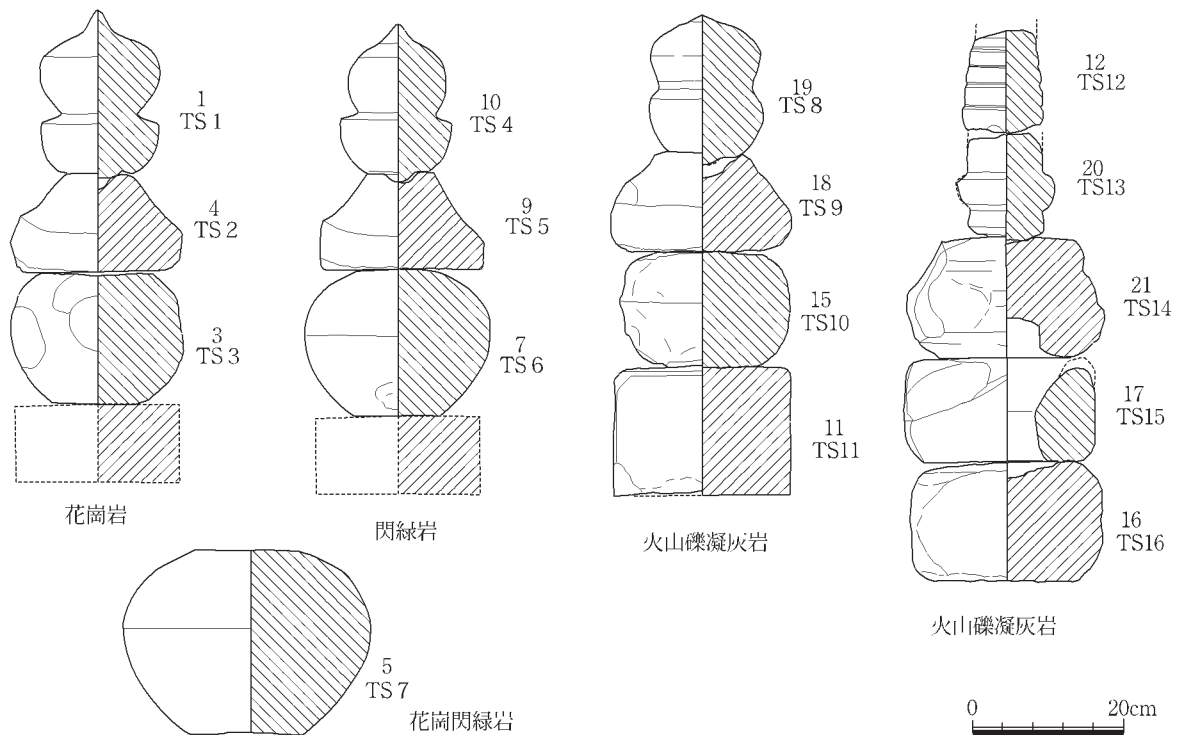
第235図 中世墓 (1/80)

五輪塔ほか (第235・236図)

図面は、散在していた五輪塔の部材を石材鑑定した後、同質石材だけで組み合わせてみたものである。左から花崗岩、閃緑岩、火山礫凝灰岩である。最も右の図は宝篋印塔の部材を集めたもので、火山礫凝灰岩製品である。また、遺跡内出土の最大の水輪は井戸に落ち込んでいた花崗閃緑岩製品であった。なお、県北でよく見かけるこごめ石製品も少数ではあるが出土している。

備前焼骨蔵器 (第237～239図)

23～26 の壺には、肩部に櫛描き波状文が施されている。口縁端部の形は、素縁のもの、わずかに膨らむもの、玉縁を呈するものがある。25 の壺には、火葬骨が口まで一杯に納骨されていたので、丁寧に取り出した後、岡大医歯学大学院の大塚愛二氏に人骨鑑定を依頼した。その結果、壺の下部には大腿骨・脛骨・寛骨・腰椎など下半身の骨が、壺の上部には上腕骨・胸椎・下顎骨・頭蓋骨など上半身



第236図 中世墓出土五輪塔ほか組み合わせ (1/10)

の骨が入れられ、最後に第2頸椎すなわち「のど仏」が納められていたことが判明した。そして、腰椎の磨滅状態から壮年らしいが、男女は不明であった。27～32の壺には、肩部に櫛描き平行線文が施されている。27～29には1段、30～32には2段に施文している。また、30・31の底面には、布目が残る。33・35の底面には、下駄状に板目が残る。40には肩部に緑色の自然釉葉が掛かっている。41は底部穿孔されている。45の壺は、口縁端部の形が折り返して玉縁になり、肩部がなで肩を呈し、底部は上げ底になっている。46の壺は、推定器高30.7cmを測るやや大形品である。47の壺は、器高18.2cmを測るやや小形品である。48の壺は、底部が上げ底になっている。51は底部穿孔されている。52の壺は、肩部に3個耳が付けられている。53の小壺は、片口を持つ。すずめ口とも言われる。底面には×印が線刻されている。口径7.3cm、底径8.6cm、器高11.9cmを測る。54の小壺も、すずめ口を持つ。底面には回転糸切りがされている。口径5.1cm、底径5.1cm、器高8.7cmを測る。

その他の骨蔵器 (第240図)

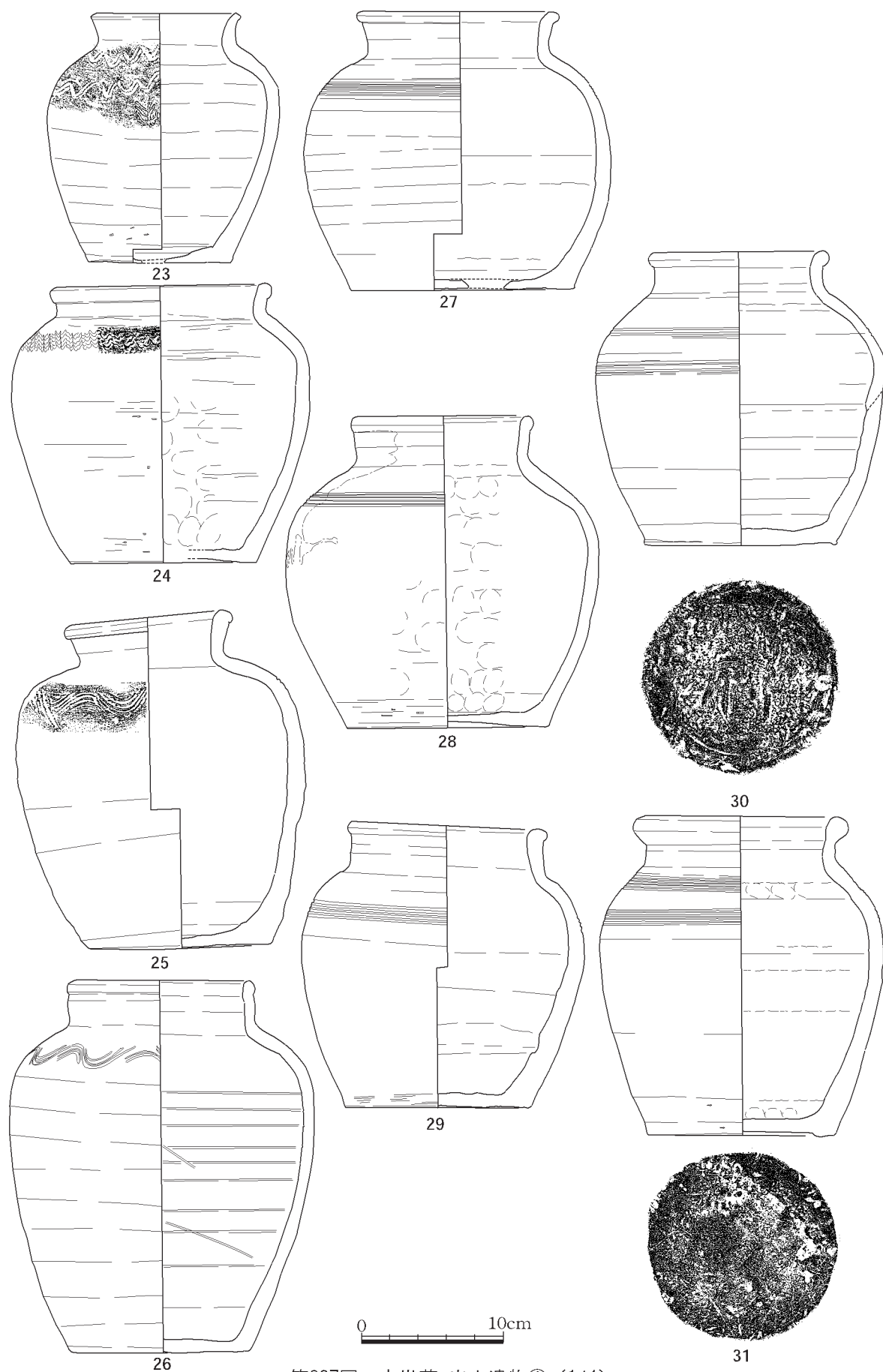
55は、土師器甕で、外面ハケメ、内面ヘラケズリしている。60は、瓦質土器で、注ぎ口と釣手を付けた土瓶である。外面ハケメ、内面ヘラケズリしている。口径11.6cm、底径18.2cm、器高17.2cmを測る。61も、瓦質土器で、釣手と羽と火よけ耳を付けた羽釜である。内外面ハケメ調整している。現存器高15.3cmを測る。

その他の土器 (第240図)

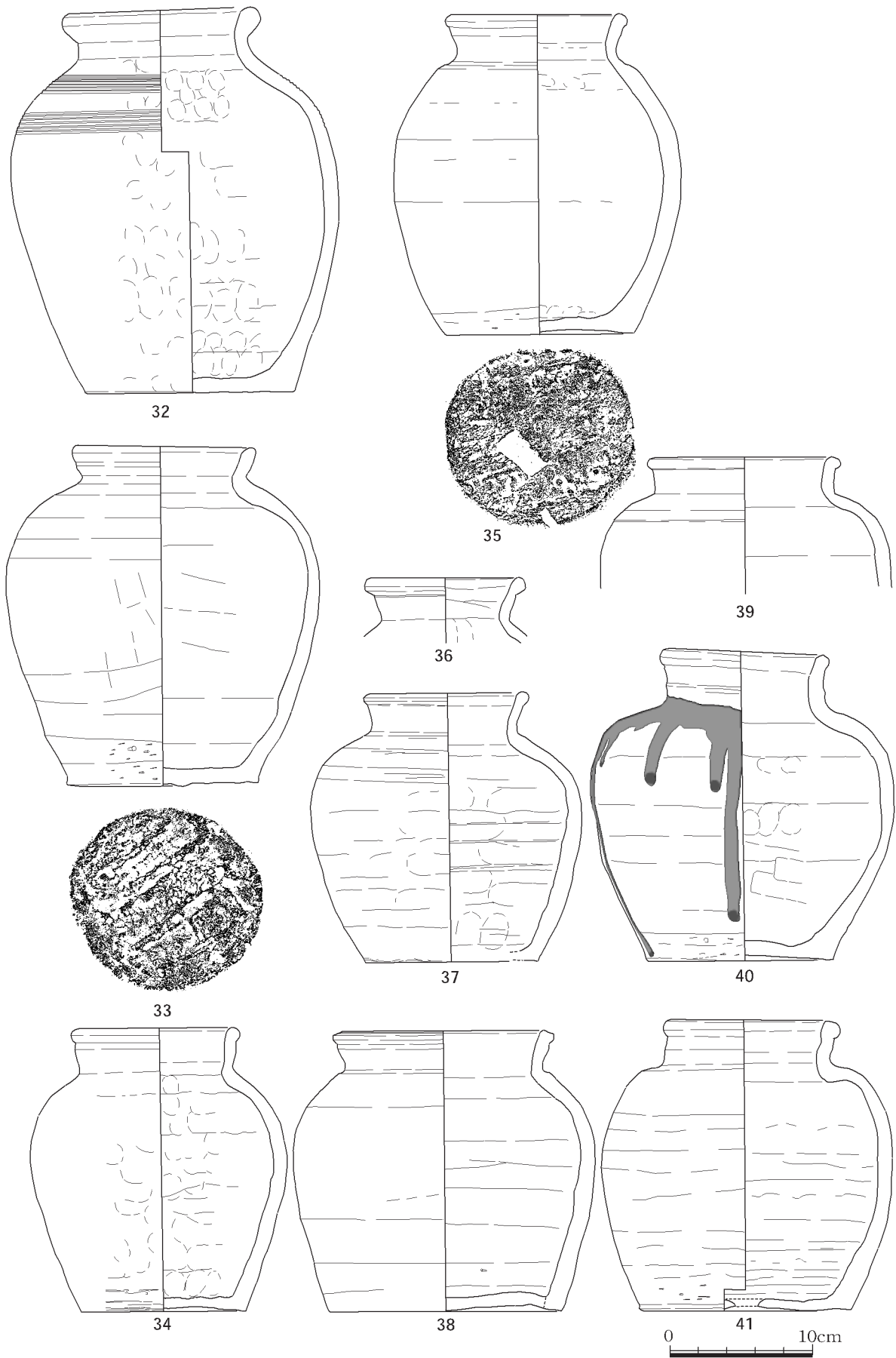
骨蔵器とはならない小形品が少数出土している。墓前に供えたものである。56～59は、土師質土器である。56の小皿は、回転糸切りが残る。58・59は小碗の底部は指押さえて凹ましている。

その他の遺物 (第240図)

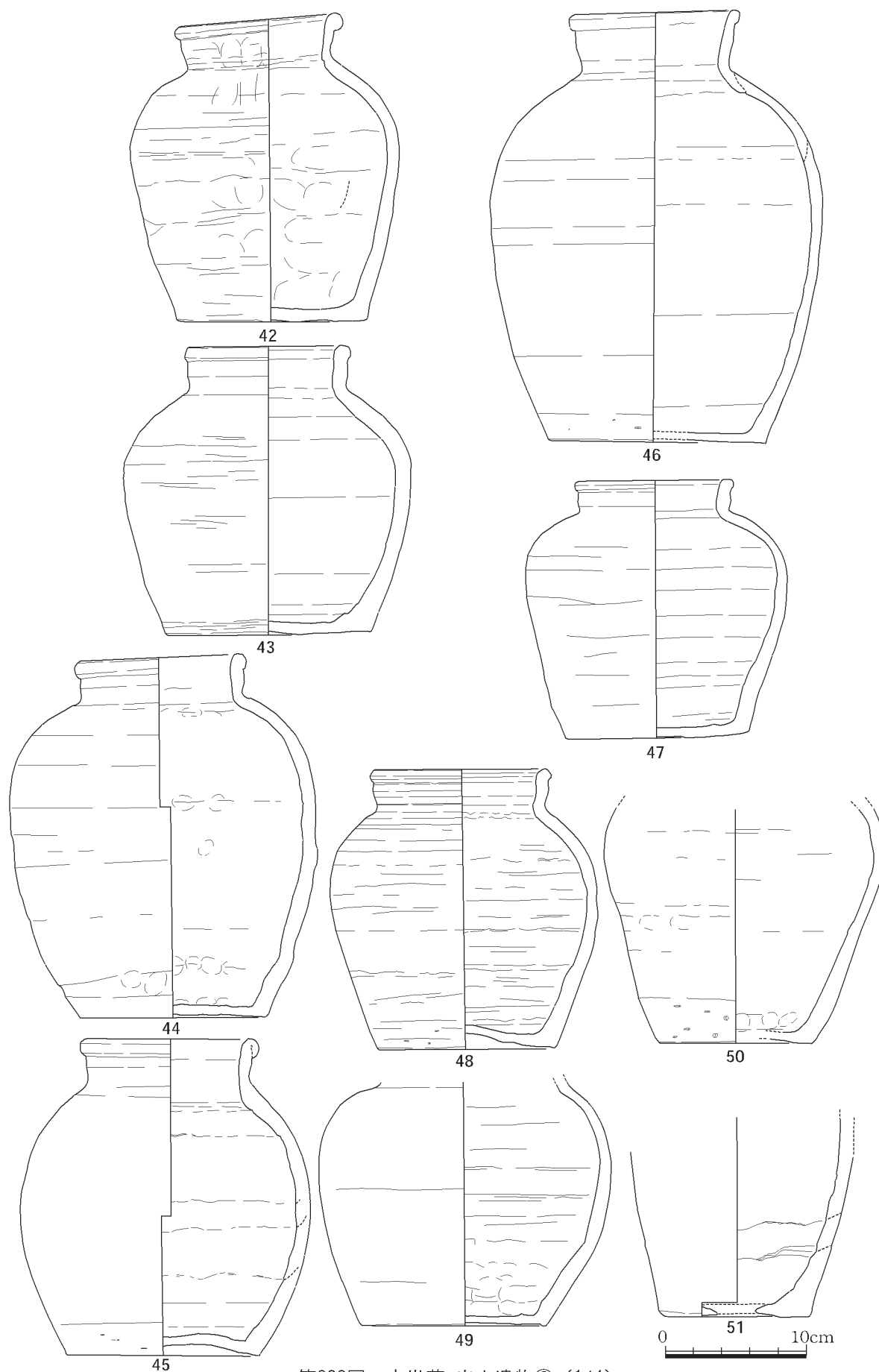
鉄器が2点出土している。M12は現存長72mm、幅14.2mm、厚さ13.0mm、重量23.61gを測る石割用の鉄鑿と考えられる。M13は現存長21.0mm、幅5.0mm、厚さ4.0mm、重量0.62gを測る鉄釘である。



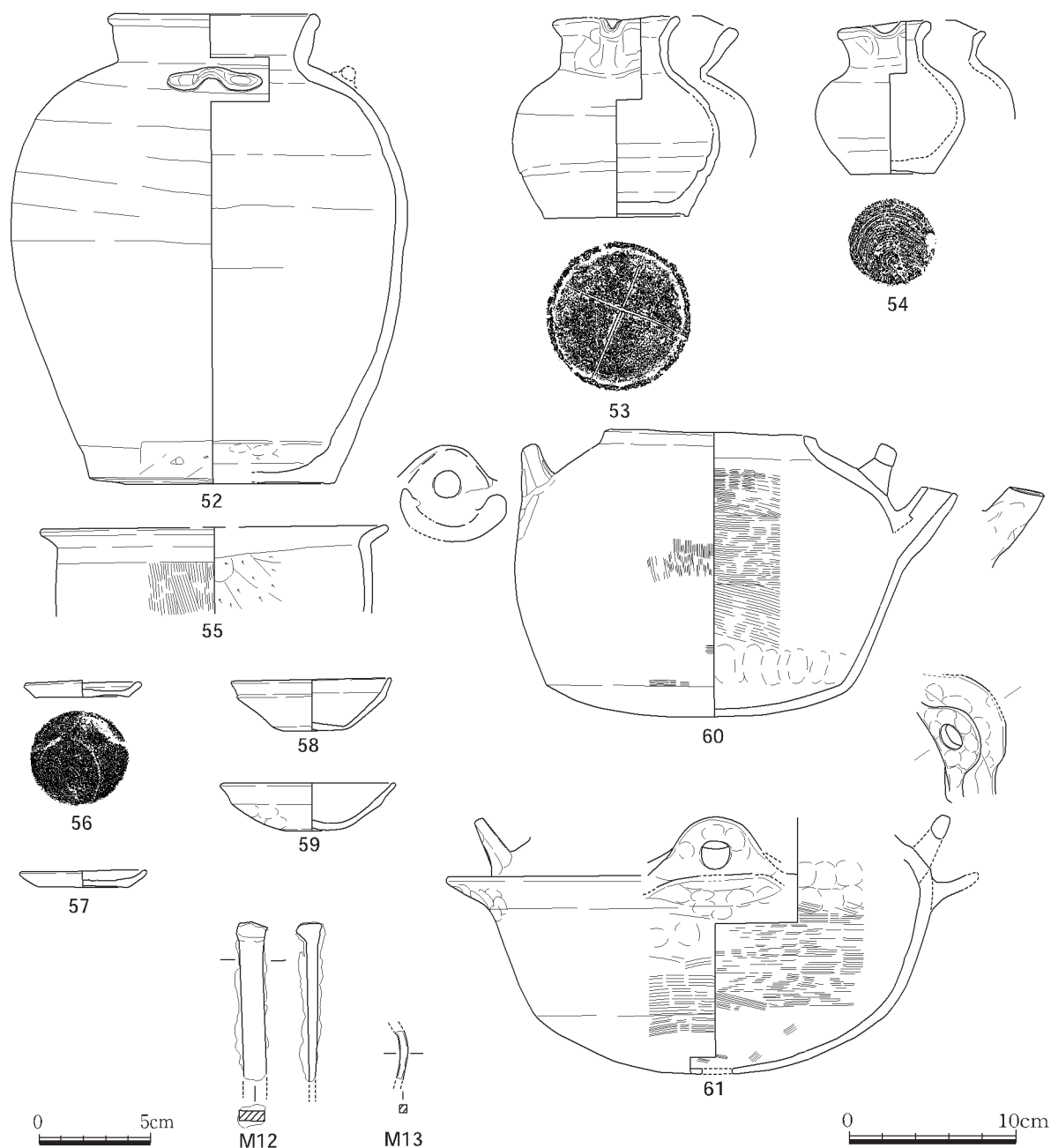
第237図 中世墓 出土遺物① (1/4)



第238図 中世墓 出土遺物② (1/4)



第239図 中世墓 出土遺物③ (1/4)



第240図 中世墓 出土遺物④ (1/3・1/4)

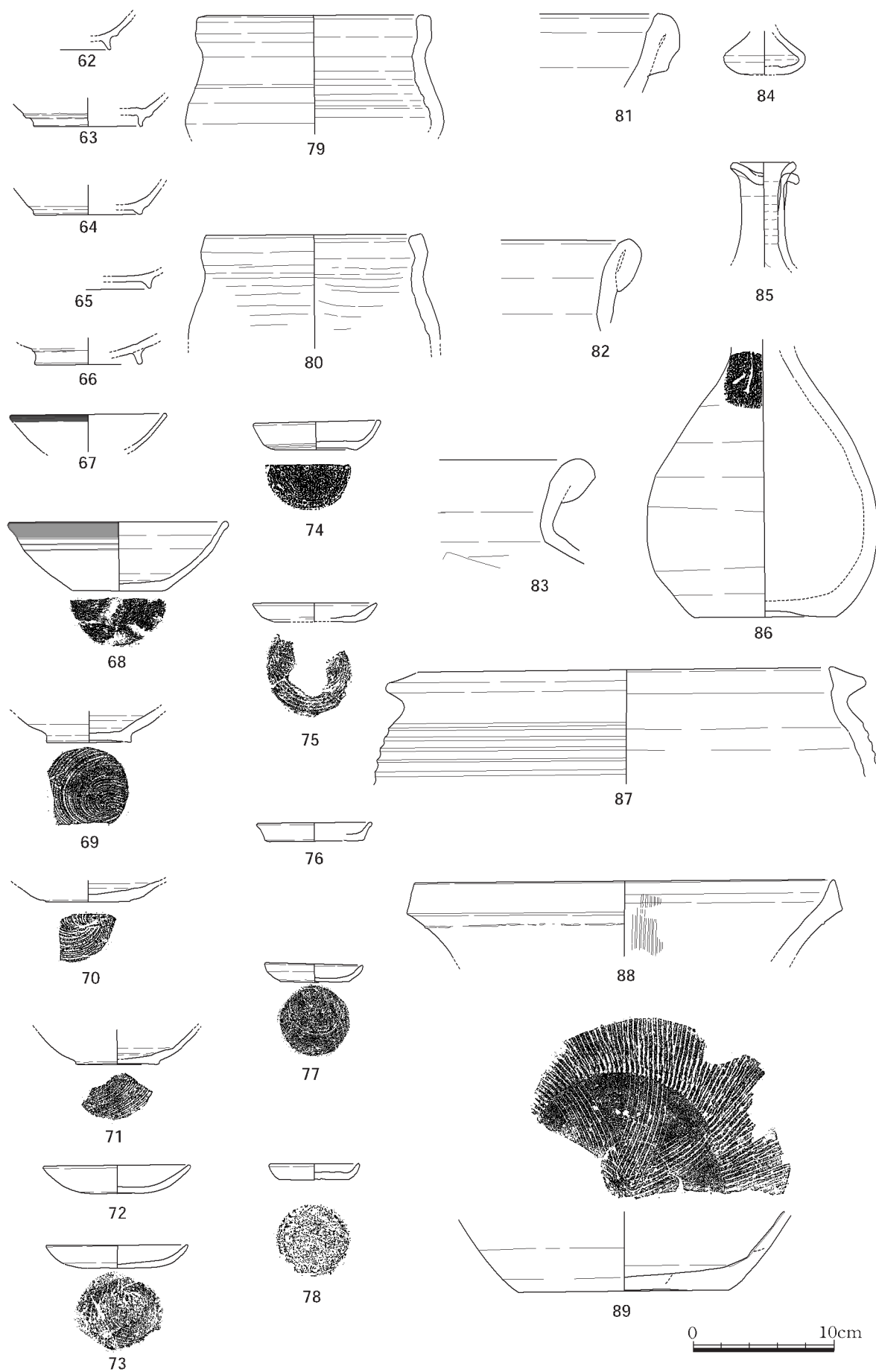
第3節 遺構に伴わない遺物

1 土器・陶磁器 (第241・242図)

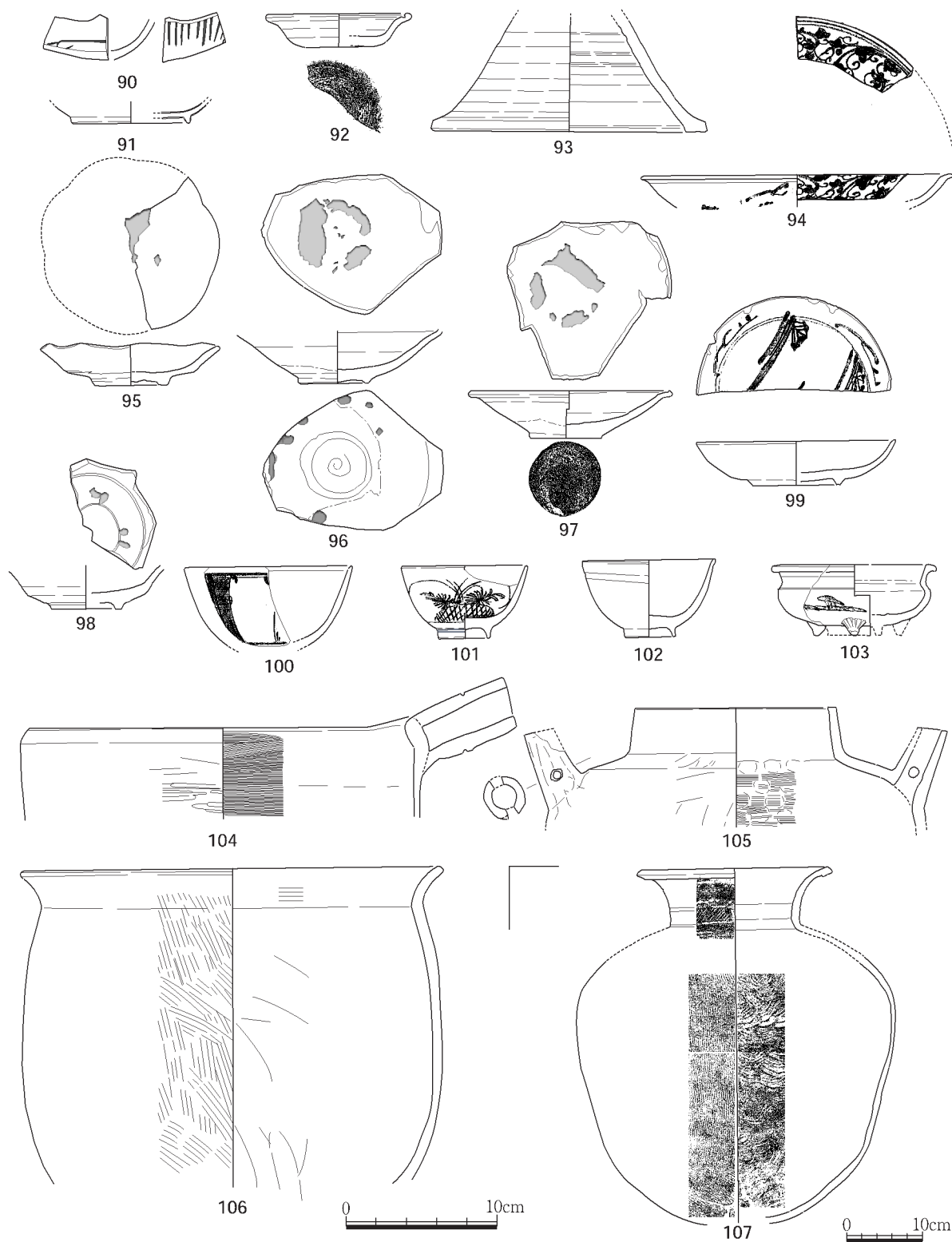
62～71 は、須恵器で、62～66 は、高台付杯の高台部破片である。67 は、碗の口縁が帯状に黒色になっている口縁部破片である。68 も、縁黒口縁の碗である。68～71 の底部は、回転糸切りが残る。

72～78 は、土師器小皿である。回転糸切りが残るものと板目のものがある。

79～87 は備前焼で、79・80 は、鉢である。81・82 は、大甕である。83 は、壺である。84 は、小形の壺である。85 は、鶴首壺の口縁から頸部である。86 は、鶴首壺の頸部の下部から体部である。



第241図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第242図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/8)

その上端に線刻が見える。87は、甕である。肩部に凹線を施す。

88・89は、播磨系の播鉢と考えられる。90は、中国製青磁碗で、15C後半～16C前半と鑑定（家田諄一氏）。91は、中国製白磁碗である。92は、瀬戸灰釉陶器縁溝皿で、14C後半と鑑定（井上喜久男氏）。93は、瀬戸灰釉陶器燭台で、14C後半と鑑定（井上）。94は、中国製磁器皿で、16C後半～17C初頭と鑑定（家田）。95は、肥前陶器輪花皿で、1590～1610年と鑑定（以下家田）。96は、肥前陶器皿

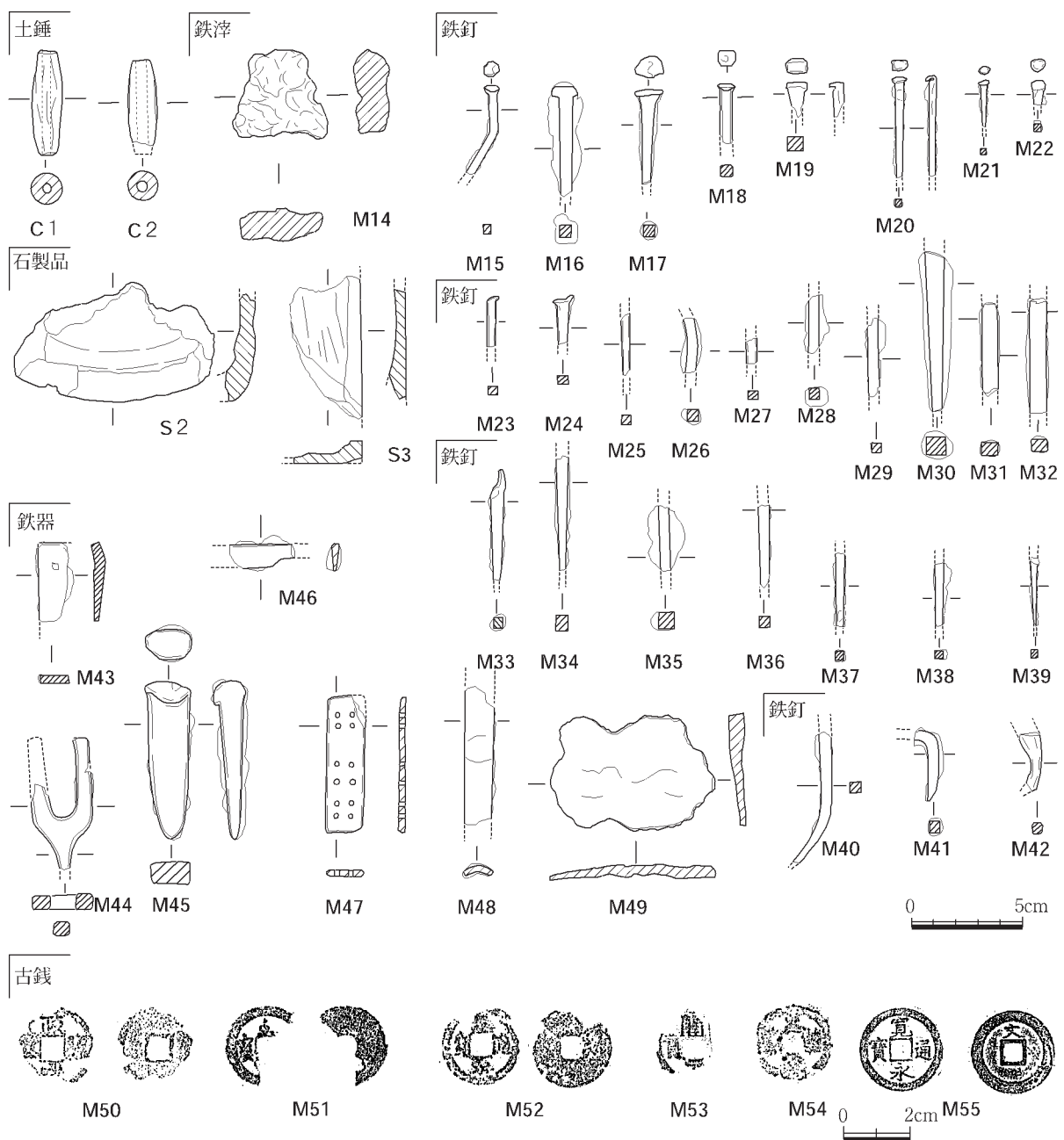
で、1610～1630年と鑑定。97 は、肥前陶器縁溝皿で、1610～1630年と鑑定。98 は、肥前磁器皿で、17C後半と鑑定。99 は、肥前磁器皿で、18C末～19C前半と鑑定。100 は、肥前磁器皿で、18C末～19C前半と鑑定。101 は、肥前磁器碗で、17C後半と鑑定。102 は、肥前磁器碗で、時期不明。103 は、肥前磁器香炉で、19C前半。

104 は、瓦質土器手鍋で、取っ手は空洞に成っている。105 は、土瓶で、注ぎ口は両方に付き、釣手としての機能も持っている。

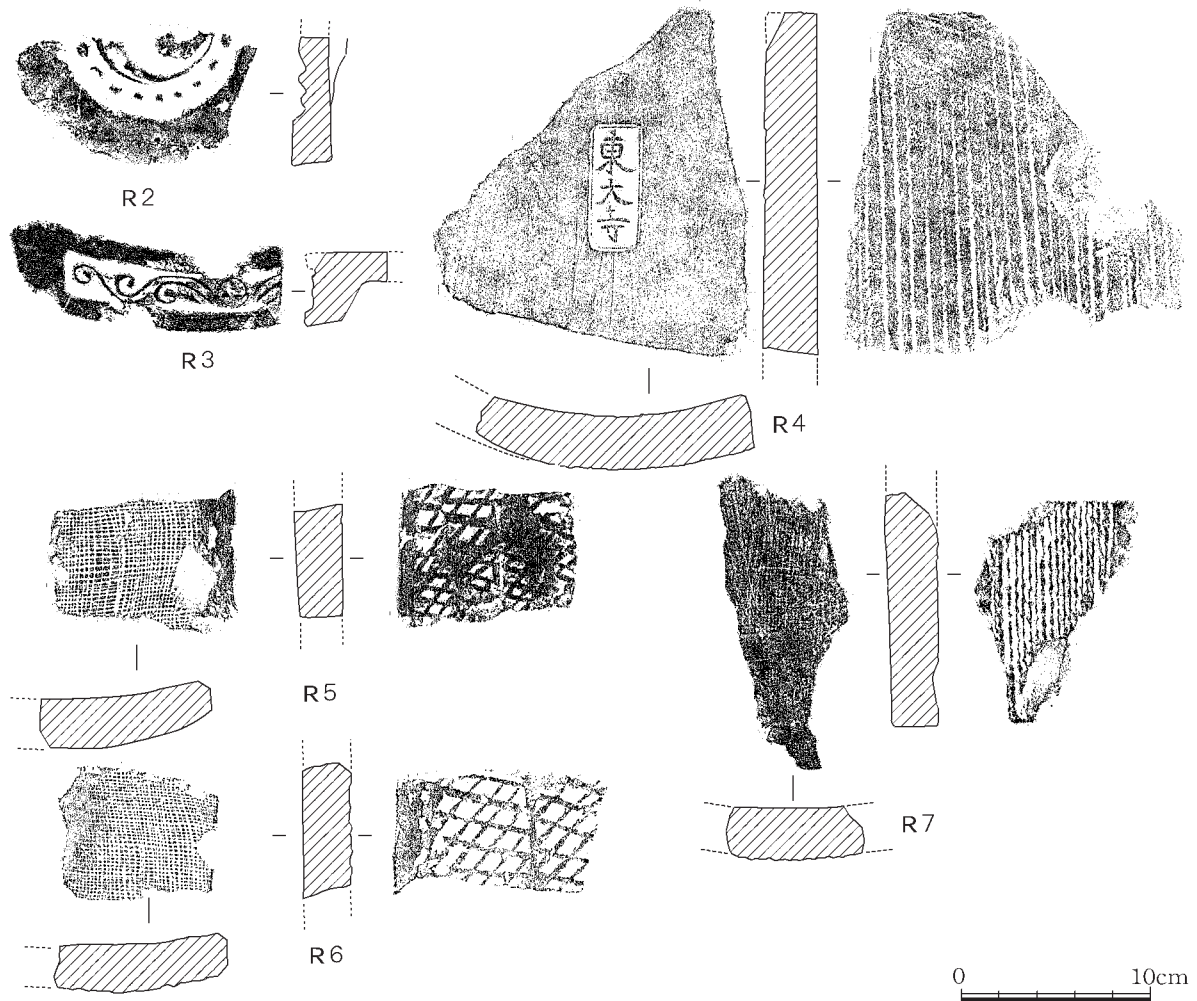
106 は、土師器甕で、慶運寺北調査区の土壌上層から出土した。107 も同様に出土した須恵器大甕である。どちらもその弥生時代の上層には全く伴わない土器である。

2 その他の遺物（第243図・244図）

C 1 は胴膨らみの円筒土錘である。最大長47mm、最大幅14mm、孔径5mm、重量8.3gを測る。C 2 も胴



第243図 遺構に伴わない遺物③ (1/2・1/3)



第244図 遺構に伴わない瓦 (1/4)

膨らみの円筒土鍾である。端が若干欠ける。最大長39mm、最大幅14mm、孔径5mm、重量6.4gを測る。

M14 は台形の製錬流動滓である。長さ39mm、幅43mm、厚さ19.5mm、重量46.38gを測る。

S2 は滑石製石鍋の底の一部である。長さ91mm、幅53.5mm、厚さ13.5mm、重量66.14gを測る。S3 は頁岩製石硯の陸部の破片である。長さ65mm、幅32mm、厚さ10.5mm、重量18.7gを測る。

M15～M42 は鉄釘である。M15～M24 の鉄釘は頭部が残存している。M40・M41 の鉄釘は先端部が残存している。M43・M47・M48 は厚さ2.5～3.0mmの鉄板で、M43・M47 には小孔が穿たれている。M47 は小札と考えられ、長さ62mm、幅17mm、厚さ3.0mm、重量8.37gを測る。M44 は二又の鉄器で、用途は不明。M45 はM12 と同様の鉄器で、石割り用の鉄鑿であろう。M49 は厚さ7.5mmの鉄板で、用途は不明。

古銭は、6点出土している。M50 は政和通宝。M51 は至道元宝か。M52 は皇宋通宝か。M53 は開元通宝か。M54 は熙寧元宝か。M55 は寛永通宝である。

瓦は R2～R7 の6点が出土している。R2 は軒丸瓦で、内区に尾の長い三つ巴文、圏線がなく、外区に珠文が付く。R3 は軒平瓦で、中心部に三つ巴文、左右に均等唐草文が付く。R4 は平瓦で、凹面に「東大寺」印が押されている。凸面は縄目のタタキが付く。R5・R6 は平瓦で、凹面に布目、凸面は格子のタタキが付く。R7 は平瓦で、凹面に布目、凸面は縄目のタタキが付く。(浅倉)

第4節 小結

1 遺構について

慶運寺跡で検出した遺構は、調査成果の概要で示した建物・柵・井戸・溝・土壇・墓など27遺構を数える。

柱穴の項目で記したように、建物としてまとまったのは9棟であるが、まだまだ多数の建物が建っていたことが明らかである。しかし、同時に建っていた建物の棟数は敷地面積に規制される。

この1区の柵に囲まれた敷地内には最大4棟が限度である。また、柱穴のほとんど検出できなかった南西部には広場か畑か、あるいは庭木でも植えていたものか確認の証拠は出ていない。建物の規模については、柱穴の大きさ・深さなどから推測するともっと大きくてもよいように考えたが、調査の結果、規模拡大は果たせなかった。文献にあるように不受不施派の慶運寺がこの場所にあつて、近世初期に池田光政により、取り潰しにあったとしたら、この程度の小さな建物で納得するものである。

井戸の位置としては、まったく理にかなった選定をしている。地形的に、幅10m程度の谷尻に位置する。現在でも湧き水のでるところである。井戸の北西に1本のやや大き目の柱穴があるのは、つるべの支柱となるものであろう。

中世墓の位置については、現在の墓地と大して変わらない山の中腹にあたる。鎌倉によくある中世墓「やぐら」と同じものが、この岡山美作道路用地に接して南西境界部分に1基存在する。その内部には江戸時代か少し前の火山礫凝灰岩製の家型の石塔が入って墓地として祭られている。

2 遺物について

慶運寺跡で検出した遺物は、調査成果の概要で示した土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・瓦・土錘・石器・鉄器・古銭など約170点を数える。

遺構出土の遺物のうち、中世墓に骨蔵器として使用された備前焼が32点ある。その内訳は、壺30点、すずめ口壺2点である。壺の内、肩部に沈線を施すものが10点、底部穿孔の確実にあるもの4点、耳付1点など特徴がある。口縁部の特徴は、玉縁になるものが多い。これらの特徴から一群の備前焼の時期は、水の子岩で採集された備前焼と同時期の室町時代に属すると考えられる。

土師質土器 58・59 は、へそ椀と呼ばれる底部の凹む特徴を持った椀で、室町時代に比定されている。

瓦質土器 60・61 は、日常使用されていた土器で、中世墓に骨蔵器として、転用されていたが、やはりその特徴から室町時代に比定されている。

陶磁器については、古いもので12・13世紀中国産白磁から昭和の瀬戸物まで出土しているが、中心はやはり、中世後期～近世初頭の慶運寺が取り潰される時期の品物が多い。珍しいものとしては、岡山県初見と考えられる瀬戸灰釉陶器の燭台がある。これ1点でもお寺関係が強く関連付けられる。

石製品では、建物柱穴から携帯用の小形方形硯がほぼ完全な形で出土し、造成土中から方形硯の破片が出ている。これも寺院関連遺物である。また、造成土中より、滑石製石鍋の破片も出た。

鉄器では、釘のほかにもいろいろ出土しているが、特に寺院との関連遺物は M44 の掛け軸をかける二又金具がある。

(浅倉)

遺構・遺物一覧（観察）表

第17表 谷の前遺跡段状遺構一覧表

挿図 番号	遺構 番号	調査区	床規模 (m・㎡)			床面海拔高 (m)	時 期	備 考	旧番号
			長 軸	短 軸	床面積				
152	1	慶運寺北	14.00	2.00	28.00	82.80	弥生後期		Ⅱ-1
153	2	慶運寺北	10.00	1.50	15.00	82.40	弥生後期		Ⅱ-2
154	3	慶運寺北	2.80	0.48	1.34	82.26	弥生後期	壁体溝	3
154	4	慶運寺北	1.68	0.40	0.67	82.16	弥生後期		10
154	5	慶運寺北	5.20	0.64	3.33	82.85	弥生後期		5
154	6	慶運寺北	1.44	0.64	0.92	82.39	弥生後期		9
154	7	慶運寺北	2.00	0.56	1.12	82.37	弥生後期		7
159	8	慶運寺北	4.00	0.80	3.20	79.37	弥生後期		4
159	9	慶運寺北	3.20	0.24	0.77	83.52	弥生後期	壁体溝	6
159	10	慶運寺北	1.20	0.60	0.72	79.51	弥生後期		11
162	11	慶運寺北	3.04	0.24	0.73	84.05	弥生後期		20
163	12	慶運寺北	4.48	0.96	4.30	81.55	弥生後期	壁体溝	14
164	13	慶運寺北	5.20	0.16	0.83	75.45	弥生後期	壁体溝	19

第18表 谷の前遺跡竪穴住居一覧表

挿図 番号	遺構 番号	調査区	規 模 (m)		床面積 (㎡)	床面海拔高 (m)	時 期	備 考	旧番号
			長軸	短軸					
165	1	慶運寺北	1.30	0.50		84.00	弥生後期	壁体溝	K1-H1
167	2	慶運寺南	6.60	6.60	34.19	71.20	弥生後期	円形・6本柱	T1-H1
167	3	慶運寺南	7.70	7.70	46.54	71.20	弥生後期	円形・6本柱	T1-II2
167	4	慶運寺南	8.80	8.80	60.79	71.30	弥生後期	円形・8本柱	T1-H3
167	5	慶運寺南	10.00	8.60	78.50	71.40	弥生後期	円形・9本柱	T1-H4
172	6	慶運寺南	4.80	0.50		71.92	弥生後期	壁体溝	T1-II5
172	7	慶運寺南	7.50	2.00		71.92	弥生後期	壁体溝	T1-H6
172	8	慶運寺南	5.07	1.50		72.43	弥生後期	円形・柱穴2	T1-H7
172	9	慶運寺南	7.80	2.60		73.10	弥生後期	円形・柱穴2	T1-II8
172	10	慶運寺南	3.70	0.60		72.45	弥生後期	壁体溝	T1-H9
173	11	慶運寺南	6.00	1.55		72.42	弥生中期	柱穴2	T1-H10
173	12	慶運寺南	5.60	1.40		72.37	弥生後期	壁体溝	T1-II25a
173	13	慶運寺南	4.50	0.50		72.37	弥生後期	壁体溝	T1-H25b
174	14	慶運寺南	6.00	1.20		72.88	弥生中期	壁体溝	T1-H11
174	15	慶運寺南	6.00	2.50		73.00	弥生後期	壁体溝	T1-II14
174	16	慶運寺南	1.60	1.60		72.43	弥生後期	壁体溝	T1-H12
174	17	慶運寺南	6.00	1.70		72.77	弥生後期	段状	T1-H13
174	18	慶運寺南	3.20	0.70		72.65	弥生後期	壁体溝	T1-H15
174	19	慶運寺南	2.80	0.40		72.16	弥生後期	弧形	T1-H19
174	20	慶運寺南	4.40	0.80		72.31	弥生後期	柱穴1	T1-H17
174	21	慶運寺南	3.70	0.40		72.31	弥生後期	弧形	T1-H18
174	22	慶運寺南	1.20	0.50		72.06	弥生後期	壁体溝	T1-H40
174	23	慶運寺南	3.70	0.70		72.41	弥生後期	柱穴2	T1-H16
174	24	慶運寺南	5.00	0.60		72.00	弥生後期	柱穴1	T1-H26
176	25	慶運寺南	4.00	1.20		70.40	弥生後期	壁体溝	T1-H20
176	26	慶運寺南	1.60	0.80		70.28	弥生後期	壁体溝	T1-H21
176	27	慶運寺南	1.60	0.80		70.45	弥生後期	弧形	T1-H22
176	28	慶運寺南	1.60	0.80		70.55	弥生後期	弧形	T1-H24
176	29	慶運寺南	0.50	0.40		71.44	弥生後期	壁体溝	T1-H27
176	30	慶運寺南	0.50	0.40		71.51	弥生後期	壁体溝	T1-H28
176	31	慶運寺南	3.00	1.20		70.31	弥生後期	壁体溝	T1-H29
176	32	慶運寺南	1.60	0.80		70.30	弥生後期	弧形	T1-H30
176	33	慶運寺南	3.30	1.50		70.25	弥生後期	壁体溝	T1-H31

第5章 慶運寺跡

挿図 番号	遺構 番号	調査区	規 模 (m)		床面積 (㎡)	床面海拔高 (m)	時 期	備 考	旧番号
			長軸	短軸					
178	34	慶運寺南	3.30	1.50		70.23	弥生後期	壁体溝・柱穴 1	T1-H32
178	35	慶運寺南	3.50	1.50		70.20	弥生後期	壁体溝・柱穴 4	T1-H33
178	36	慶運寺南				70.36	弥生後期	柱穴 1	T1-H23
178	37	慶運寺南	3.80	3.00		69.86	弥生後期	壁体溝・柱穴 2	T1-II34
178	38	慶運寺南				69.84	弥生後期	柱穴 4	T1-H35
178	39	慶運寺南	0.80	0.60		69.75	弥生後期	壁体溝・柱穴 1	T1-H45
180	40	慶運寺南	3.00	0.80		70.15	弥生後期	段状	T1-H36
180	41	慶運寺南	5.30	1.50		70.50	弥生後期	段状	T1 H38
180	42	慶運寺南	5.80	2.00		72.19	弥生中期	弧形	T1-II37
180	43	慶運寺南	3.50	1.20		70.38	弥生後期	壁体溝	T1-H53
180	44	慶運寺南	3.40	0.90		71.40	弥生後期	壁体溝・柱穴 1	T1-H48
182	45	慶運寺南	3.80	2.20		70.81	弥生後期	壁体溝	T1-H39
182	46	慶運寺南	5.80	1.50		70.47	弥生後期	壁体溝・柱穴 2	T1 H41
182	47	慶運寺南	3.00	2.50		71.43	弥生後期	方形	T1-H42
182	48	慶運寺南	2.00	1.00		71.40	弥生後期	方形	T1-H43
182	49	慶運寺南	2.00	1.00		71.45	弥生後期	方形	T1-H44
182	50	慶運寺南	3.40	0.80		70.54	弥生後期	壁体溝・柱穴 2	T1-II46
182	51	慶運寺南	5.00	0.90		71.17	弥生後期	壁体溝	T1-H50a
182	52	慶運寺南	4.00	0.50		71.09	弥生後期	壁体溝	T1-H50b
182	53	慶運寺南	1.60	0.60		71.12	弥生後期	壁体溝	T1-H51
182	54	慶運寺南	3.70	1.00		71.38	弥生後期	壁体溝・柱穴 1	T1-H54
184	55	慶運寺南	3.50	3.00		73.70	弥生後期	壁体溝・柱穴 4	K1-II1
185	56	慶運寺南	5.60	2.80		70.70	弥生中期	壁体溝・柱穴 2	T1 H49
185	57	慶運寺南	4.30	1.00		70.70	弥生中期	壁体溝・柱穴 1	T1-H52
185	58	慶運寺南	4.00	2.50		70.80	弥生中期	壁体溝・柱穴 1	T1-H55
186	59	慶運寺東	5.20	4.20		77.53	弥生後期	壁体溝・柱穴 6	K2-H1
186	60	慶運寺東	5.20	4.20		77.87	弥生後期	壁体溝・柱穴 4	K2 H2
186	61	慶運寺東	3.70	3.60		77.91	弥生後期	柱穴 3	K2-II3
187	62	慶運寺東	2.50	1.10		80.09	弥生後期	弧形	K2-H4
187	63	慶運寺東	2.80	0.50		80.75	弥生後期	弧形	K2-H5
187	64	慶運寺東	4.70	0.70		80.84	弥生後期	弧形	K2-H7
187	65	慶運寺東	2.70	0.70		81.04	弥生後期	弧形	K2 H6
187	66	慶運寺東	3.70	1.30		79.70	弥生後期	弧形	K2-II8
189	67	谷奥	6.90	4.20	37.37	68.12	弥生中期	円形・柱穴 3	T2-H1
190	68	谷奥	4.80	3.00		68.20	弥生後期	方形	T2-H2
190	69	谷奥	5.00	5.00	19.63	68.11	弥生後期	円形	T2-H6
190	70	谷奥	5.50	5.50	23.75	68.11	弥生後期	円形・柱穴 6	T2 H7
190	71	谷奥	6.50	6.50	33.17	67.86	弥生後期	円形・柱穴 6	T2-H8
191	72	谷奥	4.40	3.50		67.61	弥生後期	方形・柱穴 4	T2-H 4
191	73	谷奥	3.60	1.10		67.89	弥生後期	方形・柱穴 2	T2-H10
191	74	谷奥	2.40	1.30		67.39	弥生後期	方形・柱穴 2	T2-H9
191	75	谷奥	3.20	1.20		67.63	弥生後期	方形・柱穴 1	T2 H11
191	76	谷奥	1.30	1.20		67.47	弥生後期	方形	
191	77	谷奥	6.00	1.00		67.76	弥生後期	方形・柱穴 2	T2-H14
191	78	谷奥	4.80	2.80		67.54	弥生後期	方形・柱穴 1	T2-H12・15
191	79	谷奥	4.30	1.90		67.54	弥生後期	円形・柱穴 1	T2-II16
191	80	谷奥	1.90	1.60		67.72	弥生後期	小型方形	T2-H17
192	81	谷奥	2.10	0.30		67.68	弥生後期	弧形	
192	82	谷奥	6.00	6.00	28.26	67.16	弥生後期	円形・2軒・柱穴 6	T2-H13
192	83	谷奥	6.00	1.60		67.44	弥生後期	弧形・柱穴 2	
192	84	谷奥	5.60	1.60		67.38	弥生後期	弧形・柱穴 2	
192	85	谷奥	3.30	0.60		67.67	弥生後期	弧形	
193	86	谷奥	6.90	6.00	32.50	67.70	弥生後期	楕円形・柱穴 6	T2-H3

第19表 谷の前遺跡・慶運寺跡土壌一覧表

插图 番号	遺構 番号	調査区	規 模 (cm)			底面海拔高 (m)	時 期	平面形	旧番号
			長軸	短軸	深さ				
194	1	慶運寺北	108.00	50.00	32.00	81.34	弥生後期	楕円形	Ⅱ-1
194	2	慶運寺北	90.00	45.00	33.00	81.63	弥生後期	長方形	Ⅱ-2
194	3	慶運寺北	110.00	110.00	65.00	81.03	弥生後期	正方形	Ⅱ-3
194	4	慶運寺北	194.00	93.00	57.00	80.52	弥生後期	長楕円形	Ⅱ-4
194	5	慶運寺北	160.00	55.00	26.00	80.86	弥生後期	長方形	Ⅱ-5
194	6	慶運寺北	130.00	100.00	55.00	78.45	弥生後期	楕円形	12
195	7	慶運寺北	100.00	62.00	75.00	87.98	弥生後期	瓢形	13
196	8	慶運寺北	194.00	90.00	150.00	78.07	弥生後期	長楕円形	8
196	9	慶運寺北	270.00	160.00	166.00	77.77	弥生後期	長楕円形	18
197	10	慶運寺北	232.00	120.00	67.00	81.09	弥生後期	なすび形	15
197	11	慶運寺北	210.00	160.00	94.00	82.48	弥生後期	不整形	
198	12	慶運寺南	104.00	85.00	126.00	69.66	弥生後期	楕円形	T1-K2
199	13	慶運寺南	180.00	124.00	49.00	70.68	弥生後期	長楕円形	T1-K3
199	14	慶運寺南	230.00	195.00	82.00	70.55	弥生後期	長方形	T1-K4
199	15	慶運寺南	160.00	115.00	133.00	70.43	弥生後期	長方形	T1-K9
199	16	慶運寺南	110.00	80.00	59.00	70.60	弥生後期	長方形	T1-K12
201	17	慶運寺南	188.00	110.00	66.00	69.33	弥生後期	隅丸長方形	T1-K5
201	18	慶運寺南	220.00	152.00	43.00	72.15	弥生後期	長方形	T1-K6
202	19	慶運寺南	148.00	114.00	54.00	71.85	弥生後期	楕円形	T1-K7
202	20	慶運寺南	80.00	65.00	23.00	71.96	弥生後期	楕円形	T1-K8
202	21	慶運寺南	130.00	130.00	44.00	71.04	弥生後期	円形	T1-K10
202	22	慶運寺南	150.00	85.00	53.00	70.81	弥生後期	小判形	T1-K11
203	23	慶運寺南	122.00	110.00	54.00	71.46	弥生後期	不整円形	T1-K13
203	24	慶運寺南	130.00	125.00	86.00	70.43	弥生後期	隅丸方形	T1-K14
203	25	慶運寺東	152.00	140.00	52.00	70.63	弥生後期	隅丸方形	T1-K1
204	26	慶運寺南	220.00	142.00	65.00	76.72	弥生後期	不整長方形	K2-K1
205	27	谷奥	100.00	80.00	36.00	67.25	弥生後期	不整楕円形	
205	28	谷奥	164.00	115.00	31.00	68.12	弥生後期	長方形	T2-K1
205	29	谷奥	230.00	160.00	24.00	68.20	弥生後期	不整楕円形	T2-K2
206	30	谷奥	130.00	130.00	43.00	67.93	弥生後期	不整方形	T2-K3
206	31	谷奥	185.00	106.00	11.00	68.34	弥生後期	長楕円形	T2-K4
206	32	谷奥	135.00	96.00	10.00	68.30	弥生後期	小判形	T2-K5
206	33	谷奥	130.00	104.00	21.00	67.73	弥生後期	長方形	T2-K6
234	1	慶運寺1区	136.00	124.00	54.00	72.72	中世	円形	K1-K1
234	2	慶運寺1区	136.00	130.00	44.00	72.79	中世	円形	K1-K2
234	3	慶運寺1区	176.00	170.00	65.00	72.50	中世	円形	K1-K3
234	4	慶運寺1区	180.00	175.00	56.00	72.62	中世	円形	K1-K4
234	5	慶運寺1区	174.00	150.00	55.00	72.63	中世	円形	K1-K5
234	6	慶運寺1区	140.00	130.00	36.00	72.74	中世	円形	K1-K6
234	7	慶運寺1区	135.00	95.00	23.00	72.31	中世	楕円形	K1-K7
234	8	慶運寺1区	142.00	140.00	36.00	72.38	中世	円形	K1-K8

第20表 慶運寺跡建物一覧表

插图 番号	遺構 番号	調査区	規 模 (m・㎡)			検出面海拔高 (m)	棟方向	時期	備 考	旧番号
			桁行	梁間	面積					
226	1	慶運寺1区	4.70	4.50	21.15	73.60	N-5度-E	中世	2間×1間	1
227	2	慶運寺1区	6.30	3.80	23.94	73.75	N-11度-E	中世	2間×1間	2
227	3	慶運寺1区	5.00	4.25	21.25	73.78	N-15度-E	中世	1間×1間	3
228	4	慶運寺1区	5.30	3.60	19.08	73.77	N-83度-E	中世	1間×1間	4
228	5	慶運寺1区	4.10	3.90	15.99	73.76	N-89度-E	中世	1間×1間	5
228	6	慶運寺1区	5.10	4.30	21.93	73.66	N-85度-E	中世	1間×1間	6
229	7	慶運寺1区	4.50	4.00	18.00	73.53	N-75度-E	中世	1間×1間	7
229	8	慶運寺1区	3.50	3.50	12.25	73.42	N-2度-W	中世	1間×1間	8
229	9	慶運寺1区	5.10	5.00	25.50	73.42	N-5度-W	中世	2間×2間	9

第21表 谷の前遺跡土器観察表（写真掲載）

※（ ）は復元による口径、底径、及び残存器高である。

図 番号	実測 番号	川上地区	遺構・土層	器種	計測値 (mm)			色 調			胎土 (mm)	残存状態	形態・手本の特徴など
					口径	底径	器高	外	内	断面			
150	28	255	慶運寺北 厩丘墓	甕		8.2	(37.2)	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	0.3~4.0	口縁全損	底部穿孔
152	32	262	慶運寺北 段状遺構1	甕	12.0		(23.0)	鈍褐色	鈍黄褐色	鈍黄褐色	1.0~3.0	胴1/3	
153	51	132	慶運寺北 段状遺構8	甕	15.6 (13.4)	4.2	16.2	鈍黄褐色	褐色	褐色	0.5~1.5	完形	
168	61	25	慶運寺南 住居2~5	甕		5.8	26.8	褐色	褐色	褐色	0.3~3.0	口縁一部欠損	
168	289		慶運寺南 住居2~5	甕	12.0	7.1	26.7	鈍黄褐色	鈍黄褐色	鈍黄褐色	0.5~3.0	口縁1/2	頸部に11条の沈線
168	65	107	慶運寺南 住居2~5	長頸甕		5.6	(24.0)	鈍褐色	鈍褐色	灰白色	1.0~3.0	胴1/8欠損	
169	73	96	慶運寺南 住居2~5	甕	14.6	4.8	16.5	鈍褐色	鈍赤褐色	鈍褐色	1.0~3.0	胴部1/3欠損	
169	74	98	慶運寺南 住居2~5	甕	13.8	4.9	14.1	鈍黄褐色	鈍褐色	鈍赤褐色	0.5~4.0	胴1/6欠損	
170	82	123	慶運寺南 住居2~5	合鉢鉢	11.8	4.0	6.0	褐色	褐色	浅黄褐色	0.5~4.0	ほぼ完形	
170	91	130	慶運寺南 住居2~5	高杯	11.7		(8.8)	鈍褐色	鈍褐色	鈍褐色	1.0	杯5/6	口孔4個
171	100	125	慶運寺南 住居2~5	器台		27.0	(28.2)	鈍黄褐色	鈍黄褐色	鈍褐色	1.0~2.5	胴部全	銘面文・竹管文
175	105	305	慶運寺南 住居15	小皿	9.8		7.1	鈍黄褐色	鈍黄褐色	鈍黄褐色	0.3~4.0	口縁一部欠損	
175	112	317	慶運寺南 住居19	鉢	15.9	4.2	7.9	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	0.3~3.0	口縁1/2	
176	121	326	慶運寺南 住居26	高杯	(12.2)	(11.2)	10.1	褐色	褐色	褐色	0.3~1.0	杯1/2	口孔個数不明
178	135	342	慶運寺南 住居36	高杯	31.2	21.0	17.9	鈍黄褐色	鈍褐色	鈍黄褐色	0.5~5.0	口縁1/2	口孔4個
176	124	335	慶運寺南 住居38	手捏ね	4.1		5.9	褐色	褐色	褐色	1.0~3.0	全体1/2	指正痕
177	128	352	慶運寺南 住居32	甕	(15.2)	(9.3)	(31.6)	鈍黄褐色	鈍黄褐色	鈍黄褐色	0.5~7.0	口縁1/2	
178	133	331	慶運寺南 住居34	小形鉢	9.5	5.3	3.9	鈍黄褐色	鈍黄褐色	鈍黄色	1.0	口縁1/6	指正痕
178	134	323	慶運寺南 住居35	合付鉢	16.7	13.5	(18.8)	褐色	鈍褐色	明赤褐色	0.5~6.0	一部欠損	口縁端部折り返して玉縁風
179	139	308	慶運寺南 住居37	小甕	(8.3)		6.9	鈍褐色	鈍褐色	鈍褐色	0.5~1.0	口縁3/5	
179	136	341	慶運寺南 住居36	器台	19.5	22.1	19.8	鈍黄褐色	鈍黄褐色	鈍黄褐色	1.0	口縁1/6欠損	
182	148	363	慶運寺南 住居45	甕	14.2		(21.8)	鈍褐色	鈍褐色	鈍褐色	1.0~4.0	胴1/2	
182	153	355	慶運寺南 住居45	鉢	9.4	2.7	4.7	褐色	褐色	褐色	0.3~3.0	口縁1/2	
183	156	343	慶運寺南 住居46	高杯	20.6	13.0	11.9	褐色	褐色	灰黄褐色	0.5~3.0	杯1/5欠損	口孔4個・沈線4条
183	162	346	慶運寺南 住居47	甕	11.7	4.5	(18.3)	鈍褐色	鈍褐色	灰黄褐色	1.0~3.0	口縁2/3	网上復元
180	171	368	谷奥 住居67	高杯	21.0	11.4	17.3	鈍褐色	明赤褐色	褐色	2.0	口縁1/3	三角透かし穴3個
192	194	396	谷奥 住居82	鉢	(14.0)		(17.4)	鈍褐色	褐色	褐色	2.5	口1/3	線直下の小孔2個
197	213	222	慶運寺北 上層10	鉢	32.7	9.8	20.4	明赤褐色	浅黄褐色	鈍褐色	1.0~5.0	口縁1/2	
198	214	405	慶運寺南 土庫12	甕	13.2	6.5	(24.5)	褐色	褐色	明赤褐色	0.4~3.0	口縁・底	底部穿孔
201	229	406	慶運寺南 土庫18	甕	18.2		(24.8)	明赤褐色	明赤褐色	鈍黄褐色	1.0~4.5	口縁・口1/3	立ち上がり12
207	232	57	慶運寺南 土器溜まりA	甕	26.1	7.65	36.0	鈍黄褐色	鈍黄褐色	鈍黄褐色	1.0~4.0	4/5	二重口縁
207	235	81	慶運寺南 土器溜まりA	合付鉢	25.0	10.8	15.6	褐色	褐色	褐色	0.5~4.0	全体の6割	
207	238	91	慶運寺南 弥生包舎層	高杯	16.8		(9.5)	褐色	褐色	褐色	1.0	口縁1/5	口孔4個
209	264	454	慶運寺南 土器溜まりB	甕	(19.6)	(8.0)	(34.7)	鈍黄褐色	鈍黄褐色	鈍黄褐色	0.5~2.5	口縁1/3	口縁3条
211	300	461	谷奥 土器溜まりB	高杯	(15.8)	(15.2)	13.1	褐色	褐色	褐色	0.3~3.0	口縁2/3	
211	307	503	谷奥 土器溜まりB	高杯		(27.2)	(19.6)	鈍黄褐色	鈍褐色	黄灰色	4.0	胴部2/3	口縁沈線3条・口孔2段
212	313	444	谷奥 土器溜まりB	高杯	29.8	19.4	(17.4)	鈍褐色	鈍褐色	灰黄褐色	1.0~2.0	杯1/4	网上復元・口孔3対6個
213	324	500	谷奥 土器溜まりB	器台	19.9	21.9	17.5	鈍黄褐色	鈍黄褐色	暗灰黄色	1.0~4.0	胴1/2欠損	口縁沈線5条・口孔4個2段
213	325	504	谷奥 土器溜まりB	器台	(15.3)	15.7	14.5	褐色	褐色	褐色	0.3~2.5	胴部1/6	沈線5条2段・口孔2段

図 番号	番号	発掘 番号	川上地区	遺構・土層	器種	計測値 (cm)				色調			胎土 (mm)	残存状態	形態・手法の特徴など
						口径	底径	器高	断面	外	内	断面			
214	333	133	慶運寺北	段状遺構 4	長頸瓶	18.8	6.1	(27.4)	鈍灰色	鈍灰色	棕色	棕色	0.5～3.0	口縁1/3	
215	340	148	慶運寺南	弥生包含層	直口壺	8.6	(5.8)	(16.6)	褐色	褐色	褐色	褐色	5.0	底1/2	底部までヘラミカキ
215	343	167	慶運寺南	弥生包含層	甕	15.6	3.9	(24.2)	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	0.5～4.0	完形	
215	352	168	慶運寺南	弥生包含層	鉢	27.0	5.8	19.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	鈍黄棕色	1.0～3.5	口縁1/6	
216	356	89	慶運寺南	弥生包含層	鉢	22.6	3.9	7.0	褐色	鈍赤褐色	褐色	鈍黄棕色	0.5～3.0	全体の5割	
216	358	156	慶運寺南	弥生包含層	鉢	(10.9)		4.6	鈍赤褐色	鈍赤褐色	褐色	褐色	0.3～0.8	口縁1/4	
216	362	154	慶運寺南	弥生包含層	手捏ね	4.5	3.1	5.8	棕色	棕色	鈍灰色	鈍灰色	1.0～2.5	ほぼ完形	指は痕
216	365	151	慶運寺南	弥生包含層	手捏ね	4.7	2.7	3.3	褐色	褐色	褐色	鈍黄棕色	1.0～2.5	口縁片平欠損	指正痕
216	366	155	慶運寺南	弥生包含層	手捏ね	(2.6)		3.2	鈍赤褐色	鈍赤褐色	褐色	褐色	1.0～2.0	全体1/2	指口痕
216	376	169	慶運寺南	弥生包含層	器台	(30.6)		(29.0)	鈍灰色	鈍灰色	鈍灰色	鈍灰色	0.5～4.0	口縁1/3	口尻・鋭刻4個3段
218	398	182	慶運寺南	弥生包含層	長頸瓶	16.9	6.4	31.0	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄色	鈍黄棕色	0.5～5.0	口縁5/6	沈痕

第22表 慶運寺跡土器観察表 (写真掲載)

※ () は復元による口径、底径、及び残存器高である。

図 番号	番号	発掘 番号	川上地区	遺構・土層	種別	器種	計測値 (cm)				色調			胎土 (mm)	残存状態	形態・手法の特徴など
							口径	底径	器高	断面	外	内	断面			
231	1	36	1区	柱穴	土師器	小皿	7.3	5.5	1.1	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	0.5～1.0	口縁1/6欠損	回転糸きり
231	3	31	1区	柱穴	土師器	小皿	8.0		1.5	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	0.3～3.0	口縁1/4欠損	回転ヘラきり
231	7	32	1区	柱穴	土師器	小皿	8.1		1.6	鈍灰色	鈍灰色	鈍灰色	鈍灰色	0.3～1.0	1/5欠損	
233	20	19	1区	溝 1	備前焼	土師鉢	(24.4)		(5.6)	鈍赤褐色	鈍赤褐色	鈍赤褐色	鈍赤褐色	0.5～2.0	口縁1/6	線13条1組
233	22	1	1区	石組溝	備前焼	土師鉢	(24.4)		(5.6)	鈍赤褐色	鈍赤褐色	鈍赤褐色	鈍赤褐色	0.3～2.0	口縁1/7	条線3条
237	23	254	2区	中世墓	備前焼	甕	9.9	10.0	17.7	灰赤色	鈍赤褐色	灰赤色	暗赤褐色	1.0～3.0	ほぼ完形	玉縁・波状文・杉文
237	25	552	2区	中世墓	備前焼	甕	10.4	12.8	(24.5)	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	0.5～4.0	口縁1/2欠損	波状文・火焔文
237	26	253	2区	中世墓	備前焼	甕	12.2	12.6	26.4	灰赤色	赤褐色	灰赤色	暗赤灰色	1.0～2.0	ほぼ完形	玉縁・波状文
237	27	71	2区	中世墓	備前焼	甕	13.1	15.8	19.8	褐色	赤褐色	暗赤褐色	赤褐色	0.5～2.0	ほぼ完形	玉縁
238	32	68	2区	中世墓	備前焼	甕	12.7	14.7	27.0	赤褐色	赤褐色	灰褐色	黄灰色	0.3～2.0	口縁1/4	玉縁
238	40	54	2区	中世墓	備前焼	甕	10.7	12.8	22.0	暗赤褐色	暗赤褐色	鈍褐色	暗赤灰色	0.5～4.0	ほぼ完形	自然釉
239	42	252	2区	中世墓	備前焼	甕	10.8	13.2	22.1	褐色	褐色	褐色	褐色	0.3～3.0	完形	玉縁
239	44	218	2区	中世墓	備前焼	甕	10.7	13.1	26.0	鈍赤褐色	鈍赤褐色	黒褐色	褐色	0.5～3.0	完形	玉縁
239	47	219	2区	中世墓	備前焼	甕	11.0	13.1	18.2	小褐色	小褐色	灰赤色	暗赤灰色	0.5～2.0	口縁1/3	玉縁
240	52	77	2区	中世墓	備前焼	甕	12.0	14.6	28.3	鈍褐色	鈍褐色	灰黄褐色	灰褐色	1.0～3.0	全体の8割	玉縁・3耳
240	53	61	2区	中世墓	備前焼	小皿	7.3	8.6	11.9	鈍褐色	鈍褐色	鈍褐色	鈍黄棕色	1.0～4.0	口縁2/3欠損	雀口・X印
240	54	62	2区	中世墓	備前焼	小皿	5.1	5.1	8.7	灰黄棕色	灰黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	1.0	口縁1/2欠損	雀口・X印
240	58	229	2区	中世墓	土師器	土師器	9.5	4.6	3.1	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	精良	口縁1/4欠損	底部指による凹み
240	59	230	2区	中世墓	土師器	土師器	10.4	3.9	3.6	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	鈍黄棕色	精良	全体3/4	底部指による凹み
240	60	63	2区	中世墓	瓦質土器	土瓶	11.6	18.2	17.2	浅黄褐色	浅黄褐色	浅黄褐色	浅黄褐色	0.3	全体の7割	釣手と注ぎ口
242	94	17	1区	近世包含層	中国・器	皿	(20.8)		2.1	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	1/8		指付け
240	95	11	2区	近世包含層	肥前陶器	梅花皿	(11.8)	(4.8)	2.8	鈍褐色	鈍褐色	鈍褐色	鈍褐色	0.5以下	口縁1/3	削り出し高台
240	96	7	1区	近世包含層	肥前陶器	皿	4.6		(3.4)	青色透明	青色	青色	青色	2/3	釉薬・砂目	
240	99	16	1区	近世包含層	肥前陶器	皿	(13.1)	2.9	(5.8)	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	1/2	染付け	
240	106	80	2区	近世包含層	瓦質土器	鉢	(25.6)			灰色	灰色	灰色	灰色	0.5～1.0	口縁1/4	ハケメ

第23表 谷の前遺跡・慶運寺跡出土金属製品：M

図 番号	番号	実測 番号	出土地区	遺構名	川遺跡名	川遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
								長さ	幅	厚さ				
	1	1	谷奥調査区	T1 (W)	T1 (W)	T1 (W)	釘	5.52	8.5	1.0	6.02	鉄	中世	頭部・先端欠損
	2	7	谷奥調査区	T4	谷の前遺跡	T4	釘	46.2	14.7	15.3	12.84	鉄	中世	先端欠損
167	1	31	慶運寺南調査区	住居2～5	慶運寺跡1区	住居1～5	鉄	61.0	15.5	2.5	7.06	鉄	弥生後期	柳葉式付茎
191	2	4	谷奥調査区	住居72	谷の前遺跡2区	住居9上手	鏃	28.0	8.0	3.5	1.60	銅	弥生後期	しのぎ・右茎
191	3	12	谷奥調査区	住居75	谷の前遺跡2区	住居12	鏃	2.9	7.2	2.5	1.09	鉄	弥生前期	茎か
191	4	3	谷奥調査区	住居74	谷の前遺跡2区	住居4	鏃	11.5	3.0	8.5	6.93	鉄	弥生後期	完形品
222	5	2	谷奥調査区	弥生包含層	谷の前遺跡2区	粒1南東端	斧	68.0	49.0	14.0	143.74	鉄	弥生後期	鋳造・一次加工
222	6	5	谷奥調査区	弥生包含層	谷の前遺跡3区	土器溜まり	板	138.0	38.0	3.5	80.40	鉄	弥生前期	加工痕・素材か
222	7	30	慶運寺南調査区	谷埋土	慶運寺跡1区	谷埋土	鏃	71.0	14.5	4.0	7.34	鉄	弥生後期	柳葉式付茎
222	8	13	慶運寺南調査区	弥生包含層	谷の前遺跡1区	住居4西方包含層	鏃	40.5	19.0	3.0	9.25	鉄	弥生前期	刃部破片
231	1	22A	慶運寺跡1区	P23	慶運寺跡	P23	環	31.5	26.0	8.0	5.30	鉄	中世	仏具か
231	2	22B	慶運寺跡1区	P23	慶運寺跡	P23	刀子	42.0	14.5	4.0	5.66	鉄	中世	刃部と茎片
231	3	26	慶運寺跡1区	柱穴	慶運寺跡1区	柱穴含む	板	35.5	34.3	7.0	15.26	鉄	中世	小破片
231	4	27	慶運寺跡1区	柱穴	慶運寺跡1区	中世柱穴	板	34.5	34.0	5.5	22.56	鉄	中世	小破片・火打ち鏃か
231	5	29	慶運寺跡1区	柱穴	慶運寺跡1区	柱穴	板	20.0	19.0	3.5	4.97	鉄	中世	方形破片
231	6	28	慶運寺跡1区	柱穴	慶運寺跡1区	柱穴	釘	70.0	10.2	10.0	9.95	鉄	中世	頭部欠損・曲がり
231	7	23	慶運寺跡1区	P26	慶運寺跡	P26	釘	43.8	9.5	8.6	6.15	鉄	中世	頭部・先端欠損
231	8	25	慶運寺跡1区	柱穴	慶運寺跡1区	柱穴	釘	52.5	9.0	9.0	13.07	鉄	中世	頭部・先端欠損
233	9	35	慶運寺跡1区	イ組・間辺	慶運寺跡1区	イ組間辺	鋳削	81.0	32.0	14.0	41.20	鉄	中世	中空
234	10	17	慶運寺跡1区	土蔵2～4	慶運寺跡	土蔵2～4	釘	21.0	8.0	6.0	3.45	鉄	中世	頭部・先端欠損
234	11	38	慶運寺跡1区	土蔵5	慶運寺跡1区	土蔵5	鍔柄か	82.0	60.0	8.0	129.99	鉄	中世	曲面
240	12	45	慶運寺跡2区	中世壁周辺	慶運寺跡2区	中世壁周辺	鏃	72.0	14.2	13.0	23.61	鉄	中世	先端欠損・イ鑿か
240	13	46	慶運寺跡2区	中世墓群	慶運寺跡2区	中世墓群	釘	21.0	5.0	4.0	0.62	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	14	10	慶運寺跡1区	中世墓群	谷の前遺跡1区	住居1～4の南	鉄落	39.0	43.0	19.5	46.38	鉄	中世	鏃
243	15	9	谷奥調査区	中世包含層	谷の前遺跡2区	表棟	釘	40.0	6.5	7.0	3.15	鉄	中世	先端欠損
243	16	18	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡	南部造成土	釘	53.0	10.0	6.0	17.61	鉄	中世	先端欠損
243	17	14	慶運寺跡1区	中世包含層	谷の前遺跡1区	住居10	釘	4.38	12.9	9.2	4.87	鉄	中世	先端欠損
243	18	21B	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡	トレンチ	釘	26.0	8.2	8.1	2.63	鉄	中世	先端欠損
243	19	48A	慶運寺跡2区	中世包含層	慶運寺跡2区	弥生包含層	釘	15.5	10.0	6.0	1.38	鉄	中世	頭部片
243	20	49A	慶運寺跡2区	中世包含層	慶運寺跡2区	包含層	釘	88.0	10.0	7.0	8.52	鉄	中世	先端欠損
243	21	50C	慶運寺跡2区	中世包含層	慶運寺跡2区	谷部包含層	釘	31.0	7.0	5.0	0.96	鉄	中世	先端欠損
243	22	50D	慶運寺跡2区	中世包含層	慶運寺跡2区	谷部包含層	釘	16.0	10.0	9.0	2.06	鉄	中世	頭部片
243	23	24	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡	T	釘	22.0	4.5	4.0	0.82	鉄	中世	先端欠損
243	24	36A	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡1区	中世壁面	釘	20.0	9.0	9.0	1.39	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	25	48C	慶運寺跡2区	中世包含層	慶運寺跡2区	弥生包含層	釘	26.5	4.5	4.0	1.39	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	26	21A	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡	トレンチ	釘	25.0	9.7	7.0	2.00	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	27	36B	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡1区	中世遺構面	釘	11.0	5.0	4.0	0.50	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	28	43	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡1区	東部造成土	釘	26.0	4.5	4.5	3.57	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	29	11	谷奥調査区	中世包含層	谷の前遺跡2区	表棟	釘	33.0	4.5	4.5	2.65	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	30	33	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡1区	中世包含層	釘	73.0	8.5	8.0	17.45	鉄	中世	頭部欠損
243	31	6	谷奥調査区	中世包含層	谷の前遺跡3区	土器溜まり	釘	43.0	7.5	6.0	6.93	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	32	19	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡	南部造成土	釘	52.0	10.0	10.0	9.94	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	33	40C	慶運寺跡1区	中世包含層	慶運寺跡1区	中世間	釘	49.2	9.1	8.3	4.47	鉄	中世	頭部・先端欠損

図 番号	実測 番号	山上地区	遺跡名	山廻跡名	山遺跡名	器種	計 測 値(mm)			材質	時 期	備 考
							長さ	幅	厚さ			
243	34	慶運寺跡2区	中世包含層	弥生中包含層	弥生中包含層	釘	52.0	5.5	6.5	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	40B	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	中世包含層	釘	29.2	17.2	13.2	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	47	慶運寺跡2区	中世包含層	中世包含層	中世包含層	釘	37.5	6.1	6.0	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	37	慶運寺跡2区	中世包含層	中世包含層	中世包含層	釘	50.0	6.0	6.0	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	50A	慶運寺跡2区	中世包含層	中世包含層	中世包含層	釘	42.0	5.5	5.0	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	39	慶運寺跡2区	中世包含層	中世包含層	中世包含層	釘	45.0	4.0	5.0	鉄	中世	頭部・先端欠損
243	40	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	中世遺構面	釘	59.0	5.5	5.0	鉄	中世	頭部・先端欠損・曲がり
243	41	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	南部造成上	釘	31.0	4.0	5.0	鉄	中世	頭部欠損・曲がり
243	42	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	慶運寺跡1区	釘	26.0	10.0	7.0	鉄	中世	頭部欠損・曲がり
243	8	谷奥調査区	中世包含層	谷の前遺跡2区	杭1南東北	板	36.0	14.0	5.0	鉄	中世	小札か
243	44	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	表採	板	60.0	27.0	7.5	鉄	中世	仏具か
243	15	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	表採	板	70.0	21.0	10.0	鉄	中世	石割り目か
243	41	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	弥生土層	刀子	29.0	11.0	2.5	鉄	中世	刃部と茎片
243	32	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	中世包含層	小札	62.0	17.0	3.0	鉄	中世	小甲片6対12個
243	40A	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	中世包含層	板	62.0	14.2	3.0	鉄	中世	長方形鏡片
243	49	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	南西部造成土	板	51.0	75.0	7.5	鉄	中世	容器か
243	51	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	南部造成上	古銭	22.0	21.0	2.0	銅	中世	政和通宝
243	53	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	中包含層	古銭	24.0	15.0	1.2	銅	中世	至道元宝か
243	55	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	T3	古銭	23.0	23.0	1.5	銅	中世	皇宋通宝か
243	54	慶運寺跡2区	中世包含層	中世包含層	谷部中包含層	古銭	17.0	14.0	1.0	銅	中世	開元通宝か
243	56	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	中包含層	古銭	23.0	23.0	1.5	銅	中世	興寧元宝か
243	52	慶運寺跡1区	中世包含層	中世包含層	中包含層	古銭	25.0	25.0	1.5	銅	近世	寛永通宝

第24表 谷の前方遺跡・慶運寺跡出土土製品：C

図 番号	実測 番号	調 査 区	遺構・上層名	Ⅱ遺跡名	器 種	計 測 値(mm)				重 量 (g)	色 調	時 期	備 考
						最大長	最大幅	最大厚	孔 径				
176	1	4 越重寺南	住居31	谷の前方遺跡1区	勾玉形土製品	45	14	17	3	13.5	銅褐色	弥生後期	完形品
192	2	5 谷奥	住居82	谷の前方遺跡3区	紡錘車	39	34	5	7	9.9	銅褐色	弥生後期	未製品
220	3	0 谷奥	土器溜まりB	谷の前方遺跡2区	銅鑿形土製品	56	47	23		40.1	黒褐色	弥生後期	完形品
220	4	1 越重寺南	弥生中包含層	越重寺跡2区	分銅形土製品	64	62	17		76.4	銅黄褐色	弥生中期	卜刀1/2
243	1	2 越重寺跡1区	中世包含層	越重寺跡1区	土罐	47	14		5	8.3	銅黄褐色	中世	完形品
243	2	3 谷奥	中世包含層	谷の前方遺跡2区	土罐	39	14		5	6.4	黒褐色	弥生中期	完形品

第25表 谷の前方遺跡出土ガラス：G

図 番号	遺物 番号	実測 番号	山上地区	遺構・上層名	山調査区名	山遺構・上層名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	色調	時期	備考
								最大長	最大径	孔 径				
167	1	J1	慶運寺南	住居3	谷の前方1区	上層3	小玉	3	4	2	0.06	深灰色	弥生後期	完形品
167	2	J2	慶運寺南	住居3	慶運寺1区	住居2	小玉	3	5	2	0.09	深灰色	弥生後期	完形品

第26表 谷の前遺跡・慶運寺跡出土石製品（抜粋）：S

図 番号	実測 番号	出土地区	遺構・土層	旧遺跡名	旧遺構名	器 種	石 材	計 測 値 (mm)			重 量 (g)	時 期	備 考
								最大長	最大幅	最大厚			
176	5	S30	慶運寺南	住居28	谷の前1区	砥石	新緑岩	173.0	73.0	45.0	712.07	弥生後期	2面使用
179	7	S15	慶運寺南	作込37	谷の前1区	砥石	淡緑岩	73.0	33.5	36.5	124.09	弥生中期	4面使用
185	9	S12	慶運寺南	住居56	谷の前1区	包丁	ホルンフェルス	98.0	41.0	9.5	51.89	弥生後期	ほぼ完形品・1孔2個
189	18	S27	谷奥	住居67床	谷の前2区	石斧	?岩	160.0	75.0	48.5	1032.37	弥生後期	刃部欠損
189	19	S22	谷奥	住居67床	谷の前2区	石斧	?岩	90.0	76.0	39.0	455.67	弥生後期	全体を研磨
191	24	S94	谷奥	住居78	谷の前2区	石鏃	サヌカイト	15.0	13.5	5.0	0.88	弥生後期	浅い凹溝式
192	31	S57	谷奥	住居82埋土	谷の前2区	石鏃	サヌカイト	18.0	23.5	2.5	1.05	弥生後期	完形品
192	35	S67	谷奥	住居82	谷の前2区	石鏃	サヌカイト	21.0	19.0	3.0	1.00	弥生後期	凹溝式
193	46	S65	谷奥	住居86上層	谷の前2区	石鏃	サヌカイト	22.0	13.0	3.0	0.73	弥生後期	平基式
193	51	S63	谷奥	住居86	谷の前2区	石鏃	サヌカイト	22.5	15.5	3.0	0.86	弥生後期	柳葉凹溝式
195	53	S1	慶運寺北	上層7	慶運寺遺跡	石斧	砂岩	69.0	40.5	25.0	109.51	弥生後期	完形品
205	57	S90	谷奥	土層29	谷の前2区	石鏃	サヌカイト	23.0	15.0	5.0	1.10	弥生後期	凹溝式
221	73	S87	谷奥	弥生包合層	谷の前2区	石鏃	サヌカイト	32.0	18.0	5.0	2.32	弥生後期	平基式
221	77	S48	谷奥	弥生包合層	谷の前2区	石鏃	サヌカイト	20.5	11.0	5.0	0.83	弥生後期	凸溝式
221	79	S5	慶運寺南	弥生包合層	慶運寺跡1区	石鏃	サヌカイト	35.0	24.0	10.0	8.61	弥生後期	完形品
221	86	S95	谷奥	弥生包合層	谷の前2区	甲石	花崗岩	115.0	88.0	59.0	812.65	弥生後期	中央・側部叩き
223	92	S42	谷奥	弥生包合層	谷の前2区	石匙	サヌカイト	67.0	53.5	10.0	35.34	縄文後期	突起
227	1	S3	慶運寺1	建構3	慶運寺跡1区	石硯	頁岩	80.0	33.0	8.0	23.06	中世	完形品・使用痕
243	2	S6	慶運寺1	中世包合層	慶運寺跡1区	石硯	消石	91.0	53.5	13.5	66.14	中世	底面の破片

第27表 慶運寺跡出土瓦：R

図 番号	実測 番号	出土地区	遺構・土層	器 種	計 測 値 (cm)			色 調	胎 土	焼 成	時期	備 考
					最大長	最大幅	最大厚					
231	1	瓦1	慶運寺跡1区	軒平瓦	10.0	12.0	1.8	鈍黄色	0.5~4.0	良好	中世	唐草紋
244	2	瓦2	慶運寺跡1区	軒丸瓦	13.5	7.2	2.0	浅黄色	0.5~5.0	良好	中世	三つ巴紋・珠文
244	3	126	慶運寺跡1区	軒平瓦	14.3	1.6	6.3	鈍黄褐色	0.5~5.0	良好	中世	三つ巴と片草紋
244	4	瓦3	慶運寺跡1区	平瓦	18.0	18.2	2.9	灰色	0.5~2.0	良好	中世	東大寺刻印・縄目タタキ
244	5	瓦5	谷奥	中世包合層	7.3	13.5	2.6	灰白色	1.0	良好	中世	終了目タタキ・布目
244	6	瓦6	谷奥	中世包合層	7.4	9.8	2.6	灰色	1.0	良好	中世	終了目タタキ・布目
244	7	瓦4	谷奥	中世包合層	12.6	11.9	2.8	鈍褐色	1.0	良好	中世	縄目タタキ・布目

附載 1 谷の前遺跡出土有袋鉄斧の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤 正己

1 概 要

弥生時代の鉄器の調査研究はあまり進んでいない。そこで谷の前遺跡出土の弥生時代後期末頃の鉄斧の調査を行った。本試料は刃部と袋部が別素材を組合せた可能性をもつ有袋鉄斧である。該品はチタン磁鉄鉱を原料とした低温還元直接製鋼法の塊錬鉄の産物である。注目すべきは刃部の母材は極軟鋼であって、これの短軸側面に割り込みを設け、高炭素の刃金（鋼：0.7% C）を嵌込む「刃金（鋼）割込み両刃造り」製品であった。弥生時代の鉄器として過去に類例のない造りである。なお、チタン磁鉄鉱は朝鮮半島北側に多く賦存する鉱石である。鉄斧産地はその方面に特定できよう。

2 いきさつ

谷の前遺跡は、赤磐郡熊山町可真上に所在する。遺跡は、弥生時代後期中葉から近世にいたる複合遺跡で、弥生時代後期後半の土器溜りの下層からは銅鐸形土製品、その上層土器溜りから鉄斧が出土した。鉄斧は当初、鍛接の痕跡が見当らず袋部の底、いわゆる刃部上端側に平坦面を有するところから鑄造鉄斧を想定したものである。弥生時代の鉄の世界はいまだ未知分野であって、その実態把握が急がれるところからの検討調査である。

3 調査方法

3-1. 供試材

Table.1に示す。土器溜まり出土の有袋鉄斧1点である。

3-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) マクロ組織

顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5倍で撮影した。低倍率の観察は、組織の分布状態、形状、大きさなど顕微鏡検査（×50、100、400）によるよりも広範囲にわたっての情報が得られる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

切り出した試料をバークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3 μと1 μで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は、ピクルル（ピクリン酸飽和アルコール液）で、フェライト結晶粒は5%ナイトル（硝酸アルコール液）で、腐食（Etching）している。

(4) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers

Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピュータ処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

4 調査結果

鉄斧は刃部と袋部の一部を残す鍛造破損品で、当初鑄造鉄斧と見違えられた。残存長さ6.8cm、残存幅4.9cm、最大厚1.4cmを測る。袋部はFig. 2の実測図に示すように右側と奥側の一部のみに遺存する。その形状から袋部の横断面は長方形の可能性が高い。袋部の底(刃部上端)は平坦面をとり、有袋鉄斧も刃部と袋部が別固体の鍛接品と解釈される。⁽¹⁾ただし、表面観察からの鍛接痕跡は捉えきれなかった。有袋鉄斧の鍛造品と判定したのは、金属組織の調査結果と調査関係者との協議に基づくものである。供試材は刃先側中央からV字ノッチ状に採取した。

Photo. 4の②③に刃先断面のマクロ組織を示す。更に、これを基にして①で模式図を作成している。極軟鋼の母材(鉄)短軸端面に割り込みを入れて、別に準備した硬鋼の刃金(鋼)を嵌込んだ「割り込み両刃造り」である。

鉄斧の「割り込み両刃造り」採用は、利器としての切れ味が要求されるのを硬質刃金(鋼)で対処し、強い衝撃を母材の極軟鋼(鉄)で吸収させるといった靱性向上対策として理にかなった設計である。更に煎じ詰めれば貴重で高価な刃金(鋼)の使用量も僅かで済ませるところの経済的効果も看過できない。

しかし、一方母材(Low [C])と刃金(鋼)(High [C])の鍛接には両者の溶融点の違いから最適温度の設定が難しくなり高度の技術を要し、熟練度と豊富な経験が裏付けが基盤となる。弥生時代後期末の時点での接合剤に現代使用のホウ酸+鉄粉などが存在したか否か不明瞭である。思うに精々ワラ灰+赤土採用あたりではなかろうか。筆者も過去に調査事例のない産物の調査報告となった。

以下に細かく金属組織に触れてゆく。Photo.3の①②は鉄中の非金属介在物である。双方の非金属介在物は共に、鍛打による展伸傾向を留めている。①は刃金(鋼)側の介在物で、不整楕円形状のものは、暗黒色ガラス質スラグ中に淡灰色淡柱状結晶のファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)や、粒状結晶のウスタイト(Wüstite: FeO)、②は母材側で黒く長く伸びた暗黒色ガラス質の珪酸塩系と、粒状ウスタイトなどが散見される。素材の製造履歴は、やはり低温還元直接製鋼法に基づく塊錬鉄であろう。

次に、この非金属介在物の組成についてEPMA調査を行った。調査結果はPhoto. 2に示す。まず、右の反射電子像(COMP)にみられる球状介在物は刃金(鋼)部分のものである。6の番号のついた5 μm 平方エリア部分での定量分析値は、52.0%FeOと24.2%SiO₂-11.7%Al₂O₃-3.2%CaO-2.0%MgO-2.9%K₂O-1.9%Na₂O組成が得られた。前者がウスタイト(Wüstite: FeO)、後者は珪酸塩系で、両者の混合組成の可能性が高い。ここで注目しておきたいのは、3.4%TiO₂の検出である。チタ

ン (Ti) 分は砂鉄かチタン磁鉄鉱由来の成分である。製鉄原料の特定成分に挙げられる。砂鉄原料であればチタン濃度はもう少し多くなり、かつ、共伴元素としてのバナジウム (V)、ジルコニウム (Zr) などが出てこよう。チタン磁鉄鉱原料側に分 (ぶ) がありそうである。そうになると、産地は朝鮮半島も北側が候補にあがる。⁽²⁾ もう 1 点分析を行った。反射電子像 (COMP) に 7 の番号のついた粒状結晶は91.0%FeO組成でウスタイト (Wüstite: FeO) が同定される。

一方、母材の非金属介在物の定量分析値をPhoto. 2 の左に示す。5 の番号の付いた微小粒状介在物の組成は、41.0%SiO₂—13.0%Al₂O₃—4.2%CaO—1.6%MgO—3.6%K₂Oで、これに22.1%FeOが加わる。珪酸塩に微小ファイヤライトの混合組成であろう。こちら側からも3.5%TiO₂が検出された。刃金 (鋼) と同じ産地と見なされて矛盾のない結果となった。

対象をPhoto. 3 の顕微鏡組織に戻す。⑦⑧は鉄斧刃先端で刃金 (鋼) の金属組織である。⑦の中央で黒味の強い個所は細かい針状または麻の葉状組織のマルテンサイト (Martensite)、その周囲の黒もしくは層状がパーライト、白色斑点はフェライトと3種の組織が混在する。⑧はマルテンサイト部分の硬度測定 of 圧痕で、硬度値は440Hvを呈した。炭素含有量は共析鋼に近い0.7%前後であって、焼入れ組織が若干軟質化するの、700℃程度からの冷却で引き上げた後の放熱戻しを受けてオーステンパー (austemper) 気味、もしくは一種のベイナイト焼入れ (bainitic hardening) となった可能性をもつ。従来の焼き入れ・焼き戻しのものよりも強靱性が得られ、しかも焼き割れや焼き曲りを生じることがないので、割れにくく、粘り強く焼きを入れられて肉厚刃物の熱処理に適した条件が採られていた。

次に④の横長連続組織は、刃金 (鋼) と母材との境界部分である。中央の三角形状隙間が母材割込み終了点で鍛接時の過熱から酸化第 1 鉄のウスタイトを晶出している。③はその部分の拡大組織を示す。④の左側の表層は500℃前後の熱履歴から生じた羽毛状組織の上部ベイナイト (Upper bainite) が観察される。ベイナイトとはフェライトと炭化物の混合物である。また、三角形状隙間の右側は母材本来組織で極軟鋼のフェライト単一相である。⑤は左側ベイナイトの硬度圧痕で113Hv、⑥は右側フェライトで99Hvの値が得られた。刃金 (鋼) マルテンサイト焼入れ組織が440Hvに対して母材側は99~113Hv程度とその材質機能差は明らかである。

一方、Photo. 4 の⑥は刃先寄りの横縦断組織を示す。①の模式図に⑥撮影個所を明記した。刃先端から約5mm程度の位置であって、ここでの刃金 (鋼) 内にマルテンサイトの析出はなく、全てパーライトと白色斑点状フェライトとなり、硬度値の圧痕写真は割愛したが329~361Hvと最先端マルテンサイト440Hvより軟化する。また、刃金 (鋼) から母材へかけては炭素の拡散層が生じて純粋な母材フェライト個所は錆化鉄と化してここでは観察できない。

5 ま と め

弥生時代~古墳時代にかけての鍛造鉄斧は、板状鉄斧と有袋鉄斧が存在する。谷の前遺跡出土鉄斧は、刃部上端は平坦で袋部の遺存状態は僅かであるが有袋鉄斧の可能性が高い。更に、この有袋鉄斧は製作技法からみて2方法が提示される。⁽³⁾

- i. 同一素材の上方を両方に叩き延ばして耳とし、これから袋部を形成させた鉄斧で、袋部が「ハ」字状にひらく。
- ii. 袋部と刃部は別固体の素材を鍛接する方法の鉄斧で、袋部にひらきがない鉄斧。Fig. 1 右側に展

開図を示した。

谷の前遺跡出土鉄斧はiiを想定するのであるが、ここで注目すべきは刃部の造りである。極軟鋼母材（鉄）に割り込みを入れて硬い刃金（鋼）を嵌め込む「刃金（鋼）割り込み両刃造り」製品が確認された。弥生時代後期末頃の産物である。鋭利性を刃物にもたせ、衝撃吸収を極軟鋼で支えた厚刃工具としては理に適った技法である。

筆者は弥生時代、古墳時代前・中期の鉄関連遺物（金属鉄遺存品）を過去に約50点程調査してきたが、今回調査の「刃金（鋼）割り込み両刃造り」製品には遭遇していない。現代工業界で生産されている製鉄鍛冶技術の多くは、既に古代中国の漢代までに開発されたアイデアの応用であり、残念ながら我々の営みはその拡大再生産を誇るのみの寂しさである。⁽⁴⁾

「刃金（鋼）割り込み両刃造り」のプロセスも昭和50年代頃に土佐刃物（高知県）で採用製作されていたとの報告がある。香月一郎・節子両氏の共著『むらの鍛冶屋』の聞き取り調査の貴重な労作であ⁽⁵⁾、本稿執筆に当り裨益されること大であった。『村の鍛冶屋』は身边からも消えている。文部省唱歌にも見られない。長年築き上げてきた日常農工具製作・鍛冶技術の伝承は今後どうなるのだろうか。

最後に谷の前遺跡出土鉄斧で見逃せぬ問題に製鉄原料がある。鉄中の非金属介在物からチタン（3.4%TiO₂）分が検出された。弥生時代の鍛造鉄斧からチタン（Ti）分の検出事例は埼玉県向山遺跡出土袋状鉄斧（弥生時代後期）に続く発見である。向山遺跡出土鉄斧は22.4%TiO₂—1.4%V₂O₃—0.08%Zr₂O₃組成から砂鉄原料が考えられる。⁽⁶⁾それに対して該品は朝鮮半島北側賦存のチタン磁鉄鉱が想定される。こちらも先例がなく今後の調査事例を待つ事態となった。今後の重要研究課題として注目してゆきたいと考えている。

5 おわりに

谷の前遺跡から出土した鍛造鉄斧（弥生時代後期末頃）の刃先は母材（地金）が極軟鋼で、これに割り込みを入れて刃鋼（鋼）を嵌入した造りであった。弥生時代の刃先の造りとしては数少ない事例である。この割り込み刃金は、土佐刃物として昭和50年代までは製作していたことは前述した。

香月節子氏の『むらの鍛冶屋』で発表され、その後の発展資料として、同氏著作の『鉄と火と技と～土佐打刃物の今～』未来社 2002.2と編集の『土佐打刃物～伝統的工芸品産地指定にともなうプロセスと活動報告～』高知県土佐刃物連合協同組合製作 2004を紹介された。

更にこの割り込み刃金の「割り刃金」は民俗学的には鍛冶用語としてかなり知られている模様で、当方の勉強不足を恥じるばかりである。そこで、年代的にどこまで遡りうるか気になっていたが、朝岡康二氏の『鍛冶の民俗文化』（考古民俗叢書20）慶友社 1984によると鎌倉時代の備前鍛冶の刀剣までが記してある。そしてルーツとして華南方面の夾鋼（割り込み刃金）の存在を可能性として指摘され、今後調べてゆきたい問題の1つとして挙げておられる。

日本列島内で弥生の鉄器として割り込み刃金鉄器の発見は、意義深い。東アジアの鉄器製作の技術史として視座を構えて、もっと深く研究してゆくべきだと考える次第である。

注)

- (1) 金田善敬「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』(第17集) 1995
- (2) 大澤正己「弥生時代の鉄器の動向～金属学的見地からのアプローチ～」『東日本における鉄器文化の受容と展開』(第4回鉄器文化研究会) 埼玉県朝霞市コミュニティセンターホール1997 236頁
Table. 2 参照
- (3) 金田善敬(1) 前掲書
- (4) ①大澤正己「環日本海地域の鉄の金相学的調査～弥生の鉄の一樣相～」『環日本海地域の鉄文化の展開』(人間・社会・環境との新しい調和を求めて-X) 社会鉄鋼工学部会 1999年度秋季シンポジウム論文集 社会法人日本鉄鋼協会1999.11
②大澤正己「金属学的分析からみた倭と加耶の鉄」～日韓の製鉄・鍛冶技術～『第五回歴博国際シンポジウム 古代東 アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館 2002.3.13
- (5) 香月洋一郎・香月節子『むらの鍛冶屋』平凡社 1986.9
- (6) 大澤正己・塚本敏夫「向山遺跡出土鉄製品の金属学的調査」～二条凸帯鑄造鉄斧・鍛造袋状鉄斧～『埼玉県朝霞市教育委員会記者発表資料』朝霞市教育委員会(1997.4.26 新聞記事)

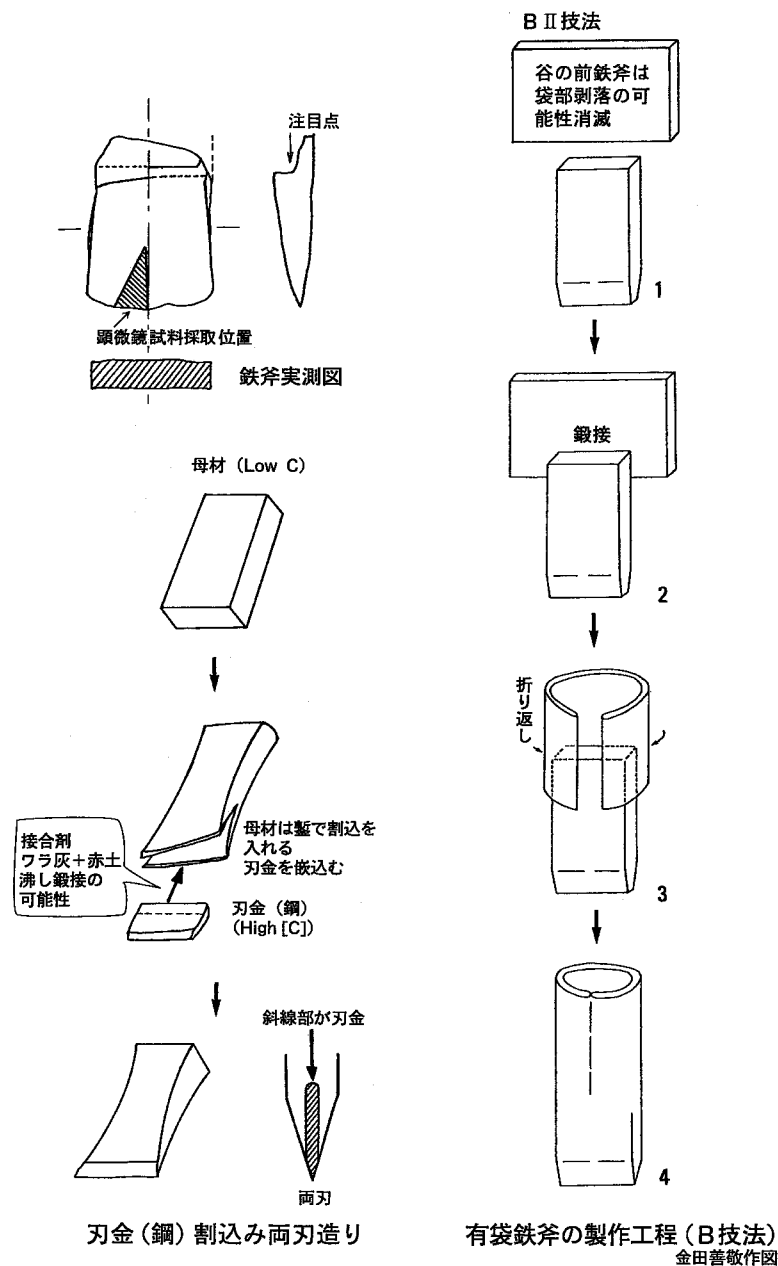


Fig. 1 谷の前遺跡出土有袋鉄斧の製作想定図

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符 号	出 土 位 置	遺 物 名 称	推 定 年 代	計 測 値		磁 着 度	メ タ ル 度	調 査 項 目						備 考	切出しサイズ	
				大 き さ (mm)	重 量 (g)			マ ク ロ 組 織	顕 微 鏡 組 織	ビ ツ カ ー ス 断 面 硬 度	X 線 回 折	E P M A	化 学 分 析		大 き さ (mm)	重 量 (g)
TNM-1	土器溜りB	有袋鉄斧	弥生後期末頃	68×49×14	145.85		(L)	○	○	○		○		刈	10×20×8	4.17

Table. 2 出土遺物の調査結果のまとめ

符 号	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	所 見
TNM-1	土器溜りB	有袋鉄斧	弥生後期末頃	介在物：ウスタイト+ファイヤライト、刃金0.7%C、 母 材：フェライト・パーライト	低温還元直接製鋼法、チタン ^赤 鉄鉱系、 刃金（鋼）削込み両刃造り

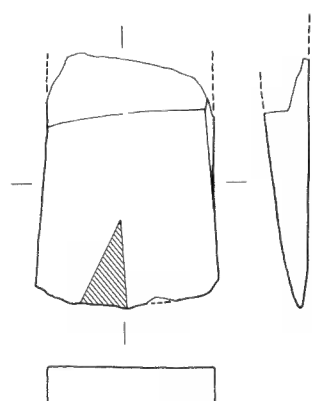


Fig. 2 鉄斧実測図(S=1/2)

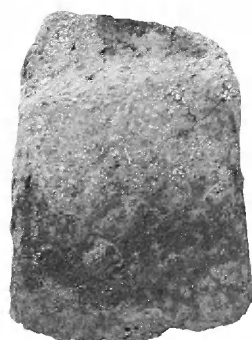
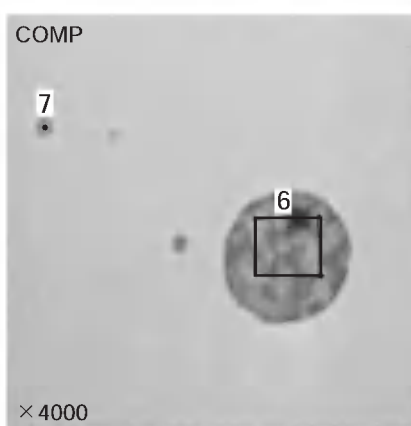


Photo. 1 鉄斧の外観(右)とX線像(左)(S=2/3)



Element	5
F	-
Na ₂ O	0.482
MgO	1.619
Al ₂ O ₃	12.983
SiO ₂	40.963
P ₂ O ₅	0.037
S	0.008
K ₂ O	3.606
CaO	4.225
TiO ₂	3.482
Cr ₂ O ₃	-
MnO	0.564
FeO	22.138
CuO	0.069
V ₂ O ₅	0.049
As ₂ O ₃	-
Total	90.223



Element	6	7
F	-	-
Na ₂ O	1.862	0.156
MgO	1.976	0.077
Al ₂ O ₃	11.683	0.484
SiO ₂	24.209	20.249
P ₂ O ₅	0.470	0.213
S	0.009	0.073
K ₂ O	2.864	0.116
CaO	3.201	0.038
TiO ₂	3.404	0.071
Cr ₂ O ₃	-	0.038
MnO	0.121	0.402
FeO	51.945	90.953
CuO	0.014	0.021
V ₂ O ₅	0.020	0.065
As ₂ O ₃	0.069	-
Total	101.845	112.938

Photo. 2 鉄斧の非金属介在物のEPMA調査結果 母材(鉄)[左]と刃鉄(鋼)[右]

TNM-1
①②×400、非金属介在物
①：刃金（鋼）②母材
③×100、刃金・母材境界
④×50 縮小0.6 同上
⑤～⑧×200、硬度圧痕
⑤113Hv、⑥99Hv
母材：低炭素域
⑦×400、マルテンサイト
⑧×200、440Hv、刃先

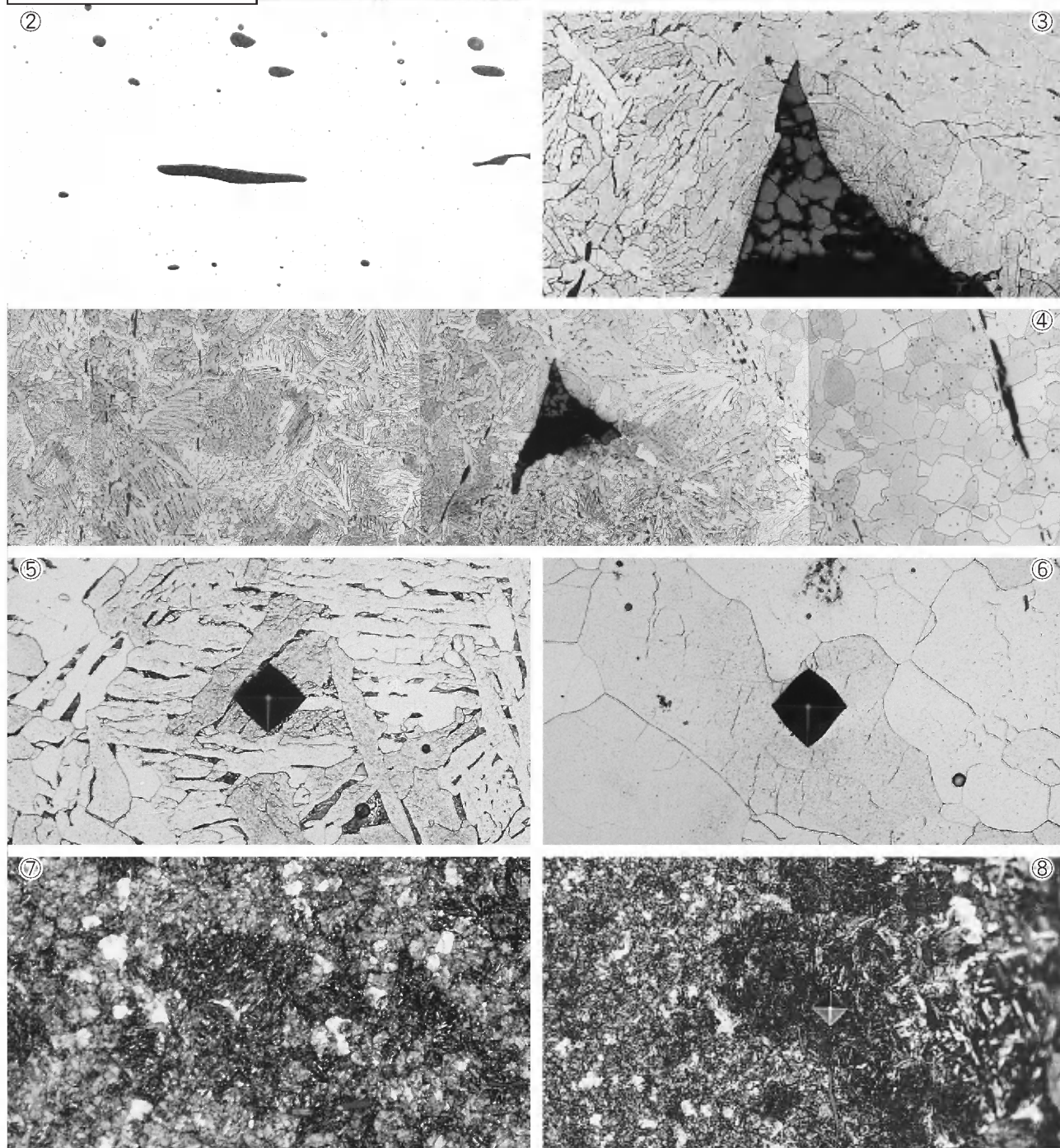


Photo. 3 有袋鉄斧の顕微鏡組織

刃金(鋼)は母材(鉄)を割って嵌め込まれた

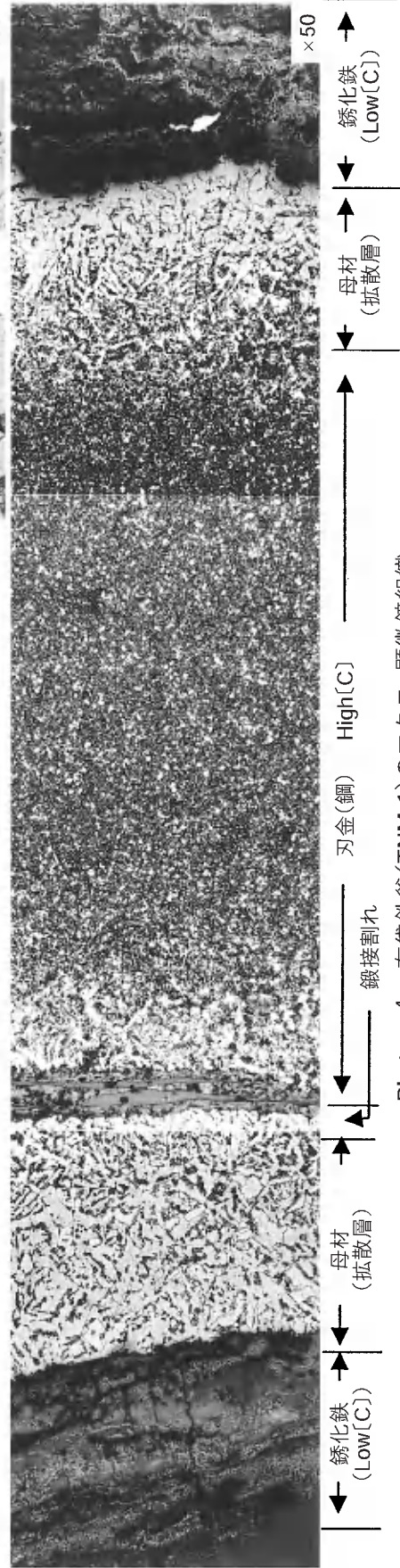
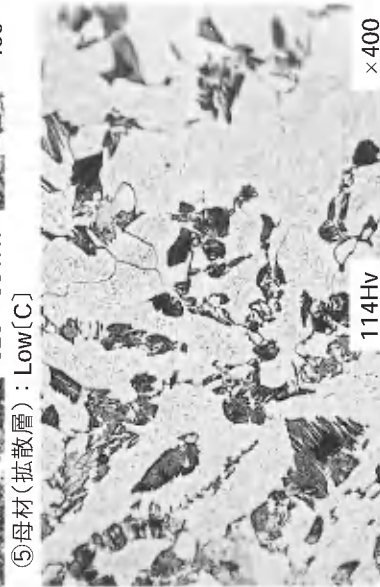
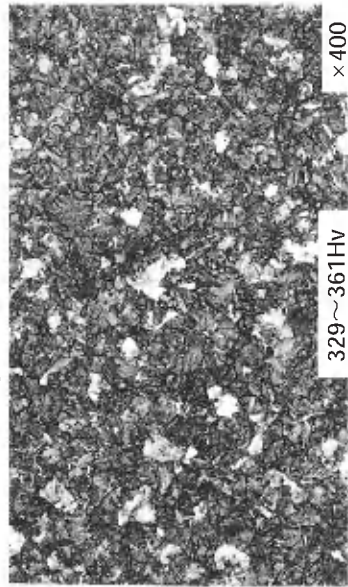
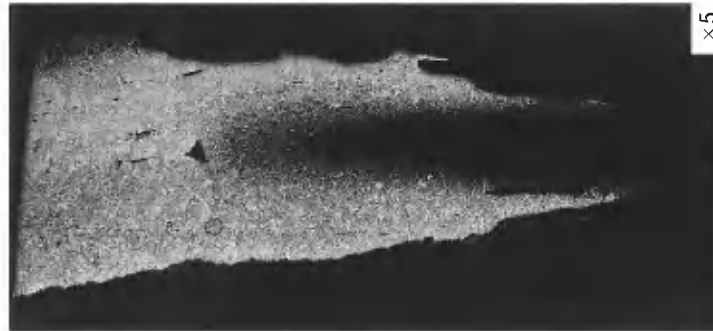
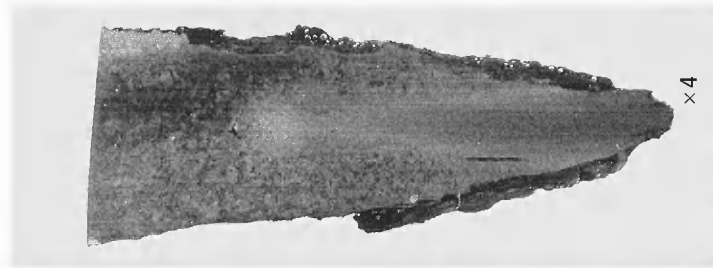


Photo. 4 有袋鉄斧(TNM-1)のマクロ・顕微鏡組織

附載2 土井遺跡出土土器の胎土分析

―埴輪・陶棺・須恵器・瓦の分析―

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

1. はじめに

土井遺跡では、埴輪、陶棺、須恵器、瓦を焼成した窯が発見された。そこで理化学的な胎土分析により、各器種のあいだで胎土に違いがみられるか。また埴輪に関しては、周辺地域で出土しているものと比較することで、埴輪がどの地域に供給されたか検討した。また、その他の陶棺、須恵器、瓦は今後の生産地推定のための基礎データとすることを目的とした。

分析方法は、蛍光X線分析法により胎土中の成分（元素）の量を測定し、実体顕微鏡観察では肉眼観察により土器表面の砂粒の種類、量を調べ、胎土の差異について検討した。

2. 分析結果

分析した遺物は、表1から表3に示した1・2・3号窯、埴輪集積地、5区土壙墓、8区などから出土した埴輪、陶棺、須恵器、瓦など213点と遺跡周辺の弥上古墳、可真丸山古墳、前内池下などから出土した埴輪23の合計236点である。

【蛍光X線分析法による胎土分析】

この分析で測定した元素は、主要元素であるSi、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、Pと微量元素のRb、Sr、Zrの13元素である。このうち、現在までの分析で胎土に違いがみられる元素としてSi、Ti、Al、Fe、Ca、Kなどの元素があげられる。ここでは、特に顕著な違いがみられるK、Caの元素を用いてX-Y散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。

・土井遺跡出土埴輪、陶棺、須恵器、瓦の比較

第1図K-Ca散布図では、土井遺跡の各窯跡から出土した埴輪、陶棺、須恵器、瓦について比較してみた。すると、散布図に示しているように埴輪、陶棺、須恵器、瓦とも、胎土的に重なる部分が多くほとんど差異はみられなかったものの、Ca量の違いで須恵器と瓦の胎土が異なっているし、埴輪と陶棺がほぼ重なり胎土的に類似していた。

・埴輪の比較

第2図K-Ca散布図では、1号、2号窯、集積地、5区土壙出土埴輪のあいだで胎土の比較を行った。その結果、Caの含有量で以下の3つのグループに分類できる。

I 類……Ca量が約1%以上

試料番号：95・98（1号窯）、131・157・174（集積地）

II 類……Ca量が約0.7%～約1%

試料番号：1号窯（95・98以外）、124・125・139・154・156（集積地―円筒）

175～178（集積地－石見型）、179～181・183（集積地－形象）

5区土壙墓（円筒）

Ⅲ類……Ca量が約0.7%以下

試料番号：2号窯（石見型）、182（集積地－形象）、集積地－円筒（Ⅰ・Ⅱ類以外）

・陶棺の比較

第3図K－Ca散布図では、2号窯、集積地、8区出土陶棺の胎土比較を実施した。その結果、集積地出土の陶棺がCa量の違いで2つにわかれ、8区出土の陶棺も集積地のものと判別できた。

・須恵器の比較

第4図K－Ca散布図では、須恵器の器種ごとで胎土に差異があるかどうか検討した。その結果、坏、甕、壺、横瓶の器種により胎土に差異はみられなかった。しかし、甕のあいだで明らかに胎土の異なるものが2点あった。それは試料番号32と33であった。

・瓦の比較

第5図K－Ca散布図では、瓦の種類、技法別で胎土に差異があるかどうか検討した。その結果、平瓦（格子）のうち、84・85・87の3点が他の瓦と胎土が異なっており、それ以外はほぼ1つにまとまり違いはみられなかった。

・遺跡周辺古墳出土埴輪との比較

第6図K－Ca散布図では、生産地試料（土井遺跡1・2号・集積地）と消費地である古墳出土埴輪と比較した。なお、比較した古墳は弥上古墳、可真丸山古墳、前内池下古墳、前内池1号・4号墳（1）、岩田3号墳（2）、二井大池2号墳（2）の7基である。

その結果、弥上古墳、可真丸山古墳、前内池下古墳、前内池1号墳、二井大池2号墳、岩田3号墳（一部）の円筒埴輪、前内池4号墳の石見型・家形埴輪が土井遺跡の1・2号窯と胎土的に類似していた。しかし、前内池1号墳（石見・人物）、前内池4号墳（円筒）は土井遺跡1・2号窯の分布域には入らなかった。

【実体顕微鏡による胎土観察】

実体顕微鏡により、10倍～30倍で土器表面の砂粒観察（岩石・鉱物）を行った。

この結果、今回観察した土器には石英、長石、雲母、火山ガラスなどの砂粒が含まれていた。

・埴輪、陶棺の砂粒

0.5mm～3mmの石英、長石を含み、少量の黒雲母（0.5mm以下）、火山ガラス（0.5mm以下）がみられる。また、蛍光X線分析法による埴輪の胎土分類では3種類に分類できたが、砂粒観察を実施したところ岩石・鉱物の構成物、量に違いはなかったが、砂粒の大きさでは違いがみられた。それは、蛍光X線分析法でⅠ・Ⅱ類に分類されている埴輪胎土にはⅢ類に比べて、粗い石英・長石が多く観察された。

・瓦の砂粒

0.5mm～3mmの石英、長石を多く含み、少量の黒雲母（0.5mm以下）が含まれている。また、蛍光X線分析法で試料番号84・85・87が、胎土的に異なっていたが、この砂粒観察でも、他の瓦に比べこの3点の瓦には胎土に含まれる砂粒（石英・長石）が粗く異なっていた。

なお、須恵器に関しては、明確な砂粒の差は観察できなかった。

3. まとめ

土井遺跡の生産遺構である1号、2号、3号窯出土の埴輪・陶棺・須恵器・瓦を複数の胎土分析法により検討したところ、以下のことが明らかとなった。

- (1) 蛍光X線分析法による土井遺跡出土の埴輪、陶棺、須恵器、瓦の比較では、胎土的にほぼ1つにまとまり、明確な差異はなかった。ただ、埴輪・陶棺と須恵器と瓦の3種類（器種別）に分布域がまとまる傾向がみられた。これは、各器種により胎土の選定があったことが十分に考えられる。
- (2) 埴輪の分析では、3種類の胎土に分類が可能であった。この分類を実体顕微鏡観察により検討したところ、この胎土の違いは、砂粒の大きさが関係しており、Ca量が多くなるほど砂粒（長石・石英）が大きく多くなる傾向がみられた。このことが胎土の違いとして現れたと推定される。また、これら粘土の採集地であるが、砂粒構成が花崗岩起源の岩片を含んでいることから遺跡周辺で採取できる粘土である。また、周辺の古墳（消費地）から出土した埴輪との比較では、ほとんどの埴輪が土井遺跡1号・2号窯で焼成されたものが供給されていることが推定された。
- (3) 陶棺の分析でも3つの胎土にわかれたが、これは個体差の可能性が十分に考えられる。つまり、個々のまとまりは同一個体であるかもしれない。
- (4) 瓦の分析では、蛍光X線分析法で胎土に違いがみられ、砂粒観察から粗い砂粒（石英・長石）が多く含まれているものが胎土的に異なっていた。これは埴輪・陶棺と同様な結果であると考えられる。
- (5) 須恵器の分析では、甕のなかに胎土が異なるものが2点あり、明らかに2種類の胎土があることがわかった。なお、この2点がこの窯で焼成されたものか今後検討する必要がある。

また、土井遺跡の埴輪の供給先に関しては、現段階の分析データから検討すると、周辺の古墳に供給されていると推定されるが、これ以外にも未確認の生産地は当然あり、現段階の蓄積データでの推定であることを断っておく。そして、須恵器・瓦は消費地の比較データの不足もあり十分な検討ができなかった。今後の課題である。

この分析を実施する機会を与えていただいた、山磨康平、重根弘和の両氏および岡山県古代吉備文化財センターの職員に方々にはいろいろお世話になった。末筆ではありますが記して感謝致します。

註)

- (1) 白石 純「前内池古墳群出土須恵器、埴輪の胎土分析」『前内池遺跡・前内池古墳群・佐古遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174 岡山県教育委員会2003年。
- (2) 白石純・赤澤昌典・小林博昭「埴輪の胎土分析（Ⅰ）ー岡山県内出土の円筒埴輪の分析を中心にー」『岡山理科大学自然科学研究所研究報告』第28号 2002年。

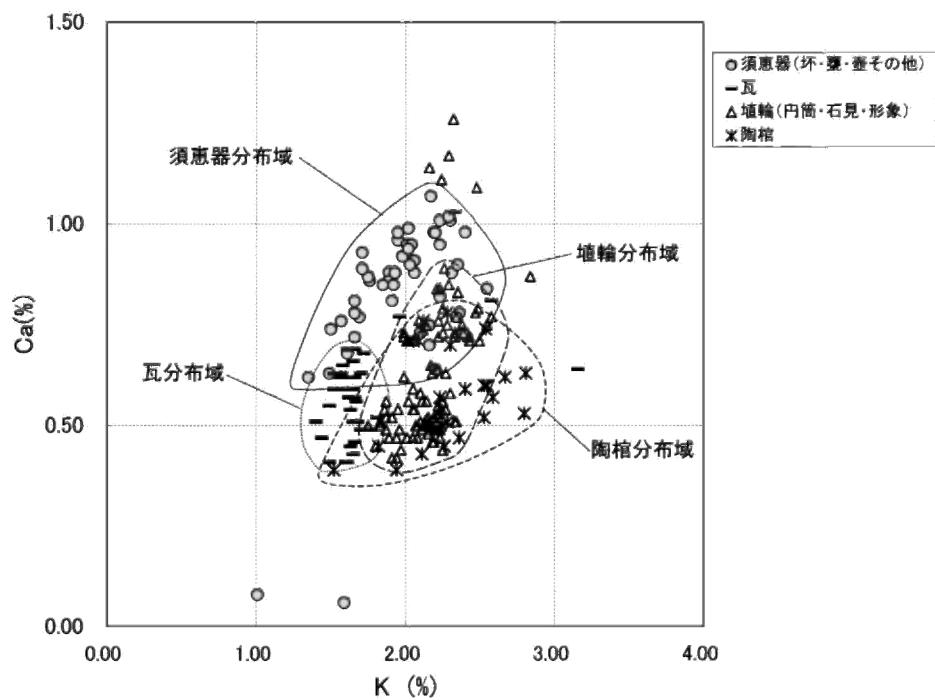
表1 土井遺跡胎土分析値一覧表(%) ただし、Rb・Sr・Rbはppm

試料 番号	遺 構	器 種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	3号窯	坏A(蓋)	63.70	0.87	22.65	5.28	0.05	2.04	0.86	2.59	1.76	0.05	174	143	285
2	3号窯	坏A(蓋)	65.65	0.86	21.15	4.57	0.05	1.94	0.88	2.78	1.89	0.03	193	153	299
3	3号窯	坏A(蓋)	65.21	0.84	20.93	5.10	0.05	1.90	0.96	2.86	1.95	0.02	211	143	311
4	3号窯	坏A(蓋)	64.90	0.74	21.37	5.12	0.05	1.92	0.86	2.83	1.89	0.03	193	142	292
5	3号窯	坏A(蓋)	65.88	0.80	19.20	6.37	0.07	1.74	0.72	2.53	2.41	0.04	245	125	316
6	3号窯	坏A(蓋)	64.33	0.74	20.63	4.64	0.05	2.26	0.85	4.37	1.92	0.01	192	133	256
7	3号窯	坏A(蓋)	63.81	0.84	22.63	5.53	0.05	1.91	0.95	2.07	2.01	0.03	197	164	329
8	3号窯	坏A(蓋)	62.27	0.90	23.72	5.33	0.04	2.03	0.88	2.56	2.06	0.02	183	144	306
9	3号窯	坏A(蓋)	63.52	0.90	22.40	5.57	0.05	1.87	0.92	2.51	1.98	0.04	213	157	302
10	3号窯	坏A(蓋)	65.42	0.89	21.45	4.77	0.04	1.91	0.81	2.58	1.91	0.01	187	140	327
11	3号窯	坏A・B	64.34	0.90	22.89	4.71	0.04	1.88	0.87	2.40	1.75	0.04	189	156	299
12	3号窯	坏A・B	64.65	0.82	22.55	4.61	0.04	1.98	0.88	2.28	1.93	0.06	196	144	298
13	3号窯	坏A・B	63.55	0.86	22.28	5.70	0.05	1.90	0.99	2.36	2.02	0.09	220	164	370
14	3号窯	坏A・B	65.85	0.72	19.85	5.30	0.06	1.85	0.78	2.91	2.36	0.04	234	155	333
15	3号窯	坏A・B	65.59	0.91	20.62	5.56	0.06	1.80	0.73	2.06	2.39	0.07	229	155	329
16	3号窯	坏A・B	63.49	0.88	22.23	5.48	0.06	2.00	0.95	2.59	2.04	0.03	208	163	325
17	3号窯	坏A・B	63.06	0.80	22.78	5.39	0.04	1.92	0.91	2.76	2.06	0.01	201	156	306
18	3号窯	坏A・B	65.05	0.87	21.50	5.98	0.05	1.68	0.82	1.54	2.23	0.07	252	143	342
19	3号窯	坏A・B	64.14	0.80	22.28	5.02	0.05	1.89	0.94	2.63	2.02	0.01	198	146	299
20	3号窯	坏A・B	68.77	0.75	19.51	3.00	0.03	1.81	0.98	2.71	2.19	0.08	177	152	297
21	3号窯	坏A・B	66.57	1.07	18.14	7.09	0.08	2.07	0.62	2.79	1.35	0.02	140	182	317
22	3号窯	坏A(碗状)	67.19	0.78	18.81	4.98	0.05	1.98	0.75	2.97	2.16	0.06	244	145	326
23	3号窯	坏A(碗状)	65.62	0.71	20.96	4.29	0.04	1.86	1.01	3.04	2.23	0.09	207	145	284
24	3号窯	坏A(碗状)	65.57	0.83	19.86	5.20	0.05	1.93	0.77	3.18	2.34	0.10	225	146	322
25	3号窯	坏A(碗状)	66.37	0.79	19.58	5.28	0.06	1.80	0.84	2.39	2.55	0.06	252	145	329
26	3号窯	坏A(碗状)	66.04	0.86	19.68	5.27	0.06	1.85	1.01	2.68	2.30	0.06	214	155	328
27	3号窯	坏A(碗状)	63.20	0.82	22.91	5.04	0.05	1.92	0.88	2.68	2.31	0.03	246	163	290
28	3号窯	坏A(碗状)	65.51	0.67	20.68	4.20	0.05	1.89	1.02	3.31	2.29	0.10	232	150	280
29	3号窯	坏A(碗状)	64.41	0.80	21.50	6.07	0.06	1.81	0.98	2.12	1.95	0.08	207	154	467
30	3号窯	坏A(碗状)	65.30	0.81	20.70	5.51	0.05	1.73	0.95	2.40	2.23	0.07	228	160	321
31	3号窯	坏A(碗状)	65.58	0.83	18.84	7.23	0.11	1.76	1.07	2.12	2.17	0.09	233	195	457
32	3号窯	甗類	70.08	0.96	18.26	5.66	0.06	1.75	0.08	1.92	1.01	0.10	149	39	384
33	3号窯	甗類	67.36	0.95	17.93	7.27	0.08	1.92	0.06	2.02	1.59	0.04	183	155	331
34	3号窯	甗類	68.14	1.02	17.32	6.61	0.08	1.89	0.76	2.38	1.57	0.06	184	187	305
35	3号窯	甗類	67.43	0.95	17.49	7.48	0.09	1.94	0.63	2.23	1.49	0.06	196	145	336
36	3号窯	甗類	68.30	0.92	17.10	6.96	0.09	1.83	0.72	2.17	1.66	0.08	167	163	328
37	3号窯	甗類	65.41	0.72	19.71	6.58	0.07	1.78	0.70	2.56	2.16	0.06	242	139	325
38	3号窯	甗類	64.88	0.78	19.69	6.66	0.06	1.89	0.64	2.97	2.20	0.05	246	140	329
39	3号窯	甗類	65.06	0.82	17.49	5.81	0.07	2.56	0.74	5.67	1.50	0.08	168	165	267
40	3号窯	甗類	64.36	0.85	21.12	5.53	0.06	1.81	0.90	2.70	2.35	0.11	237	152	342
41	3号窯	甗類	68.34	0.96	17.08	6.99	0.09	1.89	0.68	2.03	1.61	0.13	189	163	328
42	3号窯	横瓶	67.73	0.90	17.16	6.88	0.09	1.96	0.77	2.42	1.69	0.13	176	178	327
43	3号窯	横瓶	64.73	0.74	20.99	5.54	0.05	1.94	0.98	2.49	2.20	0.10	262	167	315
44	3号窯	長頸甕	64.57	0.77	21.59	5.54	0.05	1.93	0.90	2.30	2.03	0.09	234	159	320
45	3号窯	長頸甕	63.15	0.84	22.22	6.08	0.09	1.80	0.73	2.73	2.10	0.07	217	124	348
46	3号窯	点その他	70.57	0.89	14.86	6.57	0.09	1.66	0.78	2.65	1.66	0.14	151	166	325
47	3号窯	点その他	70.15	0.85	15.08	6.38	0.07	1.86	0.81	2.82	1.66	0.10	139	152	340
48	3号窯	甗その他	70.86	0.89	15.08	6.64	0.08	1.73	0.89	1.83	1.71	0.11	150	160	327
49	3号窯	甗その他	66.57	0.80	19.35	5.62	0.07	1.72	0.98	2.20	2.40	0.09	240	148	381
50	3号窯	甗その他	71.09	0.86	14.83	6.55	0.07	1.61	0.93	1.95	1.71	0.19	164	191	340
51	3号窯	甗その他	71.01	0.93	15.01	6.66	0.10	1.63	0.85	1.60	1.85	0.12	197	184	346
52	3号窯	丸瓦	65.64	1.08	18.93	7.72	0.09	1.87	0.59	2.18	1.63	0.08	157	159	330
53	3号窯	丸瓦	68.77	1.04	17.31	6.48	0.08	1.96	0.57	1.93	1.62	0.07	172	132	288
54	3号窯	丸瓦	65.48	1.06	19.41	7.64	0.08	1.92	0.59	2.07	1.55	0.03	107	161	322
55	3号窯	丸瓦	65.23	1.05	18.96	7.47	0.10	2.04	0.55	2.82	1.49	0.07	83	123	343
56	3号窯	丸瓦	69.15	0.84	16.43	6.88	0.09	2.01	0.63	2.09	1.56	0.11	130	148	329
57	3号窯	丸瓦	68.06	1.04	17.51	6.99	0.07	1.76	0.49	2.04	1.77	0.06	150	133	351
58	3号窯	丸瓦	68.80	0.96	18.06	5.70	0.08	1.87	0.62	1.92	1.66	0.14	182	167	293
59	3号窯	丸瓦	66.11	0.93	19.17	7.25	0.10	1.88	0.62	2.07	1.56	0.06	139	154	324
60	3号窯	丸瓦	66.81	0.94	18.29	6.65	0.08	1.77	0.68	2.78	1.72	0.11	155	156	328
61	3号窯	丸瓦	67.16	1.05	18.41	6.55	0.06	1.76	0.52	2.40	1.81	0.09	155	137	330
62	3号窯	平瓦(ナ)	66.86	0.97	18.36	6.54	0.08	1.91	0.63	2.69	1.70	0.08	149	167	316
63	3号窯	平瓦(ナ)	66.21	0.96	18.21	6.91	0.08	2.06	0.56	3.06	1.67	0.08	126	135	322

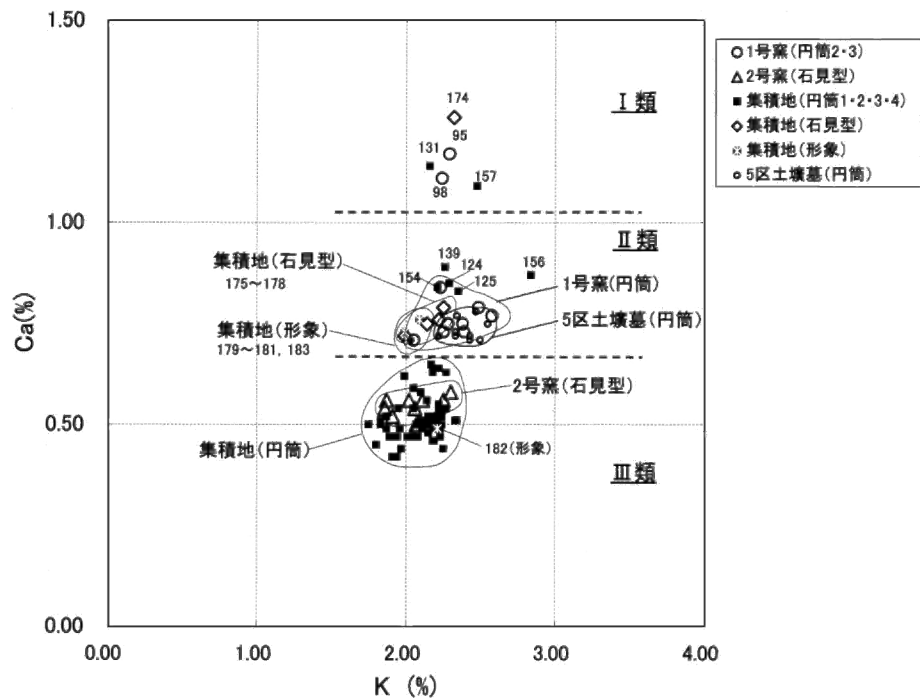
試料 番号	道 橋	器 種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
64	3号窯	平瓦 (ナ)	66.94	0.87	19.02	6.29	0.07	1.94	0.41	2.59	1.60	0.10	162	125	280
65	3号窯	平瓦 (ナ)	68.11	1.00	17.68	6.57	0.09	1.94	0.46	2.18	1.66	0.13	181	120	273
66	3号窯	平瓦 (ナ)	67.51	0.88	18.24	6.34	0.07	1.92	0.63	2.63	1.57	0.06	151	162	319
67	3号窯	平瓦 (ナ)	67.60	0.94	18.03	6.54	0.08	1.94	0.49	2.39	1.70	0.12	167	124	312
68	3号窯	平瓦 (ナ)	66.64	0.98	18.45	7.29	0.10	1.74	0.57	2.20	1.66	0.14	145	148	348
69	3号窯	平瓦 (ナ)	68.44	0.93	17.97	5.81	0.09	1.84	0.66	2.32	1.65	0.09	156	182	295
70	3号窯	平瓦 (ナ)	68.26	0.91	17.15	6.36	0.08	1.84	0.59	2.85	1.65	0.09	155	149	321
71	3号窯	平瓦 (ナ)	67.44	0.93	18.40	6.29	0.06	1.78	0.69	2.56	1.61	0.07	158	151	307
72	3号窯	平瓦 (縄)	66.01	0.98	19.78	7.11	0.09	1.83	0.69	1.63	1.66	0.06	177	138	383
73	3号窯	平瓦 (縄)	66.19	0.96	18.99	7.19	0.09	1.94	0.59	2.23	1.60	0.08	157	124	346
74	3号窯	平瓦 (縄)	64.73	0.88	20.06	6.71	0.11	1.99	0.77	2.46	1.96	0.15	211	154	311
75	3号窯	平瓦 (縄)	63.74	0.84	19.63	6.01	0.08	2.52	0.51	5.05	1.40	0.05	148	118	295
76	3号窯	平瓦 (縄)	66.35	0.95	19.04	6.47	0.07	1.94	0.41	2.97	1.49	0.07	196	91	328
77	3号窯	平瓦 (縄)	66.63	0.82	18.86	6.48	0.07	1.84	0.65	2.73	1.58	0.12	159	112	323
78	3号窯	平瓦 (縄)	65.94	0.94	19.11	6.44	0.08	2.00	0.63	3.08	1.52	0.08	159	131	325
79	3号窯	平瓦 (縄)	66.43	0.90	18.43	6.65	0.07	1.85	0.41	3.36	1.61	0.09	186	104	302
80	3号窯	平瓦 (縄)	65.16	1.06	19.92	7.60	0.08	1.85	0.45	2.01	1.63	0.08	151	122	334
81	3号窯	平瓦 (縄)	65.58	0.93	19.43	7.24	0.09	2.01	0.59	2.38	1.52	0.08	154	125	320
82	3号窯	平瓦 (格子)	68.19	0.98	17.42	6.72	0.08	1.92	0.51	2.22	1.68	0.11	182	144	298
83	3号窯	平瓦 (格子)	67.53	0.98	17.66	7.03	0.09	1.79	0.54	2.46	1.63	0.10	132	130	332
84	3号窯	平瓦 (格子)	68.38	0.57	19.33	4.25	0.04	1.69	0.81	2.02	2.58	0.10	206	157	345
85	3号窯	平瓦 (格子)	69.37	0.59	17.08	4.11	0.05	1.81	1.03	3.27	2.33	0.13	172	183	330
86	3号窯	平瓦 (格子)	67.33	0.90	18.05	6.94	0.06	1.90	0.51	2.33	1.67	0.08	154	126	318
87	3号窯	平瓦 (格子)	70.40	0.45	17.16	3.42	0.04	1.70	0.64	2.68	3.16	0.11	224	117	280
88	3号窯	平瓦 (格子)	64.38	0.93	19.55	6.29	0.06	2.29	0.47	4.36	1.44	0.09	100	118	315
89	3号窯	平瓦 (格子)	69.23	0.98	17.39	6.57	0.07	1.85	0.62	1.45	1.59	0.07	166	136	332
90	3号窯	平瓦 (格子)	67.70	0.90	17.79	6.47	0.07	1.93	0.43	2.81	1.65	0.07	168	130	303
91	3号窯	平瓦 (格子)	67.49	1.02	17.11	7.46	0.07	1.73	0.51	2.71	1.65	0.05	134	139	345
92	1号窯最終床面	円筒5c	60.26	0.82	23.47	7.23	0.07	2.06	0.71	3.10	2.05	0.05	198	128	423
93	1号窯最終床面	円筒5c	65.93	0.73	19.49	6.27	0.09	1.77	0.84	2.31	2.23	0.05	249	157	462
94	1号窯最終床面	円筒5b	65.68	0.69	19.42	5.79	0.07	1.80	0.79	2.91	2.49	0.07	286	148	424
95	1号窯最終床面	円筒5b	68.91	0.69	17.25	4.67	0.07	1.77	1.17	2.92	2.29	0.09	157	176	414
96	1号窯最終床面	円筒5b	65.00	0.71	20.26	6.26	0.07	1.77	0.75	2.51	2.38	0.08	232	136	433
97	1号窯最終床面	円筒5b	65.17	0.71	19.83	5.97	0.07	1.72	0.77	2.80	2.58	0.07	267	128	422
98	1号窯最終床面	円筒5d	69.64	0.69	17.28	4.78	0.07	1.66	1.11	2.22	2.24	0.06	178	186	460
99	1号窯最終床面	円筒5d	63.42	0.70	21.66	5.75	0.08	2.00	0.73	3.05	2.39	0.04	186	127	376
100	1号窯最終床面	円筒5d	65.56	0.74	19.21	6.65	0.07	1.76	0.75	2.69	2.28	0.08	270	136	403
101	1号窯最終床面	円筒5d	64.60	0.83	19.93	6.67	0.07	1.88	0.73	2.80	2.25	0.06	216	118	452
102	2号窯	石見	66.36	0.90	19.21	5.46	0.08	2.17	0.56	3.07	2.02	0.02	195	130	391
103	2号窯	石見	62.07	1.05	22.41	6.78	0.14	2.08	0.50	2.63	2.08	0.02	194	118	446
104	2号窯	石見	67.83	0.78	18.96	4.54	0.05	1.86	0.58	2.79	2.30	0.06	171	120	377
105	2号窯	石見	64.33	0.96	21.10	6.87	0.18	1.78	0.52	2.07	1.91	0.06	171	124	439
106	2号窯	石見	68.39	0.86	19.00	4.64	0.06	1.89	0.56	2.27	2.11	0.05	141	116	403
107	2号窯	石見	63.94	1.07	21.23	6.86	0.21	1.84	0.56	2.24	1.87	0.01	150	135	439
108	2号窯	石見	68.82	0.78	18.92	4.53	0.05	1.81	0.56	1.99	2.25	0.10	161	119	397
109	2号窯	石見	62.88	1.15	22.12	7.24	0.17	1.89	0.54	1.99	1.86	0.01	149	130	453
110	2号窯	石見	63.19	1.02	22.18	7.11	0.18	1.96	0.50	1.48	2.07	0.07	190	128	461
111	2号窯	石見	68.44	0.83	18.93	4.54	0.06	1.88	0.54	2.49	2.06	0.09	162	125	413
112	2号窯	陶棺	63.14	1.09	22.22	6.85	0.07	1.91	0.43	1.91	2.11	0.05	218	120	430
113	2号窯	陶棺	62.74	0.97	22.55	6.21	0.09	2.13	0.47	2.20	2.36	0.06	194	121	370
114	埴輪集積地	円筒6a	65.72	0.94	18.37	6.22	0.11	2.06	0.54	3.68	2.05	0.09	220	102	404
115	埴輪集積地	円筒6a	67.35	0.92	17.99	6.29	0.12	1.80	0.58	2.54	2.10	0.10	203	124	405
116	埴輪集積地	円筒6a	66.85	0.95	18.01	6.39	0.15	1.95	0.52	2.70	2.15	0.11	232	112	380
117	埴輪集積地	円筒6a	65.44	0.99	20.03	6.38	0.11	1.79	0.55	2.22	2.22	0.07	215	120	370
118	埴輪集積地	円筒6a	67.02	0.91	19.02	6.06	0.09	1.91	0.56	2.02	2.14	0.07	215	137	384
119	埴輪集積地	円筒6a	64.03	1.10	20.39	7.17	0.10	2.07	0.50	2.60	1.83	0.05	201	117	418
120	埴輪集積地	円筒6a	63.40	1.07	20.65	7.05	0.13	1.96	0.46	2.83	2.18	0.04	199	135	398
121	埴輪集積地	円筒6a	65.48	1.05	19.69	6.55	0.10	1.77	0.47	2.35	2.23	0.07	186	119	391
122	埴輪集積地	円筒6a	63.08	1.15	22.33	7.03	0.09	1.91	0.50	1.41	2.17	0.08	207	147	443
123	埴輪集積地	円筒6a	65.93	0.94	20.10	6.11	0.08	1.85	0.51	2.10	2.16	0.03	238	126	379
124	埴輪集積地	円筒5a	63.59	0.65	19.67	8.07	0.10	1.75	0.85	2.67	2.29	0.13	271	148	366
125	埴輪集積地	円筒5a	66.07	0.67	19.31	6.08	0.06	1.70	0.83	2.55	2.35	0.06	229	132	437
126	埴輪集積地	円筒5a	62.74	0.93	20.13	5.75	0.08	2.43	0.50	5.10	2.07	0.04	192	112	377
127	埴輪集積地	円筒5a	65.95	0.94	19.91	5.75	0.08	1.78	0.54	2.55	2.27	0.03	205	119	371
128	埴輪集積地	円筒5a	64.95	0.97	20.80	6.37	0.23	1.77	0.50	1.82	2.24	0.10	197	124	426

試料 番号	道 構	器 種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
129	埴輪集積地	円筒5a	64.65	1.02	20.41	6.47	0.12	1.86	0.53	2.37	2.22	0.12	186	142	379
130	埴輪集積地	円筒5a	64.90	0.96	20.77	6.11	0.11	1.79	0.51	2.46	2.13	0.09	198	118	400
131	埴輪集積地	円筒5a	69.22	0.64	17.24	3.99	0.06	1.76	1.14	3.43	2.16	0.08	161	171	423
132	埴輪集積地	円筒5a	62.20	0.96	22.94	6.66	0.19	1.96	0.51	2.24	2.10	0.06	180	117	370
133	埴輪集積地	円筒5a	62.47	1.02	22.91	6.70	0.21	1.87	0.50	1.87	2.14	0.08	188	103	386
134	埴輪集積地	円筒5b	64.96	0.97	20.53	6.27	0.10	1.84	0.52	2.32	2.19	0.09	185	123	392
135	埴輪集積地	円筒5b	62.58	1.06	21.46	7.09	0.09	2.15	0.49	2.88	1.87	0.06	176	112	445
136	埴輪集積地	円筒5b	66.01	1.05	20.33	6.18	0.09	1.78	0.49	1.61	2.19	0.09	198	126	382
137	埴輪集積地	円筒5b	65.05	0.92	20.11	6.76	0.08	1.90	0.47	2.44	1.94	0.12	205	105	438
138	埴輪集積地	円筒5b	63.71	0.95	21.49	6.28	0.12	1.97	0.54	2.37	2.24	0.08	213	125	399
139	埴輪集積地	円筒5b	67.87	0.76	18.51	4.62	0.06	1.75	0.89	3.03	2.26	0.09	177	171	407
140	埴輪集積地	円筒5b	65.67	0.97	20.02	6.14	0.11	1.90	0.52	2.11	2.24	0.10	213	141	394
141	埴輪集積地	円筒5b	64.85	1.03	19.77	6.99	0.13	1.76	0.46	2.56	2.19	0.02	178	124	431
142	埴輪集積地	円筒5b	65.46	1.01	19.74	6.26	0.09	1.93	0.51	2.32	2.34	0.09	232	141	404
143	埴輪集積地	円筒5b	65.58	0.94	19.37	6.34	0.08	1.78	0.65	2.85	2.17	0.08	214	148	408
144	埴輪集積地	円筒5c	63.95	0.96	20.63	6.80	0.09	2.07	0.47	2.78	1.89	0.08	179	110	457
145	埴輪集積地	円筒5c	63.71	0.96	20.89	6.40	0.11	2.01	0.51	2.74	2.33	0.10	180	129	391
146	埴輪集積地	円筒5c	64.86	0.91	19.64	6.21	0.08	2.05	0.50	3.23	2.16	0.09	216	121	404
147	埴輪集積地	円筒5c	62.38	0.96	20.76	6.28	0.07	2.38	0.47	4.35	2.08	0.06	198	126	440
148	埴輪集積地	円筒5c	64.69	0.94	20.10	7.10	0.08	1.87	0.48	2.32	2.15	0.09	236	98	373
149	埴輪集積地	円筒5c	64.16	0.97	20.72	6.44	0.11	1.92	0.50	2.71	2.13	0.10	207	117	403
150	埴輪集積地	円筒5c	64.23	0.92	20.71	6.97	0.08	1.87	0.44	2.29	2.25	0.09	220	128	403
151	埴輪集積地	円筒5c	63.98	0.92	19.32	7.44	0.10	2.05	0.44	3.47	1.97	0.13	229	93	381
152	埴輪集積地	円筒5c	65.30	1.03	19.46	6.66	0.09	1.95	0.51	2.56	2.21	0.03	245	137	437
153	埴輪集積地	円筒5c	62.80	1.04	21.84	7.16	0.09	2.02	0.49	2.25	1.96	0.08	189	124	450
154	埴輪集積地	円筒5d	68.34	0.83	17.72	5.16	0.06	1.68	0.84	2.90	2.21	0.09	213	154	445
155	埴輪集積地	円筒5d	63.37	1.03	20.80	7.58	0.13	1.96	0.45	2.52	1.80	0.11	212	111	407
156	埴輪集積地	円筒5d	68.07	0.67	17.45	4.66	0.05	1.75	0.87	3.19	2.84	0.13	231	161	372
157	埴輪集積地	円筒5d	69.03	0.71	17.09	4.49	0.06	1.73	1.09	2.97	2.48	0.14	180	172	440
158	埴輪集積地	円筒5d	65.10	1.07	20.08	7.28	0.17	1.85	0.50	1.92	1.75	0.09	211	125	435
159	埴輪集積地	円筒5d	65.54	0.93	19.85	6.24	0.08	1.72	0.64	2.43	2.21	0.11	202	164	399
160	埴輪集積地	円筒5d	59.95	1.04	23.38	7.48	0.14	2.15	0.42	3.25	1.91	0.08	198	117	379
161	埴輪集積地	円筒5d	65.51	0.90	20.10	6.35	0.10	1.73	0.64	2.24	2.22	0.07	208	155	396
162	埴輪集積地	円筒5d	63.92	1.08	20.43	7.41	0.13	1.78	0.47	2.43	2.05	0.07	213	131	392
163	埴輪集積地	円筒5d	64.48	1.05	20.67	7.27	0.12	1.81	0.49	1.58	2.23	0.08	231	120	404
164	埴輪集積地	円筒5e	67.97	0.73	17.63	6.14	0.07	1.88	0.59	2.64	2.05	0.15	186	138	365
165	埴輪集積地	円筒5e	66.60	0.78	18.94	6.74	0.08	1.74	0.54	2.29	1.95	0.10	170	141	368
166	埴輪集積地	円筒5e	67.82	0.79	17.77	6.72	0.08	1.72	0.63	1.90	2.27	0.13	194	148	346
167	埴輪集積地	円筒5e	66.87	0.85	17.90	7.44	0.08	1.81	0.52	2.40	1.87	0.08	207	136	408
168	埴輪集積地	円筒5e	67.81	0.70	17.03	6.56	0.07	1.86	0.62	2.99	1.99	0.16	188	144	353
169	埴輪集積地	円筒5e	64.35	0.77	19.69	6.93	0.07	1.94	0.47	3.47	2.01	0.10	172	136	351
170	埴輪集積地	円筒5e	65.97	0.83	18.58	7.55	0.06	1.80	0.42	2.56	1.94	0.14	158	118	364
171	埴輪集積地	円筒5e	65.32	0.82	19.84	7.14	0.08	1.73	0.49	2.18	2.11	0.10	184	143	327
172	埴輪集積地	円筒5e	64.71	0.85	20.10	7.43	0.07	1.90	0.51	2.31	1.83	0.12	148	128	379
173	埴輪集積地	円筒5e	66.25	0.88	18.90	6.56	0.06	1.78	0.63	2.47	2.18	0.10	185	150	406
174	埴輪集積地	石見	64.29	0.69	19.55	6.47	0.09	1.73	1.26	3.26	2.32	0.13	214	213	525
175	埴輪集積地	石見	62.69	0.87	21.89	6.77	0.08	1.87	0.72	2.77	1.99	0.11	187	120	510
176	埴輪集積地	石見	62.56	0.78	22.56	6.17	0.05	1.89	0.79	2.66	2.25	0.07	232	131	451
177	埴輪集積地	石見	60.86	0.90	23.34	6.65	0.07	2.09	0.75	2.91	2.14	0.08	191	122	461
178	埴輪集積地	石見	63.40	0.78	21.70	5.93	0.05	1.81	0.76	3.01	2.22	0.10	235	150	453
179	埴輪集積地	形象	63.36	0.85	21.21	6.62	0.08	1.96	0.73	2.86	1.99	0.10	224	131	489
180	埴輪集積地	形象	61.91	0.67	20.75	5.70	0.07	2.36	0.71	5.38	2.01	0.09	201	112	402
181	埴輪集積地	形象	63.15	0.89	21.53	6.69	0.07	1.99	0.76	2.54	2.09	0.10	205	146	419
182	埴輪集積地	形象	65.85	0.90	19.71	6.31	0.07	1.87	0.49	2.16	2.21	0.12	218	126	418
183	埴輪集積地	形象	63.28	0.80	21.53	6.85	0.07	1.98	0.73	2.49	1.99	0.09	220	132	479
184	埴輪集積地	陶棺	62.04	1.12	21.68	8.03	0.10	1.89	0.39	2.54	1.94	0.12	246	101	392
185	埴輪集積地	陶棺	64.64	1.02	20.41	6.83	0.09	1.88	0.57	1.94	2.23	0.10	234	144	420
186	埴輪集積地	陶棺	63.56	1.07	22.12	6.62	0.09	1.96	0.45	2.02	1.82	0.09	162	119	412
187	埴輪集積地	陶棺	61.29	1.15	22.33	7.73	0.11	2.19	0.39	3.03	1.52	0.06	163	83	441
188	埴輪集積地	陶棺	62.03	0.62	20.24	5.46	0.07	2.58	0.71	5.83	2.09	0.10	204	110	387
189	埴輪集積地	陶棺	62.85	0.75	21.44	6.32	0.06	2.01	0.70	3.07	2.30	0.07	221	135	457
190	埴輪集積地	陶棺	64.79	0.86	20.86	6.61	0.08	1.75	0.76	1.87	2.12	0.12	217	118	505
191	埴輪集積地	陶棺	62.68	0.76	22.71	6.12	0.06	1.99	0.74	2.48	2.11	0.15	206	135	422
192	埴輪集積地	陶棺	61.39	0.85	23.18	6.51	0.07	1.87	0.78	2.71	2.28	0.08	201	141	428
193	埴輪集積地	陶棺	61.76	0.92	22.60	6.74	0.08	1.81	0.74	2.53	2.54	0.08	243	162	417

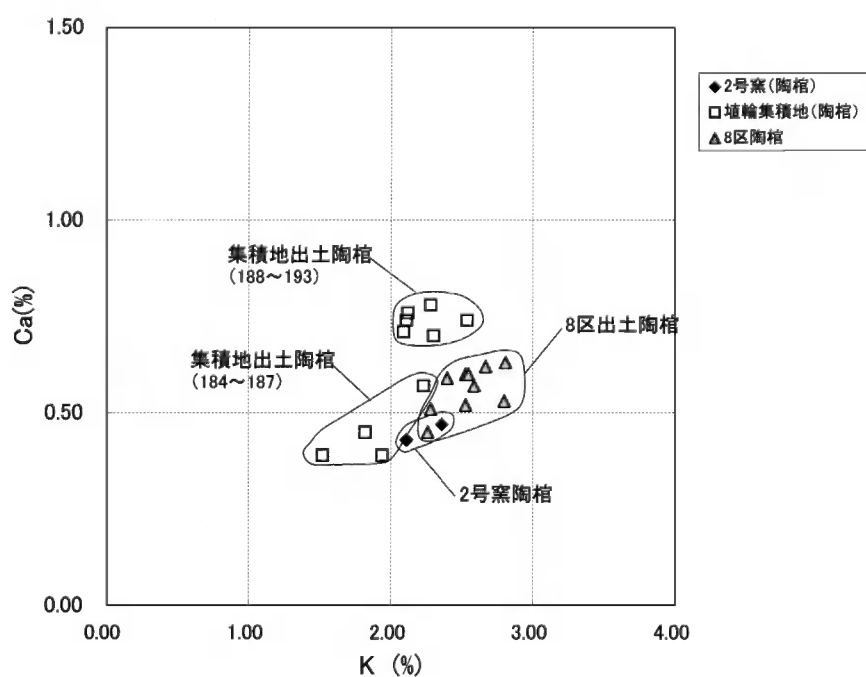
試料 番号	遺 跡	器 種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
194	5区土壙墓	円筒	64.41	0.65	20.50	6.18	0.07	1.78	0.78	2.76	2.47	0.11	220	150	305
195	5区土壙墓	円筒	65.08	0.79	20.14	7.10	0.08	1.60	0.72	1.83	2.33	0.10	229	138	310
196	5区土壙墓	円筒	63.28	0.76	21.43	6.98	0.09	1.91	0.77	2.23	2.34	0.08	187	156	308
197	5区土壙墓	円筒	62.31	0.78	22.06	6.97	0.09	1.99	0.72	2.51	2.22	0.10	186	161	356
198	5区土壙墓	円筒	63.27	0.79	21.44	7.05	0.09	1.86	0.73	2.16	2.33	0.10	209	136	307
199	5区土壙墓	円筒	63.51	0.80	20.60	7.38	0.09	1.73	0.71	2.30	2.43	0.15	233	145	341
200	5区土壙墓	円筒	63.68	0.78	20.20	7.40	0.07	1.68	0.72	2.70	2.43	0.13	231	152	327
201	5区土壙墓	円筒	63.37	0.75	20.60	7.02	0.10	1.99	0.71	3.04	2.03	0.13	199	136	356
202	5区土壙墓	円筒	64.10	0.75	20.01	6.95	0.08	1.90	0.75	2.57	2.55	0.16	208	162	304
203	5区土壙墓	円筒	63.88	0.79	20.45	7.44	0.09	1.65	0.71	2.09	2.50	0.11	228	158	335
204	8区陶棺	陶棺	64.45	0.99	21.91	5.15	0.06	1.93	0.45	2.53	2.26	0.11	178	90	250
205	8区陶棺	陶棺	67.63	0.71	19.96	4.94	0.06	1.74	0.62	1.72	2.67	0.06	260	136	327
206	8区陶棺	陶棺	67.06	0.78	19.38	5.03	0.05	1.61	0.57	2.61	2.59	0.12	243	119	282
207	8区陶棺	陶棺	66.19	0.71	20.25	4.97	0.06	1.82	0.53	2.26	2.80	0.14	221	125	264
208	8区陶棺	陶棺	67.35	0.68	18.91	4.59	0.05	1.86	0.59	3.23	2.40	0.16	232	108	255
209	8区陶棺	陶棺	67.41	0.72	19.02	4.76	0.05	1.69	0.52	3.01	2.53	0.06	221	117	289
210	8区陶棺	陶棺	68.02	0.66	18.53	4.39	0.06	1.78	0.60	3.06	2.53	0.12	204	99	257
211	8区陶棺	陶棺	66.16	0.88	20.15	4.98	0.06	1.74	0.51	2.97	2.28	0.12	216	104	256
212	8区陶棺	陶棺	67.48	0.71	19.17	5.19	0.06	1.75	0.63	1.91	2.81	0.10	220	117	279
213	8区陶棺	陶棺	69.21	0.67	17.99	4.93	0.05	1.55	0.60	2.12	2.55	0.11	219	117	299
214	弥土古墳	円筒	67.31	0.98	17.94	6.20	0.08	1.72	0.58	2.62	2.33	0.05	218	126	358
215	弥土古墳	円筒	62.35	0.91	20.27	9.05	0.13	1.77	0.65	2.16	2.47	0.05	246	154	364
216	弥土古墳	円筒	67.93	0.94	18.29	5.87	0.09	1.58	0.83	1.76	2.43	0.10	229	174	434
217	弥土古墳	円筒	69.05	0.94	17.43	5.83	0.07	1.60	0.85	1.52	2.49	0.07	205	169	439
218	弥土古墳	円筒	62.21	0.82	20.72	9.10	0.12	1.60	0.62	1.96	2.40	0.09	272	138	397
219	弥土古墳	円筒	62.02	0.84	20.91	8.97	0.13	1.68	0.62	2.19	2.38	0.06	229	136	364
220	弥土古墳	円筒	61.44	0.87	21.39	8.92	0.12	1.79	0.64	2.14	2.40	0.03	239	143	368
221	弥土古墳	円筒	61.96	0.80	21.44	8.44	0.09	1.81	0.69	2.08	2.36	0.07	229	160	343
222	弥土古墳	円筒	62.17	0.87	19.89	9.61	0.13	1.72	0.64	2.04	2.54	0.06	256	141	412
223	弥土古墳	円筒	66.14	0.86	19.02	6.16	0.10	1.76	0.52	2.61	2.39	0.14	270	117	338
224	可真丸山古墳	円筒	66.25	0.80	20.46	6.01	0.06	1.77	0.71	1.40	2.22	0.15	248	129	432
225	可真丸山古墳	円筒	64.60	0.76	20.16	6.53	0.07	1.84	0.62	2.63	2.47	0.11	234	114	364
226	可真丸山古墳	円筒	61.94	0.87	22.24	7.64	0.08	1.80	0.66	2.22	2.25	0.08	255	121	370
227	可真丸山古墳	円筒	61.48	0.83	20.45	9.73	0.12	1.84	0.67	2.74	1.83	0.06	252	127	456
228	可真丸山古墳	形象	61.55	0.83	22.72	7.32	0.07	1.84	0.66	2.46	2.35	0.12	243	143	381
229	前内池下	円筒	64.99	0.84	20.23	6.57	0.08	1.87	0.93	2.21	1.97	0.10	201	156	474
230	前内池下	円筒	66.41	0.67	18.30	6.71	0.11	1.76	0.85	2.44	2.32	0.13	245	156	411
231	前内池下	円筒	65.15	0.73	19.45	6.11	0.06	1.83	0.92	3.43	2.01	0.10	205	160	521
232	前内池下	円筒	65.44	0.73	19.40	6.81	0.08	1.79	0.98	2.32	2.22	0.03	215	161	453
233	前内池下	円筒	65.18	0.72	17.99	8.74	0.10	1.73	1.01	1.99	2.24	0.08	228	177	584
234	前内池下	円筒	66.08	0.73	19.03	6.12	0.11	1.78	0.93	2.64	2.19	0.11	226	173	479
235	前内池下	円筒	65.39	0.73	19.54	6.21	0.08	1.85	0.96	2.78	2.10	0.13	219	159	446
236	前内池下	円筒	64.21	0.81	19.65	7.20	0.07	1.83	0.85	3.14	1.94	0.13	238	154	408



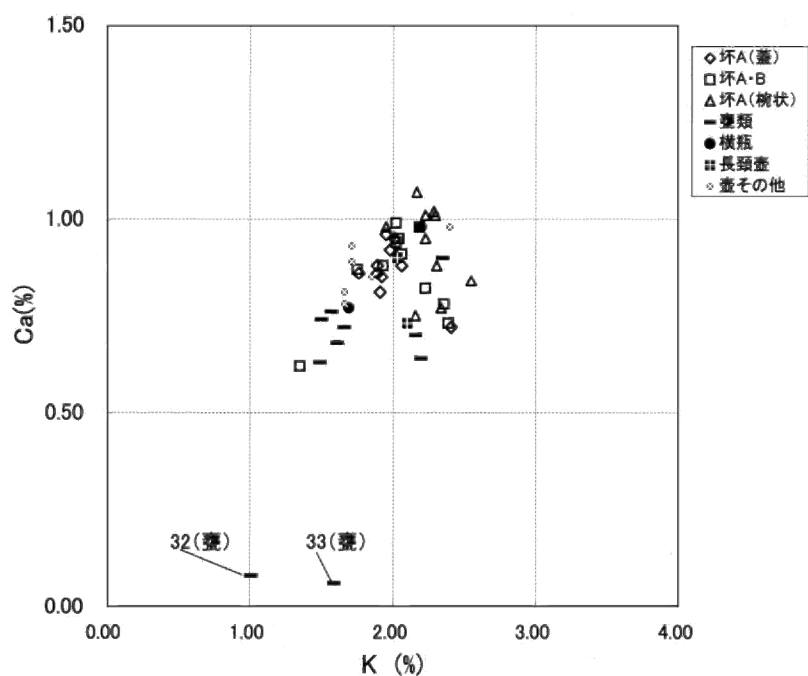
第1図 土井遺跡出土埴輪・陶棺・須恵器・瓦の種別比較 (K-Ca散布図)



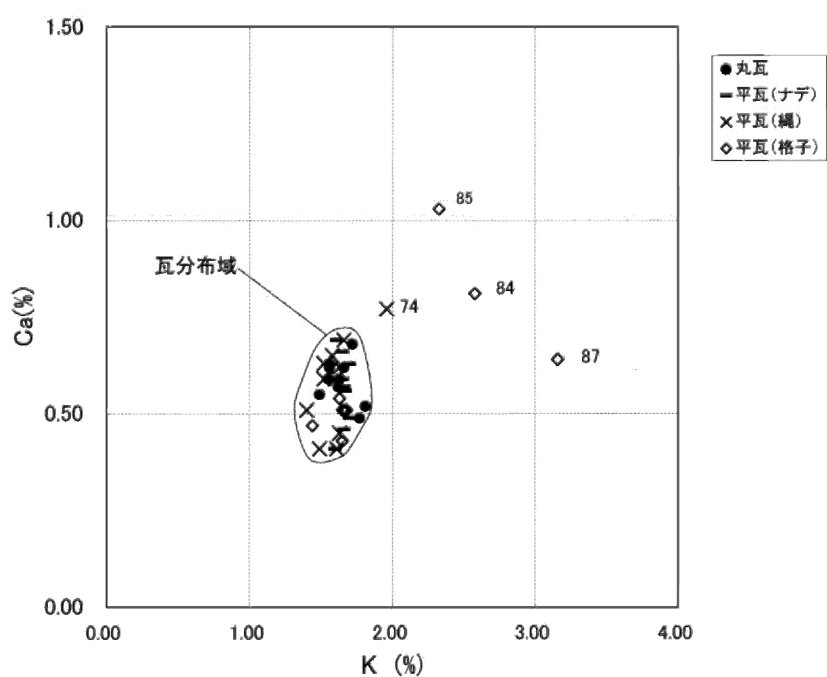
第2図 土井遺跡出土埴輪の地点・器種別比較 (K-Ca散布図)



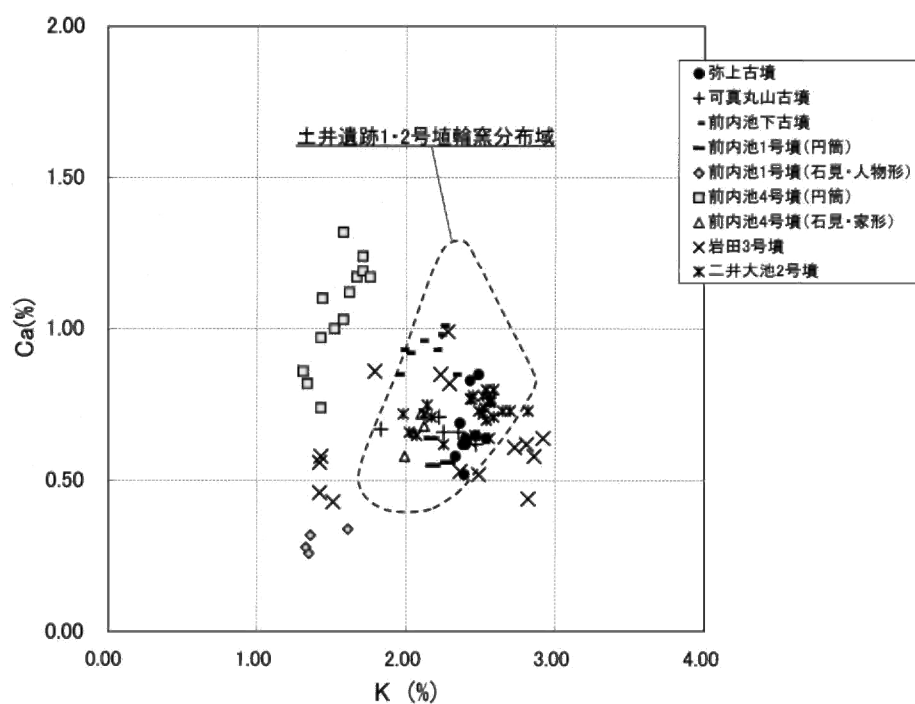
第3図 土井遺跡出土陶棺の地区別比較 (K-Ca散布図)



第4図 土井遺跡3号窯出土須恵器の器種別比較 (K-Ca散布図)



第5図 土井遺跡3号窯出土瓦の技法別比較 (K-Ca散布図)



第6図 遺跡周辺古墳出土埴輪と土井遺跡埴輪窯との比較 (K-Ca散布図)

附載3 土井遺跡の1, 2, 3号窯の地磁気年代

島根大学総合理工学部
時枝 克安 伊達 昌洋

1 地磁気年代測定法の仕組

地磁気には伏角と偏角で決まる方向、および、強度の要素があるが、それらの要素の全てが変動している。この地磁気の変動は変化速度が速いものから遅いものまで様々な成分の和として表すことができるが、これらの成分の中でも、10年以上経過してはじめて変化したことが認識できるような緩慢な変動を地磁気永年変化と呼んでいる。地磁気年代法で時計の働きをするのは、地磁気の方角の永年変化であり、地磁気の方角と年代の関係を表す変動曲線を利用して、焼土の焼けた年代を過去の地磁気の方角から読みとろうとする。しかし、これが実現するためには、焼土が焼けたときの地磁気の方角が何かに記録されており、それを測定できなくては目的を果たせない。焼土の焼けたときの地磁気の方角は焼土の熱残留磁気として記録され保存されている。地磁気年代を求める手順を述べると、まず、焼土の熱残留磁気の測定によって、焼土の被熱時の地磁気の方角を求め、次に、焼土の存在する地域の地磁気永年変化曲線上で、求めた方向に近い点を決定し、その点の年代目盛りを読みとることになる。

地磁気のなかで、土壌、粘土、砂、岩石等が焼けると、これらは熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の担い手は磁鉄鉱等の磁性粒子であり、熱残留磁気の方角は、焼けたときの地磁気の方角に一致し、しかも、磁性粒子のキュリー温度（磁鉄鉱では575℃）以上に再加熱されないかぎり非常に安定であり、数万年以上時間が経過しても変化しない。焼土がキュリー温度以上に再加熱されたときには、それまで保持されていた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、再加熱時の地磁気の方角を向いた新しい残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気の方角を正しく記憶している。それゆえ、年代既知の焼土の熱残留磁気データを蓄積して、あらかじめ、過去の地磁気の方角が時間とともにどのように変化したかを示すグラフを作成しておけば、このグラフを「時計」の目盛りとして、焼土の最終焼成年代を推定できる。地磁気年代法の「時計」では地磁気の方角が「針」に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の「針」の位置を記憶している。日本では、西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線が広岡によってかなり詳しく測定されているので、ここで説明した方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代法の詳細については広岡、および、中島等による解説^{1, 2)}が参考になる。

2 地磁気年代測定法の問題点

第一に、地磁気の方角は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所の標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることが挙げられる。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土のある地域の標準曲線を使用しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方角を比較する必要がある。今までの中国地域の調査では、西南日

本の標準曲線から求めた地磁気年代は、ほとんどの場合、遺物の考古学年代と整合する。したがって、土井遺跡の窯について、西南日本の標準曲線を使用して地磁気年代を決定しても問題はない。

第二に、地磁気年代測定法は地磁気変動という物理現象を利用しているので、地磁気年代は土器編年に左右されないと思われがちであるが、これは誤解であり、地磁気年代と土器編年の間には密接な関係がある。すなわち、少数の年代定点をのぞくと、標準曲線上のほとんどの年代目盛りは土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から遠く離れた地磁気年代は土器編年の影響を強く受けており、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代も訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代はこのような相互依存から独立できるが、現状では年代定点が少数なのでやむをえない。しかし、地磁気年代測定法は、地磁気を媒介とする対比のおかげで、焼土跡に遺物がない場合でも有効である点、相互に隔絶した土器編年を対比できる点で独自の優れた性格をもっている。

3. 遺構と試料

土井遺跡（岡山県赤磐郡熊山町大字可真上）では、風化した花崗岩の岩盤からなる西落ちの急勾配の斜面に1, 2号窯が並んで、また、これらの斜め上方の斜面に、かなり離れて、3号窯が検出された。

1号窯の焚口付近、および、2号窯の焚口と窯尻は江戸時代の墓穴で攪乱されているため、正確な長さは分からないが、1号窯は長さ約5m、最大幅約1m、勾配（焚口22° 中央部25° 窯尻26°）、主軸方位はN87Eである。また、2号窯は長さ約5m、最大幅約1.3m、勾配（焚口12° 中央部28° 窯尻26°）、主軸方位はN87Eである。1号窯からは埴輪（円筒）が、2号窯からは埴輪（円筒、形象）と陶棺（土師質、亀甲型）の破片が出土している。埴輪と陶棺がともに同じ窯から出土した例はこれが初めてである。窯の中から出土した須恵器片は6世紀中頃のもものと推定されている。また、互いに隣接する1, 2号窯の灰原の重なり合いには、江戸時代の墓穴による攪乱のために、確実な切り合い関係が認められないが、堆積状況から1号窯の方が2号窯よりも古いと推定されている。

3号窯は瓦を焼いた地下式登り窯であり、焼成室の奥は6段の階段となり、長さ約6m、最大幅約1.3m、階段手前の斜面の勾配は35°、主軸方位はS30Wである。

地磁気年代を推定するための定方位試料採取について、1号窯では焚口から5ヶ、中央部から8ヶ、窯尻から7ヶ、合計20ヶ；2号窯では焚口から8ヶ、中央部から8ヶ、窯尻から5ヶ、合計21ヶ；3号窯では、階段と煙道の床面から合計20ヶを採取した。定方位試料の採取法としては、整形した焼土塊に樹脂製ケース（24×24×24mm）を被せて隙間を石膏で充填し、ケース上面の走行と傾斜をクリノコンパスで測定する仕方をとっている。表1に、窯のデータをまとめる。なお、主軸方位は焚口から窯尻を見る方位とする。

表1 土井遺跡の1, 2, 3号窯の規模、主軸方位、床面勾配、試料数、床面の焼成度

遺 構	残存長/最大幅/主軸方位	床面勾配 焚口/中央/窯尻	試料数 焚口/中央/窯尻	床面の焼成度
1号窯	～5m/1m/N87E	22/25/26度	5/8/7 合計20ヶ	良好：焚口、中央 低い：窯尻
2号窯	～5m/1.3m/S88E	12/28/26度	8/8/5 合計21ヶ	良好：焚口 低い：中央、窯尻
3号窯	～6m/1.3m/S30E	階段手前斜面35度	階段・煙道床面 合計20ヶ	良好：階段、煙道床面

4. 測定結果

試料の自然残留磁気をスピナー磁力計（Schonstedt社 Model SSM-1A）で測定した。なお、3号窯については、残留磁気の平均方向と地磁気年代のみを表に記載し、測定結果の記述と図の標示を省略する。

[残留磁気の強度]

図1に示すように、自然残留磁気の強度は1号窯と2号窯ともに 10^{-6} ～ 10^{-4} emu/gにわたり、最強の 10^{-4} emu/gのレベルの試料の割合は、1号窯では35%、2号窯では57%となっている。残留磁気強度と試料位置の関係を調べてみると、焚口付近の強度が最も強く、窯尻に向かうとともに弱くなる傾向があり、窯尻付近では最も弱い 10^{-6} emu/gのレベルになる。一般に、磁鉄鉱などの磁性鉱物の一定量を含む土が加熱された場合には、加熱温度が大きいほど、熱残留磁気の強度は大きくなり、残留磁気強度の大小は加熱温度の高低に対応する。須恵器窯では、焚口付近よりも窯尻に近い部分の方が焼成度が高く、残留磁気強度も大きい。そして、残留磁気強度は 10^{-4} ～ 10^{-3} emu/gの範囲に分布する。これに対して、はにわ窯では、焚口付近は燃焼室として使用され、それより奥の部分は製品を並べる焼成室として使用される。そして、製品である埴輪の焼成度は須恵器よりも劣る。これらの事情は、はにわ窯の残留磁気の強度分布に明確に反映されているのが分かる。

[残留磁気の方角]

図2に示すように、自然残留磁気の方角には比較的まとまっているものと分散しているものがある。残留磁気の方角の集中度をさらに高めるために交流消磁を行った。交流消磁というのは、試料を交流磁場中で回転させながら、磁場強度を適当な設定値から零になるまで滑らかに減少させて、磁場の設定値よりも弱い抗磁力をもつ磁気成分を消去する方法である。実際には、1号窯については消磁磁場を10,20mT、2号窯では消磁磁場を10,15mTの順序で段階的に大きくして交流消磁を行った。この結果、どちらの窯についても消磁磁場が10mTで残留磁気の方角が最もよくまとまり、残留磁気の強度は交流消磁以前の値の約60%まで減少した。図3に交流消磁（10mT）の結果を示す。結局、1、2号窯について、交流消磁（10mT）の結果の各々から小円内のさらに揃ったデータのみを選び、これらの平均方向を元にして地磁気年代を求めることにする。表2に各須恵域窯の小円内のデータから計算された残留磁気の方角と誤差の目安となる数値を示す。

表2 土井遺跡のはにわ窯の残留磁気の方角

遺構	Im(度)	Dm(度)	k	α_{95} (度)	n/N	消磁磁場(mT)
1号窯	45.74	-16.65	2267	0.91	12/20	10
2号窯	50.61	-10.85	1771	1.32	8/21	10
3号窯	55.30	-12.20	1407	1.16	12/20	10

Im：平均伏角 k：Fisherの信頼度係数 n/N：採用試料数/採取試料数
Dm：平均偏角 α_{95} ：95%誤差角

5. 土井遺跡の1, 2, 3号窯の地磁気年代

図4は土井遺跡の1, 2号窯の残留磁気の平均方向（+印）と誤差の範囲（点線の楕円）および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線³⁾の一部である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向に近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとる。標準曲線が狭い範囲で交錯しているため、各窯について複数の地磁気年代候補値が可能になるが、窯から出土した土器が6世紀中頃と推定されているので、この年代に近い値を選ぶ。このようにして得られた地磁気年代の候補値は、1号窯：AD540±10、2号窯：AD555±15、3号窯（図4には記載していない）：AD725±15となる。

表3 土井遺跡の1, 2, 3号窯の地磁気年代と土器年代

遺 構	地磁気年代	土器年代
1号窯	AD540±10	6世紀中頃
2号窯	AD555±15	
3号窯	AD725±15	?

6. 考 察

地盤は堅固な花崗岩の岩盤であり、3基の窯が最終焼成後に傾いた形跡は認められない。また、交流消磁（10mT）で残留磁気の強度が約60%まで減少したことにより、残留磁気に対する2次的磁化による磁氣的汚染はほとんど除去されたと判断できる。したがって、地磁気年代を求める元となった残留磁気の方法は、窯の創業時の地磁気の方法と正しく一致している。一方、得られた地磁気年代は土器年代と整合しており、1号窯と2号窯の地磁気年代の順序も灰原の堆積状況から推定される年代の順序に合致している。これらの関係は、ここで得られた地磁気年代の信頼性が高いことを支持している。

最後に、試料採取等でお世話になった岡山県古代吉備文化財センターの光永真一氏と重根弘和氏に感謝いたします。

註)

- (1) 広岡 公夫(1995) 「考古資料分析法」、考古学ライブラリー、65、
田口勇、齊藤努編、ニュー・サイエンス社、100-101
- (2) 中島 正志、夏原 信義 「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9
ニュー・サイエンス社
- (3) 広岡 公夫(1978) 考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向
第4紀研究 15、200-203

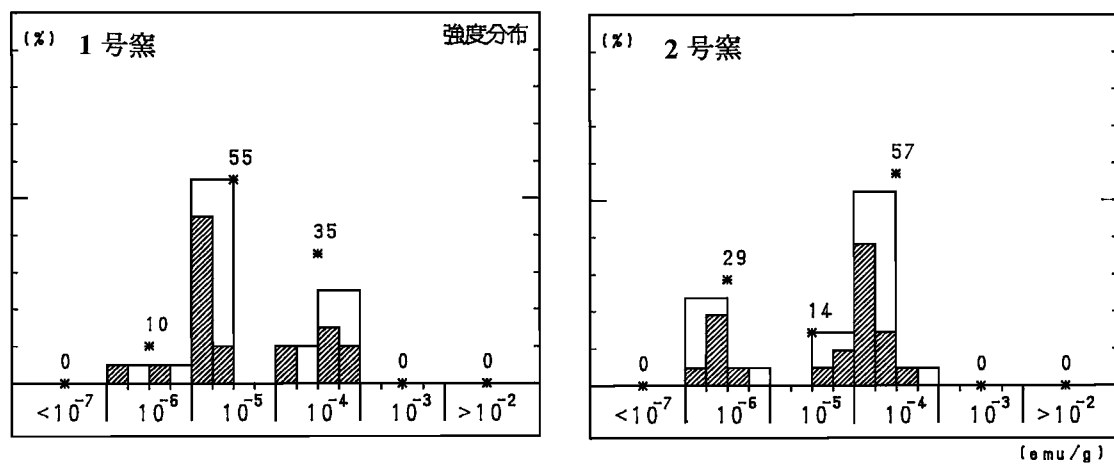


図1 土井遺跡のはにわ窯の自然残留磁気強度の分布

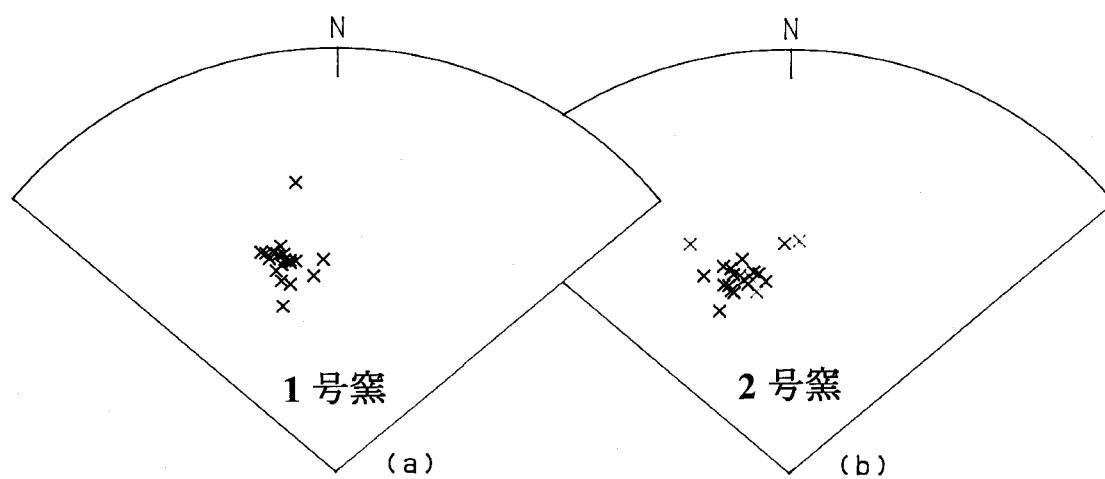


図2 土井遺跡のはにわ窯の自然残留磁気の方

(a) 1号窯 (b) 2号窯

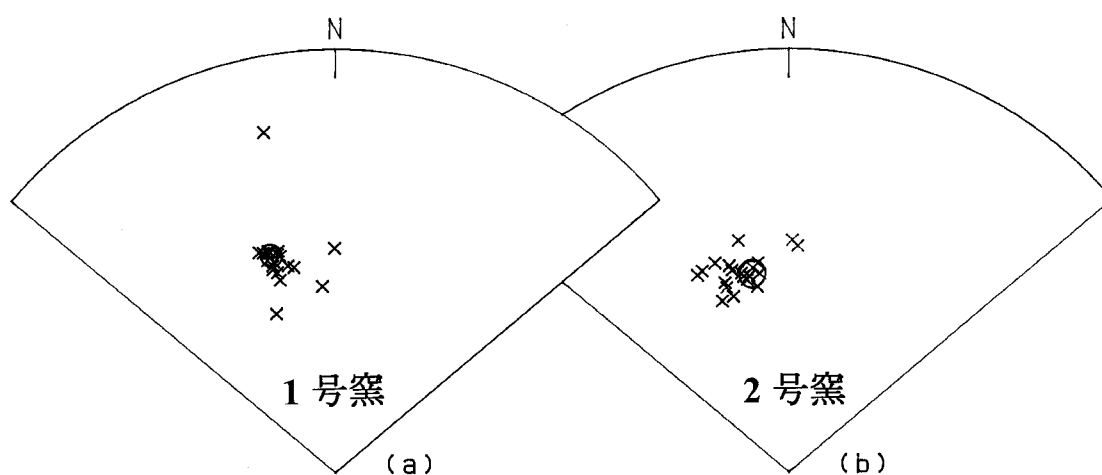


図3 土井遺跡のはにわ窯の交流消磁（10mT）後の残留磁気の方
 (a) 1号窯 (b) 2号窯
 小円内のデータを元にして地磁気年代を求める。

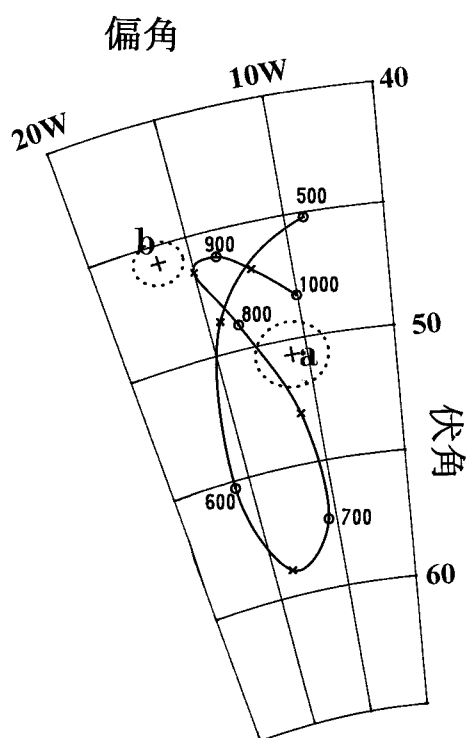


図4 土井遺跡のはにわ窯の残留磁気の平均方向（+印）と誤差の範囲（点線の楕円）、および、
 広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線の一部
 a：1号窯 b：2号窯

附載 4 土井遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

土井遺跡の発掘調査では、弥生時代中期の段上遺構、古墳時代後期の埴輪窯跡、古代の瓦窯・竪穴状遺構等の各時期の遺構が確認されている。特に埴輪窯跡は県内で初の検出例であり、埴輪生産のあり方を考える上で重要である。そこで、今回の分析調査では、各時期の遺構から検出された炭化材や炭化種実について、種類同定を行い、窯跡における燃料材の樹種など、各時期の木材の利用状況に関する情報を得る。また、各時期の遺構出土炭化物について、放射性炭素年代測定を実施し、年代観に関する情報も得る。

1. 試料

分析試料は、各遺構から出土した炭化物24点（試料番号1-24）である。放射性炭素年代測定は、試料番号7・9・15・17・22の5点について実施する。各試料の詳細は測定結果ともに表1に記した。また、炭化物同定は、試料番号1・2、炭化材同定は試料3～24について実施した。これら炭化物・炭化材試料に関する詳細は結果と合わせて表3に示した。なお、年代測定試料のうち、試料15の炭化材の個体はいずれも小さく、測定用と樹種同定用に分離することができなかったため、同一個体について樹種同定を実施することができなかった。それ以外の4点については樹種同定用の材が採取できたので、測定用資料についても樹種同定を実施した。

2. 分析方法

(1)放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

(2)樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

(3)種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川,1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか,2000）等と比較し、種類を同定し、個数を数えた。分析後の植物遺体は、種類毎に乾燥剤と共にビンに入れ、保存する。

表 1. 放射性炭素年代測定結果

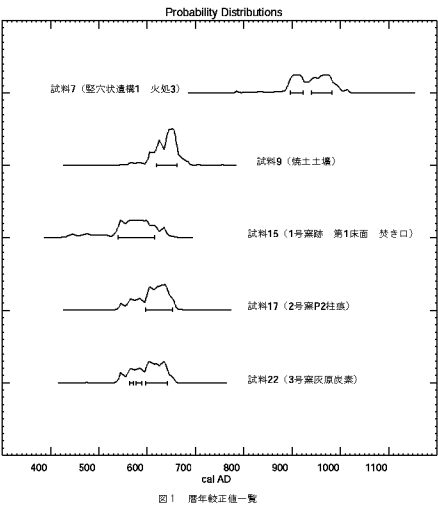
番号	地区	遺構	時代	出土位置	試料の質	補正年代BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代BP	Code No.
7	II区	土壇20	8世紀		炭化材クリ	1110±40	-21.85±0.69	1050±30	IAAA-31376
9	PI区	土壇9	6世紀		炭化材クリ	1400±40	-26.62±0.87	1430±30	IAAA-31377
15	FI区	1号窯	6世紀	第1床面 焚き口	炭化材	1490±40	-24.00±1.04	1480±30	IAAA-31375
17	FI区	2号窯	6世紀	P2柱痕	炭化材クリ	1450±30	-24.25±0.64	1430±30	IAAA-31378
22	PIQ区	3号窯	8世紀	3号窯 炭化材ケヤキ		1460±40	-25.46±0.64	1470±30	IAAA-31379

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表 2. 暦年較正結果

番号	地区	遺構	出土位置	時代	補正年代BP	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
7	II区	土壇20		8世紀	1105±34	cal AD 896-923 cal AD 940-982	cal BP 1054-1027 cal BP 1010-968	0.591			0.409
9	PI区	土壇9		6世紀	1403±35	cal AD 619-663	cal BP 1331-1287	1.000	IAAA-31377		
15	FI区	1号窯	第1床面 焚き口	6世紀	1493±36	cal AD 540 616	cal BP 1410 1334	1.000	IAAA-31375		
17	FI区	2号窯	P2柱痕	6世紀	1446±33	cal AD 597-652	cal BP 1353-1298	1.000	IAAA-31378		
22	PIQ区	3号窯	灰原 第2炭素	8世紀	1460±34	cal AD 564-572 cal AD 577-589 cal AD 597-642	cal BP 1386-1378 cal BP 1373-1361 cal BP 1353-1308	0.099 0.139 0.763	IAAA-31379		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。



3. 結 果

(1)放射性炭素年代測定

測定結果を表 1、暦年較正の結果を表 2 図 1 に示す。

炭化材試料の年代値は、土壇20出土の試料番号1が補正年代値で1110±40BPを示し、それ以外の土壇9・1号窯・2号窯・3号窯から出土した炭化材は1400～1490BPの5～6世紀頃に相当する値を示す。

(2)樹種同定

樹種同定結果を表 3 に示す。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら多数の小道管が集まって火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・コナラ属<根株> (*Quercus*) ブナ科

散孔材～放射孔材で、比較的径の大きな道管が単独で散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1-4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

- ・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小管管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-10細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

- ・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が顕著に認められる。

- ・アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外への移行は緩やかで、小管管は漸減しながら単独または2-6個が放射方向に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-30細胞高。

- ・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

試料は円柱状で、中空となる。横断面では維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。

(3)種実同定

結果を表3に示す。8区の陶棺 埋土中(試料番号1)は、栽培植物のモモ(*Prunus persica*

表3. 炭化物の同定結果

番号	地 区	遺 構	時 代	出土位置	試料名	樹 種
1	P区	竪穴住居2	弥生時代後期中頃	南西床面	種実遺体	モモ(核:内果皮)
2	J区	土壌墓3	古墳後期(6世紀後半)	埋土中	種実遺体	不明物質
3	R・F・G区	段状遺構群3	弥生時代中期	土坑1	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節 コナラ属<根株>
4	O区	段状遺構群1	弥生時代中期	炭散布範囲	炭化材	クリ
5	H区	土壌19	古代(8世紀)		炭化材	クリ
6	A区	土壌21	古代(8世紀)		炭化材	クリ
7	H区	土壌20	古代(8世紀) 古代(8世紀)		炭化材 14C試料	クリ クリ
8	H区	土壌18	古代(8世紀)		炭化材	クリ
9	P区	土壌9	古墳後期(6世紀後半)		炭化材 14C試料	クリ クリ
10	K区	竪穴住居1	弥生時代後期	如内	炭化材	コナラ属<根株>
11	K区	土壌12	古代(8世紀)	1層	炭化材	クリ
12	K区	土壌11	古代(8世紀)	2層	炭化材	クリ
13	K区	土壌13	古代(8世紀)		炭化材	クリ
14	F区	1号窯	古墳後期(6世紀後半)	第2床面下 焚き口	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
15	F区	1号窯	古墳後期(6世紀後半)	第1床面 焚き口	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節
16	F区	2号窯	古墳後期(6世紀後半)	P1 柱痕	炭化材	クリ アカメガシワ
17	F区	2号窯	古墳後期(6世紀後半)	P2 柱痕	炭化材 14C試料	クリ クリ
18	F区	2号窯	古墳後期(6世紀後半)	P2 柱痕	炭化材	クリ
19	P・Q区	3号窯	古代(8世紀初頭)	流土	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 イネ科タケ亜科
20	P・Q区	3号窯	古代(8世紀初頭)	最終床面焚き口	炭1(炭化材)	クリ
21	P・Q区	3号窯	古代(8世紀初頭)	天井崩落土	炭化材	クリ
22	P・Q区	3号窯	古代(8世紀初頭)	灰原第2炭層	炭化材 14C試料	クスノキ科 ケヤキ
23	P・Q区	3号窯	古代(8世紀初頭)	灰原第1炭層	炭化材	クスノキ科
24	P・Q区	3号窯	古代(8世紀初頭)	第1床面	炭化材	クリ

Batsch;バラ科サクラ属)の核に同定された。完全に炭化しており黒色を呈す。完形ならば広楕円形でやや偏平。先端部はやや尖り、一方の側面に縫合線が発達する。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。破片の大きさ12mm程度。内果皮は厚く硬く、表面には、縦に流れる不規則な線状の窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。一方、段状遺跡群5南西床面(試料番号2)は、果実や種子ではない物質であった。

4. 考 察

(1) 弥生時代中期から後期の炭化材について

弥生時代中期から後期の炭化材は、段状遺跡群や竪穴住居1から出土しており、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の幹材・コナラ属の根材、クリの幹材に同定された。クヌギ節は現在日本にクヌギ・アベマキの2種が存在し、いずれも暖温帯における二次林を構成する代表的な樹種である。また、コナラ属は落葉広葉樹のコナラ亜属と常緑広葉樹のアカガシ亜属があるが、ここでは樹種を特定することはできない。根材であったことから、遺跡近辺に分布していたことが示唆される。また、クリは落葉高木となる樹種であり、現在では暖温帯域におけるコナラやクヌギなどの二次林の構成種としても認められるが、主に暖温帯上部から冷温帯域の二次林において林冠を構成する要素として認められる。本地域における弥生時代頃の高木については情報が不足しているものの、今回確認された樹種が周辺植生を構成する要素であったことは充分考えられる。

竪穴住居2からは炭化したモモ核が出土した。落葉小高木のモモは、古くより栽培のため中国から持ち込まれた渡来種とされ、観賞用の他、果実や核の中にある仁(種子)などが食用、薬用等に広く利用される。モモの最も古い遺跡出土例は、縄文時代前期(伊木力遺跡)で、弥生～古墳時代以降になると多数の遺跡出土報告例がある(南木,1991;粉川,1988など)。モモは、近世以前には多くの産地や品種があったとされるが、日本古来のモモは小型(20g～75g)で堅かったため、ほとんどが消滅しており(柴田編,1958)、現在栽培されているモモは明治以降に渡来した品種であるため、遺跡出土のモモとの直接的な関連はないとされている。また、モモ核の形態について、厚くて丸く小型の核は古い形質を表し、新しいものほど扁平になるとされている(堀田,1980など)。遺跡出土のモモ核も、当初はこのような傾向があるとされた。しかし、出土報告例が増えるに従って、弥生時代以前の遺跡からも大型で扁平な核が検出されるなど、核の形態に関する時代変遷は混沌としてきた(南木,1991)。一方、金原(1992)は、布留遺跡出土のモモ核を形態別に分け、モモの渡来が1回ではなく時代を異にして複数回なされた可能性を指摘している。また、辻ほか(1999)は、長野県屋代遺跡群から出土したモモ核集団の出土地点と時代を検討し、古代を通して1ヶ所における形態の多様性を示し、複数の品種が継続的に持ち込まれるか栽培されていたことを示唆した。今回、出土したモモ核は1個体であり、炭化していることもあり、上述の形態に関する検討は難しいが、今後、本地域から出土するモモについても、形質学的な検討を行い、栽培等に関する評価を行う必要がある。

(2) 古墳時代後期の炭化物について

古墳時代後期(6世紀後半)の炭化材・炭化物は、埴輪窯跡である1号窯・2号窯、土壇9より出土したものである。埴輪窯跡出土炭化物の放射性炭素年代測定値は、補正年代値で1号窯跡の焚き口出土炭化材が 1490 ± 36 BP、2号窯跡のP2柱痕が 1446 ± 30 BPを示した。これらの年代値は、遺物から推定される時代観と同調する結果となっている。

1号窯炊き口出土炭化材の樹種は、第1床面がコナラ節、第2床面下がクヌギ節であった。コナラ節とクヌギ節は、いずれも高木となる落葉広葉樹であり、二次林を構成する要素でもある。材質はいずれも硬く、薪炭材として国産材の中でも特に優良な種類とされる（平井,1979）。焚き口出土の炭化材であることから、作業時の燃料材として利用されていたものに由来する可能性がある。

2号窯の上屋構造の構築材に由来する柱痕出土の炭化材は、P1柱痕がクリとアカメガシワの2種類、P2柱痕がクリ1種類に同定された。クリは重硬で強度や耐朽性に優れた材質を有していることから、構築材としては適材といえる。アカメガシワは伐採跡地等の陽地に先駆的に生育する種類であり、生長は早い、木材は軽く、強度や保存性も低いことから、柱材としてはクリより劣っている。P1柱痕において2種類の樹種が確認されたことについては、考古学的調査成果において、上屋の再構築が行われていることが推定されていることと同調する結果として興味深い。

窯跡以外の出土炭化材の樹種は、土壌9がクリであった。窯跡出土炭化材の多くがクリであったことから、当時は燃料材のほか、建物の構築材まで、クリが幅広く利用されていた可能性が示唆される。当時の遺跡周辺にクリが林分を形成していたかは、古植生が不明な現状において特定することはできないが、得られた種類のほとんどが二次林の構成要素であることは、二次林的な性格をもった林分が周辺に存在したことを示唆する。本遺跡が立地する丘陵地域は、古墳時代には多くの古墳が構築されており、丘陵部の植生が一時的にせよ、人為的影響を受けたものと思われる。また、窯作業に伴う燃料資源の消費も多かったと予測される。これら人間活動と植生との関係については今後の重要な課題であり、丘陵を開析する谷堆積物に関する古植物学的研究の実施により、より詳細な検討が行えるようになるものと思われる。

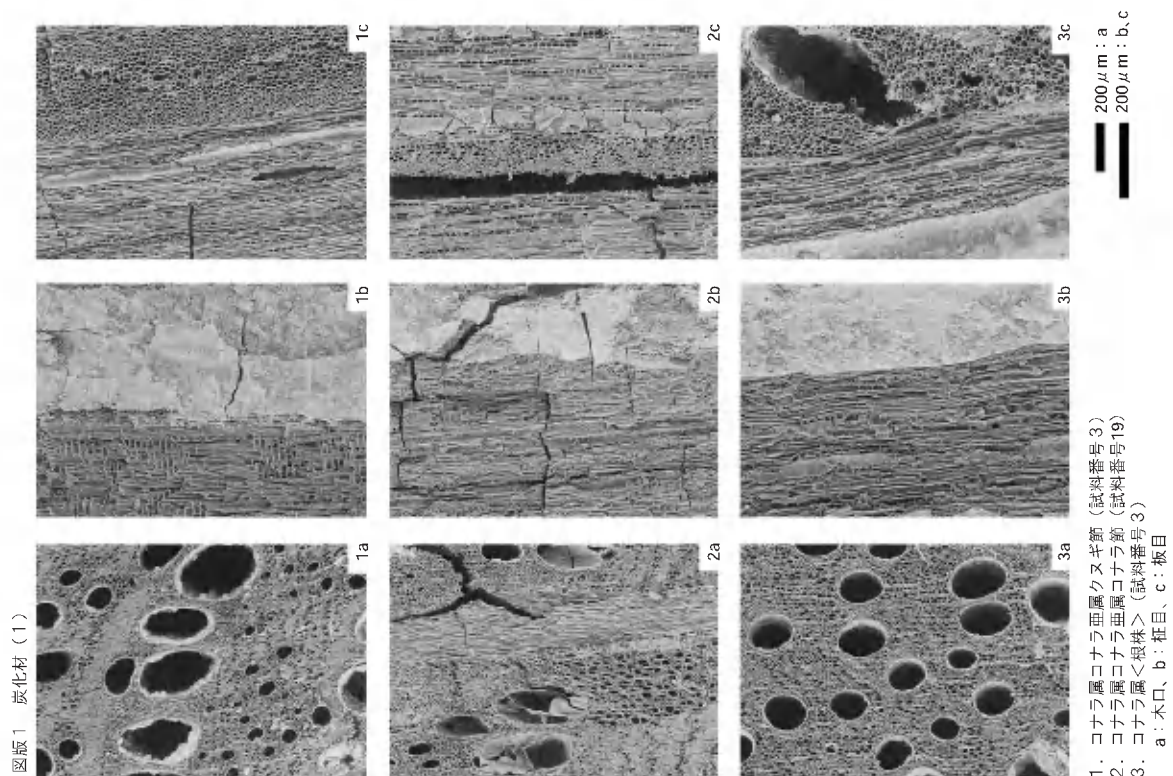
(3)古代（8世紀）の炭化材について

古代の瓦窯跡である3号窯出土炭化材は、灰原等からの出土であり燃料材に由来する可能性が高いものである。同定された樹種は、クリ・クスノキ科・ケヤキ・コナラ節・タケ亜科であり、少なくとも5種類が利用されていたことが推定される。ただし、灰原第2炭層土のケヤキの放射性炭素年代測定結果は、補正年代で 1460 ± 40 BPを示し、窯の時代観と矛盾する結果となっている。この原因としては、燃料材として利用されたケヤキ材が高樹齢の木材を利用していた可能性、年代値が上述の古墳時代の年代値に近似することから、古い時期の炭化物が何らかの過程で灰原堆積物中に取り込まれた可能性、などが考えられる。灰原堆積物の堆積状況など、発掘調査成果と合わせた慎重な評価が必要である。

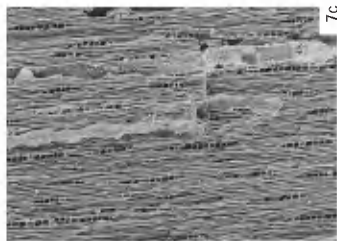
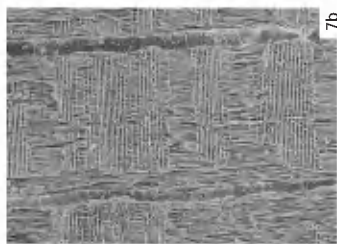
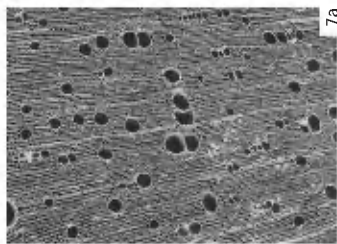
一方、窯跡以外の竪穴状遺構1の火処1、被熱遺構1、焼成土坑1から出土した炭化材は全てクリ材であった。本時期も古墳時代の時期と同様にクリ材が多用されている可能性がある。この点についても、古植生の成果を待って、再評価するようにしたい。

引用文献

- 平井 信二, 1979, 木の事典 第2巻. かなえ書房.
- 堀田 満, 1980, モモ. 植物の生活誌, 平凡社, 137-140.
- 石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 金原 正明・粉川 昭平・太田 三喜, 1992, モモ核を中心とする古代有用植物の変遷. 日本文化財科学会 第9回大会研究発表要旨集, 76-77.
- 粉川 昭平, 1988, 穀物以外の植物食. 弥生文化の研究 2 生業, 金関 恕・佐原 真編, 雄山閣, 112-115.
- 南木 睦彦, 1991, 栽培植物. 古墳時代の研究 4 生産と流通, 石野 博信・岩崎 卓也・河上 邦彦・白石 太郎編, 雄山閣, 165-174.
- 中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 辻 誠一郎・南木 睦彦・住田 雅和・辻 圭子・福田 美和, 1999, 屋代遺跡群の古代の大型植物遺体群. 更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)―古代1編―上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26, 市川 桂子・河西 克造ほか編, (財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター, 303-323.



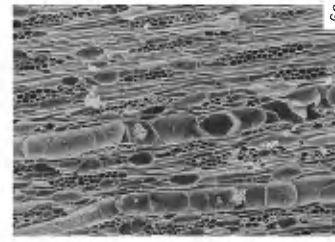
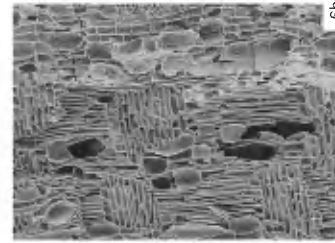
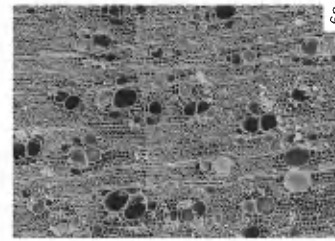
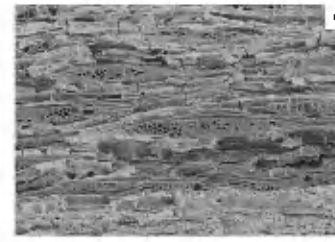
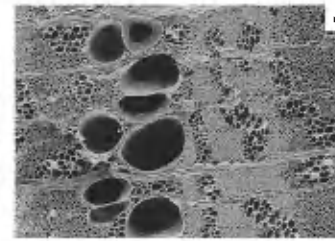
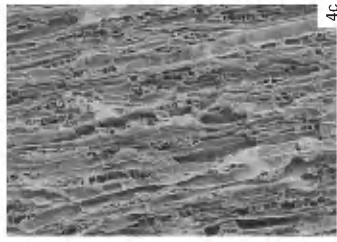
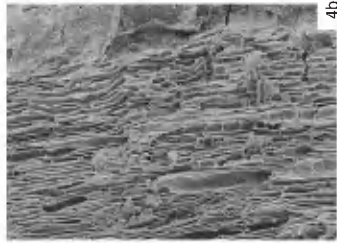
図版3 炭化材 (3)



7. アカメガシワ (試料番号16)
a : 本口、b : 柱目、c : 塚目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

図版2 炭化材 (2)



4. クリ (試料番号8)
2. ケヤキ (試料番号22)
3. クスノギ科 (試料番号22)
a : 本口、b : 柱目、c : 塚目

200 μ m : a
200 μ m : b, c



- 1 土井遺跡全景（北西から）
（上）
- 2 石蓮寺から見た
土井遺跡（北から）（右）



1 段状遺構群 4 (南西から)



2 段状遺構群 3 (北から)

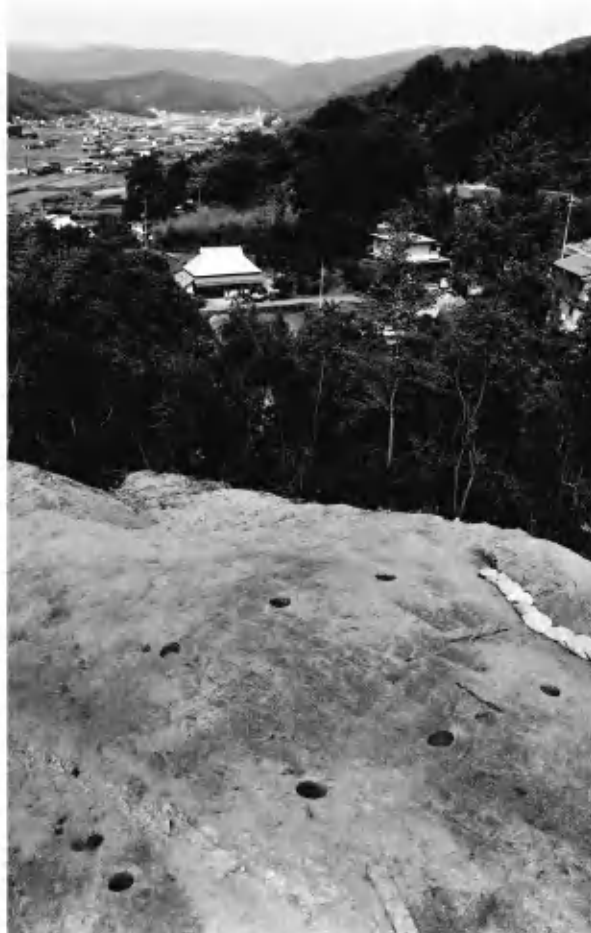


3 段状遺構群 1 (北から)

土井遺跡



1 竪穴住居 2 (南西から)



2 掘立柱建物 1 (南西から)



3 竪穴住居 3 (北東から)



4 箱式石棺 1 (北東から)(下)・2 (北東から)(上)



1 土壙墓 3 (北東から)



2 土壙墓 1 (北東から)



3 土壙墓 2 遺物出土状態 (西から)



1 1・2号窯 検出（南西から）



2 2号窯 焼土検出（西から）



3 1号窯 焼土検出（西から）



1 1号窯 埋土縦断面（南西から）



2 1号窯 最終床面遺物検出状態（南西から）



1 2号窯 埋土縦断面（南西から）



2 2号窯 最終床面遺物検出状態（南西から）



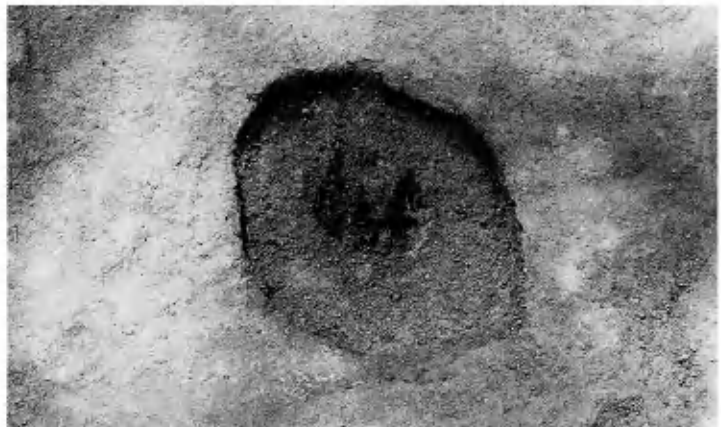
1 1・2号窯と埴輪集積地（南西から）



2 2号窯 最終床面遺物検出状態（西から）



3 1号窯 最終床面遺物検出状態（西から）



- 1 2号窯 完掘（南西から）（上）
- 2 2号窯 P2（西から・南から）（右）



- 1 「盾持ち人」出土状態
(南西から)(上)
- 2 埴輪集積地(南から)(左)



1 3号窯 最終床面遺物検出状態（北から）



2 3号窯 造成土断面（北から）



3 3号窯 第1床面遺物検出状態（北から）



4 3号窯 全景（北から）



1 墓1～17（南から）



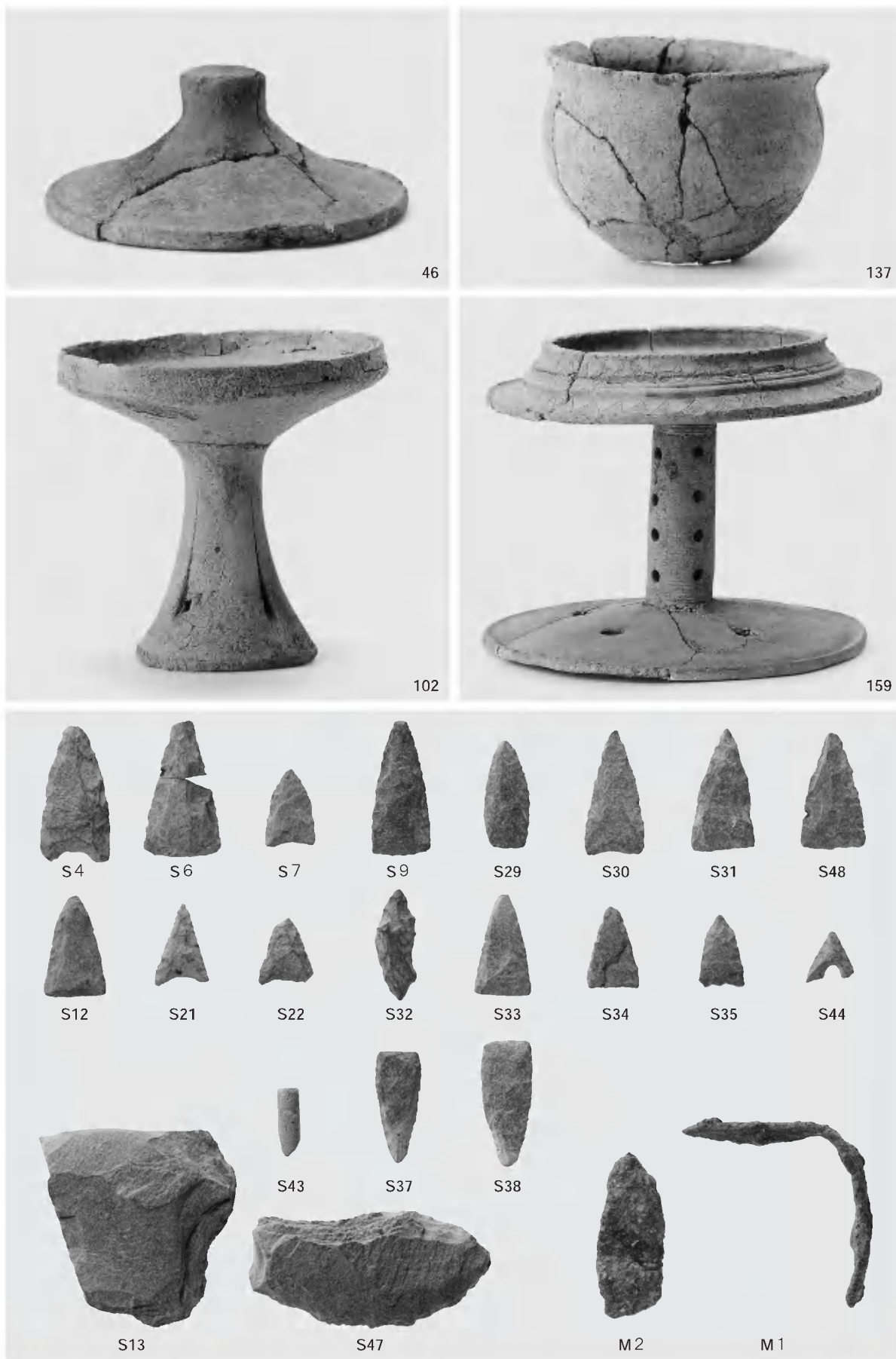
3 墓45（西から）



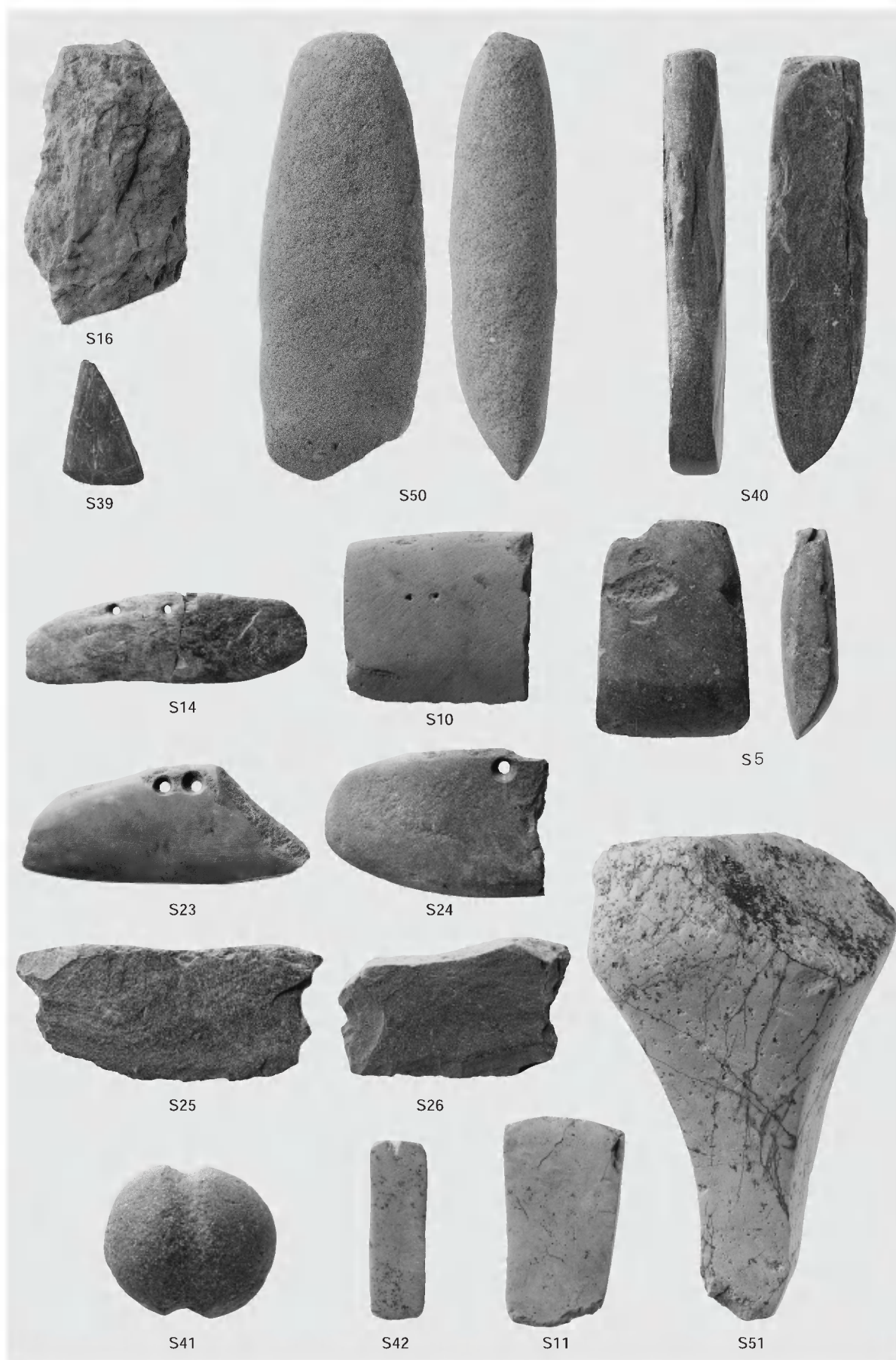
4 墓46（西から）



2 墓45～47（南から）



弥生土器・石器・鉄器















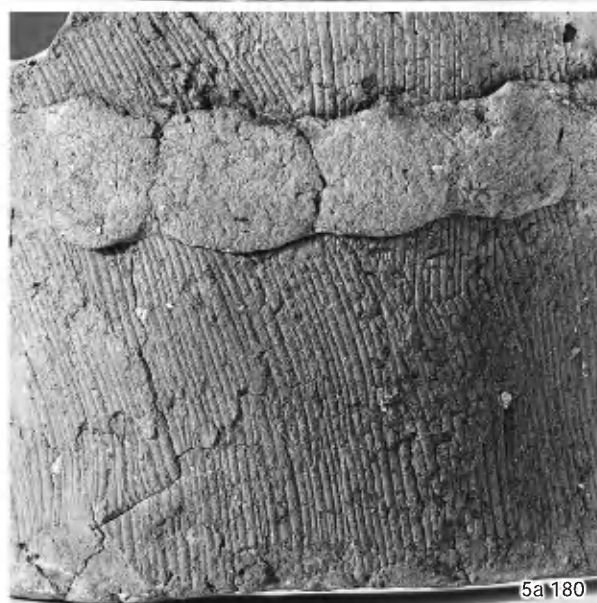
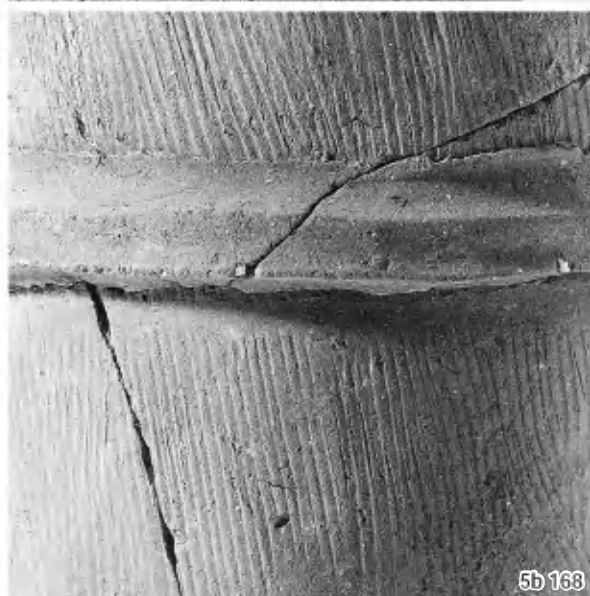






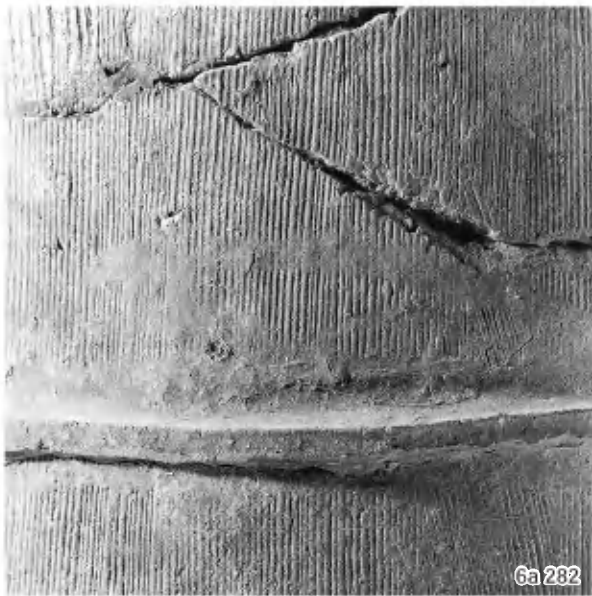














石見型盾形埴輪 216



石見型盾形埴輪 208



人物埴輪 333



陶棺 198



410 底面（内）

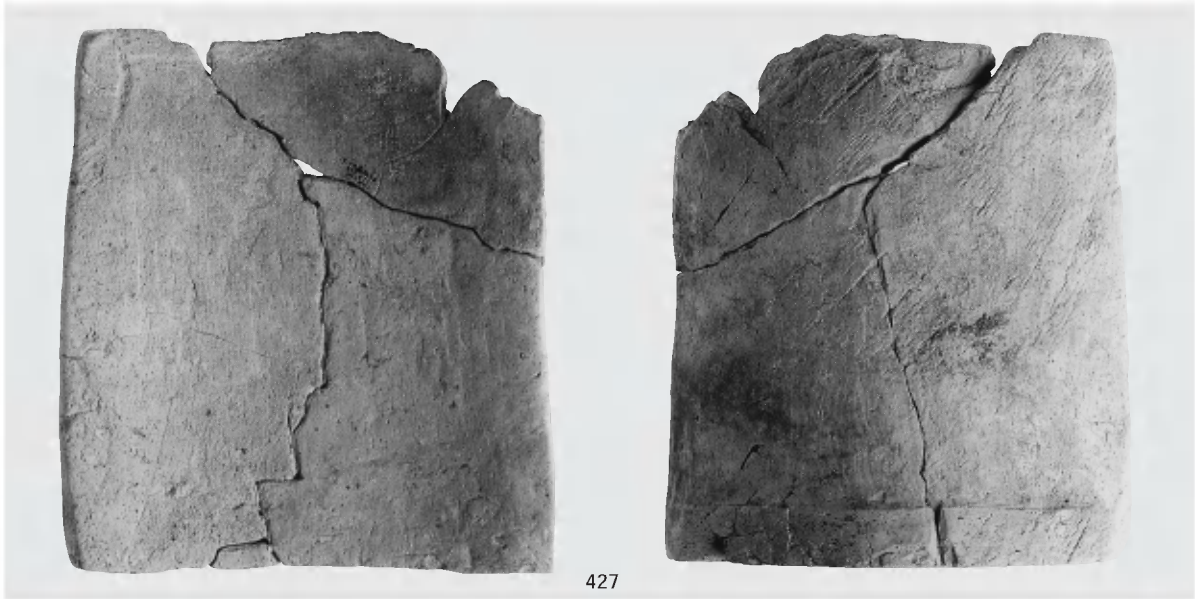


410 底面（外）



410 側面





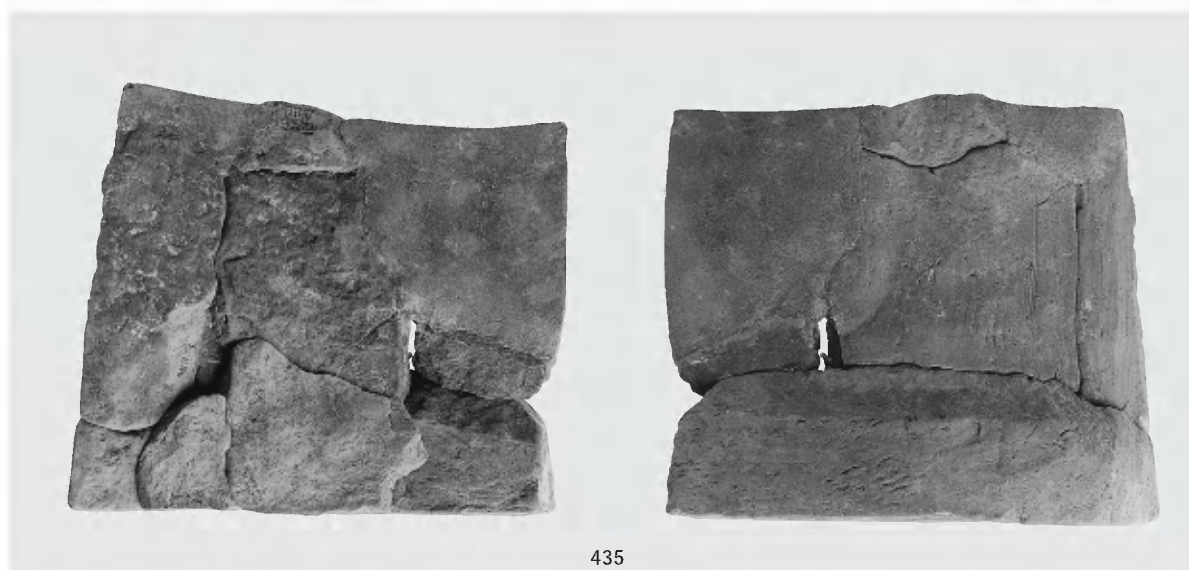
瓦②



430

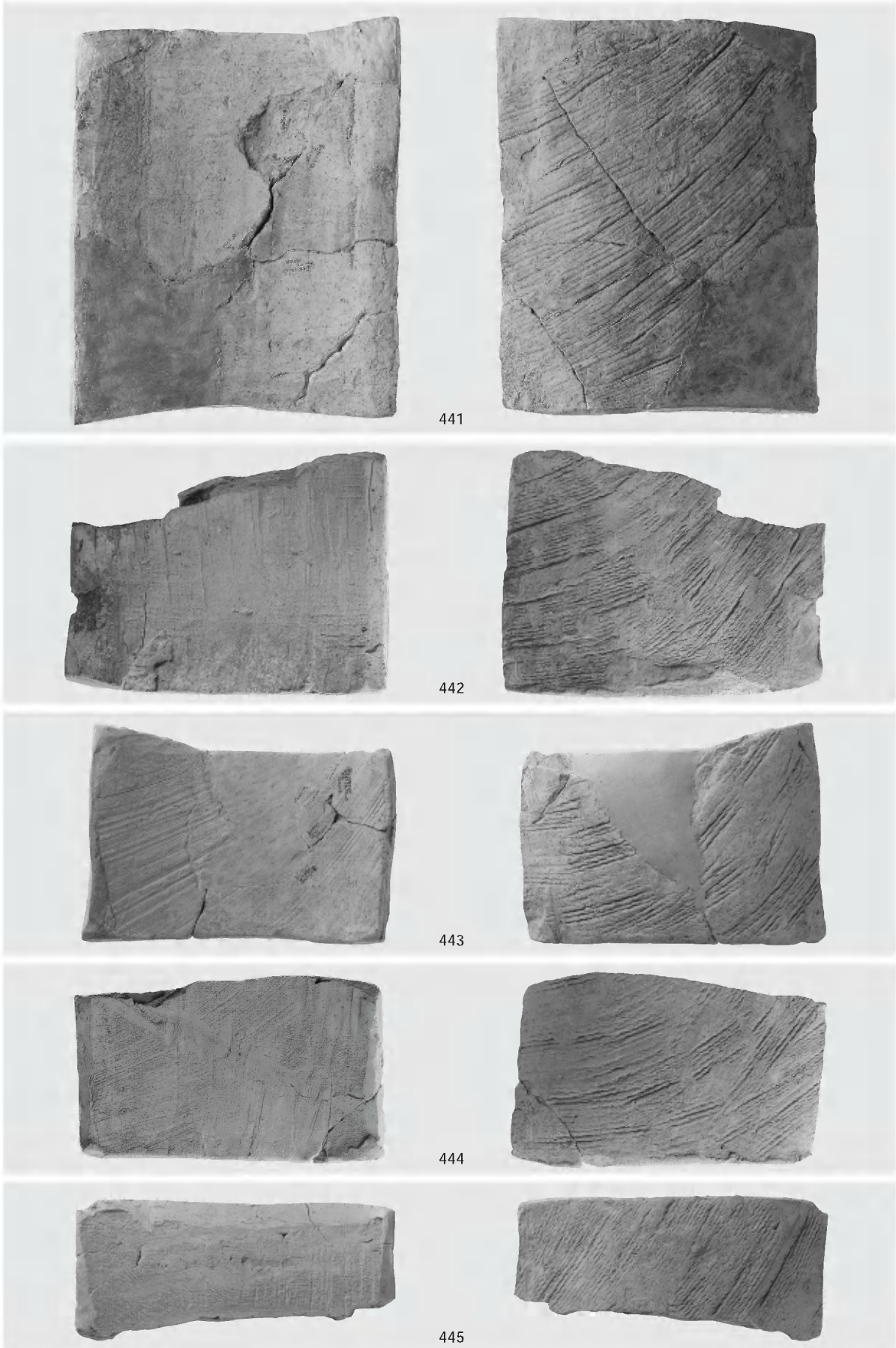


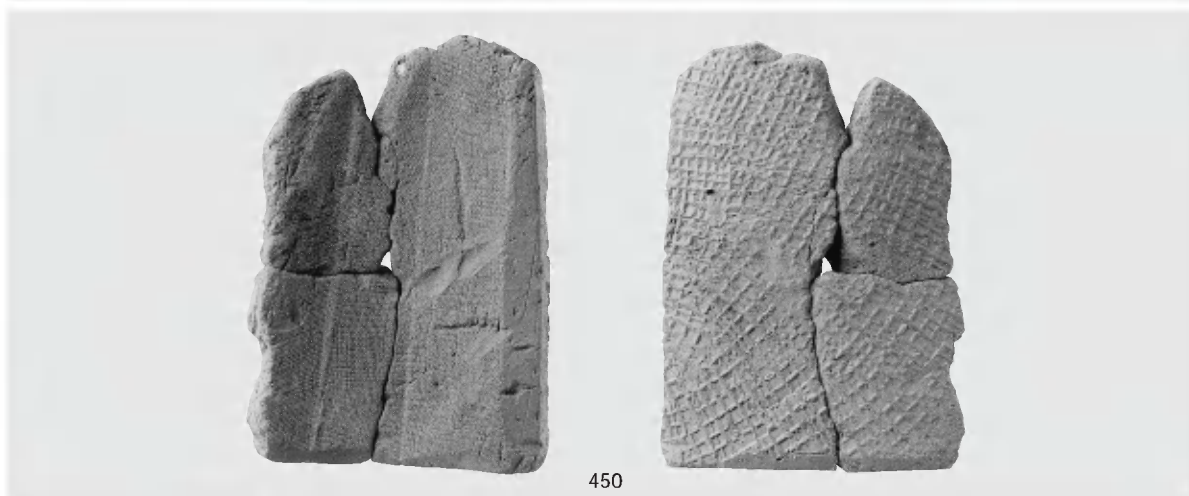
434

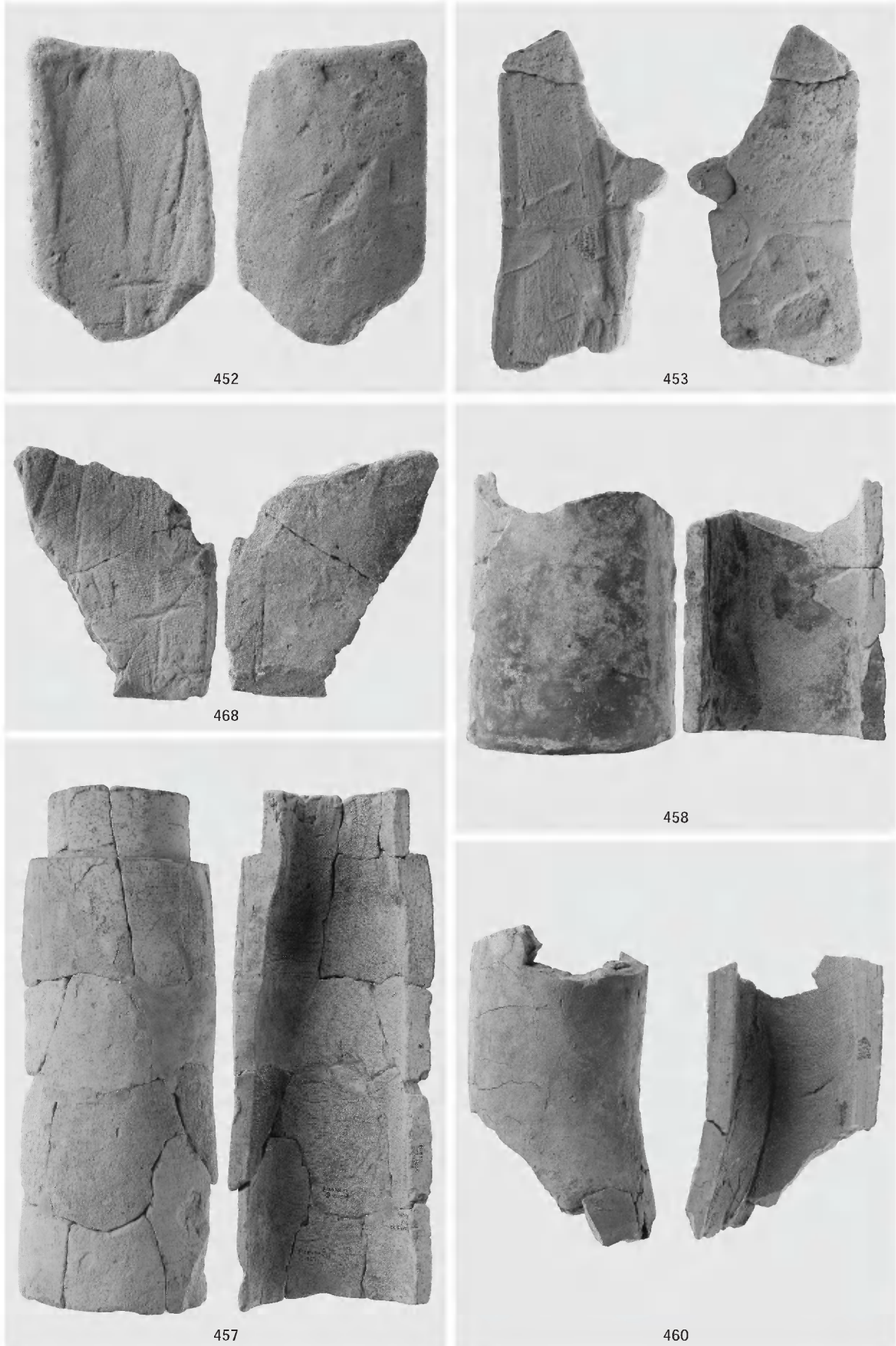


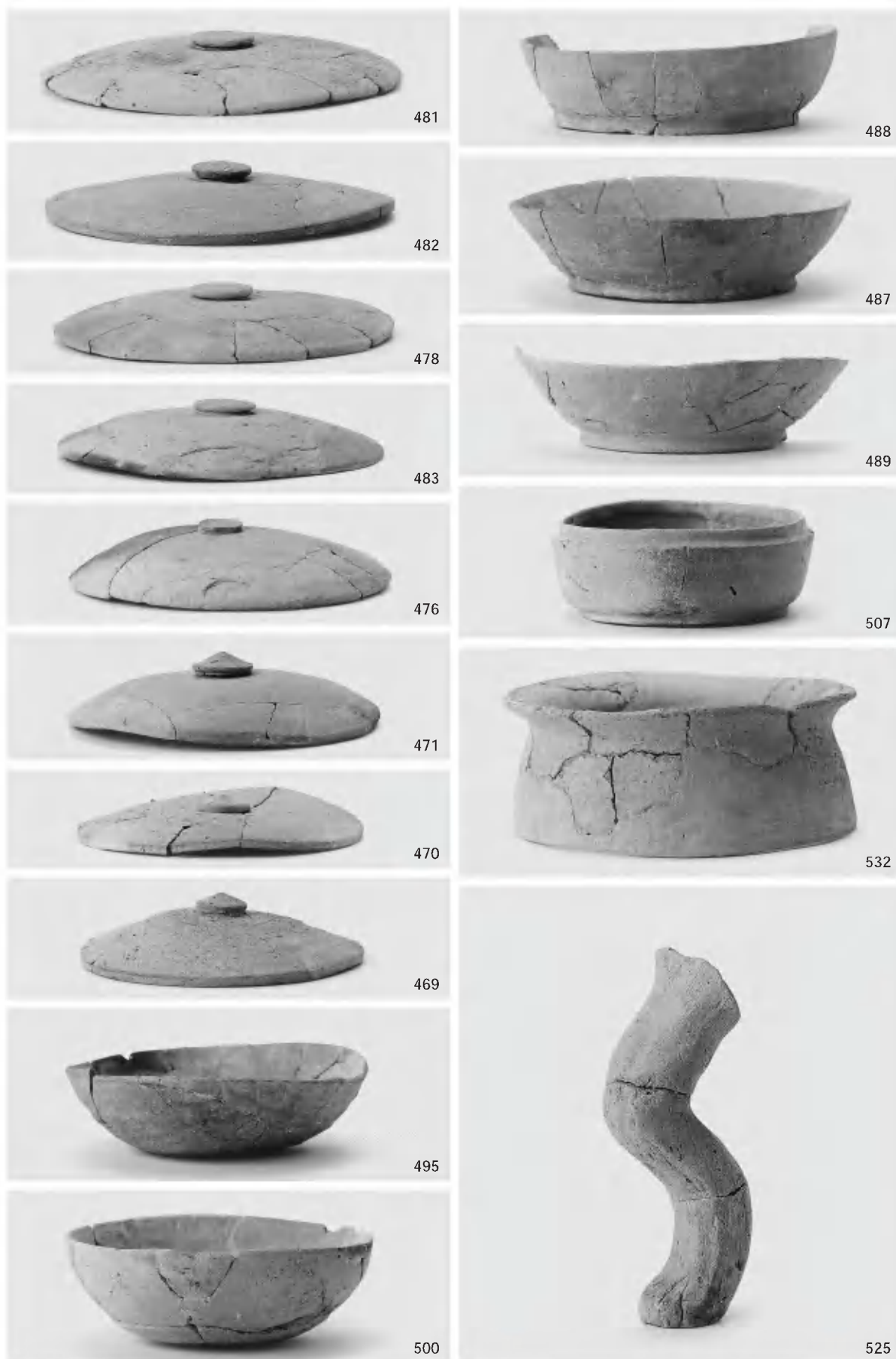
435

瓦③











墓 1



墓 4



墓 2



墓 5



墓 3



墓 7



墓 11



墓6



墓13



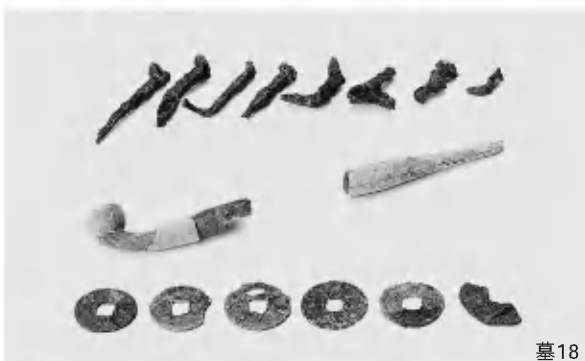
墓8



墓14



墓9



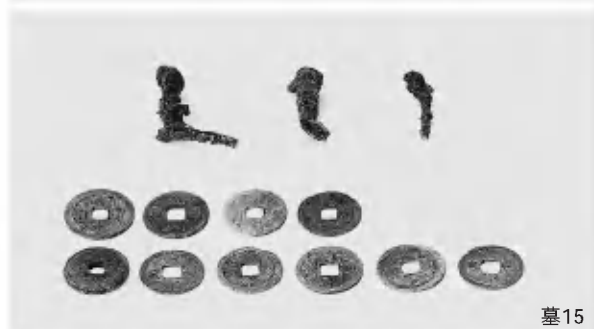
墓18



墓12



墓19



墓15



墓22



墓20



墓16



墓17



墓27



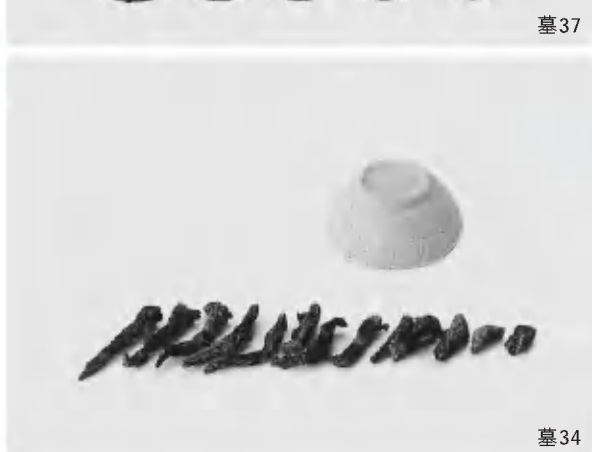
墓30

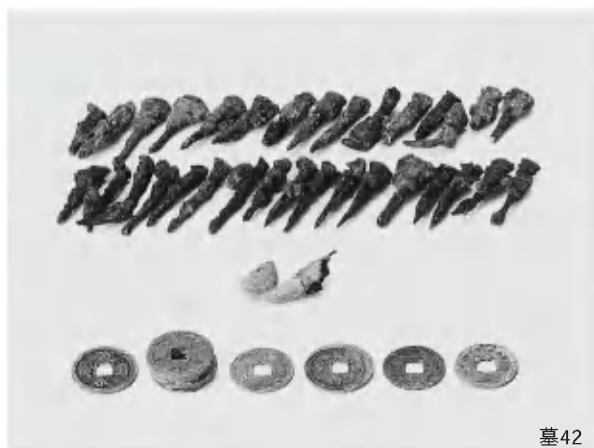


墓31



墓32





墓42



墓43



墓44



墓48



墓47



墓46



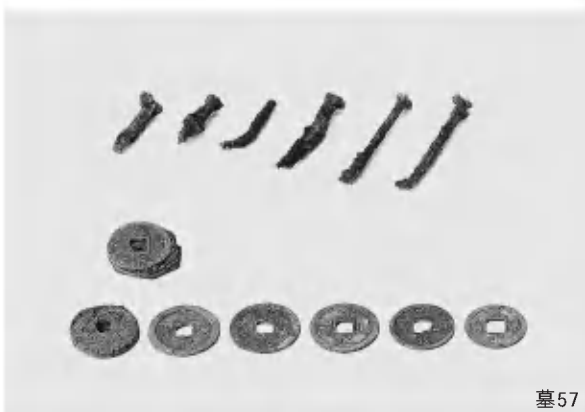
墓49



墓40



墓50



墓57



墓62



墓56



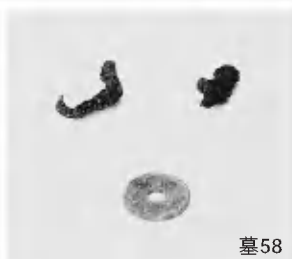
墓61



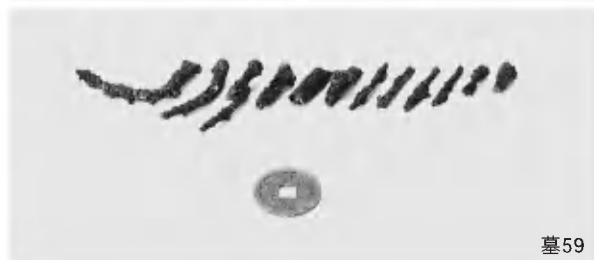
墓55



墓60



墓58



墓59



墓54

1 墳丘墓
(東から)



2 周溝土層断面
(北東から)



3 墳丘墓完掘
(東から)





1 土壇墓 1
(東から)



2 土壇墓 2~5
(東から)



3 土器棺
(北東から)

1 段状遺構1・2
(上が北)



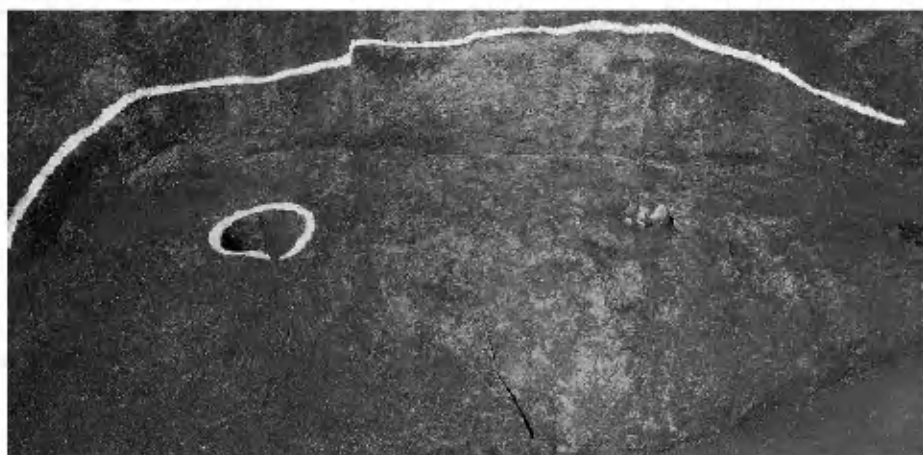
2 同上
(東から)



3 段状遺構8
(西から)



4 段状遺構12
(南から)





1 竖穴住居 2～5
ほか
(北西から)



2 竖穴住居32ほか
(南西から)



3 竖穴住居群
(北から)

1 竪穴住居67
(南から)



2 竪穴住居68ほか
(南東から)



3 竪穴住居82ほか
(東南から)





1 竪穴住居86
(東から)



2 竪穴住居78ほか
(北西から)



3 土器溜まりB
断面(北から)

谷の前遺跡



1 土壙10 土器出土状況（南から）



2 土壙18 土器出土状況（北から）



3 土壙14～16 土器出土状況（南から）



4 土壙24（北から）



28



32



51



61



62



65



73



74



82



91



100



105



121

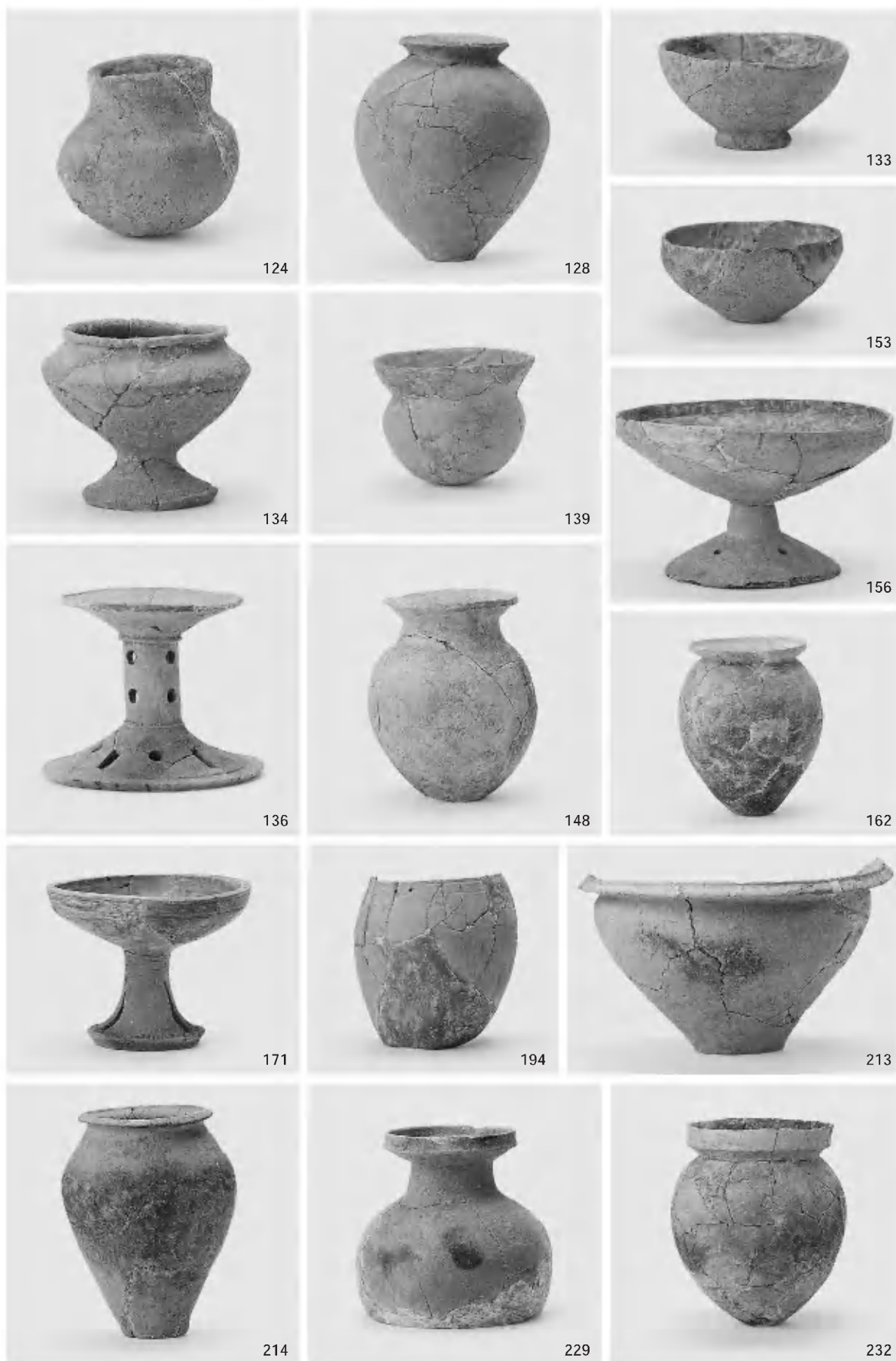


135



112

谷の前遺跡



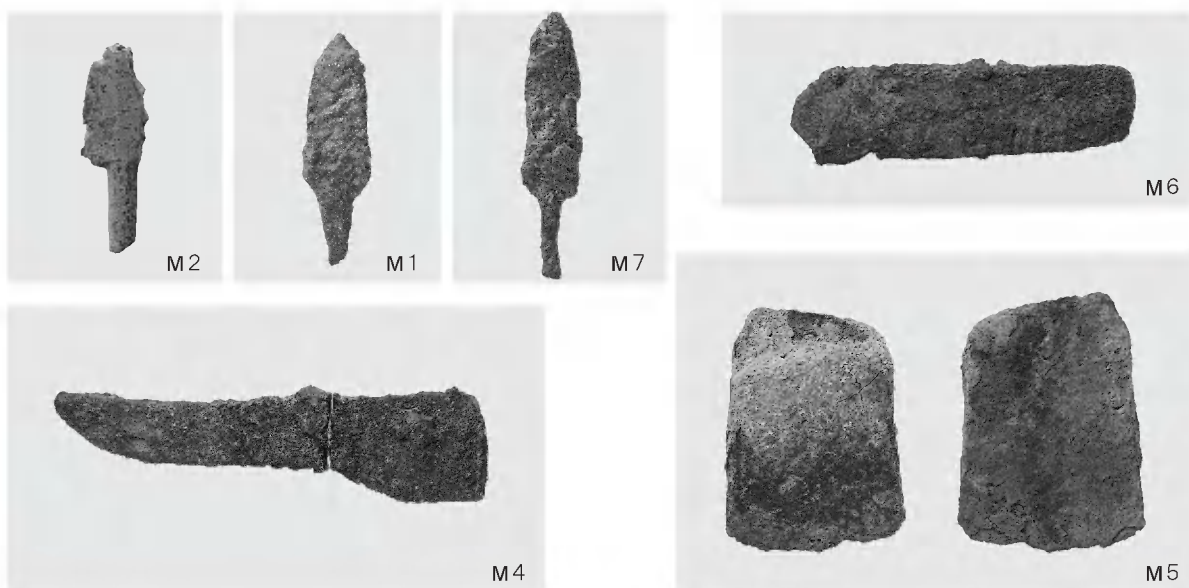
遺構出土弥生土器②



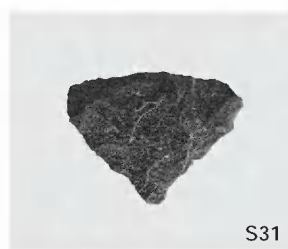
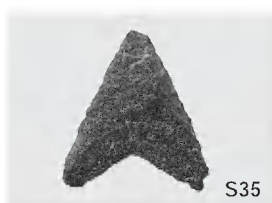
谷の前遺跡



包含層出土弥生土器②



銅鍬・鉄鍬・鉄鎌・鉄斧・板状鉄器



砥石・石斧・石包丁・石鏃・石錐・石匙・叩石



1 中世墓検出状況（西から）



2 中世墓北部検出状況（南から）



3 骨壺埋納状況（南から）



5 備前焼骨壺埋納状況（南から）



4 火葬骨納骨状況（南から）



6 同上配石を取り去った後（東から）

図版 58

慶運寺跡



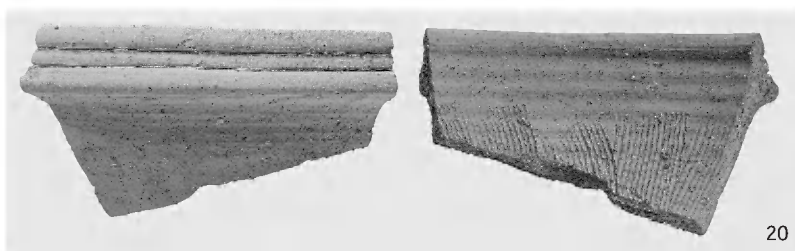
1



3



7



20



22

遺構出土中世土器



23



27



42



52



25



32



44



53



26



40



47



54

中世墓内備前焼骨壺

慶運寺跡



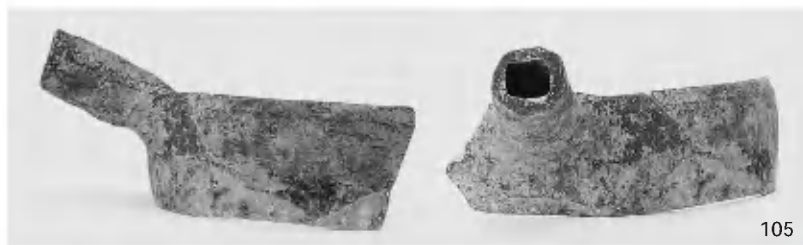
58



59



60



105



94

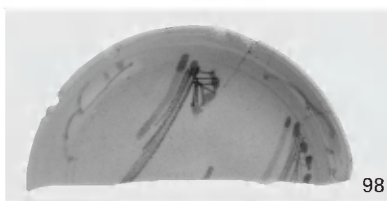
土師質土器・瓦質土器



95



96



98



100

近世陶磁器



R2



R1



R3



R4

瓦（軒丸瓦・軒平瓦・東大寺刻印瓦）



C1



C2

土錘



S2

石鍋



S1

石硯



M1

鉄環



M2

刀子



M12

鉄釘



M17



M44

二又金具



M47

小札



M9

錠前



M50



M51



M52



M53



M54



M55

古銭

報告書抄録

ふりがな	どいいせき・たにのまえいせき・けいうんじあと							
書名	土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡							
副書名	主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査							
巻次	4							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	191							
編著者名	山藤康平・浅倉秀昭・重根弘和・柳瀬昭彦・物部茂樹・下澤公明・光永真一・亀山行雄・澤山孝之・時枝克安・伊達昌洋・大澤正己・白石 純							
編著機関	岡山県古代古備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
どいいせき 土井遺跡	おかやまけんあまのやまぐん 岡山県赤磐郡 くまやまちょうかまかみ 熊山町可真上	324		34° 47' 25"	134° 03' 41"	2000.02.07～ 2003.09.30	6,145	主要地方道佐伯長船線 （美作岡山道路）道路 改築
たにのまえいせき 谷の前遺跡	おかやまけんあまのやまぐん 岡山県赤磐郡 くまやまちょうかまかみ 熊山町可真上	324		34° 46' 58"	134° 03' 37"	2000.03.01～ 2002.05.31	3,520	主要地方道佐伯長船線 （美作岡山道路）道路 改築
けいうんじあと 慶運寺跡	おかやまけんあまのやまぐん 岡山県赤磐郡 くまやまちょうかまかみ 熊山町可真上	324		34° 46' 58"	134° 03' 37"	2000.03.03～ 2001.01.31	1,030	主要地方道佐伯長船線 （美作岡山道路）道路 改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
土井遺跡	窯 集落 墳墓	弥生時代 古墳時代 古代 近世	窯 段状遺構 竪穴住居 土墳墓・箱式石棺		弥生土器 土師器 瓦・須恵器 鉄滓・埴輪・陶棺		埴輪・陶棺焼成窯 瓦陶製業窯	
谷の前遺跡	墳墓 集落	弥生時代	墳丘墓 竪穴住居		弥生土器 鉄斧		土墳墓 銅鐸形土製品	
慶運寺跡	寺跡 墓地	中世～近世	掘立柱建物 中世墓		東大寺瓦 備前焼		硯 五輪塔	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 191

土 井 遺 跡
谷 の 前 遺 跡
慶 運 寺 跡

主要地方道佐伯長船線（美作岡山
道路）道路改築に伴う発掘調査 4

平成17年 3 月18日 印刷

平成17年 3 月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻 1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印 刷 旭総合印刷株式会社
岡山市内山下2-10-3



本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています。